

千葉急行線内埋蔵文化財
発掘調査報告書II

大北遺跡・谷津遺跡
瓜作遺跡・池田古墳群

1986

千葉急行電鉄株式会社
財団 千葉県文化財センター

千葉急行線内埋蔵文化財
発掘調査報告書Ⅱ

大北遺跡・谷津遺跡
瓜作遺跡・池田古墳群

1986

千葉急行電鉄株式会社
財団法人 千葉県文化財センター



上／瓦塔・塔及び金堂(復元) 下／瓦塔基段(完形)



大北遺跡全景（航空写真）

序 文

千葉市南部地区の交通網の核とも言うべき千葉急行線は、その強い公共性から千葉県教育委員会はやむを得ず、計画用地内に所在する埋蔵文化財について記録保存の措置を取ることとし、昭和53年以来、当千葉県文化財センターにおいて、その発掘調査を実施してきました。

昭和58年度末には、その成果の一部を「千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」として取りまとめましたが、引き続き第二冊目として昭和54～56年度に実施いたしました、大北遺跡、谷津遺跡、瓜作遺跡、池田古墳群の4遺跡の発掘調査の成果を取りまとめることができ、ここに刊行するはこびとなりました。

特に大北遺跡は関西系の暗文を有する土器、谷津遺跡からは瓦塔等、関東一円でもその出土例も少なく、また、千葉県の古代史を考える上で極めて貴重な遺物が発見されたことは特筆に値すべきことであると言えます。

本書が学術的な資料としてはもとより、教育資料として、また、文化財保護思想の涵養のためにも広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

最後に、発掘調査開始から今日に至るまで調査に御理解をいただいた日本鉄道建設公団及び、千葉急行電鉄株式会社の御協力と、千葉県教育庁文化課をはじめ関係諸機関の御指導、助言に感謝の意を表するとともに、酷寒、酷暑の中で調査に従事された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和61年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

凡 例

1. 本書は、千葉急行電鉄株式会社による千葉急行線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は、昭和54・56年度に調査された大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群の成果を取りまとめたものである。
3. 発掘調査は、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査・整理作業の詳細については、『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』を参照のこと。
5. 本書の基礎整理作業は、調査部長 鈴木道之助、調査部長補佐 岡川宏道、班長 古内茂の指導のもとに、相京邦彦、高橋博文が実施した。
6. 本書の執筆、編集及び刊行は、調査部長 鈴木道之助、調査部長補佐兼班長 古内茂の助言のもとに、池田大助、小林清隆、麻生正信、萩原恭一、田井知二が分担のうえ実施した。分担及び文責は各文末に記した。また、整理作業に際しては、文化財センター各職員、特に高田博、田形孝一の協力を得た。
なお、一部遺物表現方法に不統一なものがあるが、これは編集者の責に帰すものである。
7. 大北遺跡の掘立柱建物跡土層説明は下記によるものである。

色調	1：褐色土	混入物	a：ローム粒
	2：暗褐色土		b：ローム塊
	3：黒褐色土		c：山砂
	4：黒色土		d：焼土
	5：赤褐色土		e：粘土
			f：炭化物

8. 発掘調査に際しては、千葉県教育庁文化課・千葉市教育委員会・千葉急行電鉄株式会社をはじめ多くの調査補助員、地元の方々の協力を得た。また石田広美、原田亨二、林部均、石戸啓夫の各氏からは各種の御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

本文目次

巻首カラー図版1 大北遺跡航空写真

巻首カラー図版2 谷津遺跡出土瓦塔

序 文

凡 例

I 序 説	1
第1章 調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	3
1 大北遺跡	3
2 谷津遺跡	3
3 瓜作遺跡	7
4 池田古墳群	7
II 大北遺跡の調査	9
第1章 検出された遺構と遺物	11
第1節 竪穴住居跡と遺物	11
第2節 掘立柱建物跡・柵列跡	102
第3節 掘立柱建物跡出土遺物	132
第4節 周溝状遺構・その他の遺構と遺物	134
第5節 遺構外出土遺物	141
第2章 結 語	144
第1節 出土遺物について	144
1 畿内産土師器及び関連する須恵器	144
(1) 畿内産土師器としての同定	144
(2) 畿内産土師器の観察	145
(3) 器種構成の復元	147
(4) 東国における畿内産土師器の分布	150
(5) 共伴する須恵器	153
2 特殊な金属器	154
(1) 毛彫り馬具	154
3 墨書・朱書・刻書土器	154
第2節 遺構について—その展開—	156
(1) 掘立柱建物出現以前	156

(2) 掘立柱建物Ⅰ期	157
(3) 掘立柱建物Ⅱ期	157
(4) 掘立柱建物Ⅲ期	157
(5) 掘立柱建物Ⅳ期	157
(6) 掘立柱建物Ⅴ期	158
(7) 掘立柱建物消滅以降	158
第3節 大北遺跡の性格について	162
III 谷津遺跡の調査	165
第1章 検出された遺構と遺物	167
第1節 竪穴住居跡と遺物	167
第2節 掘立柱建物跡と遺物	200
第3節 その他の遺構と遺物	203
第4節 先土器時代の遺物	205
第2章 小 結	211
第1節 瓦塔	211
第2節 集落の展開	217
IV 池田古墳群の調査	219
第1章 検出された遺構と遺物	221
第1節 池田古墳第1号墳	221
第2節 竪穴住居跡と遺物	226
第3節 その他の遺構と遺物	248
第4節 小 結	251
V 瓜作遺跡の調査	253
第1章 検出された遺構と遺物	255
第1節 竪穴住居跡と遺物	255
第2節 掘立柱建物・その他の遺構と遺物	303
第3節 小 結	306
VI 結 語	313
卷末折込 大北遺跡及び周辺地形図	
付 図 谷津・池田古墳群・瓜作遺跡地形図	

挿 図 目 次

第1図	調査工程図	4
第2図	千葉急行線関係遺跡及び周辺遺跡	6
——大北遺跡——		
第3図	大北遺跡遺構配置図	10
第4図	001号住居跡実測図	12
第5図	001号住居跡カマド実測図	12
第6図	001号住居跡出土遺物実測図	13
第7図	002号住居跡実測図	14
第8図	002号住居跡カマド実測図	14
第9図	002号住居跡遺物出土状況図	15
第10図	002号住居跡出土遺物実測図 (1)	16
第11図	002号住居跡出土遺物実測図 (2)	17
第12図	003号住居跡実測図	18
第13図	003号住居跡カマド実測図	18
第14図	003号住居跡出土遺物実測図	19
第15図	004号住居跡実測図	20
第16図	004号住居跡カマド実測図	21
第17図	004号住居跡出土遺物実測図	22
第18図	005号住居跡実測図	23
第19図	005号住居跡出土遺物実測図	24
第20図	006号住居跡実測図	26
第21図	006号住居跡カマド実測図	26
第22図	006号住居跡出土遺物実測図	27
第23図	007号住居跡実測図	28
第24図	007号住居跡カマド実測図	28
第25図	007号住居跡出土遺物実測図	28
第26図	008号住居跡実測図	30
第27図	008号住居跡カマド実測図	30
第28図	008号住居跡出土遺物実測図	31
第29図	009号住居跡実測図・出土遺物実測図	32
第30図	009号住居跡カマド実測図	33

第31図	010号住居跡実測図	34
第32図	010号住居跡遺物出土状況図	35
第33図	010号住居跡出土遺物実測図 (1)	35
第34図	010号住居跡出土遺物実測図 (2)	36
第35図	011号住居跡実測図	37
第36図	011号住居跡カマド実測図	37
第37図	011号住居跡出土遺物実測図	38
第38図	012号住居跡実測図	40
第39図	012号住居跡カマド実測図	40
第40図	012号住居跡出土遺物実測図 (1)	41
第41図	012号住居跡出土遺物実測図 (2)	42
第42図	013号住居跡実測図・出土遺物実測図	43
第43図	014号住居跡実測図・出土遺物実測図	44
第44図	015号住居跡実測図	45
第45図	015号住居跡カマド実測図	46
第46図	015号住居跡遺物出土状況図	47
第47図	015号住居跡出土遺物実測図 (1)	48
第48図	015号住居跡出土遺物実測図 (2)	49
第49図	016号住居跡実測図	50
第50図	016号住居跡カマド実測図	51
第51図	016号住居跡出土遺物実測図	51
第52図	017号住居跡実測図	52
第53図	017号住居跡カマド実測図	52
第54図	018号住居跡実測図	53
第55図	018号住居跡遺物出土状況図	54
第56図	018号住居跡カマド実測図	54
第57図	018号住居跡出土遺物実測図 (1)	55
第58図	018号住居跡出土遺物実測図 (2)	56
第59図	018号住居跡出土遺物実測図 (3)	57
第60図	018号住居跡出土遺物実測図 (4)	58
第61図	020号住居跡実測図	60
第62図	020号住居跡カマド実測図	60
第63図	020号住居跡出土遺物実測図	61

第64図	021号住居跡実測図	62
第65図	021号住居跡出土遺物実測図	63
第66図	022号住居跡実測図	64
第67図	022号住居跡カマド実測図	64
第68図	022号住居跡出土遺物実測図	65
第69図	023号住居跡実測図	66
第70図	023号住居跡出土遺物実測図	66
第71図	024号住居跡実測図	67
第72図	024号住居跡カマド実測図	67
第73図	024号住居跡出土遺物実測図 (1)	68
第74図	024号住居跡出土遺物実測図 (2)	69
第75図	025号住居跡実測図・カマド実測図	70
第76図	025号住居跡遺物出土状況図	71
第77図	025号住居跡出土遺物実測図	71
第78図	026号住居跡実測図	72
図79図	026号住居跡カマド実測図	73
第80図	026号住居跡遺物出土状況図	74
第81図	026号住居跡出土遺物実測図 (1)	75
第82図	026号住居跡出土遺物実測図 (2)	76
第83図	027号住居跡実測図	77
第84図	027号住居跡カマド実測図	78
第85図	027号住居跡出土遺物実測図	79
第86図	028号住居跡実測図	80
第87図	028号住居跡カマド実測図	80
第88図	028号住居跡出土遺物実測図	81
第89図	029号住居跡実測図・出土遺物実測図	81
第90図	030号住居跡実測図	82
第91図	030号住居跡掘り方実測図	83
第92図	030号住居跡カマド実測図	83
第93図	030号住居跡遺物出土状況図	84
第94図	030号住居跡出土遺物実測図 (1)	85
第95図	030号住居跡出土遺物実測図 (2)	86
第96図	031号住居跡実測図・出土遺物実測図	87

第97図	032号住居跡実測図・遺物出土状況図	89
第98図	032号住居跡カマド実測図	90
第99図	032号住居跡出土遺物実測図	91
第100図	033号住居跡実測図	92
第101図	033号住居跡カマド実測図	92
第102図	033号住居跡出土遺物実測図	93
第103図	034号住居跡実測図	94
第104図	034号住居跡出土遺物実測図	95
第105図	035号住居跡実測図・出土遺物実測図	97
第106図	036号住居跡実測図	98
第107図	037号住居跡実測図	98
第108図	037号住居跡カマド実測図	99
第109図	037号住居跡出土遺物実測図	99
第110図	038号住居跡実測図	100
第111図	038号住居跡カマド実測図	101
第112図	038号住居跡出土遺物実測図	101
第113図	001号掘立柱建物跡実測図	103
第114図	002号掘立柱建物跡実測図	104
第115図	003号掘立柱建物跡実測図	105
第116図	004号掘立柱建物跡実測図	106
第117図	005号掘立柱建物跡実測図	107
第118図	007号掘立柱建物跡実測図 (1)	109
第119図	007号掘立柱建物跡実測図 (2)	110
第120図	柵列C・008号掘立柱建物跡実測図 (1)	111
第121図	柵列C・008号掘立柱建物跡実測図 (2)	112
第122図	009号掘立柱建物跡実測図	112
第123図	010号掘立柱建物跡実測図	113
第124図	011号掘立柱建物跡実測図	114
第125図	012号掘立柱建物跡実測図	115
第126図	013号掘立柱建物跡実測図	116
第127図	014号掘立柱建物跡実測図	116
第128図	015号掘立柱建物跡実測図 (1)	117
第129図	015号掘立柱建物跡実測図 (2)	118

第130図	016号掘立柱建物跡実測図	119
第131図	017号掘立柱建物跡実測図	120
第132図	018号掘立柱建物跡実測図	120
第133図	019号掘立柱建物跡実測図 (1)	121
第134図	019号掘立柱建物跡実測図 (2)	122
第135図	020号掘立柱建物跡実測図	124
第136図	021号掘立柱建物跡実測図	125
第137図	022号掘立柱建物跡実測図	126
第138図	023号掘立柱建物跡実測図	126
第139図	024号掘立柱建物跡実測図	126
第140図	025号掘立柱建物跡実測図	128
第141図	027号掘立柱建物跡実測図	128
第142図	028号掘立柱建物跡実測図	129
第143図	026・029・030号掘立柱建物跡実測図	130
第144図	柵列A・B 実測図	131
第145図	掘立柱建物跡出土遺物実測図	133
第146図	周溝状遺構実測図	135
第147図	大溝実測図	137
第148図	土壌実測図	139
第149図	大溝・土壌及び遺構外出土遺物実測図 (1)	142
第150図	遺構外出土遺物実測図(2)	143
第151図	大北遺跡他出土遺物の蛍光X線分析	145
第152図	大北遺跡出土畿内産土師器実測図 (1)	146
第153図	大北遺跡出土畿内産土師器実測図 (2)	147
第154図	大北遺跡出土墨書・朱書・刻書土器実測図	155
第155図	大北遺跡主要遺構変遷図 (S:1/1200)	159
——谷津遺跡——		
第156図	谷津遺跡遺構配置図 (1/1000)	166
第157図	001号住居跡実測図	168
第158図	001号住居跡カマド実測図	168
第159図	001号住居跡出土遺物実測図	169
第160図	002号住居跡実測図	170
第161図	002号住居跡カマド実測図	170

第162図	002号住居跡出土遺物実測図	171
第163図	003号住居跡実測図	172
第164図	003号住居跡カマド実測図	172
第165図	003号住居跡出土遺物実測図	173
第166図	004号住居跡実測図	174
第167図	004号住居跡カマド実測図	175
第168図	004号住居跡遺物実測図	175
第169図	005A・B号住居跡実測図	177
第170図	005B号住居跡カマド実測図	177
第171図	005号住居跡出土遺物実測図	178
第172図	006号住居跡実測図	178
第173図	006号住居跡カマド実測図	179
第174図	006号住居跡出土遺物実測図 (1)	180
第175図	006号住居跡出土遺物実測図 (2)	181
第176図	007号住居跡実測図	182
第177図	007号住居跡カマド実測図	182
第178図	007号住居跡出土遺物実測図	183
第179図	008号住居跡実測図	184
第180図	008号住居跡床面再精査時検出遺構実測図	185
第181図	008号住居跡カマド実測図	185
第182図	008号住居跡出土遺物実測図 (1)	186
第183図	008号住居跡出土遺物実測図 (2)	187
第184図	009号住居跡実測図	188
第185図	009号住居跡カマド実測図	188
第186図	009号住居跡出土遺物実測図	188
第187図	010号住居跡実測図	190
第188図	010号住居跡カマド実測図	191
第189図	010号住居跡出土遺物実測図 (1)	192
第190図	010号住居跡出土遺物実測図 (2)	193
第191図	011号住居跡実測図 炭化材出土状況	195
第192図	011号住居跡内貯蔵穴断面実測図	195
第193図	011号住居跡カマド実測図	196
第194図	011号住居跡出土遺物実測図	197

第195図	012号住居跡実測図	198
第196図	012号住居跡出土遺物実測図	199
第197図	001号掘立柱建物跡実測図	201
第198図	001号掘立柱建物跡柱穴土層断面図	202
第199図	002号掘立柱建物跡実測図	203
第200図	001・002・003号土壌実測図	204
第201図	5 B・7 Bその他のグリッド出土石器実測図	206
第202図	9 Bグリッド出土石器実測図	207
第203図	表採出土遺物実測図	210
第204図	瓦塔・金堂実測図	212
第205図	出土瓦塔片屋根部分実測図	214
第206図	瓦塔出土状況図 (1/150)	215
——池田古墳群——		
第207図	池田古墳群遺構配置図 (1/1000)	220
第208図	周溝内出土遺物実測図	222
第209図	001号002号貝層範囲実測図 土層断面図	222
第210図	池田古墳群第1号墳実測図及び土層断面	223
第211図	001号002号貝層中出土遺物実測図	225
第212図	001号住居跡実測図	227
第213図	001号住居跡カマド実測図	228
第214図	001号住居跡出土遺物実測図	228
第215図	002号住居跡実測図	229
第216図	002号住居跡カマド実測図	230
第217図	002号住居跡出土遺物実測図	230
第218図	003号住居跡実測図	231
第219図	003号住居跡出土遺物実測図	231
第220図	003号住居跡カマド実測図	232
第221図	004号住居跡実測図	233
第222図	004号住居跡カマド実測図	233
第223図	004号住居跡出土遺物実測図	233
第224図	005号住居跡実測図	234
第225図	005号住居跡カマド実測図	234
第226図	005号住居跡出土遺物実測図	235

第227図	006号住居跡実測図	236
第228図	006号住居跡カマド実測図	237
第229図	006号住居跡出土遺物実測図	237
第230図	007号住居跡実測図	238
第231図	007号住居跡カマド実測図	239
第232図	007号住居跡出土遺物実測図	239
第233図	008号住居跡実測図	240
第234図	008号住居跡カマド実測図	241
第235図	008号住居跡遺物出土状況図	241
第236図	008号住居跡出土遺物実測図 (1)	243
第237図	008号住居跡出土遺物実測図 (2)	244
第238図	009号住居跡実測図	246
第239図	009号住居跡カマド実測図	246
第240図	009号住居跡出土遺物実測図	246
第241図	010号住居跡実測図	247
第242図	010号住居跡出土遺物実測図	247
第243図	焼土跡実測図	249
第244図	土壌実測図	249
第245図	土壌出土遺物実測図	249
第246図	土器集中出土地点出土遺物実測図	250
第247図	表採出土遺物実測図	251
——瓜作遺跡——		
第248図	瓜作遺跡遺構配置図 (1/1000)	254
第249図	001号住居跡実測図	256
第250図	001号住居跡カマド実測図	256
第251図	001号住居跡出土遺物実測図	257
第252図	002号住居跡実測図	257
第253図	002号住居跡カマド実測図	258
第254図	002号住居跡出土遺物実測図 (1)	259
第255図	002号住居跡出土遺物実測図 (2)	260
第256図	002号住居跡貯蔵穴実測図及び出土状況図	260
第257図	003号A・B住居跡実測図	261
第258図	003号(A)住居跡炭化材出土状況図	261

第259図	003号（A）住居跡カマド実測図	262
第260図	003号（B）住居跡実測図	262
第261図	003号（B）住居跡カマド実測図	262
第262図	003号A・B住居跡出土遺物実測図	263
第263図	004号住居跡実測図	265
第264図	004号住居跡カマド実測図	265
第265図	004号住居跡出土遺物実測図	265
第266図	005号住居跡実測図	266
第267図	005号住居跡カマド実測図	266
第268図	005号住居跡出土遺物実測図	267
第269図	006・007・008号住居跡実測図	268
第270図	006・007・008号住居跡出土遺物実測図	269
第271図	009号住居跡実測図	270
第272図	009号住居跡カマド実測図	270
第273図	009号住居跡出土遺物実測図	270
第274図	010号住居跡実測図	271
第275図	010号住居跡カマド実測図	272
第276図	010号住居跡出土遺物実測図	272
第277図	011号住居跡実測図	273
第278図	012号住居跡実測図	274
第279図	012号住居跡カマド実測図	274
第280図	012号住居跡遺物実測図	275
第281図	013号住居跡実測図	277
第282図	014号住居跡実測図	278
第283図	014号住居跡カマド実測図	278
第284図	014号住居跡出土遺物実測図	279
第285図	015号住居跡実測図	280
第286図	015号住居跡カマド実測図	280
第287図	015号住居跡出土遺物実測図	280
第288図	016号住居跡実測図	281
第289図	016号住居跡カマド実測図	282
第290図	016号住居跡出土遺物実測図	282
第291図	017号住居跡実測図	283

第292図	017号住居跡カマド実測図	284
第293図	017号住居跡出土遺物実測図 (1)	284
第294図	017号住居跡出土遺物実測図 (2)	285
第295図	018号住居跡実測図	286
第296図	018号住居跡カマド実測図	287
第297図	018号住居跡出土遺物実測図	287
第298図	019号住居跡実測図	289
第299図	019号住居跡カマド実測図	289
第300図	019号住居跡出土遺物実測図	290
第301図	020号住居跡実測図	291
第302図	020号住居跡カマド実測図	291
第303図	020号住居跡出土遺物実測図	292
第304図	021号住居跡実測図	294
第305図	021号住居跡カマド実測図	294
第306図	021号住居跡出土遺物実測図	295
第307図	022号住居跡実測図	295
第308図	022号住居跡カマド実測図	296
第309図	022号住居跡出土遺物実測図	296
第310図	023号住居跡実測図	297
第311図	023号住居跡カマド実測図	298
第312図	023号住居跡出土遺物実測図	298
第313図	024号住居跡実測図	299
第314図	024号住居跡カマド実測図	300
第315図	024号住居跡出土遺物実測図	301
第316図	025号住居跡実測図	302
第317図	001号土壌実測図・出土遺物実測図	303
第318図	101・102号掘立柱建物跡実測図	304
第319図	表採遺物実測図	305
第320図	谷津遺跡群集落の展開 (1)－7世紀ごろ	307
第321図	谷津遺跡群集落の展開 (2)－8世紀前半ごろ	308
第322図	谷津遺跡群集落の展開 (3)－8世紀後半ごろ	309
第323図	谷津遺跡群集落の展開 (4)－9世紀前半ごろ	310
第324図	谷津遺跡群集落の展開 (5)－9世紀後半ごろ	311

表 目 次

第1表	千葉急行線内遺跡調査概要	5
第2表	大北遺跡出土畿内産土師器一覧表	148
第3表	大北遺跡出土畿内産土師器集計表	149
第4表	東国における畿内産土師器出土遺跡一覧表	151
第5表	大北遺跡掘立柱建物跡一覧表	160
第6表	大北遺跡竪穴住居跡一覧表	161

図版目次

——大北遺跡——

- | | | | |
|------|-----------------------|------|-----------------------|
| 図版 1 | 大北遺跡周辺航空写真 | 図版12 | 1. 021号住居跡 |
| 図版 2 | 谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群周辺航空写真 | | 2. 022号住居跡 |
| 図版 3 | 1. 遺構検出状況 | | 3. 023号住居跡 |
| | 2. 遺構検出状況 | 図版13 | 1. 024号住居跡 |
| | 3. 001号住居跡 | | 2. 024号住居跡遺物出土状況 |
| 図版 4 | 1. 002号住居跡 | | 3. 025号住居跡 |
| | 2. 002号住居跡遺物出土状況 | 図版14 | 1. 026号住居跡 |
| | 3. 003号住居跡 | | 2. 026号柱穴土層断面 |
| 図版 5 | 1. 004号住居跡 | | 3. 027号住居跡 |
| | 2. 004号住居跡遺物出土状況 | 図版15 | 1. 028号住居跡 |
| | 3. 005号住居跡 | | 2. 029号住居跡 |
| 図版 6 | 1. 005号住居跡 | | 3. 030号住居跡 |
| | 2. 006号住居跡 | 図版16 | 1. 031号住居跡 |
| | 3. 007号住居跡 | | 2. 032号住居跡 |
| 図版 7 | 1. 008号住居跡 | | 3. 032号住居跡壁柱穴 |
| | 2. 009号住居跡 | 図版17 | 1. 033号住居跡 |
| | 3. 010号住居跡 | | 2. 034号住居跡 |
| 図版 8 | 1. 011号住居跡 | | 3. 035住居跡 |
| | 2. 012・013号住居跡 | 図版18 | 1. 036号住居跡 |
| | 3. 012号住居跡遺物出土状況 | | 2. 037号住居跡 |
| 図版 9 | 1. 012・013号住居跡 | | 3. 038号住居跡 |
| | 2. 014号住居跡 | 図版19 | 1. 001号掘立柱建物跡 |
| | 3. 015号住居跡 | | 2. 002号掘立柱建物跡 |
| 図版10 | 1. 016号住居跡 | | 3. 003号掘立柱建物跡 |
| | 2. 017号住居跡 | 図版20 | 1. 003号掘立柱建物跡 |
| | 3. 017号貝層検出状況 | | 2. 004号掘立柱建物跡 |
| 図版11 | 1. 018号住居跡 | | 3. 005号掘立柱建物跡 |
| | 2. 018号住居跡遺物出土状況 | 図版21 | 1. 006・007・008号掘立柱建物跡 |
| | 3. 020号住居跡 | | 2. 007号掘立柱建物跡遺物出土状況 |
| | | | 3. 009号掘立柱建物跡 |
| | | 図版22 | 1. 010・011号掘立柱建物跡 |
| | | | 2. 012号掘立柱建物跡 |

- | | | | |
|------|-------------------------|----------|---|
| | 3. 016号掘立柱建物跡 | 図版39 | 022・023・024号住居跡出土遺物 |
| 図版23 | 1. 016号掘立柱建物跡遺物出土状況 | 図版40 | 024・025・026号住居跡出土遺物 |
| | 2. 017号掘立柱建物跡柱穴土層断面 | 図版41 | 026号住居跡出土遺物 |
| | 3. 018号掘立柱建物跡 | 図版42 | 027・028・029・030号住居跡出土遺物 |
| 図版24 | 1. 019号掘立柱建物跡 | 図版43 | 030・031号住居跡出土遺物 |
| | 2. 019号跡柱穴断面 | 図版44 | 032・033・034号住居跡出土遺物 |
| | 3. 020号掘立柱建物跡 | 図版45 | 034・035・037・038号住居跡出土遺物 |
| 図版25 | 1. 021号掘立柱建物跡 | 図版46 | 038号住居跡, 土壌及び遺構外出土遺物 |
| | 2. 021号跡柱穴断面 | 図版47 | 大北遺跡出土金属製品 (1) |
| | 3. 022・023号掘立柱建物跡 | 図版48 | 大北遺跡出土金属製品 (2) |
| 図版26 | 1. 024・025号掘立柱建物跡 | 図版49 | 大北遺跡出土金属製品 (3) |
| | 2. 027号掘立柱建物跡 | 図版50 | 大北遺跡出土金属製品 (4) |
| | 3. 028号掘立柱建物跡 | | |
| 図版27 | 1. 大溝遺構 | | |
| | 2. 大溝土層断面C-C' | | |
| | 3. 大溝土層断面E-E' | | |
| 図版28 | 1. 周溝状遺構 | ——谷津遺跡—— | |
| | 2. 周溝土層断面B-B' | 図版51 | 航空写真 |
| | 3. 周溝土層断面C-C' | 図版52 | 1. 遺跡遠景
2. 遺跡近景
3. 遺構検出状況 |
| 図版29 | 1. 5・6号土壌, 7号土壌 | 図版53 | 1. 001号掘立柱建物跡
2. 002号掘立柱建物跡
3. 瓦塔出土状況 |
| | 2. 8号土壌, 9号土壌 | | |
| | 3. 10号土壌, 11号土壌 | 図版54 | 1. 001号住居跡
2. 002号住居跡
3. 003号住居跡 |
| | 4. 先土器時代試掘のグリット | | |
| 図版30 | 001・002号住居跡出土遺物 | 図版55 | 1. 004号住居跡
2. 005号住居跡
3. 006号住居跡 |
| 図版31 | 003・004・005号住居跡出土遺物 | 図版56 | 1. 007号住居跡
2. 008号住居跡
3. 009号住居跡 |
| 図版32 | 005・006・007・008号住居跡出土遺物 | | |
| 図版33 | 008・009・010号住居跡出土遺物 | | |
| 図版34 | 011・012号住居跡出土遺物 | | |
| 図版35 | 012・014・015号住居跡出土遺物 | | |
| 図版36 | 015・016・018号住居跡出土遺物 | | |
| 図版37 | 018号住居跡出土遺物 | | |
| 図版38 | 020・021号住居跡出土遺物 | | |

- 図版57 1. 010号住居跡
2. 011号住居跡
3. 012号住居跡

- 図版58 1. 001号土壌
2. 002号土壌
3. 003号土壌

図版59 001号・002号住居跡出土遺物

図版60 003号・004号住居跡出土遺物

図版61 005号・006号住居跡出土遺物

図版62 006号・007号住居跡出土遺物

図版63 007号・008号・009号住居跡出土遺物

図版64 010号住居跡出土遺物 (1)

図版65 010号住居跡出土遺物 (2)

図版66 011号住居跡出土遺物

図版67 011号・012号住居跡出土遺物

図版68 012号住居跡・グリッド出土遺物

——池田古墳群——

図版69 遺跡遠景, 遺跡近景, 古墳全景

図版70 貝層断面 (001号), 001号 (住居跡) 全景, 003号 (住居跡) 全景

図版71 004号 (住居跡) 全景, 005号 (住居跡) 全景, 007号 (住居跡) 全景

図版72 008号 (住居跡) 全景, 009号 (住居跡)・010号 (住居跡) 手前全景, 遺物

図版73 001号・003号・007号・008号住居跡出土遺物

図版74 008号・010号住居跡, 土壌出土遺物

——瓜作遺跡——

図版75 001号住居跡全景, 002号住居跡全景, 左002号貯蔵穴検出状況, 右002号貯蔵穴遺物出土状況

図版76 003A号住居跡全景, 003A号住居跡炭化材検出状況, 004号住居跡全景

図版77 005号住居跡全景, 006号~008号住居跡全景, 009・010号住居跡全景

図版78 012号住居跡全景, 013号住居跡全景, 014号住居跡全景

図版79 015号住居跡全景, 016号住居跡全景, 017号住居跡全景

図版80 018号住居跡全景, 019号住居跡全景, 020号住居跡全景

図版81 021号住居跡全景, 022号住居跡全景, 023号住居跡全景

図版82 024号住居跡全景, 掘立柱(001)全景, 調査区全景

図版83 001号, 003B号, 004号, 005号, 009号住居跡出土遺物

図版84 012号, 014号, 015号住居跡出土遺物, 作業風景

図版85 017号, 019号住居跡出土遺物

図版86 020号住居跡出土遺物

図版87 020号, 021号, 022号, 023号住居跡出土遺物

図版88 024号住居跡・グリッド・土壌出土遺物・遺物出土状況

I 序

説

第1章 調査の経過

千葉急行線の発掘調査に至る経過及び、昭和53年から昭和58年までの事業内容については、「千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」（1983）に詳しいため、そちらを参照されたい。

今回、本書において報告する4遺跡は、昭和54年度事業のうち大北遺跡・谷津遺跡、昭和56年度事業のうち池田古墳群・瓜作遺跡の調査成果をとりまとめたものである。発掘調査は下記の日程で実施された。

大北遺跡 昭和54年5月1日～同年10月31日 調査対象面積 7000㎡。

谷津遺跡 昭和54年8月1日～昭和55年2月29日 調査対象面積 5000㎡。

池田古墳群 昭和56年4月1日～同年8月5日 調査対象面積 2150㎡。

瓜作遺跡 昭和56年8月1日～同年10月21日 調査対象面積 3250㎡

各遺跡とも発掘調査終了後、基礎整理作業を実施し、昭和58・59年度に改めて整理作業に入り、昭和60年度に編集、刊行を行った。

本年度(昭和60年度)は本書の編集、刊行の他、千葉市赤井町に所在する榎作遺跡の発掘調査及び草刈貝塚(昭和57年度)・種ヶ谷津遺跡(昭和54・56年度調査)の整理作業を実施している。

(第1図・第1表参照)

(池田)

第2章 遺跡の位置と環境

1 大北遺跡

本遺跡は、千葉市宮崎町711を代表所在地籍とする。下総台地が東京湾に接する地域は、樹支状に小支谷が入りこんでおり、複雑な開析地形を呈している。特に都川、村田川とその支流によって形成されている複雑な小支谷をもつ本地域は、遺跡が集中している。先土器時代より現在まで、狩猟、生産の場として、長い間我々祖先の生活を支えてきた。

大北遺跡は、東京湾に直接開口する千葉寺谷と宮崎谷に挟まれた大きな舌状台地の基部に位置する。周辺の遺跡としては、南西に隣接して、オクマンノ貝塚、宮崎谷をはさんで、南東の対岸に大森第1遺跡が所在する。大北遺跡の一部は、すでに京葉道路建設に伴い、発掘調査が行われており、住居跡48軒が検出されている。古墳時代五領期により、平安時代国分期まで、大集落が営まれていたことが推定されている。複雑な地形により、谷津田が多く、強力な農業生産(水稻栽培)力を、持っていたことを物語っている。

2 谷津遺跡

本遺跡は、千葉市花輪町340を代表所在地籍とする。下総台地が樹支状に侵蝕されて、東京湾

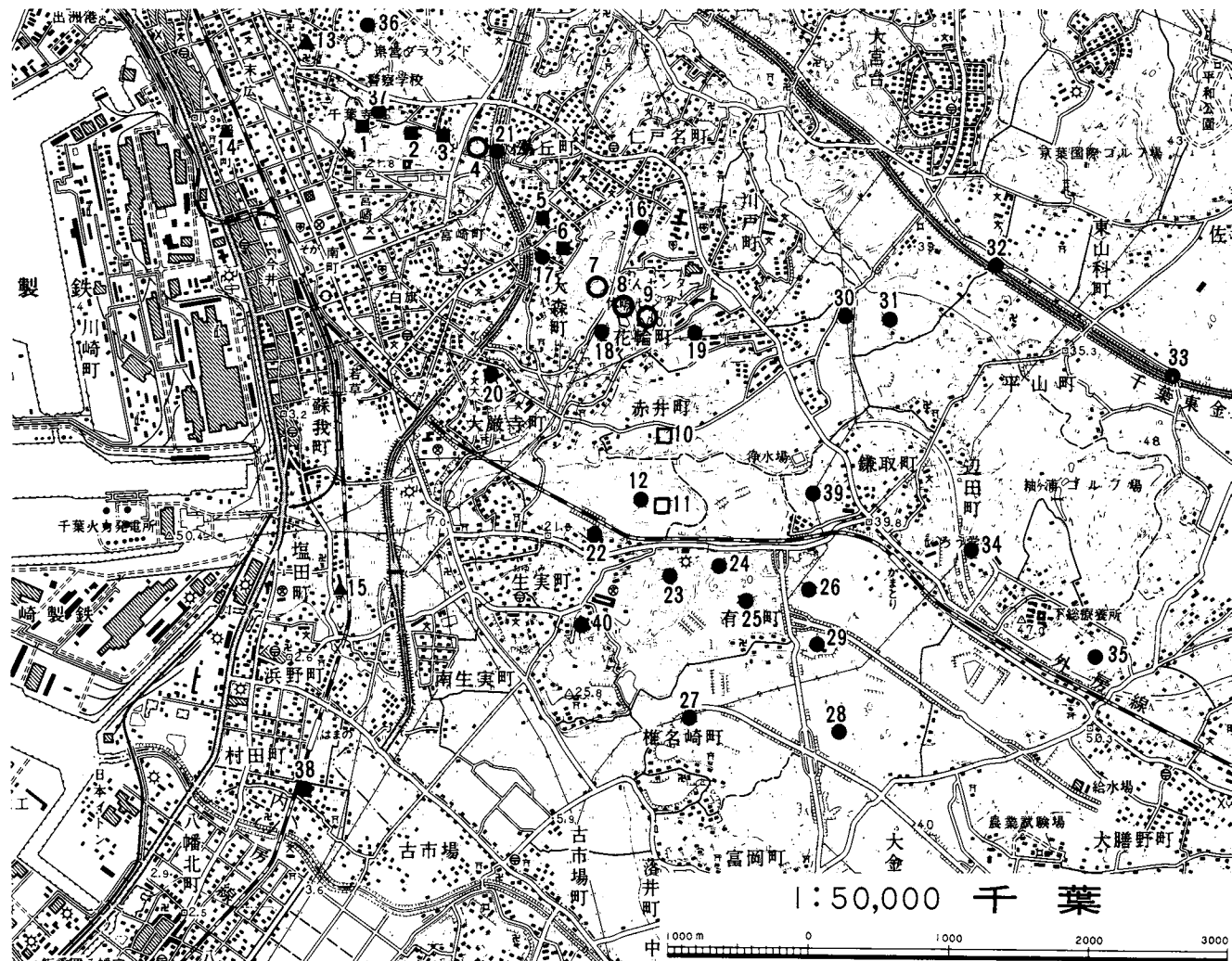
	遺跡名	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
昭和53年	立荒		調査	調査	調査								
	第一森大		調査	調査	調査	調査							
	津谷鷺					調査	調査	調査	調査			調査	
	神ノ山									調査	調査	調査	
	塚音観											調査	調査
54年	北北	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査					
	塚音観	調査											
	津谷					調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	
	津谷ヶ種											調査	
55年	昭和53～54年度調査分整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	
56年	群墳古田池	調査	調査	調査	調査								整理
	作瓜					調査	調査	調査					
	津谷ヶ種								調査	調査	調査	調査	
57年	塚貝刈草	4月～9月までは工程上の都合で一時閉鎖した。							調査	調査	調査	調査	調査
58年	昭和57年度分までの整理及び報告書Iの刊行	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	
59年	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	整理	
60年	作復	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	

 調査
  整理

第1図 調査工程図

第1表 千葉急行線内遺跡調査概要

遺跡名	調査コード	所在地	調査期間	遺跡概要	備考
昭和53年度					
鷺谷津遺跡	201-007 (No.2)	千葉市千葉寺 町767他 3,800㎡	昭和53年9月1日 ～ 11月30日	奈良～平安時代住居跡17軒、土壇4基(内 1基は土器焼成壇の可能性あり)溝1条、 他に縄文早期土器の分布がみられた。	(千葉急行Ⅰ)
観音塚遺跡	201-008 (No.3)	千葉市宮崎町 720-8他 1,100㎡	昭和54年3月1日 ～ 3月31日 昭和54年4月1日 ～ 4月30日	奈良～平安時代住居跡10軒、鍛冶跡1基、 土壇13基、製鉄に関する遺物の出土多くみ られた。表採品にも埴塙等がある。	(千葉急行Ⅰ)
山ノ神遺跡	(No.4)	千葉市宮崎町 668-2他 3,400㎡	昭和53年12月1日 ～ 54年2月28日	縄文時代包含層・集石・礫群・土壇(中期 間玉台期)奈良～平安時代住居跡3軒。	(千葉急行Ⅰ)
大森 第1遺跡	(No.6)	千葉市大森町 463-1他 3,590㎡	昭和53年5月21日 ～ 8月31日 昭和54年3月1日 ～ 3月15日	土塁(江戸期?野境土手)2基、溝2条(時 期不明)、奈良・平安時代住居7軒・掘立柱 建物1棟、縄文中～後期包含層、土壇1基	(千葉急行Ⅰ)
荒立遺跡	(No.7)	千葉市大森町 514-13他 3,400㎡	昭和53年5月1日 ～ 7月31日	平安時代住居地1軒	(千葉急行Ⅰ)
昭和54年度					
大北遺跡	(No.5)	千葉市宮崎町 711他 7,000㎡	昭和54年4月1日 ～ 10月31日	住居跡、弥生時代1軒、奈良～平安時代36 軒・掘立柱建物跡27軒・方形周溝1基・土 壇11基・溝1条等。	今回報告
谷津遺跡	(No.8)	千葉市花輪町 340他 5,000㎡	昭和54年8月1日 ～ 2月29日	古墳～平安時代住居跡12軒、掘立柱遺構2 基。	今回報告
種ヶ谷津 遺跡	(No.11)	千葉市生実町 2688-3他	昭和55年2月1日 ～ 3月31日	古墳～平安時代住居跡5軒、溝2条等	確認調査のみ
昭和55年度					
No.2～No.11			昭和55年4月1日 ～ 56年3月31日	整理作業	
昭和56年度					
池田古墳群	(No.9)	千葉市花輪町 124-3他 2,150㎡	昭和56年4月1日 ～ 8月5日	円墳1基、奈良・平安時代住居跡10軒、土 壇1基、縄文早期・中期土器等	今回報告 仁戸名古墳 群近接
種ヶ谷津 遺跡	(No.11)	千葉市生実町 2668-3他 6,100㎡	昭和56年10月1日 昭和57年2月27日	古墳～奈良時代住居跡17軒、溝2条他 先土器石器	整理中
瓜作遺跡	(No.9-1)	千葉市花輪町 303-2他 3,250㎡	昭和56年8月1日 ～ 10月21日	奈良～平安時代住居跡26軒、掘立柱建物跡 2棟、溝2条、土壇1期。	今回報告
昭和57年度					
草刈貝塚		市原市草刈字 扇谷津1315- 1他 4,315㎡	昭和57年10月1日 昭和58年3月31日	縄文中期住居跡30軒、古墳時代2軒 平安時代2軒、方形周溝墓5基、地下式壇 土壇・縄文柱穴等多数、人骨・獣骨も多数。	整理中
昭和58年度					
				整理作業及び「千葉急行線Ⅰ」の刊行	
昭和59年度					
昭和60年度					
榎作遺跡	(No.10)	千葉市花輪町	昭和60年4月1日 昭和61年3月31日	昭和60年10月1日現在 奈良～平安時代住居跡60軒以上。	



第2図 千葉急行線関係遺跡及び周辺遺跡

番号	遺跡名	報告書等	刊行年度	番号	遺跡名	報告書等	刊行年度
1	鷺谷津遺跡	千葉急行1・千葉県文化財センター	1983	21	宮崎第一遺跡	京 葉	1973
2	観音塚遺跡	千葉急行1・千葉県文化財センター		22	大道遺跡	千葉市大道遺跡	1983
3	山ノ神遺跡	千葉急行1・千葉県文化財センター		23	有吉遺跡	千葉東南部ニュータウン内・千葉県文化財センター	1983
4	大北遺跡	千葉急行2・千葉県文化財センター		24	高沢遺跡	〃	1983
5	大森第1遺跡	千葉急行1・千葉県文化財センター		25	有吉南遺跡	〃	1983
6	荒立遺跡	千葉急行1・千葉県文化財センター		26	有吉北遺跡	調査中	
7	谷津遺跡	千葉急行2・千葉県文化財センター		27	椎名崎遺跡	千葉東南ニュータウン	
8	池田古墳群	千葉急行2・千葉県文化財センター		28	小金沢貝塚	〃	
9	瓜作遺跡	千葉急行2・千葉県文化財センター		29	有吉南貝塚	〃	
10	榎作遺跡	調査・整理中		30	菱名貝塚	〃	
11	種ヶ谷津遺跡	整理中		31	台畑貝塚	〃	
12	種ヶ谷津遺跡	千葉県文化財センター	1985	32	築治台貝塚	千葉県文化財センター	1978
13	千葉寺	伝開山和銅2年僧行基建立		33	平山古墳	〃	1978
14	寒川神社	延喜式巻九神祇 神名上		34	辺田遺跡	〃	
15	蘇我比咩神社	(新訂増補同史大系26)千葉群二座		35	コロー内遺跡	千葉県文化財センター	1976
16	庚塚古墳群	千葉市史	1973	36	荒久古墳	千葉市史	1976
17	大森第二遺跡	京葉・1973 都市公社		37	中野台遺跡	〃	
18	藤葉遺跡	谷津遺跡 千葉市教育委員会	1984	38	服部遺跡	千葉県文化財センター	1985
19	仁戸名古墳群	仁戸名遺跡調査団	1972	39	鎌取遺跡	〃	
20	大蔵寺古墳群	千葉市史	1973	40	大覚寺山古墳	〃	

に開口している本地域の中に、(仮称)生実谷が存在する。生実谷は又、樹支状の小支谷に分れ、大巖寺、大森、花輪、赤井の4支谷となる。谷津遺跡は、大森支谷と花輪支谷に挟まれた北東から、南西方向につき出た舌状台地中央部西側に所在し、大森支谷に面している。周辺の遺跡としては、大森支谷を挟んで北西の対岸に、大森第1遺跡、大森第2遺跡、同一台地上に、北に庚塚古墳群、東に瓜作遺跡、池田古墳群、南に藤葉遺跡、花輪支谷を挟んで東の対岸に、中峠古墳、にとな遺跡、栗山遺跡、赤井支谷を挟んだ南の対岸には、榎作遺跡、大巖寺支谷を挟んで南西の対岸に、大巖寺古墳、愛宕遺跡が存在する。

谷津遺跡は、千葉市教育委員会によって、台地上のほぼ全面が調査されており、住居跡168軒、掘立柱建物跡14棟、土壌51基が検出されている。本遺跡はその北側の台地端にあたる。

3 瓜作遺跡

本遺跡は、千葉市花輪町303-2を代表所在地籍とする。下総台地が開析を受けてできた、(仮称)生実谷から分れた花輪支谷より分れた小支谷に面している。周辺の遺跡としては、同一台地上に、西に谷津遺跡、東に池田古墳群、北に庚塚古墳群、南に藤葉遺跡が存在する。

4 池田古墳群

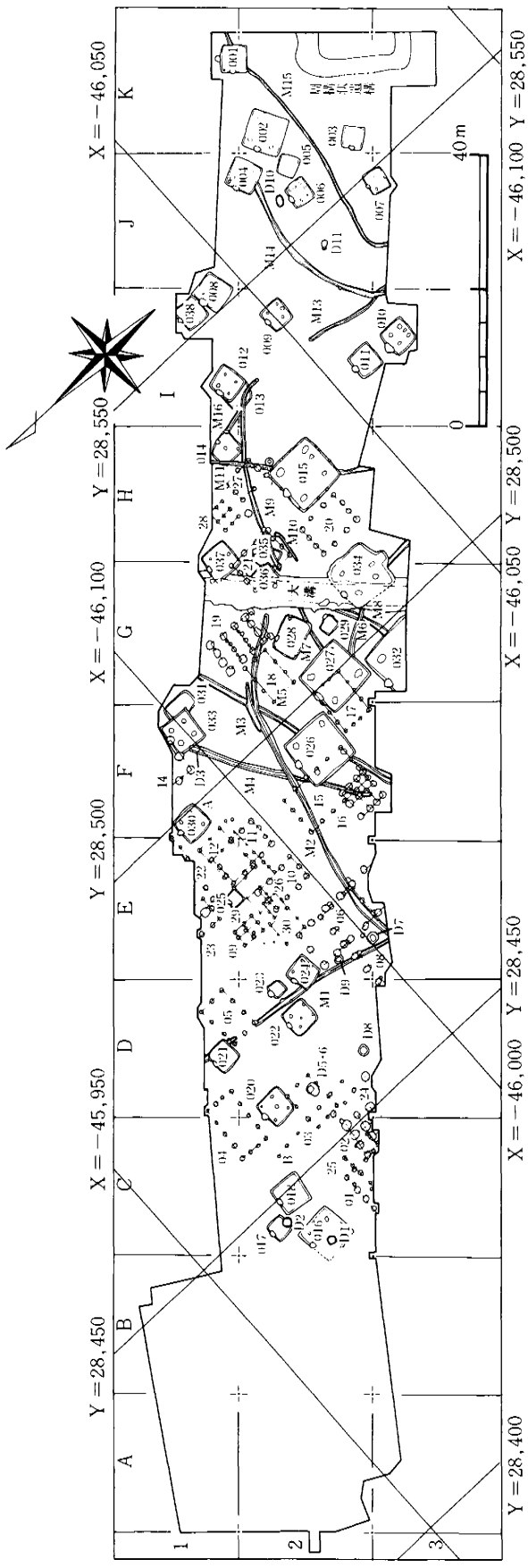
本遺跡は、千葉市花輪町124-3を代表所在地籍とする。下総台地が北東方向に開析を受け、(仮称)生実谷によって、樹支状に小支谷を形成している。その中で、花輪支谷から分れた小支谷に南北をはさまれた舌状台地の先端に位置する。周辺の遺跡として、同一台地上の西に瓜作遺跡、北に庚塚古墳群、南に藤葉遺跡、南の対岸に栗山遺跡、にとな遺跡が存在する。(麻生)

(注) 大森第2遺跡から漢式系土器と考えられる土器(深鉢1点、坏2点)が1軒の住居跡から発見されている。天智五年の百済人2000余人の移住、靈龜二年の高麗人の移住による高麗郡の設置の影響を与えている可能性があり、この時期を中心とする遺跡群の変化に注目する必要がある。

参考文献

- にとな 仁戸名古墳群発掘調査団 1972
京葉 千葉県都市公社 1973
千葉市史 資料編1 原始古代中世 千葉市編さん委員会 1976
千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書1 千葉県文化財センター 1984
千葉市文化財調査報告書 第10集 「谷津遺跡 本文編」 千葉市教育委員会 1984
古文化論叢 「千葉市大森第2遺跡出土の百濟土器」 酒井清治 九州古文化研究会 1985
千葉県埋蔵文化財分布地図(2) 一千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区一千葉県文化財センター 1986

II 大北遺跡の調査



第3図 大北遺跡遺構配置図 (1/1000)

第1章 検出された遺構と遺物

調査対象面積は7000㎡を測り、検出された遺構数は竪穴住居跡37軒・堀立柱建物29棟・土壇13基の他に溝等が検出された。遺跡は巻末折込にみられるとおり台地のやや奥まった位置にあり、京葉道路調査時の状況を考えるならば、現在、「松ヶ丘市民の森」として残されている一帯に広く展開しているものと思われ、以下検出された遺構、遺物について述べてゆく。

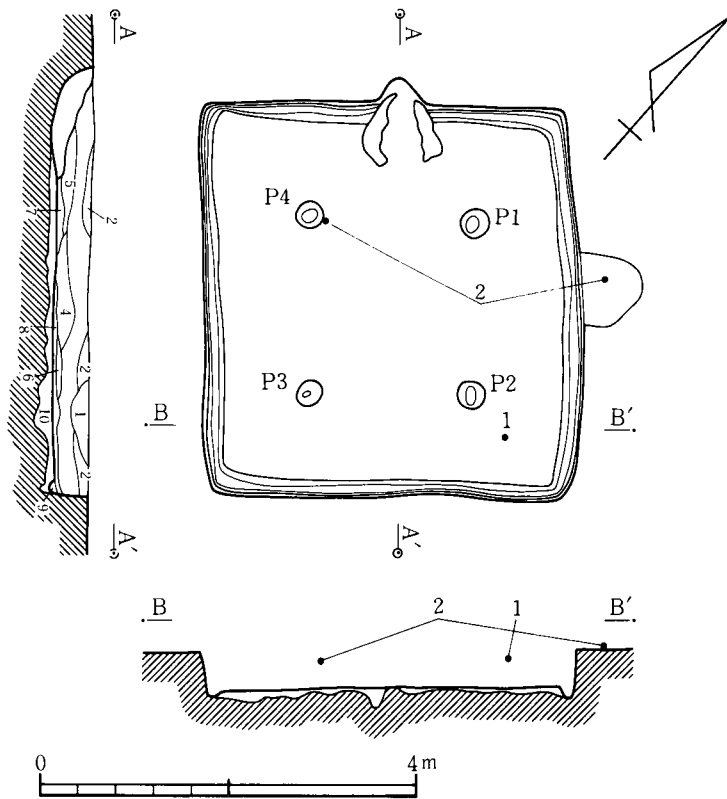
第1節 竪穴住居跡と遺物

001号住居跡（第4～6図）

調査区の最も南東側に位置し、M15号跡と切り合い関係にある。新・旧関係は土層断面の観察から、本跡が溝状遺構に切られていることが明瞭である。主軸方向はN-40°-Wを示す。重複する溝の幅が狭く、また浅かったことが幸いして遺構の遺存は良好である。規模は主軸方向に4.1m、それと直交する方向4.0mである。各コーナー部分に若干丸味をもち、東壁がやや張るがほぼ正方形を呈する。検出面から床面までは約40cmの掘り込みを有し、壁は一部を除いて真直に立ち上がる。壁下には幅20cm前後、深さ8cm程の壁溝が全周して検出されている。この壁溝には特にピットなどは認められない。柱穴は各コーナーを結ぶ対角線上に4ヵ所穿たれている。P₁は径30cmの掘り込みから深さ25cmを測り、P₂は深さ33cm、P₃は下端がすぼまり深さは28cm、P₄の深さは50cmを測る。柱穴間の間隔は、P₁-P₂ 1.80m、P₂-P₃ 1.75m、P₃-P₄ 1.9m、P₄-P₁ 1.73mである。床面は荒掘りの上に10cm前後の埋め戻しを行ない仕上げている。目につく著しい凹凸は認められず、平坦な様子が保たれている。

カマドは北西壁のほぼ中央に構築され、両袖を残す。袖は「ハ」の字形に遺存し、天井部は崩落し不明。壁への掘り込みは約30cmで煙道部は60度で立ち上がる。火床部は40cm×40cmの円形に窪む。

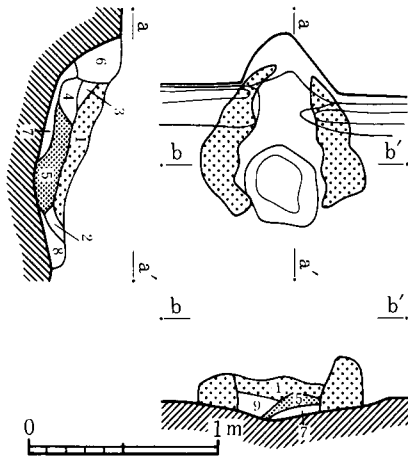
出土遺物は大変少ない。出土状況から考えると本跡に伴うと断定し難いが、一応図示可能であった遺物は3点である。床面からは実測し得るほどの遺物は出土していない。第6図1は、ほぼ完形の坏である。丸底で体部は全体に内彎し、口縁部は体部との境に設けられた弱い稜から僅かに外反して立ち上がる。調製は外・内面ともヘラミガキで外面にのみ赤彩を施す。胎土はやや砂質の感を受け、焼成は普通である。口径11.6cm、器高3.8cmを測る。2は3分の1遺存する須恵器の坏身である。体部は深めに作られ、受部から短く内傾して立ち上がる。口唇端部は尖り気味となって終わる。底部から体部にかけての調製は回転ヘラケズリによる。焼成は堅緻で色調は暗灰褐色。復元口径は10.5cmを測り、同じく器高は5.0cmである。丸味をもつが底部



第4図 001号住居跡実測図 (1/40)

001号住居跡土層説明

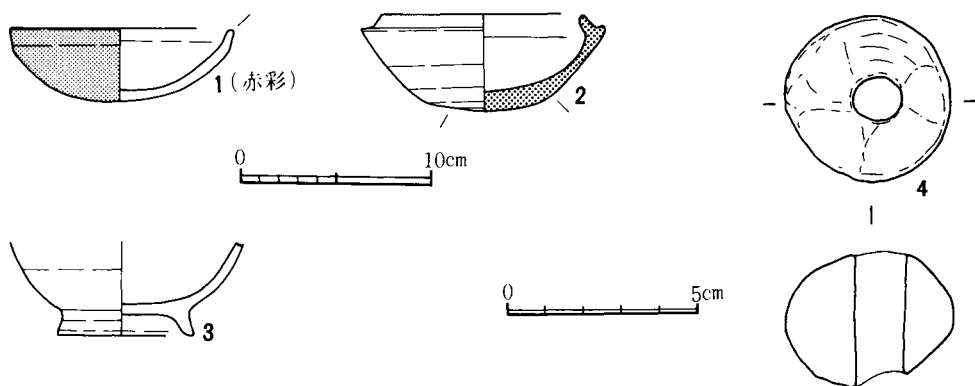
- | | | | |
|---------|------------------|----------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒, 焼土粒子を若干含む。 | 7. 暗褐色土 | 焼土粒子及び山砂を若干含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 山砂, 焼土粒子を若干含む。 | 8. 褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 3. 黒褐色土 | ローム粒子を若干含む。 | 9. 黄褐色土 | ローム粒子含む。 |
| 4. 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 | 10. 黄褐色土 | ロームブロックを大変多く含む。
(貼床床下部分) |
| 5. 暗褐色土 | 山砂及び焼土粒子を若干含む。 | | |
| 6. 黒色土 | ローム粒子を若干含む。 | | |



001号住居跡カマド土層説明

- | | |
|---------|-------------------|
| 1. 赤褐色土 | 焼土ブロックを多く含む。 |
| 2. 褐色土 | 山砂が混ざる褐色土。 |
| 3. 灰褐色土 | 山砂を多く含む。 |
| 4. 灰褐色土 | 焼土ブロックを多く含む。 |
| 5. 赤褐色土 | 焼土ブロックを大変多く含む。 |
| 6. 黄褐色土 | ロームブロックを多く含む。 |
| 7. 灰褐色土 | ロームブロック, 山砂を多く含む。 |
| 8. 灰褐色土 | ローム粒子を多く含む。 |
| 9. 黄褐色土 | 山砂のブロックを含む。 |

第5図 001号住居跡カマド実測図 (1/40)



第6図 001号住居跡出土遺物実測図（1～3・ $\frac{1}{4}$ 、4・ $\frac{1}{2}$ ）

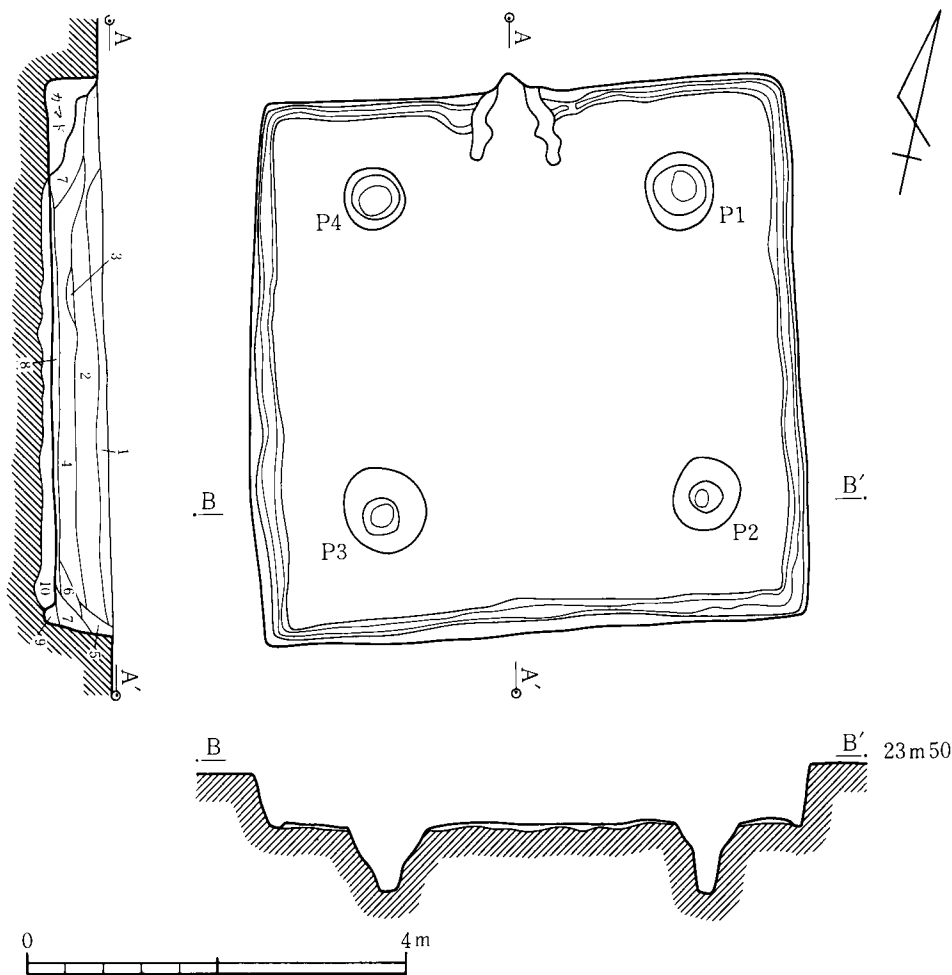
が意識されており復元すると径3.3cmとなる。3は高台付の碗である。比較的平坦な底部から高台は「ハ」の字状に開き、体部は内彎して立ち上がる。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。調製は外面がナデで内面はミガキを加える。高台の底径7.1cmを測る。4は土玉である。

002号住居跡（第7～11図）

001号住居跡の西側に位置する。004・005号住居跡と近接するが切り合い関係はない。カマドは北側に構築され、主軸方向はN-15°-Wに傾く。四つの壁のうち西壁にやや張りが認められるほかは、各コーナー部から直線的に結ばれている。主軸方向に5.70m、直交方向に5.80mであるのでほぼ正方形を呈する平面形である。検出面から床面まで約60cmを測る。北・東壁は真直な立ち上がり方を示し、南・西壁がやや傾斜する。壁下には幅20cm前後、深さ10cm程度の壁溝が全周して検出されている。断面は略箱形である。床面は荒掘りの上に貼床を施して設定される。著しい凹凸は認められないものの、全体にゆるやかに波を打ったような状態を呈している。また壁際が中央部よりやや高くなっている。柱穴は対角線上に4ヵ所穿たれている。いずれも途中で段がつくような掘り方をもち、掘り込み面は径60～80cmの円形である。各柱穴の床面からの深さはP₁-67cm、P₂-73cm、P₃-65cm、P₄-61cmとだいたい同じような深さに掘られる。柱間間隔は、P₁-P₂ 3.28m、P₂-P₃ 3.40m、P₃-P₄ 3.30m、P₄-P₁ 3.27mで比較的ばらつきが少ない。この4ヵ所の支柱穴のほかに補柱穴、入口ピットは検出されていない。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。壁への掘り込みは30cmを測り、煙道部は垂直に立ち上がる。天井部は崩落し、袖部分のみが遺存する。袖は山砂を主として粘土・ロームブロックが混ざる。焼土の堆積はカマド中央部より煙道部に近い側で顕著である。

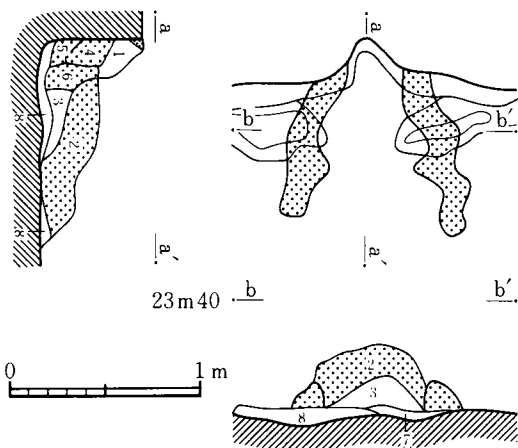
遺物は甕類が多く出土し、坏は僅かである。第9図の出土状況図からわかるように、遺物はカマドの西側から多く検出されている。甕類で完形に復元されたものはなく、出土レベルにも



第7図 002号住居跡実測図 (1/40)

002号住居跡土層説明

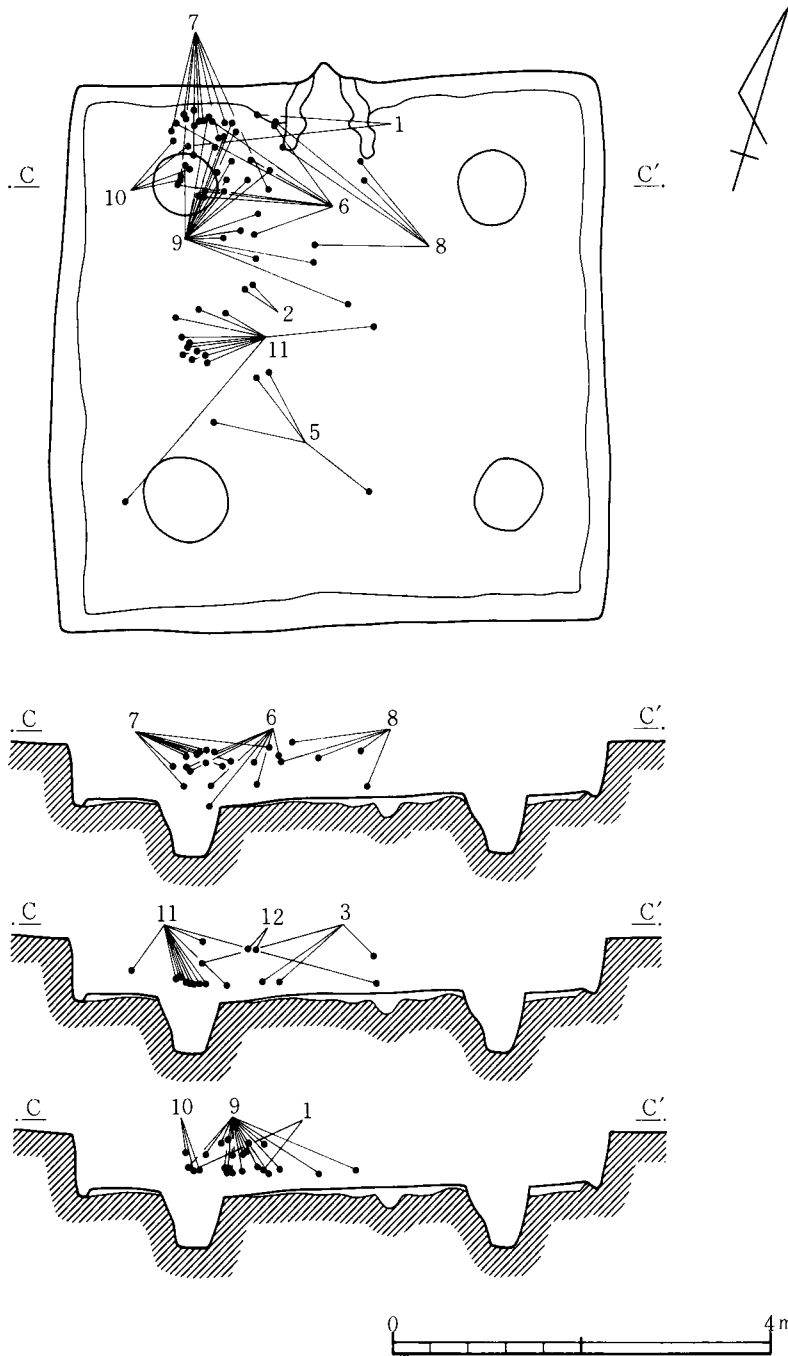
- | | | | |
|---------|----------------|----------|-----------------------------|
| 1. 褐色土 | ローム粒子を若干含む。 | 6. 黒色土 | ローム粒子を含む。 |
| 2. 褐色土 | ローム粒子を含む。 | 7. 褐色土 | ロームブロックを多く含む。 |
| 3. 黒色土 | ローム粒子を2より多く含む。 | 8. 黄褐色土 | ローム粒子を多く含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子を含む。 | 9. 褐色土 | ロームブロックを多く含む。 |
| 5. 褐色土 | ローム粒子を含む。 | 10. 黄褐色土 | ロームブロックを大変多く含む。
(貼床床下部分) |



002号住居跡カマド土層説明

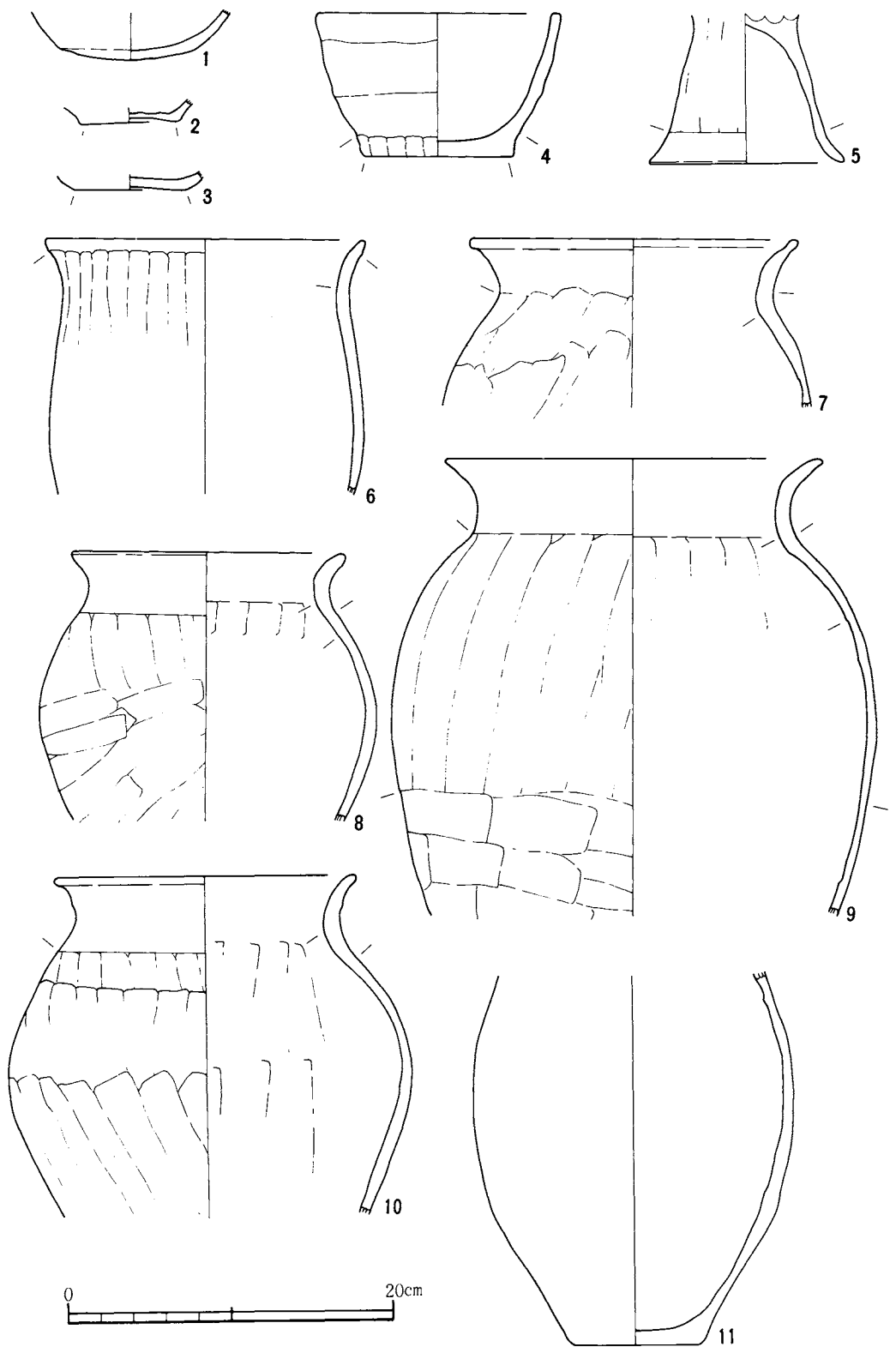
- | | |
|---------|------------------------|
| 1. 黄褐色土 | 山砂を主とする。 |
| 2. 灰褐色土 | 山砂を主として焼土ブロックを多く含む。 |
| 3. 灰褐色土 | 山砂と焼土粒が混ざり、炭化物が若干含まれる。 |
| 4. 灰褐色土 | 山砂及び焼土ブロックを僅かに含む。 |
| 5. 灰褐色土 | 山砂を多く含む。 |
| 6. 灰褐色土 | 焼土粒子・炭化粒を若干含む。 |
| 7. 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化粒を含む。 |
| 8. 暗褐色土 | 小ロームブロックを多く含む。 |

第8図 002号住居跡カマド実測図 (1/40)

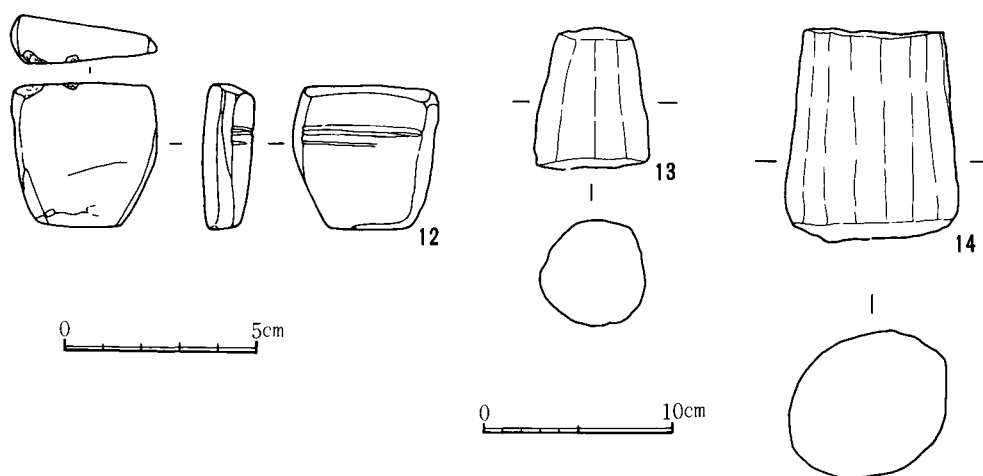


第9図 002号住居跡遺物出土状況図 (1/50)

かなりの差が認められる。概して床面近くの遺物は少なく、やや浮いた位置から覆土中位に集まっている。1～3は土師器坏の底部である。1は完全な平底でなく外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はミガキ調整である。2・3は平底で、底部には回転ヘラケズリが施される。4は鉢である。安定した底部から体部は僅かに内彎して立ち上がる。外面は二条接合痕が観察



第10图 002号住居跡出土遺物実測図(1)(㍻)

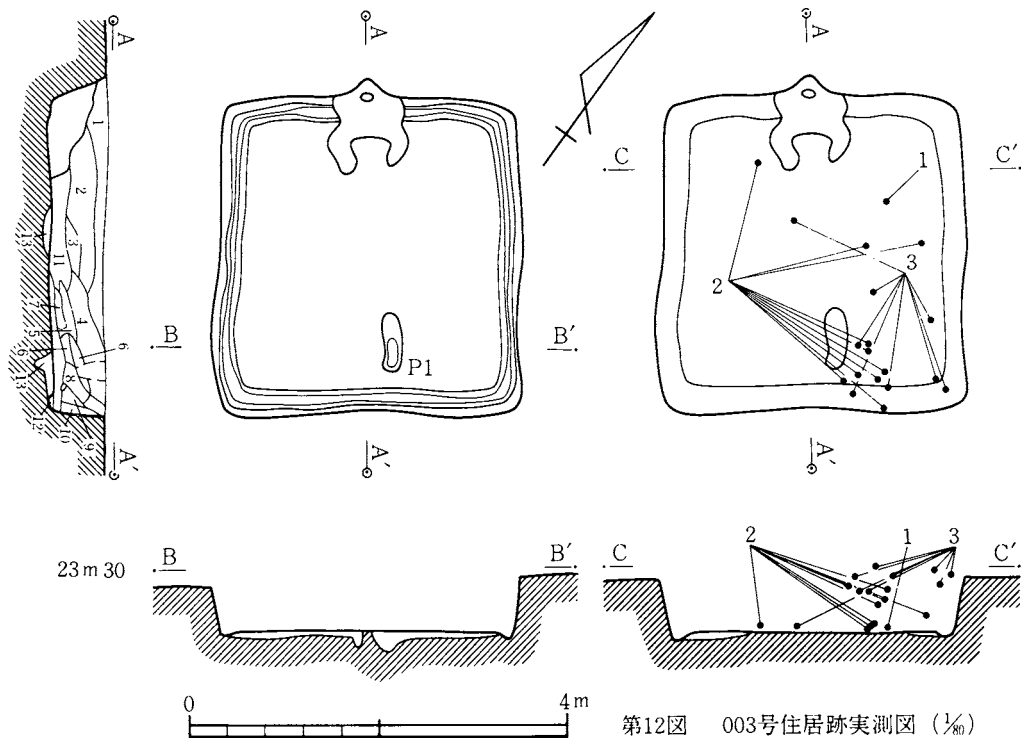


第11図 002号住居跡出土遺物実測図(2) (12・ $\frac{1}{2}$, 13~14・ $\frac{1}{4}$)

され、器面はナデによって調整される。内面も同様に全体にナデである。ほぼ完形で、底面に木葉痕をとどめ、口径14.9cm、器高8.7cm、底径8.7cmを測る。胎土に砂を含み、焼成は普通で色調は黒褐色を呈する。6~11は甕である。6は胴部にあまり張りをもたず寸胴で、口縁部はゆるやかに外反する。外面は縦方向のヘラケズリによって調整される。復元口径19.6cm。7は頸部にすぼまりを有し、口縁部は「く」の字形に外反する。また、口縁端部内面には凹線が一周する。8~10は胴上半部に最大径を設け、口縁部は外彎して開く。いずれも口縁部の調整はヨコナデで、胴部外面はヘラケズリが行なわれている。胴部内面は7が全体にナデで、8~10が横方向のヘラケズリの後にナデを加えて仕上げている。胎土には砂が含まれ、焼成は特に不良となっているものは認められない。11は胴部中位に弱い張りを有する長胴の甕で口縁部を欠いている。胴部外面の調整は、全体に縦方向のヘラケズリの後にナデを施している。内面は全面にナデ調整である。胎土に砂を含み焼成は良好である。12は砥石である。図中右面には横に3本の横線が刻まれている。13・14は土製支脚である。

003号住居跡 (第12~14図)

K3グリッドポイントの近くに位置し、西に3mのところには007号住居跡が検出されている。他の遺構との切り合い関係はなく単独である。カマドは北側に構築され、主軸方向はN-36°-Wを指す。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は主軸方向に3.30m、それと直交する方向に3.20mを測る。コーナー部分にやや丸味のついた小形の住居跡である。検出面から床面までの深さは60cm前後を測り、比較的深い掘り込みを残している。壁の遺存具合は良好でほぼ垂直に立ち上がる。壁下には壁溝が全周する。場所によっては多少異なるが概して浅く、特に東壁下の一部は2cm程度の掘り込みが認められるのみである。他も5cm前後で断面はUの字形となる。床



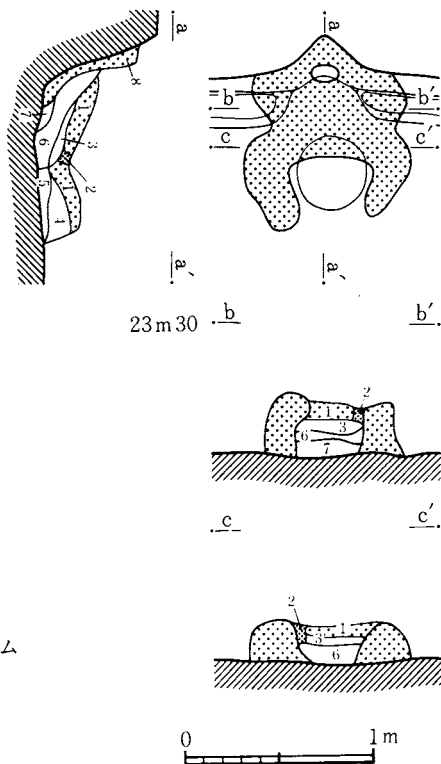
第12図 003号住居跡実測図 (1/80)

003号住居跡土層説明

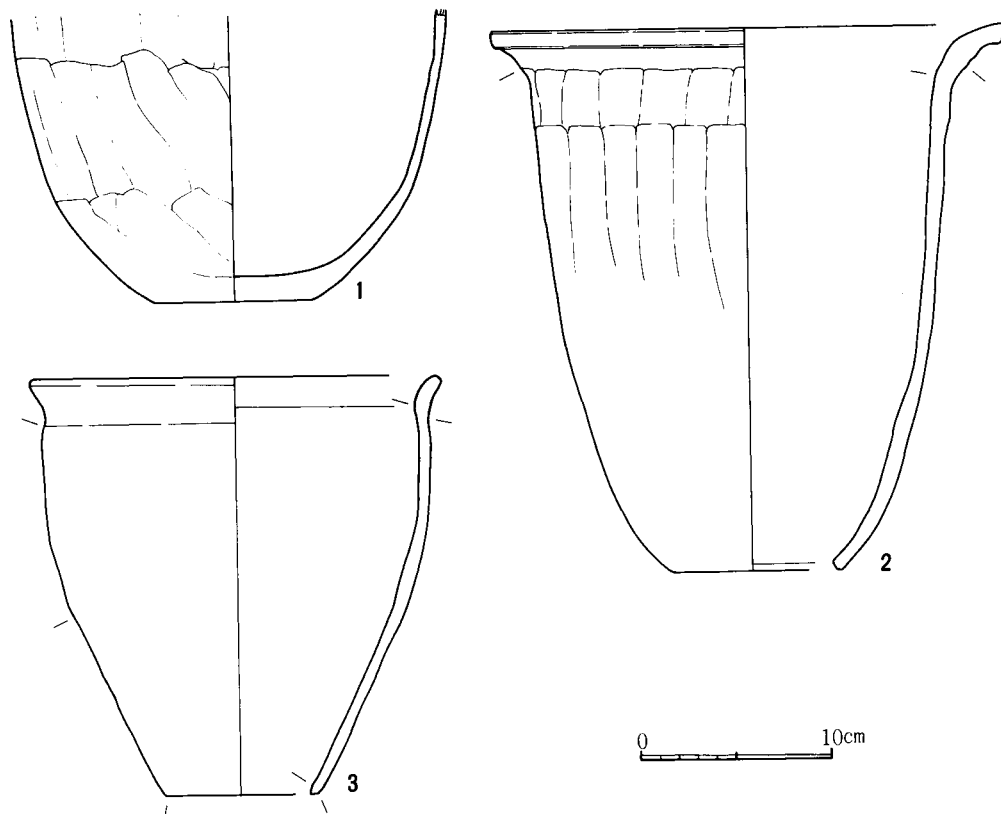
1. 黒褐色土
2. 黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
3. 黄褐色土 ローム粒子を非常に多く含む。
4. 暗褐色土
5. 褐色土 密な状態で堆積する。
6. 褐色土 ローム粒子を非常に多く含む。
7. 褐色土 ローム粒子をやや多く、また焼土粒子を多く含む。
8. 褐色土 7と似た層で、ローム粒・焼土粒子の含まれ方が若干異なる。
9. 褐色土 焼土粒子、ローム粒子をやや多く含む。
10. 褐色土 ローム粒子を非常に多く含む。
11. 褐色土 焼土粒子、ローム粒子をやや多く含む。
12. 褐色土 ローム粒子をやや多く含む。
13. 黄褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。

003号住居跡カマド海層説明土

1. 黄褐色土 小砂を主として焼土を含む。
2. 褐色土
3. 赤褐色土 焼土を主とする。
4. 褐色土 ローム粒子を多く含む。
5. 褐色土 ローム粒子、焼土粒子を若干含む。
6. 赤褐色土 焼土ブロックを主とする。
7. 赤褐色土 6と似るが焼土ブロックがやや少ない。
8. 赤褐色土 煙道部で焼土の堆積及び火燃によってロームが硬化し赤色に変化する。



第13図 003号住居跡カマド実測図 (1/40)



第14図 003号住居跡出土遺物実測図(¼)

面は荒掘りの上に僅かに貼床を施して水平構築される。カマドの前などは荒掘りの段階で整えられたような状況で顕著な貼床は観察されない。全体に平坦といえるだろう。柱穴は1ヵ所も検出されなかった。検出したピットはP₁の1個で、これは入口に伴うものと考えられる。

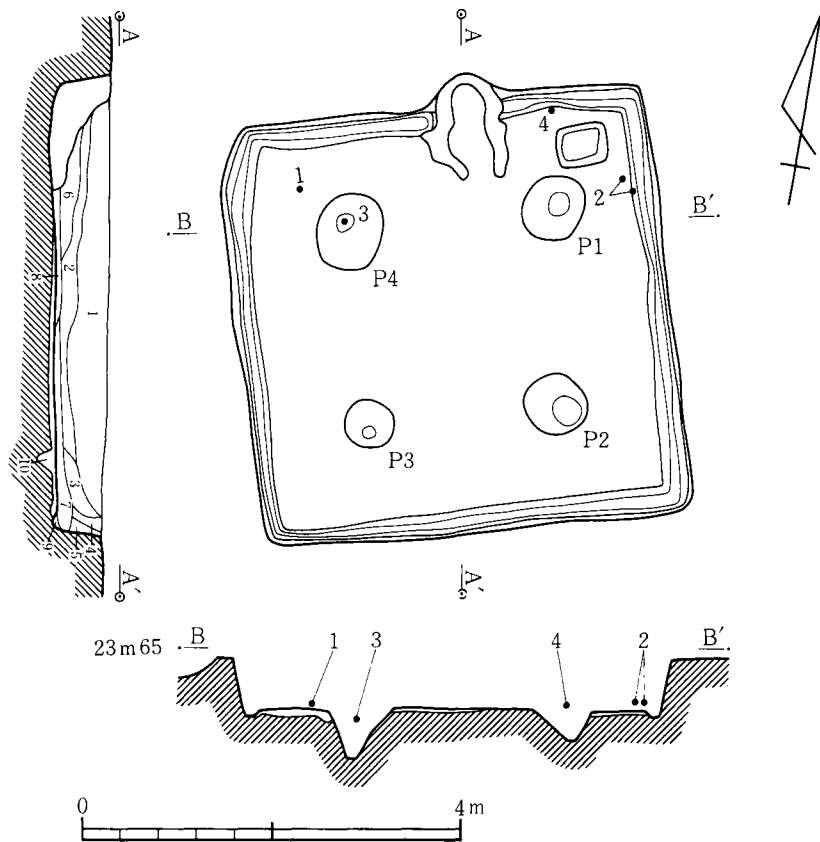
カマドは北西壁の中央に設けられる。壁への掘り込みは約20cmと僅かで、煙道部は65°の傾斜で立ち上がる。袖の遺存は良好であるが天井部は土圧で押しつぶされたように落ちている。火床部は40cm×35cmの楕円形に小さく窪んでいる。この火床面はかなり火熱による変化を受けていて、同様に煙道部も赤色に変化し硬化した様子を示している。

遺物は図示可能となったものが3点と少ない。床面に近いところからはあまり出土せず、覆土の上層から中程にかけて主に出土している。1は甕の胴部下半である。調整は、外面が縦方向か斜方向のヘラケズリで内面がナデである。使用のためか器面の磨滅が目立っている。底径は8.6cm。2・3は甑である。2は全体に寸胴な作りとなり、口縁部が大きく外反して開く。器厚は胴部が均等で口縁部が若干肥厚する。外面は縦方向にヘラケズリが加えられ、内面は横方向のヘラケズリの後ナデを施して平滑に仕上げられる。口縁部は外内面ともヨコナデ。4分の3程が復元でき、口径26.9cm、器高28.2cm、底径8.9cmをそれぞれ測る。胎土には砂が多く含ま

れるが焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。3は体部の3分の1を欠く。胴部上反に張りを有し、口縁部は短く外反する。胴部中位には製作段階についての段状の接合部位が残される。調整は外面がヘラケズリの後最終的にヘラミガキを施し、内面は横位のヘラケズリ後縦方向にヘラミガキをしている。胎土は緻密で焼成も良好で色調は暗褐色を呈する。口径21.4cm, 器高21.5cm, 底径7.7cmを測る。

004号住居跡 (第15~17図)

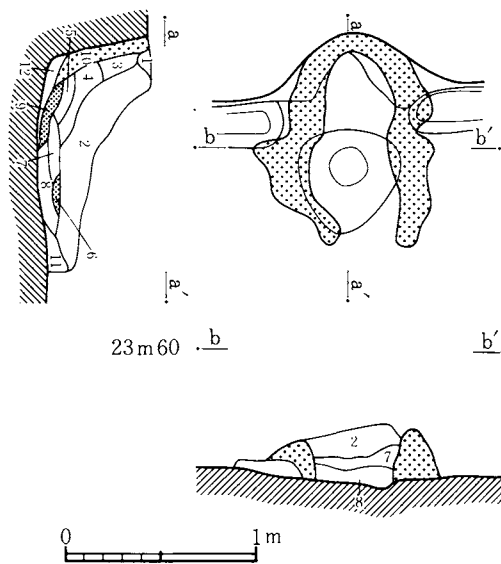
002号住居跡の北側に位置し、M14号跡の東端部と接している。また南西に10号土壌 (D10), 005・006号住居跡が近接している。カマドは北側に設けられ、主軸方向はN-14°-Wである。遺構検出面から床面までの深さは50cm強で、壁は僅かに傾斜して立ち上がるものの直線的



第15図 004号住居跡実測図 (1/100)

004号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|-------------------|----------|------------------------------|
| 1. 褐色土 | ローム粒子を含む。 | 6. 褐色土 | 灰を非常に多く含む。 |
| 2. 黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒子を含む。 | 7. 褐色土 | 粘性が強く堆積は密。 |
| 3. 黄褐色土 | ロームブロックを多く含む。 | 8. 褐色土 | |
| 4. 黒褐色土 | 焼土粒子を少し含む。 | 9. 暗褐色土 | ロームブロックを非常に多く含む。 |
| 5. 褐色土 | | 10. 黄褐色土 | ロームブロックを非常に多く含む。
(貼床床下部分) |



004号住居跡カマド土層説明

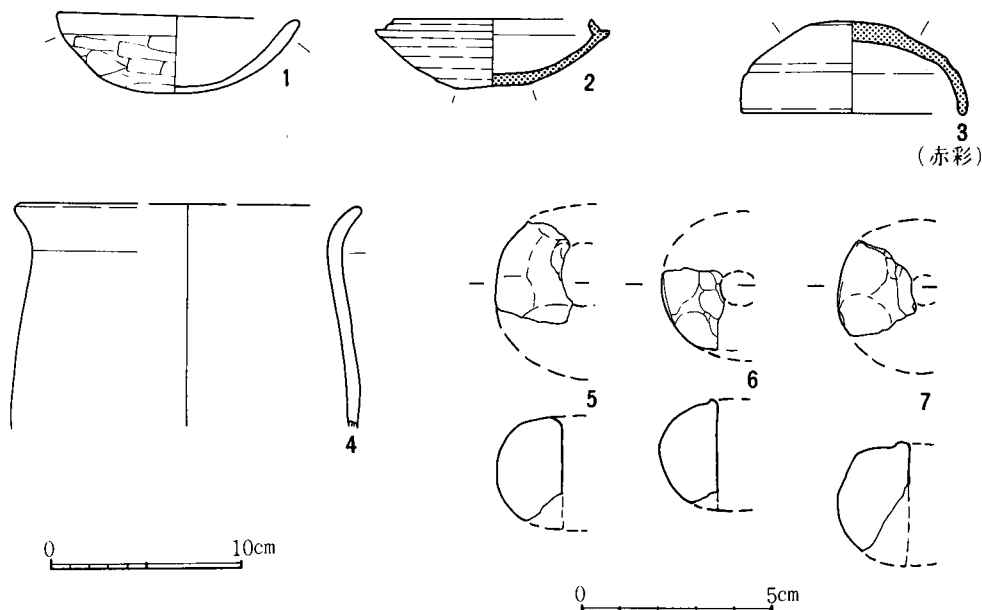
1. 黒褐色土
2. 黄褐色土 山砂を主とする。
3. 黒色土 焼土, 山砂を含む。
4. 黒色土 焼土, 山砂を多く含む。
5. 黒褐色土 4と似るが焼土がやや多い。
6. 赤褐色土 山砂に焼土・炭化物を多く含む。
7. 青灰色土 灰, 焼土, 炭化物を多く含む。
8. 灰褐色土 山砂を主として焼土を少し含む。
9. 赤褐色土 火熱を受けて赤色に変化した山砂を主とする。
10. 黒色土 火熱を受けた山砂を多く含む。
11. 黒褐色土 焼土を僅かに含む。
12. 黄褐色土

第16図 004号住居跡カマド実測図 (1/40)

である。平面形は北西コーナー付近がやや張り出すが、4.60m×4.52mのほぼ正方形に近い形をとる。北西コーナーを除く3コーナーは直角に近い曲がり方を示し、壁も直線的に結ばれている。壁下には壁溝が全周して検出されている。幅は20cm程となるところが多く、深さは東壁の一部で10cmを測るほかは6cm前後である。床面は3cmの貼床を施して設定される。特に凹凸は認められないが中央部が低くなる傾向が認められる。柱穴は対角線上に4ヵ所検出された。P₁は掘り込み面で70cm×60cmを測り30cmの深さで底面に至り、底面は20cm×20cmとかなり小さくなる。以下P₂は68cm×60cmで52cmの深さ、P₃は54cm×52cmで68cmの深さ、P₄は80cm×70cmで47cmの深さを測る。柱間は底面の中央を結んで測定すると、P₁-P₂ 2.13m、P₂-P₃ 2.13m、P₃-P₄ 2.19m、P₄-P₁ 2.27mをそれぞれ測る。入口方向のピットは検出されていない。P₁の北側にはいわゆる貯蔵穴が設けられている。カマドの右袖から右に約50cmの位置に、55cm×45cmの長方形の平面形で深さ63cmに穿たれている。

カマドは北壁の中央から僅かに北東コーナー側へ寄った場所に構築されている。壁への掘り込みは約30cmで、煙道部は75°の傾斜で立ち上がる。天井部はすでに崩落し、両袖のみが遺存する。焚口側での幅は40cm程と狭く、火袋部でも大きな変化はない。火床部は55cm×50cmの不整形円形で浅く窪んでいる。

出土遺物は僅かで集中する様子もみられない。図示可能なものは7点で、いずれも住居跡の北側から出土している。出土レベルは床面に接するかやや浮いた位置からである。1は土師器の坏である。完形で、口径12.7cm、器高4.1cmを測る。丸底で、全体に半球状の丸味をもち、口縁部は肥厚して開く。体部外面はヨコ方向のヘラケズリの後ミガキ。内面はミガキ調整である。

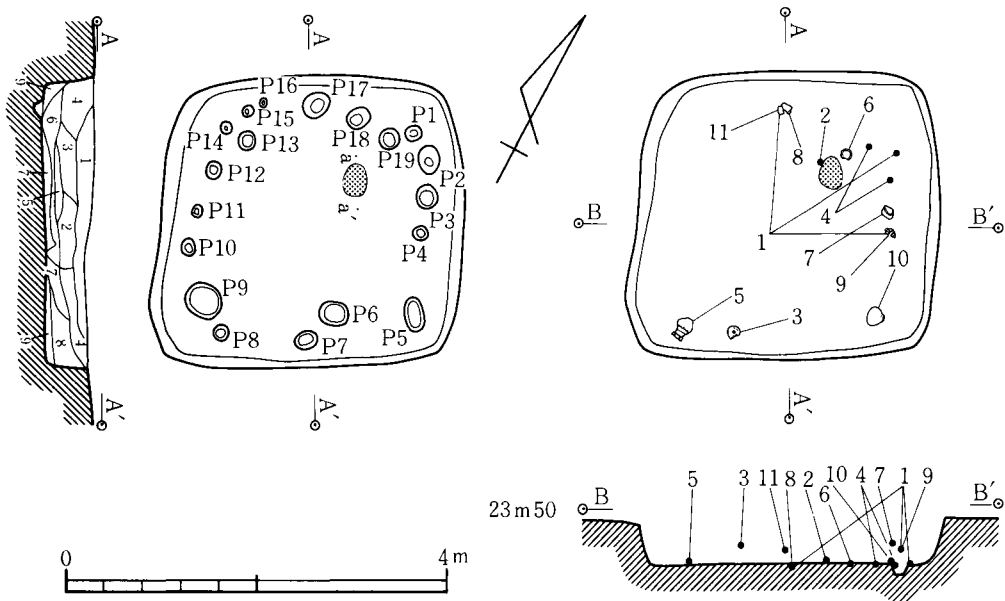


第17図 004号住居跡出土遺物実測図 (1~4・ $\frac{1}{4}$, 5~7・ $\frac{1}{2}$)

2は須恵器の坏で、これもほぼ完形である。底部は平坦部を僅かに作り出し、受部から口縁部は短く内傾して立ち上がる。底部調整は回転ヘラケズリによって整えられる。焼成は良好で色調は黒青灰色を呈する。3は須恵器の坏蓋である。甲高の天井部から弱い段をつけて口縁部に下降する。天井部には回転ヘラケズリが施される。胎土は緻密で焼成も硬く、色調は黒灰色となる。完形で口径11.9cm、器高4.9cmを測る。4は甕で、胴部中位から口縁部にかけての約3分の1が遺存する。胴部は寸胴で、頸部での絞りも弱く口縁部はゆるやかに外反して開く。調整は外面が縦方向のヘラケズリの後ナデで、内面はヨコナデで仕上げている。焼成は普通で色調は暗灰褐色を呈する。5~7は土玉である。

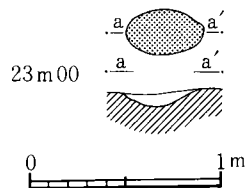
005号住居跡 (第18・19図)

002号住居跡の西側に接し、006号住居跡の東隣でちょうど2軒の住居跡に挟まれたような位置に検出された。炉を置く住居跡で、主軸方向はN-29°-Wを向く。平面形は四隅に丸味をもついわゆる隅丸正方形に近い形を呈する。規模は主軸方向に3.10mを測り、それと直交する方向に3.25mとなる。検出面から床面までは50cm弱の深さを測り、壁は良好に遺存する。壁下には全く溝は認められず、床面と壁面との境に丸味をつけて壁はゆるやかに傾斜しながら立ち上がる。床面は全体に平坦に構築される。そのなかで炉の南東側は特に硬く踏み込まれた様子が残されている。ピットは合計19ヵ所に検出された。平面図を見てわかるように配置は環状となる。そして深さはいずれも10cmにも達していない。以下各ピットの床面からの深さを示しておきた



005住居跡土層説明

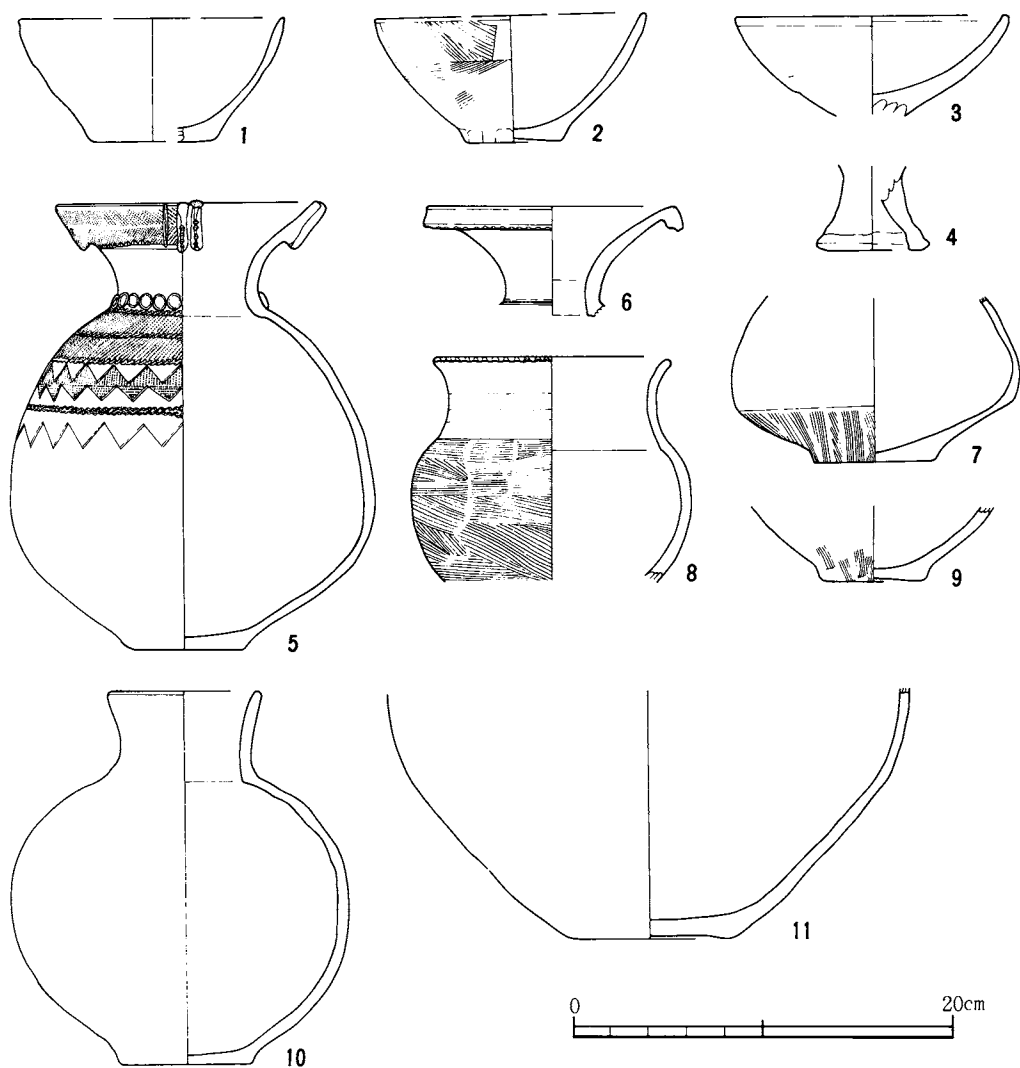
1. 黄褐色土 ローム粒を少し含む。
2. 黒色土 ローム粒、焼土粒を僅かに含む。
3. 黄褐色土 ロームブロックが若干含まれ、また炭化粒も僅かに含む。
4. 黒褐色土 炭化粒、ローム粒を僅かに含む。
5. 黒色土 焼土粒をやや多く含む。
6. 赤褐色土 焼土を主とする。
7. 黒色土 焼土を多く含む。
8. 褐色土 ローム粒、ロームブロックを僅かに含む。
9. 黒色土 ローム粒、炭化粒を僅かに含む。



第18図 005号住居跡実測図 (1/80)

い。P₁-5 cm, P₂~P₄ 8 cm, P₅-10cm, P₆-6 cm, P₇-5 cm, P₈-2 cm, P₉-6 cm, P₁₀-4 cm, P₁₁・P₁₂-3 cm, P₁₃-6 cm, P₁₄-6 cm, P₁₅-8 cm, P₁₆-4 cm, P₁₇-9 cm, P₁₈-6 cm, P₁₉-7 cmである。どれが主柱穴になるか断定できるような特徴もなく、上屋構造との係わりからの検討が必要である。P₅とP₈の間がピット2個と、他の場所と比較すると粗な状況がみられるので一応この間が入口付近と考えておきたい。炉は住居跡中央からやや北寄りに設けられている。その規模は40cm×25cmで、南-北方向が長径となる楕円形を呈するものである。厚さ6 cm程に焼土が堆積する。

本住居跡からは床面に接して多くの遺物が出土した。一括遺物とみて差し支えないだろう。1・2は鉢である。ともに体部下半は直線的に開きながら立ち上がり、上半部で僅かに内彎する。調整は1が外内面ミガキで、2は外面がハケ目痕を残す調整の後ミガキ、内面は全体にナデを行なう。3・4は高坏である。3は坏部のみ完存し、口径14.3cm、坏部が僅かに内傾気味となる。4は脚部で「ハ」の字形に直線的に下降し裾部は開くことなく終わる。5~7・9~11は壺である。5は大きくふくらんだ球状の胴部をもち、最大径を中位より僅かに下位に設け



第19図 005号住居跡出土遺物実測図 (1/40)

どっしりとした感を与える。頸部は短く外反しながら立ち上がり、口縁部は複合口縁を呈する。文様は口縁部に羽状縄文が施文され、その上に刻目をもつ棒状浮文が1単位3本で構成され、これが4単位貼りつけられている。頸部と肩部との境には円形浮文27個がめぐる。そして肩部には結節をもつ2段の縄文が施され、その下位に縄文を充填する山形文が周回する。また、胴部中位にもヘラ状工具で施文された山形文が一周し、さらに縄文を充填した山形文との中間に結節縄文を施している。こうした文様が描き出された上に外面の胴部最大径から上位と内面頸部までは赤彩を加えて仕上げている。内面の調製は口縁部が横方向のミガキで、胴部がナデである。口径13.3cm、器高23.2cm、底径6.0cmを測る完形品である。6は口縁部のみが遺存し口径は13.7cmである。口縁部は頸部から大きく外反して開き、端部は折り返される。その折り返し

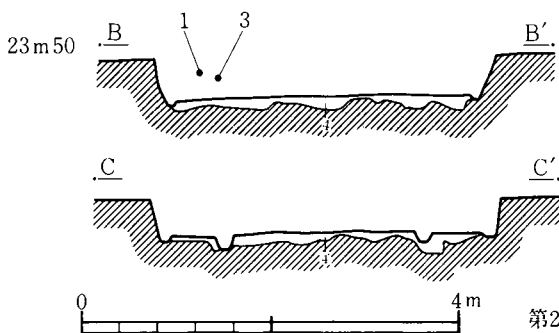
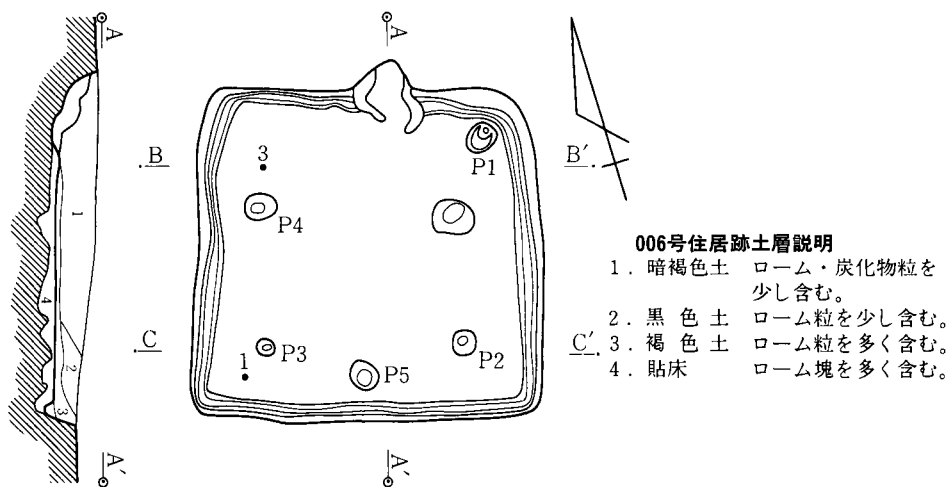
の下端には押捺が連続して施文される。また頸部には弱い凹面が一周して認められる。調整は外内面とも最終的にはナデによって整えられる。7は胴部下半に最大径を設け、安定感をもつ。作製の段階を示すものであろうか胴部下半の最大径から下は縦位のハケ目調整で、そこから上はナデが施されている。内面は全体に横方向のナデが観察される。9は底部のみが遺存する。調整は外面はハケ目で内面がナデである。10は完形で口径7.7cm，器高19.0cm，底径6.7cmを測る。胴部は球状で口縁部は肩部から直立するように立ち上がる。口唇部は丸く終わる。文様は特に施文されず，外面は全体にナデ痕が認められる。11は胴下半部から底部にかけてのみが遺存する。底径は8.0cmで割と大きな壺であったことが想像される。13は実測可能となった唯一の甕である。胴部上半部に張りをもち，頸部は三条の接合痕を残し口縁部はゆるやかに外反する。また口唇部には連続した押捺が加えられ小波状を呈する。胴部外面はハケ目痕を残す調整が施され，内面は全体にナデが行われる。胎土には砂が含まれ焼成は良好で，色調は黒褐色となる。

006号住居跡（第20～22図）

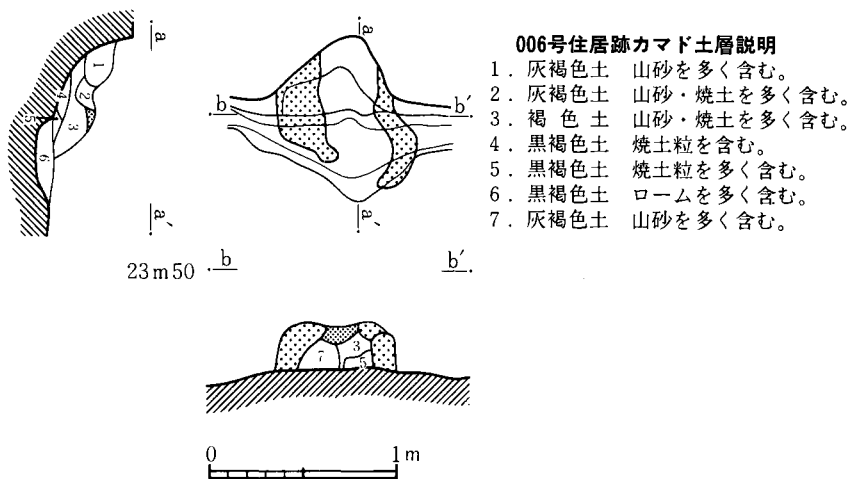
005号住居跡の西側で，M14とM15の二条の溝状遺構の中間に位置する。本跡のすぐ北側にはD10号跡が存在する。主軸方向はN-17°-Eに傾く。平面形は隅が丸まる方形を呈し，四つの壁には少しずつ歪みが生じていて直線的には結ばれていない。それぞれの壁の長さは，北壁3.10m，東壁3.40m，南壁3.70m，西壁3.44mとなる。検出面から床面までは40cmの掘り込みがあり，壁はゆるやかに傾斜して立ち上がる。壁自体の遺存は良好である。壁下には壁溝が全周してめぐらされている。幅は広いところで20cm，狭い部分では10cm程で，深さは大体4～6cmである。床面はほぼ平坦な様子を保っているがP₄の北側，北西のコーナー寄りには僅かであるが他の場所よりは低くなっている。床面には6ヶ所にピットが検出された。P₁は長径45cm，短径38cmの不整楕円形の掘り込み面から深さは33cmを測る。P₂～P₄は径15～30cmの円形に穿たれ，深さはP₂-18cm，P₃-15cm，P₄-13cmである。P₅はP₂とP₃を結んだ中間と南壁の間に発見され，深さは24cmである。P₆は北東のコーナー部分にあり，長径35cm，短径28cmの楕円形の掘り込み平面形をもち，深さは最も深い部分で21cmを測る。以上のようなピットのうちP₁～P₄は一応柱穴と考えられるが，P₁が33cmのほかは20cmにも達しない小ピットである。上屋構造を支えきれだけの柱が据えられていたピットと断定してよいものか，その配置からしても問題があるところである。またP₆についてもおそらくは貯蔵穴にはならないと考えられ，その性格は不明といわざるを得ない。P₅は入口に伴うピットと断定できるであろう。

カマドは北壁の中央から僅かに東に寄った位置に構築されている。壁への掘り込みは35cmを測り，煙道部は約43°の傾斜でゆるやかに立ち上がっている。天井部はすでに崩落し全くその様子をとどめず，両袖のみが遺存する。袖の幅は中央で約40cmを測る。

遺構の残り方が良好であった割には出土遺物は僅かである。図示可能となった遺物は5点の

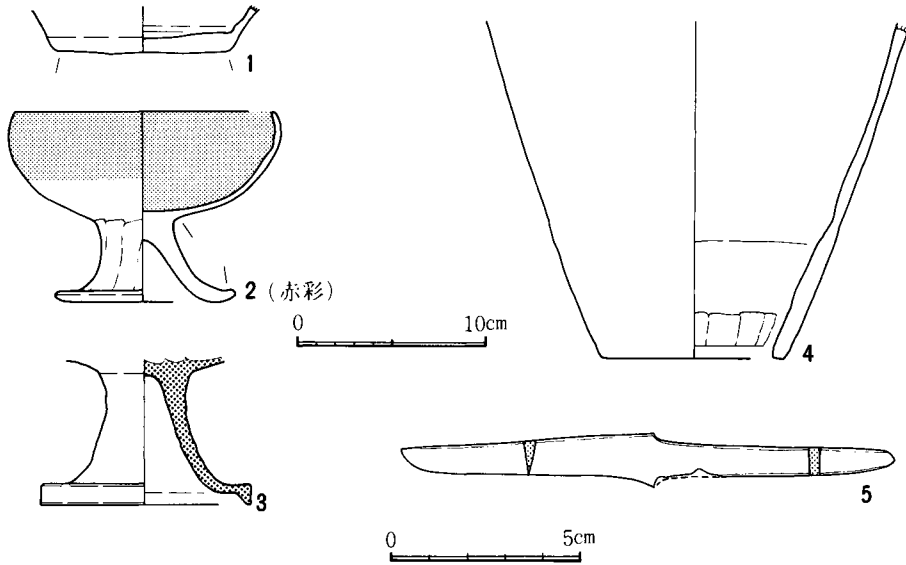


第20図 006号住居跡実測図 (1/80)



第21図 006号住居跡カマド実測図 (1/40)

みで、それも出土状況とそれぞれの遺物と考え合わせると、必ずしもすべてが住居跡に伴うというわけではない。一応出土した遺物ということで簡単にふれておくことにする。1は須恵質土師器の坏底部である。2は完形で出土した高坏で、口径13.4cm、器高9.2cm、底径10.2cmを測



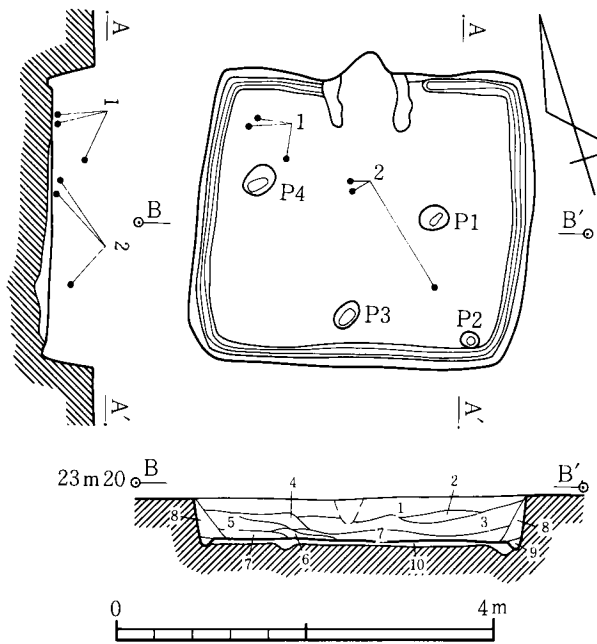
第22図 006号住居跡出土遺物実測図（1～4・ $\frac{1}{4}$ 、5・ $\frac{1}{2}$ ）

る。坏部は全体に内彎する形となり、脚部から裾部にかけては「ハ」の字状に開きながら下降し、その端部は若干めくれ上がって終わる。坏部外面体部上半及び内面には赤彩が施される。3は須恵器の高坏の脚部である。裾部は大きく外側に開き端部は下に折り返された形となる。焼成は良好。4は土師器の甑で胴部下半が出土した。底径9.4cmを測る。調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は全体にナデである。胴部は直線的に開きながら立ち上がる。5は両関の刀子である。

007号住居跡（第23～25図）

003号住居跡の北西3mの位置に検出され、調査区内に全体を確認することができた。主軸方向はN-20°-Eである。平面形はいわゆる隅丸方形を呈し、各壁は僅かずつ張りをもつ。壁下にはカマドの右側を除いて壁溝がめぐっている。幅は15cm前後で比較的ばらつきがなく深さは3～6cmである。壁の残り方は良好で、僅かに傾斜して直線的に立ち上がる。規模は南北方向に3.15mを測り、東西方向が3.55mとなり、主軸に直交する方向が長辺となっている。床面は荒掘りの上に5cm前後の貼り床を施して水平に構築される。ピットは4カ所に発見された。深さはP₁-20cm、P₃-13cm、P₄-22cmでP₂は大変浅い。P₃は入口に伴うピットと考えられるが、他の3カ所については積極的に性格づけできる根拠が見当たらない。

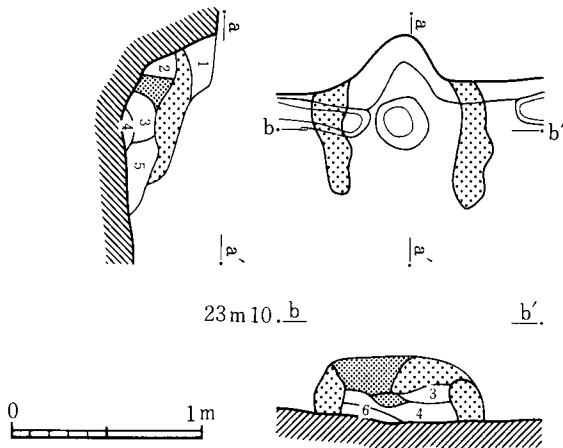
カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。天井部はすでに崩落し全く遺存しない。袖部は壁から垂直に近い形で貼りつけられている。焚口の幅は55cmで、中央部には29cm×26cmで深さ3cmの火床が形成されている。煙道部は壁へ約27cm掘り込まれ、途中で段がついて65°の傾斜で



007号住居跡土層説明

1. 褐色土
2. 褐色土
3. 黒褐色土
4. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
5. 褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
7. 褐色土 ローム粒を多く含む。
8. 褐色土 ローム塊を多く含む。
9. 褐色土 ローム塊を多く含む。
10. 貼床 ローム塊を多く含む。

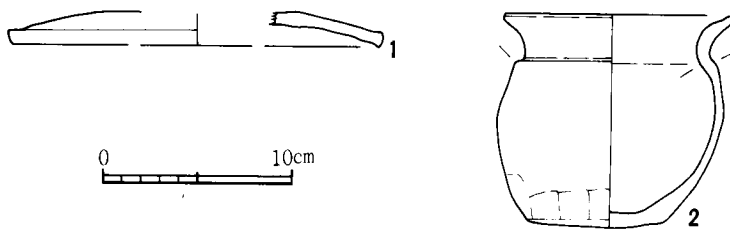
第23図 007号住居跡実測図 (1/40)



007号住居跡カマド土層説明

1. 灰褐色土 焼土・山砂を多く含む。
2. 褐色土 ローム塊を多く含む。
3. 褐色土 山砂を多く含む。
4. 灰褐色土 山砂を多く含む。
5. 灰褐色土 焼土を多く含む。
6. 褐色土

第24図 007号住居跡カマド実測図 (1/40)



第25図 007号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

立ち上がる。

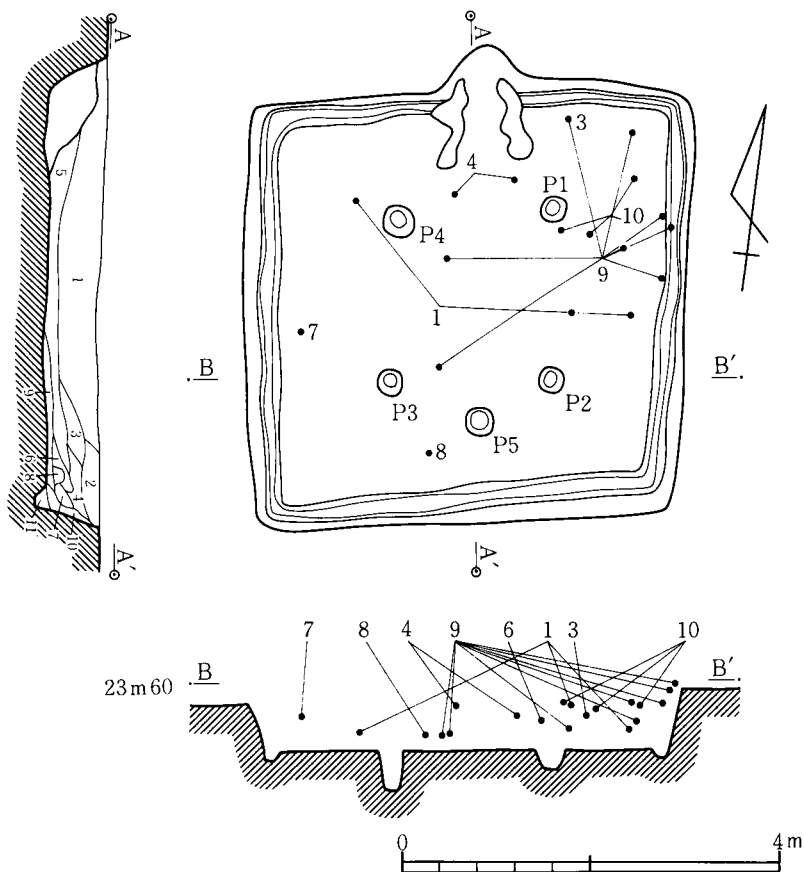
遺物は極めて少なく、実測に堪え得る遺物は土器が2点のみである。1は土師器の蓋である。遺存部は天井部以外の3分の1程である。全体にナデによる調整が認められる。胎土は砂質で焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。2は小型の甕でほぼ完形に復元された。口径は12.1cm、器高11.1cm、底径7.0cmを測る。安定した底部から胴部に張りをもち、肩部に稜のつく段を作り出す。口縁部はその段の部分から外反しながら開く。口唇部内面には弱い凹線がめぐっている。胴部外面には横方向のヘラケズリが施され、内面は全体にナデ調整される。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土は砂質の感を受けるが、比較的密な状態を示し焼成は普通となっている。色調は暗褐色を呈する。

008号住居跡（第26～28図）

004号住居跡から北へ10mのところ、038号住居跡と接して位置している。主軸方向はN-8°-Wでほんの僅か西に偏している。遺構の規模は主軸と平行する東壁が4.42m、西壁が4.50mで、直交方向に4.70mを測る。各コーナー部に若干丸味をもつが、壁は略直線的に結ばれている。検出面からの壁高は東壁側で約64cmを測り、西壁側では約50cmを残している。壁の遺存は良好で、北壁と東壁はほぼ垂直な立ち上がり方を示し、南壁から西壁にかけては途中から外へ開くように傾斜して立ち上がる。壁下には壁溝が全周してめぐらされている。幅は25cm程となるところが多く深さは8cm前後を測る。ピットは合計5ヶ所に検出された。P₁～P₄は支柱穴になるだろう。掘り込み面での平面形は径30cm内外の円形で底面に向かうにしたがって幾分すばまっていく。それぞれの深さは、P₁-27cm、P₂-20cm、P₃-40cm、P₄-49cmである。柱穴の配置はほぼ対角線上であるが、中央に寄るような形となっている。柱間間隔はP₁-P₂ 177cm、P₂-P₃ 170cm、P₄-P₁ 164cmである。P₅は南壁から約76cm北に穿たれており、入口に伴うピットと判断される。床面は大きな凹凸は認められないが、中央からやや南で多少の窪みを認める。

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。天井部は遺存せず、壁への掘り込みが開始されている位置に貼りつけられた両袖が「ハ」の字形に開いている。焚口の幅は約55cmを測り中央部で幅を狭めている。火床部は45cm×32cmの楕円形に形成される。煙道部は壁から45cm掘り込まれ、約57°の傾斜で立ち上がる。

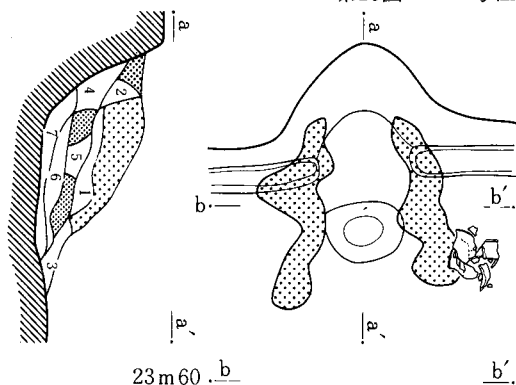
遺物は土師器、須恵器、土製品が出土している。1・2は土師器の坏である。1は完全な平底とまではならないが底面が認められ、体部と口縁部との境には割とはっきりした稜が形作られる。口縁部は稜部から内傾して立ち上がる。口縁部は稜部から内傾して立ち上がる。2は丸底で体部は大きく開いて口縁部との境に弱い稜を設ける。口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる。3～5は須恵器の坏身である。いずれも体部はゆるやかに内彎し、3・5は張り出



008号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|------------------|----------|---------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 7. 黒褐色土 | |
| 2. 暗褐色土 | 1よりローム粒を多く含む。 | 8. 褐色土 | ロームブロックを多く含む。 |
| 3. 褐色土 | | 9. 黄褐色土 | 焼土粒, 炭化物片を含み, 堆積は密な状態を示す。 |
| 4. 褐色土 | | 10. 黄褐色土 | ローム粒, 焼土粒を含む。 |
| 5. 褐色土 | 堆積は密な状態でローム粒を含む。 | 11. 黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 6. 黄褐色土 | ローム粒を多く含む。 | | |

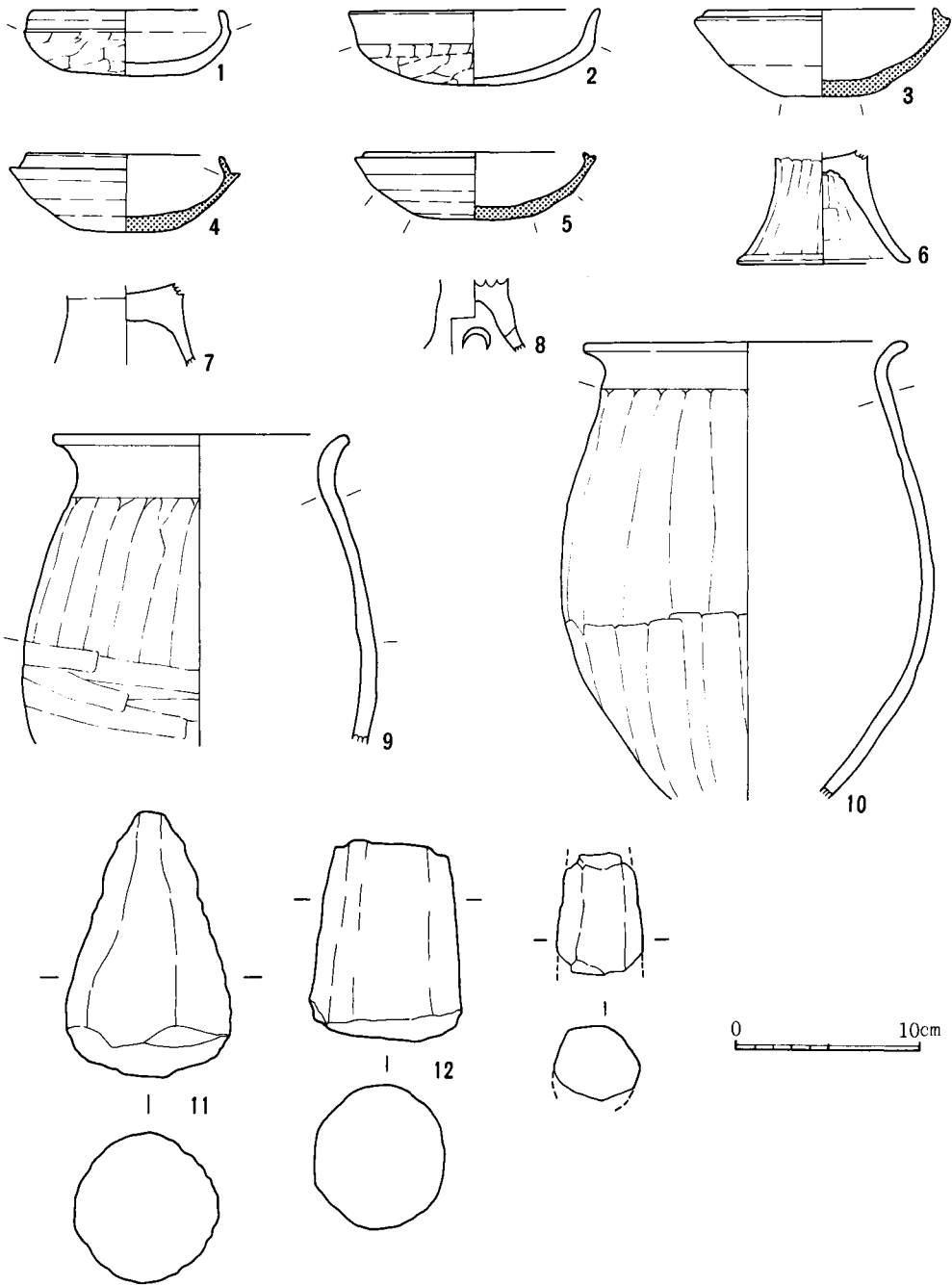
第26図 008号住居跡実測図 (1/40)



008号住居跡カマド土層説明

- | | |
|---------|----------------|
| 1. 赤褐色土 | 焼土を多く, 灰を少し含む。 |
| 2. 褐色土 | 焼土・ローム粒を含む。 |
| 3. 褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4. 褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 5. 赤褐色土 | 焼土を多く含む。 |
| 6. 灰褐色土 | 灰・焼土を多く含む。 |
| 7. 褐色土 | ローム粒主体。 |

第27図 008号住居跡カマド実測図 (1/40)



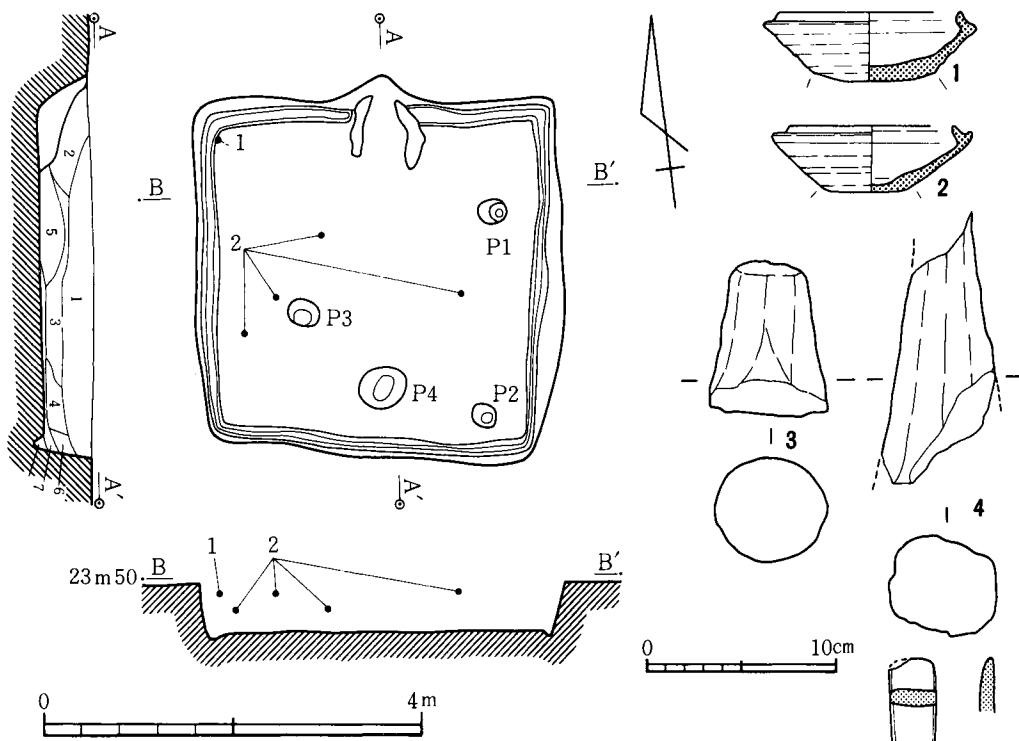
第28図 008号住居跡出土遺物実測図(¼)

した受部から口縁部を短く内傾させて立ち上がらせる。4は3・5と比して口縁部が若干長めとなる。3点とも焼成は普通となっている。6～8は土師器の高坏脚部である。6は坏部との接合部から「ハ」の字形に開きながら下降し、裾部は開かず終わる。外面は縦方向のヘラケズリが施される。7・8は脚部の上半部のみで詳細は明らかでない。8には円形の透か

し孔が穿たれている。9・10は甕である。胴部中位に張りをもち、長胴の形を呈し口縁部は外反して開く。調整は外面胴部がヘラケズリで内面がナデである。両方とも胎土に砂が多く含まれるが焼成は良好である。以上図示した遺物は床面から15cm浮いた位置から覆土の上層にかけて出土したものである。11~13は土製支脚である。

009号住居跡 (第29・30図)

008号住居跡の南西5mでM15号跡の北側に位置する。主軸方向はN-6°-Eである。平面形は略方形であるが各壁長に多少のばらつきがあり歪んだ形を呈している。壁の規模は主軸と平行する東壁が3.75m、西壁が3.52mで、北壁3.80m、南壁3.44mとなっている。検出面から床面までは約50cmを測る。壁の遺存は良好で、東壁の南側がやや傾斜しながら立ち上がるほかは垂

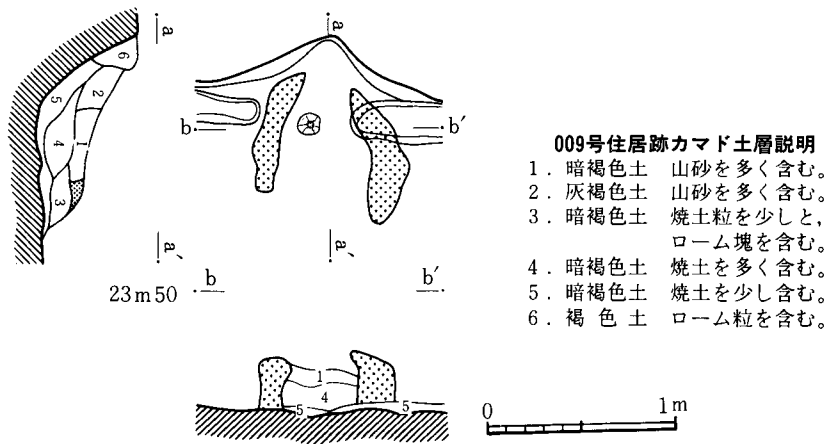


第29図 009号住居跡実測図 (1/50)・出土遺物実測図 (1~4・1/4, 5・1/2)

009号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|-----------------------------|---------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ロームブロックを多く含み、ローム粒、焼土粒を若干含む。 | 4. 褐色土 | ローム粒、ロームブロックを含む。 |
| 2. 褐色土 | ローム粒が多く含まれ、また焼土粒を僅かに含む。 | 5. 褐色土 | ロームブロック、山砂、粘土のブロックを多く含む。 |
| 3. 黒褐色土 | ローム粒を多く含み、焼土粒、炭化粒も若干含まれる。 | 6. 黒色土 | ロームブロックを僅かに含む。 |
| | | 7. 茶褐色土 | ローム粒、焼土粒を僅かに含む。 |
| | | 8. 黒褐色土 | ローム粒を多く含む。 |





第30図 009号住居跡カマド実測図 (1/40)

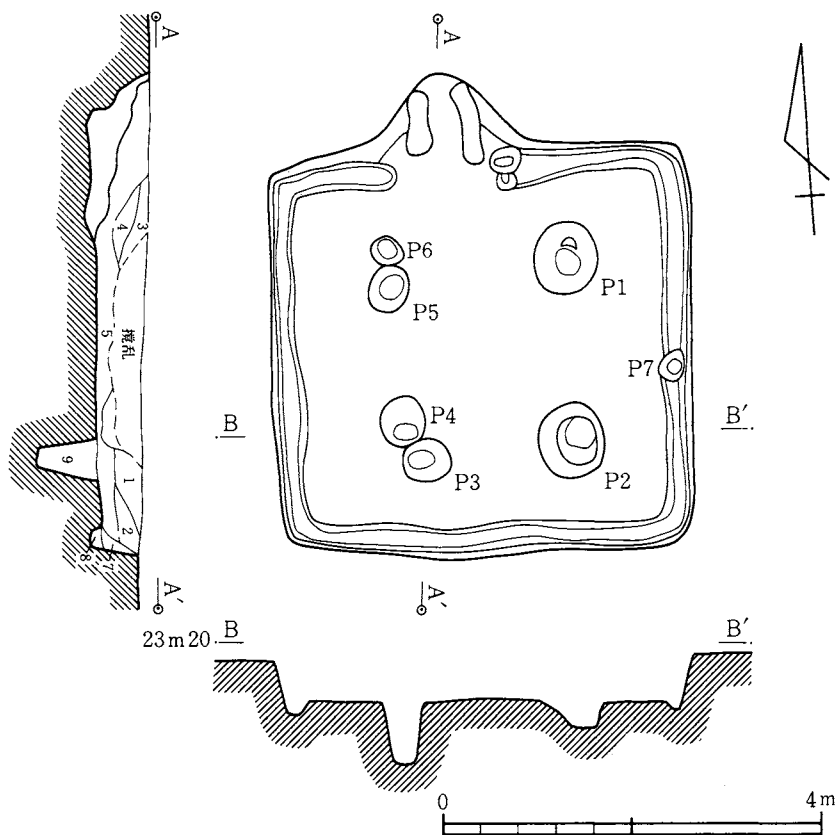
直に近い角度で立ち上がっている。壁下には壁溝が全周している。幅は広い部分でも18cm程度で概して狭く、特に南東コーナー付近は10cmもない。深さも僅かな窪み程度で深くとも5cm前後である。床面は平坦に構築されるが、中央部分が壁寄りより低くなる傾向が認められる。他の目につく凹凸は観察されない。ピットは4ヶ所に発見された。P₄が入口に伴うピットと考えられるほかは性格が判然としない。それぞれの床面からの深さは、P₁-11cm、P₂-24cm、P₃-25cm、P₄-6cmである。

カマドは北壁の中央に設けられている。両袖が残るのみで天井部は遺存しない。焚口の幅は50cmを測る。煙道部は壁へ30cm掘り込んで作られ、54°の角度で立ち上がる。中央部から土製支脚1点が正位で出土している。

出土遺物は極めて少なく、実測可能である土器は2点のみである。それも2点とも覆土の上層から出土したもので、本跡に直接伴うか微妙なところである。1は完形で出土した須恵器の坏身である。口径9.4cm、器高3.5cmである。体部はロクロ目が強く、外に張り出す受部から口縁部は内傾して立ち上がる。器厚は全体に厚く焼成は良好となっている。色調は暗青灰色を呈す。2も同様に須恵器の坏身である。底部はヘラケズリで整えられ、体部は直線的に開いて受部の張り出す稜に至る。口縁部は短く直線的に内傾して立ち上がり、口唇部は若干尖り気味に終わる。焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。3・4は土製支脚である。5は鉋かと考えられる。

010号住居跡 (第31~34図)

009号住居跡から南西へ13mのところ、I 3グリッドの調査区域に含まれる部分で検出された。011号住居跡がすぐ北側に位置しているが、他の遺構との切り合い関係はない。主軸方向はN-2°-Eである。平面形は方形で、東壁4.26m、南壁4.40mを測る。壁の遺存は良好で、壁下



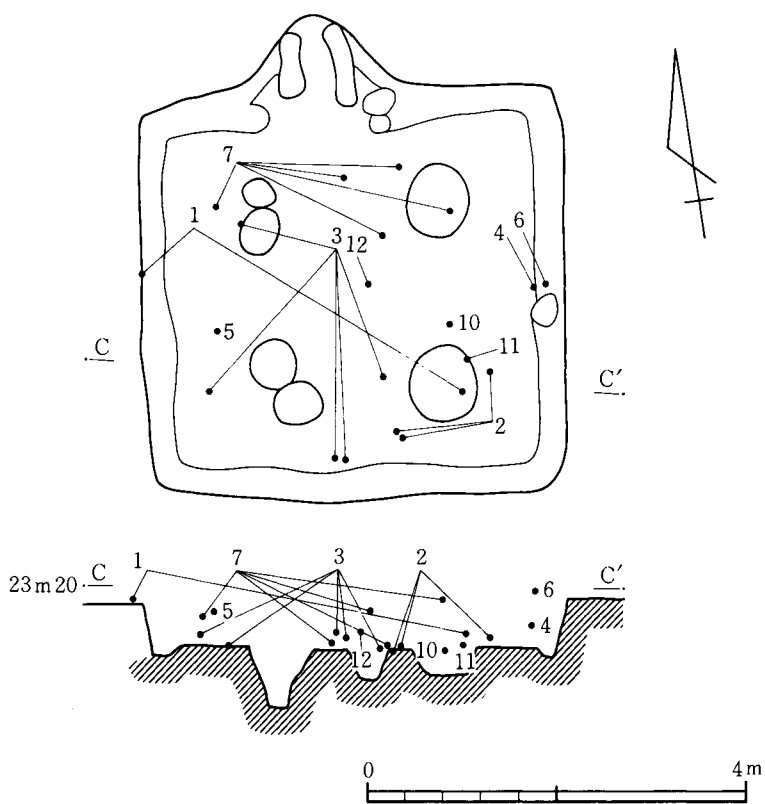
010号住居跡土層説明

- | | | | |
|--------|----------------|---------|-----------------|
| 1. 褐色土 | ローム粒を僅かに含む。 | 5. 黄褐色土 | ローム粒と僅かに焼土粒を含む。 |
| 2. 褐色土 | ローム粒を1層より多く含む。 | 6. 黒褐色土 | ローム粒を僅かに含む。 |
| 3. 褐色土 | ローム粒、焼土粒を多く含む。 | 7. 黒褐色土 | ローム粒を僅かに含む。 |
| 4. 褐色土 | 小ロームブロックを含む。 | 8. 黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |

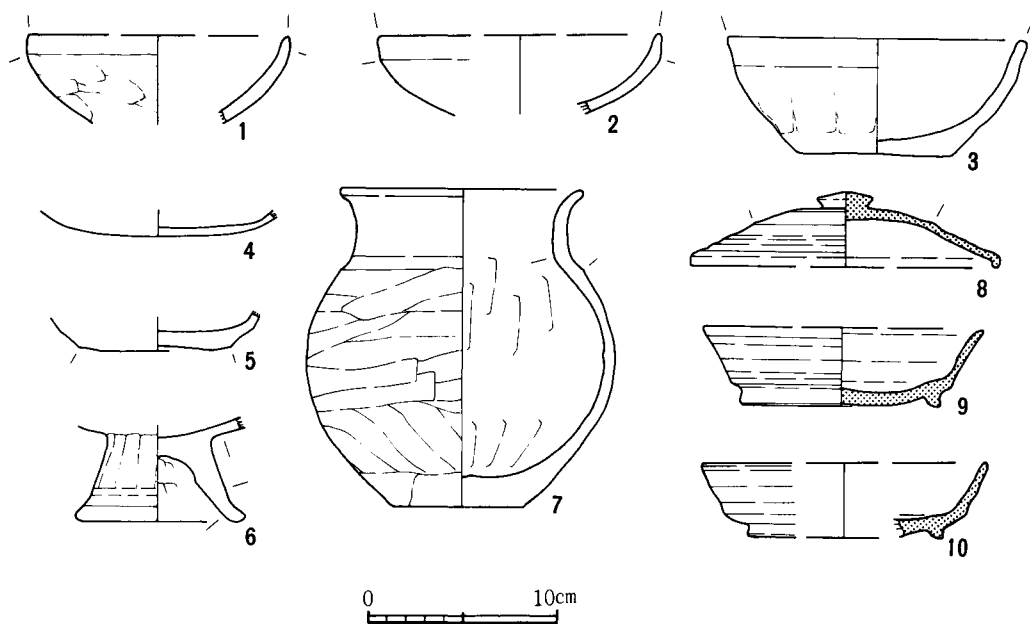
第31図 010号住居跡実測図 (1/80)

には壁溝が全周する。幅は20~25cmで深さは7cm前後である。壁は北壁の左側を除いては垂直に近い立ち上がり方を示す。東壁下の中程にP₇が認められるが、これは攪乱と考えられるもので壁柱穴にはならないであろう。壁高は約50cmを測り、床面は中央部が僅かに低くなる傾向が認められるものの大きな凹凸はない。柱穴と考えられるピットはP₁~P₆である。P₁・P₂には途中に段が認められ、対になっているP₃・P₄、P₅・P₆には新旧関係があるので柱の据え替えが行なわれたと判断される。P₃とP₄ではP₄の方が古く、またP₅・P₆ではP₅が古い。各ピットの深さはP₁-57cm、P₂-24cm、P₃-63cm、P₄-59cm、P₅-45cm、P₆-43cmである。

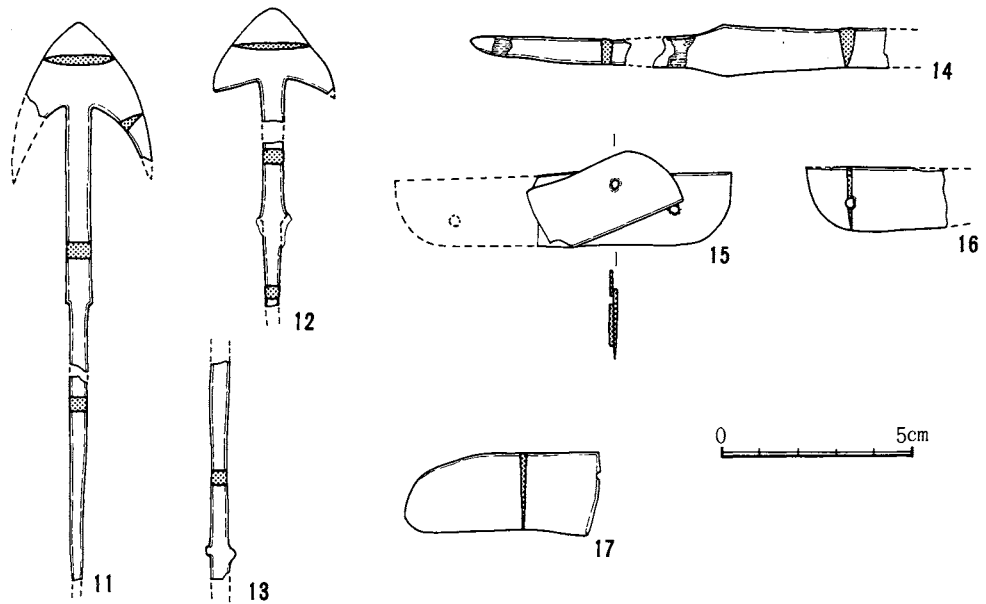
カマドは北壁に設けられており、中央からやや西に寄ったところにある。遺存は不良で袖部が煙道に近い側にかろうじて残るのみである。壁への掘り込みは約70cmを測り、煙道部は段がついて傾斜して立ち上がる。カマドに関係するのかわ断定はできないが右袖に接して小ピット2個が穿たれている。



第32図 010号住居跡遺物出土状況図(1/80)



第33図 010号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



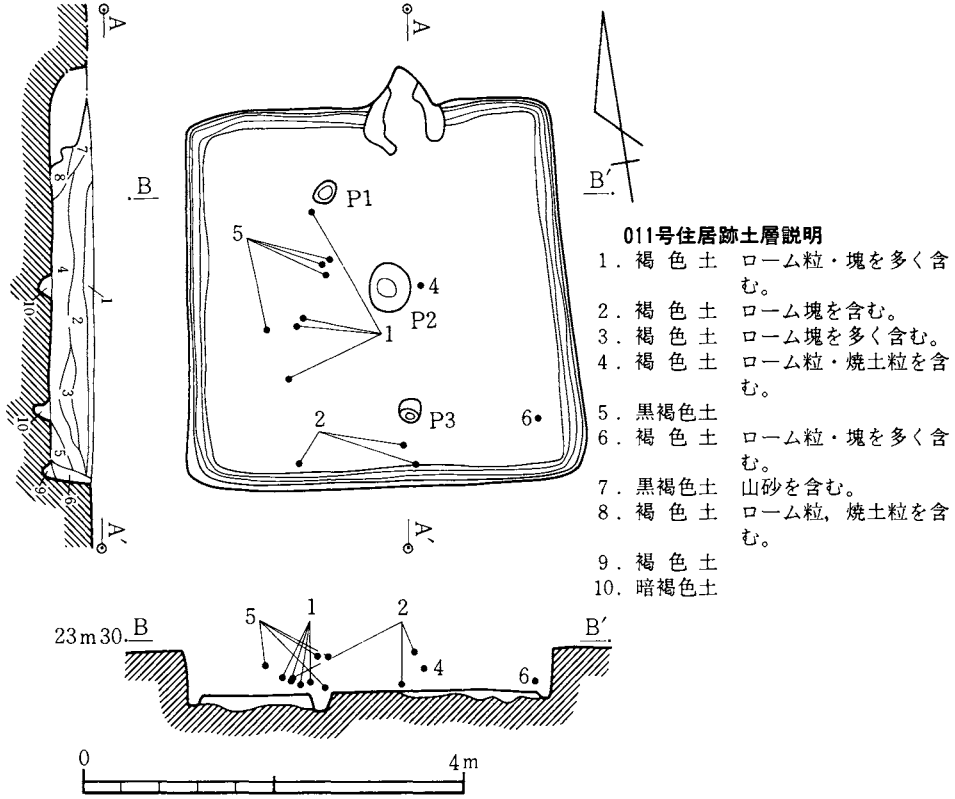
第34図 010号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

遺物は土師器、須恵器の土器類および鉄器が出土している。1・2は土師器の坏である。1は半球状の体部から口縁部は尖り気味に立ち上がる。2は体部と口縁部との境に弱い稜を設け、口縁部は直立する。3は平底をもつ鉢である。体部中位はゆるやかに内彎し、口縁部は僅かに外反する。4・5は坏の底部である。5の底面は回転ヘラケズリで調整されている。6は高坏の脚部で、直線状に開きながら下降し裾部を短く外反させる。7は安定した底部から胴部中位に張りをもつ甕である。肩部に弱い稜がめぐり口縁部は一度直立してから上位で外反する。胴部外面はヘラケズリ、内面はナデ。口縁部は外内面ともヨコナデが施される。8は須恵器の蓋である。天井部は回転ヘラケズリによって僅かな平坦部が形作られ、擬宝珠形のつまみがつく。端部は下に折り曲げられて終わるがかえりはない。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。9・10は高台のついた坏である。9は高台から突出するように曲面となる底部から、体部は直線的に開きながら立ち上がる。焼成は堅緻で色調は濃い青灰色である。10も底部が高台より突出するような形になると考えられ、体部は斜めに直線的に立ち上がる。底部回転ヘラケズリ。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は濃い青灰色を呈する。

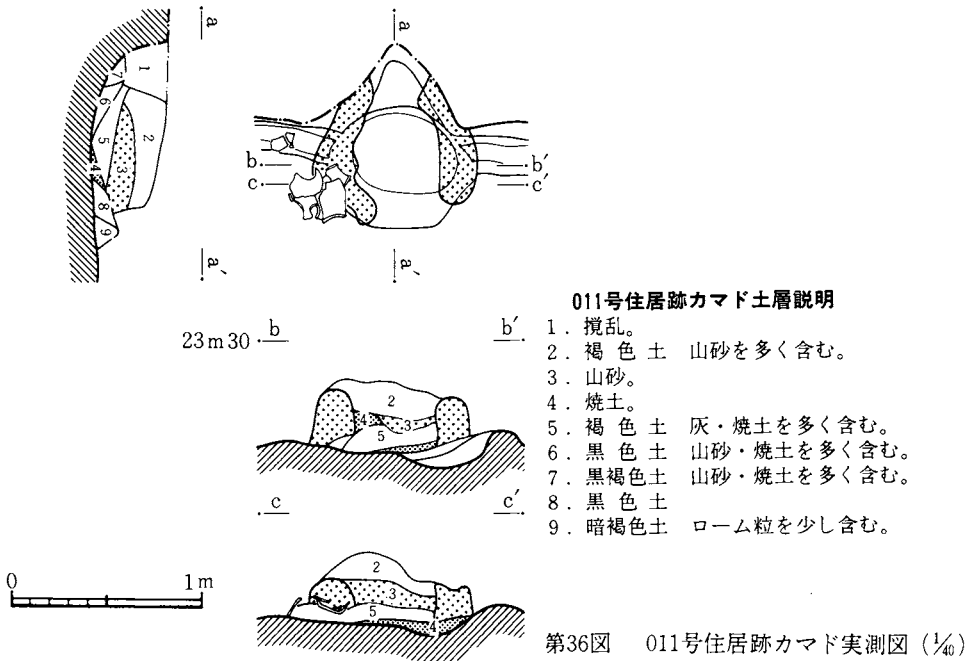
11～17は全て鉄製品である。11は腸挟り三角形式で逆刺はややふくらみを持っている。12はいわゆる飛燕式と呼ばれるものに相当すると思われる。13は鉄片である。14は刀子である。茎の部分には木質が付着遺存している。15・16は手鎌である。15は半身が折れて錆着している。16には研ぎ減りが見られるが、15にはあまり研ぎ減りが見られない。17は鎌の破片と考えられる。この他に畿内産土師器が出土しているが、個々の説明は、後にまとめて述べる。

011号住居跡 (第35~37図)

010号住居跡のすぐ北側に位置し、他の遺構との重複関係はもたない。主軸方向はN-7°-Eで



第35図 011号住居跡実測図 (1/60)

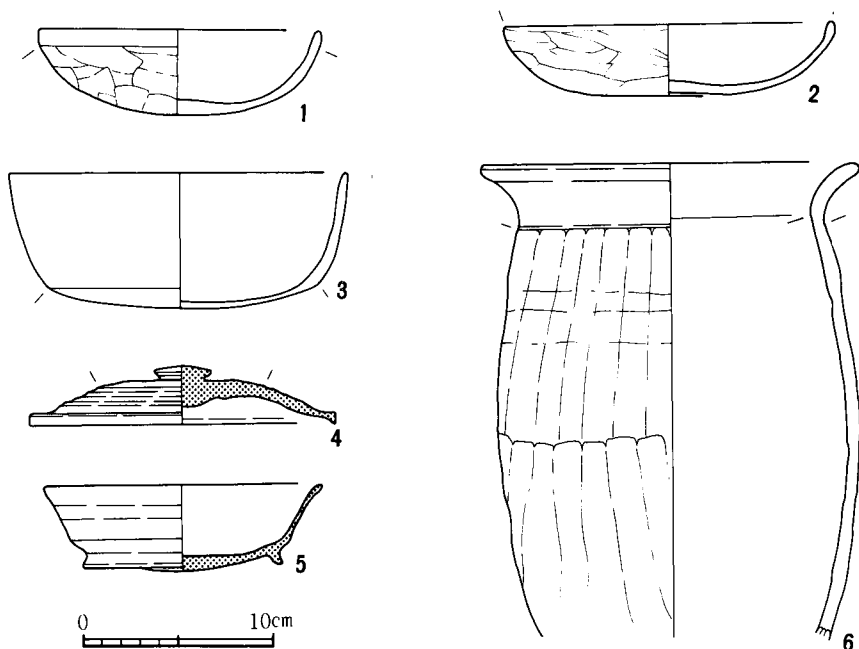


第36図 011号住居跡カマド実測図 (1/40)

ある。四壁の規模は北壁3.84m、東壁4.0m、南壁4.24m、西壁3.92mである。北壁に比して南壁が若干長くなるため、平面形は隅の丸くなるような台形状を呈する。壁下には壁溝が全周して検出されている。幅は15cmで深さは3～9cmである。検出面からの深さは約40cmを測り、壁の遺存は良好となっている。床面は全体として平坦に構築されている。ピットは3ヵ所に検出された。P₃は入口に伴うピットと考えられるが、P₁・P₂についてはその性格がはっきりしない。それぞれの床面からの深さはP₁-10cm、P₂-14cm、P₃-19cmとなっている。

カマドは北壁の中央から僅かに北東コーナー側に寄った位置に設けられている。天井部は崩落し、袖部のみが残る。焚口の幅は35cmを測り、袖は壁から40～50cm貼付けられる。煙道部は攪乱が入るところがあり一部分不明であるが、ゆるやかに傾斜して立ち上がるようである。

遺物は土師器・須恵器の土器類が出土している。出土位置は床面からやや浮いたところである。1～3は土師器の坏である。1は丸底の底部から体部と口縁部は内彎して立ち上がる。完形に復元され、口径14.6cm、器高4.5cmを測る。体部外面は横方向のヘラケズリが施され、内面は全体にミガキが加えられる。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。2は扁平な底部から体部が内彎しながら立ち上がり、口縁端部が短く直立して開く。調整については1とほぼ同様である。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。3は口径に比して底径も大きく、体部は下端で内彎してそこから直線的に立ち上がる。底部は完全な平底とはならず、ゆるやかな曲面を呈する。調整は外面体部がヘラケズリの後ミガキが加えられ、内面は全体にミガキが



第37図 011号住居跡出土遺物実測図(1/4)

施されている。口径17.6cm、器高7.3cm、底径13.9cmである。4は須恵器の蓋である。天井部は回転ヘラケズリによって調整され擬宝珠状のつまみがつく。身受け部分にはかえりがなく、端部は短く直角に折れ曲がって尖り気味となる。焼成は堅緻で色調は青灰色を呈する。5は高台付の須恵器坏である。底部はゆるやかな丸底を呈し、その中央部は高台より突出する。体部は下端に弱い稜を設けて、そこから直線的に開きながら立ち上がり、口縁部が僅かに外反して丸く終わる。体部の器厚は薄く作られる。ほぼ完形で口径14.6cm、器高4.5cm、底径10.5cmを測る。焼成は堅緻で色調は黒茶褐色を呈する。6はいわゆる長胴の甕である。胴部の張りは全体に弱く、頸部との境に弱い稜が形作られる。口縁部はそこから器厚を肥厚させ外反して開く。外面胴部の調整は縦方向のヘラケズリで内面はナデが施される。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土は砂質で、焼成は普通となっている。口径19.8cmを測る。

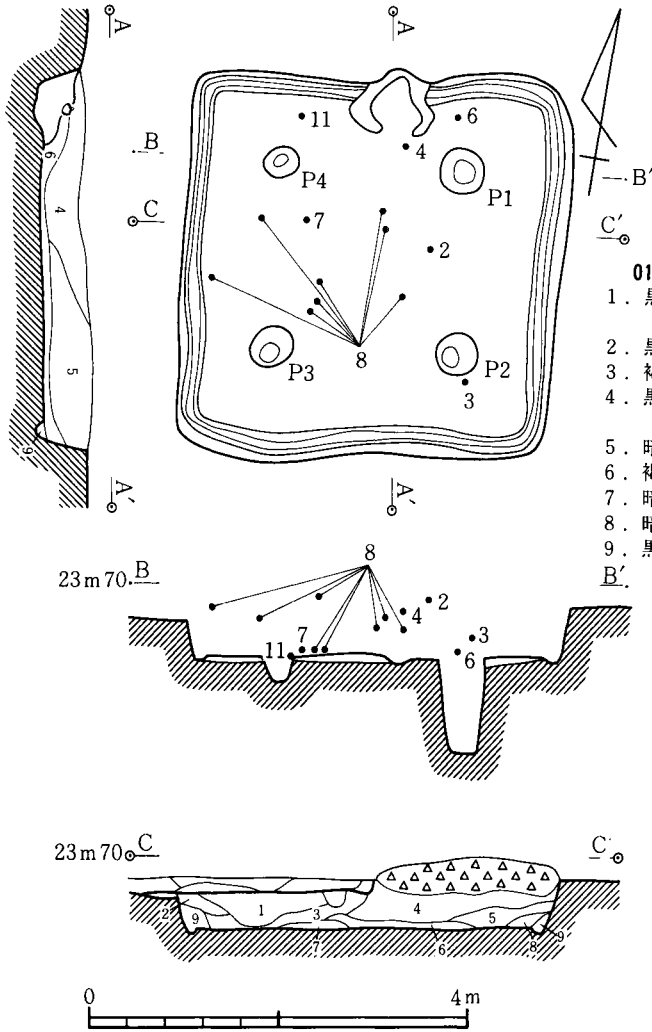
012号住居跡（第38～41図）

009号住居跡の北8mのところに位置し、013号住居跡と重複関係にある。013号住居跡の東半分は本跡の上に貼床を施して床面を構築しているため、本跡が013号住居跡より古い遺構であることは明らかである。主軸方向はN-5°-Wを向く。平面形は四隅に丸味をもつ方形で、四壁も部分的に張りが認められ、かならずしも直線的には伸びていない。壁の規模は北壁4.06m、東壁4.00m、南壁3.92m、西壁4.08mをそれぞれ測る。壁高は約50cmを測り、垂直に近い角度で立ち上がる。また壁下には壁溝がほぼ全周する。その幅は15～20cmで、深さは3～5cm程度と浅い。床面は貼床を施して設けられ、中央部分が壁際より僅かに盛り上がっている傾向が認められる。柱穴は対角線上に4ヶ所に検出された。P₁-100cm、P₂-96cm、P₃-84cm、P₄-27cmの深さを測る。P₁～P₃は割と深めであるが、P₄はそれら3ヶ所に比して大変浅く穿たれている。各柱間隔は、P₁-P₂ 196cm、P₂-P₃ 194cm、P₃-P₄ 200cm、P₄-P₁ 194cmで比較的整った配置となっている。

カマドは北壁の中央に設けられている。天井部は崩落しており、それに伴って完形の遺物が火袋部に落ちたような状態で出土している。焚口の幅は30cmで、火袋部で50cmの幅を有する。煙道部は壁へ15cm掘り込んで作られている。

本跡からは割と多くの遺物が出土しているが、人工遺物のほかに、検出面でアサリ・ハマグリを中心とする貝ブロックが2ヶ所に検出された。1ヶ所はカマドの南東側で、ちょうどP₁の上に当たり東西に180cm、南北に120cm、厚さ約40cmに堆積している。もう1ヶ所は南東コーナー付近で径80cmの範井に認められた。両ブロックとも覆土の上層で検出されたもので、本跡埋没後の所産である。

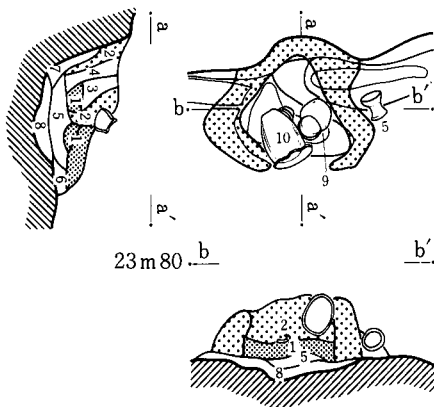
土器類は土師器、須恵器が出土している。カマド内から9・10の甕が出土しているほかは特に集中して出土する傾向が認められない。1は土師器の坏である。底部は平坦に作られ、体部は内彎しながら立ち上がる。体部外面は横方向のヘラケズリで整えられ、口縁部と体部内面に



012号住居跡土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒・塊を多く含む。
2. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
3. 褐色土 ローム塊を多く含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を少し含む。
5. 暗褐色土 ローム塊を含む。
6. 褐色土 ローム粒を多く含む。
7. 暗褐色土 ローム粒を含む。
8. 暗褐色土 ローム粒を含む。
9. 黒褐色土 ローム塊を含む。

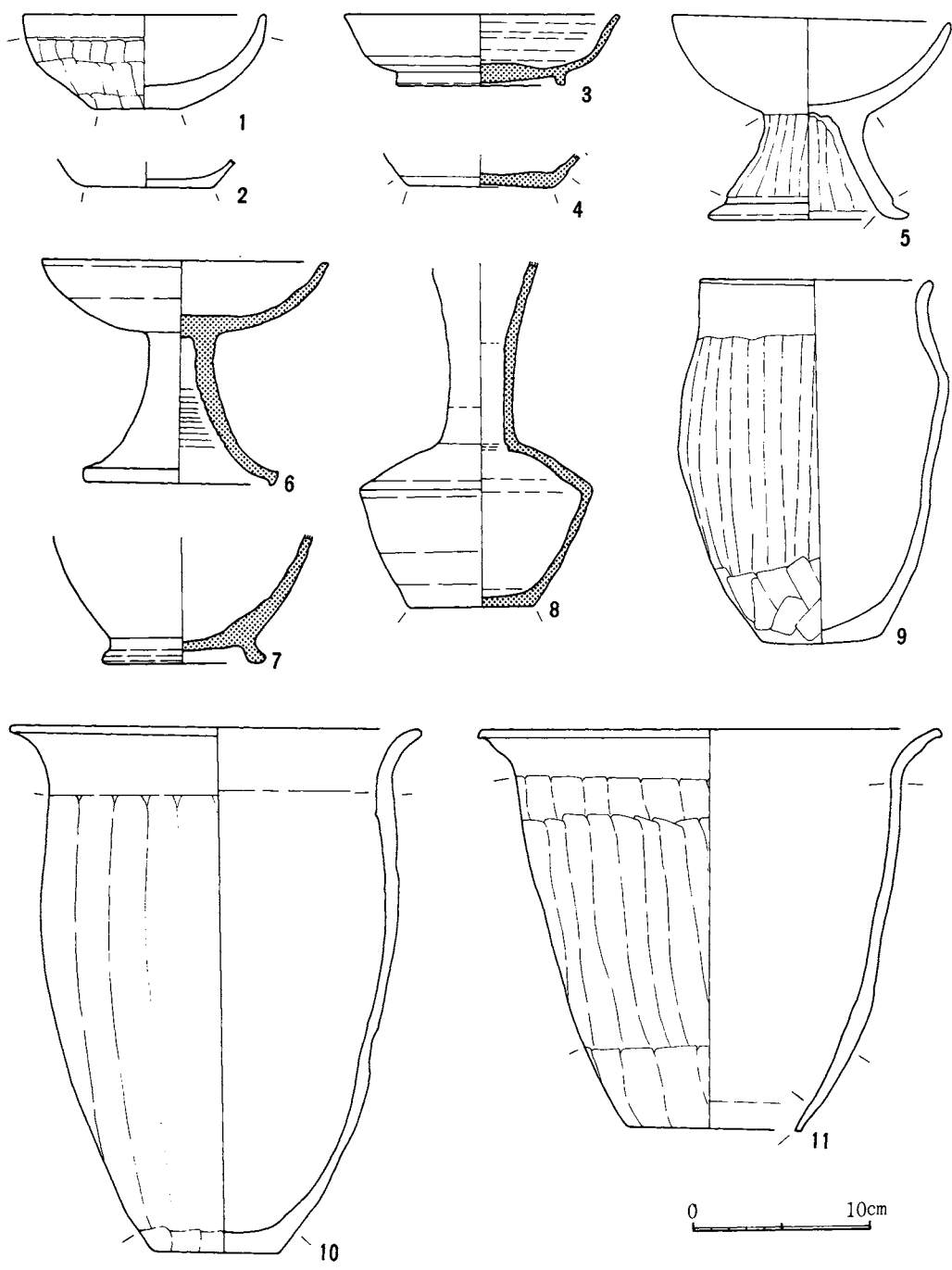
第38図 012号住居跡実測図 (1/60)



012号住居跡カマド土層説明

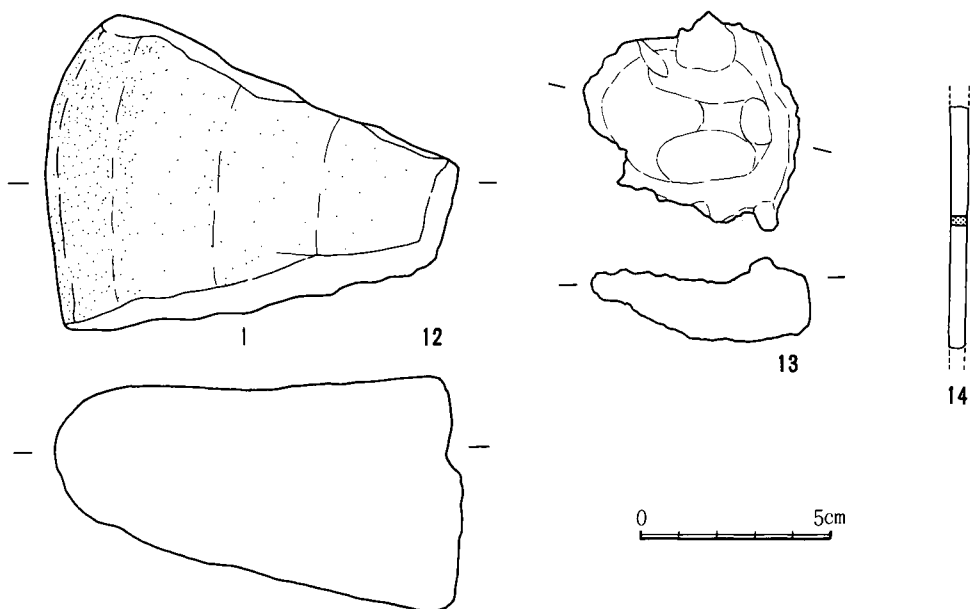
1. 焼土。
2. 山砂。
3. 暗褐色土 山砂を多く含む。
4. 暗褐色土 山砂・焼土粒・ローム粒を多く含む。
5. 褐色土 灰・山砂・炭化物粒・焼土粒を少し含む。
6. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少し含む。
7. 黒褐色土 ローム塊・焼土粒を含む。
8. 暗褐色土 6層に準ずる。

第39図 012号住居跡カマド実測図 (1/60)



第40図 012号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)

はナデが施される。完形で口径13.4cm，器高5.3cm，底径4.4cm。焼成は普通で色調は暗褐色を呈する。2は坏の底部で内面は黒色処理が施される。3は須恵器の高台付坏である。底部中央は突出する形をとるが高台部からは出ない。体部は下端に丸味を有し中位からゆるやかに開く。



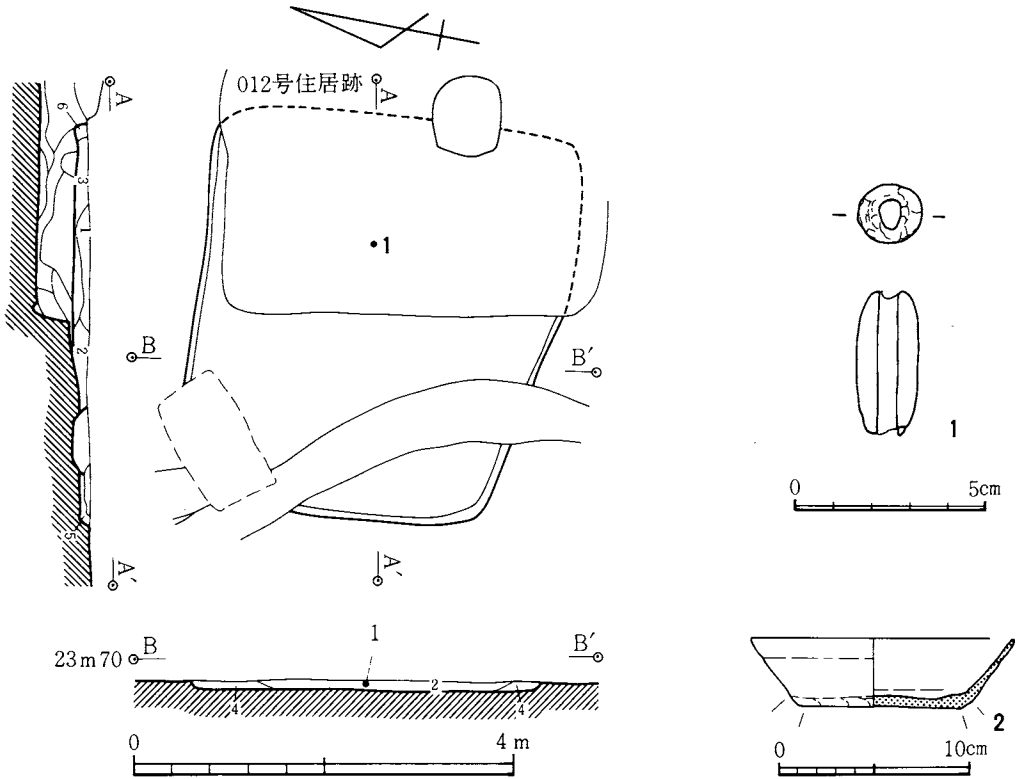
第41図 012号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。4の底部はヘラケズリで調整される。5は土師器の高坏である。坏部は半球状となり、脚部は僅かに開きながら下降し、裾部は脚部との境に段を設けて短く開く。完形で口径15.6cm、器高11.4cm、底径11.2cmを測る。6は須恵器の高坏である。坏部は大きく開きながら内彎し、脚部は中位から徐々に外に開きながら下降し、裾部は端部が下に折り曲げられた形となる。色調は暗青灰褐色を呈する。7は瓶の底部で「ハ」の字形に開く高台が付く。8は長頸瓶である。胴部は安定した底部から傾斜しながら直線的に立ち上がり、上半部で「く」の字形に急激に内傾する。頸部は真直に近い形で長く立ち上がる。口縁部を欠損する。9・10は甕である。カマド内からほぼ完形で出土した。9は上半部に弱い張りを有するが、全体としては寸胴な形となり口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部外面の調整は主に縦方向のヘラケズリを施しその後ヘラナデを加えている。口縁部及び胴部の内面はナデである。口径13.3cm、器高20.5cm、底径7.0cm。胎土は精選されており焼成は良好である。10は胴部上半に弱い張りを付け、口縁部はゆるやかに外反して開く。胴部外面は縦方向にヘラケズリ調整。口径23.2cm、器高29.5cm、底径6.8cmをそれぞれ測る。11は甕である。胴部はあまり張りをもたず直線的に立ち上がり、口縁部は外反して開く。外面胴部は縦方向にヘラケズリによって調整される。ほぼ完形で口径26.2cm、器高22.2cm、底径10.0cm。焼成は良好で色調は明褐色を呈する。12は石皿片である。13は鏡形滓である。鏡形滓については後述する。14は鉄鏝の篋被片と考えられる。

013号住居跡 (第42図)

012号住居跡と重複する。本跡と東半分は012号住居跡の覆土中に床面と壁面を構築している。壁については土層断面で観察することはできても、それを全体について明瞭に検出することはうまくできなかった。重複していない北壁と西壁から規模を復元すれば、北壁は4.20mを測り、西壁はおおよそ3.70m前後となる。南西のコーナーに丸味がみられるので、おそらくは隅丸長方形の平面形を有していたと考えられる。012号住居跡と重複する以外でも本跡は西側でM9号跡によって切られている。したがって床面の遺存は不良である。その床面までは検出面から10cmで達してしまう。比較的平坦に構築され、壁の立ち上がりの下に溝を掘り込んでいない。柱穴と考えられるピットについては、これを1ヶ所も発見することができなかった。また、柱穴以外に本跡に伴うと判断されるピットも確認されなかった。カマドは東壁に設けられていたことは明らかであるが、その構造等について述べる事が可能なほどの遺存は示していない。

遺物は僅かで図示できる土器については2のみである。2は012号住居跡中に貼床を施す側で出土した須恵器の坏である。安定した平底の底部から体部は直線的に立ち上がりながら開く。



013号住居跡土層説明

- 1. 黒色土
- 2. 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 3. 暗褐色土 2に準ずる。
- 4. 褐色土 ローム塊を含む。
- 5. 褐色土 ローム主体。
- 6. 暗褐色土 ローム粒を含む。

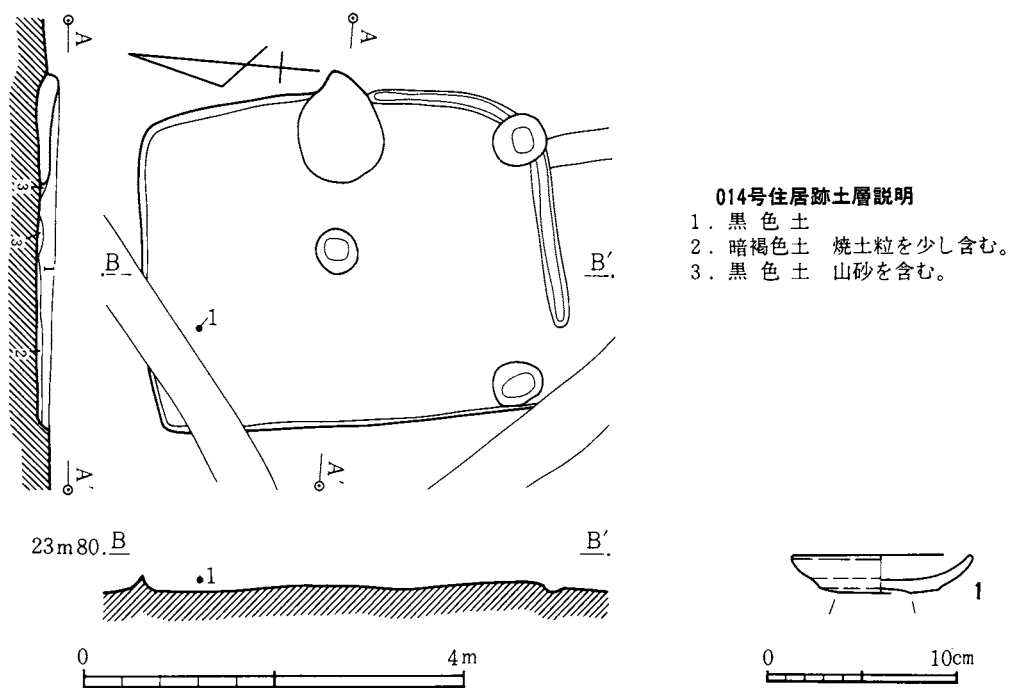
第42図 013号住居跡実測図 (1/60) ・出土遺物実測図 (1・1/2・2・1/4)

体部下端は手持ちヘラケズリが施される。胎土には砂が含まれ、焼成は普通である。色調は暗青灰色を呈す。復元口径13.6cm，器高3.5cm，底径8.0cmを測る。この坏以外では土錘が1点出土している。1は土錘である。

014号住居跡（第43図）

013号住居跡の北西2mの位置に近接し，M9・M11・M16号跡の3条の溝状遺構が本跡を切っている。遺存状況は極めて不良で，検出面から床面まで良くて15cmを残す程度である。カマドは東壁に構築されており主軸方向はN-83°-Eを指す。平面形は隅丸長方形を呈し，北壁3.20m，東壁3.95mの規模を測る。壁溝は南東コーナーを中心に東壁中程までと，南壁下に認められる。ただ南壁については立ち上がりは残っておらず，壁溝が住居跡の南限を示す状態となっている。北壁など壁が僅かに遺存するところではゆるやかに立ち上がる様子がみられる。床面は全体に平坦さを欠いている。断面図では波を打ったような状態を呈している。ピットは3ヶ所に検出した。性格については，決め手となるものを欠く。位置から考えれば柱穴とはならないであろう。カマドは東壁のほぼ中央に設けられている。しかし袖も残らず構造については復元することはできない。検出面での煙道部の壁への掘り込みは20cmとなっている。

図示可能となった遺物は1点のみと大変乏しい。1は土師器の皿である。体部は僅かに内彎

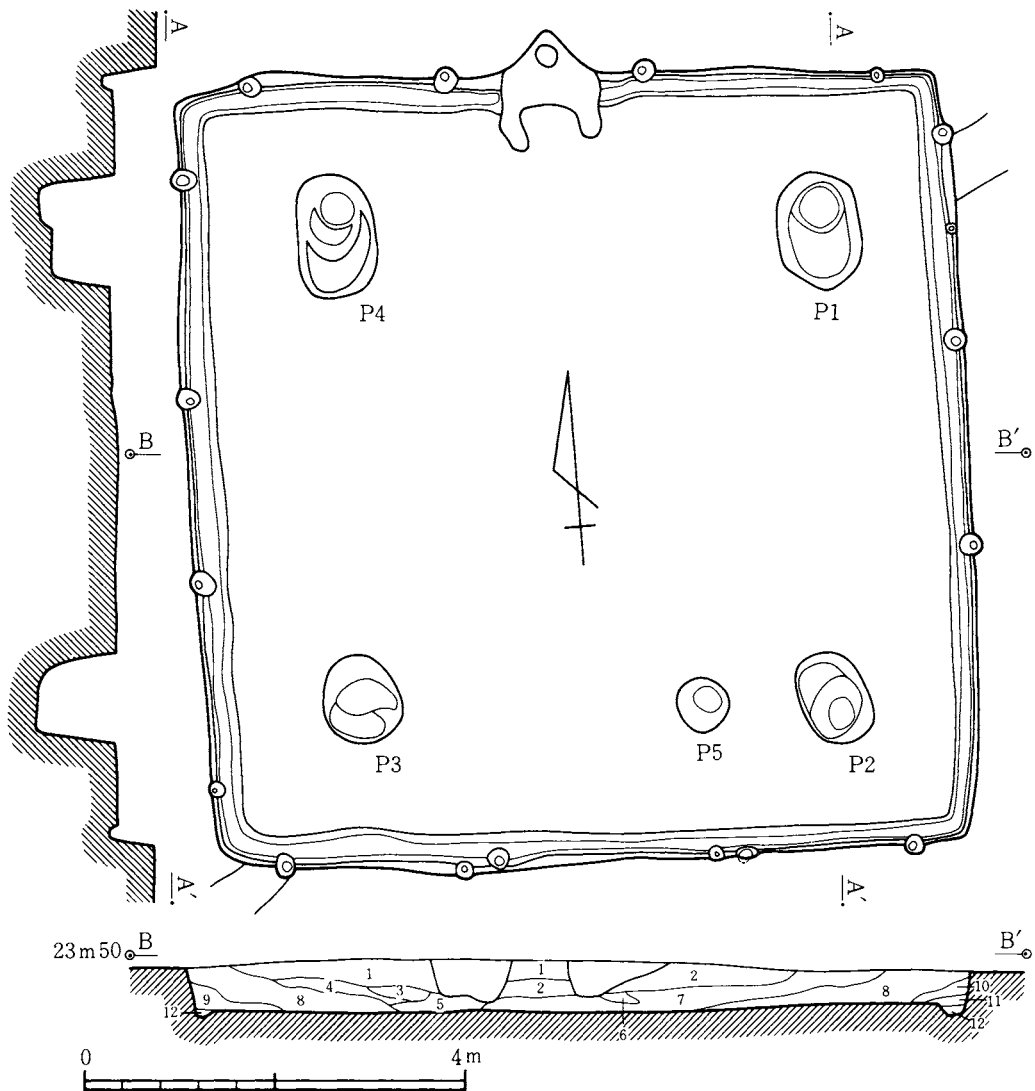


第43図 014号住居跡実測図（ $\frac{1}{50}$ ），出土遺物実測図（ $\frac{1}{4}$ ）

して開き、口唇部は丸く終わる。底部は回転糸切りの後無調整となっている。胎土は比較的密で焼成は普通である。色調は黒褐色を呈する。体部の3分の1を欠損。口径9.5cm, 器高1.9cm, 底径3.8cmを測る。

015号住居跡 (第44~48図)

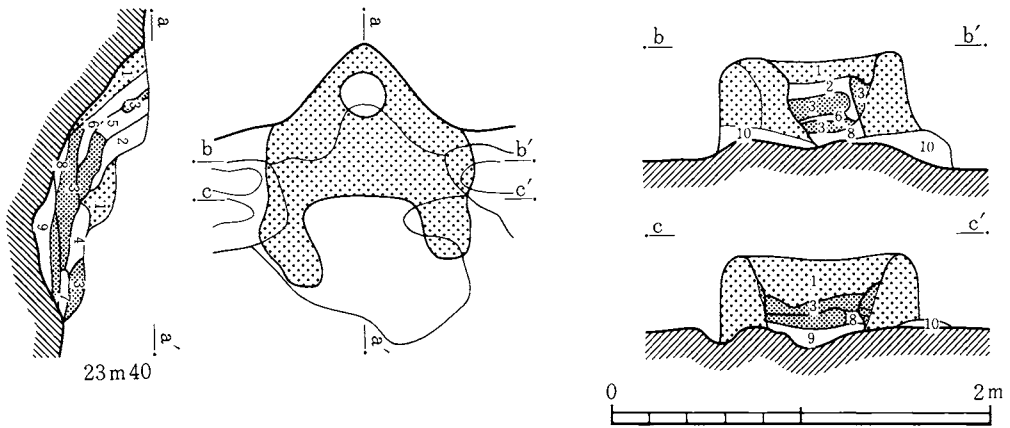
013号住居跡から西へ8m, 20号掘立柱建物跡の東側に位置して検出された。北壁にカマドが構築され、主軸方向は、南-北とほぼ同一の向きをとる。平面形は四つのコーナーが直角に近



015号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|-----------------|----------|----------|
| 1. 褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 7. 黒褐色土 | |
| 2. 黒褐色土 | | 8. 褐色土 | 4に準ずる。 |
| 3. 褐色土 | ローム粒を含む。 | 9. 黒色土 | |
| 4. 褐色土 | ローム粒・塊, 焼土粒を含む。 | 10. 褐色土 | 4に準ずる。 |
| 5. 褐色土 | 焼土粒を少し含む。 | 11. 黒色土 | |
| 6. 褐色土 | 1に準ずる。 | 12. 黒褐色土 | ローム塊を含む。 |

第44図 015住居跡実測図 (1/40)



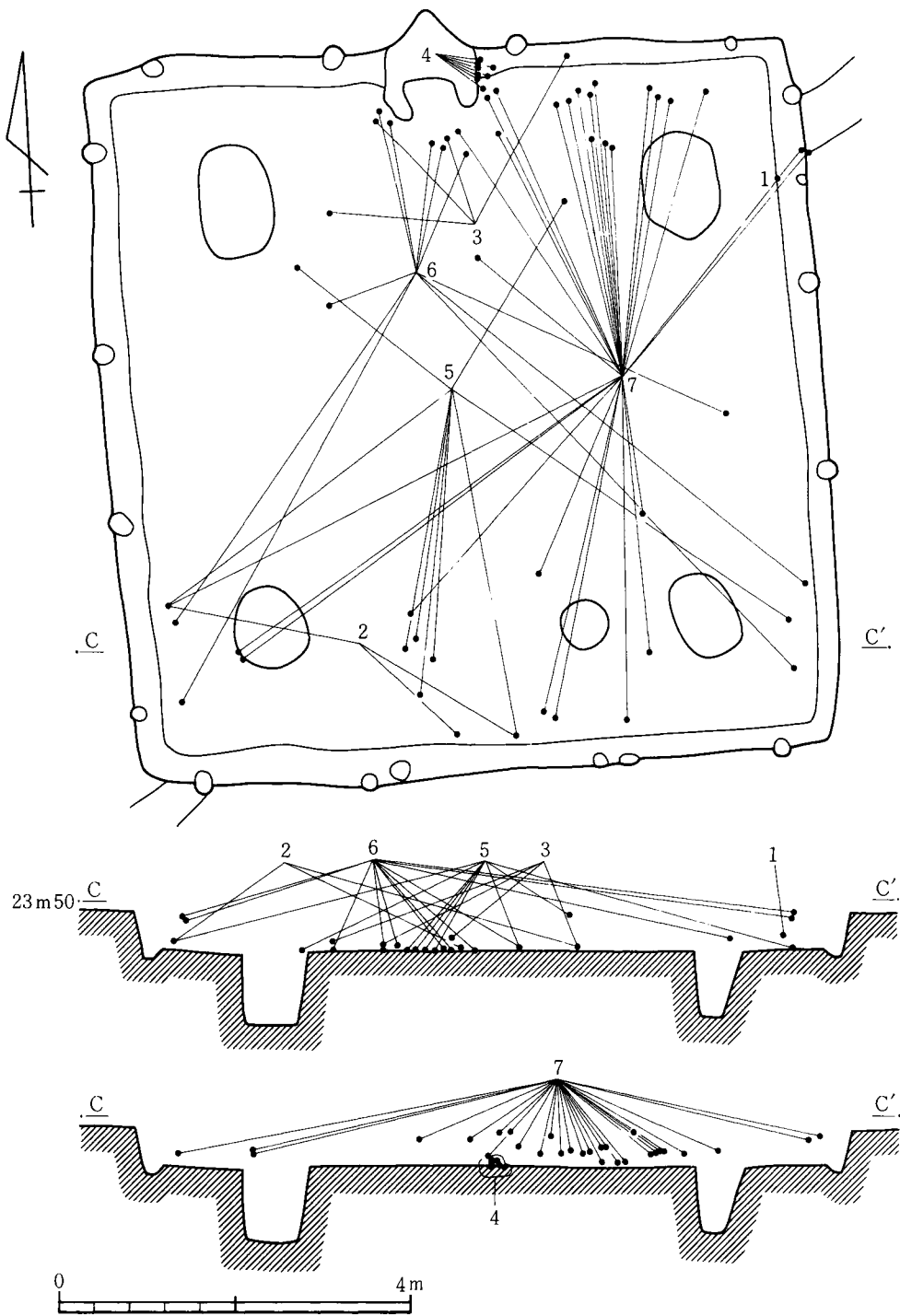
015号住居跡カマド土層説明

- | | | |
|------------------|---------|--------------|
| 1. 山砂。 | 6. 赤褐色土 | 山砂・焼土を多く含む。 |
| 2. 黒褐色 | 7. 黒色土 | 焼土を少し含む。 |
| 山砂を多く、焼土・炭化物を含む。 | 8. 暗褐色土 | 焼土・炭化物を多く含む。 |
| 3. 焼土。 | 9. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |
| 4. 黒褐色 | 10. 黒色土 | 焼土を少し含む。 |
| 2に準ずる。 | | |
| 5. 黒褐色 | | |
| 2に準ずる。 | | |

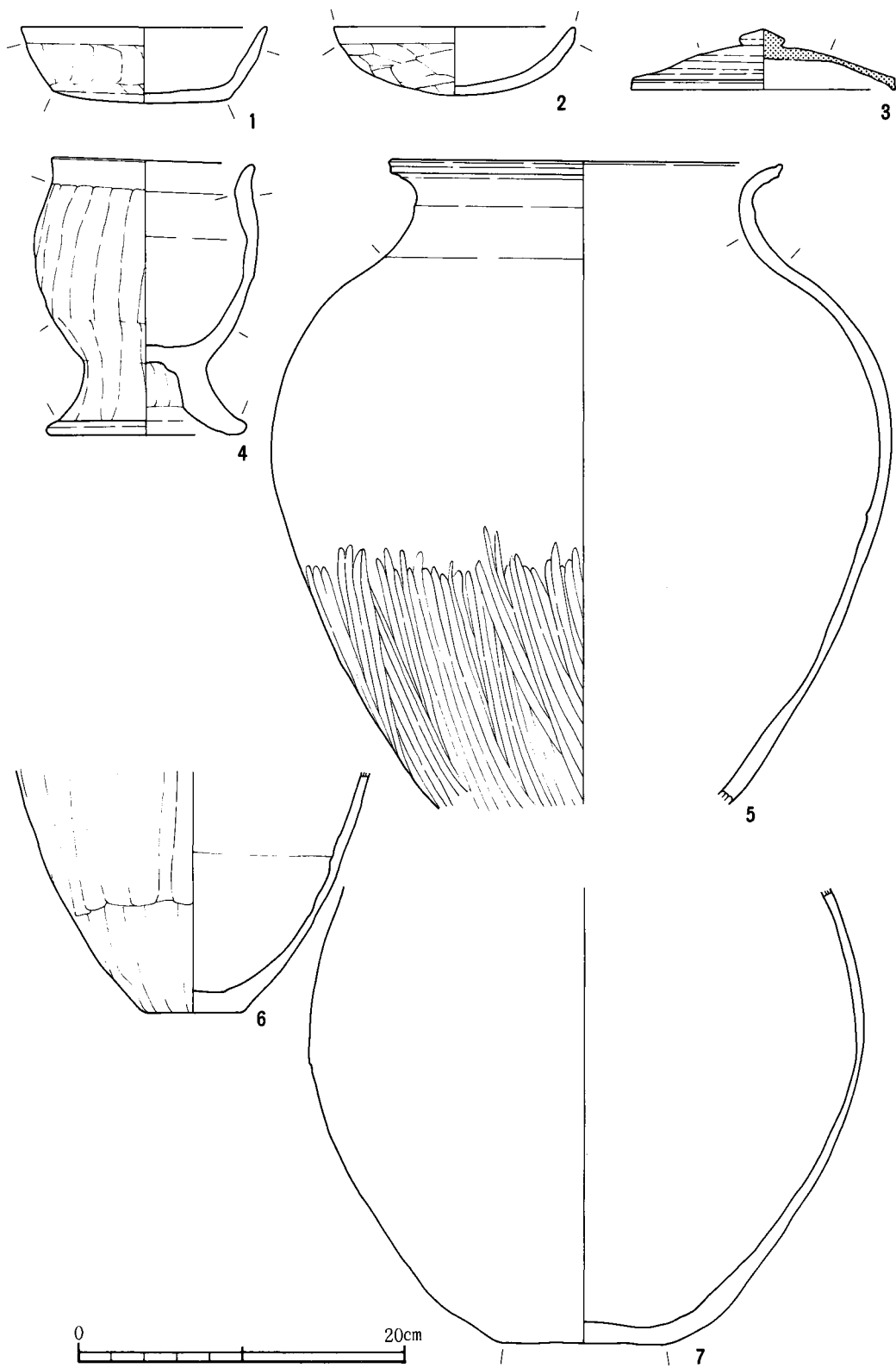
第45図 015号住居跡カマド実測図 (1/40)

い。一辺8.0mの大変整った正方形を呈している。各壁も直線的に結ばれており張り出す部分を認めない。壁の遺存は良好で検出面から床面まで45cm~50cmを測る。壁の立ち上がり方はほぼ垂直に近く、カマドの部分を除き壁溝が掘られている。南壁の南東コーナー寄りで幅が15cmと狭くなるほかは25cm前後の幅を有する。深さは幅の狭くなる南壁の一部で14cmになるが、大部分は床面から8cm程の深さとなっている。床面は貼床を施し平坦に構築される。そう目立って凹凸はないが中央部に幾分低くなるところが認められる。柱穴は対角線上に4カ所の支柱穴と、壁に接して掘られた壁柱穴が検出された。P₁~P₄は支柱穴である。P₁は長径120cm、短径86cmの掘り方で深さは75cmを測る。下端はすぼまって径40cmの円形となる。以下P₂の床面からの深さは81cm、P₃は71cm、P₄は76cmをそれぞれ測る。P₅は入口に伴うピットと考えられ、径約55cmで深さ31cmの規模である。壁柱穴はおおよそ25cm内外の径に穿たれている。北壁にはカマドの左右と、コーナー寄りにそれぞれ1カ所の計4カ所穿たれ、東壁と西壁にも4カ所ずつ発見された。ただ東壁の南東コーナー側では西壁の壁柱穴と対応するピットは認められず、北側に寄って4カ所の配置となっている。南壁では対称的に、2個接して対ともみられるピットと、コーナー側に1カ所の合計6カ所に検出された。南壁中央の2個1対2カ所のピットは入口に付属するものと考えられる。カマドは北壁の中央に構築され、残り具合も良い状態である。

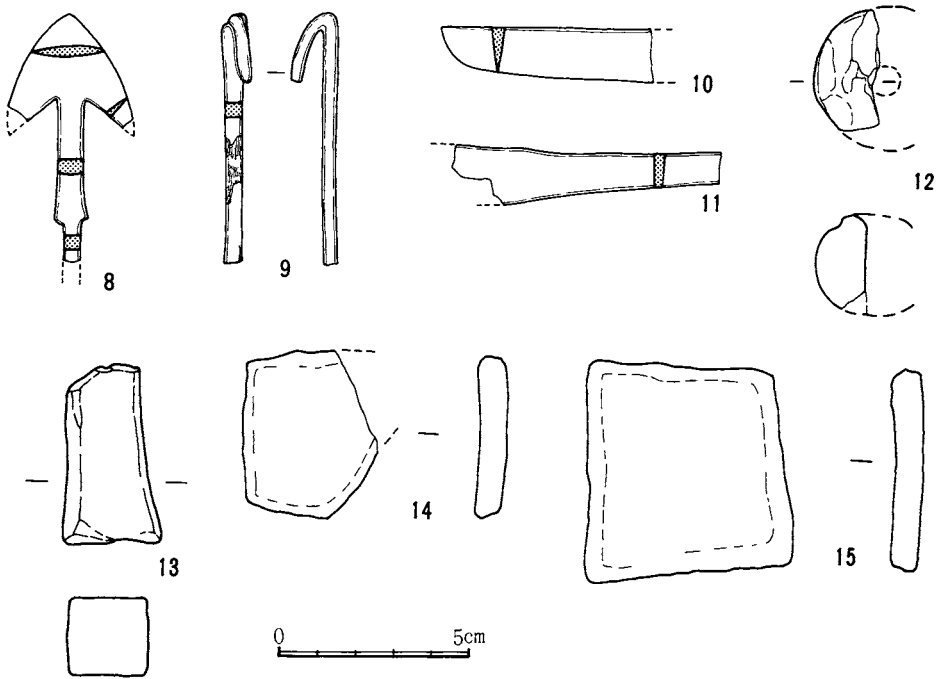
遺物は1・2が土師器坏である。1は平底で、内面ユビナデ、外面は口縁部ユビナデ、以下底部全面まで手持ちヘラ削り。2は丸底で、内面ヘラミガキ、口縁外面はユビナデ、以下外面は全て手持ちヘラ削りで調整されている。3は須恵器蓋である。やや扁平な擬宝珠つまみを有



第46图 015号住居跡遺物出土状況図 (1/80)



第47图 015号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



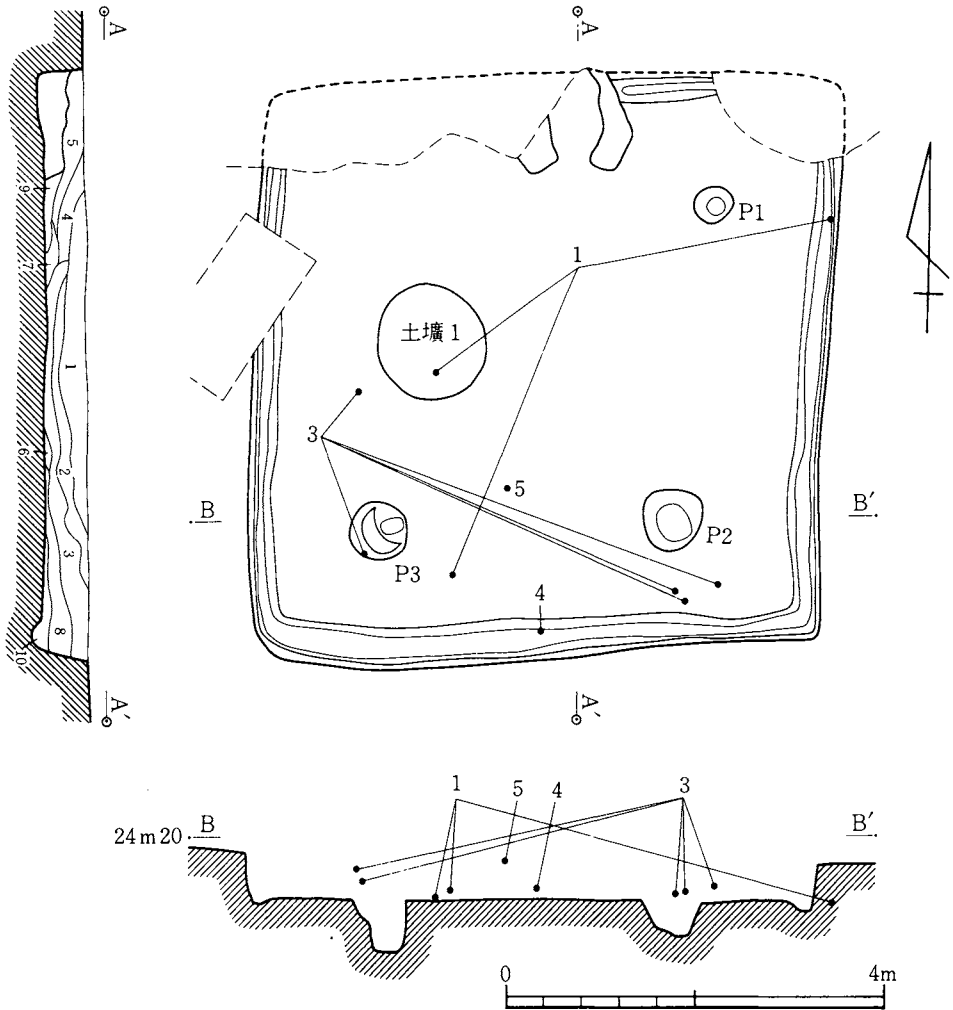
第48図 015号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

する。4は土師器台付甕である。外面は全て縦方向のヘラ削りが施され、甕部口縁はユビナデ、上部は縁辺から内面全面までユビナデで調整されている。5は所謂、下野型の甕である。胎土中に多くの白色石粒を含む。口縁はユビナデ、内外面全て木端状ヘラでナデつけられ、外面下半は縦方向のミガキが施されている。6・7は土師器甕である。7は底部外面に木葉痕が見られる。8～11は鉄製品である。8は腸袂三角形式の鏃である。9は用途不明である。10・11は共に刀子片である。12は土玉である。13は砥石、14・15は須恵器片転用砥石である。

016号住居跡 (第49～51図)

調査区の北西寄りC2グリッド内に位置し、今回の調査で検出した遺構のなかで最も北西側となる。北西・北東の壁、及び南壁の中央部分を攪乱によって破壊されている。規模は東西・南北ともに6mのほぼ方形の平面形を呈し、N-1°-Eに主軸をとっている。検出面からの掘り込みの深さは各所ほぼ均一で、40～45cmを測り、壁下には幅30cm程度の壁溝が全周するようである。ピットは合計3カ所に検出された。P₁～P₃は全て主柱穴であると考えられるので、北西の主柱穴が検出されていないことになる。掘り方平面形は円形で、径は40～60cm、深さは35～55cmを測る。床面西寄り中央には、後世、1号土壇(D1)が掘られ、床面を破壊している。

カマドは北壁のほぼ中央に築かれており、西袖の大部分は攪乱によって破壊されている。焚口幅は約35cm、火袋中央で45cmの、中央の若干ふくらむ形態を示す。煙道は残っておらず、壁



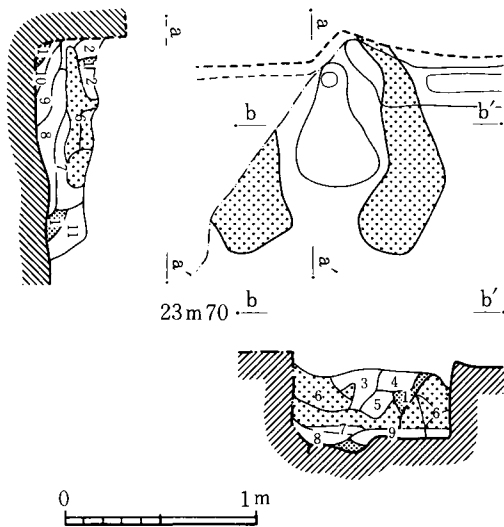
016号住居跡土層説明

- | | | |
|------------|---------|------------|
| 1. 黒色土 | 6. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |
| 2. 黒色土 | 7. 暗褐色土 | 山砂を含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 8. 黒色土 | |
| ローム塊を少し含む | 9. 暗褐色土 | 山砂、炭化物を含む。 |
| 4. 暗褐色土 | 10. 黒色土 | ローム塊を含む。 |
| 山砂、焼土粒を含む。 | | |
| 5. 暗褐色土 | | ローム塊を多く含む。 |

第49図 016号住居跡実測図 (1/80)

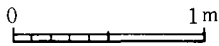
から外に向けて、若干カマド尻を突き出しているだけである。

遺物は、1～4が土師器坏，5が須恵器蓋である。1は外面は手持ちヘラ削り後ヘラ磨き，内面はヨコナデの後に，放射状暗文が施されている。2・3は共に外面手持ちヘラ削り，内面は共にヘラ磨きが施されている。4は，外面手持ちヘラ削り，内面ユビナデである。5は外面頂部に回転ヘラ切り痕があり，かるいナデがなされている。6は土玉で，径は3.6～3.8cm，穴の径は中心が7mmである。7は鉄製品である。3.0×2.8×0.5cmの方形の地に，1.2×1.2×1.0cmの先細りのつまみ様の部分がついている。性格は不明である。 (小林)

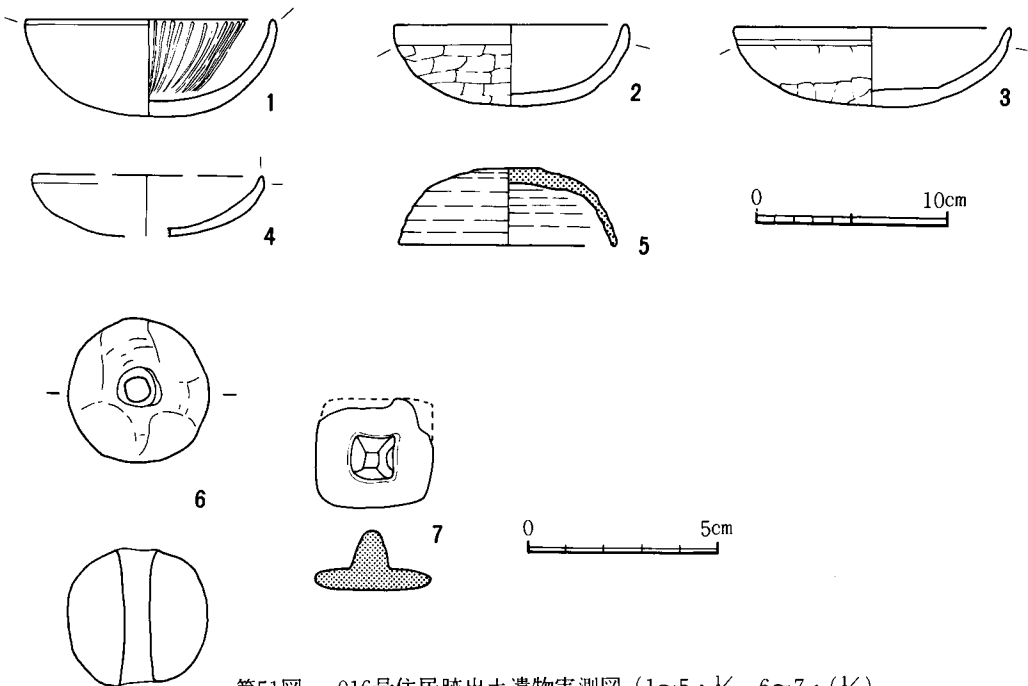


016号住居跡カマド土層説明

1. 焼土。
2. 褐色土 ローム粒, 白色土粒を多く含む。
3. 褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
4. 白色粘土 山砂を含む。
5. 白色粘土 山砂, 焼土を含む
6. 山砂。
7. 褐色土 焼土・粘土を多量に含む。
8. 褐色土 ローム粒を多く含む。
9. 褐色土 ローム粒, 白色粘土を含む。
10. 褐色土 ローム粒, 焼土粒を含む。
11. 褐色土 灰・焼土を多く含む。



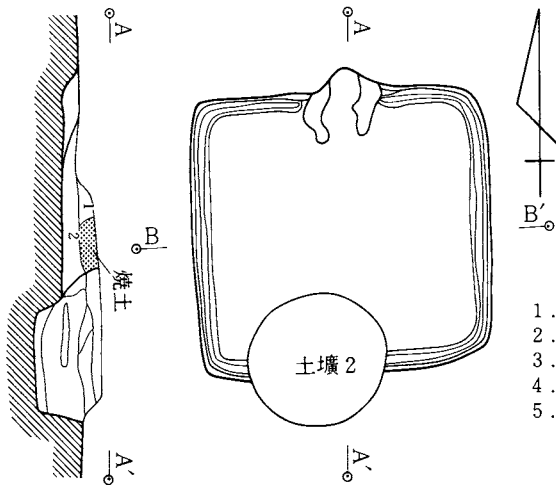
第50図 016号住居跡カマド実測図 (1/40)



第51図 016号住居跡出土遺物実測図 (1~5・1/4, 6~7・1/2)

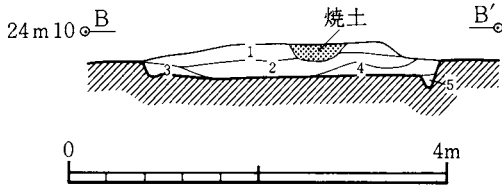
017号住居跡 (第52・53図)

016号住居跡の北東に隣接する。規模は東西3.2m, 南北3.0mで, 主軸をN-2°-Wにとる。平面形は正方形に近い隅丸方形である。南壁中央やや西寄りの部分は, 2号土壌によって, 壁と床の一部が破壊されている。検出面からの掘り込みの深さは平均20cm弱で残りはあまり良くない。壁下には幅20cm内外, 深さはややまちまちで, 5~15cmの壁溝が周る。上屋構造を復元さ

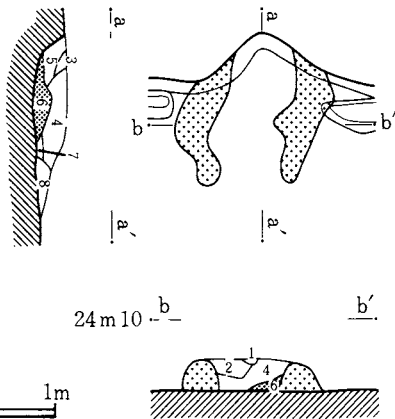


017号住居跡土層説明

1. 褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 黄褐色土 ローム粒を1より多く含む。
3. 褐色土 焼土粒を多く含む。
4. 褐色土 ローム粒を含む。
5. 黒褐色土 ローム粒を僅かに含む。



第52図 017号住居跡実測図 (1/80)



017号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒を含む。
2. 暗褐色土 山砂を多く炭化物を少し含む。
3. 褐色土 ローム粒を多く炭化物を少し含む。
4. 暗褐色土 山砂, 炭化物を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 赤褐色土 焼土, 山砂を多く含む。
7. 黒褐色土 焼土を少し含む。
8. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒を少し含む。

第53図 017号住居跡カマド実測図 (1/40)

せるピットは全く検出されていない。住居ほぼ中央の覆土上層には、本住居とは直接の関わりはないが、長径50cmのやや楕円形の焼土ブロックが存在するが、2号土壌(D2)によって半分近くを壊されており、正確な大きさは判らない。

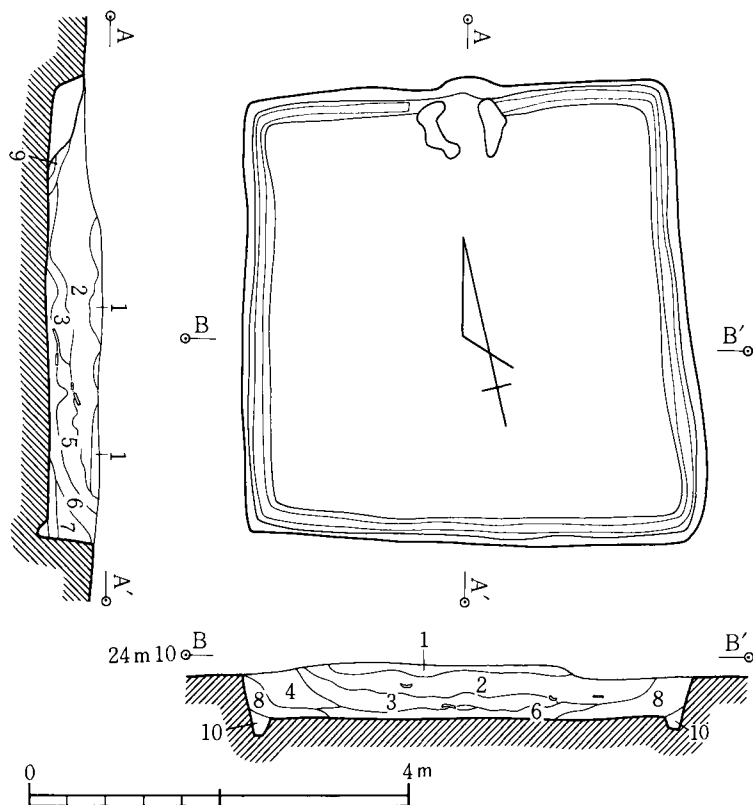
カマドは北壁ほぼ中央に設置されている。焚口幅30cm、火袋中央幅30cmで、袖外形はふくらんでみえるが、内部構造はほぼ平行の袖を持つことになる。天井は残っておらず、煙道も残っていない。壁から外に25cmほどカマド尻を突き出す形態を示している。遺物は図示でき、かつ時期を判断できるだけのものを検出できなかった。

018号住居跡（第54～60図・152図）

016号住居跡の東2mの所に隣接する。主軸をN-10°-Eにとり、規模は南北4.8m、東西は北壁で4.4m、南壁で4.9mで、やや台形気味の平面形態を示す。検出面全体が北に向ってやや下っており、掘り込みの深さは平均50cm弱、北壁付近は30cm、であるが、床面は平坦である。壁下には幅25～30cm、深さ15cm程度の周溝が全周する。上屋に伴う柱穴等は一切検出されなかった。

カマドは北壁ほぼ中央に築かれている。焚口幅28cm、火袋部中央幅48cm、全長85cmで、中央にややふくらみを持つ形態を示す。天井部の山砂は中央部付近に崩落していた。又、焼土層も厚く残っていた。壁から外へ向けて、15cmほどカマド尻を突き出している。

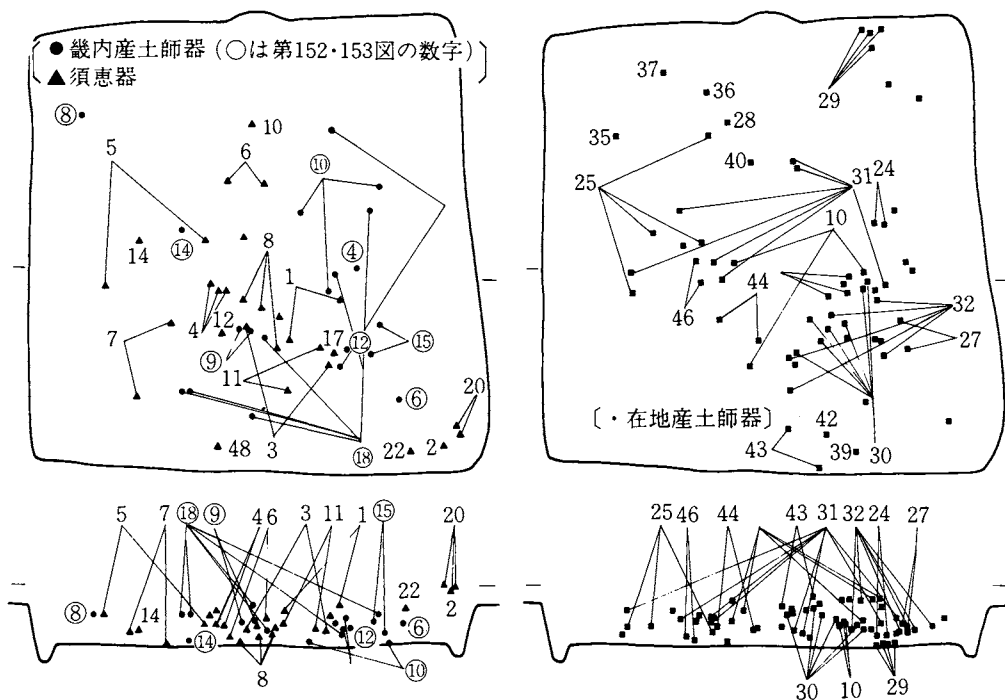
本住居跡からは多量の遺物が検出されており、量的には当遺跡中最多量を示すが、その出土



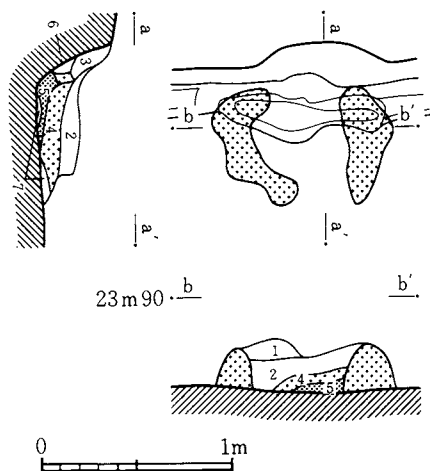
018号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|-------------------|----------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 6. 暗褐色土 | ローム粒を多く・焼土粒を僅かに含む。 |
| 2. 灰褐色土 | 灰を多く、焼土、炭化物を含む。 | 7. 褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 3. 黒褐色土 | 灰・炭化物を多く、焼土を少し含む。 | 8. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |
| 4. 褐色土 | ローム粒を含む。 | 9. 暗褐色土 | ローム粒・焼土塊を含む。 |
| 5. 灰褐色土 | 灰を多く、焼土・炭化物を少し含む | 10. 黄褐色土 | ローム粒を多く含む。 |

第54図 018号住居跡実測図 (1/50)



第55図 018号住居跡遺物出土状況図 (1/40)



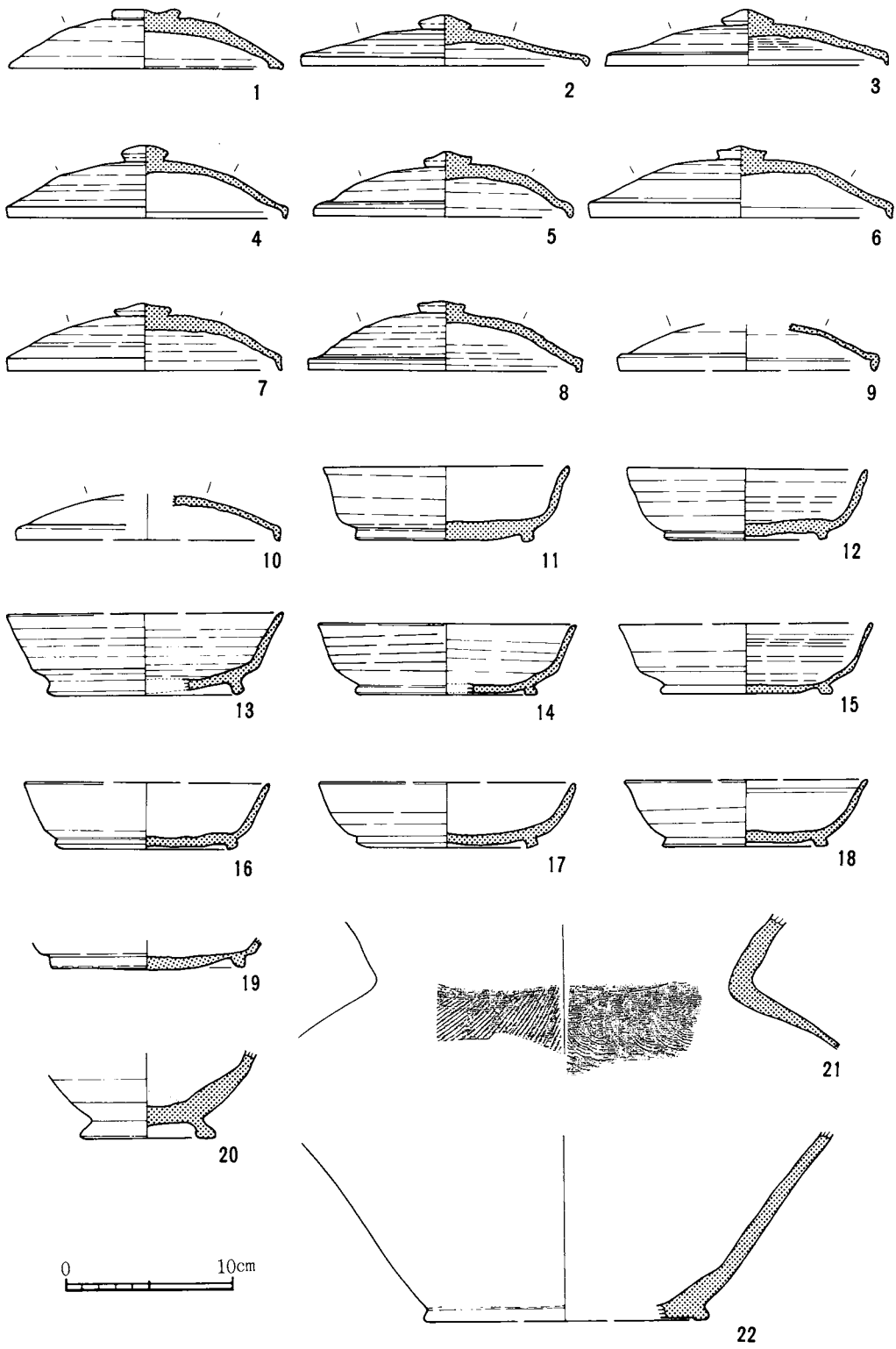
018号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 焼土を少し、山砂を多く含む。
2. 暗褐色土 焼土・山砂を多く含む。
3. 暗褐色土 山砂を多く含む。
4. 山砂
5. 灰
6. 褐色土 ローム主体。
7. 黒色土 ローム粒を少し含む。

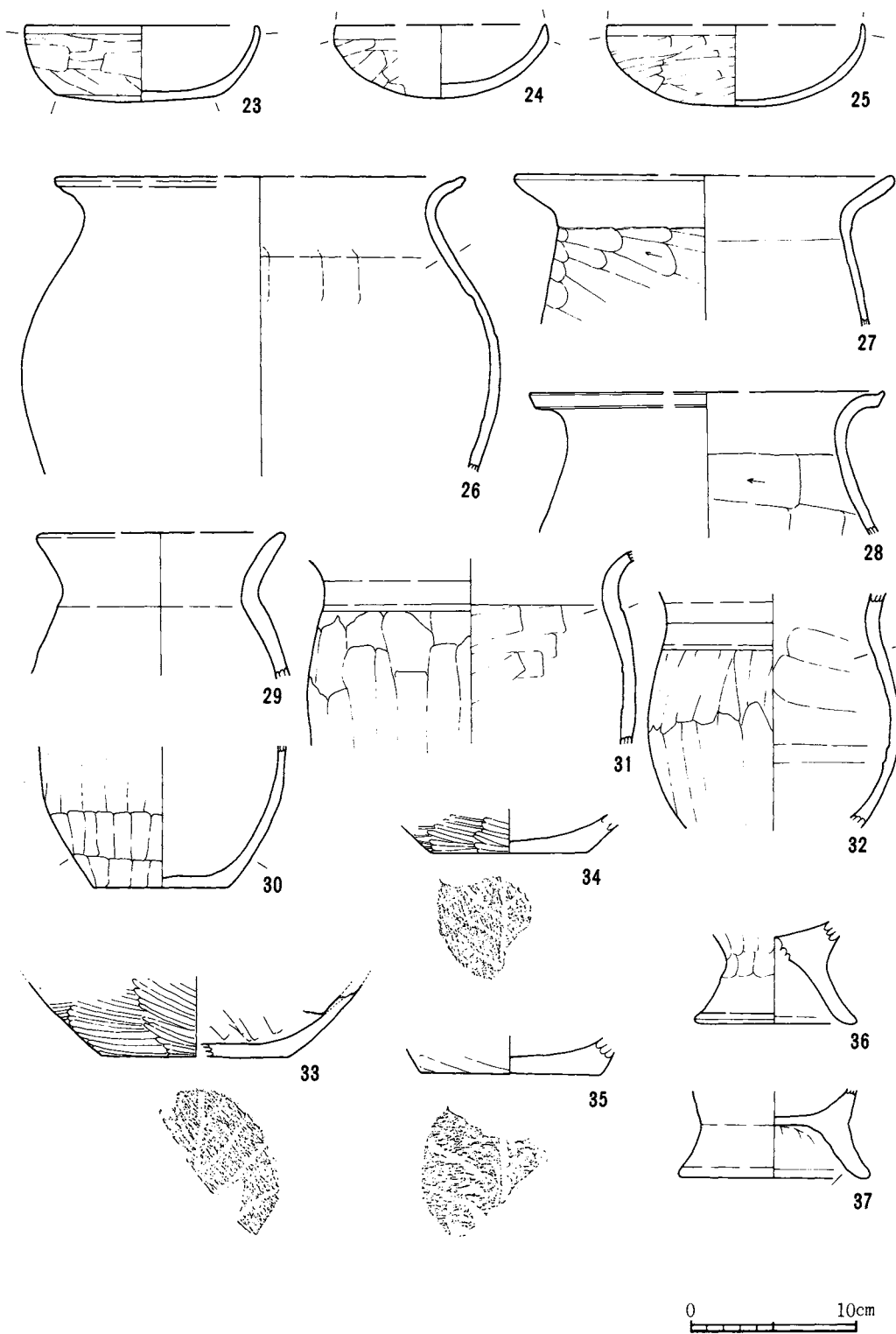
第56図 018号住居跡カマド実測図 (1/40)

状況を見れば判るように、床面直上のいわゆる住居に確実に伴う資料は極めて少なく、その大部分は投げ込みの廃棄パターンを呈している。尚、多量の畿内産土師器も検出されているが、その遺物個々については後に他の遺構検出のものも含め、まとめて説明する。

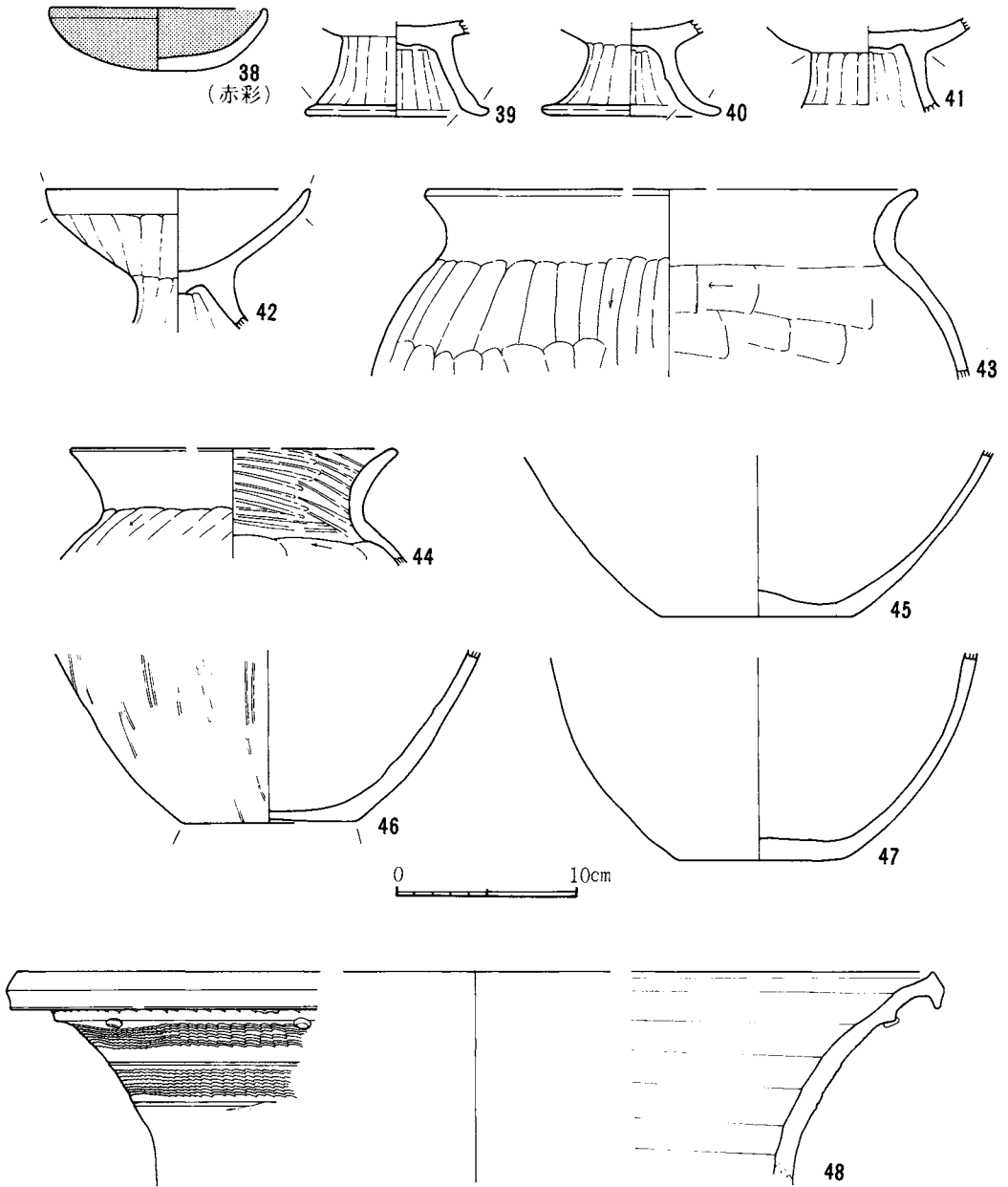
1～22は須恵器である。1～10は蓋である。1のみ形態がやや異なるが、成形・調整技法は全て同じで、外面上部は回転ヘラ削り後未調整で、つまみ周辺のみ回転ナデが施されている。



第57图 018号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)

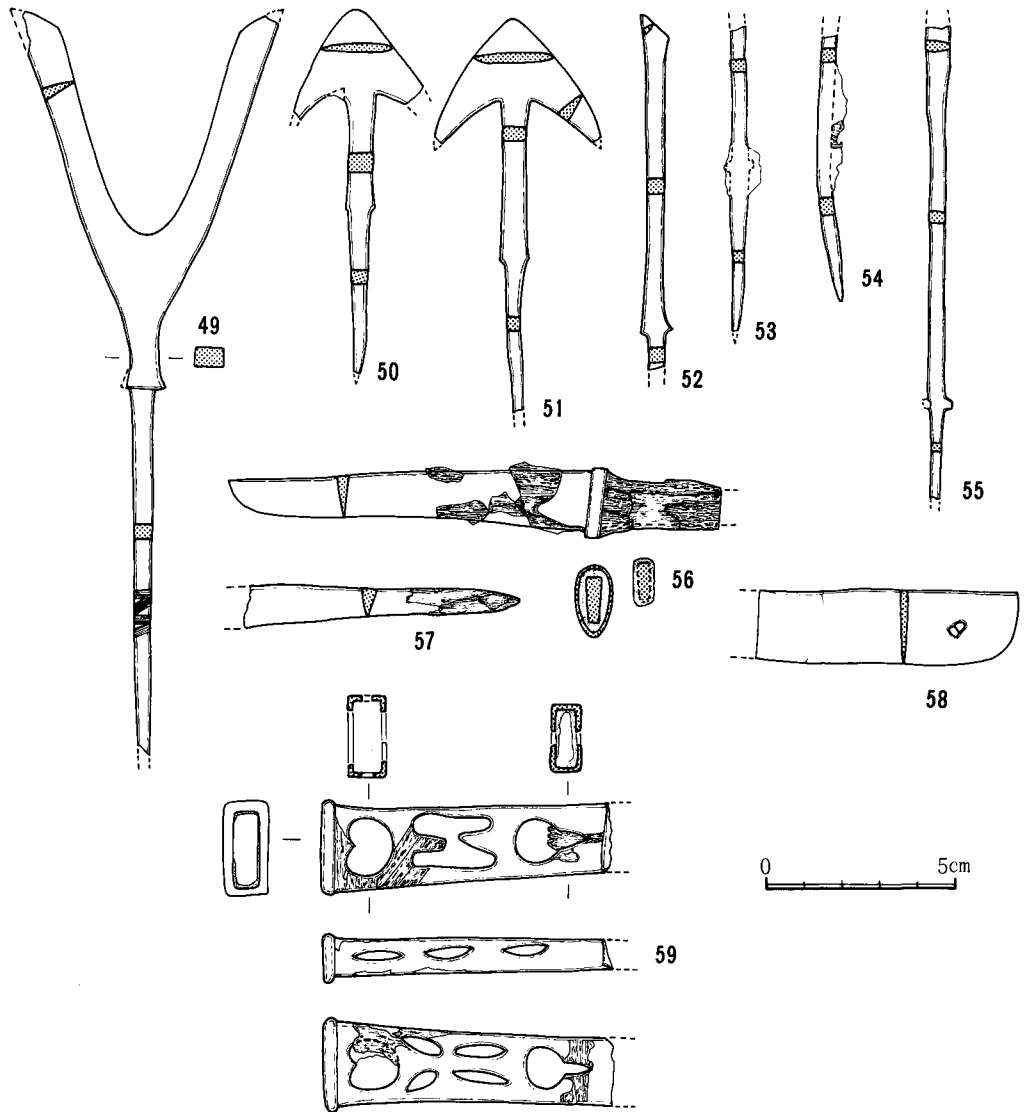


第58图 018号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4)



第59図 018号住居跡出土遺物実測図(3)($\frac{1}{4}$)

1は口縁内面にかえりが残る。つまみは中央がやや山形になっているものの、環状つまみに近い形態を示す。2～10は全てかえりを持たない。つまみを欠失したものもあるが、恐らく、全てやや扁平な擬宝珠つまみを持つと考えられる。3・6は外面に薄く自然釉がのっている。11～19は高台付坏である。器形的に大略3類が見られる。11・12のように外面では体部から底部



第60図 018号住居跡出土遺物実測図(4) (1/2)

への変換点に明瞭な稜線が見えないが、内面には見えるもの。13~16・19のように外面に2本の稜線をもつもの。そして17・18のように、内・外面に全く稜線の見えないものの3類である。底部外面は全て回転ヘラ切りによって切り放された後に、回転、もしくは手持ちでヘラ削りを施されている。20は長頸瓶の底部である。高台はやや開き気味である。外面は回転ヘラ削りで調整されている。内面は自然釉で、黒っぽく見えるほどに厚くのっている(図中点線内)。21・22は甕である。21は、体部外面平行叩き目・内面青海波叩き目で整形されている。22は外面はヘラナデのち、部分的に回転ヘラ削りが施されている。23~25は土師器坏である。23は平底、24・25は丸底で、外面は全て口縁部ユビナデの後に体部下半~底部全面にかけて、手持ちヘラ削りが施されている。内面は23がユビナデ、24・25がミガキである。26~35は土師器甕である。

33～35には木葉痕が見える。36・37は小型台付甕の破片と考えられる。38は土師器坏である。内面から口縁外面はユビナデ、外面以下は手持ちヘラ削りで調整されており、内・外面共に赤彩が施されている。39～42は土師器高坏である。外面は4個体とも全て縦方向のヘラ削り、脚内面はヨコヘラ削り、坏身内面はユビナデ調整。42は坏身内面にミガキが施されているほかは、前の3個体と同じである。43～47は土師器甕である。48は須恵器大甕の頸部以上の破片である。

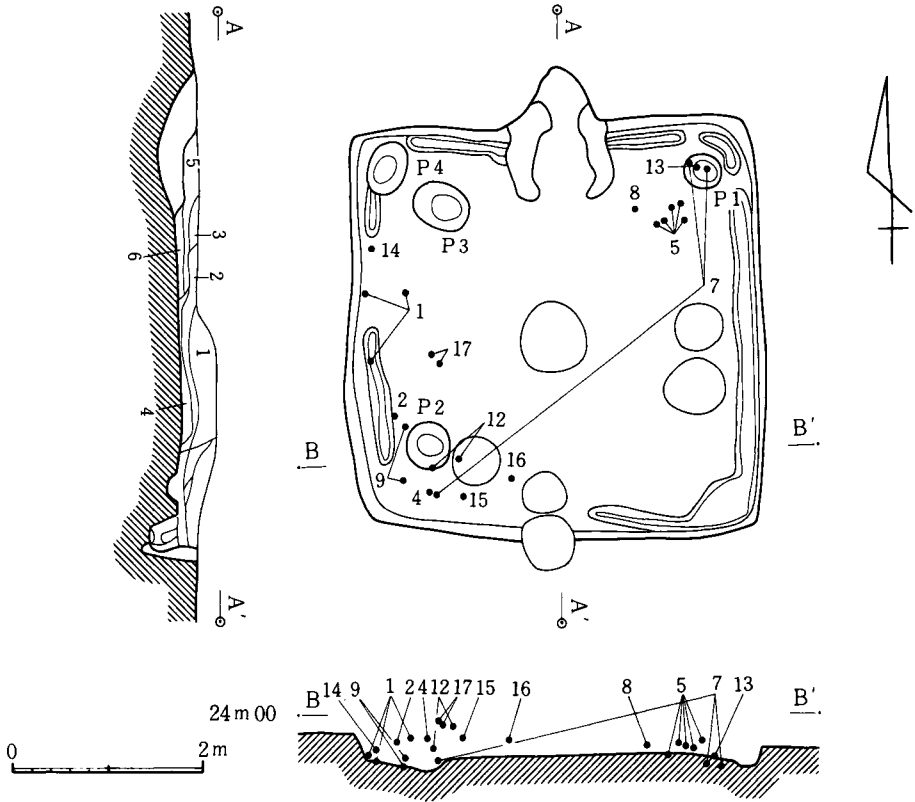
49～59は金属器である。59が銅製品で、それ以外は全て鉄製品である。49は所謂雁股鏃で、現存長19.3cm、根は左右対称で、両先端をわずかに欠失している。茎中央付近には、矢柄装着時のものと思われる巻きつけ痕がある。50・51は所謂飛燕形式の鏃である。共に、やや丸味を帯びた逆刺を有す。茎の細まり方から見て、欠損部は、さして長くないものとする。52は棘篋被端片刃箭式の鏃である。53～55は、全て鉄鏃である。56・57は鉄製刀子で、56は刀身・茎の双方、57は刀身の先端に、木質が付着・遺存している。特に56は銅製の鉤も遺存している。58は手鎌で、釘も残存して付着している。59は青銅製品である。右端を欠損している。断面長方形で中空、四面に図のような透しを有する。内面には木質が若干遺存しており、外面にはくんでいたと思われる繊維が付着している。鋳造品であるが、現在のところ類例が見当らず、使用の用途、名称がわからない。その形状からすると、刀子把頭、脚金具の可能性はあるが、ここでは可能性ありとするに留める。

020号住居跡（第61～63図）

C2・D2両グリッドにまたがって位置する。主軸は完全に真北をとっており、規模は南北4.3m、東西4.5mの隅丸に近い方形を示す。遺存状態は全体に芳しくなく、検出面からの掘り込みの深さは10～20cmとかなり浅い。壁溝も途切れ途切れにしか検出されず、浅く、立ち上がりもただらだらとしている。本住居に伴うと考えられるピットは4ヵ所検出されている。P₁～P₃は支柱穴と考えられるが、P₄は、ピットとしての性格は不明である。このほか、床面に5つのピットが検出されているが、いずれも、後世のものであろう。

カマドは北壁のほぼ中央に築かれている。焚口幅50cm、火袋中央幅60cm、全長1.45mを測る。断面を見ると、カマド構築材(山砂)の上に焼土が乗り、更にその上に構築材が倒れかかっていることから、確実に、途中で一度は造り直されているものである。壁から外に向けて60cmほどカマド全体が突出しており、袖材そのものも、壁から外に突き出して造りはじめられている。

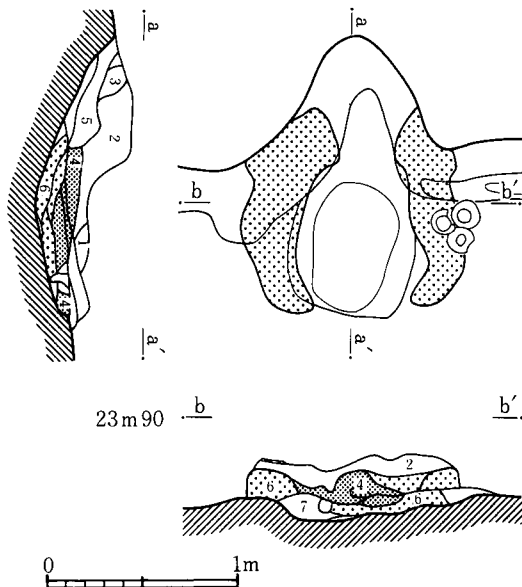
遺物の出土状況を見ると北東・南西の隅で集中して検出されているのが判る。土器は、1～14までが赤焼きの須恵器である。1・13は底部外面から体部外面下方にかけて手持ちヘラ削りが、14は底部外面には回転糸切り痕を残し、体部外面下方のみ手持ちヘラ削りが施されている。2・4・9・10・12は回転糸切りで切りっ放しになっている。3・6・11は回転糸切り後、回転ヘラ削り、8は回転ヘラ切りののち回転ヘラ削り、5・7は回転ヘラ削りが施されている。



020号住居跡土層説明

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 黒色土 粘性をおびる。 | 4. 赤褐色土 焼土・炭化物粒を多く含む。 |
| 2. 黒色土 焼土を少し含む。 | 5. 赤褐色土 焼土・炭化物粒を多く含む。 |
| 3. 褐色土 灰を少し含む。 | 6. 褐色土 灰を多く含む。 |

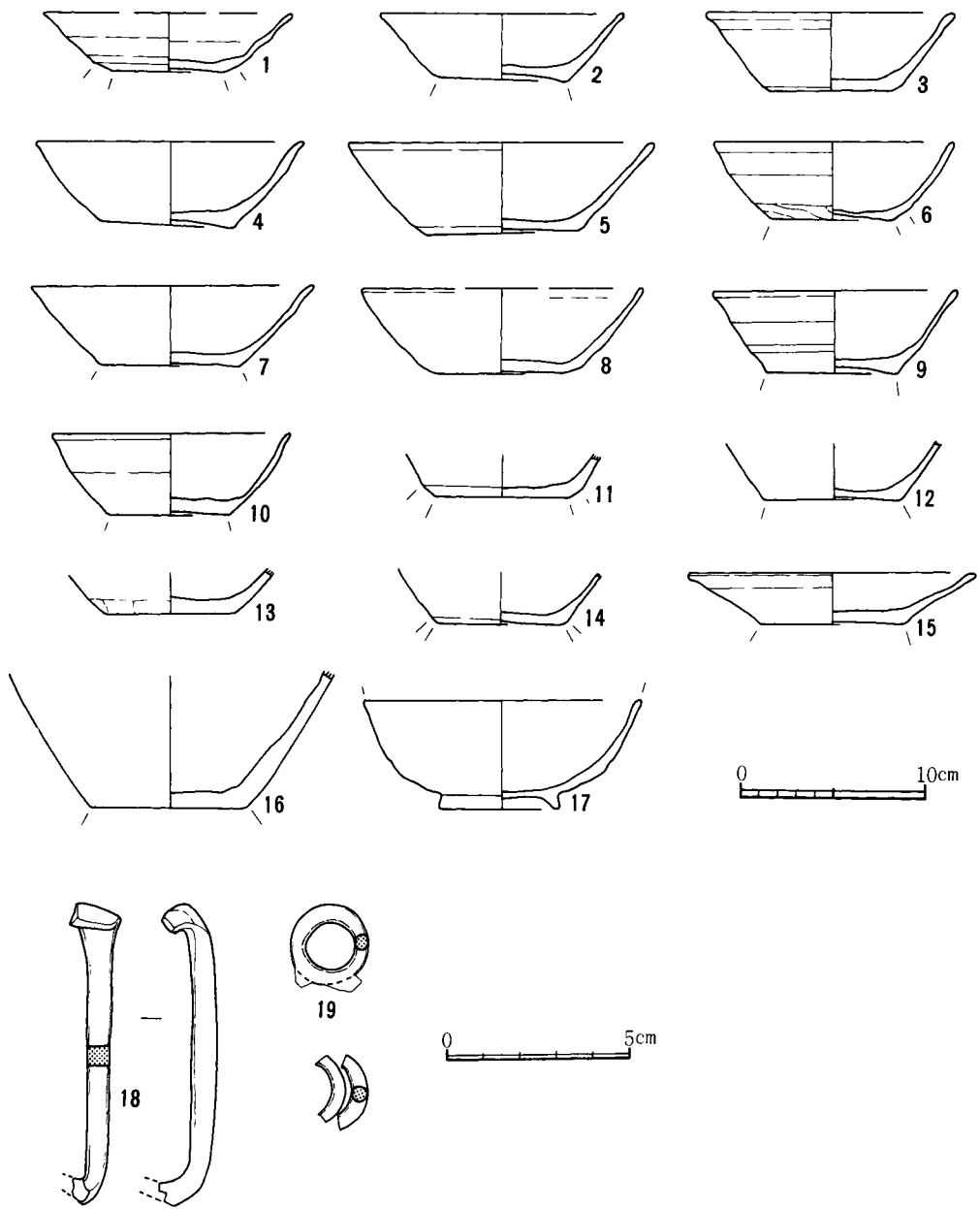
第61図 020号住居跡実測図 (1/60)



020号住居跡カマド土層説明

- | |
|----------------------------|
| 1. 住居覆土 |
| 2. 赤褐色土 焼土・山砂・炭化物を少し含む。 |
| 3. 暗褐色土 炭化物を少し含む。 |
| 4. 焼土 |
| 5. 赤褐色土 焼土を多く、炭化物を少し含む。 |
| 6. 褐色土 山砂を多く含む。 |
| 7. 暗褐色土 山砂を多く、焼土・炭化物を少し含む。 |

第62図 020号住居跡カマド実測図 (1/60)



第63図 020号住居跡出土遺物実測図（1～17・¼，17～18・½）

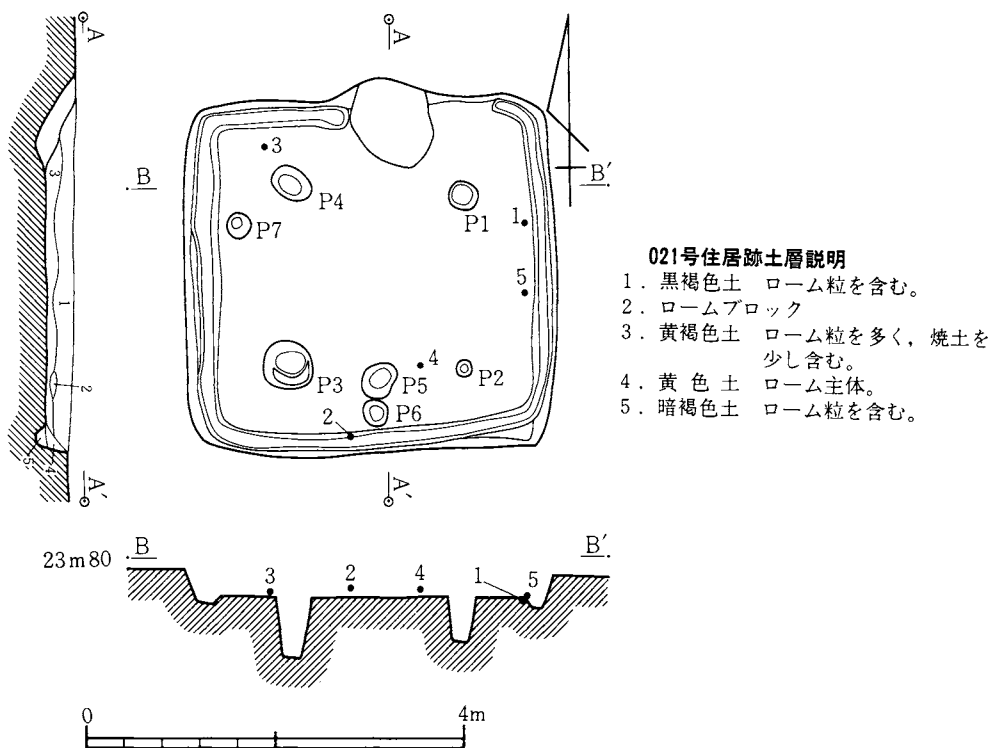
以上の赤焼き須恵器坏形土器はその底部の調整技法から見て、6種に分類される。15はロクロ使用の土師器皿である。底部外面は回転糸切り、切りっ放しになっている。16は土師器の甕の底部。17はロクロ使用土師器碗である。底部外面には回転糸切り痕が無調整で残っている。内面はやや黒ずんでおり、ミガキがなされている。18・19は共に鉄製品である。18は角釘でやや変形してしまっている。19は環状製品であるが、用途は判らない。

021号住居跡 (第64・65図)

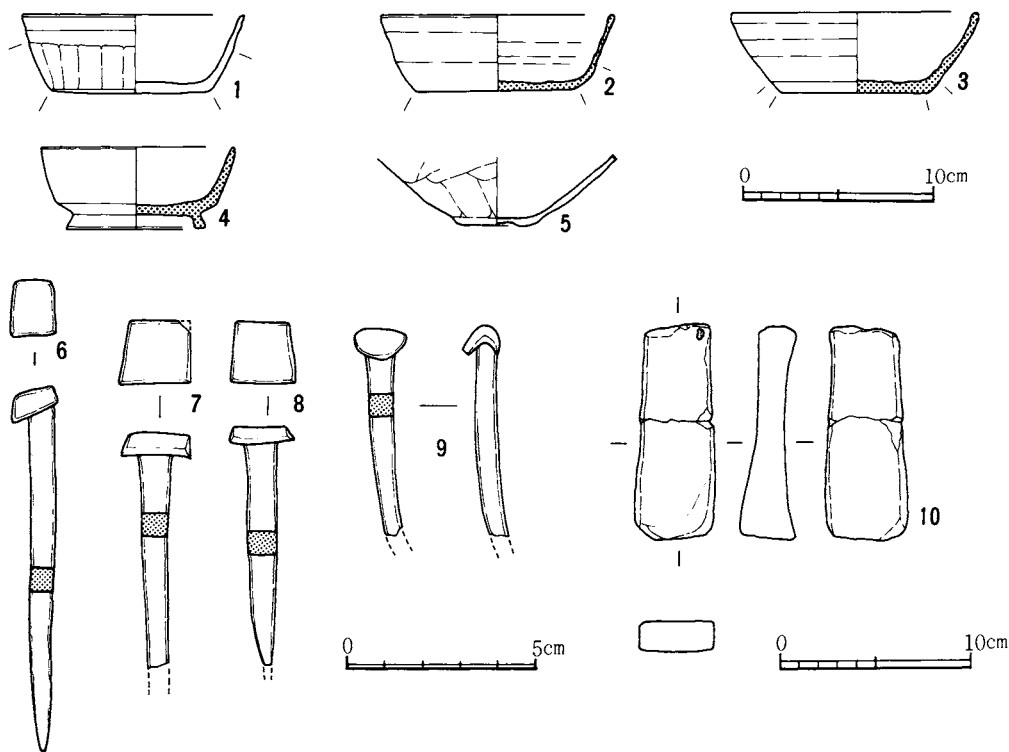
D1グリッドにあり、005号・004号掘立柱建物跡に挟まれて位置する。主軸を真北にとっている。規模は東西4m、南北3.7mで、やや隅丸に近い方形の平面形を示す。検出面からの掘り込みの深さは25cm平均である。壁下には、北壁カマド東側の一部分を除いて、幅30cm前後の壁溝が巡っている。壁そのものの立ち上がりが垂直でなく、ややなだらかなので、溝幅そのものも全体に広めにみえる。南東隅では、壁溝が壁からやや離れている。床面には合計7ヵ所にピットが検出されている。支柱穴と考えられるのはP₁～P₄の四本である。径20～50cm、深さ45～65cmと、それぞれの数値にばらつきが見られる。P₅、P₆は出入口施設に伴う柱穴かと考えられる。深さは共に20cm程度である。P₇は性格不明である。

カマドは北壁中央からやや東寄りの部分に築かれているが、遺存状況は極めて悪く、わずかに焼土を検出し得たのみである。

検出された遺物は、1が土師器坏である。ロクロ使用で外面体部下半と底部は手持ちヘラ削りが施されている。2～4は須恵器である。2はややくすんだ灰色で、堅緻な焼成である。3は石英粒を少し含む。2・3共に体部外面下端から底部外面にかけて手持ちヘラ削りが施されている。4は高台付坏で、体部外面下方にロクロ成形時の稜線を持つ。坏身は平底で、高台は高さ1.2cmである。堅緻な焼成で、良品である。5は土師器甕の底部付近の破片と考えられる。



第64図 021号住居跡実測図 (1/60)



第65図 021号住居跡出土遺物実測図 (1~5・10・¼, 6~9・½)

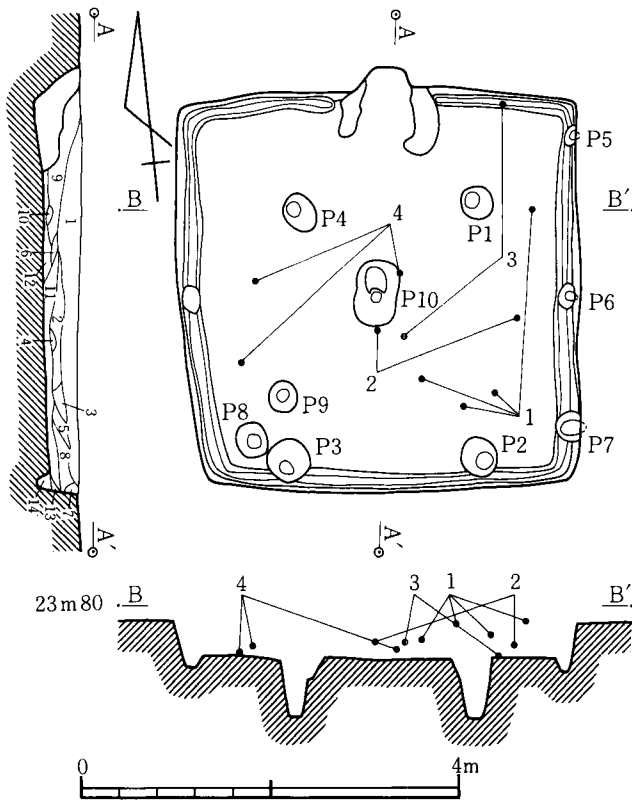
6~9は鉄釘である。6~8は接合により頭部を作り、9は折り曲げによって頭部を作っている。10は砥石である。

022号住居跡 (第66~68図)

D 2 グリッドに位置する。N-7°-Eに主軸をとり、規模は南北4.2m、東西は北壁で4.2m、南壁で4mのやや台形気味の平面形を示す。検出面から掘り込み面迄の深さは、35cm内外でほぼ均一であるが、カマド周辺のみ40cm強と、ややくぼんでいる。壁下には幅25~30cmの壁溝が全周している。東壁のP₅~P₇の3本の小柱穴は壁柱穴と考えられる。P₁~P₄の四本は主柱穴と考えられるが、P₈・P₉と床中央のP₁₀は性格不明である。

カマドは北壁のほぼ中央に築かれており、焚口幅60cm、火袋中央幅50cm、全長90cmを測る。袖構築材の残り具合から見て、若干開き気味のようなものである。天井部は崩落して覆土中に検出されている。又天井山砂の下には、それに付随する焼土層も見受けられる。

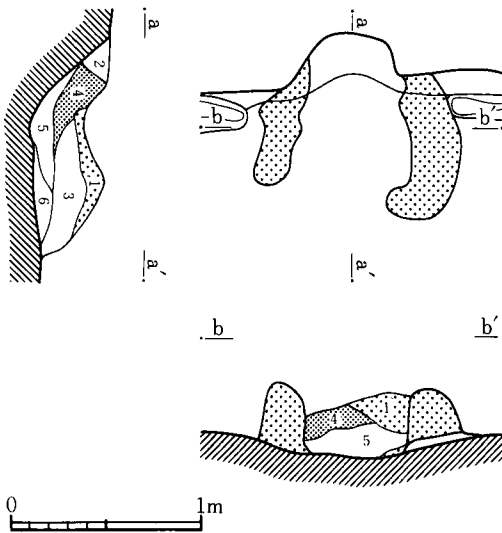
検出された遺物は、1がロクロ使用土師器坏である。底部外面周縁から体部下端にかけては手持ちへら削りが施され、底部中央には回転糸切り痕が見られる。2は須恵器坏である。体部外面下端から底部外面にかけては、手持ちへら削りが施されている。3~5は土師器甕である。



022号住居跡土層説明

1. 褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 褐色土 ローム粒を含む。
3. 赤褐色土 焼土粒を含む。
4. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
5. 褐色土 焼土粒を少し含む。
6. 褐色土 山砂を少し含む。
7. ロームブロック
8. 褐色土 ローム粒を含む。
9. 赤褐色土 焼土を含む。
10. 山砂ブロック
11. 褐色土 ローム粒を多く含む。
12. 褐色土 山砂を含む。
13. ローム主体。
14. 暗褐色土 ローム粒を含む。

第66図 022号住居跡実測図 (1/40)

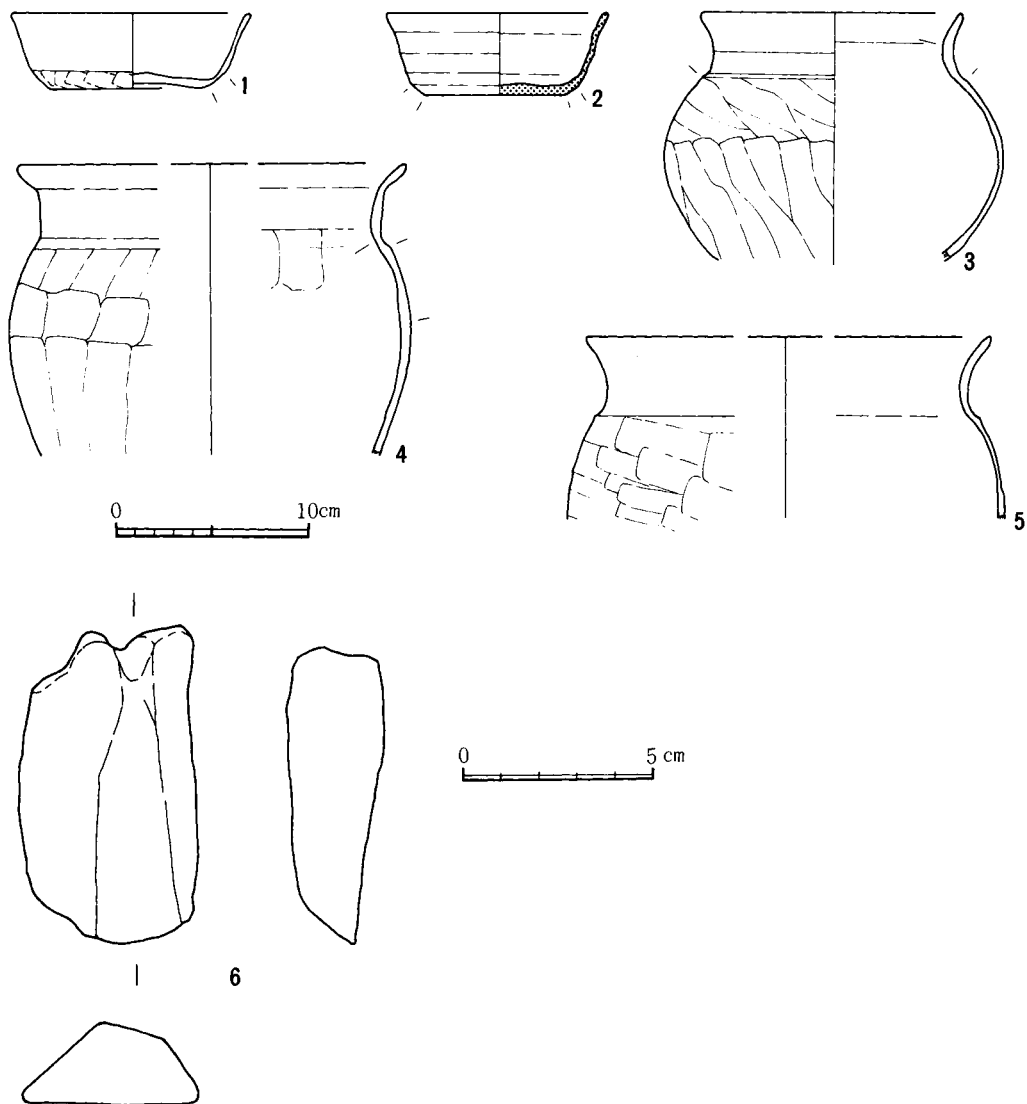


022号住居跡カマド土層説明

1. 黒褐色土 山砂・焼土を含む。
2. 黒色土。
3. 黒色土 焼土を多く含む。
4. 焼土。
5. 灰褐色土 焼土・灰を含む。
6. 黒色土。

第67図 022号住居跡カマド実測図 (1/40)

3は小型球形胴の甕で、4・5は普通の大さきのものである。頸部の形状は全て武蔵型のコの字状を示す。6は砥石である。

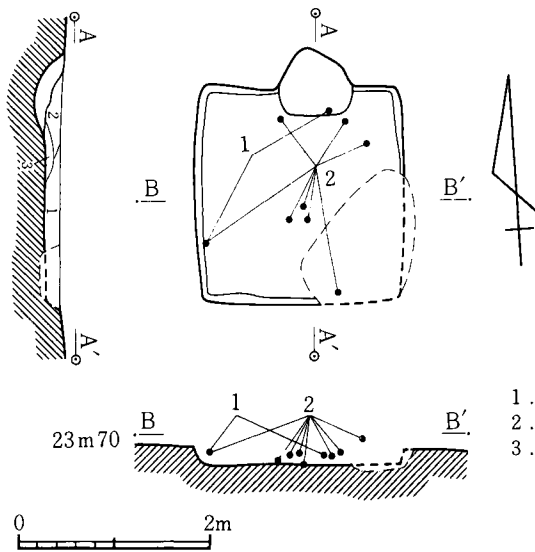


第68図 022号住居跡出土遺物実測図（1～5・ $\frac{1}{4}$ ・6・ $\frac{1}{2}$ ）

023号住居跡（第69・70図）

D 2 グリッドに位置し、022号住居跡とは、M 1 号跡を間に、東側に隣接している。規模は極めて小さく、南北2.3m、東西2.2mの方形で、主軸をN-2°-Eにとる。検出面からの掘り込みの深さは20cm前後を測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁溝はめぐらず、又、床面からは、柱穴は一切検出されなかった。尚、住居跡の南東部分四分の一ほどの部分は、後世の攪乱によって破壊されている。

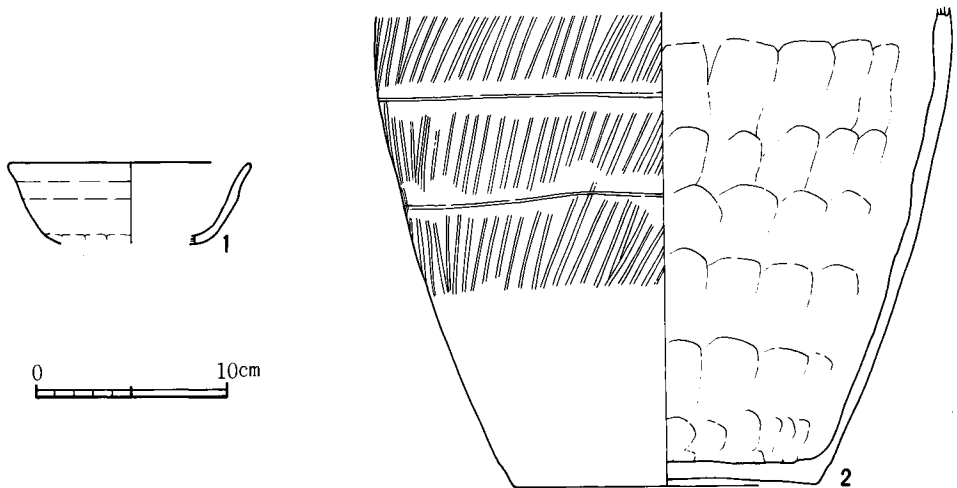
カマドは北壁中央、やや東寄りの部分に築かれている。遺存状態は悪く、袖構築材の山砂が少量残っているだけである。カマドの大部分が壁から外に築かれており、50cm程突き出ている。



023号住居跡土層説明

- 1. 黒色土 焼土粒を若干含む。
- 2. 黒色土 焼土粒・山砂を少し含む。
- 3. 黒色土 炭化物粒・焼土を含む。

第69図 023号住居跡実測図 (1/40)

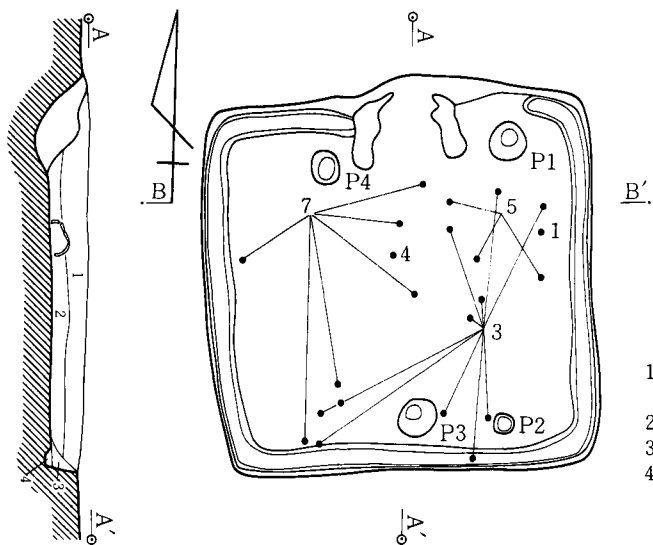


第70図 023号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物はわずかに2点で、1はいわゆるくすべ焼成の坏で、外面体部下端は手持ちヘラ削りが施されている。2もくすべ焼成の甕である。体部は外面に平行叩き目を施し、その後、横方向のすり消しを何条か施し、更に体部下半はヘラ削りを受けている。内面には叩きの際の押圧の痕跡が見られる。

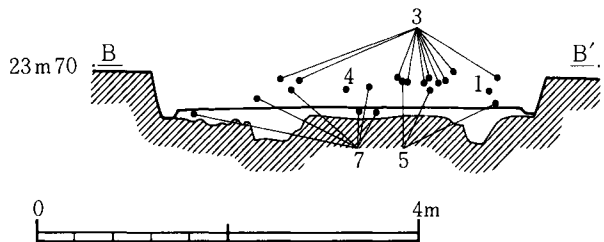
024号住居跡 (第71~74図)

023号住居跡に南隣する。N-4°-Wに主軸をとり、南北・東西共に4m前後のやや隅丸の方形を呈する。壁下には、北壁のカマド東側のごく一部分を除いて、幅20cm程度の壁溝が巡っている。

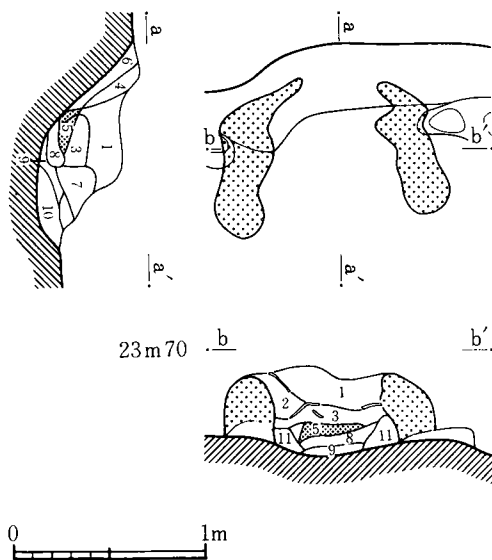


024号住居跡土層説明

1. 褐色土 ローム粒・焼土・灰を多く含む。
2. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
3. ロームブロック。
4. 暗褐色土 ロームを含む。



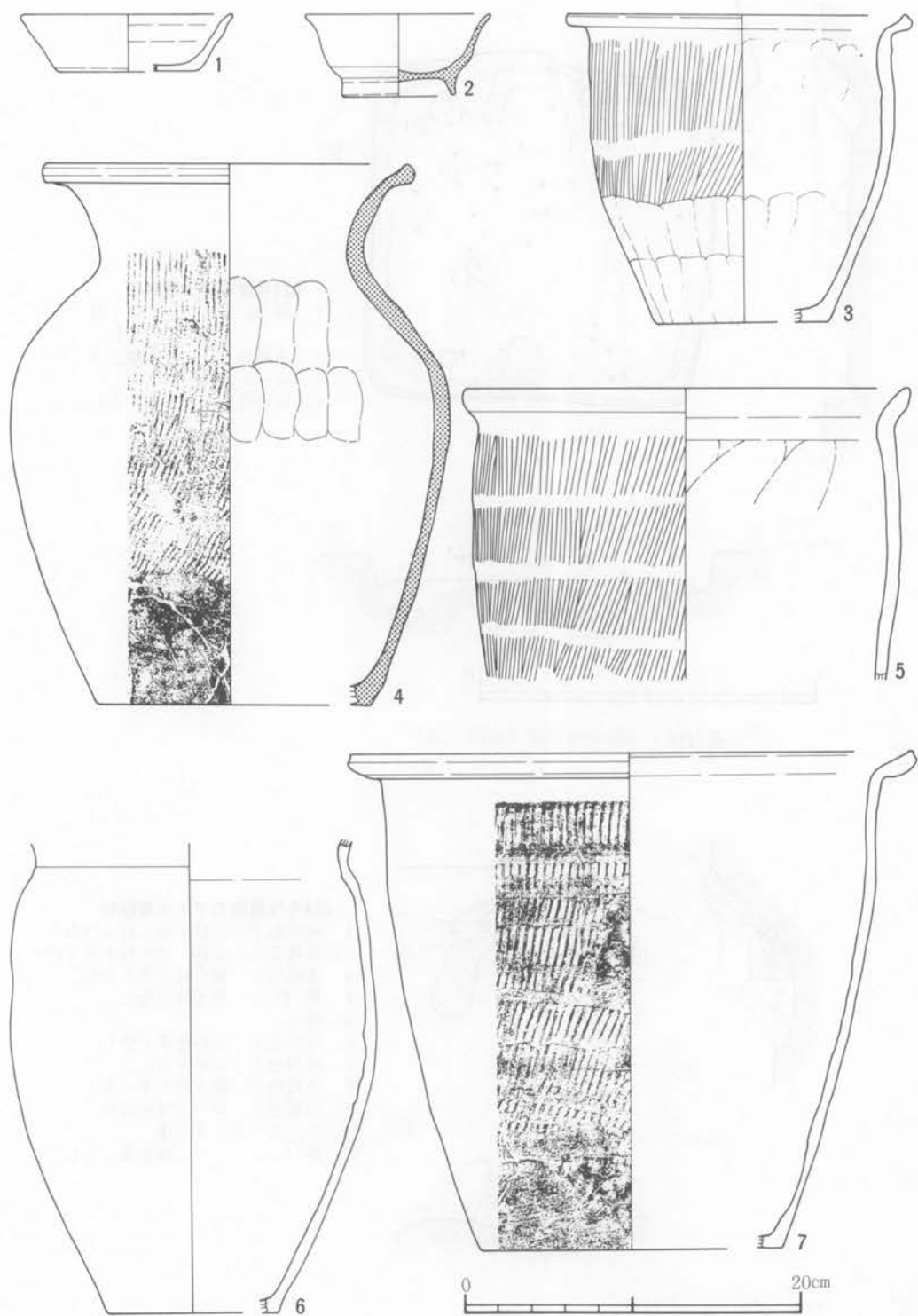
第71図 024号住居跡実測図 (1/40)



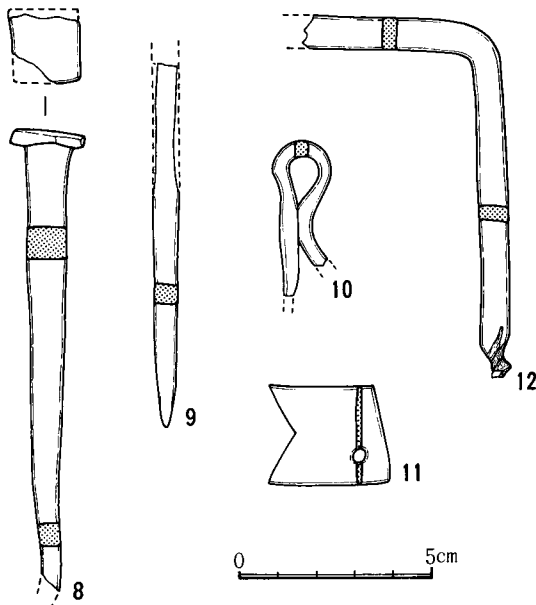
024号住居跡カマド土層説明

1. 暗灰色土 山砂・焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 山砂・焼土粒を多く含む。
3. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
4. 褐色土 焼土粒を含む。
5. 焼土。
6. 灰褐色土 山砂を多く含む。
7. 灰褐色土 山砂を含む。
8. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
9. 黒褐色土 ローム塊を含む。
10. ロームブロック主体。
11. 褐色土 ローム塊を多く含む。

第72図 024号住居跡カマド実測図 (1/40)



第73图 024号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第74図 024号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

る。検出面からの掘り込みの深さは30～40cmで、ややばらつきがあるが、床面はほぼ平坦である。床面からは4カ所にピットが検出されているが、住居内での位置・各ピット間の距離・バランスなど、全てまちまちで、果して、全て主柱としての役割を持ったものなのかどうかは判断しかねる。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。焚口幅80cm、火袋中央幅65cm、全長90cmで、やや“ハの字”状に開く。カマド尻はわずかに壁から突出する程度である。カマド構築法としては、左右の袖とも山砂の下に一層、袖基部と見られる層を持っている。天井は残っていないが、

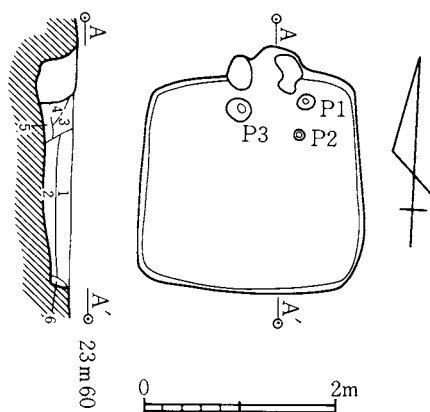
カマド内覆土中には厚い焼土の層が見られる。

出土遺物は、1がくすべ焼成の坏である。底部外面から体部外面下端にかけて、回転ヘラ削りが施されている。2は須恵器高台付坏で、白色石粒を多く含み、胎土は粗く、焼成も悪い。高台は直立気味でやや高目である。3はくすべ焼成の甕で、外面は平行叩き目のあと下方を横位のヘラ削りで調整している。4は須恵器の甕で、調整技法は3と同様である。5・7はともにくすべ焼成である。5は下半部を欠失しているため、甕か甗か判別出来ないが、7は底面5孔式の甗と復元される。調整技法は、3・4・5・7全て同様である。6は土師器甕であるが、器面の摩耗がひどく、観察、及び図化は不能であった。

8～11の金属器は全て鉄製品である。8・9は角釘である。8の頭部は接合による。10は先端部が欠失しているため正確には判らないが、毛抜き様のものであろう。11は形状から見て完形品と考えられるが、用途不明である。12は鋸である。先端は尖り、木質が付着している。

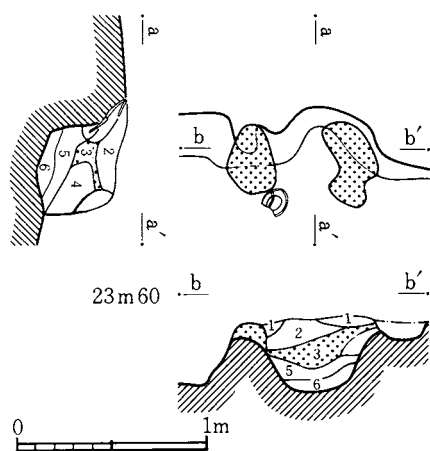
025号住居跡 (第75～77図)

E1・E2グリッドにまたがって位置する。周辺には竪穴住居がなく、空隙に所在する。N-2°-Wに主軸をとり、規模は南北1.9～2.3m、東西2.1～2.4mで、ややいびつな方形を示す。検出面からの掘り込みの深さは、20～40cmで、床面はやや凹凸がある。壁溝は巡っていない。床面からは3カ所にピットが検出されているが、全てカマド周辺に集中している。このため、カマド周辺の構造物のための柱とは考えられるが、上屋構造に関係のあるものとは思えない。



025号住居跡土層説明

1. 褐色土 ローム粒を多く含む。
2. 褐色土 ローム粒を含む。
3. 褐色土 ローム粒を多く含む。
4. 褐色土 ローム粒を少し含む。
5. 黒色土 焼土を少し含む。



025号住居跡カマド土層説明

1. 黒褐色土
2. 褐色土
3. 褐色土 焼土粒・山砂を多く含む。
4. 褐色土 ローム粒・焼土粒を少し含む。
5. 褐色土 ローム粒を含む。
6. 褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。

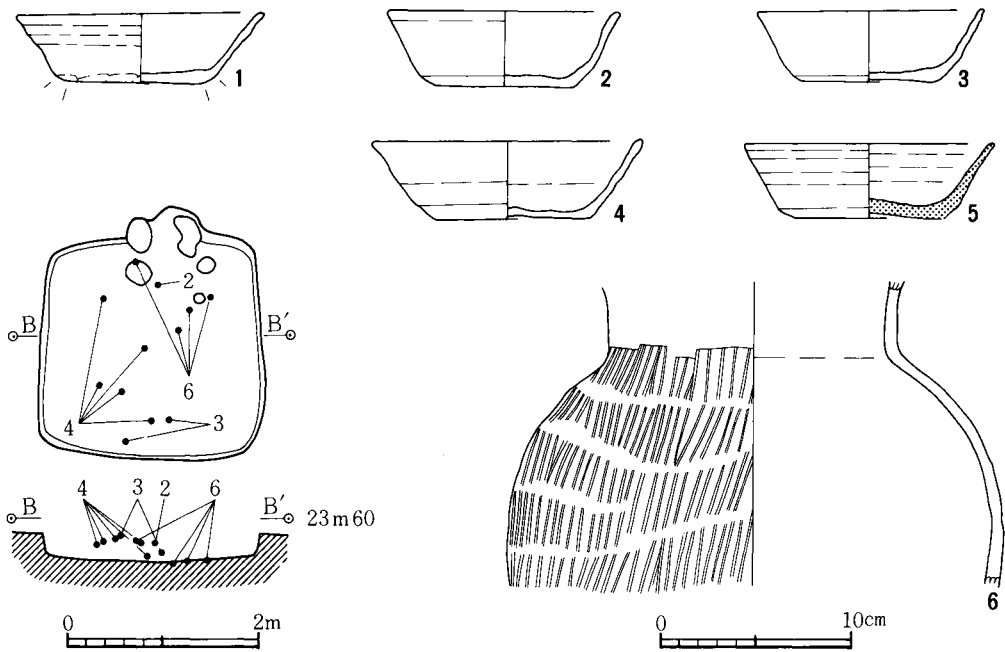
第75図 025号住居跡実測図 ($\frac{1}{40}$), カマド実測図 ($\frac{1}{40}$)

カマドは北壁の中央付近に設けられている。全体が壁から突き出したような形態をとっている。状況から見て、このカマドがどの程度の割合で残存しているのかは疑問だが、現状では、焚口幅30cm、火袋中央幅35cm、全長50cmである。東の袖と天井が崩れ、カマド内に流れている。

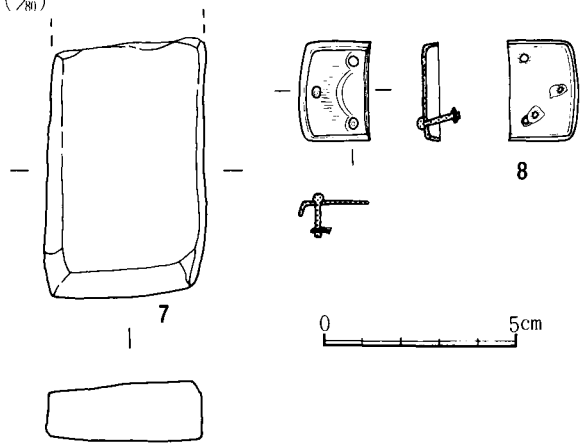
出土遺物は、1がくすべ焼成の坏である。外面体部下端から底部にかけて、手持ちヘラ削りが行なわれている。2・4は赤焼きの須恵器である。共に回転ヘラ切りの後に外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラ削りを施している。かなり硬質の焼成である。3はロクロ使用土師器坏である。底部外面は回転糸切り後無調整で、体部下端にのみ回転ヘラ削りがなされている。6はくすべ焼成の甕である。体部は外面平行叩き目、内面は押圧痕、頸部は内外面ヨコナデが見られる。7は砥石である。8は金胴製毛彫馬具である。全体に緑青が吹いているが、残りは良く、遺存する2本の鋌も完存で、裏金具の断片を付着させている。表・側面には鍍金が施されており、又、表面には弧線と短い直線を組み合わせた文様が刻まれている。規格は25×18×4.2mmで、板地の厚さは1.2mmである。

026号住居跡 (第78～82図)

遺跡のほぼ中央F2グリッドに位置する。015号掘立柱建物跡の南東部を破壊しており、又、M4・M5号跡の2本の溝によって切られているが、溝は浅いため、住居の壁まで達せず、壁の一部が破壊されているだけである。N-5°-Eに主軸をとり、規模は8.2×8.2mでほぼ正方形



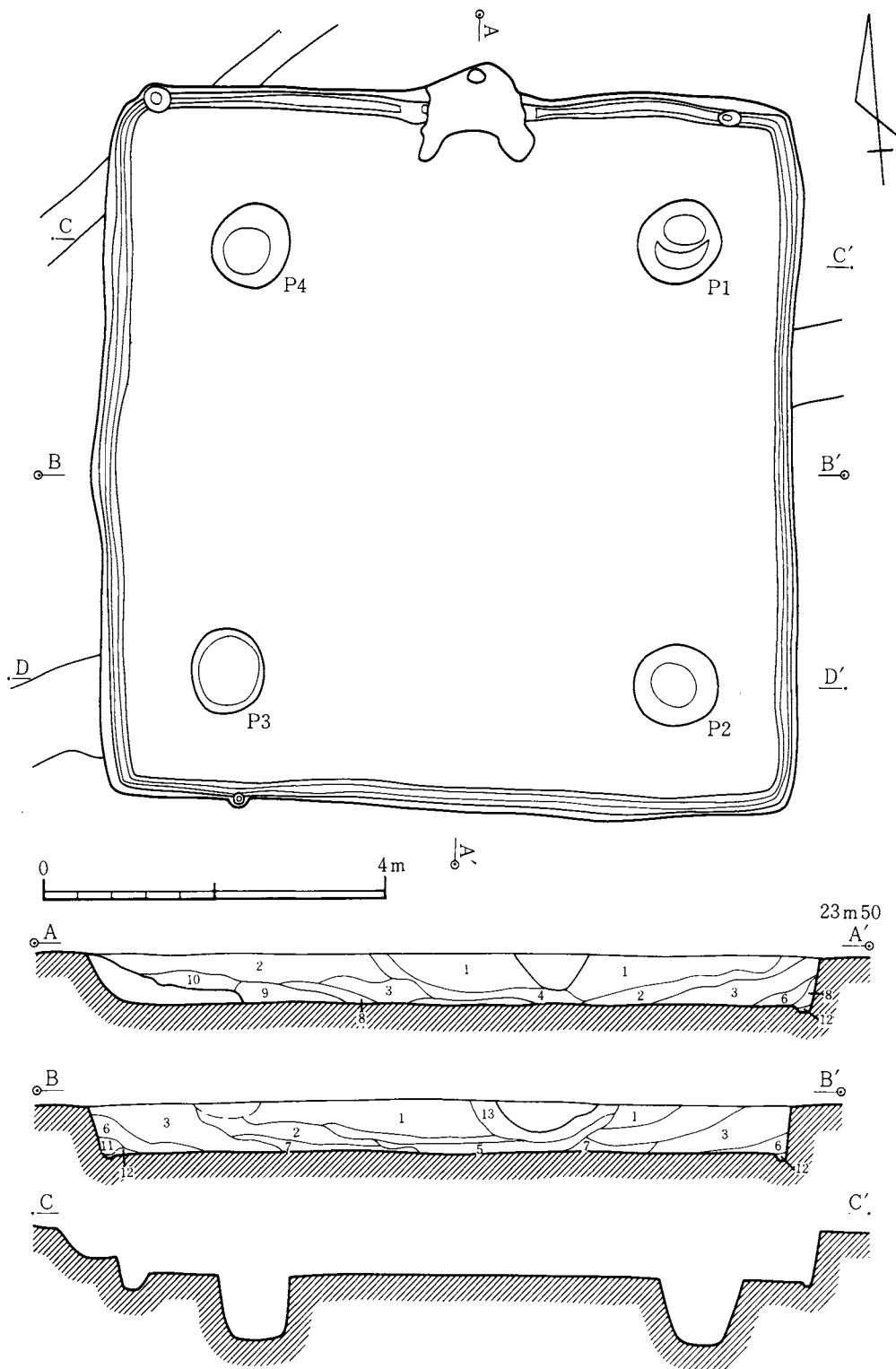
第76図 025号住居跡遺物出土状況図 (1/80)



第77図 025号住居跡出土遺物実測図 (1~6・1/4, 7~8・1/2)

に近い平面形を示す。本遺跡の中では大型に属する竪穴住居である。検出面からの掘り込みの深さは大体均一で60cm前後を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁下には幅20cm程度の壁溝が全周している。又、壁溝中には、北西隅、北壁東寄り、南壁西寄りの部分の3ヶ所に小さなピットがあり、恐らく壁柱穴と考えられる。それ以外には支柱穴と考えられる4本の柱穴が床面から検出されており、柱間5.2×5.2mの正方形に配されている。各柱穴とも径1m程度、深さ80cm程度と規格がきれいに揃っている。

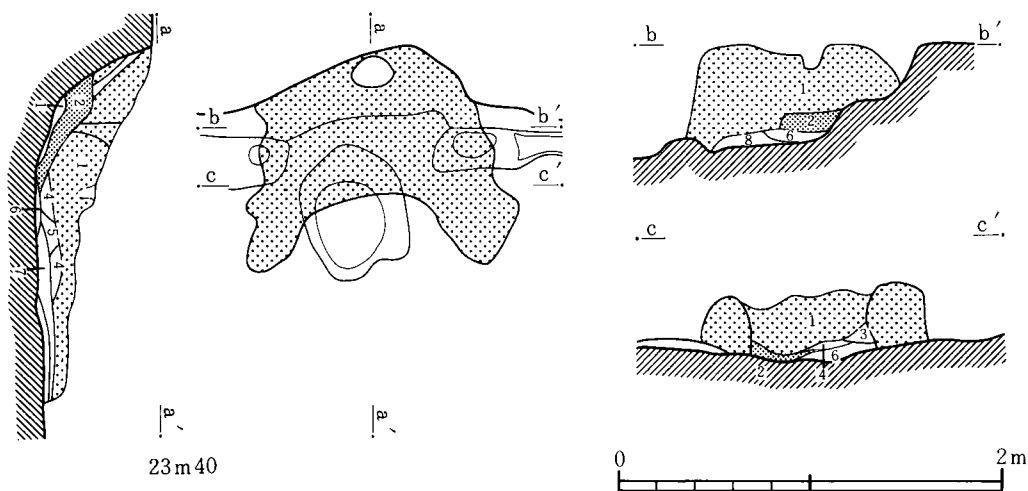
カマドは北壁中央に設けられている。本遺跡のカマドの中では遺存状況の良い部類のもので、全体に潰れてはいるが、煙出しの穴も確認出来た。焚口幅80cm、火袋中央幅65cm、全長185cmで



026号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|------------------|----------|------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒を多く、焼土を少し含む。 | 8. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を少し含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒を多く、粘土を少し含む。 | 9. 褐色土 | ローム粒・塊・焼土塊を少し含む。 |
| 3. 褐色土 | ローム塊を多く、焼土を少し含む。 | 10. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒を少し含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 11. 暗褐色土 | ローム塊を含む。 |
| 5. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒を少し含む。 | 12. 暗褐色土 | ローム塊(大)を含む。 |
| 6. 黒色土 | ローム塊を少し含む。 | 13. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒を少し含む。 |
| 7. 黒褐色土 | ローム粒・塊を少し含む。 | | |

第78図 026号住居跡実測図 (1/80)



026号住居跡カマド土層説明

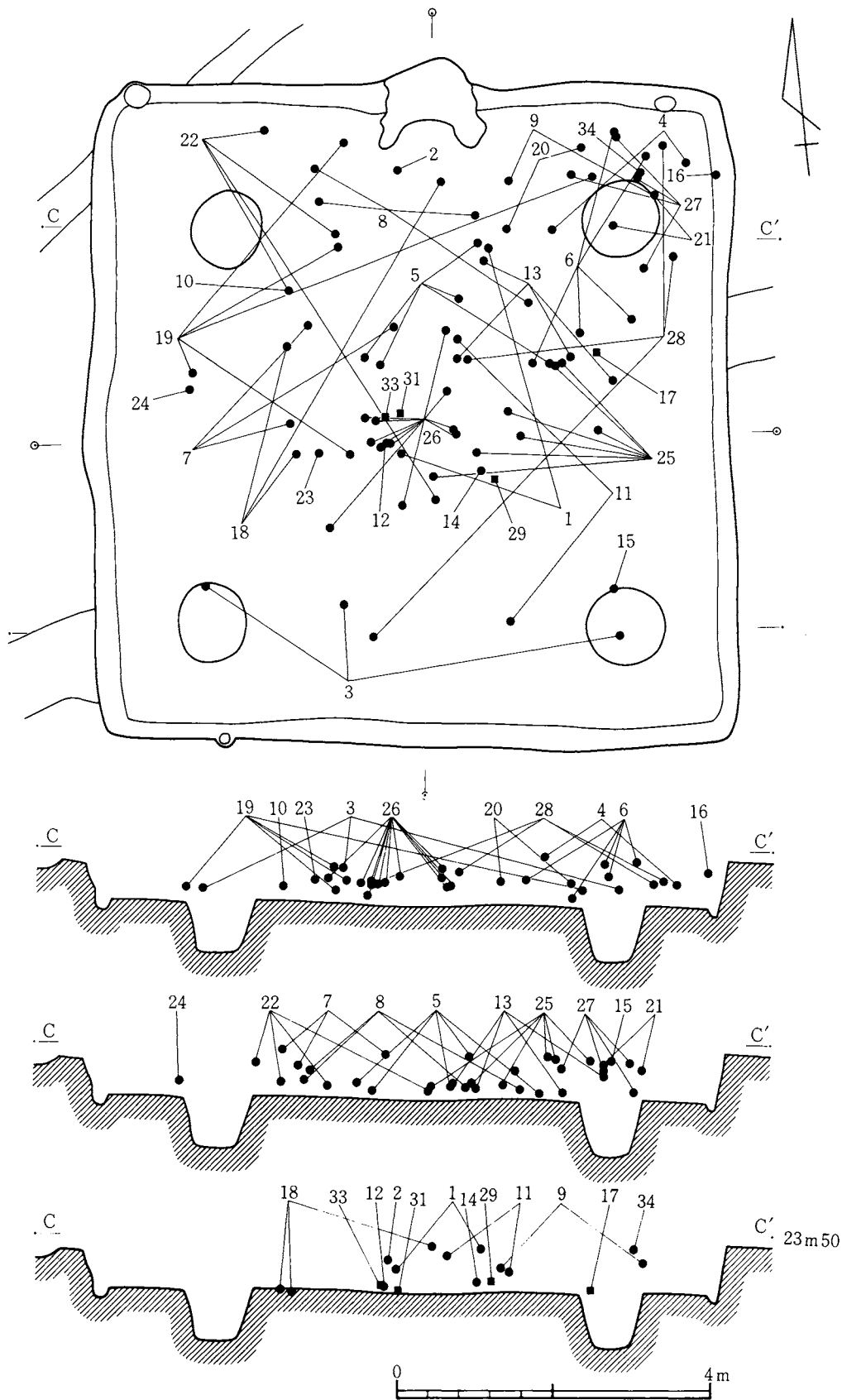
- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 山砂。 | 5. 灰褐色土 灰を多く含む。 |
| 2. 焼土。 | 6. 黒色土 ローム塊を多く含む。 |
| 3. 黒色土 ローム塊を多く含む。 | 7. 暗褐色土 山砂を多く含む。 |
| 4. 灰色土 灰を多く含む。 | |

第79図 026号住居跡カマド実測図(1/40)

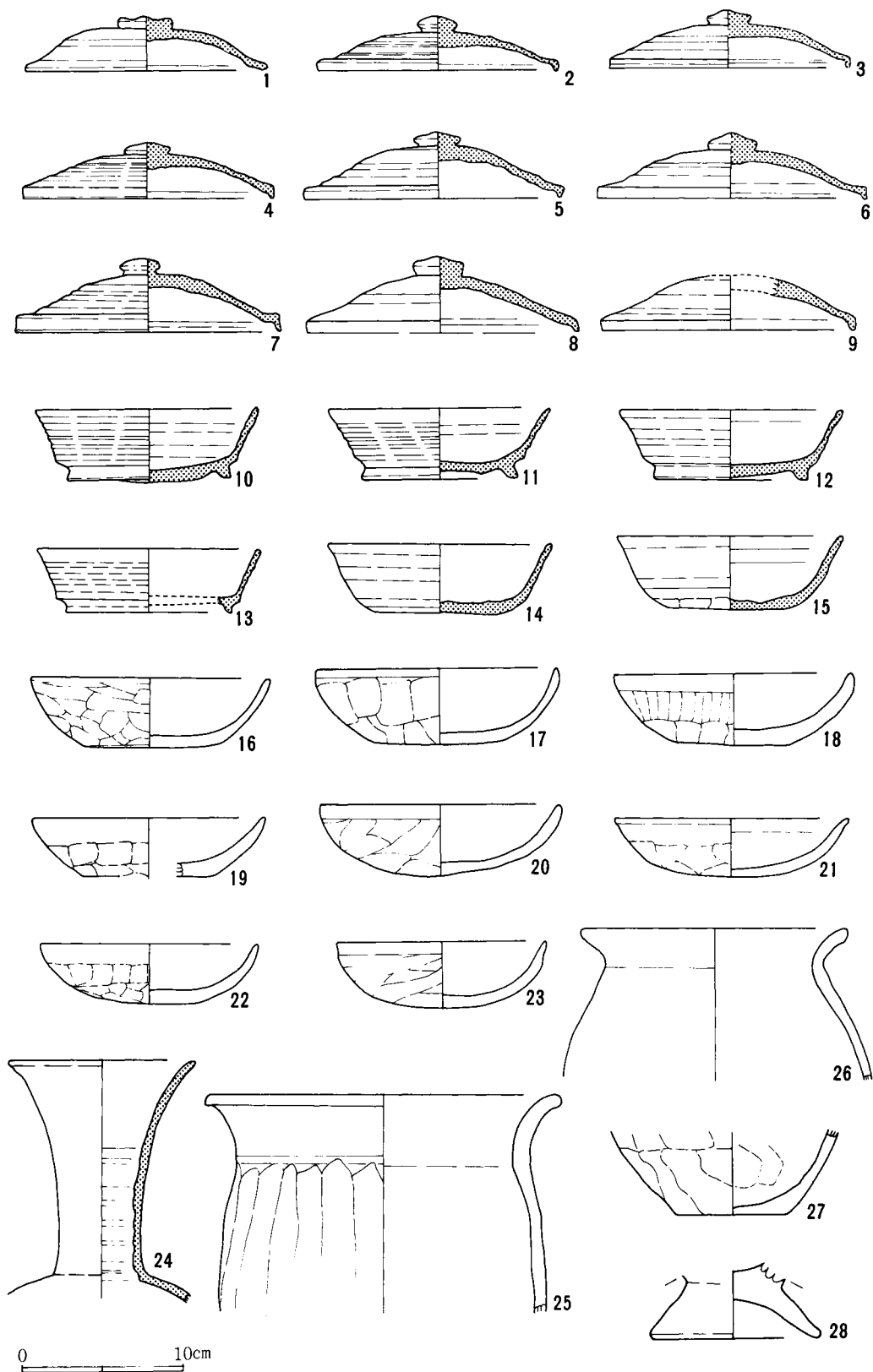
ある。両袖ともほぼ残っており、天井も崩落はしているが流出は少なそうである。天井部山砂崩落層の下には厚目の焼土層も見られる。壁から外へ向かって35cmほどカマド尻を突き出しており、カマド尻の先端には径22×15cmの煙出しの穴が見られた。

遺物出土状況を見ると、全体に床直というよりも、床から若干浮いた状態で検出された様子が見受けられる。

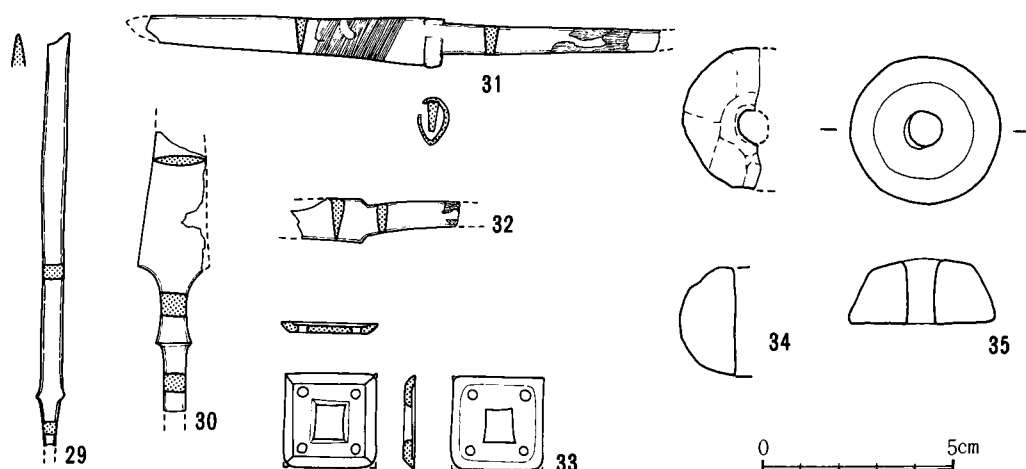
遺物は1～9が須恵器蓋である。1は、石英・雲母粒を多量に含む白っぽい焼きである。内面にはかえりの退化しきったものが残っている。外面上半は回転ヘラ削りの後につまみをつけている。2～9は全て内面のかえりが消失している。つまみの形状、身の高さなどに若干ばらつきが見られるが、調整技法は全て1と同じである。2～5は外面にかるい自然釉がかかっている。7・8は共に焼きがやや悪く、特に8は瓦質のものである。9はつまみ部欠を失っているが、恐らく他と同じ擬宝珠つまみである。10～13は須恵器の高台付坏である。底部外面には回転ヘラ削りを施し、周縁部のみ、高台貼り付け時のナデを受けて消えている。14・15は須恵器坏である。14は青灰色で石英を多く含んでいる。体部外面下端から底部にかけては回転ヘラ切り後に回転ヘラ削りが見える。15は1の胎土に酷似しており、焼成もやや悪い。底部は回転ヘラ切り後に、体部下端から底部にかけて、回転ヘラ削りが行なわれている。16～23は土師器坏である。全て口縁はユビナデ、外面は体部から底部にかけて手持ちヘラ削りが施されている。内面は16のみがユビナデ、他はヘラミガキがなされている。又、16～19は平底で、20～23は稜の



第80图 026号住居跡遺物出土状況図 (1/50)



第81图 026号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



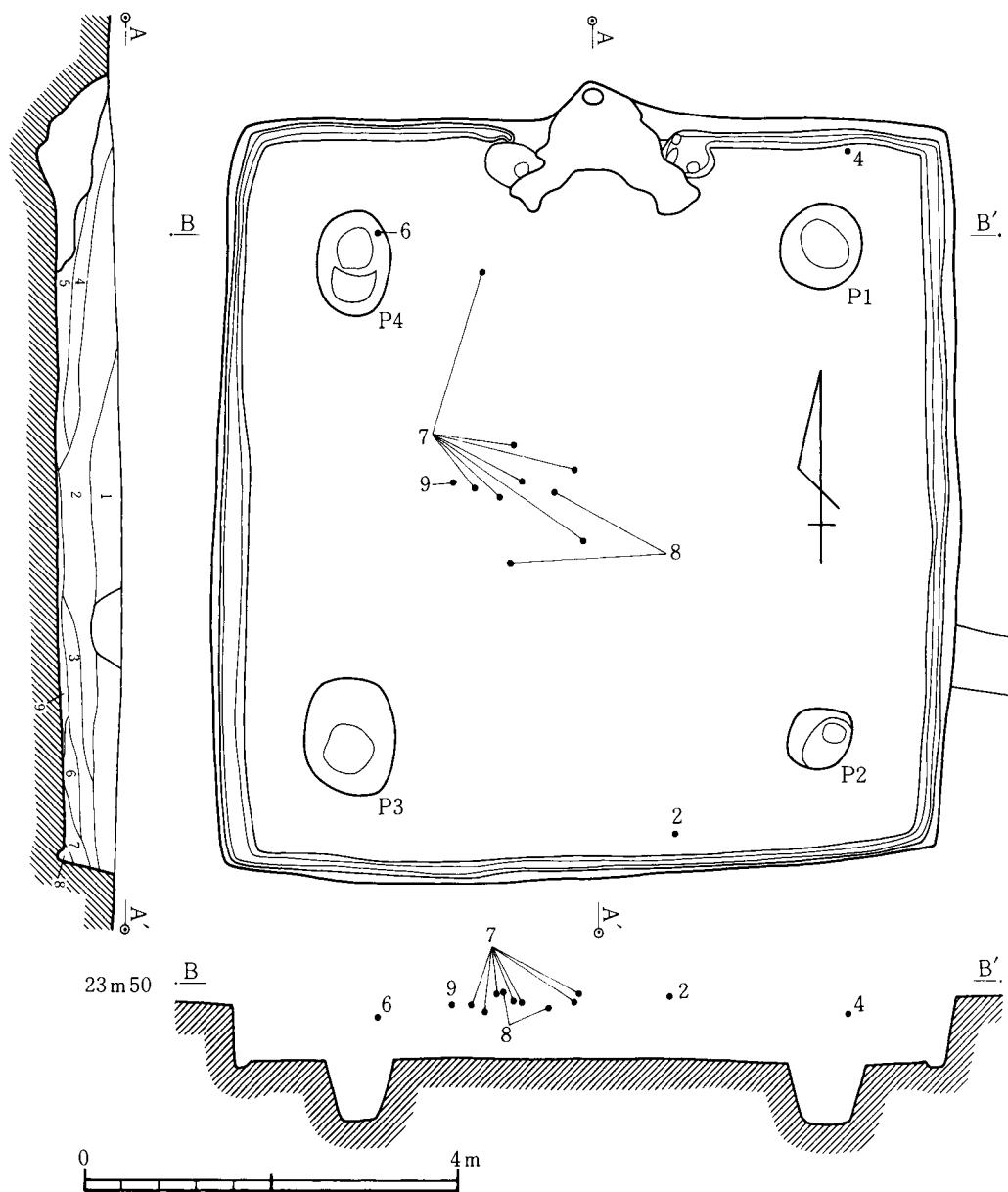
第82図 026号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

ない、丸味をもった底部である。24は須恵器長頸壺の頸部である。内・外面共に自然釉を受けている。25～27は土師器甕である。28は土師器台付甕の脚台部である。金属器は、29・30が鉄鏃である。29は先端を欠損しているように見えるが、そうではなく、片刃箭式である。30は菱形式に分類されるかと思われる。31・32は鉄製の刀子で、特に31は、鋤・及び茎に木質を遺存させており、更には刃部に木の表皮様の繊維が、巻くように付着していることから、木製の鞘のかわりに木の皮を巻いて刃を守ったものと考えられる。33は馬具の一つで、方形飾金具の裏座である。青銅製で、規格は24×24×2.5mm、板地の厚さは2.1mmである。中央に8×9mmの孔があげられ、四隅には鋌留めのための孔(径2mm)が穿たれている。34は土玉、35は滑石製紡錘車で、径は下端38.4mm、上端26mm、高さ16mm、孔径7mmである。

027号住居跡 (第83～85図)

026号住居跡の南東に隣接し、017号掘立柱建物跡と重複するが、先後関係を明瞭にすることはできなかった。真北に主軸をとり、規模は南北7.8～8.0m、東西7.7～8.0mで、ほぼ正方形の平面形を呈している。検出面からの掘り込みの深さは平均55cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には幅15cm平均の壁溝が全周している。床面には、4カ所にピットが確認された。5.2×5.2mの正方形の角々に配されており、本住居跡の主柱穴である。径は70～120cmでややばらつきが認められるが、深さは平均60cmで均一である。

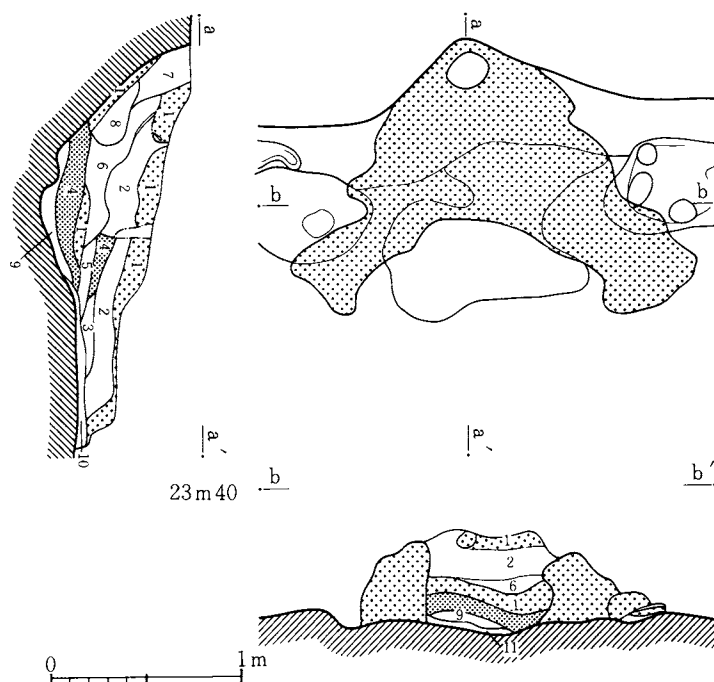
カマドは北壁ほぼ中央に設けられている。カマド両袖外側には柱穴があり、共に半分近くをカマド袖におおわれていたことから、カマド構築以前に据えられた、恐らくカマド上の棚状のものを支えた柱の穴かと考えられる。カマド自体は比較的遺存状況の良いもので、焚口幅130cm、火袋中央幅60cm、全長140cmであった。天井部は部分的に崩落しているが、大略残ってい



027号住居跡土層説明

- | | | |
|---------|---------|-----------------|
| 1. 黒色土 | 6. 黄褐色土 | ロームを多く、焼土を少し含む。 |
| 2. 黒色土 | 7. 黄褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 3. 褐色土 | 8. 黄色土 | ローム主体。 |
| 4. 暗褐色土 | 9. 黄褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 5. 黄褐色土 | | ローム粒・山砂を多く含む。 |

第83図 027号住居跡実測図 (1/100)



027号住居跡カマド土層説明

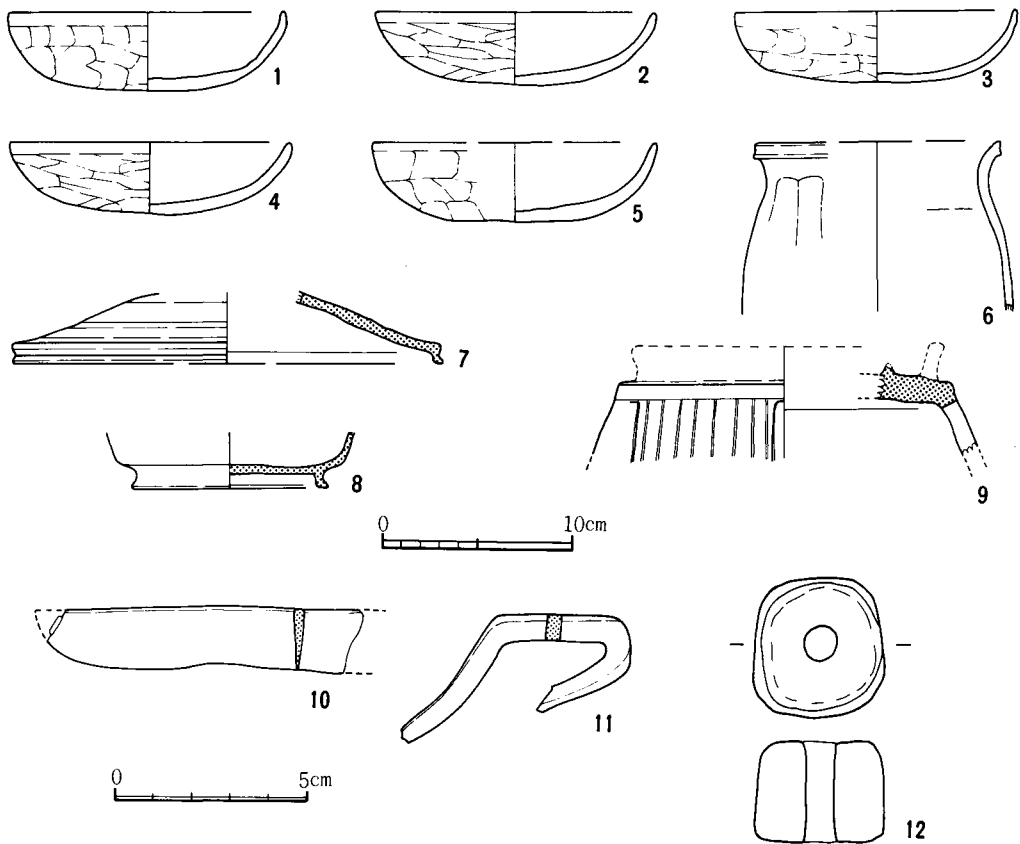
- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 山砂。 | 7. 暗褐色土 山砂を多く含む。 |
| 2. 暗褐色土 ローム粒・焼土・炭化物を含む。 | 8. 暗褐色土 2に準ずる。 |
| 3. 黄褐色土 焼土・山砂を含む。 | 9. 暗褐色土 ローム粒・炭化物を少し含む。 |
| 4. 焼土。 | 10. 黒色土 ローム粒を少し含む。 |
| 5. 暗褐色土 山砂を含む。 | 11. 黒色土 山砂を多く含む。 |
| 6. 灰黄色土 山砂が被熱して変色している。 | |

第84図 027号住居跡カマド実測図 (1/40)

た。火床面には厚い焼土の層も確認された。カマド尻は壁から外に向けて40cmほど突き出されており、その先端には20×30cm径の煙出しの穴が検出された。

遺物の出土状況を見ると、その大半が床面より、著しく浮いた状況で確認されたことが判る。

遺物は1～5が土師器坏である。口縁はヨコユビナデ、外面は手持ちヘラ削り、内面はヘラミガキで底部は平底でなく丸味を持つ、というように全て同一の技法で製作されている。6は小型で細身の土師器甕である。7は須恵器蓋である。8は須恵器高台付坏である。胎土中にはほとんど混和物はない。底部外面には中心に“大”の字のヘラ刻みがあるが、9は陶硯で、有堤圈足円面硯とされるものである。脚端部、硯面等の欠失した小片であるが、復元すると、脚は下方に向けて裾をやや広げ、縦長長方形の透しを6ヵ所に等間隔に配する。透しと透しの間には8本のヘラ描きの縦線が刻まれている。硯部は、硯面全体が平坦で、周囲にU字形の溝を巡らせ海部とし、更に陸部周縁に低い内堤を設けて海陸をより明確にしたものとして復元されよう。胎土中には鉄分がやや多目に見られる。又、裏面全体には厚い自然釉が、表全体にも、う

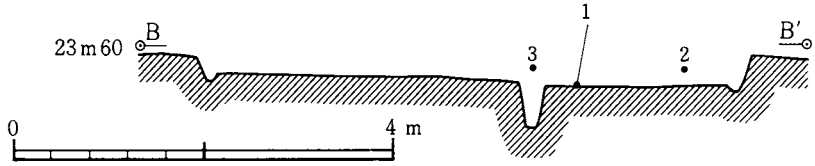
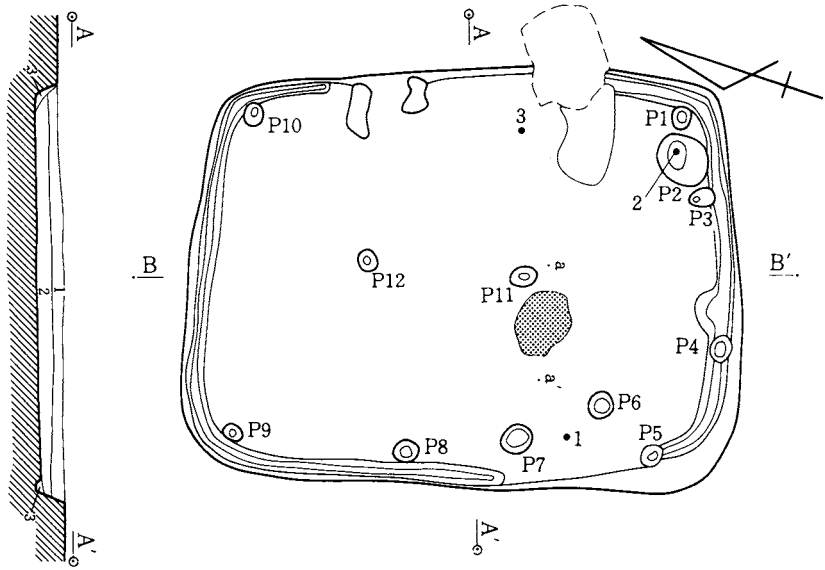


第85図 027号住居跡出土遺物実測図（1～9・ $\frac{1}{4}$ ，10～12・ $\frac{1}{2}$ ）

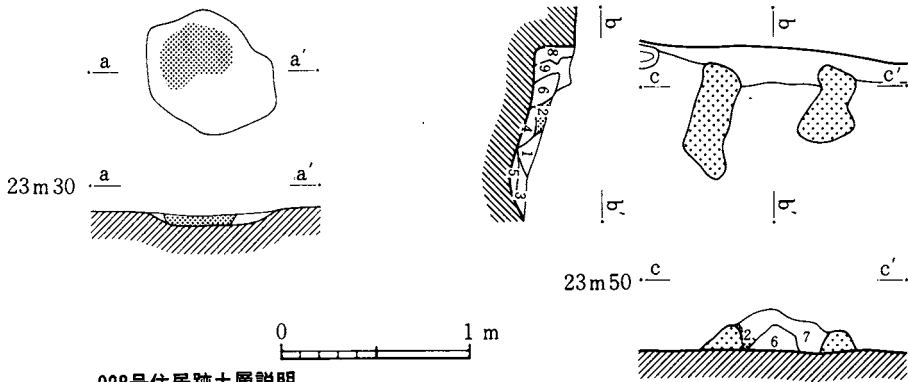
っすらと自然釉がのっている。金属器は10が鉄製刀子で刃部中央は研ぎ減りしている。11は鉄製の鋏で、歪みは破断面の状態から見て後世のものである。12は石製紡錘車である。

028号住居跡（第86～88図）

G 2 グリッドにあり、027号住居跡に東隣する。N-70°-Eに主軸をとり、本遺跡の中では、他のものと主軸方位を著しく異にする住居である。規模は東西5.2～5.8m，南北4～4.4mで、やや形の乱れた隅丸長方形の平面形態を示す。東壁やや南寄りの所に後世の攪乱があり、壁と床の一部が破壊されている。壁はやや緩やかに起ち上がり、壁下には、東壁・西壁の一部を除いて壁溝が巡っている。幅は15cm程度で、全体にダレている。床面には、全部で12の小さなピットが検出された。中央のP₁₁・P₁₂が径25cmと細いが、深さが50cmほどあることから、主柱で、四隅のP₁・P₅・P₉・P₁₀が補助的支柱であったらうと考えられる。他のP₂・P₃・P₆・P₇・P₈については壁柱穴その他として考えたい。いづれにしても、四本主柱式の上屋構造でないこ



第86図 028号住居跡実測図 (1/50)



028号住居跡土層説明

1. 褐色土 ローム粒を少し含む。
2. 褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 褐色土 ローム塊を少し含む。

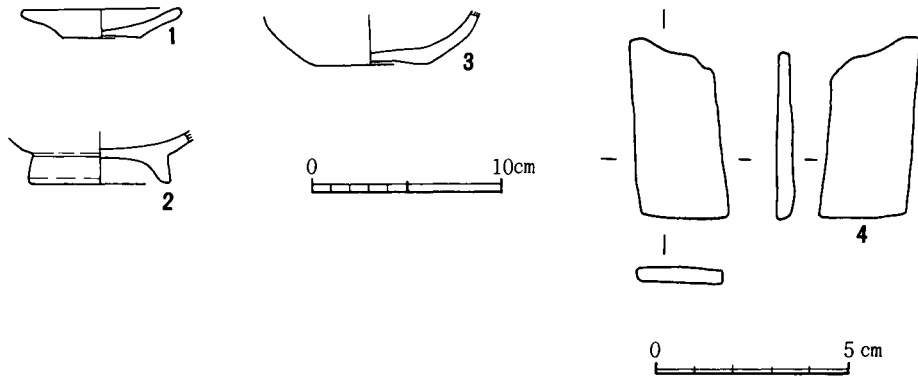
028号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土、焼土を少し含む。
2. 焼土
3. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
4. 3に準ずる。
5. 赤褐色土 焼けたローム塊を含む。
6. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
7. 粘質土。
8. 黄褐色土 ロームを含む。

第87図 028号住居跡カマド実測図 (1/40)

とは確かであろう。P₉・P₇・P₁₁に囲まれた所には炉が切られている。掘り方は80~55cm、深さ10cm弱の貧弱なもので、28×38×8cmの焼土の存在が確認された。

カマドは東壁、やや北寄りの部分に設けられているが、遺存状態は悪く、山砂と焼土を検出



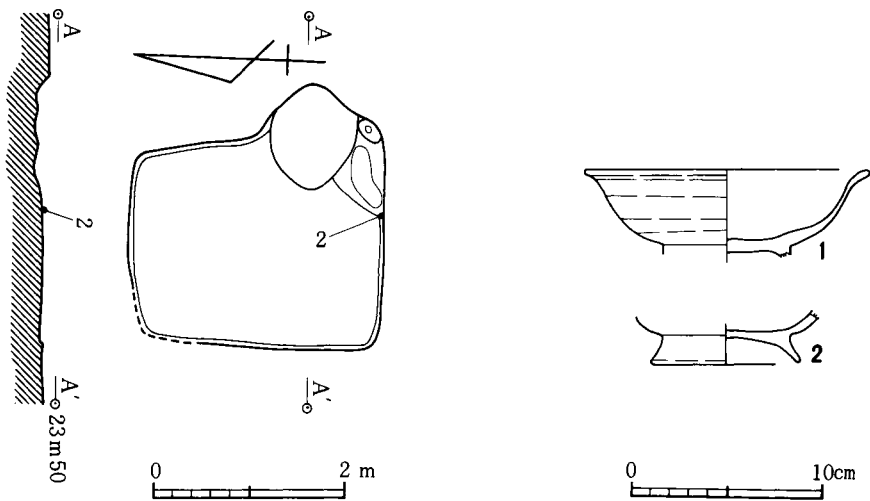
第88図 028号住居跡出土遺物実測図(1~3・ $\frac{1}{4}$ ・4・ $\frac{1}{2}$)

し、その袖の形態が辛うじて判明した程度であった。

出土遺物は1がかわらけで、口径8.5、器高1.5cmを測り、底部外面は静止糸切り後無調整である。色調は灰褐色で、胎土は石英多目で粗く、焼成は良い。2はロクロ使用土師器の高台付坏である。胎土は1に酷似している。3はロクロ使用土師器坏で、底部外面は回転糸切り後無調整である。4は砥石である。

029号住居跡 (第89図)

G 2 グリッドにあり、027号・028号住居の中間に南隣する。N-90°-Eに主軸をとり、規模は東西1.0、南北1.5mで、かなり形の崩れた長方形を示している。確認面からの掘り込みの深さ



第89図 029号住居跡実測図($\frac{1}{80}$)・出土遺物実測図($\frac{1}{4}$)

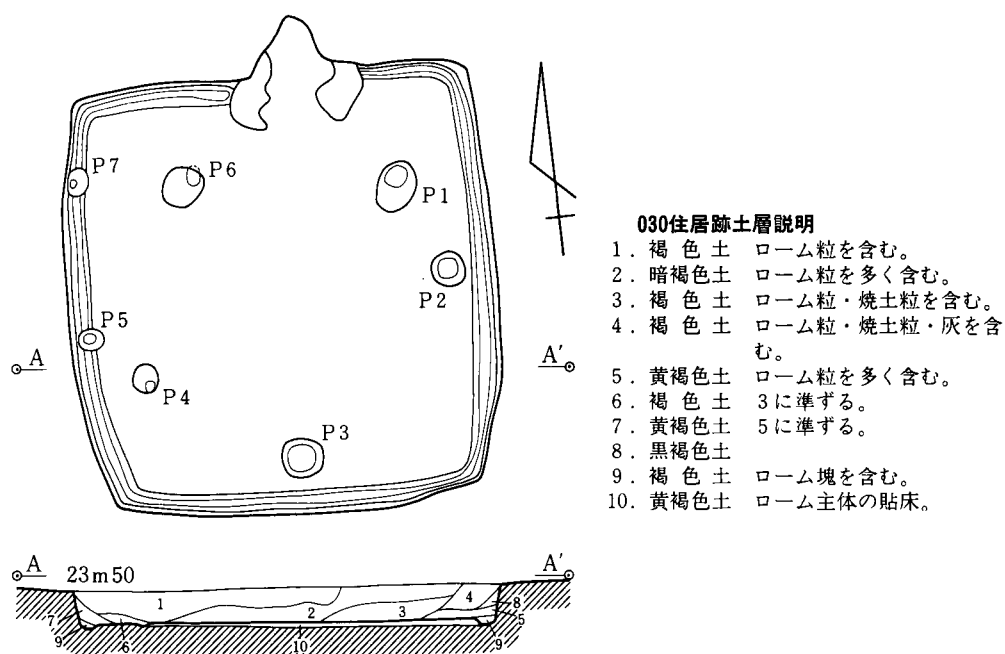
は非常に浅く、5cm程度しかない。壁溝は巡っておらず、支柱穴と考えられるものも確認されていない。東壁南端にカマドらしい痕跡はあるが、山砂等の残存も殆どなく、かつての形状を復元するのは全く不可能であるが、掘り方から見て、壁から外に向けて、カマド尻をかなり突き出す形態であったろうことは想像される。又、東南隅壁には小さなピットがあり、更にそれを囲むかのように浅いくぼみがあるが、共に性格不明である。

出土遺物は2個体ともロクロ使用土師器の高台付碗である。共に焼成は良い。1は高台部を欠失している。2は内面は黒色でミガキが施されている。

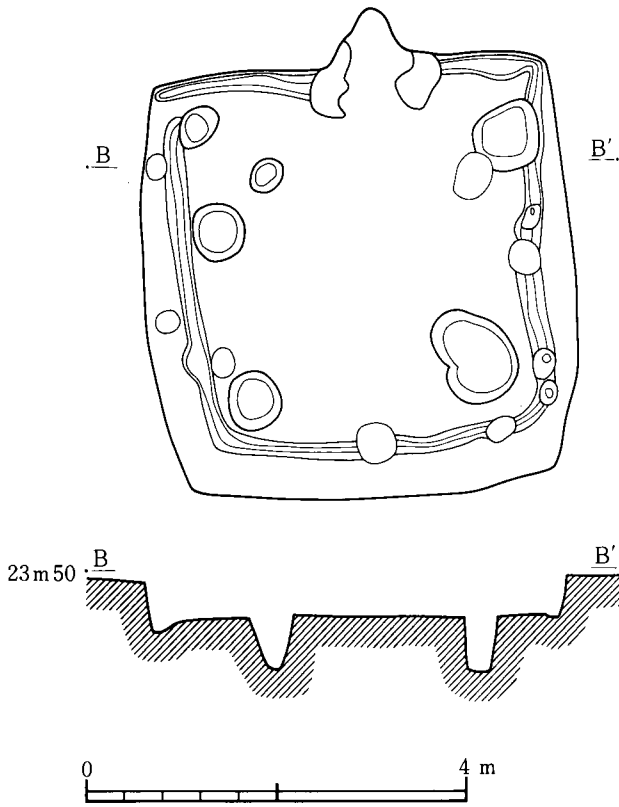
030号住居跡 (第90～95図)

E1・F1グリッドにまたがって検出された。真北に主軸をとり、東西4.3m、南北4.5mで、南壁に向かってややすぼむ長方形の平面プランを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には幅20～30cmの壁溝が全周する。検出面からの掘り込みの深さは40cm程度である。床面からは7カ所にピットが検出されたが、その配置の滅茶苦茶なことから、貼り床をはずし、掘り方面まで掘り下げたところ、壁溝は北壁を同一にし、他の3壁はやや内側に検出され、又、新たに9カ所にピットが検出された。これによって、本住居は、一度拡張を受けていたことが判った。しかし、支柱の配置は古期のもの、新期のもの何れを見ても、規則的な配置とは言えない。

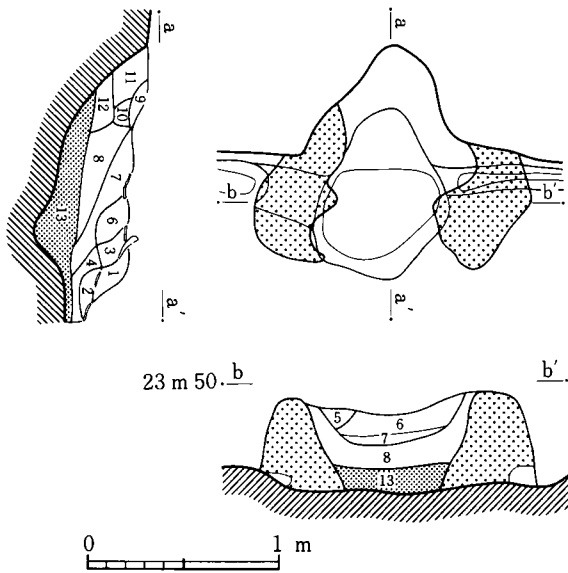
カマドは北壁中央からやや東寄りのところに設置されている。焚口幅70cm、火袋中央幅50cm、全長120cm。壁から外に向けて50cmほどカマド尻を突き出す。天井部は崩落し、完全に流出して



第90図 030号住居跡実測図 (1/60)



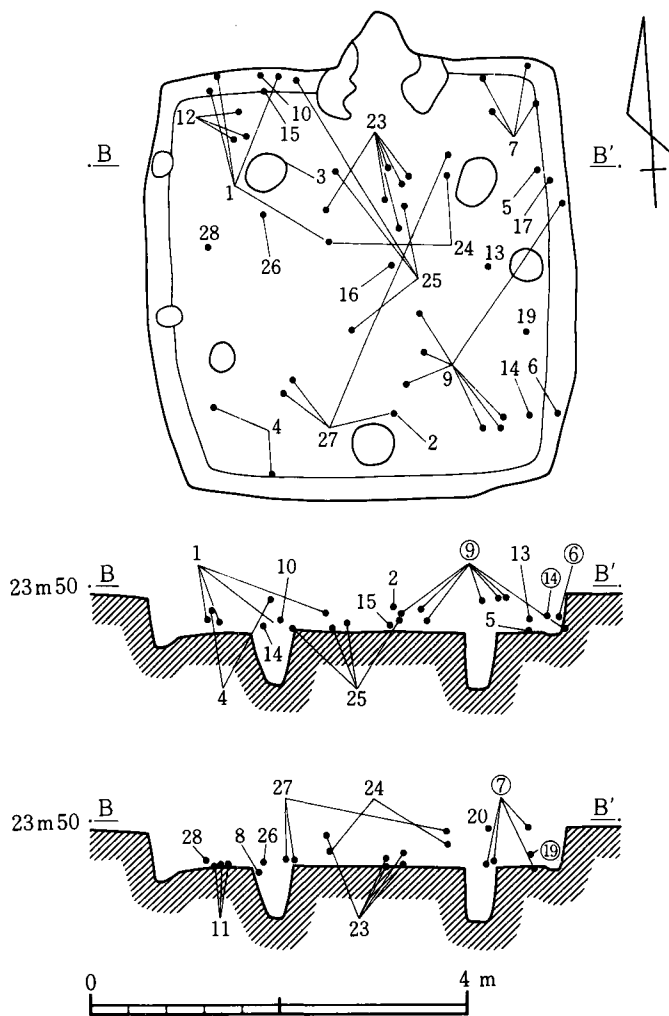
第91図 030号住居跡掘り方実測図 (1/80)



030号住居跡カマド土層説明

- 1. 褐色土 焼土粒を多く含む。
- 2. 褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む。
- 3. 黒色土
- 4. 黒色土 焼土粒を含む。
- 5. 褐色土 1に準ずる。
- 6. 灰褐色土 粘土を多く含む。
- 7. 黒褐色土
- 8. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
- 9. 褐色土 焼土粒を含む。
- 10. 黒褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 11. 黄褐色土 焼土粒・ローム粒を少し含む。
- 12. 黄褐色土 焼土粒を多く含む。
- 13. 焼土。

第92図 030号住居跡カマド実測図 (1/40)

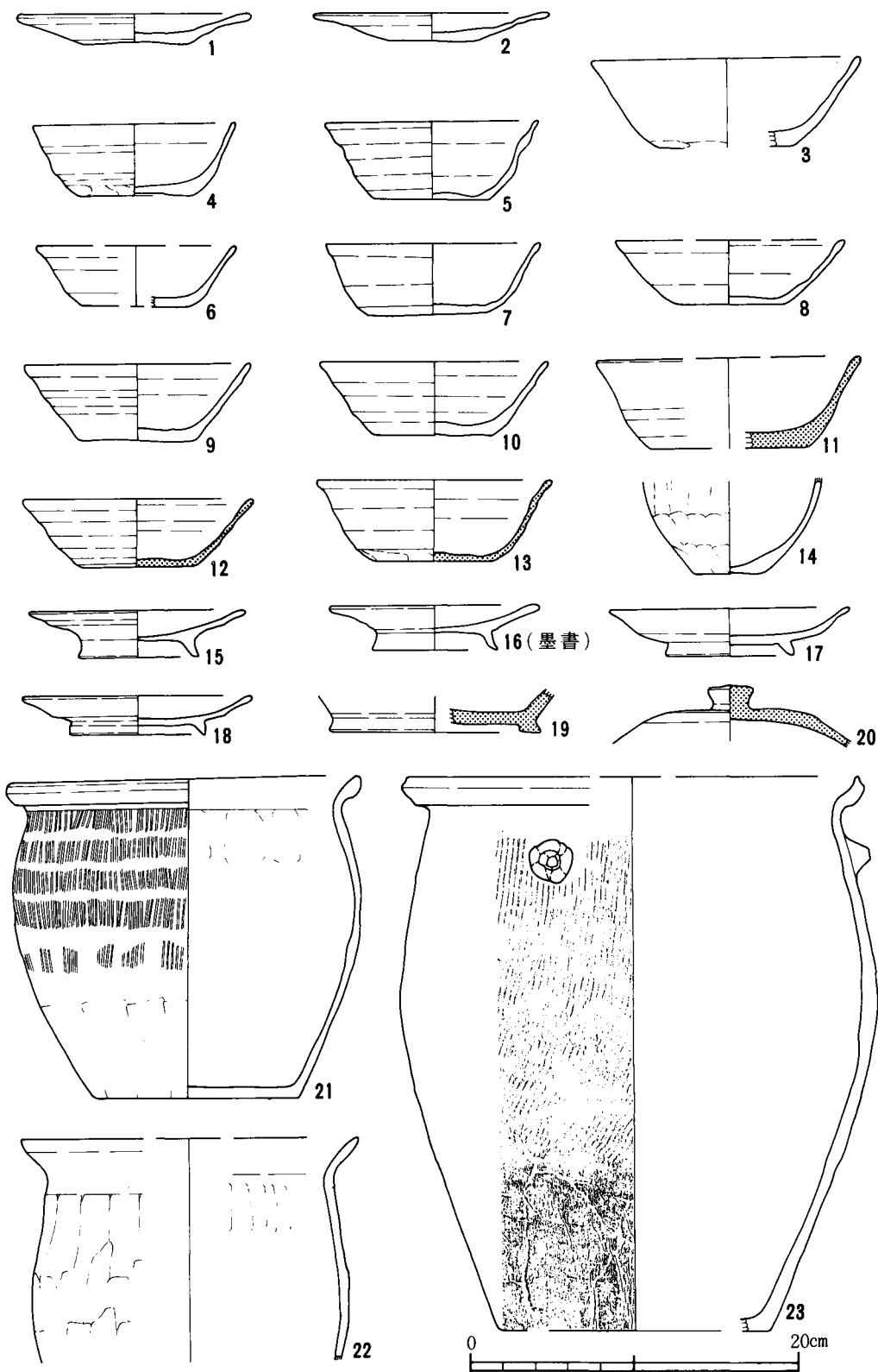


第93図 030号住居跡遺物出土状況図 (1/50)

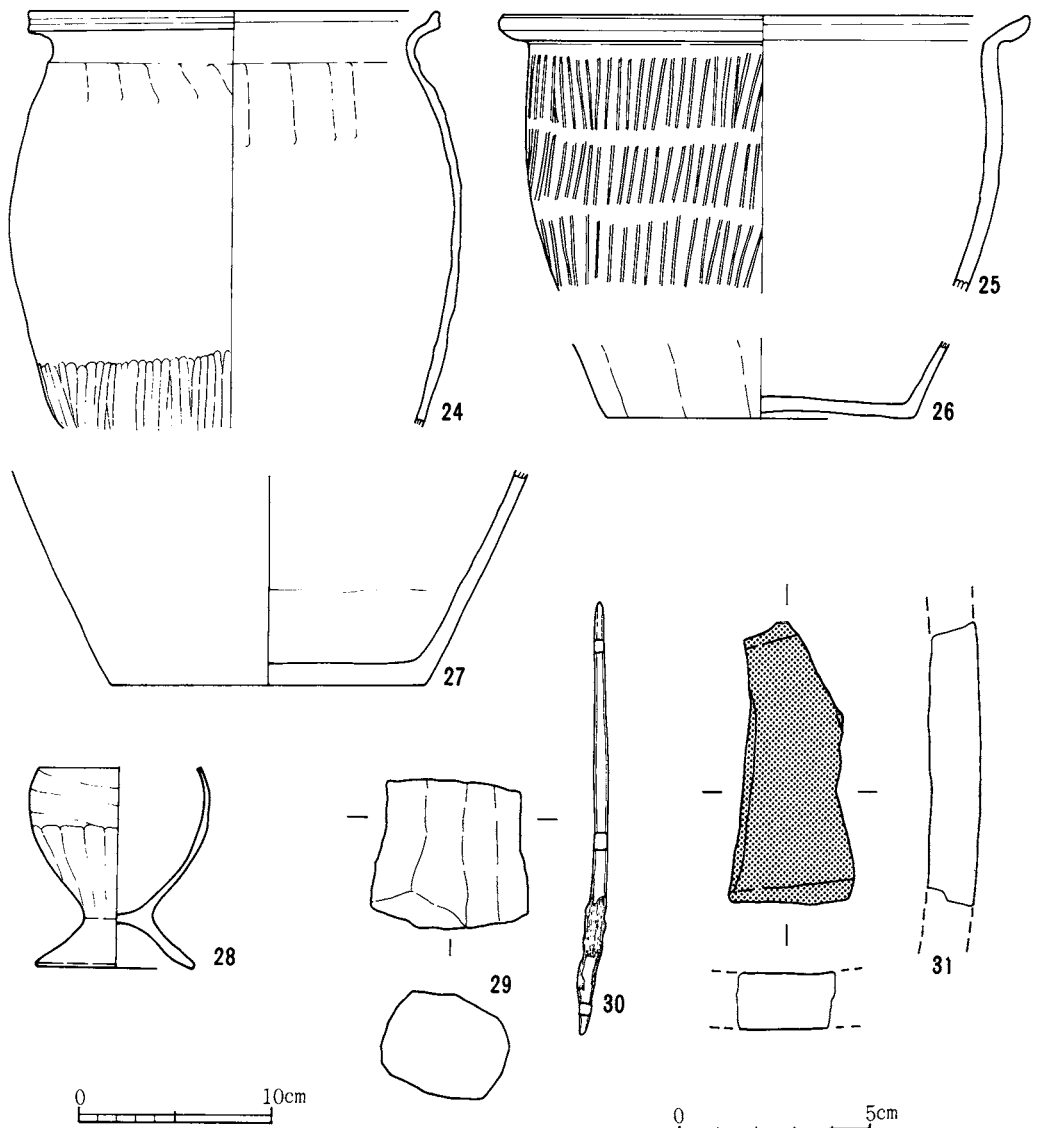
しまっているが、袖の遺存状態は良好である。又、火床には厚く広い面積のしっかりした焼土層が見られた。袖の下にも壁溝の巡っていることから、カマドも住居拡張の際に築造し直されたものと考えられる。

遺物の出土状況を見ると、住居全体から、しかも床面直上で検出されているものが多いことが判る。

出土遺物は1・2がロクロ使用土師器皿である。外面体部下端から底部にかけて、手持ちヘラ削りが施されている。3～7は土師器坏である。全てロクロ使用である。3は底部外面に回転糸切り痕が見え、その周縁と体部下端は手持ちヘラ削りで整えられている。内面はミガキが施されている。4～7は、外面体部下端から底面にかけて回転ヘラ削りが施されている。8は赤焼き須恵器、9・10はくすべ焼成である。8は外面体部下端から底部にかけて手持ちヘラ削り、9・10は回転ヘラ削りがなされている。11～13は須恵器坏である。外面体部下方から底部



第94図 030号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第95図 030号住居跡出土遺物実測図(2) (24~28・ $\frac{1}{4}$, 29~31・ $\frac{1}{2}$)

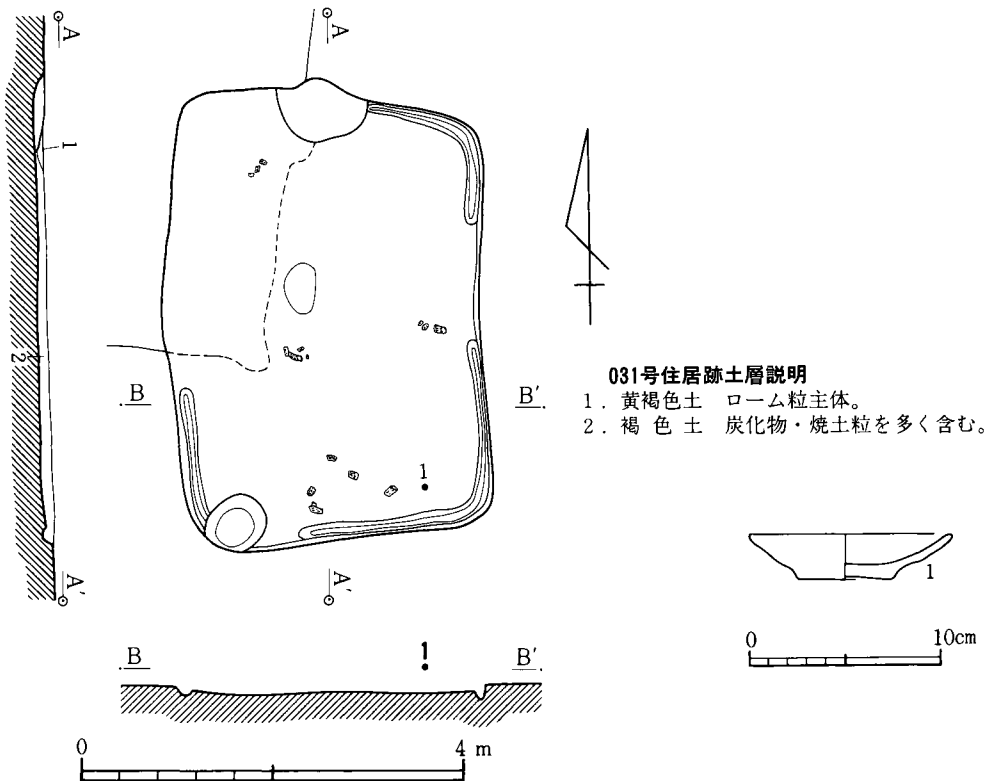
にかけては、手持ちヘラ削りで整えられている。14は土師器の小型甕である。15・16はロクロ使用の土師器高台付皿である。16は底部外面に墨書がある(後述)。17・18はくすべ焼成の高台付皿である。19は須恵器高台付坏, 20は須恵器蓋である。21はくすべ焼成の甕である。外面は平行叩き目, 下半は横位ヘラ削り, 内面はヘラによるナデと指によるナデが施され, 口縁はナデで整えられている。22は土師器甕である。23はくすべ焼成の甗で, 底面は中央に円, 四周に半円を穿ったものと考えられる。口縁のやや下に小さな突起を持つ。調整は21と同じである。24は土師器甕である。外面体部下半は縦位のヘラミガキの施される, いわゆる下野型である。25~27はくすべ焼成である。28は土師器の小型台付甕である。29は土製支脚。30は鉄錐かと考え

られる。下方には木質が付着・遺存している。31は須恵器転用品で、外面には自然釉がのり、内面には墨がうっすらと残っている。

031号住居跡 (第96図)

F 1 グリッドに位置し、033号住居跡と一部重複している。033号住居跡が深く掘り込まれているのに対し、031号住居の掘り込みが異常に浅いことなどから、土層断面での観察がむずかしく、又、031号住居跡の床面が脆弱であったために、やむを得ず031号住居跡が033号住居跡によって破壊されていると仮定して発掘したが、検出された土器、並びに住居の形態から見て、031号住居跡が033号住居跡を破壊しているという結果を得た。従って、031号住居跡に関しては、その北西部を調査の段階で壊してしまったことになる。そのため、住居北西部の壁は復元(推定)線である。

主軸をほぼ真北にとり、南北4.4m、東西3.3mの隅丸長方形を示す(と考えられる)。検出面からの掘り込みの深さは10cm弱しかなく、非常に残りが悪い。壁溝は間断をおきながらも、一応四方に巡らされていたようである。ピットは南西隅に1ヵ所検出されたが、柱穴となり得る



第96図 031号住居跡実測図(1/80)・出土遺物実測図(1/4)

ものかどうか判らない。又、床面に炭化材が散っているが焼土層の堆積などの見られないことから、火災住居とは思われない。恐らく住居廃絶時、又は廃絶後のものである。

カマドは辛うじて痕跡を見出した程度で、山砂の遺存もほとんど無く、原形を復元するのは無理である。

遺物は1点のみである。ロクロ使用の土師器皿で、ほとんどかわらけに近い。底部は回転糸切り後無調整である。出土状況は余り良好ではなく、床面からはかなり浮いた状況で検出されている。

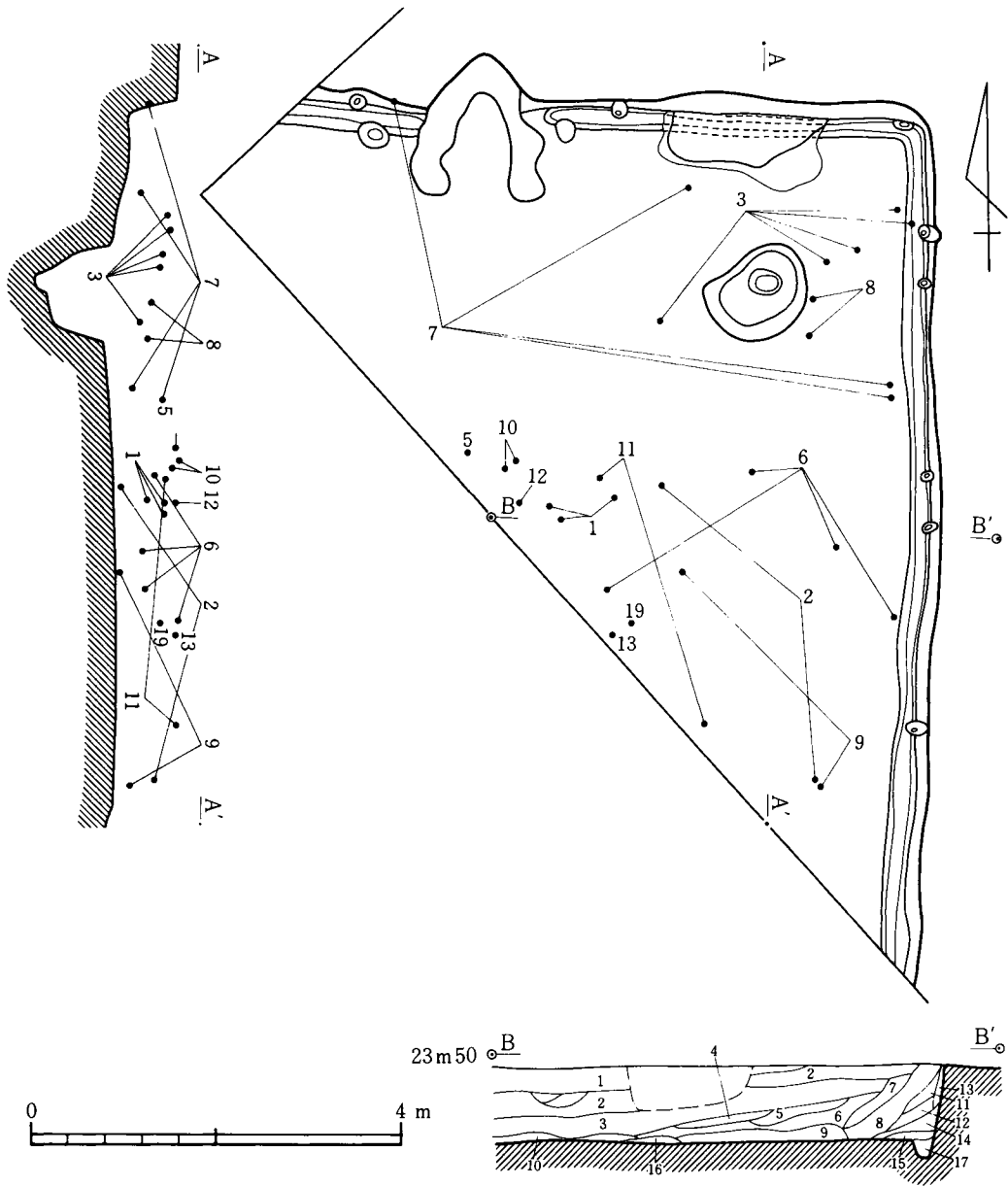
032号住居跡（第97～99図）

G3グリッドに位置し、住居の三分の二は調査区域外のため調査できなかった。主軸はほぼ真北にとられている。規模は正確には復元できないが、カマドが北壁の中央に設置され、且つ正方形であると仮定すれば、9.7m×9.7mの大形住居ということになる。しかし、柱穴配置を考えた場合、南東柱穴が検出されていないこと、東壁が現状で9.4m確認されていることなどから、実質は、南北は10mを越える可能性が強くなる。検出面からの掘り込みの深さは80cm平均で、これも本遺跡では深い方である。壁下には幅30～40cmの壁溝が巡っている。北壁・東壁それぞれの壁溝の中に、径10～20cmの小さなピットが見受けられ、壁柱穴であろうと考える。床面には、北東の主柱穴だけが、一本検出されている。110×90cm、深さ80cmのしっかりした柱穴である。

カマドは天井部が崩落・流失してしまっているが、全体としては、残り具合の良い方である。焚口幅65cm、火袋中央幅60cm、全長165cmで、大形である。高さも90cm近く残っている。火床付近や覆土中層に、かなり厚い焼土の堆積が見られる。又、壁から外に向けて60cmほどカマド尻を突き出している。

遺物の出土状況は、確認された範囲内全域で検出されるが、全体に床面直上の遺物は少なく、浮いた状態のものが多い。

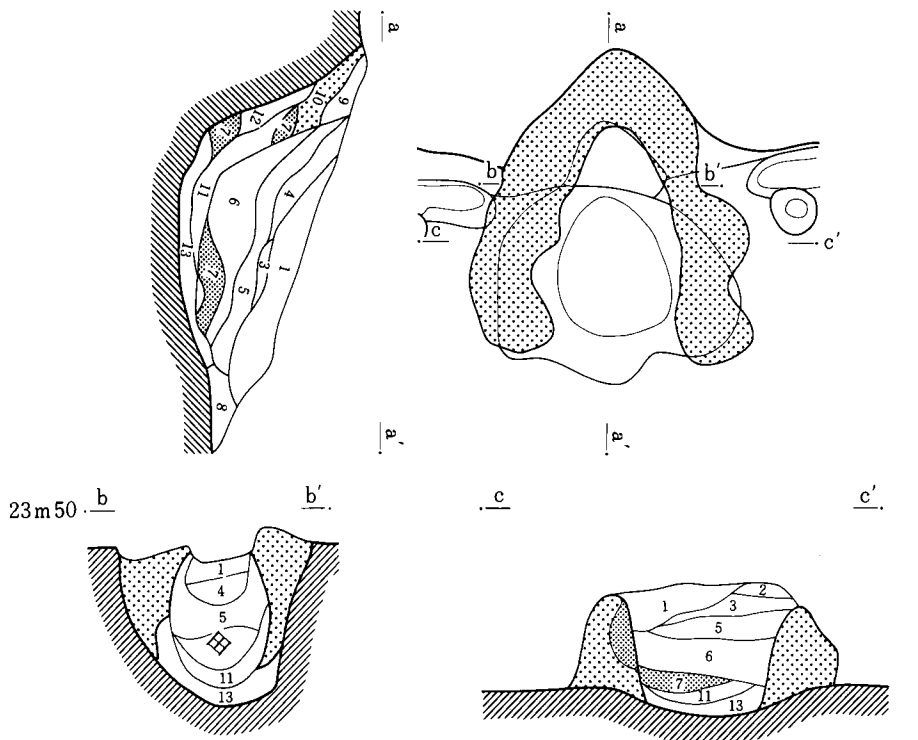
遺物は1～4が土師器坏である。1は須恵器蓋模倣坏で、内面は丁寧なヘラミガキ、外面体部はヨコナデ、底部は手持ちヘラ削りが施されている。2～4は、内面ヘラミガキ、外面口縁はヨコナデ、それ以下は手持ちヘラ削りの同一技法で調整されている。5・6は土師器盤である。5は内面ヘラミガキ、外面体部ヨコナデ、底部手持ちヘラ削り、6は底部外面以外はヘラミガキが施されている。7～9は須恵器蓋である。9は口縁を欠失しているが、恐らく7・8同様口縁内面にかえりを持たないものであろう。全て擬宝珠つまみを持つが、やや扁平で、8は特に扁平である。外面上部の平坦部は回転ヘラ削りを受けており、口縁端部は下方に直に折られている。10～13は須恵器坏である。10は外面底部、及び体部下端に回転ヘラ削り、11は底部外面に回転ヘラ切り痕が強く残っている。12・13は外面体部下方から底部にかけて手持ちへ



032号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|------------------|----------|------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 9. 褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 2. 褐色土 | ローム粒・塊を含む。 | 10. 黄褐色土 | ローム粒主体。 |
| 3. 褐色土 | ローム粒・塊を多く含む。 | 11. 黒褐色土 | 混和物なし。 |
| 4. 黒色土 | 混和物なし。 | 12. 褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 5. 褐色土 | ローム粒・焼土粒を多く含む。 | 13. 褐色土 | 10に準ずる。 |
| 6. 褐色土 | ロームを少し、焼土粒を多く含む。 | 14. 黒褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 7. 褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 | 15. 黄褐色土 | ローム塊を含む。 |
| 8. 黒褐色土 | ローム粒を少し含む。 | 16. 黄褐色土 | 10に準ずる。 |
| | | 17. 黄褐色土 | ローム塊を多く含む。 |

第97図 032号住居跡実測図・遺物出土状況図 (1/50)



032号住居跡カマド土層説明

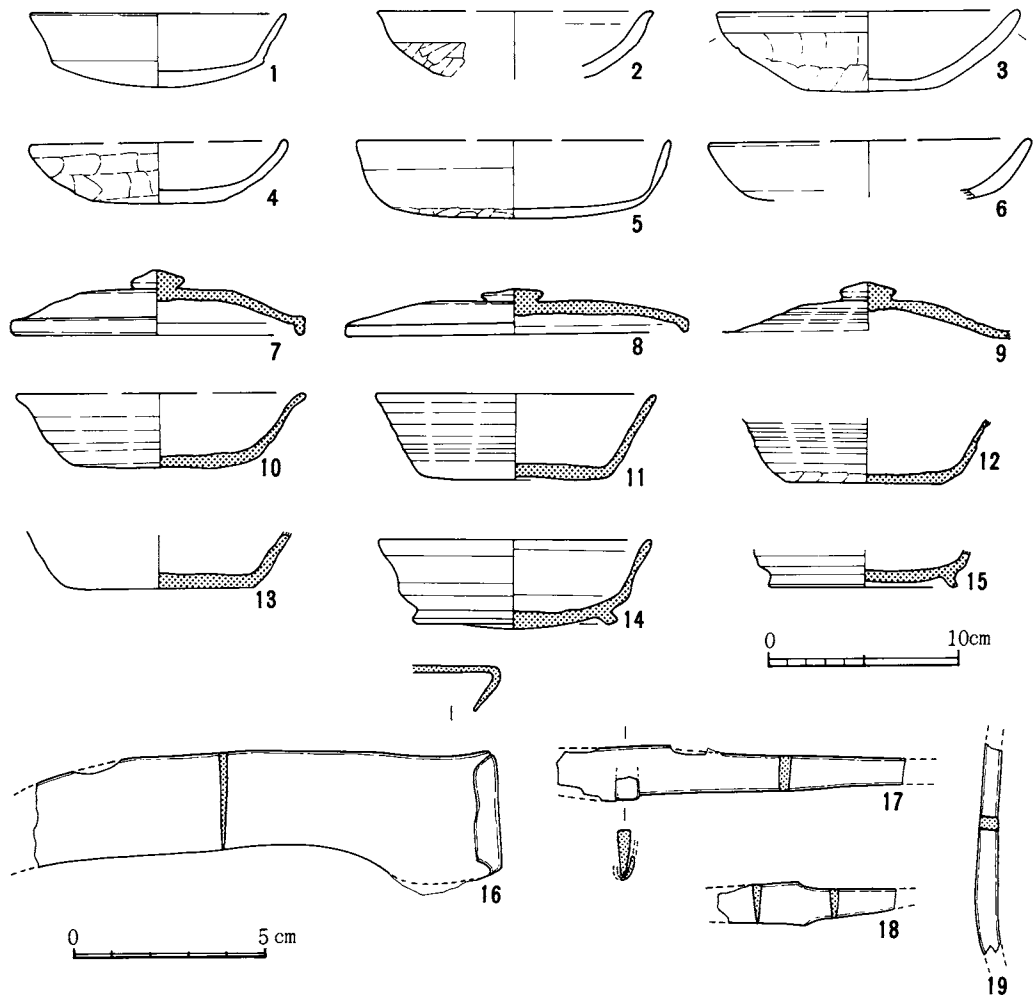
- | | | | |
|---------|------------------|----------|--------------|
| 1. 褐色土 | 焼土粒・ローム粒を多く含む。 | 7. 焼土 | |
| 2. 褐色土 | 1に準ずる。 | 8. 褐色土 | ローム塊・焼土を含む。 |
| 3. 赤褐色土 | 焼土粒・山砂を少し含む。 | 9. 赤褐色土 | 焼土粒を多く含む。 |
| 4. 褐色土 | 1に準ずる。 | 10. 山砂 | |
| 5. 赤褐色土 | ローム粒・山砂・焼土を多く含む。 | 11. 赤褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 6. 灰褐色土 | ローム粒・灰を多く含む。 | 12. 赤褐色土 | 11に準ずる。 |
| | | 13. 赤褐色土 | ローム粒を多く含む。 |

第98図 032号住居跡カマド実測図 (1/40)

ラ削りが施されている。14・15は須恵器高台付坏である。14は坏身底部が高台下端から下に突き出しており、非常に安定性が悪い。14・15共に、底部外面にはヘラ削りが施されている。金属器は全て鉄製品である。16は鎌で、先端部は欠失している。折り返し部分の幅が1cmと比較的広いものである。又、刃部は研ぎ減りによって著しくえぐれている。17・18は刀子である。17は鍬の部分をおおむね残存させている。19は鍬の篋被の部分か、又は角釘かのいずれかである。

033号住居跡 (第100~102図)

F 1 グリッドに位置し、014号掘立柱建物を一部破壊し、031号住居跡によって、北西壁の上部を、一部破壊されており、又、M 4 号跡によって、一部破壊されているが、これも床面に達



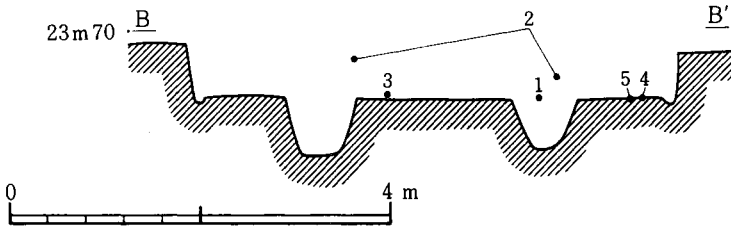
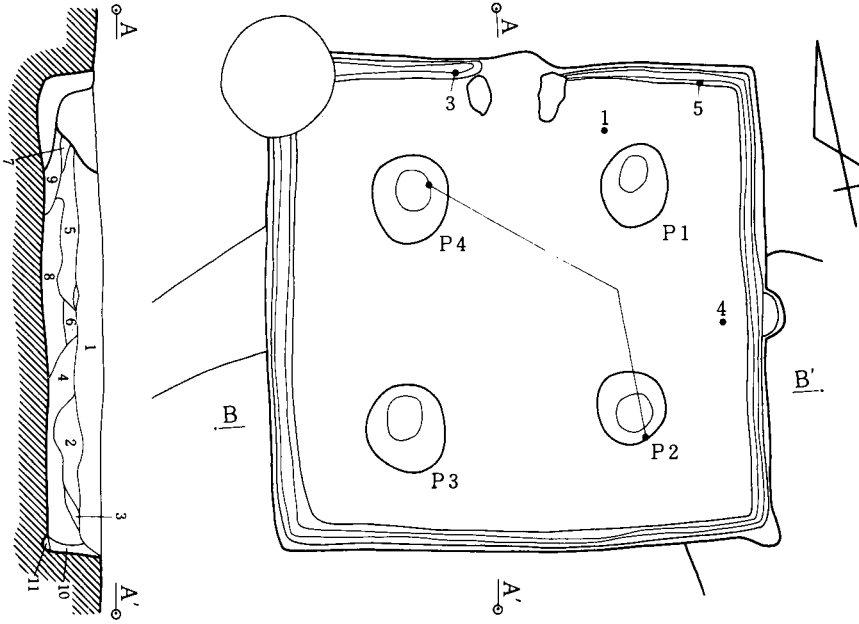
第99図 032号住居跡出土遺物実測図(1~15・¼, 16~19・½)

するほどのものではない。

主軸をN-12°-Eにとり、規模は南北5.1m、東西5.3mで、方形の平面形を示す。検出面からの掘り込みの深さは60cm平均で、ほぼ均一である。壁は垂直に立ち上がり、壁下には幅20~30cmの壁溝が全周している。床面には4本の支柱穴が確認された。2.5m×2.5mの正方形に配置されていて、径は70~90cm、深さは50~60cmの全体にしっかりした柱穴である。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。遺存状況はあまり良好ではない。焚口幅50cm、火袋中央幅50cm、全長70cmを測る。両袖は上部をかなり逸失してしまっている。カマド内覆土中央に大きな焼土ブロックを持つ。

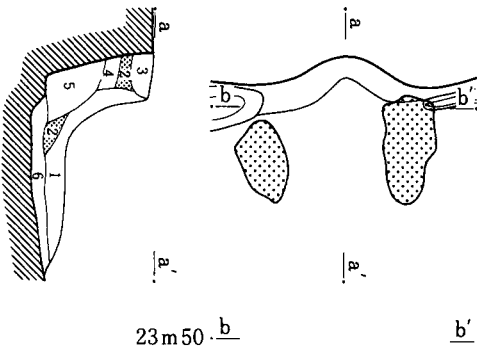
出土遺物は、1が土師器坏である。内面はヘラミガキ、外面は口縁部がヨコナデ、それ以下は底面全面まで手持ちヘラ削りを行っている。2・3は須恵器坏である。2は口径9.2cm、底径5cm、器高2.9cmと、かなり小振りのものである。外面体部下半以下底部にまで回転ヘラ削りが



033号住居跡土層説明

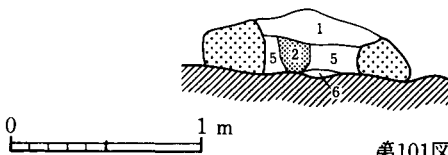
- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 黒色土 | 6. 褐色土 山砂を多く含む。 |
| 2. 黒褐色土 | 7. 褐色土 6に準ずる。 |
| 3. 褐色土 | 8. 褐色土 ローム粒を大量に含む。 |
| 4. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。 | 9. 褐色土 山砂を多く含む。 |
| 5. 褐色土 ローム粒を多く含む。 | 10. 褐色土 ローム粒を多く含む。 |
| | 11. 黄褐色土 ローム塊を多く含む。 |

第100図 033号住居跡実測図 (1/80)

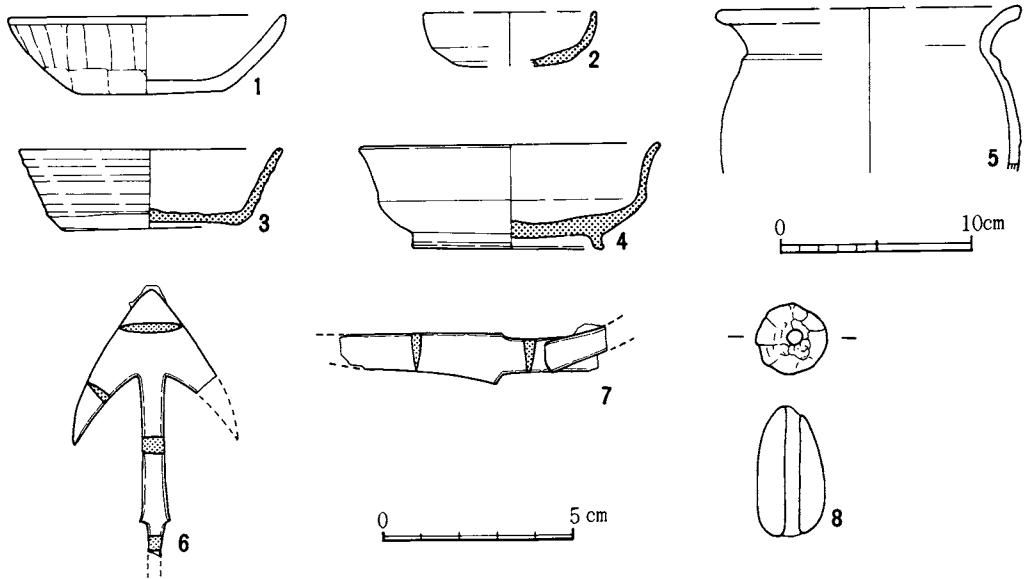


033号住居跡カマド土層説明

- | |
|--------------------|
| 1. 暗褐色土 焼土粒・山砂を含む。 |
| 2. 焼土。 |
| 3. 黒色土 焼土を少し含む。 |
| 4. 黒色土 ローム粒を少し含む。 |
| 5. 黒色土 4に準ずる。 |
| 6. 黒褐色土 ローム塊主体 |



第101図 033号住居跡カマド実測図 (1/40)

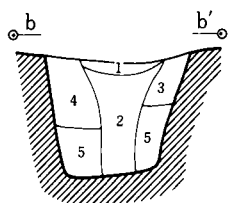
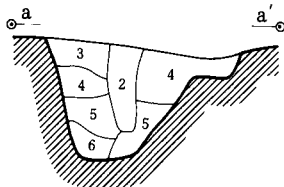
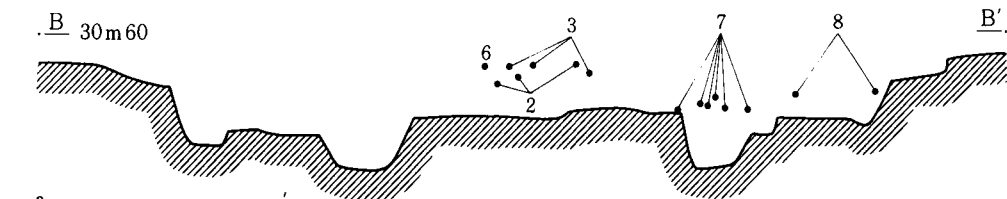
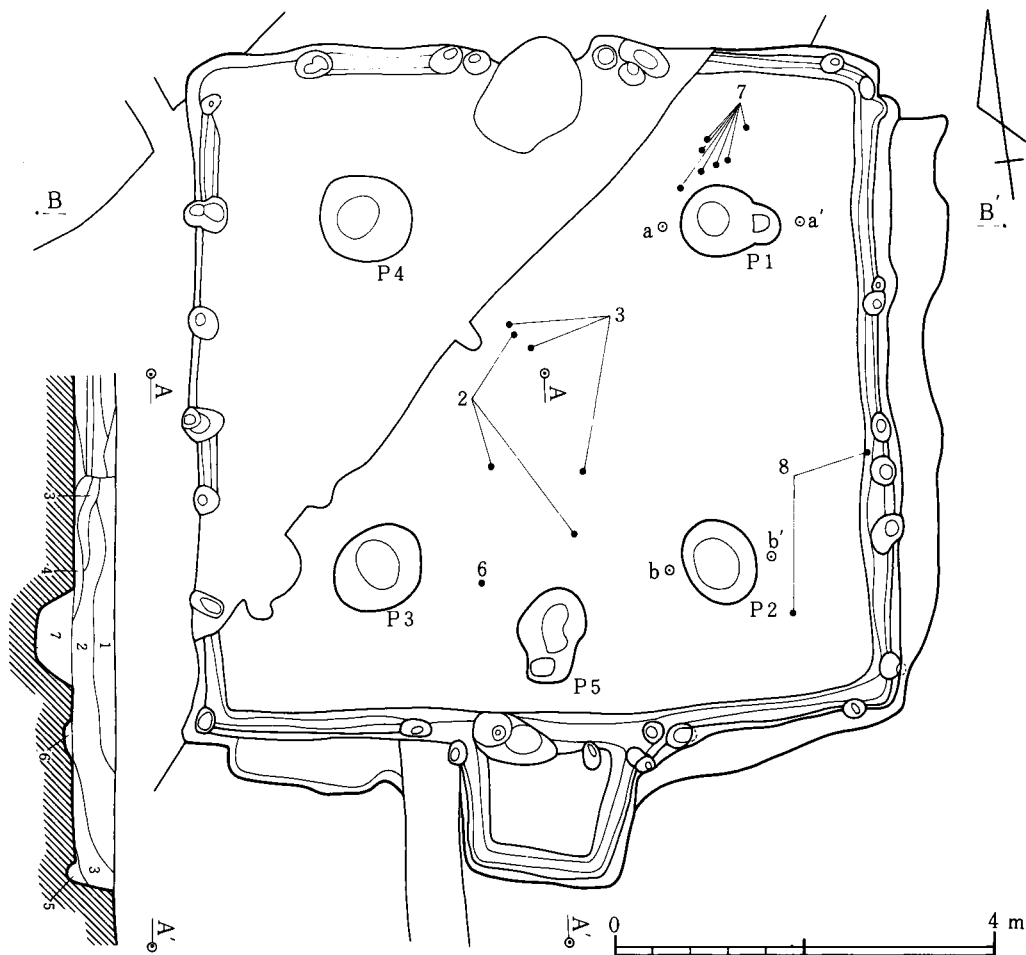


第102図 033号住居跡出土遺物実測図(1~5・¼, 6~8・½)

施されている。3も同様の調整が施されている。4の須恵器高台付坏は、いわゆる佐波理鏡模倣形のもので、本来有蓋式のものである。5は土師器小型甕で、細身である。6は広挾三角形の鉄鏃である。逆刺はやや丸味を帯びている。2は鉄製刀子である。茎の部分は折れて、錆着している。8は土錘である。

034号住居跡 (第103・104図)

G2・3, H2・3の4グリッドにまたがって検出された。北西の三分の一を大溝によって破壊されているが、幸い大溝の掘り込みの浅かったことから、壁、溝、柱穴、カマドの痕跡などは辛うじて確認することが出来た。主軸をN-6°-Eにとり、規模は南北7.1m, 東西7.3mで、ほぼ正方形を示し、更に南壁中央には、南北1.3m, 東西1.9mの方形の張り出し部分が存在している。検出面からの掘り込みの深さは平均50cmで、ほぼ均一であるが、北西三分の一は大溝によって5cmほど掘りくぼめられている。東壁・南壁の肩外側には、10cmほどの深さの不整形の掘り込みが広がっているが、性格は不明である。壁はやや緩く起き上がり、壁下には幅30cmほどの壁溝が巡り、壁溝のところどころには、径20~30cmの壁柱穴と考えられる柱穴が検出されているが、配置には、余り規則性が感じられない。尚、壁溝は張り出し部をも巡り、更には張り出し部を孤立させるかのようにも巡っていることから、張り出し施設は、明らかに増設施設と考えられる。床面からは、5本の柱穴が検出されており、P₁~P₄は上屋に伴う4本の支柱穴、P₅は、果たして張り出し部増設以後にも機能していたかどうかは不明であるが、いづれにしても、出入口部の上屋施設、もしくは出入口施設に伴うものであろう。4本の



柱穴土層説明

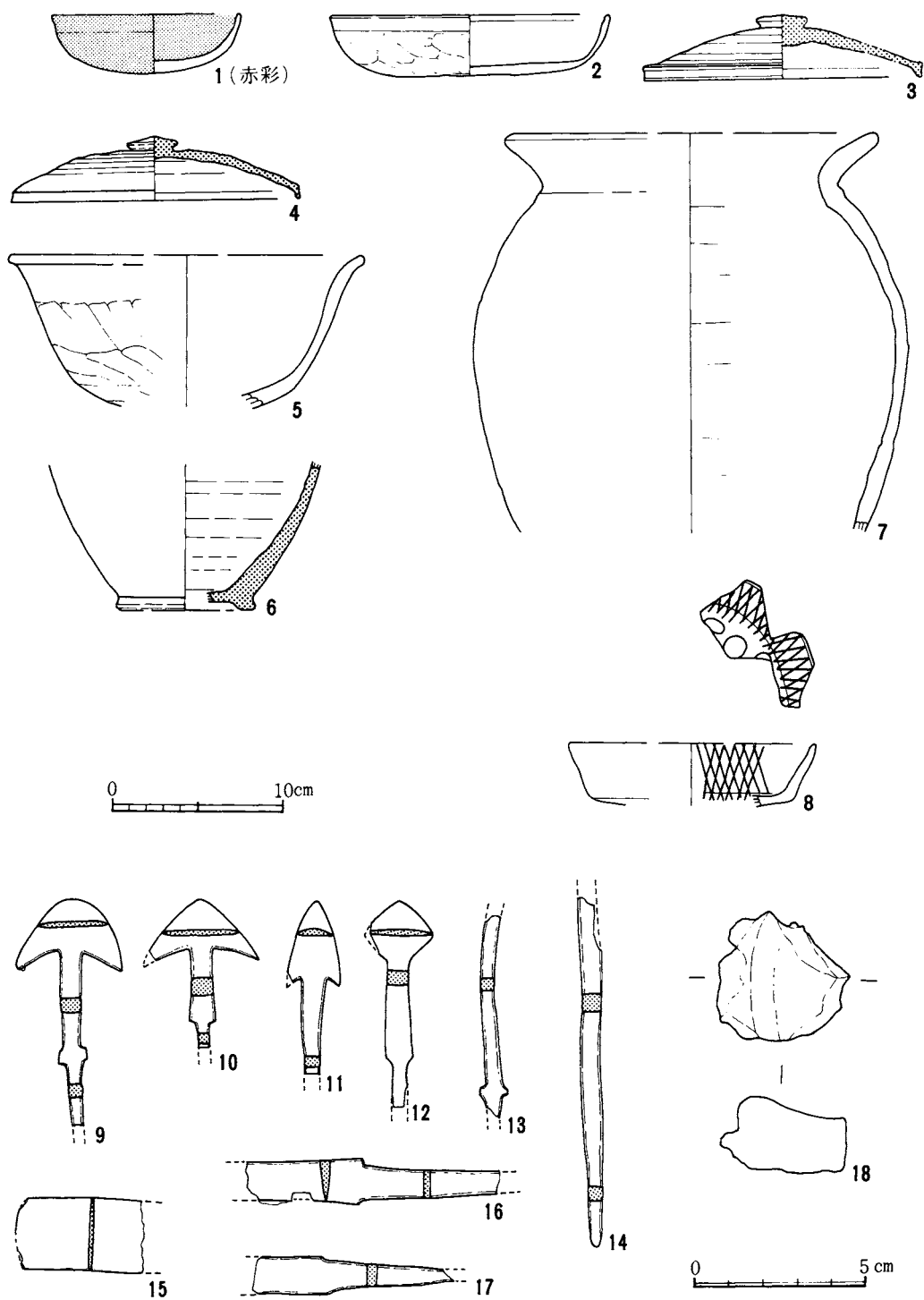
- 1. 黒褐色土
- 2. 黒褐色土 (柱痕)
- 3. 暗褐色土
- 4. 黄色土
- 5. 褐色土
- 6. ローム塊

034号住居跡土層説明

- 1. 暗褐色土 ローム粒を少し含む。
- 2. 暗褐色土 ローム塊・粘土塊・炭化物粒を少し含む。
- 3. 暗褐色土 粘土を少し含む。
- 4. 暗褐色土 ローム粒・焼土塊を少し含む。
- 5. 暗褐色土 ローム塊を少し含む。
- 6. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 7. 黒褐色土 ローム塊を多く含む。



第103図 034号住居跡実測図(1/40)



第104图 034号住居跡出土遺物実測図 (1~8・ $\frac{1}{4}$, 9~18・ $\frac{1}{2}$)

主柱穴は径90～100cm、深さ60cmと、ほとんど統一規格である。尚、P₁・P₂には、太さ15～20cmの柱痕が断面で確認出来た。

カマドは、北壁中央にその掘り方の痕跡が確認されたのみである。

遺物はカマド付近が床面直上、それ以外の所では、やや浮いた状態で検出された。1は土師器坏である。外面口縁部はヨコナデ、それ以下は手持ちヘラ削り、内面はヘラミガキを施し、器表全面に赤彩が見られる。2は土師器盤である。外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、内面はヘラミガキで整えられている。内面口唇部付近には明瞭な凹線がある。3・4は須恵器蓋である。共に扁平なつまみを持ち、口縁内面のかえりはない。口縁部の折り方と、傾斜はやや異なる。5は土師器碗(あるいは鉢と呼ぶべきか)である。内面から外面口縁にかけてはヨコナデ・外面体部は手持ちヘラ削りで調整されている。体部から底部への変換部分にかかる稜線を持つが、丸底のものであろう。6は須恵器長頸瓶である。球胴ではなく、肩部に最大径を持つやや細身のものであろう。7は土師器甕である。口縁は内外面共にヨコナデ、外面頸部以下は縦位ヘラ削り、内面頸部以下は木端状ヘラのヨコナデである。8は土師器坏である。内面には体部に斜格子状暗文、底部に螺旋暗文が施されている。

9～17までは全て鉄製品である。9～14は鉄鏃で、9は広扶三角形式。先端がやや丸味を帯び、棘部を持つ。10は飛燕形式と呼ばれるものに近い形態を示す。11は腸挟り長三角形式で、浅い腸挟りが見える。片丸造りである。12は変形広根定角式で、特異なものである。13・14は鉄鏃の筈被・茎の部分である。15は器種・用途不明である。16・17は両関の刀子である。18は碗形滓である。他に畿内産土師器も検出されており、碗形滓共々後述する。

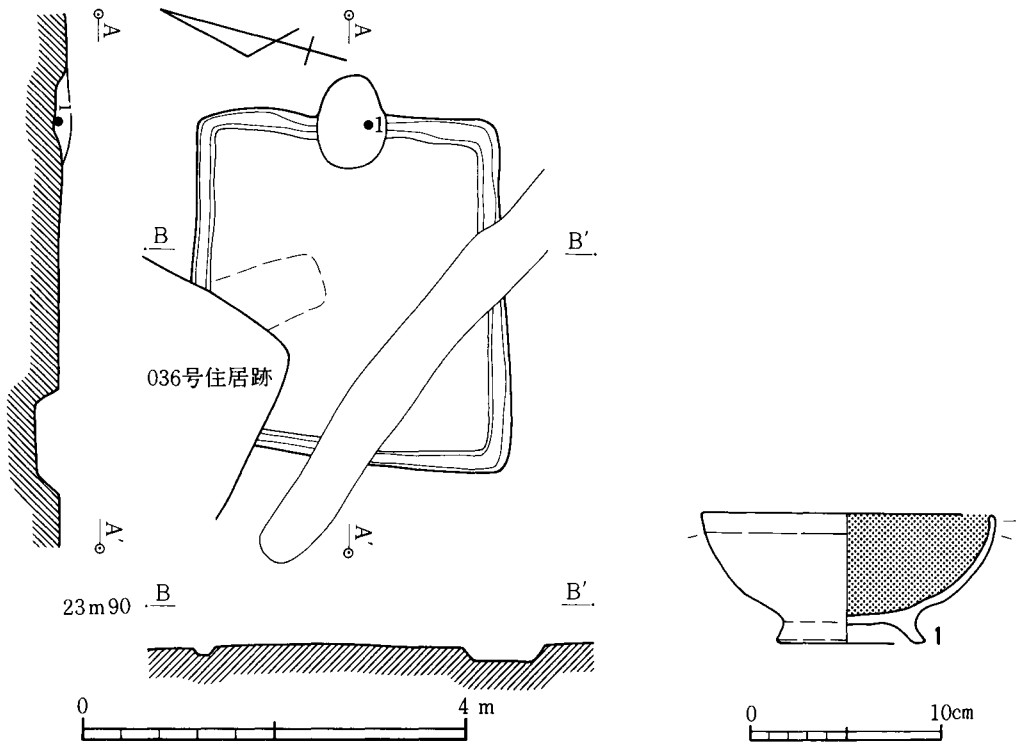
035号住居跡 (第105図)

G2・H2グリッドにまたがって位置する。036号住居跡と重複しているが、035号住居跡はカマドの痕跡と壁溝下端のみの検出で、恐らく薄い貼床も後世削除されてしまったらしい。又、036号住居跡から遺物の検出されなかったことから、両住居跡の切り合いの前後関係は全く判らなかつた。又、M9号跡によっても、一部が破壊されている。

主軸N-77-Eにとり、南北3.7mと、東西3.2mの長方形平面プランを示す。平均20cm幅の壁溝が全周していたようである。

カマドはほとんど痕跡だけで、火床面の焼土が、わずかに検出されたに過ぎない。尚、カマド掘り方内にも壁溝が周っていた。

遺物はカマド火床面から、土師器高台付碗が1点検出された。ロクロ使用のもので、内面は黒色で、丁寧なヘラミガキを受けている。



第105図 035号住居跡実測図(1/50)・出土遺物実測図(1/4)

036号住居跡 (第106図)

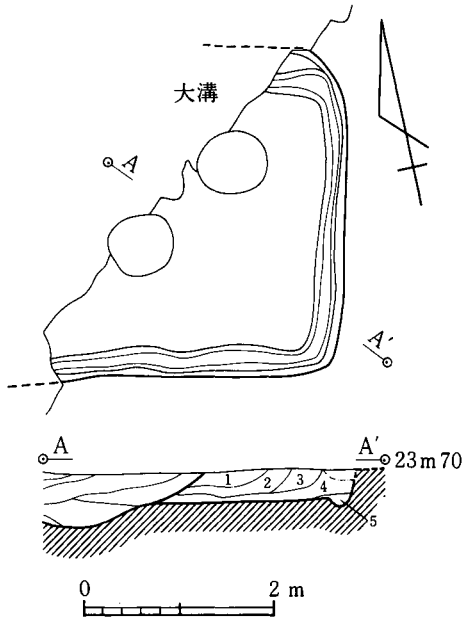
035号住居跡の北西隅と重複する。更に021号掘立柱建物跡の一部を破壊し、また、大溝によって、北西部を半分以上破壊されている。

カマドが北壁に設けられていたと想定すると、主軸をN-15°-Eにとり、南北3.5m(東西は現存3m)の方形住居であったと考えられる。検出面からの掘り込みの深さは30cmを測る。壁下には幅30cm平均の壁溝がめぐらされている。床面に検出された2本の柱穴のうち、南西の一本は021号掘立柱建物跡のものであるが、北東のものは性格不明である。本住居の上屋構造に伴う柱穴は検出されなかった。

遺物は全く検出されていない。

037号住居跡 (第107～109図)

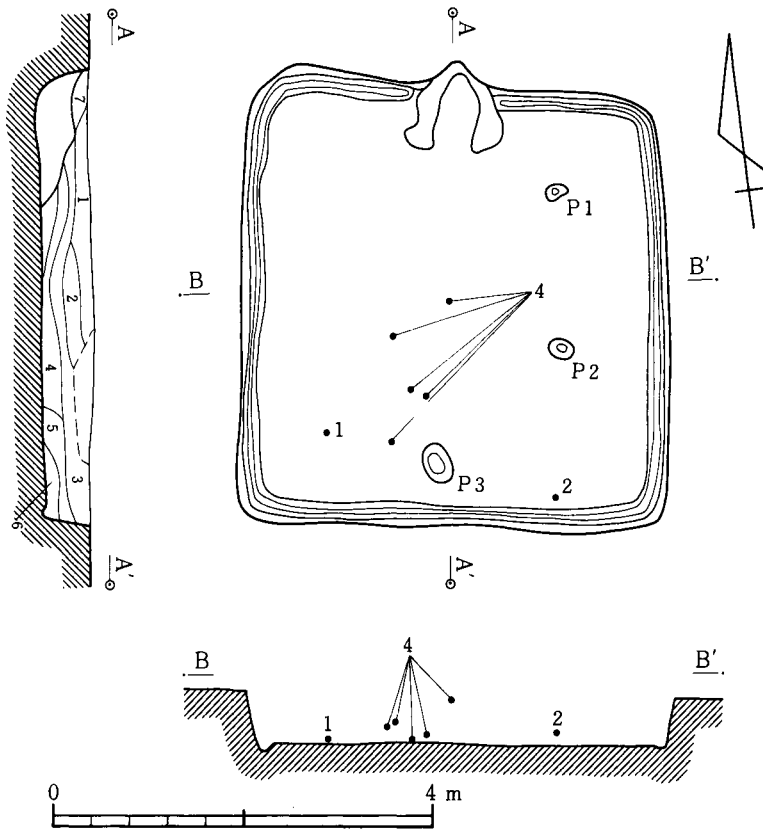
G1・H1グリッドにまたがって検出された。021号掘立柱建物跡の北東隅柱穴を破壊し、大溝によって北西隅壁の上半部を破壊されている。主軸をN-8°-Eにとり、規模は4.5×4.5mでほぼ正方形の、隅丸に近い形態の住居だが、北西隅の壁だけやや膨れており、ややいびつになっている。検出面からの掘り込みの深さは平均50cmで、壁は垂直に立ち上がり、壁下には幅20



036号住居跡土層説明

- 1. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
- 2. 暗褐色土 ローム粒・塊を多く含む。
- 3. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4. 黒色土 ローム粒・塊を含む。
- 5. 黒褐色土 ローム塊を含む。

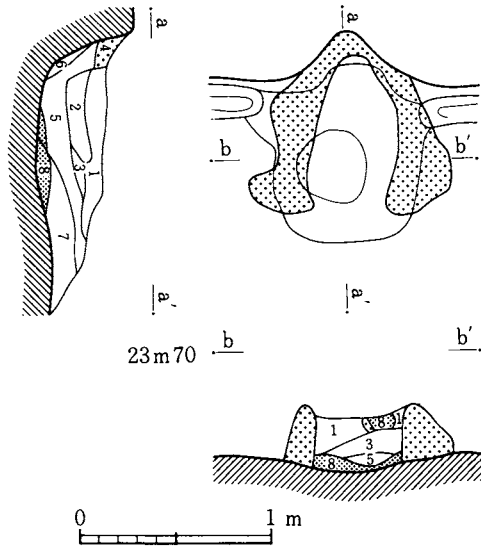
第106図 036号住居跡実測図 (1/80)



037号住居跡土層説明

- 1. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
- 2. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 3. 褐色土 ローム塊を多く含む。
- 4. 黒褐色土 2に準ずる。
- 5. 黄褐色土 ローム塊を含む。
- 6. 褐色土 ローム塊を少し含む。
- 7. 暗褐色土 ローム塊を含む。

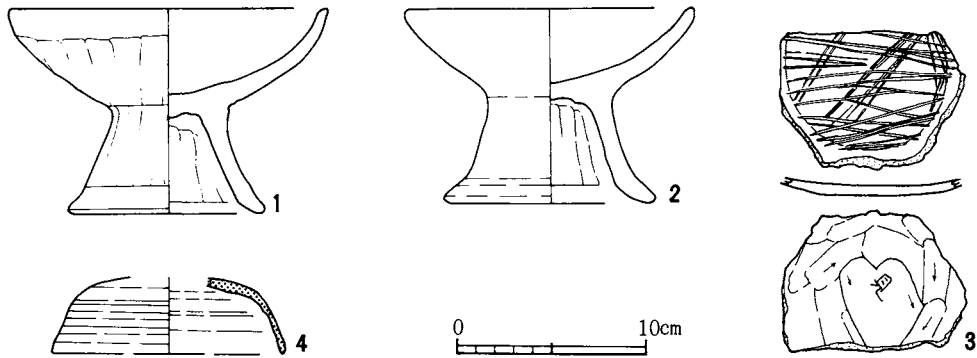
第107図 037号住居跡実測図 (1/80)



037号住居跡カマド土層説明

1. 褐色土 ローム粒を少し含む。
2. 赤褐色土 焼土粒・山砂を含む。
3. 褐色土 焼土粒・山砂を少し含む。
4. 山砂。
5. 褐色土
6. 褐色土 山砂を含む。
7. 褐色土 山砂を少し含む。
8. 焼土。

第108図 037号住居跡カマド実測図 (1/60)



第109図 037号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

cmの壁溝が全周している。床面からは、3カ所にピットが検出されている。配置の状況から見て、P₁、P₂は4支柱穴のうちの東側の2本、P₃は出入口施設に伴う柱穴と考えられるが、P₁、P₂は径が小さく、掘り方も浅いため、積極的に支柱穴であるとは言い難い。

カマドは北壁ほぼ中央に設けられている。焚口幅40cm、火袋中央幅45cm、全長100cmを測る。両袖の遺存状況は良好で、火床面には焼土が厚く堆積していた。天井は崩落・流失していた。カマド尻は、壁から外に向けて、20cmほど突き出している。

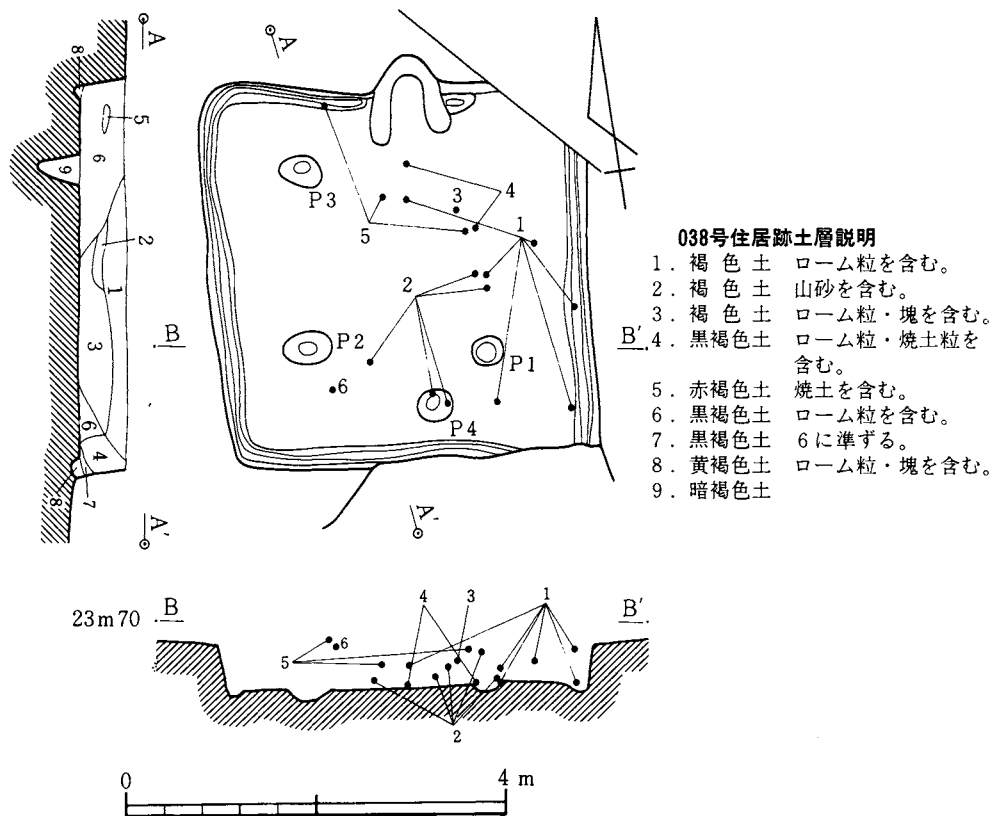
出土遺物は、1・2が土師器高坏である。坏部の形態に若干の違いを見せているが、器高10～10.5cm、口径10～11.5cm、底径10.5～11cm、くびれ部径6～6.5cm、脚高5cm、坏身深さ5cmと、ほぼ同法量を示す。調整技法が若干異なり、1は坏部口縁ヨコナデ、外面縦ヘラ削り、内

面へラミガキ、脚部は縁部ヨコナデ、外面縦へラ削り、内面ヨコへラ削りで整えられている。2は坏部口縁ユビナデ、外面はへラ削り後にユビナデ、内面はへラミガキ、脚部は縁部ヨコナデ、外面縦へラ削り、内面ヨコへラ削りである。3は土師器坏の底部で内面は丁寧なミガキ、外面は静止糸切りのあと、周辺部に手持ちへラ削りが施されている。外面中央に「見」と、細い刻書が見える。4は須恵器蓋である。

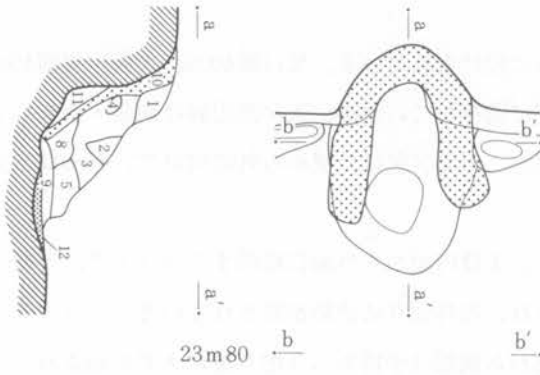
038号住居跡 (第110~112図)

I 1 グリッドに位置する。008号住居跡に北隣し、南壁の一部を008号住居跡によって破壊されている。又、北東隅は発掘区域外のため、調査出来なかった。

主軸をN-7°-Eにとり、規模は南北3.8m、東西4mで、やや隅丸方形気味の平面プランを示すが、北西隅で壁がやや膨らみ、歪みを見せている。検出面からの掘り込みの深さは、40~50cm平均で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁下には、幅20~25cmの壁溝が全周している。床面からは4ヵ所に柱穴が検出された。配置の状況から見て、P₁~P₃は支柱穴のうちの3本で、P₄は出入口施設に伴う柱穴と考えられるが、P₃は深さ40cmであるのに対して、P₁・P₂は深さ10cm弱しかなく、異常に均衡を欠いている。又、北東隅にもう一本あるはずの柱穴も検出されて

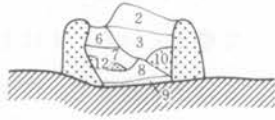


第110図 038号住居跡実測図 (1/50)

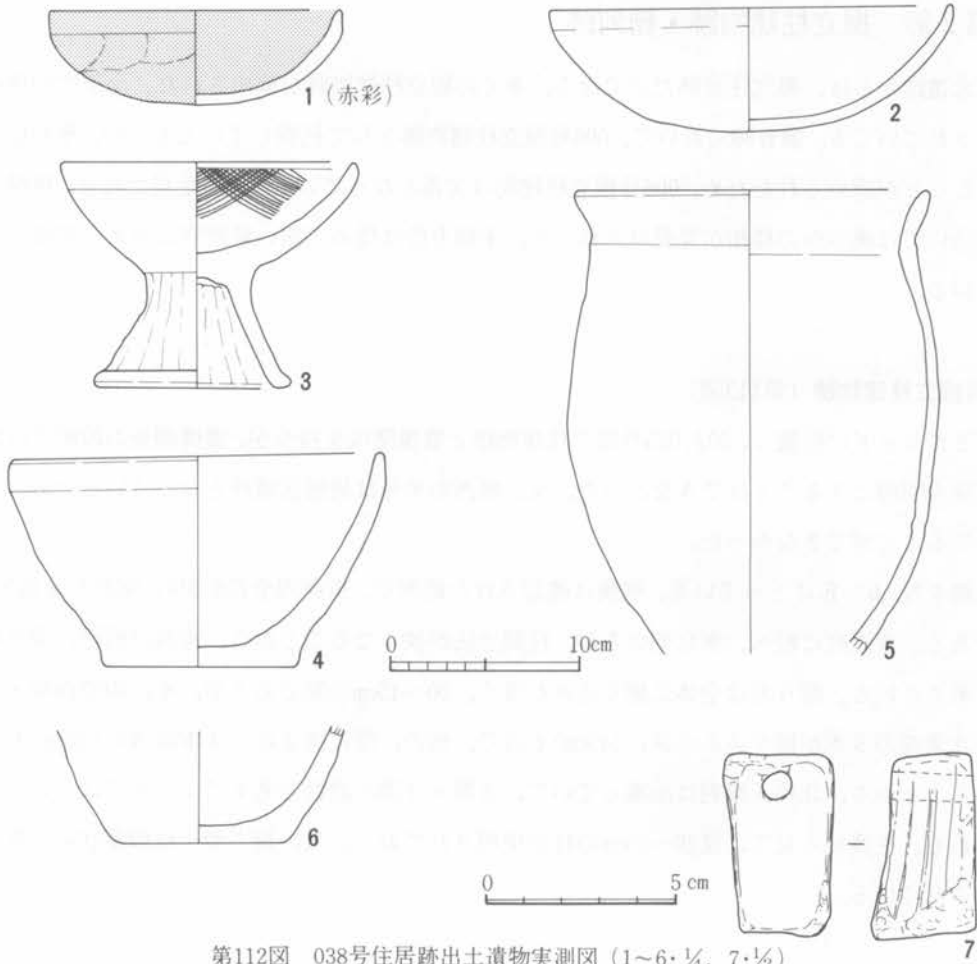


038号住居跡カマド土層説明

1. 褐色土 ローム粒・山砂粒を含む。
2. 褐色土 1層に準ずる。
3. 褐色土 山砂を多く含む。
4. ロームブロック。
5. 灰褐色土 山砂・灰・焼土を含む。
6. 灰褐色土 5に準ずる。
7. 灰褐色土 焼土・山砂を多く含む。
8. 褐色土 ローム塊・焼土を含む。
9. 黒褐色土 焼土を少し含む。
10. 山砂。
11. ソフトローム主体。
12. 焼土。



第111図 038号住居跡カマド実測図 (1/40)



第112図 038号住居跡出土遺物実測図 (1~6・1/4, 7・1/2)

おらず、いささか不可解である。

カマドは北壁中央やや東寄りのところに設けられている。焚口幅40cm，火袋中央幅40cm，全長95cmを測る。両袖の山砂は比較的良好に遺存していたが，天井部山砂は崩落・流失してしまっていた。火床面には焼土層が確認出来た。カマド尻は，壁から外に向けて，45cmほど突き出ている。

出土遺物は，1・2が土師器坏である。1は内面から外面口縁部までヨコナデ，外面体部から底部にかけては手持ちヘラ削りが施され，内外面共に赤彩が施されている。2は内面から外面口縁部にかけてヘラミガキ，外面体部から底部は手持ちヘラ削り後にナデが施されていた。3は土師器高坏である。坏部は内面がヘラミガキ，外面がヨコナデ。脚部は縁辺をヨコナデ，外面タテヘラケズリ，内面ヨコヘラケズリで整えている。4は土師器鉢で，全面にナデ調整がなされ，底部外面には，木葉痕が見える。5は土師器甕で，内面はヘラナデ，口縁は内外面ともにヨコナデ，外面胴部はタテヘラケズリの後にヘラナデが施されている。6は土師器甕で，底部外面に木葉痕を残す。7は砥石である。 (小林・萩原)

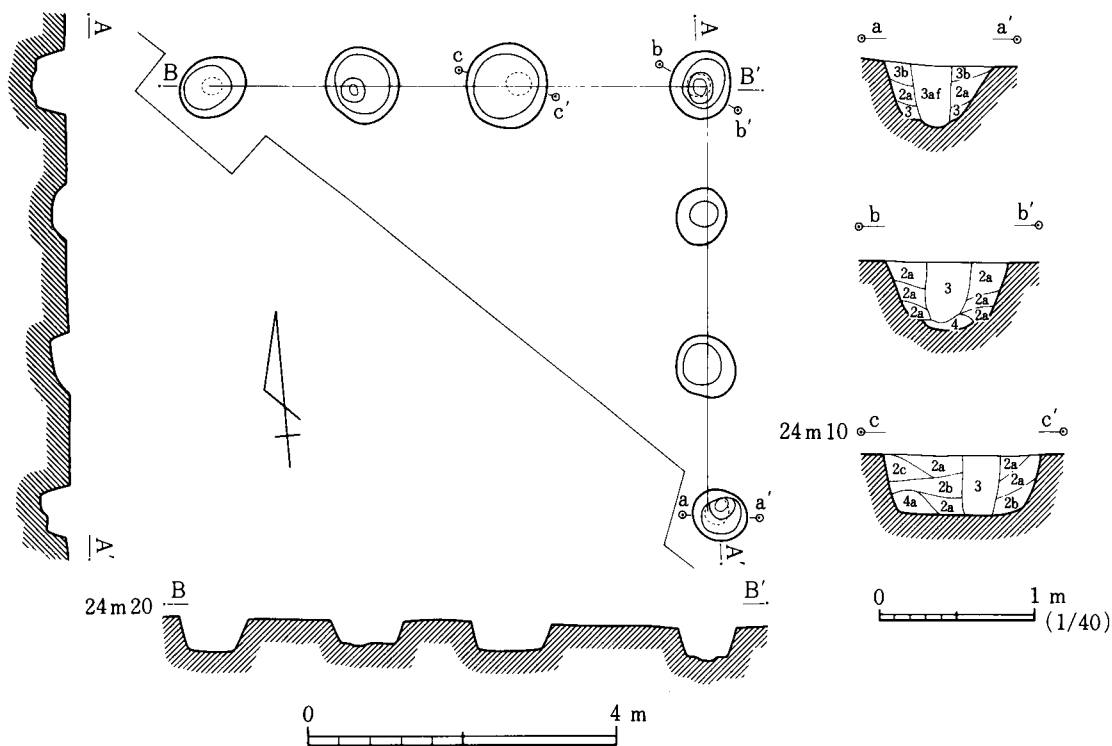
第2節 掘立柱建物跡・柵列跡

大北遺跡からは，竪穴住居跡だけでなく，多くの掘立柱建物跡が検出された。全部で29棟が確認されている。調査時において，006号掘立柱建物跡として把握していたものが，柵列Cであったことが認められたため，006号掘立柱建物は欠番となっている。全体を見た場合，規模などについては幾つかの様相が見受けられるが，主軸方位は極めて狭い範囲内に収まる特徴を持っている。

001号掘立柱建物跡 (第113図)

C2グリッドに位置し，002,025号掘立柱建物跡と重複関係を持つが，遺構調査の段階では前後関係を明瞭にすることはできなかった。又，南西の半分は発掘区域外となっているため，全容を知ることができなかった。

主軸をN-6°-Eにとっている。規模は確認された範囲で，東西列全長6.3m，南北列全長5.3mである。東西列に較べ，南北列の方が，柱間寸法が狭くなることから，東西が桁行，南北梁行と考えられる。掘り方は全体に掘り込みが浅く，20～45cmの間であるが，その中で西端・南端・北東端の3本が掘り込みの深い(45cm)もので，他の，間に挟まれた4本は浅い(20cm)ものであることから，北列・東列は出揃っていて，3間×3間の建物と考えてよいのではないかとと思われる。柱痕から見て，径20～25cmの柱が使用されており，又，掘方埋土は版築状に丁寧にしめられている。



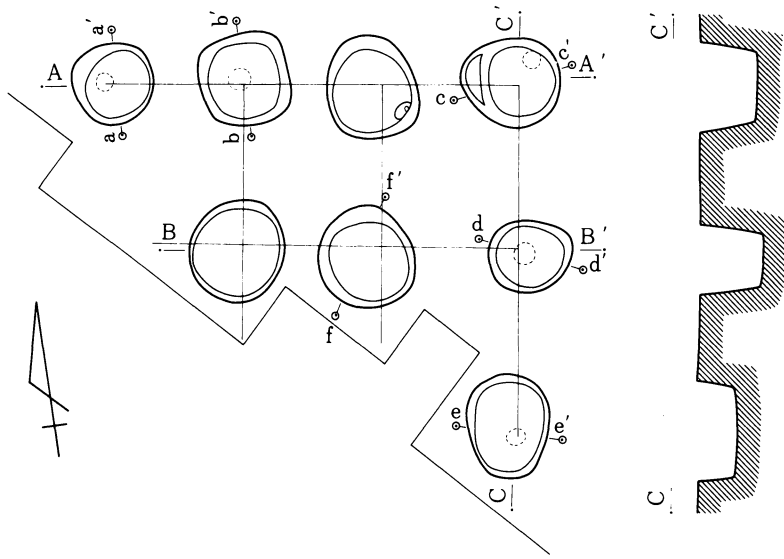
第113図 001号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

002号掘立柱建物跡 (第114図)

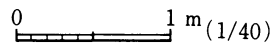
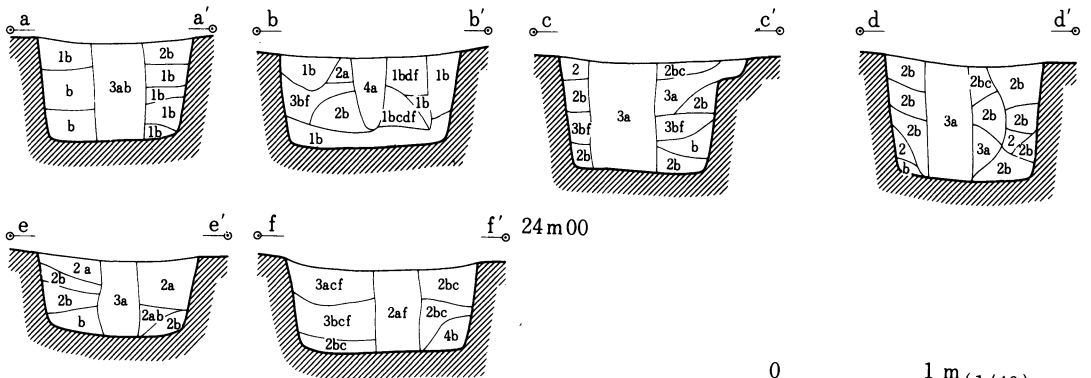
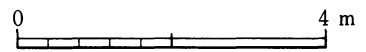
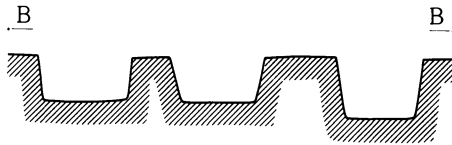
C 2・D 2 グリッドにまたがって位置し、001, 025, 024の各掘立柱建物跡と重複しているが、遺構調査の段階では、前後関係を明瞭にすることは出来なかった。南西の部分は発掘区域外にかかるため、全容を知ることはできなかった。主軸をN-10°-Eにとる。確認されたのは東西3間、南北2間の総柱かと思われるが、総柱と考えた場合、その間隔のとり方から見て、2列目の東西列西端にはもう一本の柱穴が検出されなければおかしい。従って2間×2間の総柱に西廂と考えられるが、南北列は更に規模の大きくなる可能性もある。規模は東西列3間で全長5.4m(1.8m等間隔)、南北列2間で全長4.3m。掘り方は径110~130cm、深さ50~80cmとかなり大型である。柱痕の確認されたものが8本中6本で、径は20~50cmである。掘り方埋土は版築状に丁寧にしめられている。

003号掘立柱建物跡 (第115図)

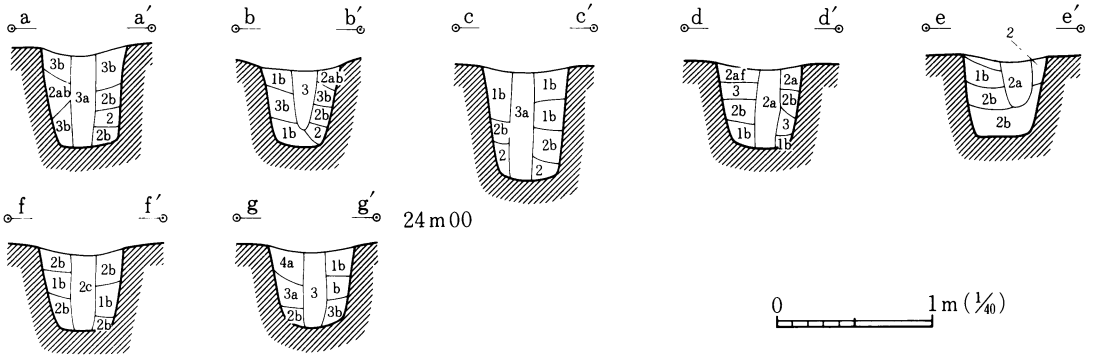
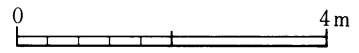
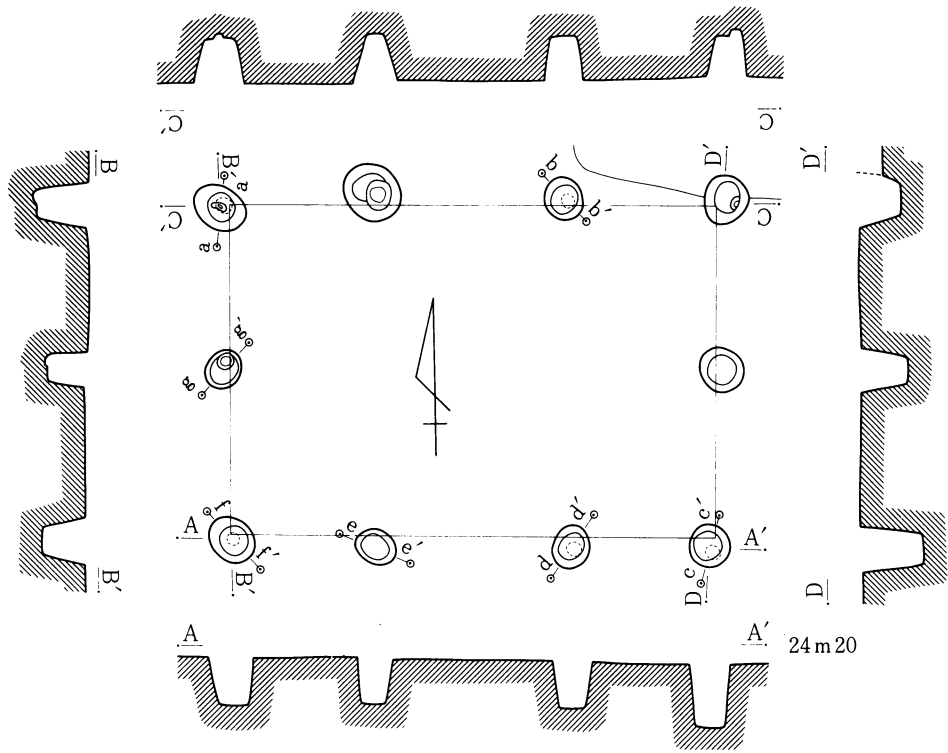
C 2・D 2 グリッドにまたがって検出され、北東隅の柱穴の一部を020号住居跡によって破壊されている。又、柵列Bとも重複関係を持つが、遺構調査の段階では、前後関係を明瞭にできなかった。主軸をN-2°-Eにとる東西棟で、桁行3間で全長6.4m(中央2.4m、両端2m)、梁



A A' 24m20

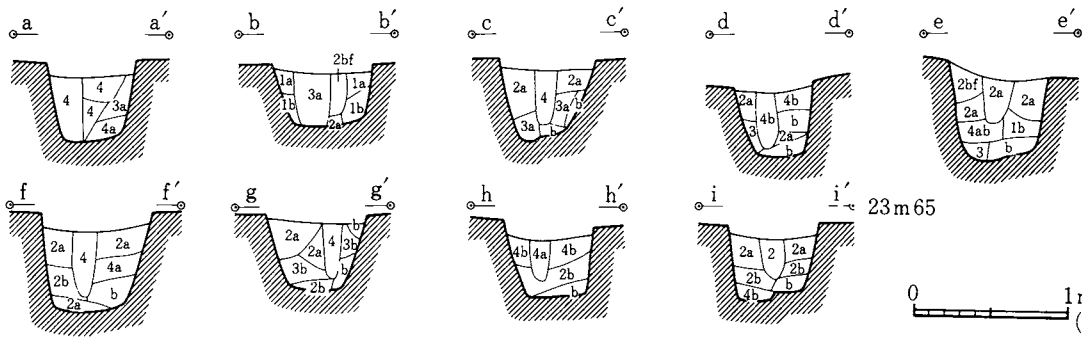
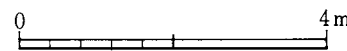
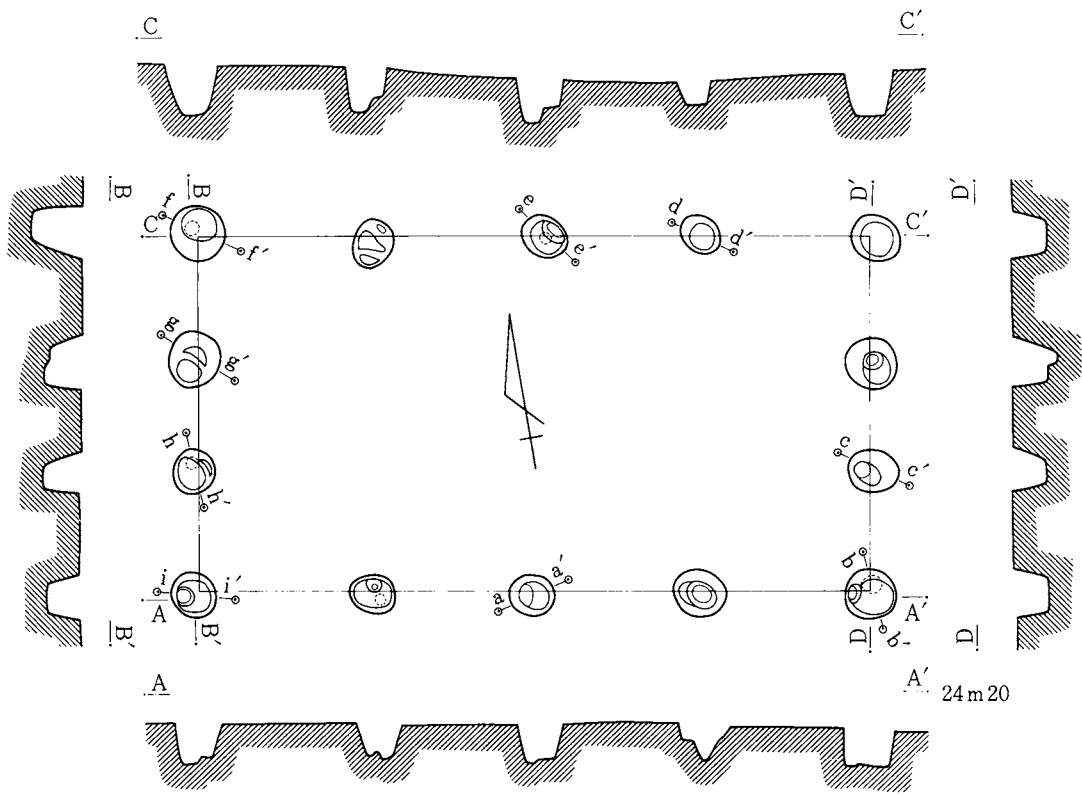


第114图 002号掘立柱建物跡实测图 (1/30)



第115図 003号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

行は2間で全長4.2m(2.1m等間隔)である。掘り方は径45~60cm、深さ50~80cmで、径のやや小振りのものである。10本中7本に柱痕が確認されており、径は15cm前後で、細目の柱が想定される。



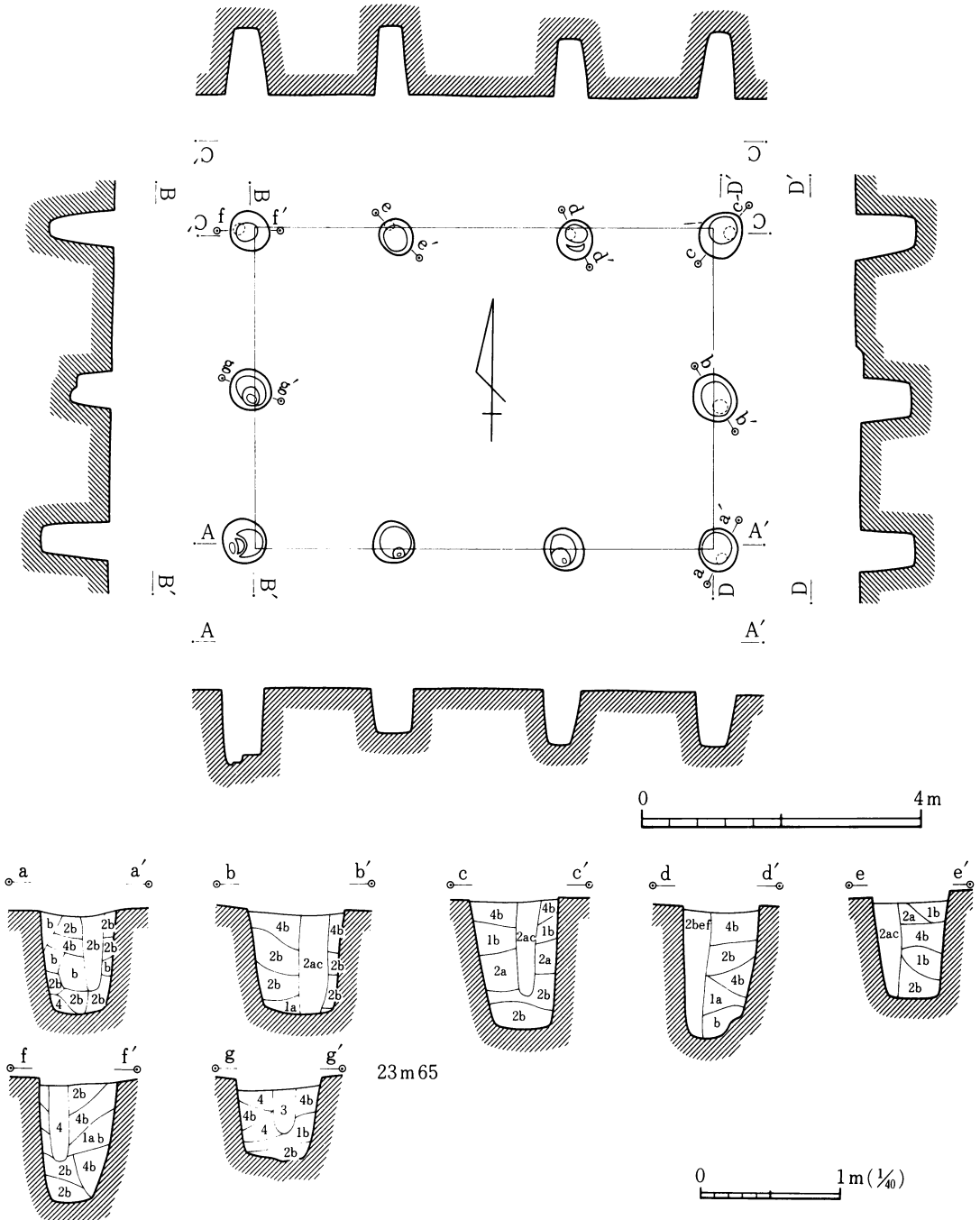
第116図 004号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

004号掘立柱建物跡 (第116図)

C 1・2, D 1・2 の4グリッドにまたがって検出されている。他の遺構との切り合いは全く無い。主軸をN-10°-Eにとる東西棟の建物である。桁行4間で全長8.7m(2.2m等間隔), 梁行3間全長4.5m(1.5m等間隔)を測る。掘り方は径50~70cm, 深さ40~60cmで, 径はやや小振りである。柱痕の確認されたものから柱の径を復元すると, 15cm平均で, 細目の柱が想定される。

005号掘立柱建物跡 (第117図)

D1・D2グリッドにまたがって検出された。主軸をほぼ真北にとる東西棟の建物で、規模は、桁行3間で全長6.6m(中央2.6m, 両端2m), 梁行2間で全長4.5m(2.25m等間隔)を測る。掘り方は径50~70cm, 深さ60~80cmを測り, 細くて深目のものである。柱痕を確認できたものから柱径を復元すると, 15~20cm平均で, 細目の柱を使用していたことがうかがえる。



第117図 005号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

007号掘立柱建物跡（第118・119図）

E1・E2グリッドにまたがって位置する。008号掘立柱建物跡と重複しており、本建物跡が、008号掘立柱建物跡を切っている。又、南寄りの2本の柱穴が、M2号跡によって、肩を切られている。南側で調査区域境界に接しているため、規模の全容は判らない。確認出来た範囲では、主軸をN-6°-Eにとる南北棟の建物で、規模は梁行2間で全長6m(3m等間隔)、桁行は5間で全長13.5m(2.7m等間隔)を測る。桁行については、これで終了するのか先に延びるのかは判断しかねる。掘り方は径100cm平均で、深さは60～90cmで比較的しっかりしたものであった。柱痕の確認されているものが多く、柱径を復元すると、20～30cmであった。掘り方埋土は、丁寧な版築状を呈している。

008号掘立柱建物跡（第120・121図）

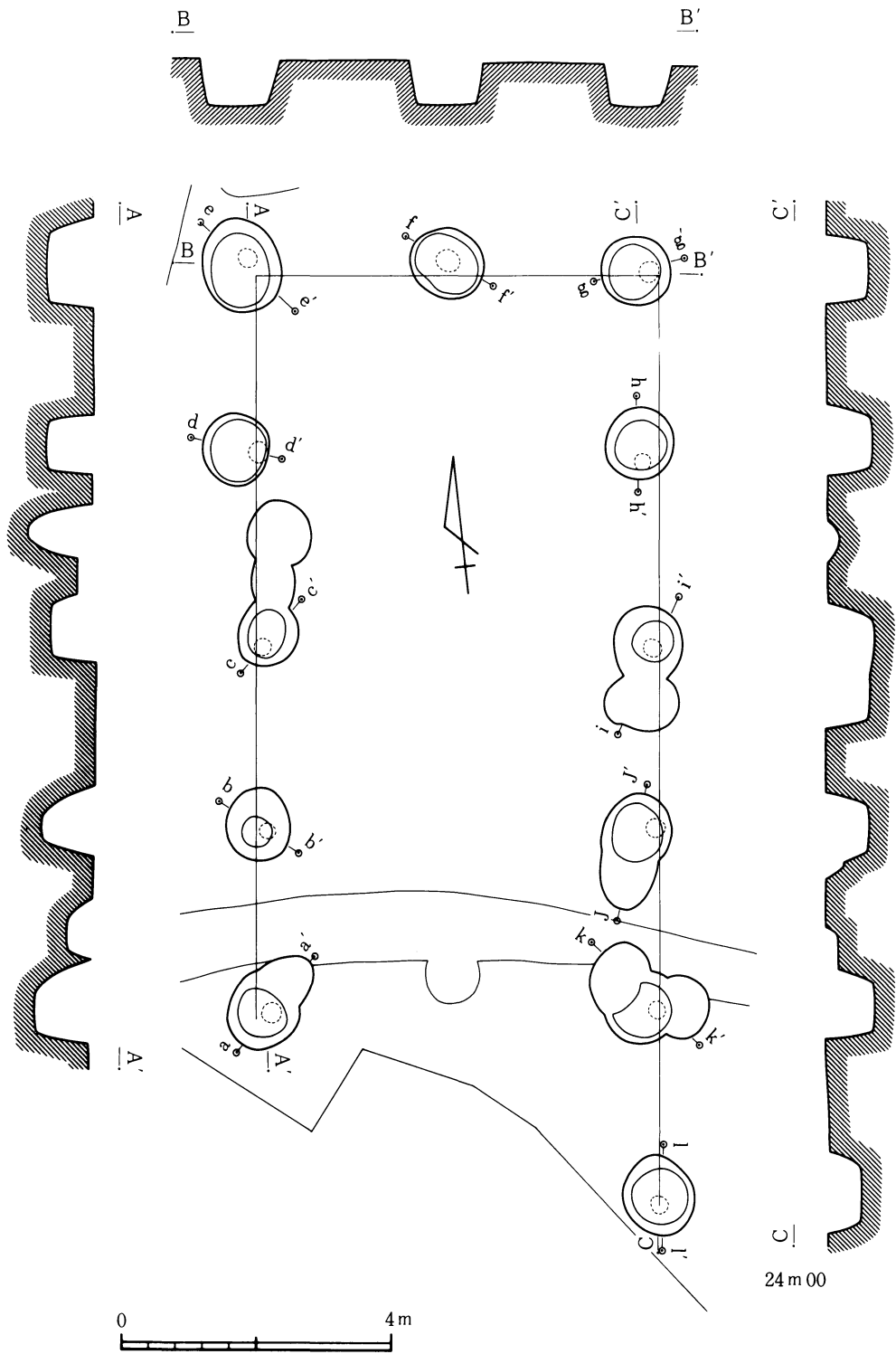
D3・E2・E3グリッドにまたがって検出された。重複する遺構：007号掘立柱建物跡・柵列C・M1号跡・M2号跡の全てによって切られている。主軸をN-7°-Eにとる東西棟の建物である。南西部が調査区域外にかかっているため、全容を確認することはできなかった。確認された範囲では、梁行3間で、全長6.3m(北から2.1m, 2.5m, 1.7m)、桁行は現状5間で全長13.1m(2.6m等間隔)を測る。掘り方は径80～100cm、深さ70～100cmの比較的しっかりしたものである。柱痕の確認されたものから柱径を復元すると、25cm平均であった。掘り方埋土は丁寧な版築状を呈している。

009号掘立柱建物跡（第122図）

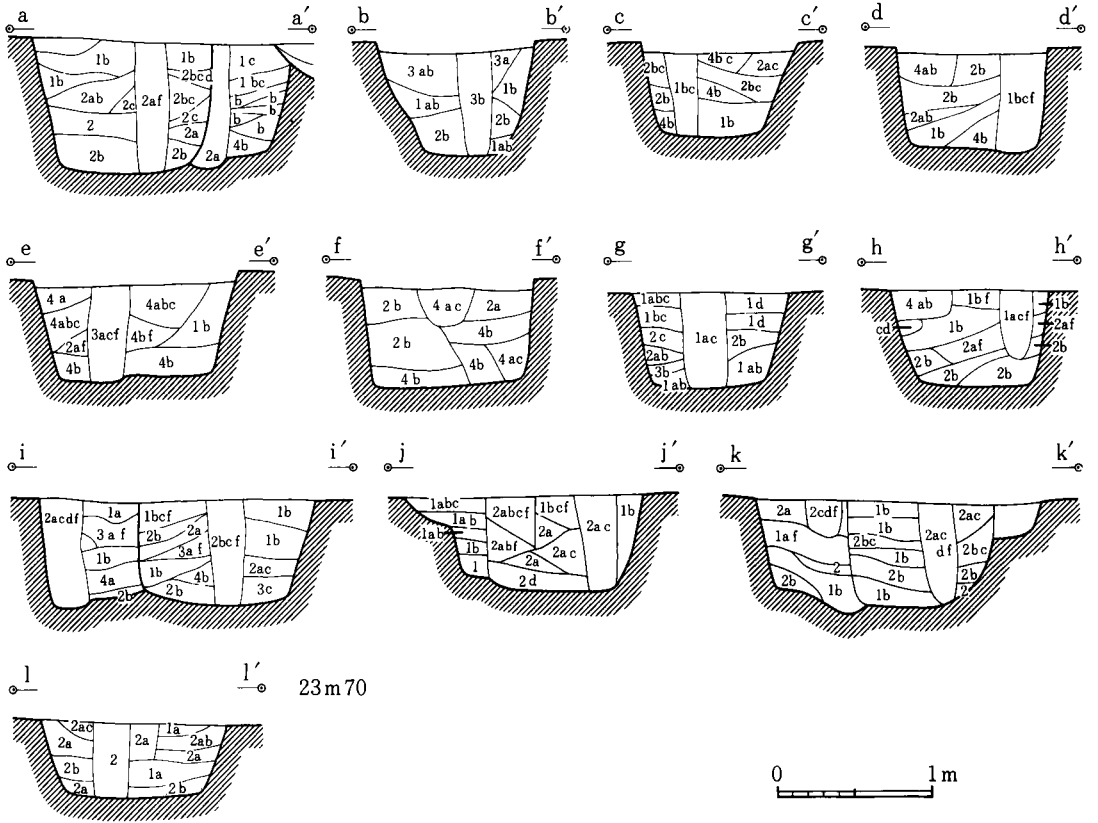
E1・E2グリッドにまたがって検出された。他の遺構との重複関係は見られない。主軸をN-5°-Eにとる2間×2間の総柱建物である。南北棟で、桁行2間で全長3.5m(1.75m等間隔)、梁行2間で、全長3m(1.5m等間隔)を測る。掘り方は径50～60cm、深さ45～65cmを測る。柱痕の確認されたものから、柱径を復元すると、15cm弱のかなり細いものであった可能性が高い。

010号掘立柱建物跡（第123図）

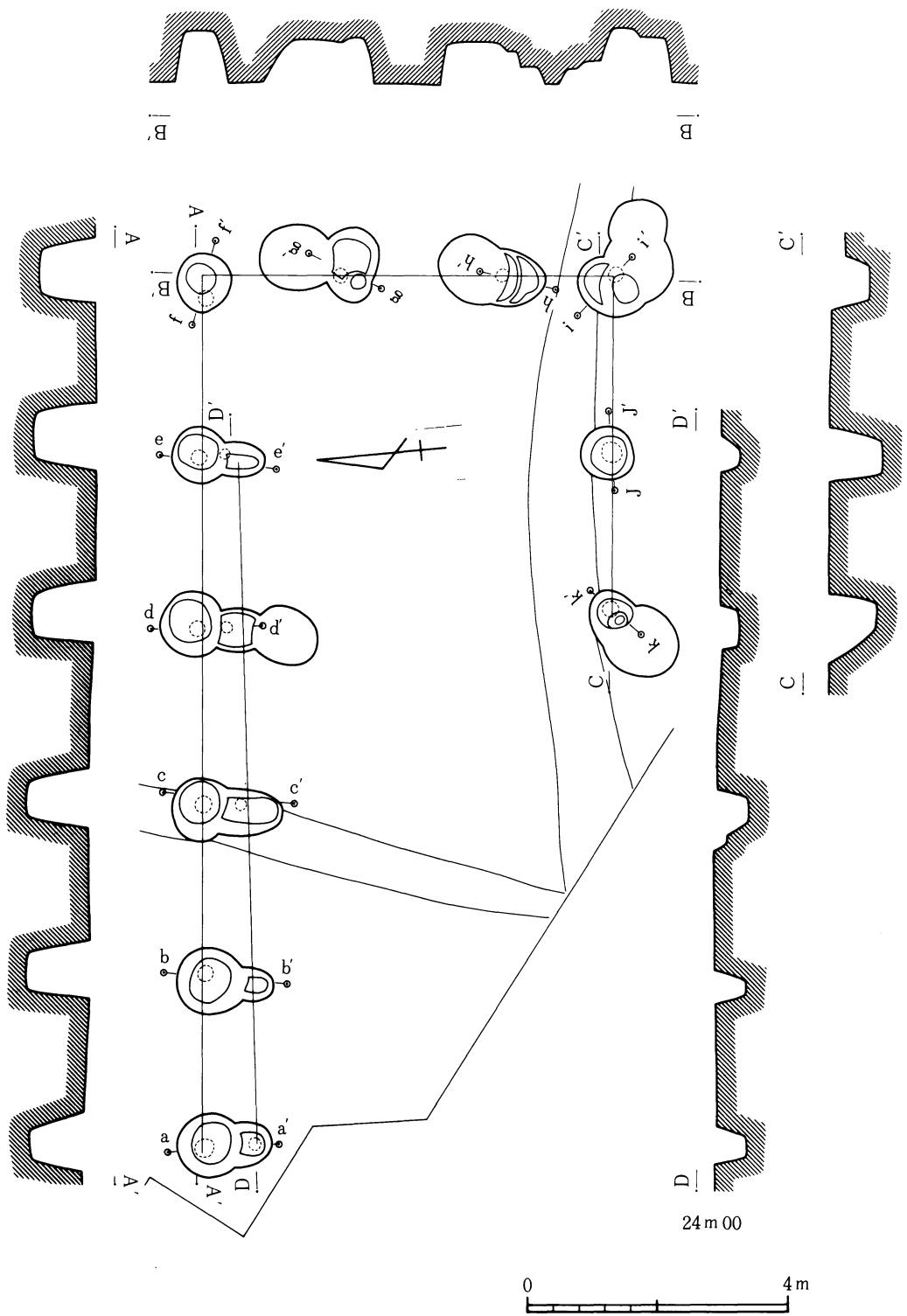
E2グリッド内で検出された。026・029号掘立柱建物跡と重複関係を持つが、遺構調査の段階では、前後関係を明瞭にすることができなかった。主軸をN-3°-Eにとる南北棟の建物である。桁行は3間で全長6.6m(東列と西列では間隔が異なる。東列は北から2.3, 2.6, 1.7m, 西列は北から2.4, 2.1, 2.1mである)。梁桁は2間で全長3.6m(1.8m等間隔)を測る。掘り方は径70～100cmで、比較的大きいが、検出面からの掘り込みの深さは浅く、20～35cmである。しかし、土層断面を観察したところ3本から柱痕の検出されたことから、柱穴としての機能は十分に果たしていたようである。柱径は12cm平均が復元される。



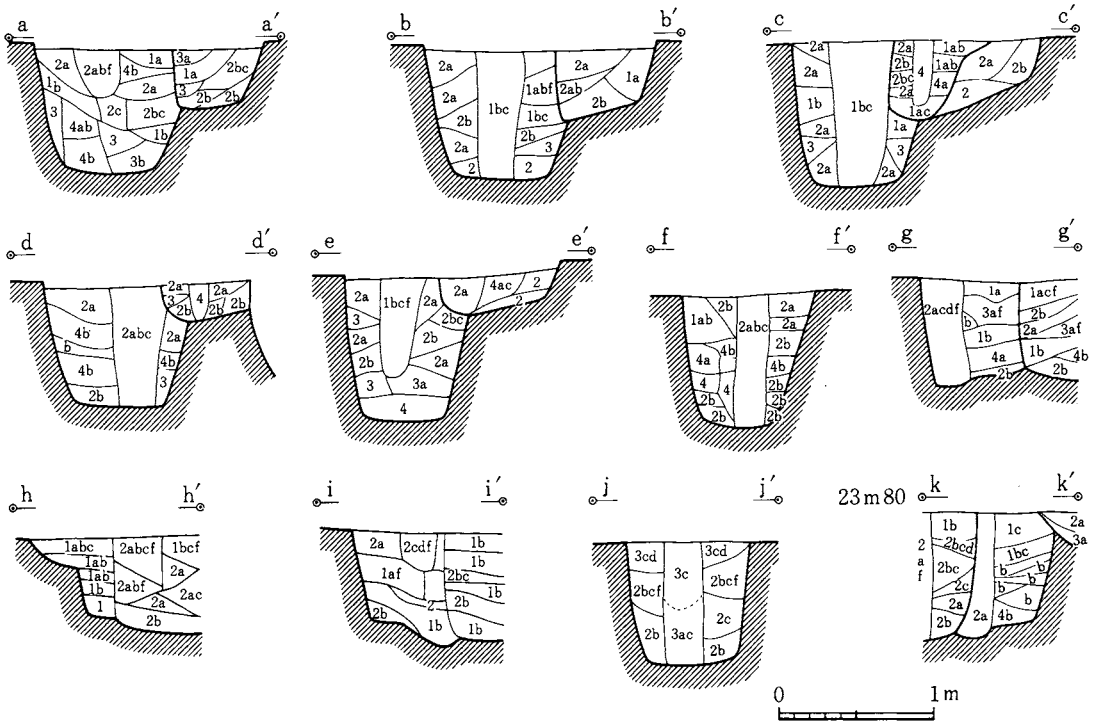
第118图 007号掘立柱建物跡实测图(1) (1/80)



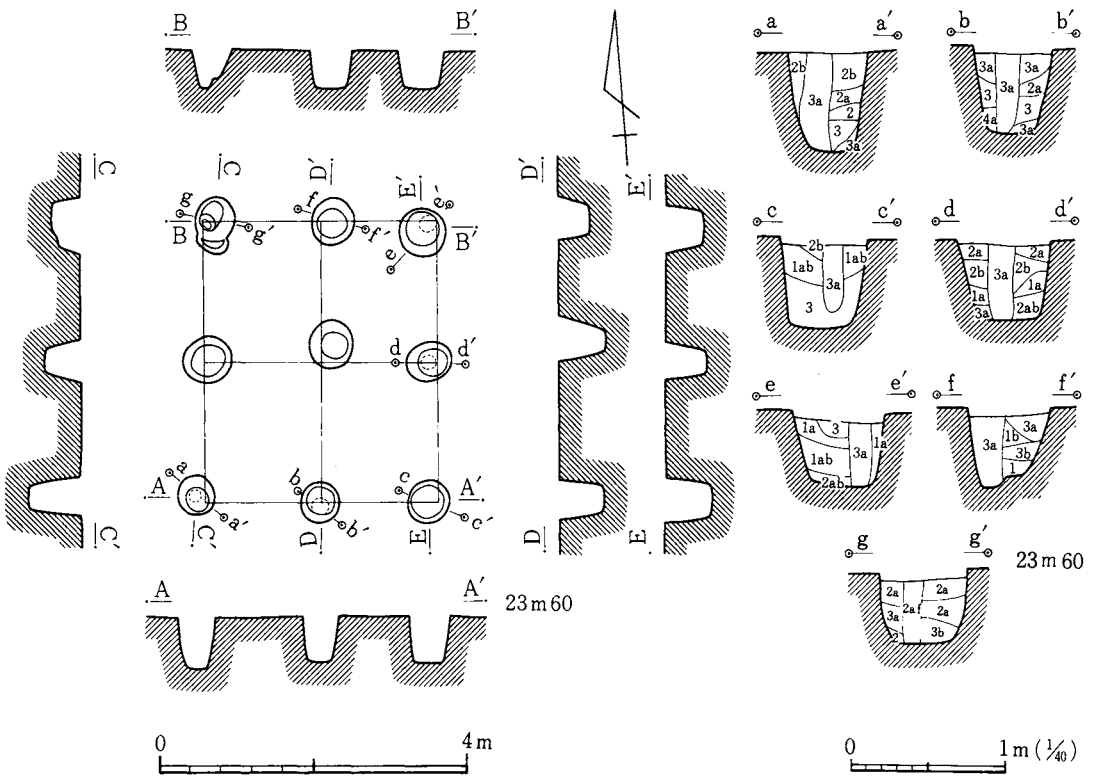
第119图 007号掘立柱建物跡実測図(2) (1/40)



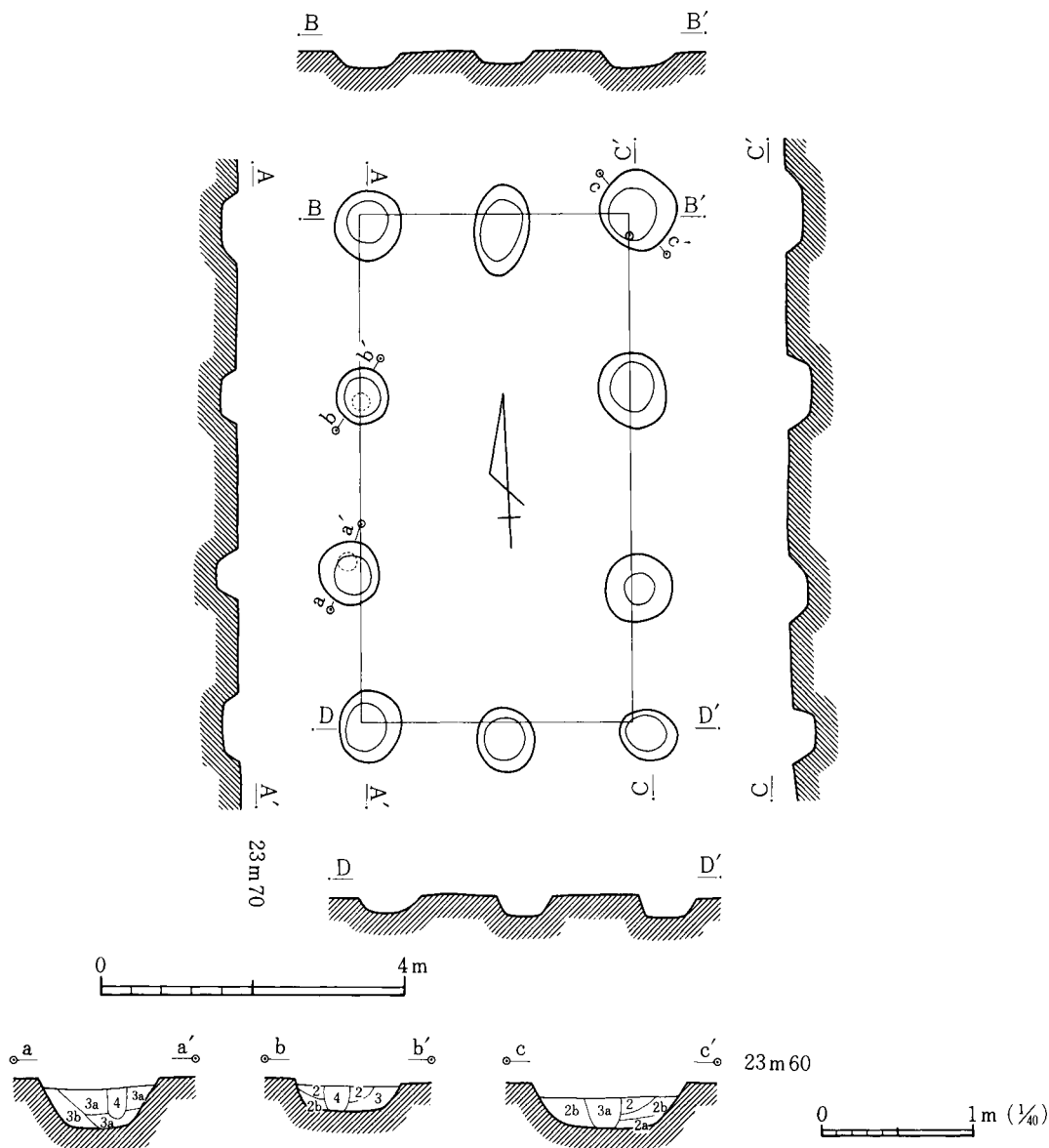
第120图 栅列C·008号掘立柱建物迹实测图(1) (1/50)



第121图 栅列C·008号掘立柱建物迹实测图(2) (1/40)



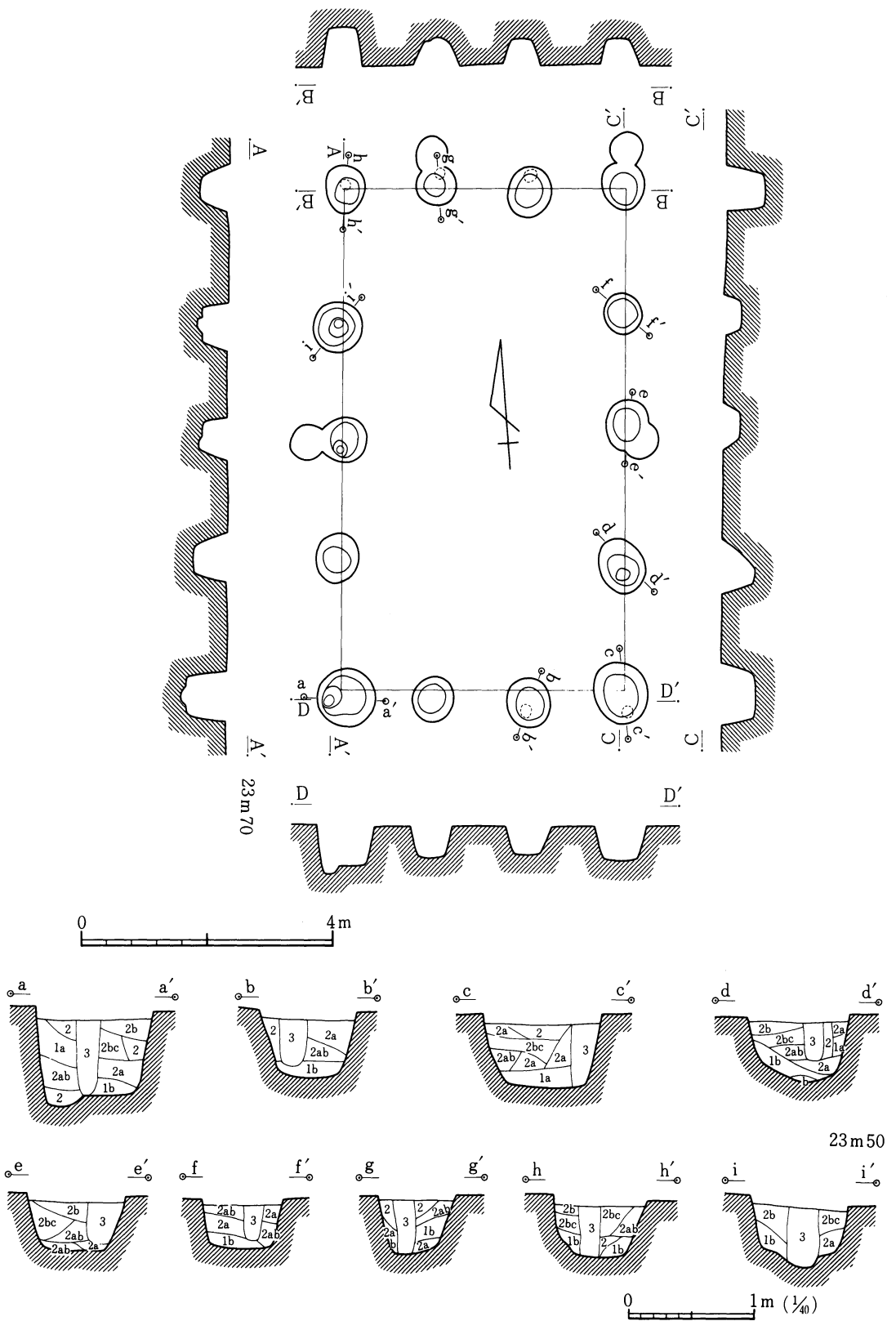
第122图 009号掘立柱建物迹实测图 (1/80)



第123図 010号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

011号掘立柱建物跡 (第124図)

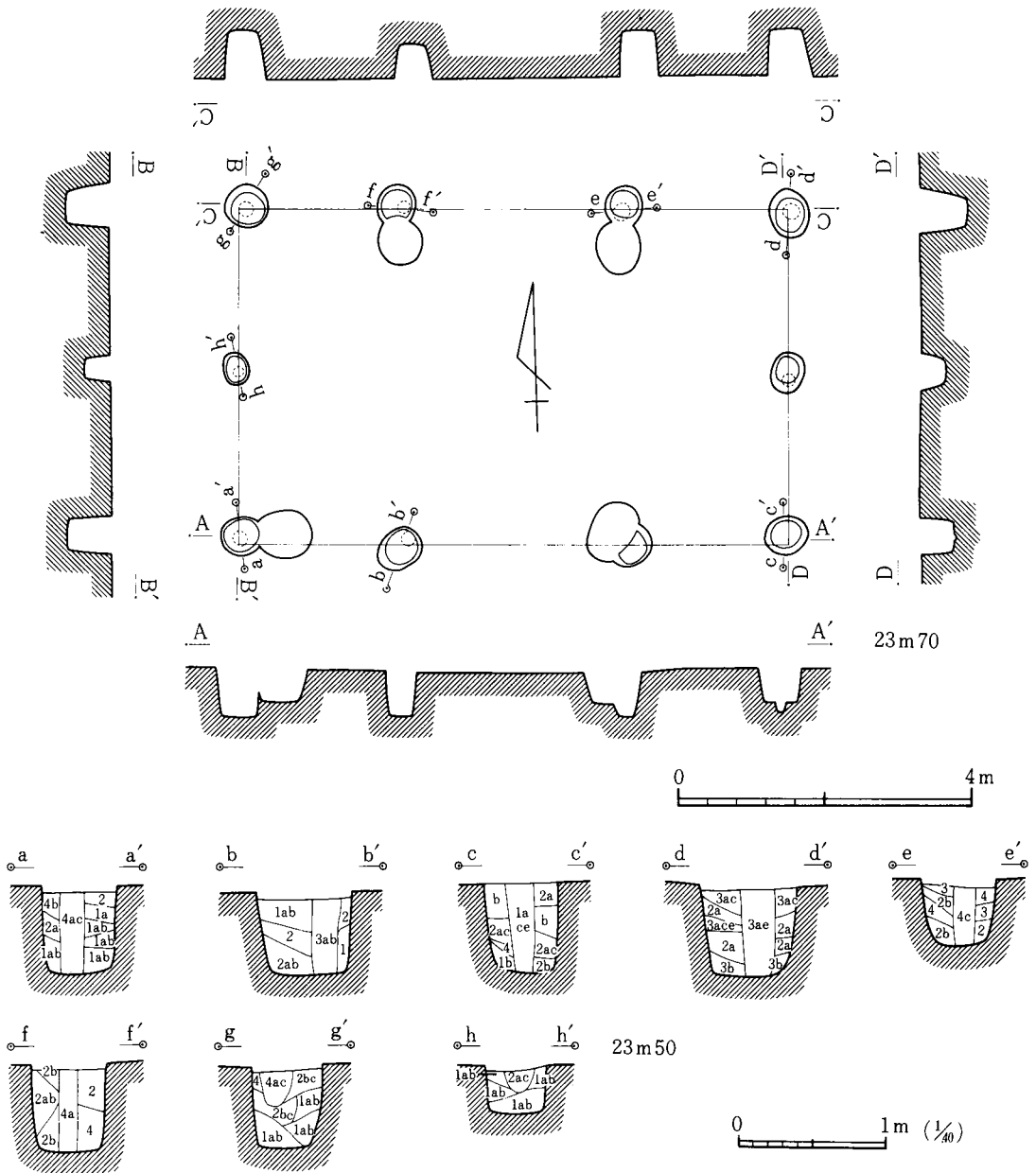
E1・2, F1・2の4グリッドにまたがって検出された。012号掘立柱建物跡と、柵列Aとの2遺構と重複するが、遺構調査の段階では、前後関係を明瞭にすることができなかった。主軸をN-6°-Eにとる南北棟の建物である。桁行4間で全長7.8m(東列・西列とも間隔はまちまちである。東列は北から2.0, 1.7, 2.3, 1.8m, 西列は北から, 2.2, 1.9, 1.7, 2.0mである), 梁行3間で全長4.5m(1.5m等間隔)を測る。掘り方は径60~90cm, 深さ40~55cmである。14本中9本に柱痕が確認された。それから復元すると、柱径は15~20cmであったことが考えられる。



第124图 011号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

012号掘立柱建物跡 (第125図)

E1・E2・F1の3グリッドにまたがって位置する。011号掘立柱建物跡, 025号住居跡と重複するが, 遺構調査の段階では, 前後関係を明瞭にすることができなかった。主軸をN-2°-Eにとる東西棟の建物である。桁行きは3間で全長7.5m(西から2.3, 2.8, 2.4m), 梁行は2間で全長4.5m(2.25m等間隔)を測る。掘り方は径40~70cm, 深さ35~60cmでかなりばらつきがある。特に梁行側柱は東・西共に径が小さく, 掘り込みの浅い貧弱なものである。柱痕から柱径を復元すると, 15~20cmである。



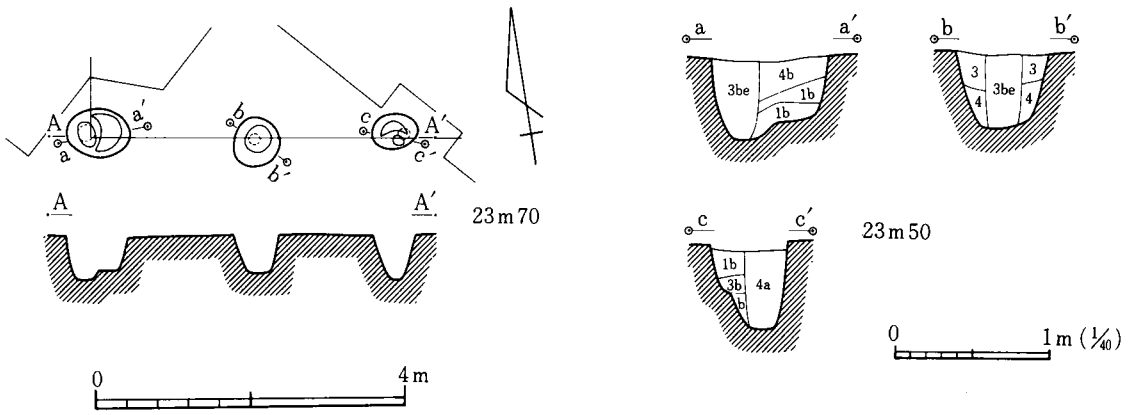
第125図 012号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

013号掘立柱建物跡 (第126図)

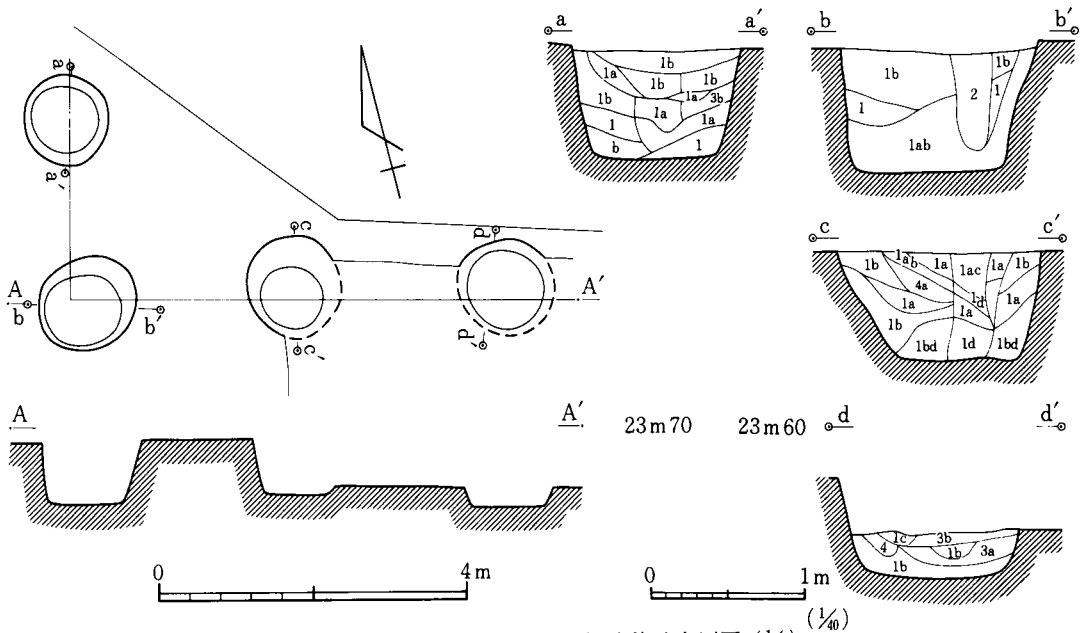
E 1 グリッドに位置する。調査区域のはずれにあるため、遺構のほとんどの部分は調査区域外となっており、確認されたのは、3本の柱穴のみである。通り方向はN-81°-Wであった。間隔は各2mである。遺構の配置から見て、西端の柱は、建物の南西隅のものであったろうと考えられる。掘り方は径50~60cm、深さは50~60cmである。

014号掘立柱建物跡 (第127図)

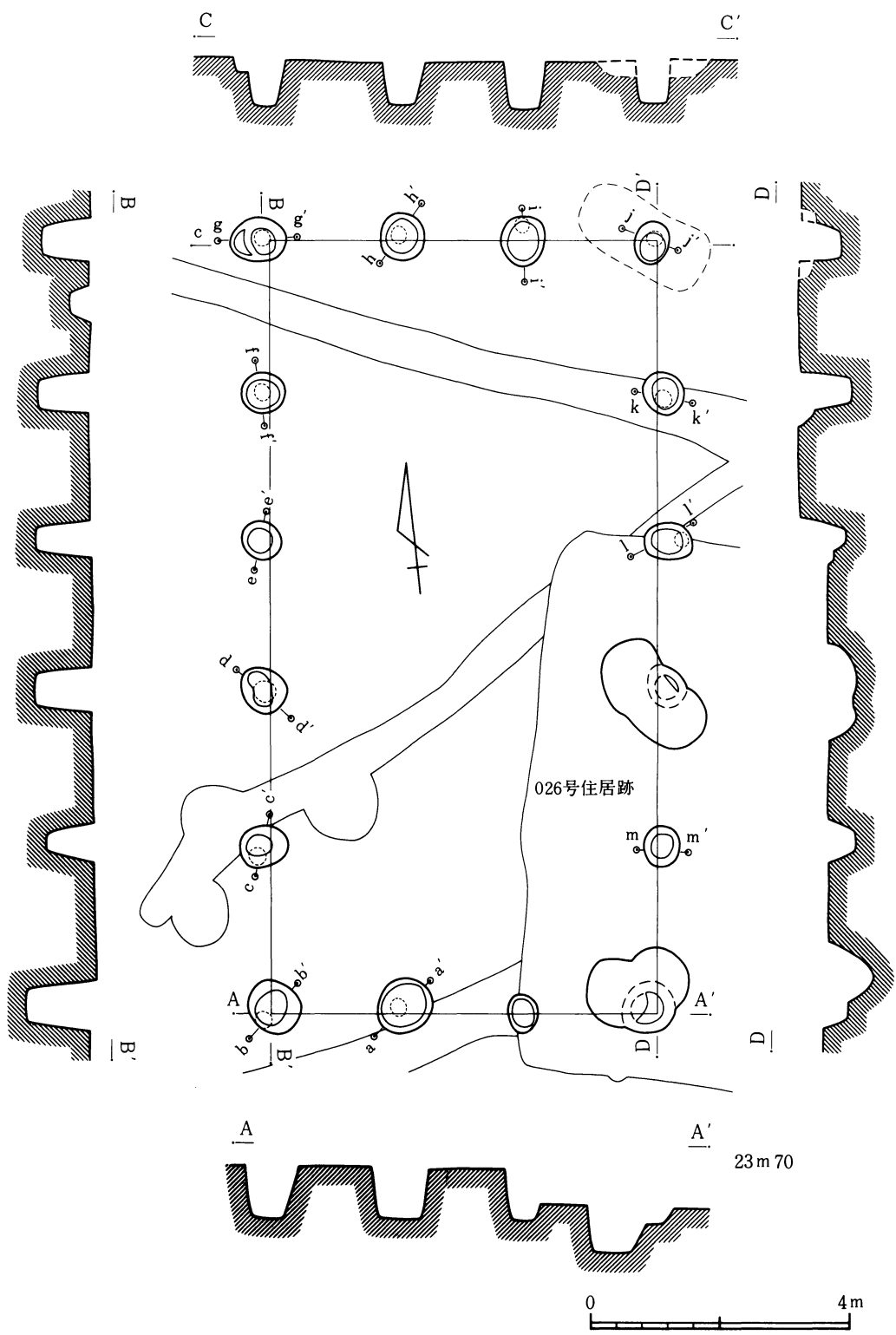
F 1 グリッド内に検出された。033号住居跡と重複しており、建物東よりの2本の柱穴は、033号住居跡によって部分的に破壊されている。調査区のはずれにあるため、遺構の半分以上は調査区域外にかかってしまっている。このため全容を明確にすることはできなかった。4本の柱



第126図 013号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第127図 014号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第128图 015号掘立柱建物跡実測图(1) (1/80)

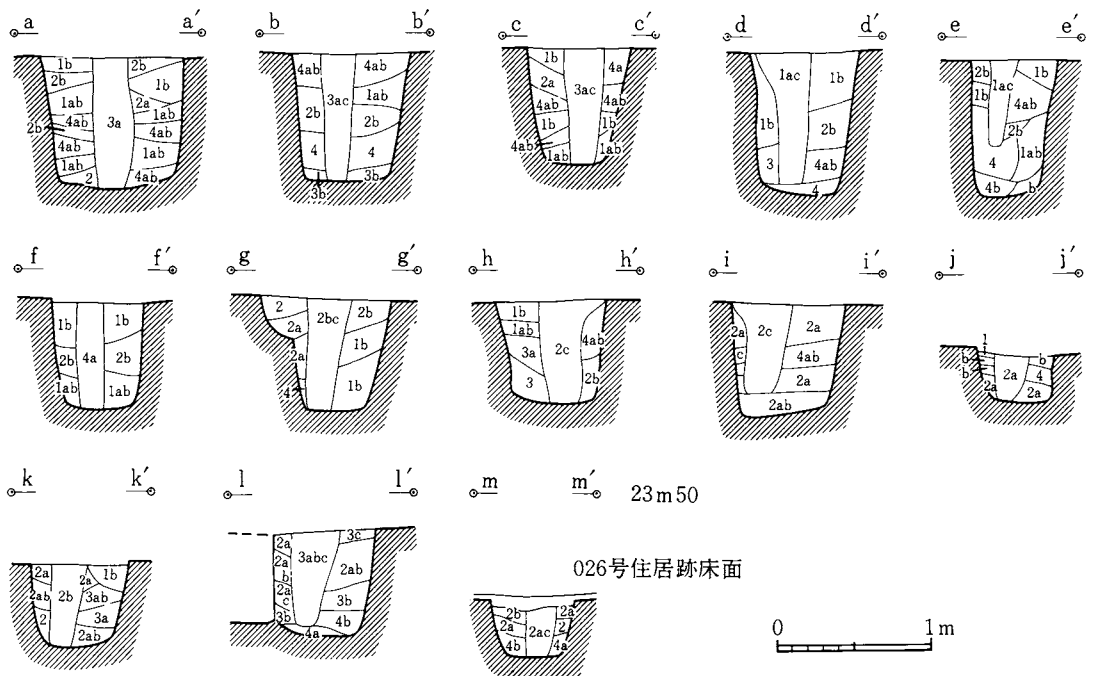
穴から復元すると、主軸をN-14°-Eにとっている。東西列は全長5.5m(2.25m等間隔)、南北列は1間2.3mで、ほとんど同じ寸法である。掘り方は径120cm平均、深さ70cm平均の比較的しっかりしたものである。土層断面の観察からは、良好な情報は得られなかった。

015号掘立柱建物跡 (第128・129図)

F 2 グリッドに位置する。016号掘立柱建物跡, 026号住居跡, M 2 号跡・M 4 号跡・M 5 号跡の5遺構と重複し, そのうち, 016号掘立柱建物跡との前後関係はわからないが, 他の4遺構全てによって切られている。主軸をN-7°-Eにとる南北棟の建物である。規模は, 桁行5間で全長11.7m(2.1~2.3m間隔), 梁行3間で全長6m(2m等間隔)を測る。掘り方は径60~90cm, 深さは70cm前後である。多くから柱痕が確認され, 柱径は15~20cmが復元される。掘方埋土は丁寧な版築状を見せている。

016号掘立柱建物跡 (第130図)

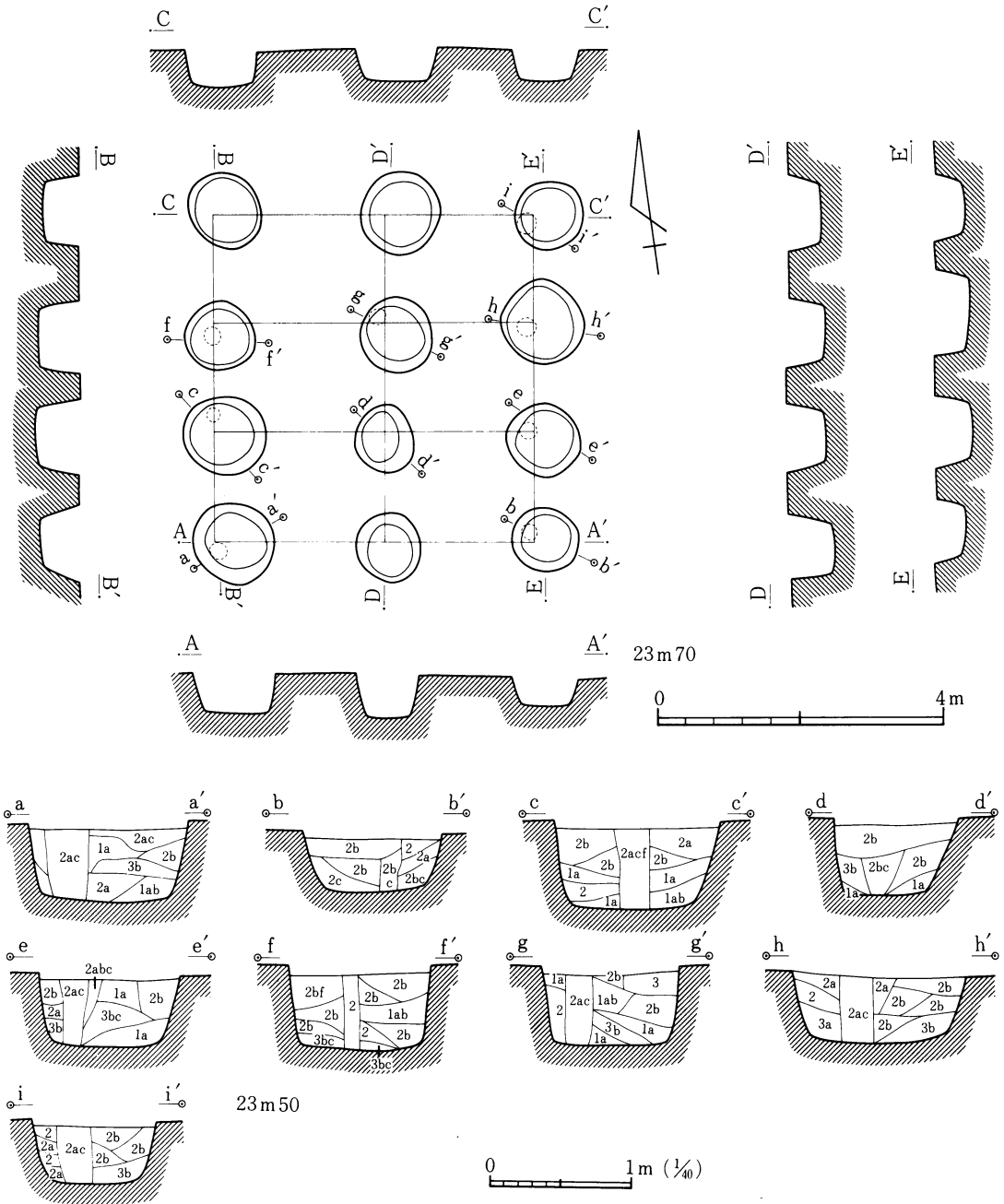
F 2・F 3グリッドにまたがって立地する。015号掘立柱建物跡, M 4 号跡と重複する。015号掘立柱建物跡との前後関係はわからないが, M 4 号跡によって切られている。主軸をN-8°-Eにとる南北棟の建物である。規模は桁行3間で全長4.5m(1.5m等間隔), 梁行2間で全長4.5m(2.25m等間隔)を測る。掘り方は径90~120cm, 深さ45~60cmである。柱痕から, 平均20cmの柱径が復元される。



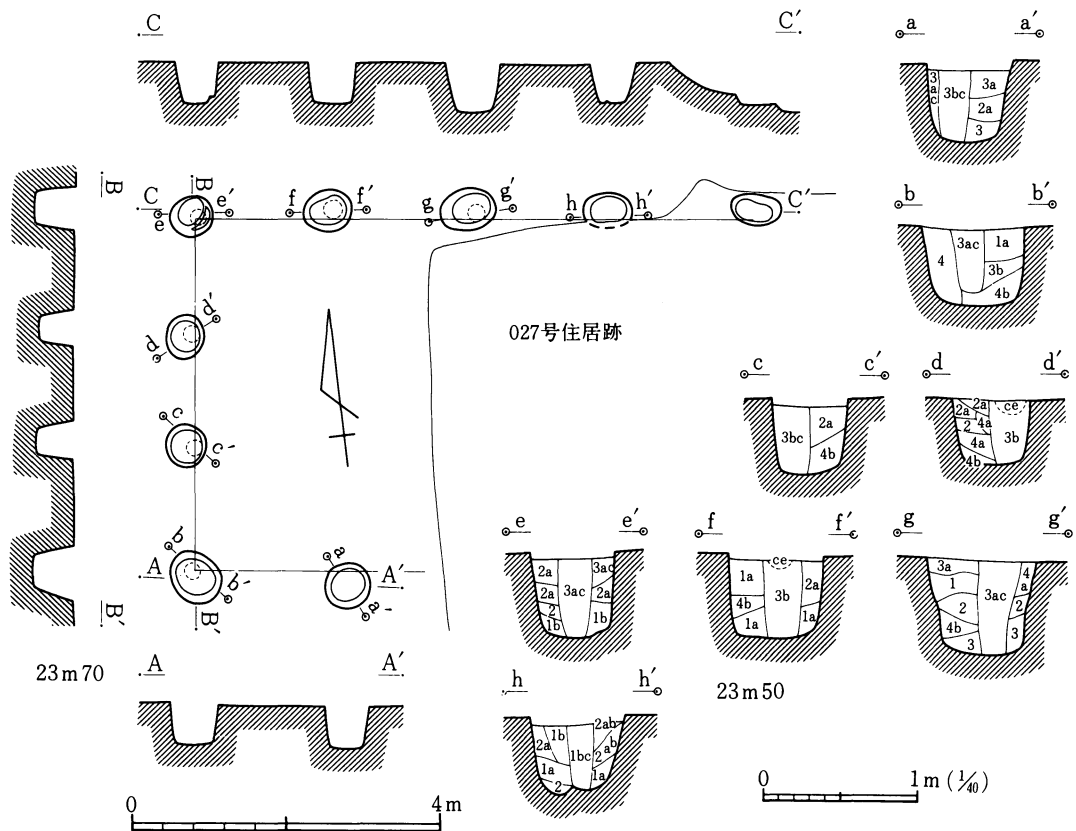
第129図 015号掘立柱建物跡実測図(2) (1/40)

017号掘立柱建物跡 (第131図)

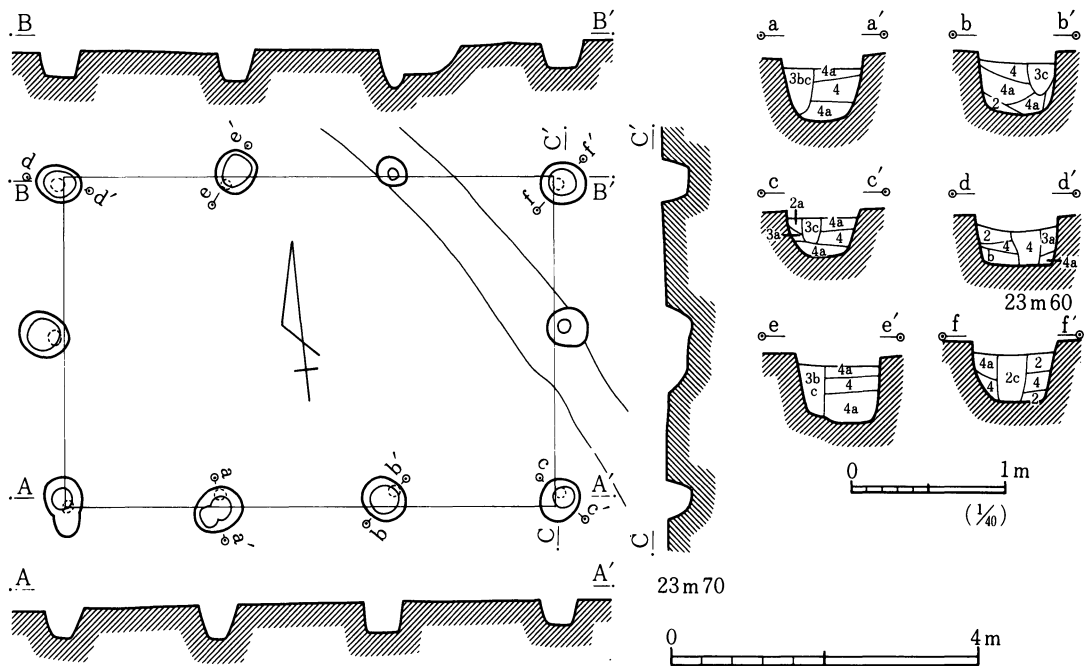
F2・G2グリッドにまたがって検出された。027号住居跡と重複し、027号住居跡によって切られている。掘り方が浅いため、027号住居跡の構築に伴って痕跡さえもなくなってしまった柱が多く、梁行は判るが、桁行は不明のままである。主軸をN-8°-Eにとる東西棟の建物である。規模は梁行3間で、全長4.5m(1.5m等間隔)、桁行は、確認された限りでは4間で全長7.3mである。掘り方は径50~70cm、深さ40~60cmを測る。027号住居跡のカマドによって破壊され



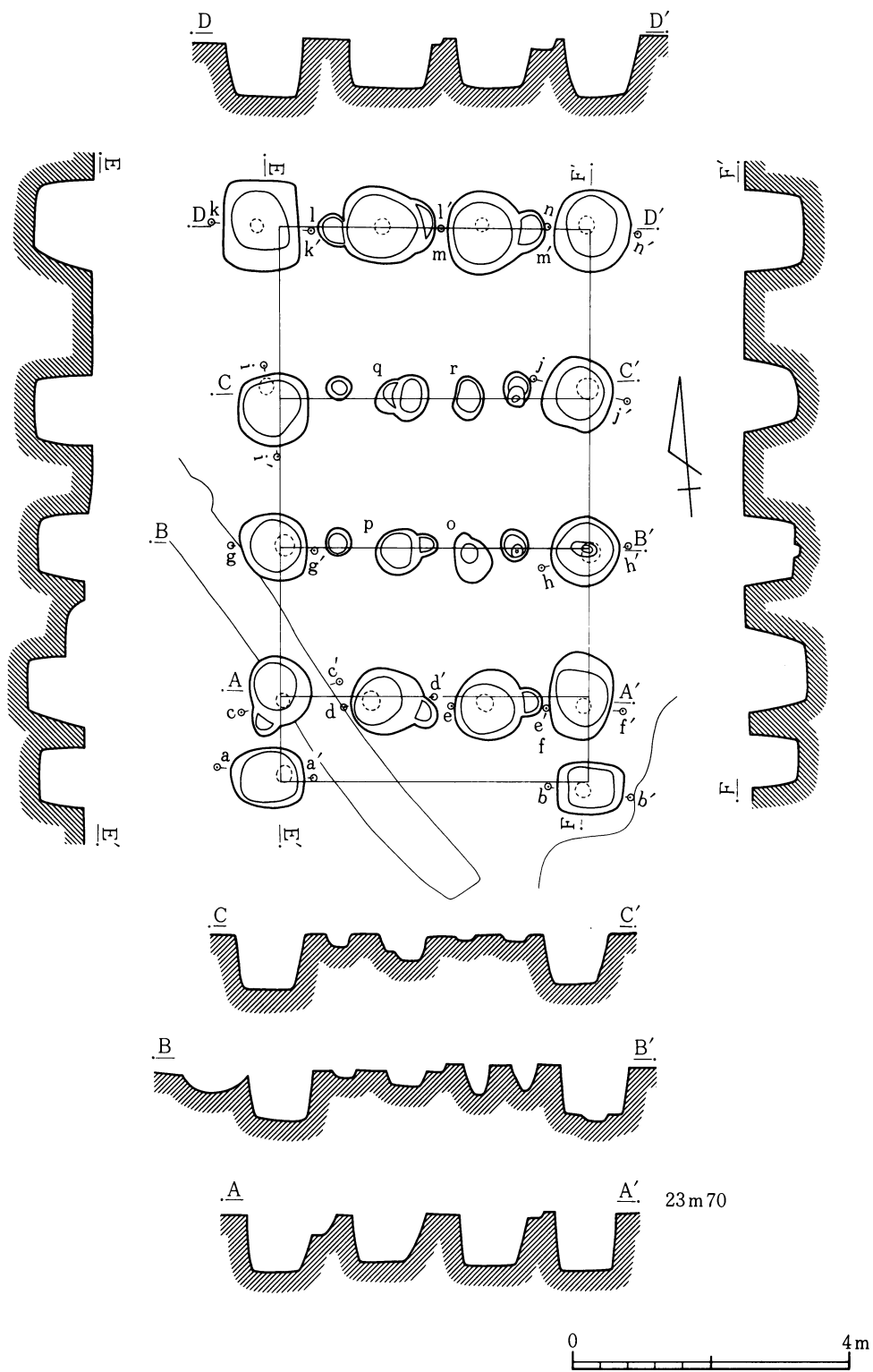
第130図 016号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第131图 017号掘立柱建物跡実测图 (1/80)



第132图 018号掘立柱建物跡实测图 (1/80)



第133图 019号掘立柱建物跡実測図(1) (1/50)

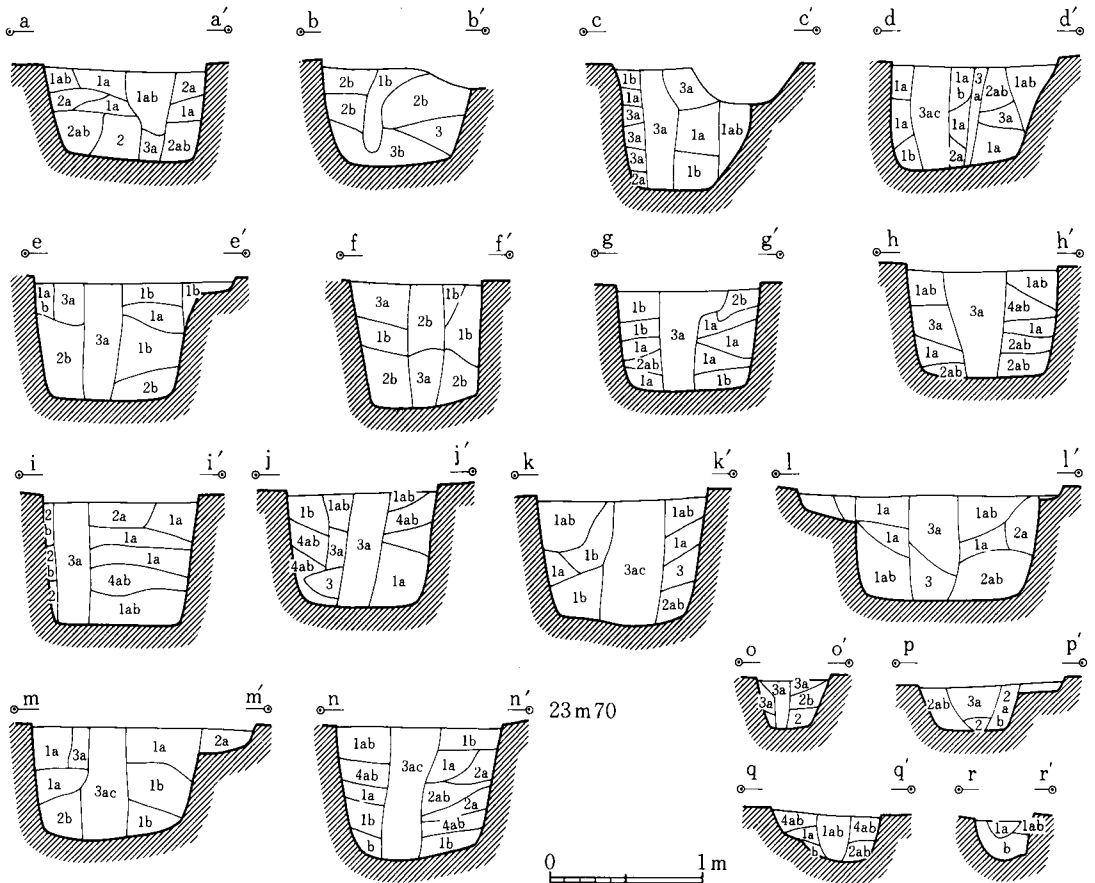
た桁行北列東端の柱以外は全て土層断面で柱痕が観察され、柱径は15~20cmと復元できた。

018号掘立柱建物跡 (第132図)

G 2グリッドで検出された。M 2号跡によって切られている。主軸をN-7°-Eにとる東西棟の建物である。規模は桁行3間で全長6.3m(2.1m等間隔)、梁行2間で全長4.2m(2.1m等間隔)を測る。掘り方は径50cm平均、深さ30~40cmの小振りのものである。柱痕らしいものも土層断面から観察できたが、径10~15cmのかなり貧弱なものであったようである。

019号掘立柱建物跡 (第133・134図)

G 1・G 2グリッドにまたがって検出された。M 2号跡によって切られている。N-5°-Eに主軸をとる南北棟の建物である。本遺跡で検出された掘立柱建物の中では、極めて特異な形態を示す建物である。身舎部分は3間×3間で、南妻通に廂を出す。建物の中は、南から入った最初の空間が、東西3間、南北1間の土間であり、その奥に東西3間、南北2間の床のある部分を持つ建物であると考えられる。床のある部分の4本2列の計8本の小さな柱穴は、全て東柱のものであると考える。というような構造を考えた上で見てみると、規模は桁行4間で全長



第134図 019号掘立柱建物跡実測図(2) (1/40)

7.9m(身舎部分は全長6.7mで2.25m等間隔。廂部分は1間1.2m)、梁行は3間で全長4.8m(1.6m等間隔)を測る。

但し、この復元だけでなく、4間×3間の廂付建物と、2間×3間の小型柱穴を持つ小掘立柱建物跡との重複というものも考えられる。しかし、軸があまりにも揃い過ぎていることから、ここでは前者の復元を考えたわけである。だが、それにしても、果たしてこの形態が、古代的形態の一類形として組み込まれる可きものかどうかは、多くの疑問があるので、今後類例の検索が要求されるものと考えられる。

020号掘立柱建物跡 (第135図)

H2グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。主軸をN-3°-Eにとる南北棟の建物である。規模は桁行3間で全長7.2m(北から2.2, 3.0, 2.0m)、梁行3間で、全長5.1m(東から1.6, 1.5, 2.0m)を測る。掘り方は径60~80cm、深さは70~100cmの比較的しっかりしたものである。土層断面で観察された柱痕から、25cm前後の柱径が復元される。

021号掘立柱建物跡 (第136図)

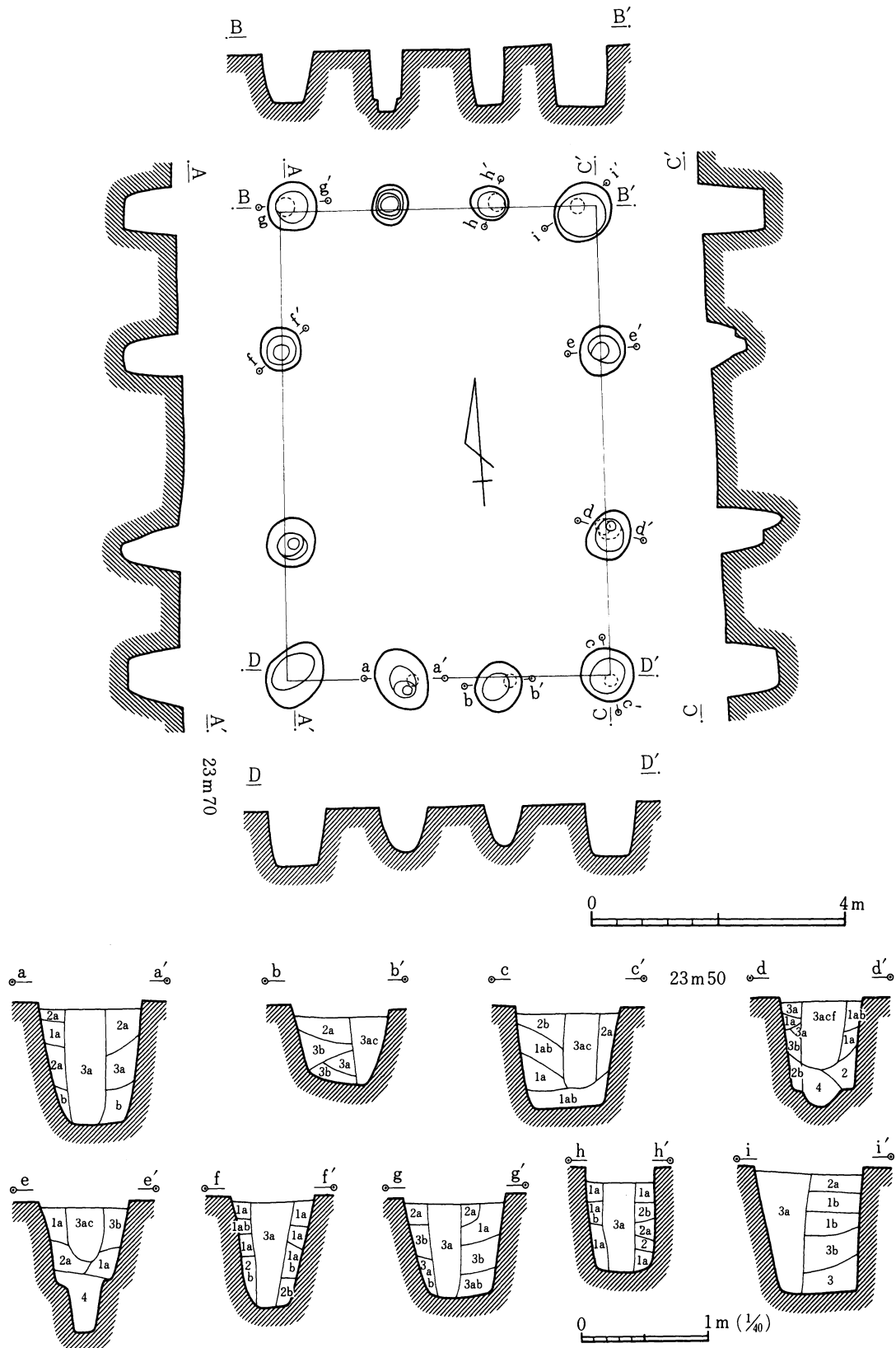
G2・H2グリッドにまたがって存在する。035・036・037号住居跡、M9号跡の5つの遺構と重複している。035号住居跡との前後関係は遺構の面からではわからないが、それ以外の4つの遺構には、明らかに切られている。主軸をN-4°-Eにとる南北棟の建物である。規模は桁行3間で全長7.2m(北から2.2, 2.5, 2.5m)、梁行3間で全長4.8m(東から1.3, 1.8, 1.7m)を測る。掘り方は径50~70cm、深さ70~100cmを測る。やや細みだが、比較的しっかりとしたものである。土層観察で確認された柱痕から、平均20cm程度の柱径が復元される。

022号掘立柱建物跡 (第137図)

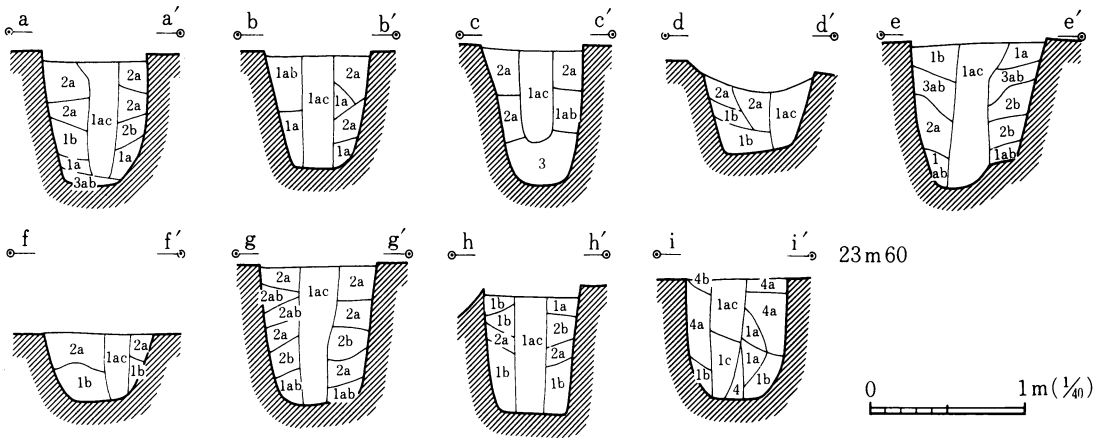
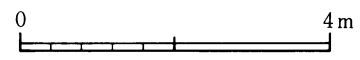
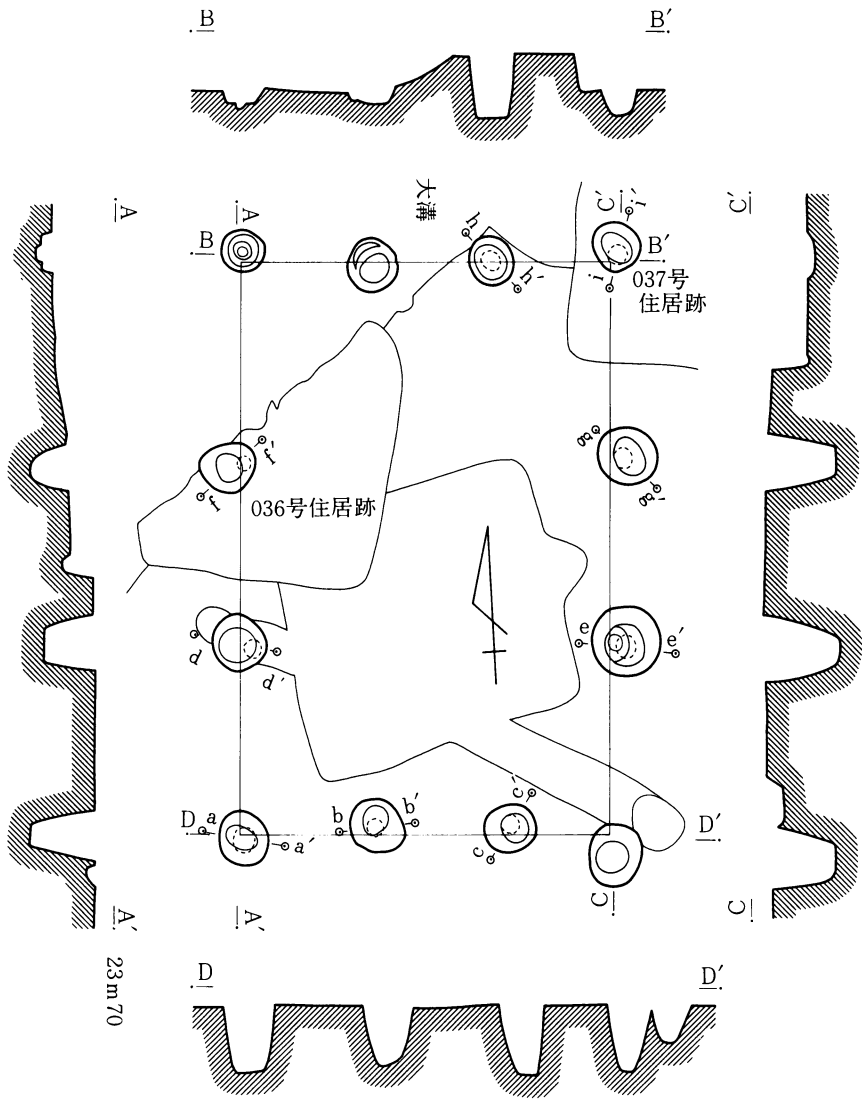
E1グリッドに位置する。建物跡のほとんどの部分が調査区域外にかかっているため、正確な規模・状況はまったくわからない。確認されたのは、南西隅の3本の柱穴で、それらから復元すると、主軸をN-3°-Eにとる建物であったことが判る。柱穴の間隔は南北・東西列ともに、1間2.4mである。掘り方は、東西列の2本が径80cm、北の1本は径60cm、深さは50~80cmと、ややばらつきが見られる。南西隅のものから柱痕が確認され、柱径15cmが復元された。

023号掘立柱建物跡 (第138図)

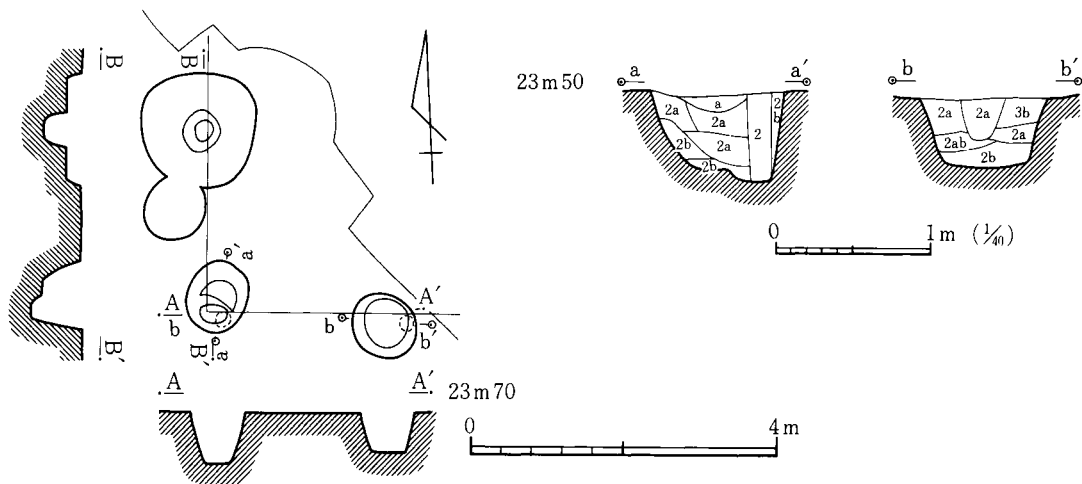
E1グリッドで検出された。建物跡の多くの部分が調査区域外にあるため、正確な規模・形態は不明である。確認されたのは、建物跡の南西部の5本の柱穴である。主軸をN-7°-Eにとっている。規模は南北列2間で全長3.4m(北から2.2, 1.2m)、東西列2間で全長3.6m(1.8m等間隔)となっている。掘り方は径50~90cm、深さ15~60cmで南西隅のものが、最も小さく、最も浅い。



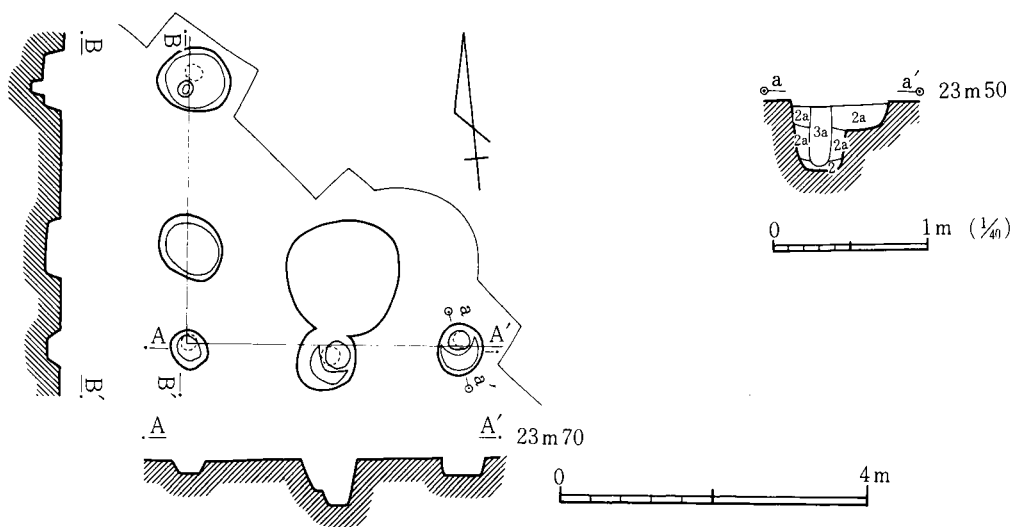
第135图 020号掘立柱建物跡実測图 (1/40)



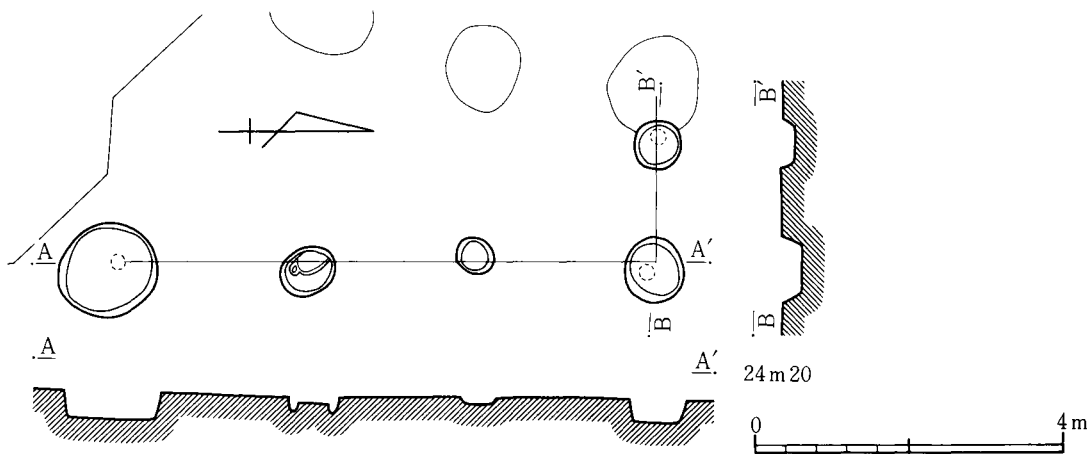
第136图 021号掘立柱建物跡実測图 (1/40)



第137图 022号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第138图 023号掘立柱建物跡実測図 (1/40)



第139图 024号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

024号掘立柱建物跡（第139図）

C 2・D 2グリッドにまたがって位置する。002号掘立柱建物跡と重複すること、建物の一部が調査区域外にかかっていたことから、正確な規模・形態を確認することはできなかった。主軸を真北にとっている。確認されたのは、北東隅柱穴を中心として、東西列1間、南北列3間の計5本の柱穴である。規模は東西列1間1.7m、南北列は3間で全長6.9m(北から2.3, 2.0, 2.6m)である。掘り方は径50～130cm、深さは10～40cmであり、全体に浅い掘り込みで、径には極端なばらつきが見られる。特に、北東隅・南端の2本は径が大きい浅く、又、他の3本は径も小さいし、極端に浅い。

025号掘立柱建物跡（第140図）

C 2グリッドに所在する。001・002号掘立柱建物跡と重複するが、遺構調査の段階では、前後関係を明確にすることができなかった。又、建物の約半分が調査区域外にかかっていたために、規模・全容を知ることができなかった。主軸を真北にとっている。確認されたのは、北東隅の柱穴を中心とした、東西列3間・南北列2間の6本の柱穴である。規模は東西列が3間分で全長5.4m(西から1.7, 2.0, 1.7m)、南北列は2間分で全長4.5m(北から2.1, 2.4m)を測る。掘り方は径50～90cm、深さ30cm平均である。土層断面から柱痕を確認することはできなかった。

026号掘立柱建物跡（第143図）

E 2グリッドに位置する。010・029・030号掘立柱建物跡と重複するが、遺構調査の段階では、前後関係を明瞭にすることができなかった。N-8°-Eに主軸をとる2間×2間の東西棟掘立柱建物である。東列中央の柱穴は、010号掘立柱建物跡と重複しており、確認することができなかった。規模は桁行2間で全長2.7m(1.35m等間隔)、梁行2間で全長2.2m(1.1m等間隔)を測る。掘り方は径30～50cm、深さ50cm前後の小さなものであった。

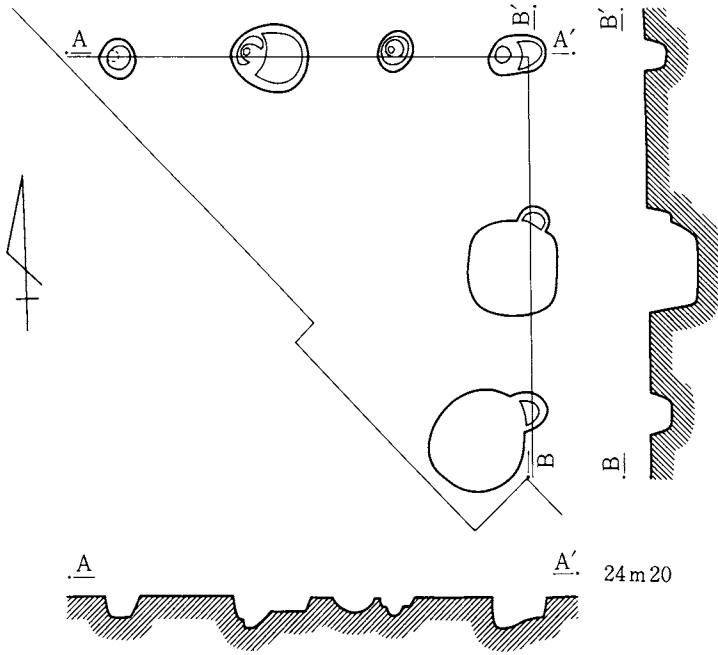
027号掘立柱建物跡（第141図）

H 1・H 2グリッドにまたがって検出された。015号住居跡、M 9号跡・M11号跡の3遺構と重複し、3遺構全てによって切られている。主軸を真北にとる南北棟の建物である。規模は桁行2間で、全長4.8m(東列・西列で間隔は乱れる)、梁行2間で全長3.3m(1.65m等間隔)を測る。掘り方は径50～100cm、平均70cmで、深さは40～50cmであった。3本の土層断面から柱痕が確認され、10cm平均の貧弱な柱径が復元された。

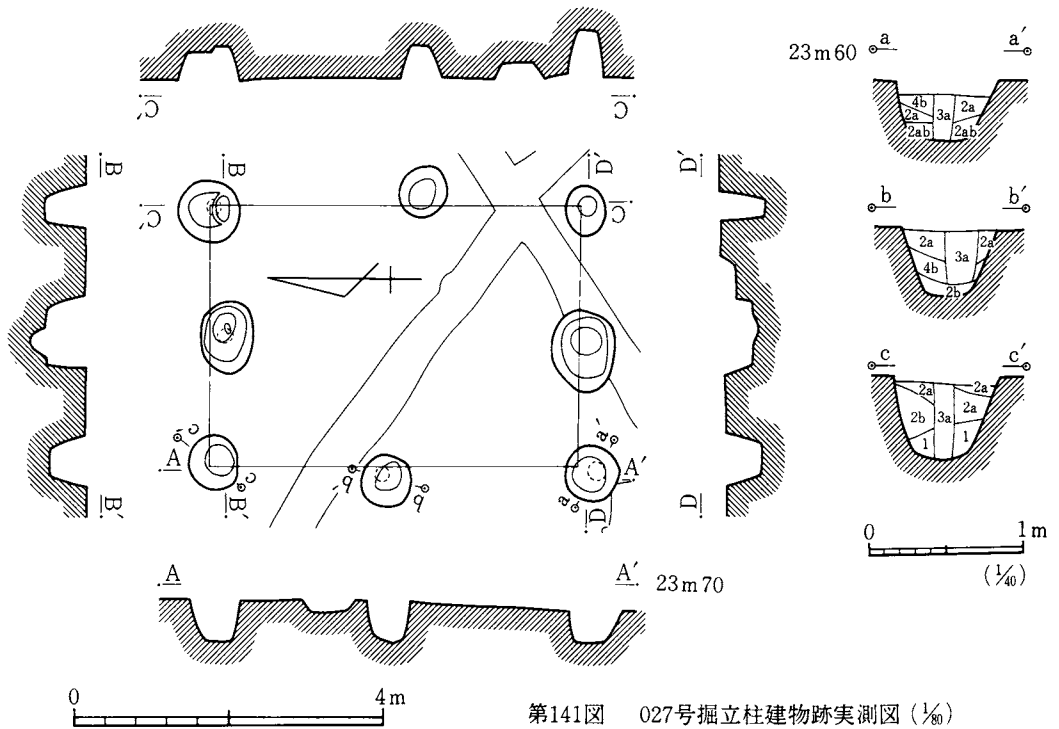
028号掘立柱建物跡（第142図）

H 1グリッド内で検出された。北東隅の柱穴だけは調査区域外にかかっているため、検出できなかった。N-2°-Eに主軸をとる、2間×2間の東西棟総柱建物跡である。規模は桁行2間

で全長3.4m(1.7m等間隔), 梁行2間で全長2.6m(1.3m等間隔)を測る。掘り方は径50~60cm, 深さは25~80cmで, 深さにかなりのばらつきが認められる。特に, 西列中央の柱穴は, 2段掘



第140図 025号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第141図 027号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

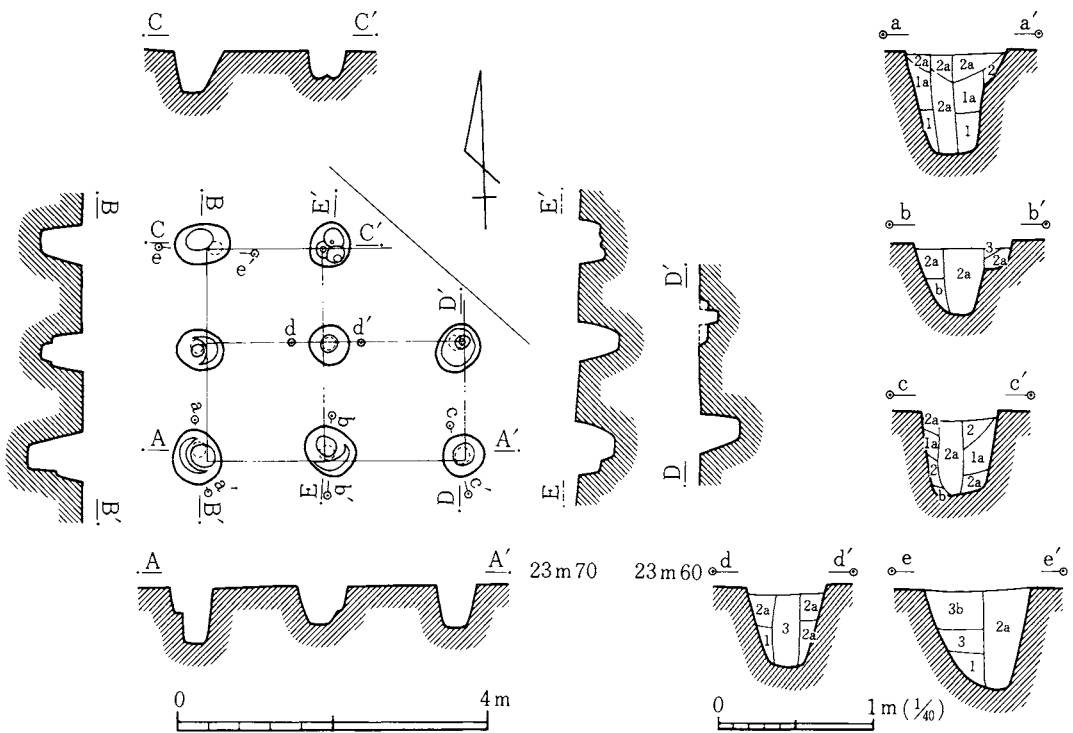
りのほぞ穴状の掘り方となっている。土層断面で観察された柱痕から、10cm前後の貧弱な柱径が復元された。

029号掘立柱建物跡 (第143図)

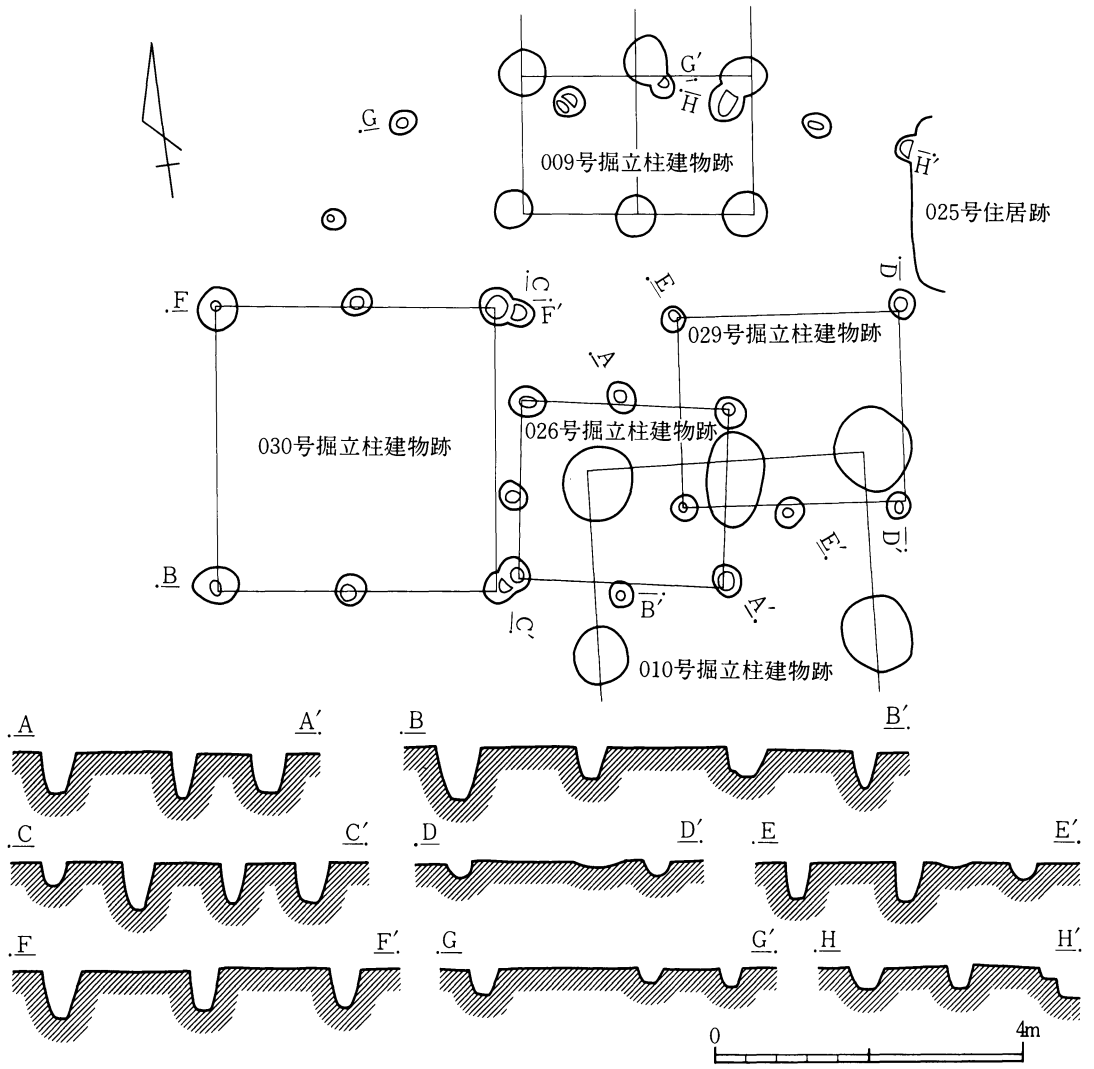
E 2 グリッドで検出された。010・026号掘立柱建物跡と重複するが、遺構調査成果からは、前後関係を明瞭にすることができなかった。N-7°-Eに主軸をとる東西棟の建物である。四隅に柱穴を持ち、更に南側東西列の中央にもう一本の柱穴を持つ、変則的な5本柱の掘立柱建物である。規模は桁行2.9m、梁行2.4mを測る。掘り方は径30cm前後、深さは20cm前後だが、北西隅の1本のみ50cm前後とやや深い。但し、全体には貧弱なものである。柱痕は確認されなかった。

030号掘立柱建物跡 (第143図)

E 2 グリッドで検出された。026号掘立柱建物跡と重複するが、前後関係を遺構の上から掴むことはできなかった。N-8°-Eに主軸をとる建物である。規模は東西・南北共に3.6mで、ほぼ正方形に近い建物なのだが、東西2間、南北1間で柱穴は計6本という変則的な掘立柱建物である。掘り方は径40~50cmであるが、四隅の柱穴にくらべ、中心の2本は貧弱なものである。柱痕は検出されなかった。



第142図 028号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

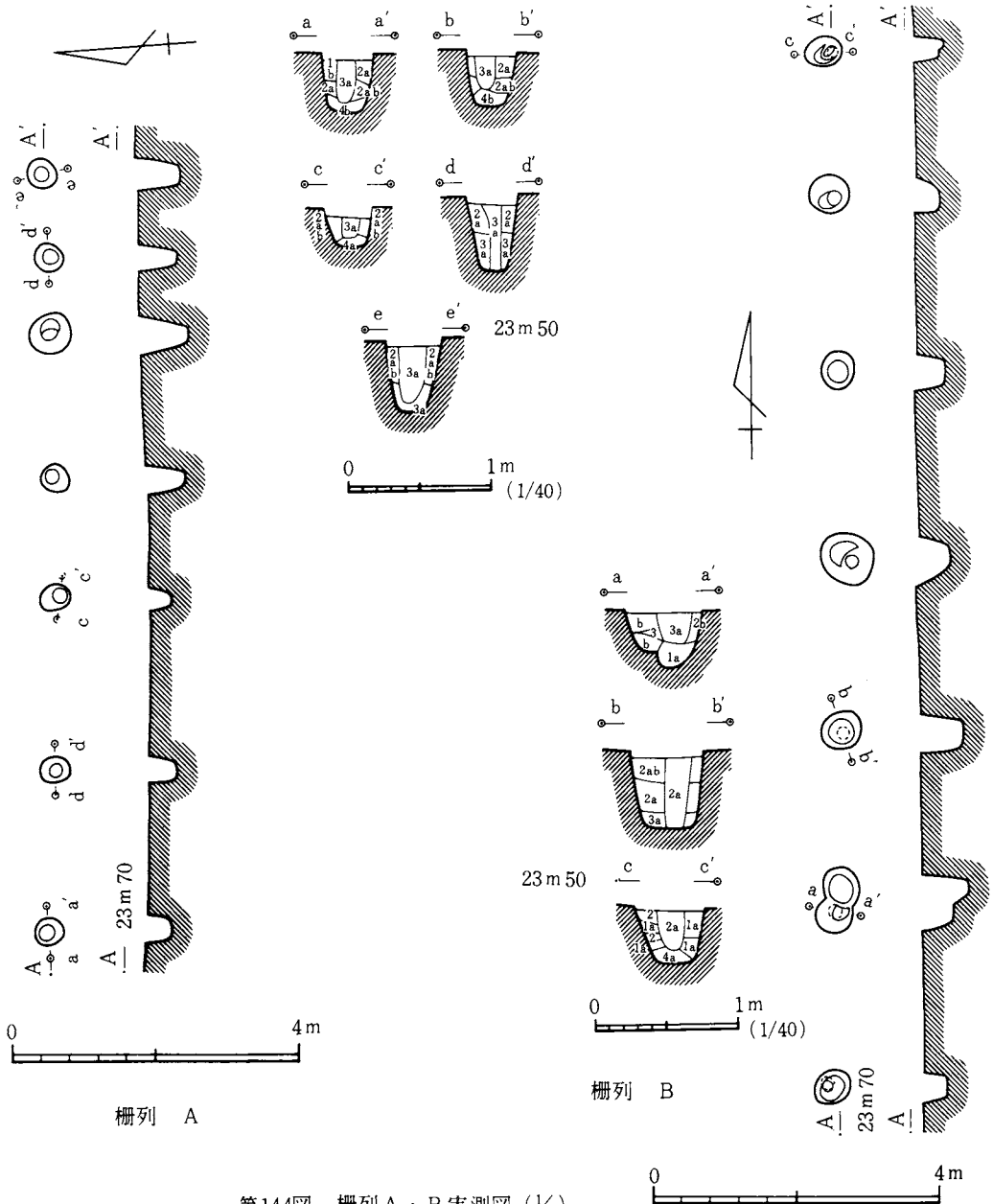


第143图 026·029·030号掘立柱建物跡实测图 (1/50)

柵列A・B (第144図)

柵列Aは、F1・E2グリッドにまたがって検出された。東西に列するもので通り方向はN-87°-Wである。全部で7本の柱穴が確認された。規模は全長10.4mで、柱の間隔は、西から2.2, 2.3, 1.65, 1.95, 1.1, 1.2mである。掘り方は径40~60cm、深さ30~70cmの全体に貧弱なものである。

柵列Bは、C2・D2グリッドにまたがって検出された。南北に列するもので、ほぼ真北に主軸をとっている。全部で7本の柱穴が確認された。規模は全長14.2mで、柱の間隔は北から



第144図 柵列A・B実測図 (1/80)

2, 2.4, 2.6, 2.3, 2.2, 2.7mである。掘り方は径40～60cm, 深さ30～60cmで, やはり, 全体に貧弱なものである。

柵列A・B共に土層断面の観察から何本かの柱痕が確認されているが, 復元される柱径は10cmという貧弱さだった。又, A・B共に建物跡となるような柱穴の配列を見せず, 更には調査区域内で, 確実にその全容の把握されていることから, 柵列として理解した。

柵列C (第120・121図)

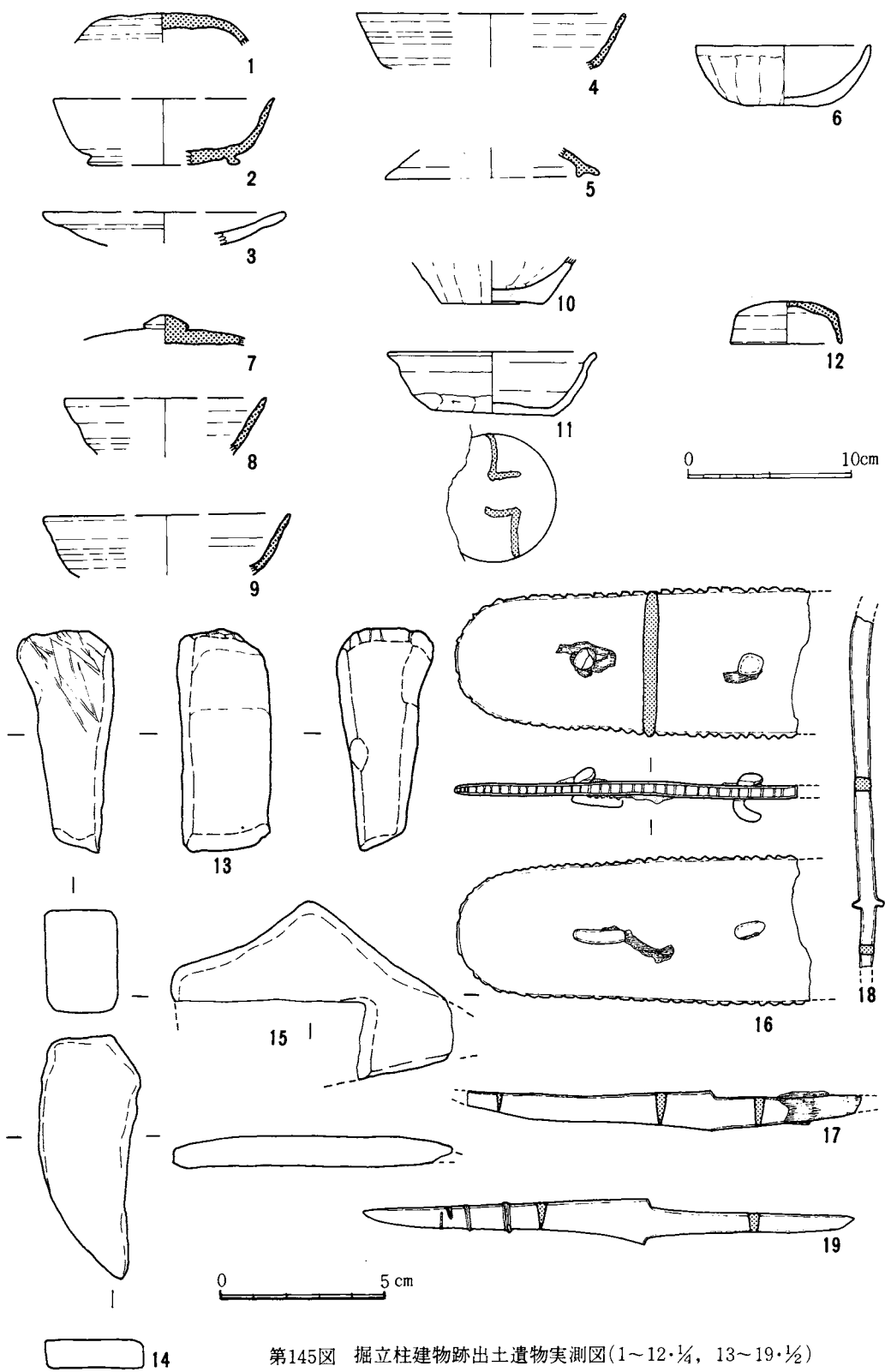
E2・D3グリッドにまたがって検出された。008号掘立柱建物跡と重複し, 008号掘立柱建物跡を切っている。東西に列するもので, 全部で5本の柱穴が検出されている。東側にはこれ以上伸びる可能性はないが, 西側に関しては, 調査区域外に向うため, 確認された範囲内で終結するのか, 更に伸びるのかは判断できない。全長は10.2m, 柱の間隔は西から2.4, 2.6, 2.7, 2.5mとなっている。掘り方は径50～70cm, 深さは30～50cmの全体に貧弱なものである。

(萩原)

第3節 掘立柱建物跡出土遺物 (第145図)

1～3及び13・14は001号掘立柱建物跡から検出された。1は須恵器の蓋, 2は須恵器高台付坏である。1は上端しか残っていないため, 外面肩に稜線を有するものかどうかはわからない。2は坏身底面が, 高台底面と同じ高さまで下っている。3は土師器皿である。13・14はともに砥石である。4・5は003号掘立柱建物跡から検出された。共に須恵器である。4は底部を欠失してしまっているが, 高台付坏であろう。5はかなりダレたかえりを有する蓋である。6は004号掘立柱建物跡出土の土師器坏である。7～9は006号掘立柱建物跡から検出された須恵器である。7は口縁部を失っているため, かえりの有無はわからない。8・9共に底部を欠失しているが, 9は瞭らかに高台を有していたものと考えられる。15～17は007号掘立柱建物跡から検出された。15は須恵器片の転用品であるが, 用途は不明である。16は鉄製鋸である。周縁には, 破断面以外鋸歯がまわっている。刃の先端部は, 全て摩耗が著しい。中央には2本の目釘が錆着したまま残っている。又, 目釘付近には, 木質も遺存している。17は鉄製の刀子である。片関で, 茎の部分には木質が遺存している。10・11及び18は010号掘立柱建物跡から検出された。10は土師器甕の底部破片である。11はくすべ焼成の坏であり, 外面体部下方から底部にかけて手持ちヘラ削りか施されている(朱書は後述)18は鉄製の篋被, 茎の部分である。棘部が明瞭に遺存している。12は011号掘立柱建物跡から検出された須恵器蓋である。19は016号掘立柱建物跡出土の鉄製刀子である。両関で, 刃部には木の表皮様のものを巻きつけたものが遺存している。

(萩原)



第145图 掘立柱建物跡出土遺物実測図(1~12・ $\frac{1}{4}$, 13~19・ $\frac{1}{2}$)

第4節 周溝状遺構・その他の遺構と遺物

周溝状遺構（第146図）

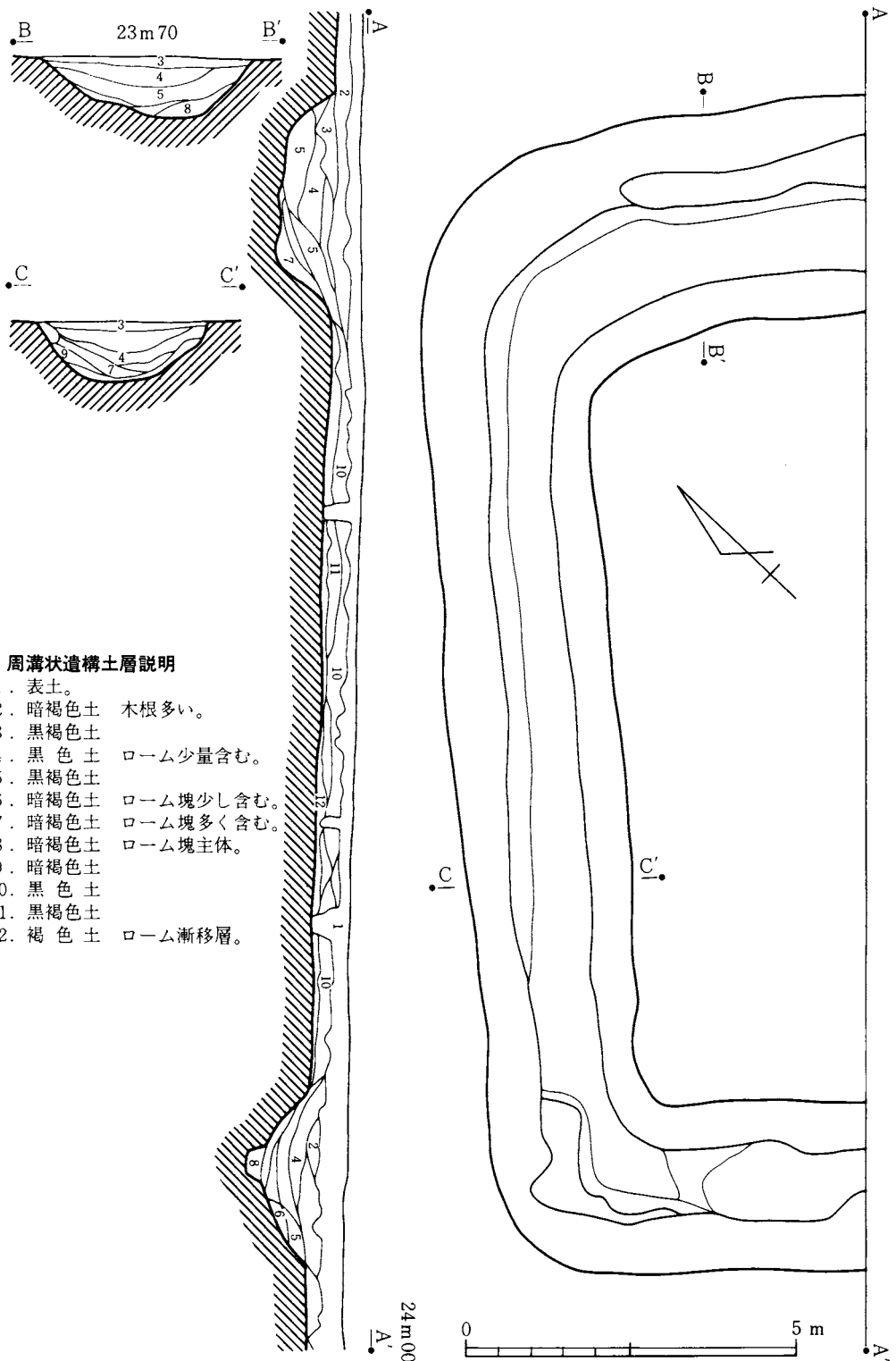
調査区の南東端K 2・K 3グリッドで検出された。残念ながら、半分以上が調査区域外にかかっているため、本遺構の形状・規模を明確にすることはできなかった。調査できた範囲内で考えると、方形周溝となる可能性が最も強いだろう。その場合、一般には、方形周溝墓・方墳・方形周溝(状)遺構のいずれかが想定されるが、伴出遺物もなく、又、重複する遺構も検出されなかったため、時期、性格を断定できずにいるのが現状である。

一応、調査できた部分について述べると、規模は、周溝内側で一辺11.4m、周溝外側上場での一辺は17.0mを測る。周溝は、部分的にやや異なるが、幅2.4～3 m、深さ1 m平均を示す比較的しっかりと掘り方のものである。土層断面図A-A'を見ると、周溝に挟まれた部分の土層は、上から2番目の10層が黒色土で、本遺構構築時の表土層であることが一目瞭然である。そして周溝の外側にはこの層が見受けられないことから考えて、構築時において、この土層は整地を受けたか、もしくは直接封土を盛られたかのいずれかの作業は受けていたわけであり、その結果として残っているのである。従って、本遺構は、先に挙げた三種の遺構のいずれかであることは、確実である。

主軸は、N-48°-Eにとっており、本遺跡中の他の多くの遺構とは、著しくその方位を異にする。

大溝（第147図）

調査区内を横断する形で、G 1・2・3グリッドにまたがって、北東から南西に向って走る溝状の遺構である。021・034・037号住居跡、021号掘立柱建物跡、M 6・7・8号跡の7遺構と重複している。N-40°-Eを主軸方向として走る。検出された部分の長さは29m、溝上場幅は3.4～4.8m、溝下場幅2.3～3 m、深さは40～80cmである。遺構断面を見ると、溝底部分の形状は、両端がやや浅くへこみ加減になっている。そしてそのへこんだ部分には径40～100cm程度の、規模にかなりのばらつきを持つ不規則なピット群が検出されている。溝底両端のへこみを轍と考えれば、道路跡と考えられる。しかしそれではピット群が説明できない。不規則ではあるが、瞭らかに溝の起ち上がり付近を狙って掘られていることから、確実にこの溝に伴って機能していたものであろうと考えられる。従って、溝・道路として別々に機能していた時期のある遺構と考えられるが、遺構調査の成果としては、その前後関係を瞭らかにすることができなかった。



周溝状遺構土層説明

1. 表土。
2. 暗褐色土 木根多い。
3. 黒褐色土
4. 黒色土 ローム少量含む。
5. 黒褐色土
6. 暗褐色土 ローム塊少し含む。
7. 暗褐色土 ローム塊多く含む。
8. 暗褐色土 ローム塊主体。
9. 暗褐色土
10. 黒色土
11. 黒褐色土
12. 褐色土 ローム漸移層。

第146図 周溝状遺構実測図 (1/100)

土壌 (第148図)

1号土壌 (D1)

C2グリッドに位置する。016号住居跡検出時に確認された。016号住居跡を切って掘り込んでいる。ほぼ正円形に近い平面形を示す。径は1.2m、深さは1.0mを測る。但し当初単なる攪乱と考えられていたため、住居精査前には精査されず、住居床面より下に掘り込まれている60cmほどの深さの部分が精査、測図されているだけである。覆土中には貝が投げ込まれたように混入しており、ゴミ捨ての穴として使われていたようである。

2号土壌 (D2)

C2グリッドに位置している。017号住居跡の南壁と、周辺の床面を破壊して掘り込んでいる。ほぼ正円形の平面形を示す。規模は、径1.4m、深さ70cmを測る。底に一層黒褐色土が堆積し、その上に厚さ40cmほどの貝(ハマグリ、キサゴ等)の堆積層がある。

3号土壌 (D3)

F1グリッドに位置する。M4号跡を切り、033号住居跡に隣接している。卵形に近い平面形を示し、規模は長径160cm、短径80cm、深さ30cmを測る。土層断面図に見える下の土層はM4号跡のものである。その上に厚さ30cmほどの貝の堆積層がある。

5号・6号土壌 (D5・D6)

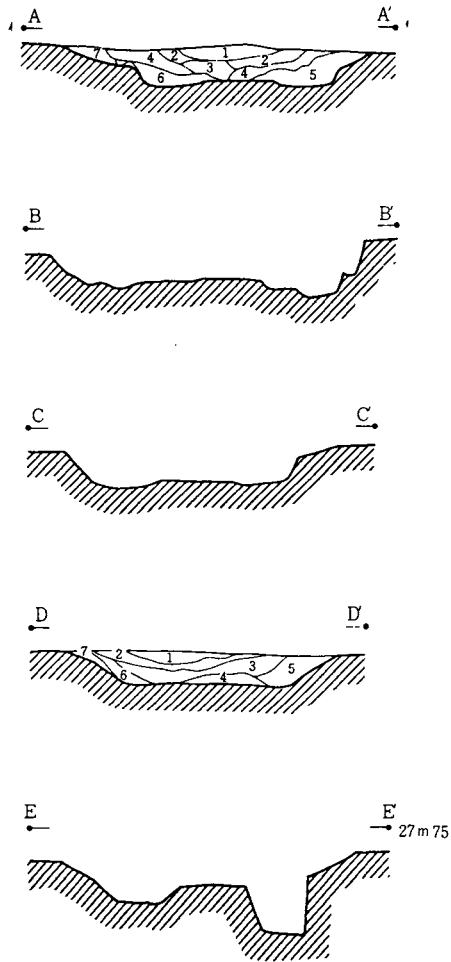
D2グリッドに位置する。003号掘立柱建物に隣接する。5号・6号土壌 (D5・D6) は重複しており、土層断面図を見ればわかるように、6号土壌が埋まった後に、5号土壌が掘り込まれている。土壌の形態・規模は、6号土壌がほぼ正円形で、径130cm、深さ75cmを測る。5号土壌は楕円形で、長径190cm、短径150cm、深さ50cmを測る。5号土壌は大量の貝(キサゴ他)によって埋め尽くされている。

7号土壌 (D7)

E2・E3グリッドにまたがって検出された。平面形は、長径185cm、短径150cmの不正円形で、深さは検出面から70cmほどである。覆土上層には、焼土粒・炭化物粒が若干含まれていた。底面の形状がかなり入り組んでおり、樹根によるものか、人為的なものかは不明である。

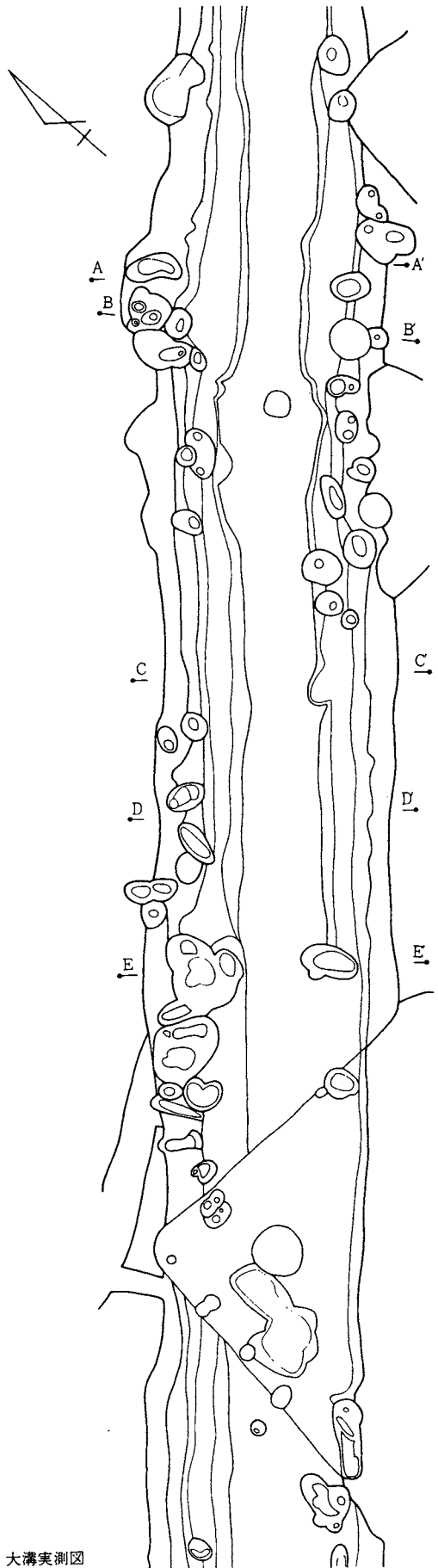
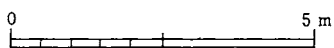
8号土壌 (D8)

D2グリッドに位置する。正円形で、径150cm、深さ30cmを測る浅い土壌である。覆土はロームを含む暗褐色土で占められており、貝などの混入物は一切見られない。



大溝土層説明

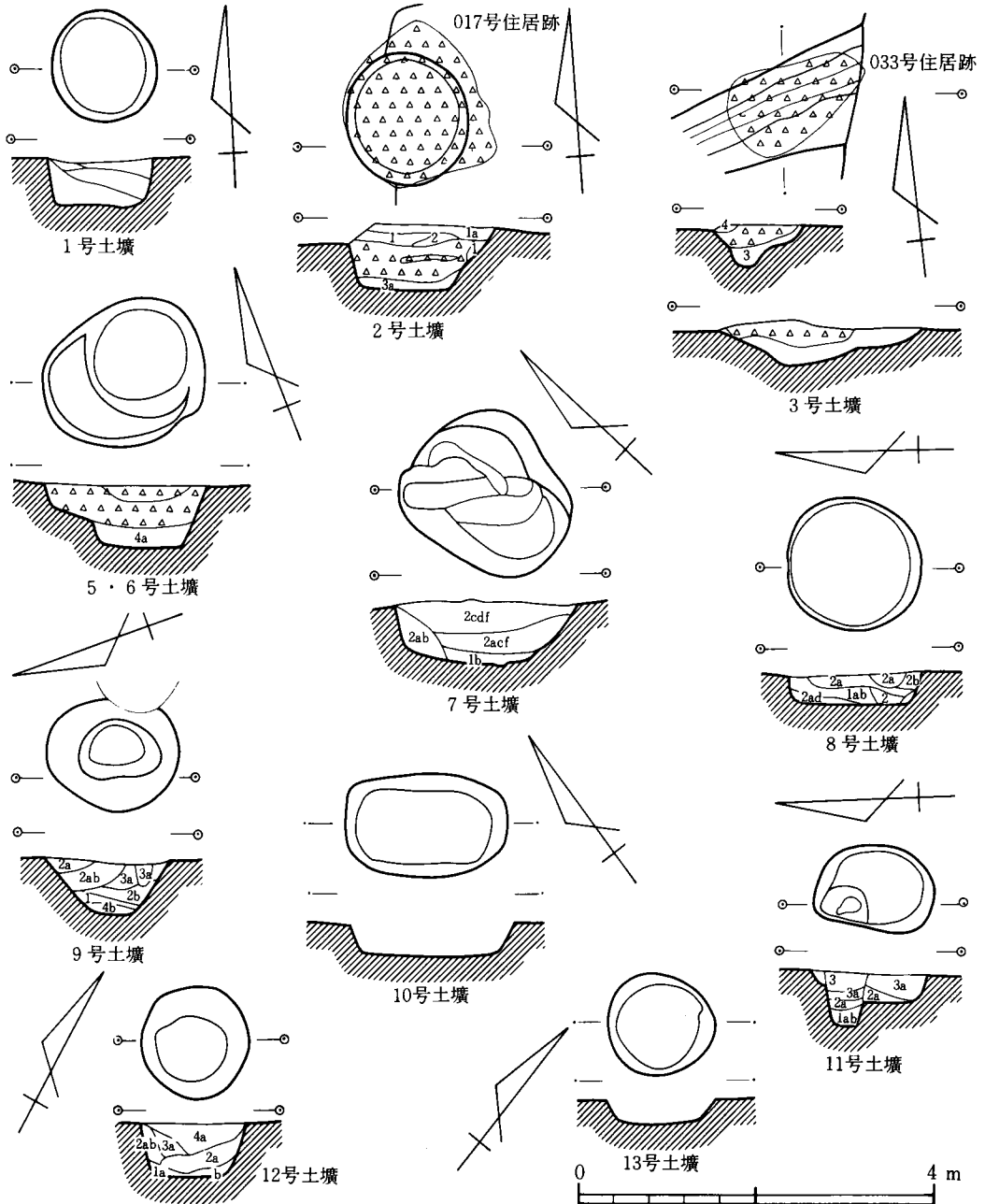
1. 暗褐色土 砂を多量に含む。
2. 黒褐色土 砂・ローム粒を少し含む。硬い。
3. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。硬い。
4. 暗褐色土 ローム粒を含む。やや硬い。
5. 暗褐色土 ローム塊を含む。
6. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
7. 暗褐色土 ローム粒・塊を少し含む。



第147図 大溝実測図

9号土壌 (D9)

E2グリッドに位置する。007号掘立柱建物跡と重複するが、前後関係はわからなかった。長径150cm、短径130cm、深さ55cmで、やや卵形を呈する。覆土中には貝などの混入物は見られない。



第148図 土壌実測図 (1/80)

10号土壌 (D10)

J 2 グリッドに位置する。平面形は、長径180cm、短径110cmの長楕円形を示し、深さは40cmと浅く、舟形を呈する。覆土中には、目立った混入物はない。

11号土壌 (D11)

J 2 グリッドに位置する。平面形は長径115cm、短径90cmの長楕円形で、北西隅に柱穴様の掘り込みを持ち、深さ60cmと30cmの二段構造になっている。土層断面を見ると、柱穴は、土壌を破壊して掘り込まれている。従って二つの遺構の重複したものである。覆土中には、貝その他の混入物は見られない。

12号土壌 (D12)

H 2 グリッドに位置し、M11号跡と重複するが、遺構からは前後関係は確認できなかった。平面形はほぼ正円形で、径120cm、深さ60cmを測る。覆土中には貝などの混入は見られない。

13号土壌 (D13)

H2グリッドに位置する。平面形はほぼ正円形で、径110cm、深さ25cmを測り、かなり浅いものである。起ち上がりも非常に緩やかで、余りメリハリのない形態をしている。

溝状遺構

調査区域内にはM1号～M16号(うちM12号は欠番)の15本の細い溝状遺構が、縦横に走っている。幅は広いものでも1m程度、深さも50cm程度という極めて細い貧弱なものである。走る方向もまちまちで計画性は見られない。又、遺跡内の建物などと呼応して同主軸をとって直線的に伸びるものなどもなく、遺跡内での区画の役割を演じていたものでもないようである。大半はほとんどの遺構を壊して造られている。伴出遺物の見られないことから、その時期は全くわからないし、又、性格もわからない。

土壌・大溝出土遺物 (第149図)

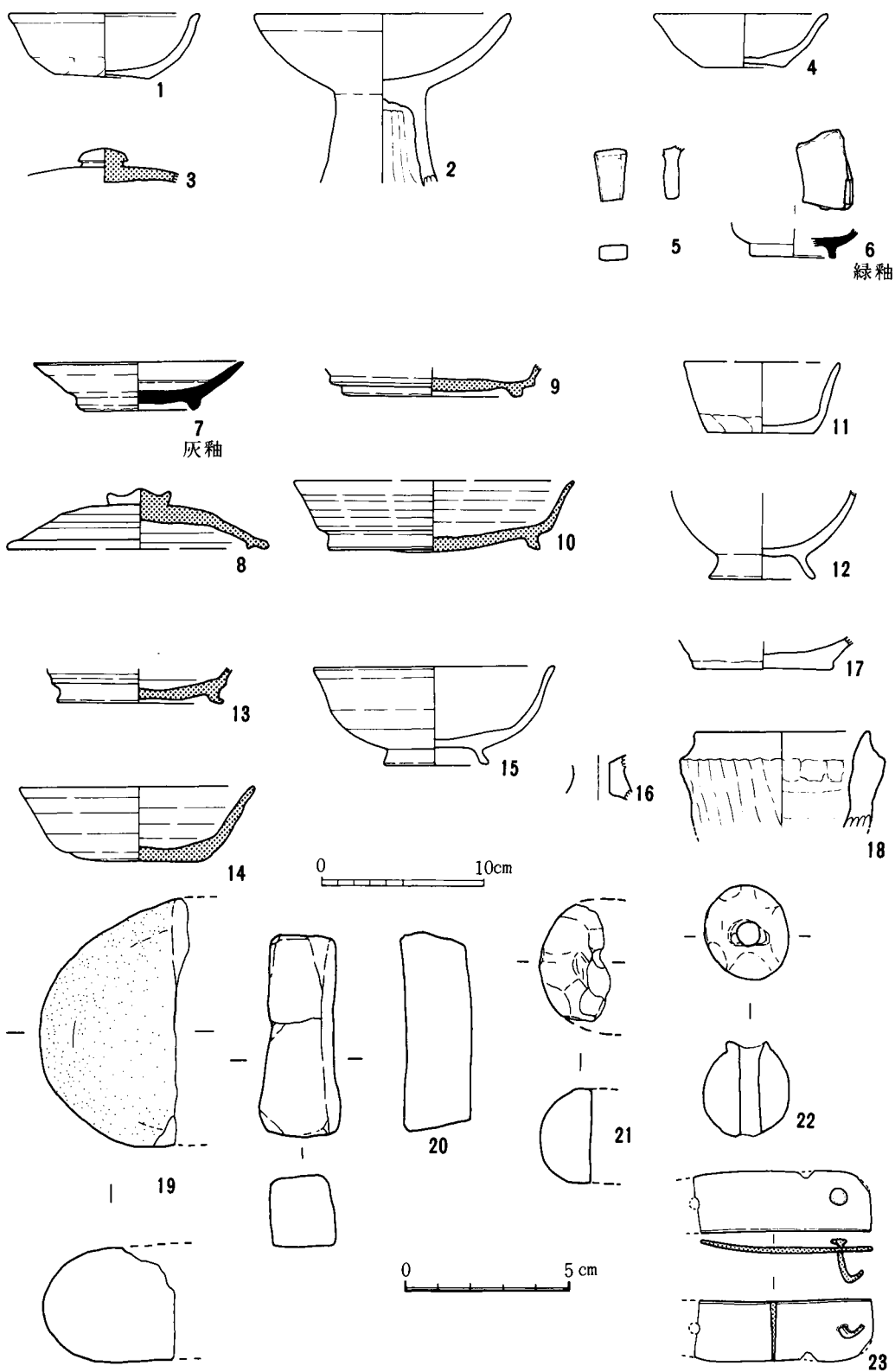
1は1号土壌から検出された土師器坏である。外面体部下半から底部にかけて手持ちヘラ削りが施されている。2は12号土壌から検出された土師器高坏である。脚端部を欠失している。外面は全て縦方向のヘラ削り、内面は脚部が横方向のヘラ削り、坏部はヘラミガキが施されている。3は大溝出土の須恵器蓋である。口縁端部を欠失しており、かえりの有無はわからない。1・2に関しては、夫々の遺構に伴うものである可能性もあるが、3に関しては、周辺の遺構との切り合い関係から見て、瞭らかに流れ込みの遺物である。19・20も大溝から検出された。19は磨石状の石器の破片、20は砥石である。(萩原)

第5節 遺構外出土遺物 (149図～150図)

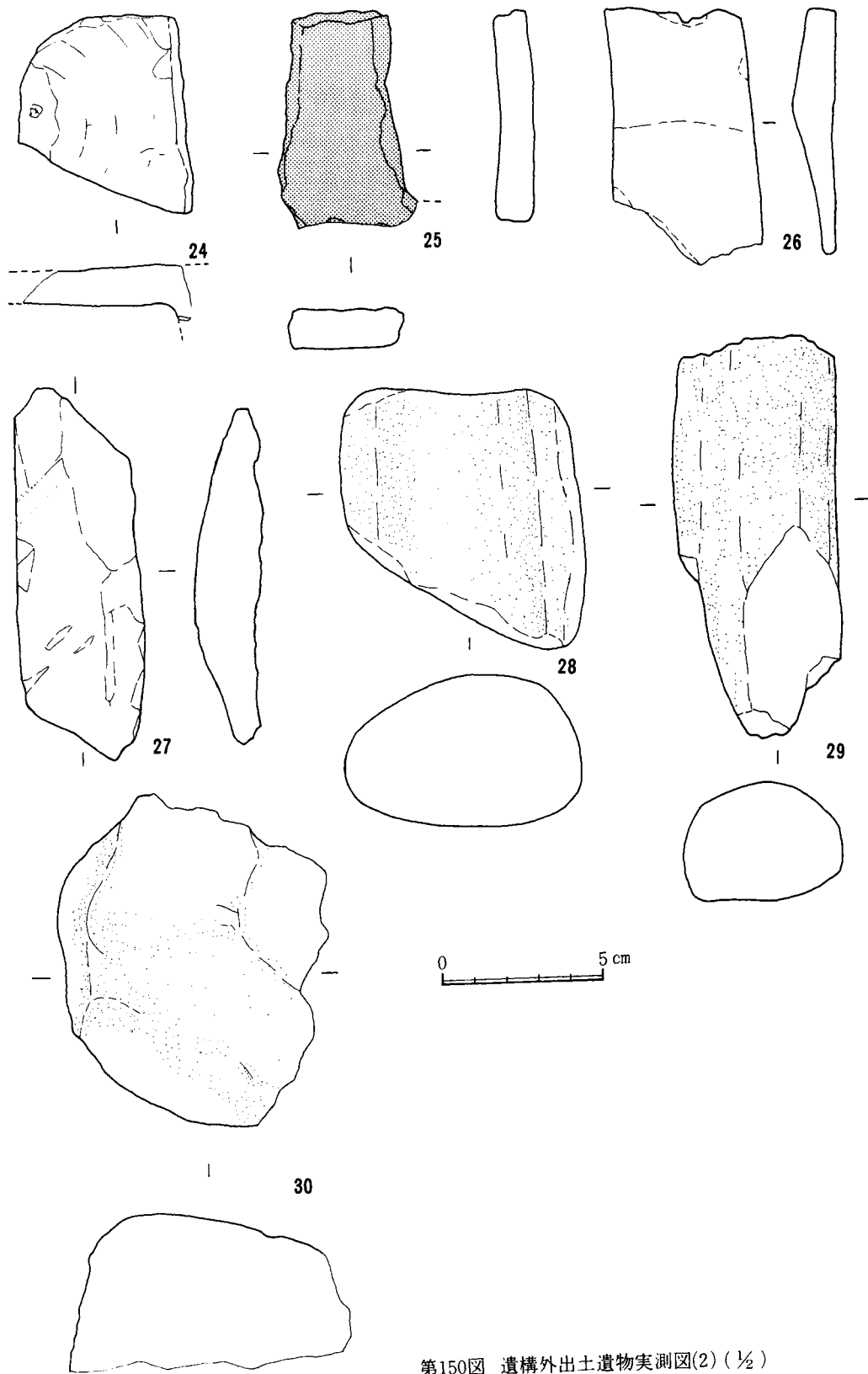
4～6, 22, 27, 28, 30は遺跡内表採遺物である。4はロクロ使用の土師器坏である。5は陶硯の一部である。脚部の透しに挟まれた部分であろう。027号住居跡出土例とは別個体で、透しの数の多いものであろう。6は緑釉の高台付耳皿である。素地は暗灰色で、かなり堅くしまっている。釉はやや濃い目の緑色を発しており、高台接地面を除き、器表全面にかかっている。22は土玉である。27は砥石である。28・30は性格不明の石製品破片である。

上記以外の遺物は遺跡内のグリッド一括遺物としてとり上げられたものである。挿図の順番に従って説明して行く。7～10はC 2グリッド一括遺物である。7は灰釉陶器の段皿である。ややぼてつとした三ヶ月高台を持ち、高台尻には、重ね焼による釉着物が見られる。皿内面にはかるい段を持つ。素地は灰白色で、石粒の混入量は少ない。釉は透明感のある淡緑色である。8～10は須恵器である。8は蓋で、やや退化しているが、口縁内面にかえりを持っている。9・10は高台付坏で、特に10は、坏底部外面が、高台から下に突き出しており、すわりが悪い。11はD 2グリッド検出のロクロ使用の土師器坏である。体部下端から底部にかけて外面に手持ちヘラ削りが施されている。12はD 3グリッド検出の土師器高台付碗である。高台は細くやや高目で、体部はややつよい丸まりを見せる。13・14はF 2グリッド検出の須恵器坏で、13は高台付である。14は胎土中に石英・雲母を多く含み、胎土そのものも粗いものである。15はF 3グリッド出土のロクロ使用土師器高台付碗である。外面下半三分の一は回転ヘラ削り、内面はヘラミガキが施されている。16～18はJ 2グリッド出土である。16は弥生土器の器台部破片で、外面はヘラミガキが施されている。17は土師器甕の底部で、底部外面には木葉痕が見られる。18は手捏ね土器であり、内面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に見える。21はK 2グリッド出土の土玉である。23はC 2グリッド出土の鉄製手鎌である。銅製の目釘が一本、完全に遺存している。24はJ 1グリッド出土である。須恵質のもので、形状から見て、陶硯の破片の可能性があるが、あまりにも部分的な破片であるために、正確にはわからない。25はD 2グリッドの出土で、須恵器片の転用品である。スクリーン・トーンの部分は赤くなっており、砥石として転用されていた可能性が強い。26はG 2グリッド出土の砥石である。29はJ 2グリッド出土の石製品であるが、用途はわからない。

(萩原)



第149図・大溝・土壇及び遺構外出土遺物実測図(1) (1~18・ $\frac{1}{4}$, 19~23・ $\frac{1}{2}$)



第150図 遺構外出土遺物実測図(2) (1/2)

第2章 結 語

29棟の掘立柱建物と、37軒の竪穴住居とを中心とする大北遺跡は、遺物・遺構の双方の面で、いくつかの卓抜した特徴を見出すことができる。遺物の面では、調査区内の広い範囲から検出された大量の畿内産土師器。遺構の面では、幅30m前後、延長距離220m弱のそれほど広いとは言えない調査区の中で、更に集約的に検出された29棟の主軸を揃えた掘立柱建物群。この2点を考えただけでも、東国における、単純な一般集落とは明らかに異なる遺跡であることが、容易に想像される。一般集落とは異なる遺跡——とは、どのような性格を有する遺跡なのか。これを問題の中心に据えて、遺物・遺構の順に、簡単ではあるが、個別に考えてみたい。

尚、土器の分類・編年作業に関しては、本遺跡においても、独自に組み立てることが好ましいとは思われるが、今回は主に史館同人作製資料(石田1983同書所収)に頼った。

第1節 出土遺物について

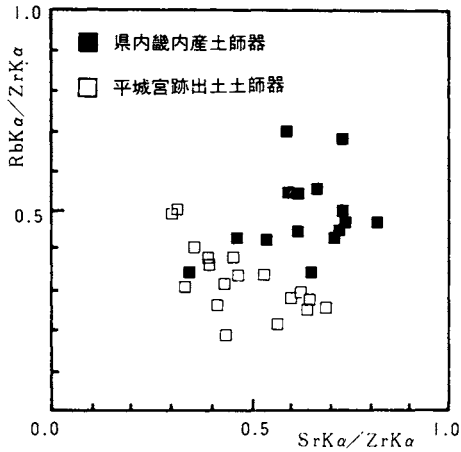
1 畿内産土師器及び関連する須恵器

(1) 畿内産土師器としての同定(第152・153図)

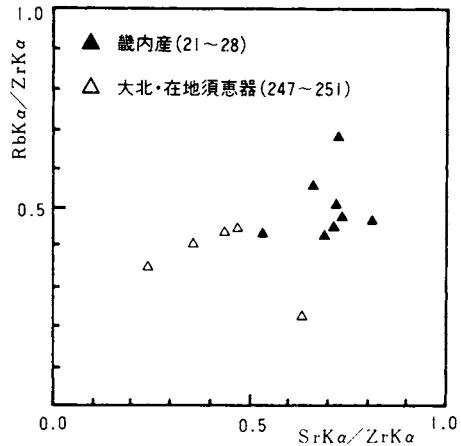
大北遺跡からは、実に多量の畿内産土師器が検出されている。表面採集、グリッド一括によって若干、そして33遺構から大多数が検出された。これらは、器形・調整技法・色調のどれを見ても、明らかに在地の土器とは異なるものである。最近これらを、畿内産・畿内系に弁別して分析・観察する傾向が見られるが(石戸1484, 西山1984), これについて、千葉県文化財センターでは、研究紀要8作製に伴う研究活動の作業の一環として、大北遺跡出土の畿内産土師器を、奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏に依頼し、蛍光X線を用いた胎土分析を行った(第153図A参照)。この分析数値、並びに沢田氏より付されたコメントによって、平城宮内出土の土師器との分析値の違いが指摘されている。更には、周辺各県、及び県内の在産土師器の分析値とも異なったものが導き出された(千葉県文化財センター『研究紀要』8)。器形・法量・技法・色調を観察した限りでは、畿内産として、ほとんど間違いないように思えるのだが、畿内産・畿内系の弁別を始められた石戸・西山の両氏がどのような観点から両者に分類し、かつ、分析を進めようとしているのか、現状ではその視点は明瞭なものとはされておらず、又筆者も多くの資料を実見していないことから、当遺跡出土のこれらの土器は、かなり混沌とした視点からしか把握できず、ましてや、弁別するなど不可能な状態である。従って、ここでは、在産ではないことだけは確定していることから、「畿内産土師器」として、その用語を便宜的に用い、用語の混乱は避けたいと思う。又、完全なる産地の同定は、今後新たに機会を得て行ないたい。

(2) 畿内産土師器の観察

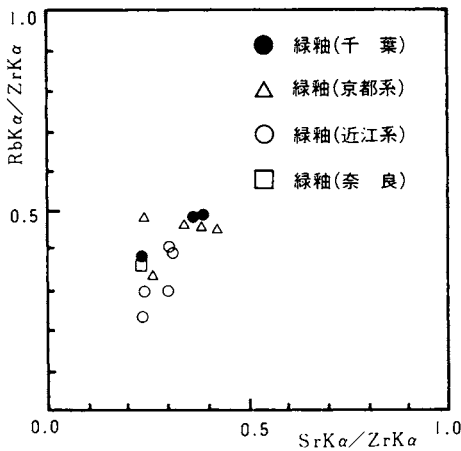
大北遺跡から検出された畿内産土師器は、第152・153図と第2表とに図示、及び解説した以外に、図化に堪えない資料も数多くあり、その総数は第3表の集計表にあらわしたとおりである。本来は図化に堪えない多くの破片についても、ここにその様相を示す可きであると思うが、その作業をするだけの時間的余裕を持たないため、ここでは図化資料に対して、観察表を附すのみに留める。



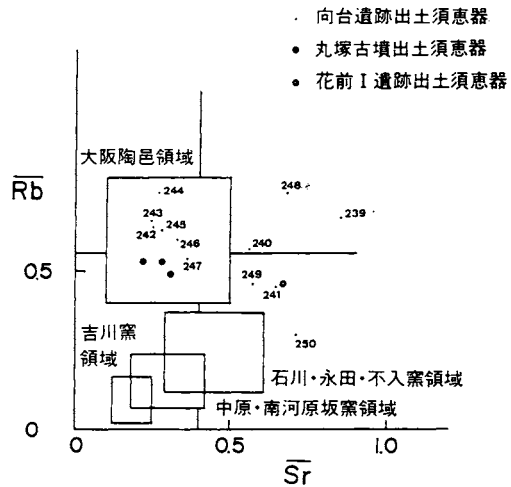
A 県内出土の畿内産と平城宮跡出土の土師器



B 大北遺跡出土の畿内産土師器と在地須恵器

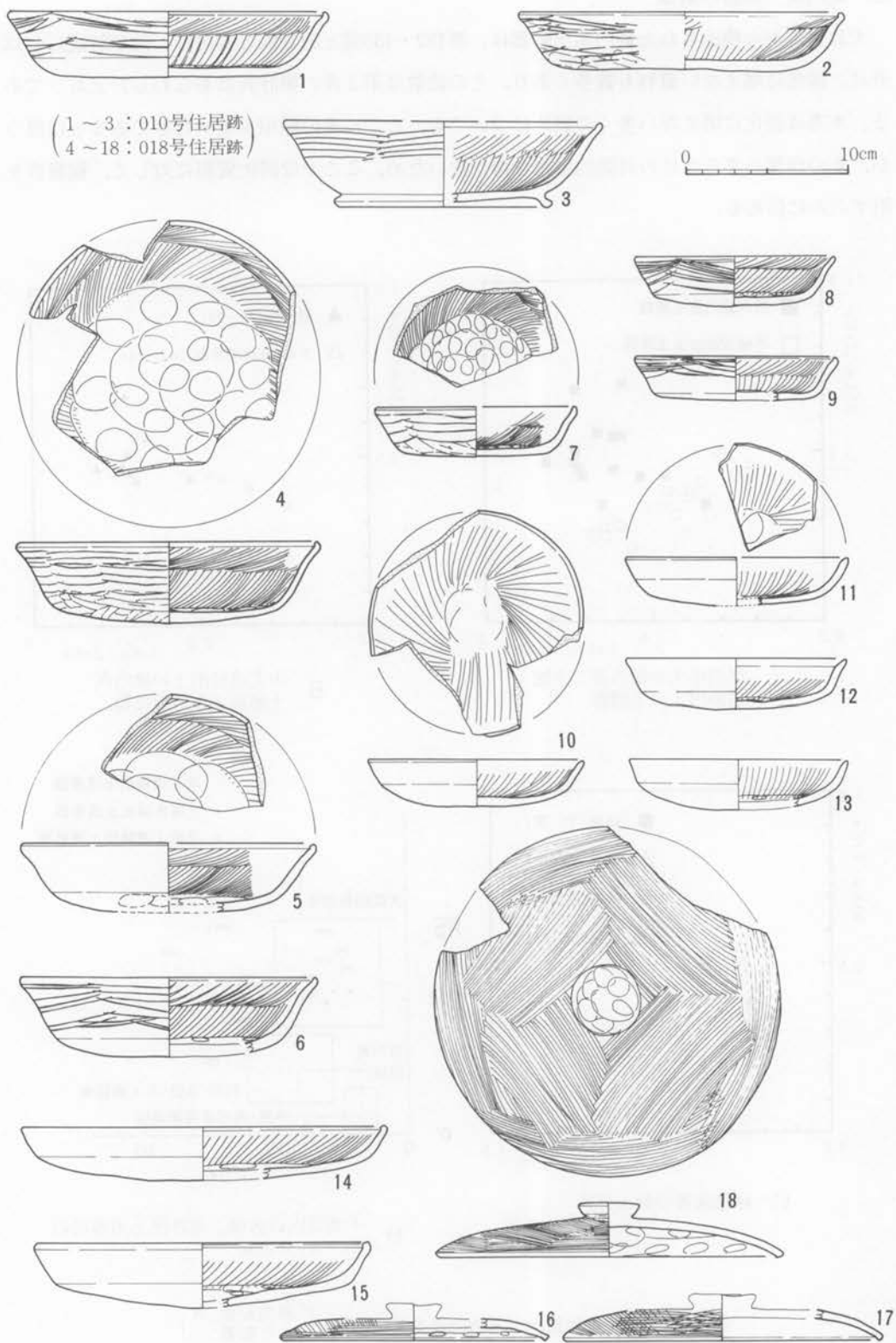


C 緑釉陶器の胎土分析

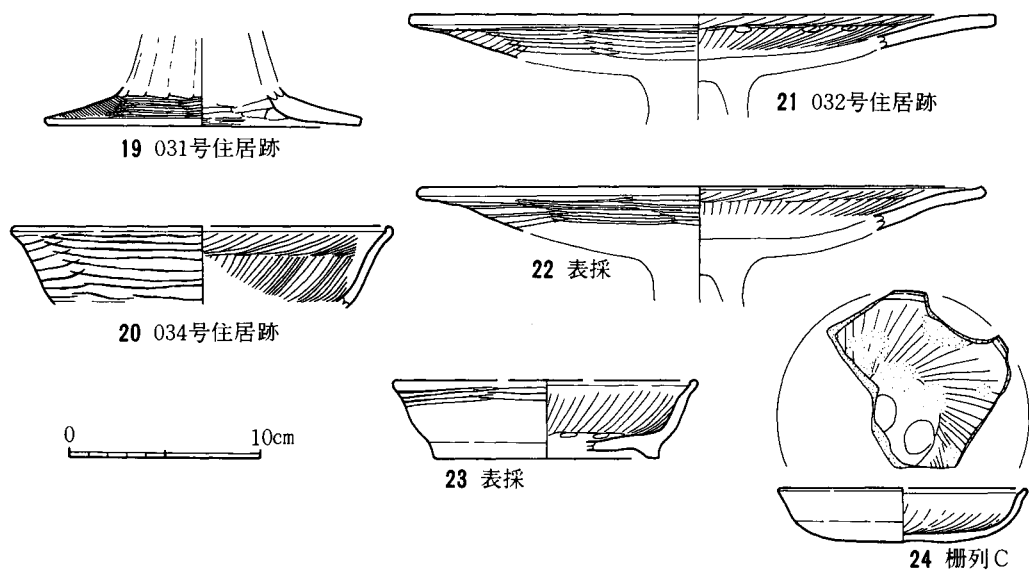


D 千葉県内の古墳、遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

第151図 大北遺跡他出土遺物の蛍光X線分析 (「研究紀要」8より転載)



第152図 大北遺跡出土織内産土師器実測図(1) (1/4)



第153図 大北遺跡出土畿内産土師器実測図(2) (1/4)

(3)器種構成の復元

畿内産土師器は、010, 018, 022, 034の各住居跡から集中的に検出され、とりわけ018号住居跡からは実測可能個体の半数以上が掘り出されている。その出土状況を見ると、床面直上ではなく、いわゆる「吹上パターン」で廃棄されていたものであることが、よくわかる。同住居跡では他に多くの須恵器も伴出しており、やはり同様の状況で検出されている。このような出土状況は本遺跡の畿内産土師器の出土状況の典型であり、それが調査区内の全面で検出されている理由であろう。

調査区域内で検出された畿内産土師器の量は、第3表に示した集計のとおりである。これは全破片を網羅したものであり、その中から、各遺構毎に接合個体、破片でも同一個体と認定されるものは一点として集計したものである。かなり実態に近い数値と考えられるが、複数遺構に同一個体片の分散する場合は認定不可能であり、数字は重複する。従って総体的に見た場合には個体数の減ることはあっても、増えることはあり得ない。又、表中()*で表わしたのは、器種を断定しかねるもの、及び、器種不明の欄の()は、個体数の減る可能性のある数値として示しており、使い分けている。

以上のような条件の下に集計した結果を見ると、つぎの2点の特徴を引き出すことができる。

①：検出されたのはすべて供膳用の土器であり、調理・貯蔵用の畿内産土師器は一切検出されていない。

②：供膳用の土器の中でも、幾つかの器種に量的集中が見られる。

ここで、その出土状況及び量的膨大さから見て、同時一括廃棄として考えられる018号住居跡出土資料を検討対象としてとり上げて考えてみたい。

第2表 大北遺跡出土畿内産土師器一覧表

遺物番号	器種	法量(cm) 口径×器高	調整・特徴	備考
1 (010住)	杯A I	19.2×4.0	内面は2段の斜放射状暗文、底部は螺旋暗文。 外面は底部にもわずかに磨きのあるb3手法。	内面上段折返暗文。
2 (010住)	杯A I	20.0×3.5	内面は2段の斜放射状暗文のみ。 外面はb1手法による調整。	残40%
3 (010住)	杯B II	19.3×5.2 (底径12.4cm)	内面は2段の斜放射状暗文のみ。 外面はa1手法による調整。	
4 (018住)	杯A I	18.4×4.85	内面は2段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面はb1手法による調整。	残50% 破片により二次被熱。
5 (018住)	杯A I	17.9×4.1	内面は2段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は口縁にわずかに磨きのあるa1手法。	残15%
6 (018住)	杯A I	18.0×4.7	内面は2段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面はa1手法による調整。	内面上段折返暗文。
7 (018住)	杯A III	12.4×2.4	内面は2段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面はb1手法による調整。	残40% 内面の暗文太目。
8 (018住)	杯A III	12.3×3.0	内面は2段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面はa1手法による調整。	外面底部Xの線刻。
9 (018住)	杯A III	12.2×2.6	内面は2段の斜放射状暗文、底部暗文か？ 外面はa1手法による調整。	
10 (018住)	杯C II	13.4×2.8	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面ナデ調整。a手法。	残70%
11 (018住)	杯C II	13.7×2.9	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面ナデ調整。a手法。	残15%
12 (018住)	杯C II	13.3×3.1	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面全面ナデ調整。a手法。	外面底部Xの線刻。
13 (018住)	杯C II	13.4×3.0	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面ナデ調整。a手法。	
14 (018住)	皿A I	22.0×3.2	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面ナデ調整。a手法。	
15 (018住)	皿A I	20.5×3.9	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面ナデ調整。a手法。	
16 (018住)	蓋	16.0×—	外面ナデのちへら磨き。左回り4回。 内面螺旋暗文。	つまみ欠如。
17 (018住)	蓋	19.0×—	外面へラズリのちへら磨き。右回り。 内面螺旋暗文なし。ナデのみ。	つまみ欠如。
18 (018住)	蓋	21.3×3.25	内外面全て指ナデの後に内面は螺旋暗文、 外面はへら磨き。	残80%
19 (031住)	高杯	(底径16.2)	開脚部外面へら磨き。脚部へラケズリ。 開脚部内面へラケズリ後一部へら磨き。	残15%
20 (034住)	杯A I	19.8×—	内面は2段斜放射状暗文。 外面はb1手法による調整。	残15%
21 (032住)	高杯	30.4×—	内面は2段の斜放射状暗文、中間に螺旋暗文。 外面はへラケズリ後、粗いへら磨き。	残10%
22 ()	高杯	29.5×—	内面は2段の斜放射状暗文。 外面は上部ナデ、下部へラケズリ後、共にへら磨き。	残10%
23 (表採)	杯B III	15.7×4.0	内面は1段の斜放射状暗文。 外面はb1手法による調整。	
24 (柵列C)	杯C II	13.0×2.8	内面は1段の斜放射状暗文、底部螺旋暗文。 外面は全面にナデ調整。a手法。	残40%

018号住居跡出土の畿内産土師器は、法量・技法から見て全て平城宮Ⅰの段階に属するものとして捉えてさしつかえないと考えられる。集計表を見ると、坏AⅠ：15点、坏AⅢ：13点、坏CⅡ：6(+10)点、皿AⅠ：8(+6)点、蓋：7点、高坏：3点という数字が出ている。そして、これに伴出する須恵器は蓋10点、坏BⅢ：9点である。ここで、土師器・須恵器の蓋は夫々坏Bに伴うものであり、かつ、土師器・須恵器の同一器種は同一機能を与えられていたものと考え坏Bに換えて数値化すると、坏AⅠ：15点、坏AⅢ：13点、坏BⅢ：17点、坏CⅡ：6(+10)点、皿AⅠ：8(+6)点、高坏：3点となり、全部で合計62(+16)点となり()内の数値も信頼し得る数値として計算に加えれば、総計78点となる。その中で各器種の占める割合は坏AⅠ：19%、坏AⅢ：17%、坏BⅢ：21%、坏CⅡ：20%、皿AⅠ：18%、高坏：5%と

第3表 大北遺跡出土畿内産土師器集計表

遺構	杯AⅠ	杯AⅢ	杯B	杯CⅡ	皿AⅠ	皿AⅡ	蓋	高坏	器種不明	遺構	杯AⅠ	杯AⅢ	杯B	杯CⅡ	皿AⅠ	皿AⅡ	蓋	高坏	器種不明
竪穴住居 001									(1)	竪穴住居 031									1
010	6		1(Ⅱ)	* (1)	* (1)		1		(2)	032				* (1)			1	1	
011	1			* (1)				2	(4)	033								1	(4)
014									(3)	034				1	* 1(+2)		1	2	(1)
015	1	1			* (2)	* 6(+2)		2		037									(2)
016					1					掘立柱建物 001									(3)
017									(4)	002	1								(1)
018	15	13		* 6(+10)	* 8(+6)		7	3	(46)	003	1								(2)
020								1		007	1			1					(1)
021					1		1	1		010									(3)
022	2						2		(6)	011									(1)
023									(1)	019		1		* (1)					
024	1							1		022									(2)
025	1									027								1	
026	1	1			1			1	(2)	柵列C				1					
027									(1)	遺構外			1(Ⅲ)						(71)
030	1									合計	34	16	2	* 8(+13)	* 13(+12)	* 6(+2)	13	17	

(林部・田井作製)

なる。これらが、何人分かの供膳用土器として使われていた一つの構成単位であったとするならば、一器種一機能として全部で6器種が考えられる。このうち高坏は4～5人の共用器であろうと考えられるから、銘々器5器種・共用器1器種となる。さて、高坏を4～5人の共用器として使っていたとすると、高坏：3個×4(～5)人=12(～15人)となり、他の器種の13～17個体という数値に近いものとなる。つまり、銘々器5器種、共用器1器種で12～17人程度の人間が使用した一つの構成単位を示す食器群であったらうと、復元されるのである。このことは、各器種の占有率が、高坏5%で他の器種が19%前後という、きわめて整然とした割合を占めていることから裏付けられると考えている。

12～17人という人数の復元については、問題も残ると思うが、器種数については、恐らくほぼ実態を示す妥当な数字であろうと考えている。これは、西弘海氏の復元による天平宝字年間の資料としての、「片碗」「片坏」「塩坏」「片盤」の基本4器種に、「筥」「水碗」「碗形土器」を加える、といった構成と、そう大きな隔りを見せるものではない(西1979)。つまり、大北遺跡——特に018号住居跡出土の畿内産土師器を使用して食事をした人々は、都での供膳形態をそのまま持ち込んでいたことになる。では、それを用いた人達は、どのような人達であったか——ということが次の問題として浮び上がって来る。これについては、関根真隆氏の復元によれば、やはり先の復元と同様天平宝字年間の資料に依るが、上級官人のものとは比ぶ可くもないとして、下級官人(写経所経師以下雑使以上)については、各人に大筥1合、碗1口、坏1口、佐良1口、塩坏1口という組み合わせで、食膳具が支給されたようである。この場合大筥は木製品であるから、ここで比較の対象とし得るのは「碗」「坏」「佐良」「塩坏」の銘々器4器種ということになる。本遺跡の場合は銘々器5器種・共用器1器種であるから、(全て支給品であるという前提に立てば)、経師などよりはかなり上級の官人に支給されたもの、ということになるが、では、一体どの程度の官位の人間か、ということまでは、復元できないようである。又、復元できても、宮内ではなく、遙か僻遠の地において検出されたものに、文献史料からの復元をどの程度正確にあてはめることができるかは、疑問とせざるを得ないであろう。

(4) 東国における畿内産土師器の分布

東国における畿内産土師器の分布は、石田広美(石田1983)、石戸啓夫(石戸1984)、西山克己(西山1984)の三氏によって、既にその概要が述べられている。本稿では、その後新たに検出された例を補遺し、その分布を第4表として示した。11～13は整理中であるため、器種の記載に留めた。尚、先述のように、畿内産・系の弁別の問題があるが、ここでは、明らかな在地産以外は全て畿内産として統一して記載した。畿内系の存在は充分考慮すべきではあるが、それは今後胎土分析のデータをとり揃えた上で云々されるべき性質の問題であると考えられる。集計の結果、南関東——特に千葉県内に多くが集中することがわかったが、これは古代の実態を示す数

第4表 東国における畿内産土師器出土遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	飛鳥 I	II	III	IV	飛鳥V 平城I	II	III	IV~	杯			皿			高杯	文獻、他
										A	B	C	A	B	C		
1 我孫子市	日秀西			○							○					千葉県文化財センター『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』1980	
2 安房郡千倉町	薬師前					○—?					○					『健田遺跡発掘調査概報—第4次調査』1980	
3 千葉市	矢作貝塚				△						○					千葉県文化財センター『矢作貝塚』1981	
4 成田市	Loc.14(中台)					○					○					千葉県文化財センター『公津原II』1981	
5 印旛郡栄町	大畑 I					○					○					千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線(住宅宅地)』1985	
6 千葉市	No.5(大北)					○					○					本書	
7 千葉市	西屋敷					○					○					千葉県文化財センター『千葉市西屋敷遺跡』1979	
8 印旛郡栄町	向台						○				○					5に同じ	
9 市川市	市宮総合運動場内						○				○					市川市教育委員会『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』1981	
10 印旛郡印西町	木下別所庵寺										○					千葉県教育委員会『木下別所庵寺跡第二次発掘調査概要』1979	
11 成田市	囲護台No.7、8、9										○					成田市教委にて実見	
12 成田市	大袋山王第2B地区										○					印旛郡文化財センターにて実見	
13 東金市	久我台										○					千葉県文化財センター整理中	

市町村名	遺跡名	飛鳥 I	II	III	IV	飛鳥V 平城I	II	III	IV~	杯			皿			高杯	文獻	他
										A	B	C	A	B	C			
(東京都)																		
14	北区		○									○				西山 1984		
15	世田谷区			△							△					世田谷区『世田谷区史料第8集考古編』1975		
16	世田谷区					?					△	—?				世田谷区教育委員会『世田谷区遺跡調査報告3』1982		
(神奈川県)																		
17	横浜市緑区		○								○					大川・水野「長者原遺跡の調査」『日本歴史』406 1982		
18	藤沢市			○							○					青山学院大学『藤沢市片瀬・大源太遺跡の発掘調査』1984		
19	横須賀市				○						○					内原遺跡調査団『長井町内原遺跡』1982		
(埼玉県)																		
20	川越市					○					○	○	○			埼玉県『新編埼玉県史資料編3』1984		
(静岡県)																		
21	駿東郡小山町					○					○					小山町教育委員会『上横山遺跡発掘調査概報』1981		
(長野県)																		
22	飯田市				△	△						○				小林「桓山遺跡群発掘調査概要」『長野県考古学雑誌』44 1982		
(宮城県)																		
23	仙台市			○							○					仙台市教育委員会『宮城県仙台市郡山遺跡II』1983		

(田井作製)

値なのか否かは、今後の他県での資料追跡を行なってからでなければ、わからないであろう。

(5) 共伴する須恵器

器種構成の復元において、坏BⅢとして土師器と同列に論じた、018号住居跡出土の須恵器について考えてみる。これらは、その法量から、坏BⅢとして、平城宮跡出土の同法量のものに対応させた。確かに数値的には合致するものであるが、果たして、そのような規格要求のもとに造られたものなのであろうか。宮内で使用するものとしての規格要求に応えたものであるとするならば、この須恵器の産地がどこであるかということは、重要な問題となって来る。つまり、これらの須恵器は、畿内産土師器と同様、畿内周辺で生産されたものを一緒に搬入している場合と、在地産のものが補充された場合と、途中で補充された場合との三通りの解釈を付すことができるわけであり、もしも、在地産であった場合、東国の地での須恵器生産の細部にまでも、中央政権による強力で画一的な統制が加わっていたことになる。

大北遺跡018号住居跡出土須恵器については、先の畿内産土師器同様、沢田氏に蛍光X線分析を依頼しており、その結果は第150図に示したとおりである(同図Dは奈良教育大学教授三辻利一氏の分析による)。はじめ、これらの須恵器は在地産であろうという認識のもとに分析を依頼したのだが、その分析結果を見ると、同図のBとDを比較すればわかるとおり、県内諸窯跡出土資料の分析値とは一致せず、逆にCに見られる畿内産の緑釉陶器のそれに近い数値を示してしまったのである。以上のことから、伴出須恵器は、明らかに在地産ではなく、搬入されたものであることが実証された。しかしその産地は、未だ確実なものとはし得ずにいる。

ここで、西氏によって宮内出土の須恵器に対しては、土師器同様に径高指数に沿った法量規制があった、とされていることについてであるが、この問題は、金子真人、城ヶ谷和広の両氏によって、再検討がなされている(金子1982、城ヶ谷1984)。金子氏は西氏による分析を土台にして、陶邑、老洞、北武蔵を中心とした東国諸窯の製品にまでこの論を敷衍して分析を展開しておられる。一方城ヶ谷氏は平城宮、猿投、老洞の製品を洗い直して、それらに共通する基本的現象として、

- ①：無台坏身は基本的に径高指数に沿って器種分化する。
- ②：有台坏身は基本的に器高に沿って器種分化する。
- ③：無台坏身の生産の中心は径約12cmである。
- ④：有台坏身の生産の中心は径約15cmである。
- ⑤各時期において、法量が大きく変更されることはない。

といった、注目すべき分析結果を提示しておられる。上記の④は、まさに本稿が問題としている須恵器坏BⅢにあてはまるものである。更には、城ヶ谷氏によれば、この法量15cmというのは、同一法量の製品しか見出せない地方窯においても、広く見られることである、とされてい

る。このことから、本遺跡018号住居跡出土須恵器の産地は胎土分析によって、明らかにする必要性のあることが確認された。

2 特殊な金属器

(1) 毛彫り馬具

025号住居跡出土の金銅製帯先金具、026号住居跡出土の青銅製方形飾金具は、一見、奈良朝の衣服令に見られる腰帯に伴う鉈尾・巡方のように見えるが、これらは田中新史氏によって様相が明らかにされたとおり、馬具である(田中1980)。

まず帯先金具について再述すると、地金は青銅で、外面の側・表面に鍍金が施されている。釘穴が三孔穿たれており、表面には、孤・直線を組み合わせた毛彫り模様が配され、更にその外側も、「コ」の字形に区画するように彫られている。これは田中新史氏の論をかりれば、群馬県道上古墳出土鏡板例を典型とする「道上型毛彫り」の系譜を引くものである。類例も幾つか見られ、千葉県内では、柏市中馬場遺跡41号住居跡出土例が、同様の形態・文様を見せる(が、鍍金はない)。

026号住居跡出土の青銅製方形飾金具は、有窓長方形飾金具として分類される馬具の一種である。(毛彫り)有文・無文が時期差を示す手掛かりとなるようであるが、本例は、その形態から見て裏座であろうと考えられる。このため、有文・無文の別はわからない。やはり幾つかの類例が見られ、県内では、船橋市印内台遺跡9号・80号住居跡出土例が見られる。この二例は共に金銅製で、毛彫りが施されている。

025号・026号住居跡出土の帯先金具と方形飾金具は、その規格から見て、帯幅24mm程度の、同一馬具にとりつけられていたものであろうことが考えられる。金銅か否かの違いは、方形飾金具が裏座であろうことを考えれば、解消されよう。従って出土状況が問題になるが、共に発掘調査段階では特に気に留められていなかったらしく、図面等からの復元は不可能であった。双方、又は何れかは投げ込みということになろうか。

その時期については、田中新史氏の分類によれば、氏のⅡ類：7世紀中葉に比定されるようであるが、7世紀中葉の大北遺跡は、後述するように、調査区内には目立った遺構もなく、ごくあたりまえの集落であったろうことが考えられるから、同時代的廃棄と考える場合は、遺物・遺構の間に隔差を感じざるを得ない。

3 墨書・朱書・刻書土器(第154図)

多量の掘立柱建物跡、畿内産土師器、そして陶硯——これらの大北遺跡の特殊性を顧みした場合、文字を有する土器の量は、決して多いとは言えない。恐らく、一般集落と比較しても、多い部類には入らないであろう。文字、又は文字に準ずるものの書かれた土器は、全部で16点で、

10点が墨書、2点が朱書、3点が刻書、1点が多量の墨痕のみ、という内訳である。

1は010号住居跡検出の畿内産土師器の底部片である。外面に「×」字のへらによる刻書と、「大」字の墨書を持つ。他に、「大」の周辺にも、三ヶ所ほどの薄い墨痕が見える。2は018号住居跡より検出された土師器片に書かれたものである。何という字の部分になるのかはわからない。3～5は020号住居跡から検出された。全て土師器片に書かれている。3は内・外面双方に文字が書かれている。内面のもはわからないが、外面のものは、「山」かと思われる。4は、文字というよりも、絵の一部分である可能性の方が強いが、周辺につづく破片が見つからないため、確実なことはわからない。5は土師器片で、体部外面に墨痕が見られるが、判読できない。6は027号住居跡検出の土師器小型甕の底部付近の破片である。底部外面に「大」と思われる文字が書かれている。7は030号住居跡検出のロクロ土師器高台付皿であり、底部外面に、「上」を左右逆にしたような文字が記されている。8は033号住居跡出土の土師器片である。判読不能



第154図 大北遺跡出土墨書・朱書・刻書土器実測図(1/4)

で、状況から見て4と同様絵が描かれている可能性もある。9は001号掘立柱建物跡出土のロクロ土師器片である。外面口縁付近に「□エ」と見える。10はG2グリッド一括の土師器(皿か?)の底部片で、外面に「幸」と、細く書かれている。11はやはりG2グリッド出土の、須恵器坏である。内面の広い部分に、濃淡の差のある二種の墨痕が見える。文字らしいものは見あたらず、筆の穂先を整えるために使用されたものと考えられる。12は032号住居跡出土の須恵器高台付坏で、底部外面に朱書されている。細片のために、記号様のものなのか、文字の一部なのかは断定できない。13は010号掘立柱建物跡出土のくすべ焼成坏で、底部外面に、「L」字状の記号かと思われるものが、相対して二つ朱書されている。14は027号住居跡出土の土師器片で、底部外面に、ヘラ書きが施されている。細片のため、判読は不能である。15は037号住居跡出土の土師器片で、底部外面に「見」という字が細く刻まれている。16はK2グリッド一括の土師器片で、やはり細い線でヘラ書きが施されている。細片のため断定はできないが、14と同じ文字が記されているのではないかと思われる。尚、文字判読のあたっては、国立歴史民族博物館平川南助教授の御協力を得た。

第2節 遺構について——その展開

大北遺跡は長期に亘る複合遺跡である。その中でも中心となるのは、古墳時代後期から平安時代初頭の時期である。掘立柱建物と、竪穴住居が併存しており、ここでは、それらの遺構の、大まかな流れを復元してみたい。一般的に、掘立柱建物の時期を判断するのは、むずかしい作業であるのだが、本遺跡の場合は特に、発掘調査時において、重複する掘立柱建物の前後関係をほとんど見逃していることから、この作業は、一段とむずかしいものになってしまった。調査範囲が帯状であるために、その全容が掴めず、更にこのようなことが重なってしまったため、掘立柱建物は、ほとんどその配列の状況から、時期と共存関係を復元したものになってしまい、相当の誤りも犯してしまっているかも知れない。

尚、遺構の展開については、掘立柱建物出現以前を一まとめ、掘立柱建物群の時期を5期、そして掘立柱建物消滅以後を一まとめの全7期に区分して説明する。

(1) 掘立柱建物出現以前

掘立柱建物出現以前の最も古い遺構は、005号住居である。弥生時代後期の住居で、調査区内では同期の遺構は他にはなかった。次に038号住居が6世紀中葉、003・006・016・037号住居が6世紀後葉、そして001・002・004・007・008・009号住居が7世紀前半に相当する。調査区南東端の周溝状遺構は恐らく方墳の周溝跡と考えられるが、正確な時期はわからない。このように、掘立柱建物出現以前の遺構は、主として調査区南東寄りに集中し、且つ、次の段階から見られるような、主軸を真北方向に揃える、という傾向は、未だあらわれていない。

(2) 掘立柱建物Ⅰ期

掘立柱建物出現の段階である。竪穴住居は012号住居のみ。掘立柱建物は、017・018・020・021・027・028号掘立柱建物が当該期と考えられる。全体に真北を意識して主軸を揃えている。028号掘立柱建物が、唯一の総柱建物で、他は全て側柱建物である。が、028号掘立柱建物は2間×2間で、面積8.84㎡と非常に小さく、一般集落に見られる倉と大差ない。他は2×2、2×3、3×4間で、面積は15.84～36.72㎡までである。全体に狭い範囲にこぢんまりとまとまっているのが、この段階の特徴である。

(3) 掘立柱建物Ⅱ期

全体を通して、最も遺構数の多い段階である。7軒の竪穴住居と、7棟の掘立柱建物とを有する。このうち026・027号住居は、あまりにも近接していることから、当該期における建て替えが考えられる。034号住居の張出し部分についても、同様に増設されたものであろう。掘立柱建物は前段階に比べて、全体にかなり北へ移動し、003・005・025の3棟は棟筋を直線上に揃えて並んでおり、又、007・011・014・026の4棟も、規模は異なるが、ほぼ横一線に並んでいる。このうち007号掘立柱建物は確認されている部分だけでも、床面積81㎡以上、規模2間×5間(以上?)の大型建物である。同様に、竪穴住居も一辺7mを超えるものが4棟あり、この時期、大型建物が目立つようになる。つまり、この段階において、大北遺跡は、遺物・遺構の両面において明らかに最盛期を迎える、と見ることができよう。

(4) 掘立柱建物Ⅲ期

前段階において量的に増大した掘立柱建物が、柵列によって区画され、整備される段階と考えられる。柵列A・B・Cによって区画された中に、004・012・013・023・029・030の6棟の掘立柱建物、その外側に002・016の総柱建物、そして、032・033・036号住居が当該期の建物として考えられる。柵列は南辺・西辺のみの検出で、しかも、区画施設として完全に囲繞する形で設けられているものではないから、東辺・北辺がどうなっていたのかは、わからない。又、掘り方もそれほどしっかりしたものではないから、柵列と言っても、堅牢なものを想定するのは無理だろう。

032号住居跡は、確認された状況から判断すると、床面積90㎡を超えるもので、当遺跡中最大規模の竪穴住居であると考えられる。

(5) 掘立柱建物Ⅳ期

前段階において整備された掘立柱建物群が、再び区画施設をとり外して、広がる段階である。008・015・019・022・024号掘立柱建物、013号住居が当該期の建物と考えられる。掘立柱建物

は全体に平面積の広いものであり、008号掘立柱建物は確認状況から見て82㎡以上の平面積で、規模は3間×5間(以上?)と、調査区内最大である。又、015号掘立柱建物も3間×5間で平面積70.2㎡と、大型のものである。019号掘立柱建物は、先述のとおり、内土間・有床建物の可能性が高い。022・024号掘立柱建物は、全容を掴むことができない。

(6) 掘立柱建物Ⅴ期

001・009・026号掘立柱建物、022・024号住居が当該期に属するものと考えられる。前段階までに比べ、遺構数は甚だしく減少し、かつ小規模化も著しい。遺跡全体がかなり寂れた感じになってしまい、恐らく、前段階までのような構造的機能は、果たせなくなっているものと考えられる。

(7) 掘立柱建物消滅以後

前段階を以って掘立柱建物は消滅し、以後は再び建物の主軸方向も乱れてしまう。020・028・030・031号住居→014号住居→029・035号住居の3期に分かれると考えられる。全体に床面積の小さな、掘り込みの浅い、貧弱な建物に移行して行くようである。尚、大溝その他の根切り状遺構及び土壌については、大半が掘立柱建物消滅以後の時期に属すると考えられるが、年代の決定は不可能である。

以上、全7期に亘って、大北遺跡の変遷を辿ってみた。その時期については、竪穴住居は伴出土器によって大略決定できたが、掘立柱建物については、遺物の検出を得ているものの、出土状況が明らかでなく、年代決定の根拠とするには躊躇せざるを得ない。切り合い順序が、007号掘立→柵列C→008号掘立、014号掘立→033号住居と、わずか2箇所において確認されているので、これを唯一の頼りとし、あとは配列状況から同時存在の建物を復元し、竪穴住居の時期区分に対応させたものである(掘立柱建物出現以前・以後は第5表を参照)。その時期を記すと下のようになる。

掘立柱建物Ⅰ期：7世紀末～8世紀初頭

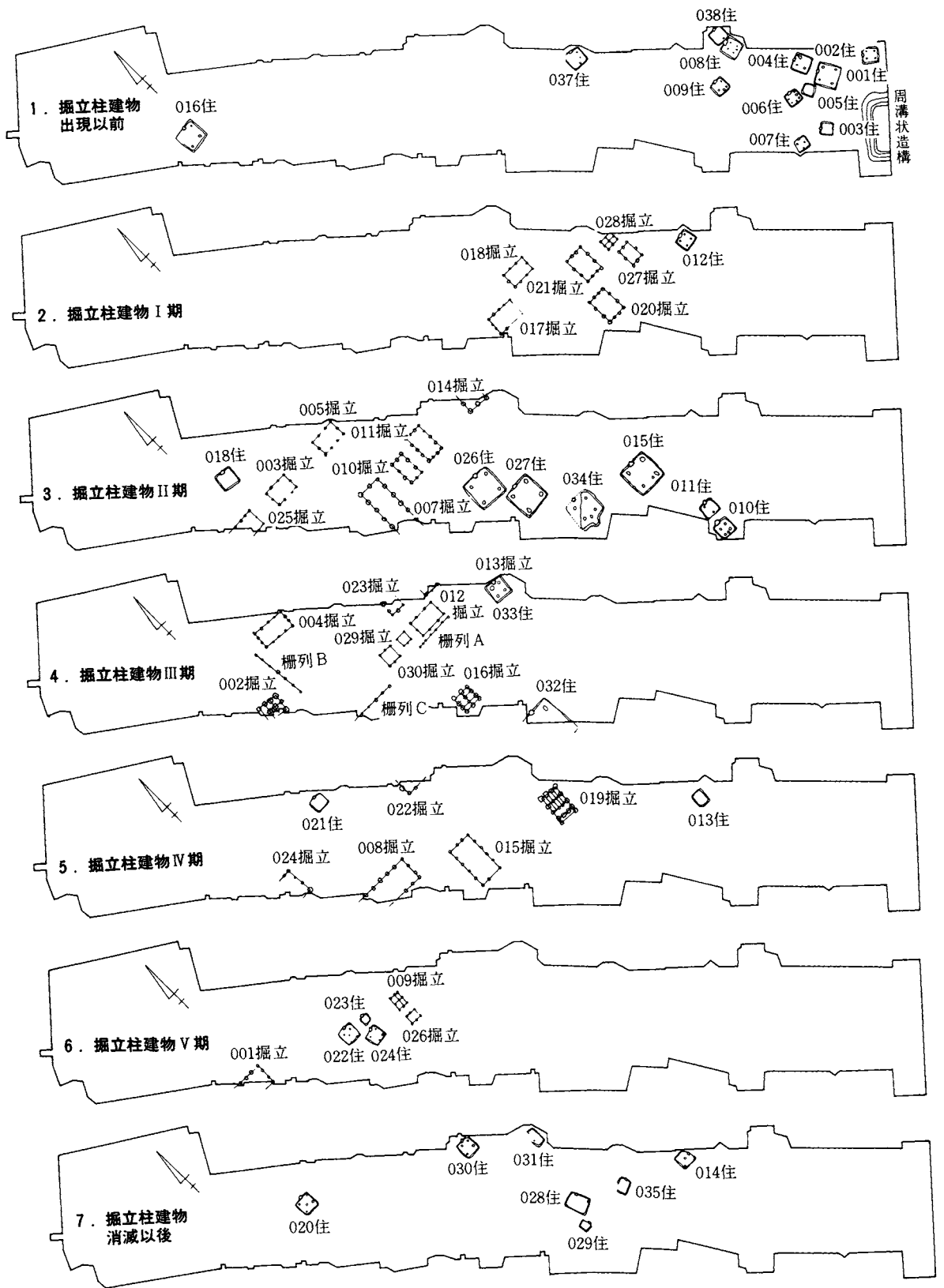
掘立柱建物Ⅱ期：8世紀前葉

掘立柱建物Ⅲ期：8世紀中葉

掘立柱建物Ⅳ期：8世紀後葉

掘立柱建物Ⅴ期：9世紀末前葉

果たして、掘立柱建物の耐用年数が30年もあるか否かは疑問として、今後検討し直す必要もあるかも知れないが、本稿では、上記を以ってその年代を想定しておく。



第155圖 大北遺跡主要遺構變遷圖 (S : 1/1,200)

第5表 大北遺跡掘立柱建物一覽表

遺構	位置	規模 (棟筋)	主軸方位	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	柱掘方 径(深さ) m	面積 m ²	時期	備考
001	C-2	-×- (-)	N-6°E	——	——	0.8~1.2 (0.2~0.45)	35.51以上	9前	
002	C-2 D-2	-×- (-)	N-10°E	——	——	1.1~1.3 (0.5~0.8)	23.22以上	8中	総柱
003	C-2 D-2	3×2 (東西)	N-2°E	5.4(18)	4.2(14)	0.45~0.6 (0.5~0.8)	22.68	8前	
004	C-1・2 D-1・2	4×3 (東西)	N-10°E	8.7(29)	4.5(15)	0.5~0.7 (0.4~0.6)	39.15	8中	
005	D-1・2	3×2 (東西)	N-0°E	6.6(22)	4.5(15)	0.5~0.7 (0.6~0.8)	29.7	8前	
007	E-1・2	-×2 (南北)	N-6°E	——	6.0(20)	1.0 (0.6~0.9)	81.0以上	8前	
008	D-3 E-2・3	-×3 (東西)	N-7°E	——	6.3(21)	0.8~1.0 (0.7~1.0)	82.0以上	8後	
009	E-1・2	2×2 (南北)	N-5°E	3.5(12)	3.0(10)	0.5~0.6 (0.45~0.65)	10.5	9前	総柱
010	E-2	3×2 (南北)	N-3°E	6.6(22)	3.6(12)	0.7~1.0 (0.2~0.35)	23.76	8前	
011	E-1・2 F-1・2	4×3 (南北)	N-6°E	7.8(26)	4.5(15)	0.6~0.9 (0.4~0.55)	35.1	8前	
012	E-1・2 F-1	3×2 (東西)	N-2°E	7.5(25)	4.5(15)	0.4~0.7 (0.35~0.6)	33.75	8中	
013	E-1	-×- (-)	N-81°W	——	——	0.5~0.6 (0.5~0.6)	——	8中	
014	F-1	-×- (-)	N-14°E	——	——	1.2 (0.7)	——	8前	
015	F-2	5×3 (南北)	N-7°E	11.7(39)	6.0(20)	0.6~0.9 (0.7)	70.2	8後	
016	F-2・3	3×2 (南北)	N-8°E	4.5(15)	4.5(15)	0.9~1.2 (0.45~0.6)	20.25	8中	総柱
017	F-2 G-2	-×3 (東西)	N-8°E	——	4.5(15)	0.5~0.7 (0.4~0.6)	——	7末 8初	
018	G-2	3×2 (東西)	N-7°E	6.3(21)	4.2(14)	0.5 (0.3~0.4)	26.46	7末 8初	
019	G-1・2	3×3 (南北)	N-6°E	6.7(22)	4.8(16)	0.9~1.3 (0.6~0.8)	32.16	8後	有階 総柱
020	H-2	3×3 (南北)	N-3°E	7.2(24)	5.1(17)	0.6~0.8 (0.7~1.0)	36.72	7末 8初	
021	G-2 H-2	3×3 (南北)	N-4°E	7.2(24)	4.8(16)	0.5~0.7 (0.7~1.0)	34.56	7末 8初	
022	E-1	-×- (-)	N-3°E	——	——	0.6 (0.5~0.8)	——	8後	
023	E-1	-×- (-)	N-7°E	——	——	0.5~0.9 (0.15~0.6)	12.24以上	8中	
024	C-2 D-2	-×- (-)	N-0°E	——	——	0.5~1.3 (0.1~0.4)	——	8後	
025	C-2	-×- (-)	N-0°E	——	——	0.5~0.9 (0.3)	24.3以上	8前	
026	E-2	2×2 (東西)	N-8°E	2.7(9)	2.2(7)	0.3~0.5 (0.5)	5.94	9前	
027	H-1・2	2×2 (南北)	N-0°E	4.8(16)	3.3(11)	0.5~1.0 (0.4~0.5)	15.84	7末 8初	
028	H-1	2×2 (東西)	N-2°E	3.4(11)	2.6(9)	0.5~0.6 (0.25~0.8)	8.84	7末 8初	総柱
029	E-2	1×1 (東西)	N-7°E	2.9(10)	2.4(8)	0.3 (0.2)	6.96	8中	
030	E-2	2×1 (東西)	N-8°E	3.6(12)	3.6(12)	0.4~0.5 (0.4~0.6)	12.96	8中	

遺構	位置	規模 (棟筋)	主軸方位	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	柱掘方 径(深さ)m	面積 m ²	時期	備考
柵列 A	E-2 F-1	7本 (東西列)	N-87°W	10.4 (35)		0.4~0.6 (0.3~0.7)	——	8中	
柵列 B	C-2 D-2	7本 (南北列)	N-0°E	14.2 (47)		0.4~0.6 (0.3~0.6)	——	8中	
柵列 C	D-3 E-2	—— (東西列)	N-83°W	——		0.5~0.7 (0.3~0.5)	——	8中	

第6表 大北遺跡竪穴住居一覽表

遺構	位置	主軸方位	規模 m (面積) m ²	時期	遺構	位置	主軸方位	規模 m (面積) m ²	時期
001	K-1・2	N-40°W	4.1×4.0 (16.4)	7前	021	D-1	N-0°E	3.7×4.0 (14.8)	8後
002	K-2	N-15°W	5.7×5.8 (33.06)	7前	022	D-2	N-7°E	4.2×4.2 (17.64)	9前
003	K-2	N-36°W	3.3×3.2 (10.56)	6後	023	D-2	N-2°E	2.3×2.2 (5.06)	9前
004	J-1・2	N-14°W	4.6×4.52 (20.792)	7前	024	D-2 E-2	N-4°E	4.0×4.0 (16.0)	9前
005	J-2	N-29°W	3.1×3.25 (10.075)	3C	025	E-1・2	N-2°W	2.3×2.4 (5.52)	8後
006	J-2	N-17°E	3.4×3.7 (12.58)	6後	026	F-2	N-5°E	8.2×8.2 (67.24)	8前
007	J-2・3	N-20°E	3.15×3.55 (11.18)	7前	027	G-2	N-0°E	8.0×8.0 (64.0)	8前
008	I-1 J-1	N-8°W	4.4×4.7 (20.68)	7前	028	G-2	N-70°E	5.8×4.4 (25.52)	9後
009	I-2	N-6°E	3.75×3.8 (14.25)	7前	029	G-2	——	1.0×1.5 (1.5)	10後
010	I-3	N-2°E	4.26×4.4 (18.744)	8前	030	E-1 F-1	N-0°E	4.5×4.3 (19.35)	9後
011	I-2・3	N-7°E	4.0×4.24 (16.96)	8前	031	F-1 G-1	N-0°E	4.4×3.3 (14.52)	9後
012	I-1・2	N-5°W	4.0×4.0 (16.0)	7末 8初	032	G-3	N-0°E	9.4×9.7 (91.18)	8中
013	I-1・2	——	3.7×4.2 (15.54)	8後	033	F-1	N-12°E	5.1×5.3 (27.03)	8中
014	H-1・2	N-83°E	3.2×3.95 (12.64)	10前	034	G-2・3 H-2・3	N-6°E	7.1×7.3 (51.83)	8前
015	H-2	N-0°E	8.0×8.0 (64.0)	8前	035	G-2 H-2	N-77°E	3.2×3.7 (11.84)	10後
016	C-2	N-1°E	6.0×6.0 (36.0)	6後	036	G-2	N-15°E	3.5×3.0 (10.5)	不
017	C-2	N-2°E	3.0×3.2 (9.6)	不	037	G-1 H-1	N-8°E	4.5×4.5 (20.25)	6後
018	C-2	N-10°E	4.8×4.9 (23.52)	8前	038	I-1	N-7°E	3.8×4.0 (15.2)	6中
020	C-2 D-2	N-0°E	4.3×4.5 (19.35)	9後	※019は欠番				

第3節 大北遺跡の性格について

前節までで述べて来たことから、遺物・遺構の双方において、特異な様相を見せる遺跡であることは、良く確認できたものと考えられる。その中でも、特に掘立柱建物群の設置期間に目を向けた場合、本遺跡の性格は、どのように捉えれば良いのであろうか——その前後の期間については、ごく一般的な集落と考えて良からう——。その非在地的性格の強さから見て、当時の公的施設——郡衙・駅家等——が想定されるので、それらの点を考慮に入れて、検討してみたい。

大北遺跡は、古代、下総国千葉郡池田郷に属していたものと考えられる(千葉市史1976)。千葉郡内では、郡衙推定遺跡とされるものは、まだ検出されていない。又、駅家については、『延喜式』兵部省に「河曲」と見え、これは地名から見て、現都川近辺の寒川の地が想定されている(千葉市史)。

まず郡衙としての、可能性について考えてみたい。山中敏史氏は、立地その他の特徴として、郡衙遺跡に共通するものを、次のように挙げておられる(山中1983)。

- a) 旧来の在地有力首長の居宅から、離れて造営されていること。
- b) 評衙とは断絶しており、構造的にも異なると推定されること。
- c) 前身の官衙的施設を継承する場合にも、前身施設とは全体構造などの点で大きく異なっていたと、推測されること。
- d) 交通の要衝に立地していること。
- e) 飛鳥浄御原令の施行を画期として、全面的に成立したこと。

上記の他に、その機能を充実させるために、郡庁・正倉・館・厨・宗教施設・雑舎・外郭施設等の構造分化が挙げられ、又、規模としては方二町以上に匹敵すること、などなどの要件がある。勿論、これら全てを満たさなければ、郡衙ではない、ということではない。これらの要件を一々大北遺跡と突き合わせた場合、次のような結果が得られる。

甲) 交通の要衝であった可能性は高い。

乙) 飛鳥浄御原令施行期に近い時期から、掘立柱建物群が出現する。

このような状況で、果たして大北遺跡を郡衙(評衙)と言えるだろうか。現段階では、否定的に考えざるを得ない。その理由は、概ね次の四点にある。

ア) 掘立掘り方が円形で、且つ、全体に貧弱なものが多い。

イ) 竪穴住居と掘立柱建物が一体となって機能している。

ウ) 総柱建物が少な過ぎる。

エ) 外郭施設(柵列)が貧弱で、且つ一時的なものでしかない。

これらの理由を以て、郡衙遺跡ではあるまい、と考える。但し、甲・乙の二点は、やはり注目に値いすると思う。掘立柱建物が7世紀末～8世紀初頭の段階において、その設営を開始されたという点においては、乙にいう地方行政組織の整備時期と機を一にする、という意味で、大

北遺跡の性格を特徴づけていると考えられる。

この他、先に記した駅家としての可能性が残るわけであるが、今回比較・検討するだけの材料を揃えることができなかつた。大量の畿内産土師器の出土意義の検討と共に後日別稿を以てまとめ論ずるつもりである。

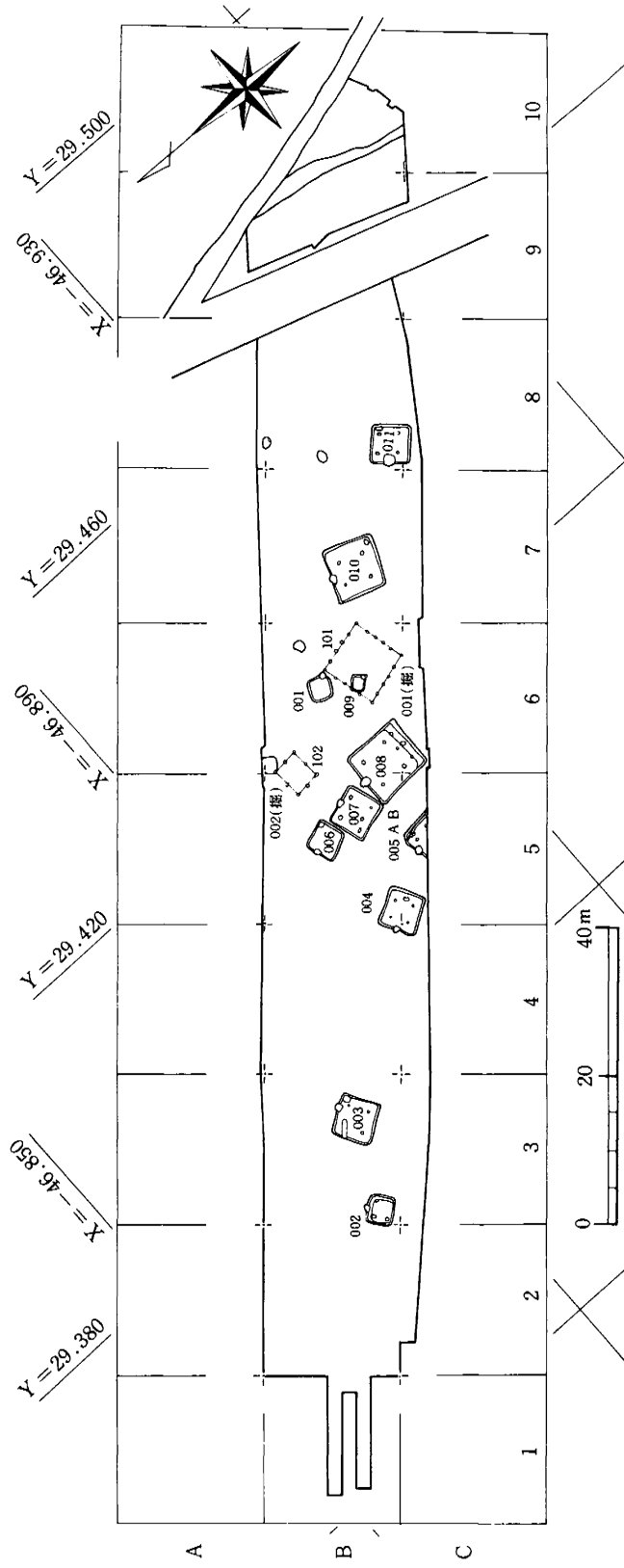
以上、結語として大北遺跡について主要な部分を簡単にまとめてみたが、報告書として本来行うべき諸点——土器の分析・編年、周辺遺跡との比較検討——つまり地方に根付いた視点からの作業は、行い得なかつた。 (萩原)

《引用・参考文献一覧》

- (ア) 浅香 年木 1971 『日本古代手工業史の研究』(法政大学出版局)
池邊 彌 1971 『和名類聚抄郡郷里駅名考證』(吉川弘文館)
石田 広美 1983 「下総における八世紀代の搬入土器」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』(史館同人・市立市川考古博物館)
石戸 啓夫 1984 「大源太遺跡出土の畿内系土師器について」『藤沢市片瀬 大源太遺跡の発掘調査』(青山学院大学)
- (カ) 金子 真土 1982 「北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について」『研究紀要』4 (埼玉県立歴史資料館)
木下 良 1982 「国郡区の編成と主要施設・交通」『日本歴史地図』原始・古代編(下)(柏書房)
小林行雄・原口正三 1958 『世界陶磁全集』巻1
- (サ) 城ヶ谷和広 1984 「七・八世紀における須恵器生産に関する一考察」『考古学雑誌』70-2 (日本考古学会)
関根 真隆 1969 『奈良朝食生活の研究』(吉川弘文館)
- (タ) 田中 新史 1980 「東国終末期古墳出土の馬具—年代と系譜の検討」『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集(早稲田大学出版部)
(財)千葉県 1984 『研究紀要』8 — 自然科学の手法による遺跡・遺物の研究3 (財団法人千文化財センター 千葉県文化財センター)
千葉 市 1976 『千葉市史・史料編1—原始・古代・中世』(千葉市)
- (ナ) 奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃 1982 『平城宮跡発掘調査報告書Ⅺ』
西 弘海 1979 「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集』Ⅴ(奈良国立文化財研究所)
西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集(平凡社)

- 西山 克己 1984 「東国出土の暗文を有する土器(上)」『史館』17 (史館同人)
- (マ) 松村恵司他 1977 『山田水呑遺跡』(日本道路公団・山田遺跡調査会)
- (ヤ) 山中 敏史 1976 「古代郡衙遺跡の再検討」『日本史研究』161
- 山中 敏史 1983 「評・郡衙の成立とその意義」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
(同朋舎)
- 山中 敏史 1984 「遺跡から見た郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』(塙書房)
- 山中 敏史 1984 「国衙・郡衙の構造と変遷」『講座日本歴史2・古代2』(東京大学出版会)
- 山中 敏史 1985 『古代日本を発掘する5・古代の役所』(岩波書店)
- 佐藤 興治
- 吉田 恵二 1982 「『延喜式』所載の土器陶器」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集
(平凡社)

III 谷津遺跡の調査



第156図 谷津遺跡遺構配置図 (1/1000)

第1章 検出された遺構と遺物

付図に見られる通り、谷津遺跡、千葉市調査による藤葉遺跡は同一の台地上に立地し、瓜作遺跡、池田古墳群は東南より進入する谷により分割されるものの、きわめて近接な関係にあるものと考えられる。特に谷津遺跡、藤葉遺跡は字名で分割された関係上、遺跡全体を考える場合、特に注意しなければならないだろう。そして現在までの調査の状況から見て谷津、藤葉、瓜作の各遺跡は時期的にも極めて近く、同一の大規模な集落としてとらえられるとも言えよう。

今回、当センターで調査した区域は谷津遺跡（群）の北端ともいえる地域に当たる。住居跡は12軒、掘立柱建物跡2棟、土壇2基が検出され特に瓜作地区（遺跡）との境に近い位置からは瓦塔の出土があり遺跡の内容を考える上でのてがかりとなろう。

なお千葉市調査による谷津遺跡の遺構調査数は住居跡168軒、掘立柱建物跡14棟、土壇51基、藤葉遺跡では住居跡10軒、土壇1基が検出され、特筆できる遺構、遺物として鋳銅工房跡および古代印鋳型及び仏教用具の鋳型の存在がある。

第1節 堅穴住居跡と遺物

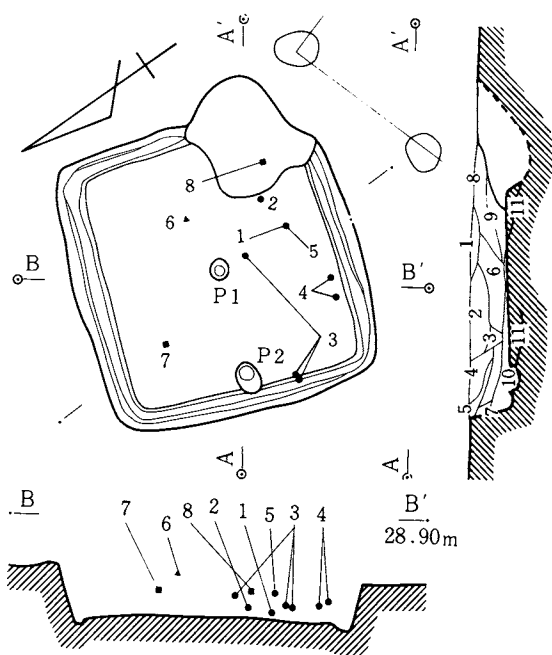
001号住居跡（第157～159図）

調査区のほぼ中央部6B区から検出調査された。調査に先立つ試掘調査の段階で、すでに遺構の存在が確認されまた同じ区内で瓦塔片の出土が確認されており、特に注意深く調査を進めた。住居跡は一辺約3mの、全体に丸みを帯びた方形を呈している。面積は6.41㎡である。周構は全周しており、幅は2.4cmから2.6cmである。柱穴は、住居中央部及びカマド対面に2本が検出された。P₂は、外側から中央に向かって掘られている。住居跡の掘り方は、コーナー部分を深く掘る形状を呈している。

主軸方位はE-22°-Sである。

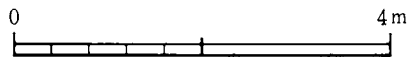
カマドは東南隅に構築されている。壁に深く掘り込む形状を呈する。掘り込み幅約1m、壁面より奥行き約50cmを測る。カマド内堆積土は8層に分けられた。堆積状況からみて単純に前方に崩れた様子がみられる。火床の下はかなり大きく掘り込みを設け火床を形整している。

遺物は、坏、甑、瓦塔基壇が出土している。坏は、4点が図化できた。1は、土師器の坏で、底部は回転へら切りである。2・3・4は暗灰色を呈する坏である。底部は回転へら切り、静止へら切りで切りはなしの後周囲にへら削りを施している。5は、甑で外面はたてへら削りを施している。瓦塔は、遺構検出面から出土している。出土状況は廃棄された状況である。破片のほとんどが基壇の部分で屋根の破片は出土しなかった。なお瓦塔出土状態から本住居に併う

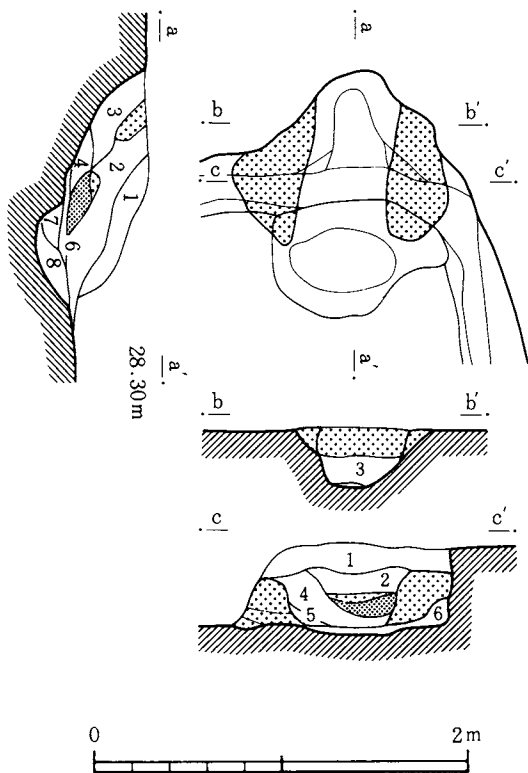


001号住居跡土層説明

1. 黒色土 焼土粒・カーボンを多く含む。
2. 暗茶褐色土 径2mm前後のローム粒を若干含む。微量のカーボンを含む。1に類似。
3. 暗茶褐色土 カーボンを多く含む。1に類似。
4. 暗茶褐色土 2に近いが黒色土が多い。
5. 黒色土 ローム粒を微量含む。
6. 暗褐色土 4に類似。やや粘性が多い。
7. 暗褐色土 少量の黒色土を含む。
8. 暗茶褐色土 2に近いが、カマド砂を若干含む。
9. 暗茶褐色土 2に類似するが、山砂を若干含む。焼土粒を含む。
10. 暗茶褐色土 ロームブロックを含む。
11. 黒褐色土 ローム塊を多く含む。堆積は疎である。



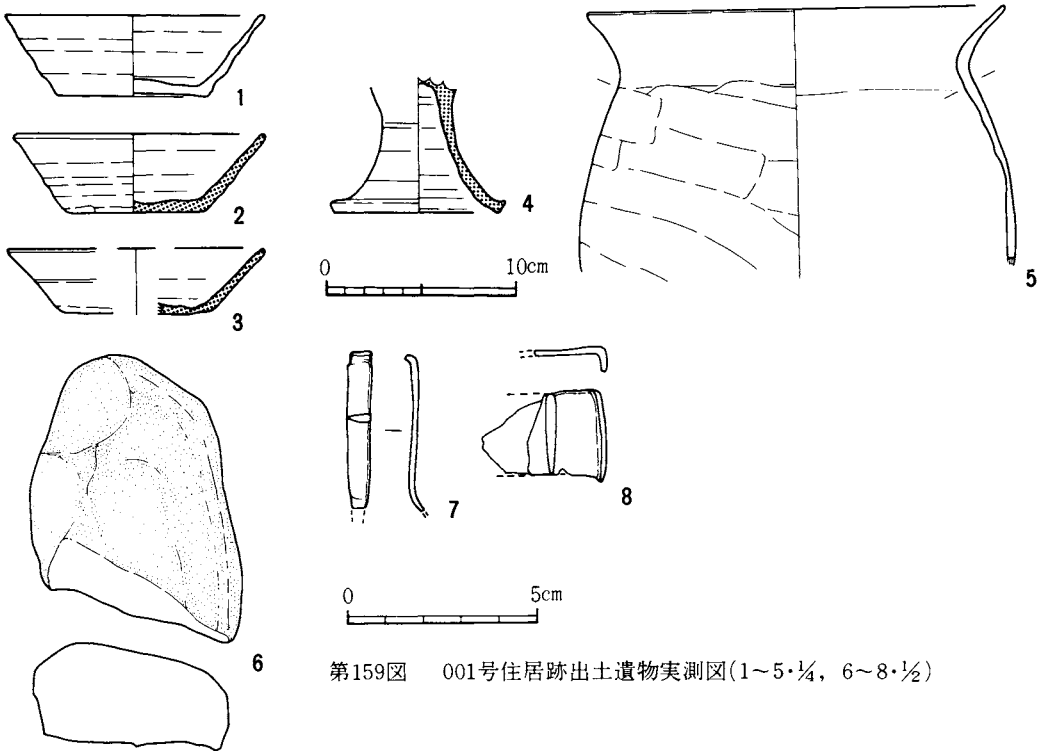
第157図 001号住居跡実測図 (1/80)



001号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 山砂及びカーボン・焼土を少量含む。
2. 暗褐色土 1に類似。カマド砂・焼土がブロック状に入る。
3. 暗褐色土 しまりなし、カーボン・焼土粒を含む。
4. 暗灰褐色土 山砂を多く含む、焼土粒及びカーボンを若干含む。
5. 暗灰褐色土 4に類似。カーボンはほとんど含まない。
6. 暗黒褐色土 かたくしまっている。焼けた痕跡はない。
7. 暗黒褐色土 ロームブロック・カーボン・焼土などを含む。
8. 暗黒褐色土 焼土はあまり含まず、黒色土を多く含む。

第158図 001号住居跡カマド実測図 (1/40)



第159図 001号住居跡出土遺物実測図(1~5・¼, 6~8・½)

ものとは考えられないため頁を変えて述べることにする。

002号住居跡 (第160~162図)

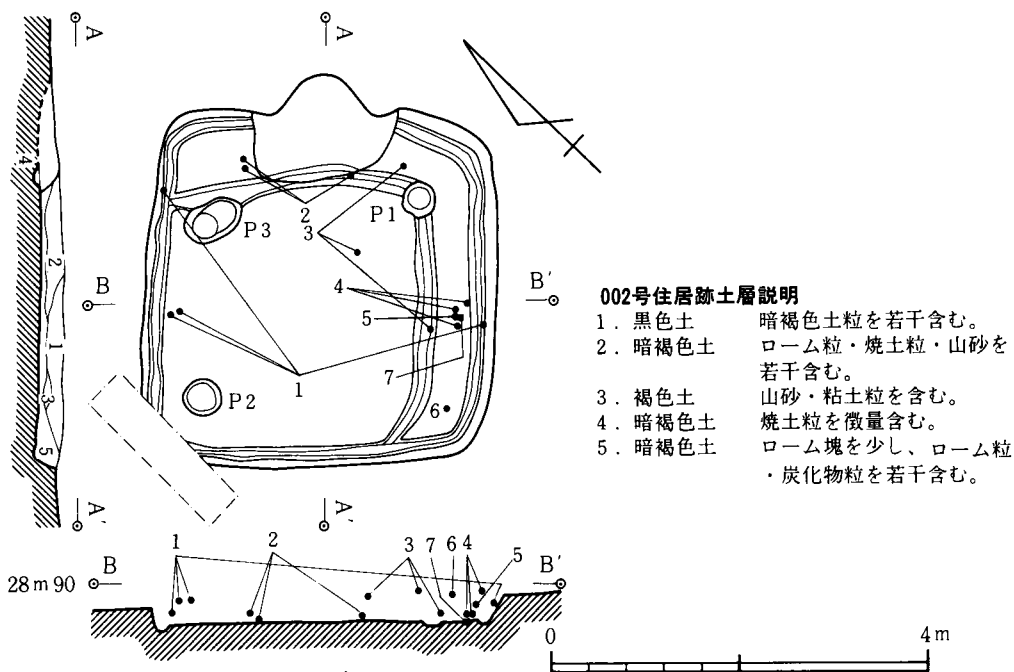
調査区の最も北側 2 B 区で単独で検出調査された。第003号住居跡のとは約 5 m の距離を測る。002・003号住居跡は他の遺構群とは多少その距離を置くように位置している。住居跡は、立て替えによる拡張が行なわれており、二重に巡る壁溝がみられる。西隅は攪乱を受けている。主軸方位は N-49°-E である。

住居跡は新しい時期で一辺約 3.7m × 3.2m, 古い時期で一辺約 2.5m を測り確認面からの掘り込みは約 20cm, 新・旧床面はほぼ同一のレベルを保つ。プランは全体に丸みを帯びた方形を呈している。壁溝は建替前のものでは幅約 20cm で全周する。東側と北側では溝を共用する。新しい住居ではカマド両端で終わっている。柱穴は、3 本検出調査されたが 3 本とも建て替え後の住居で掘られたものと思われる。

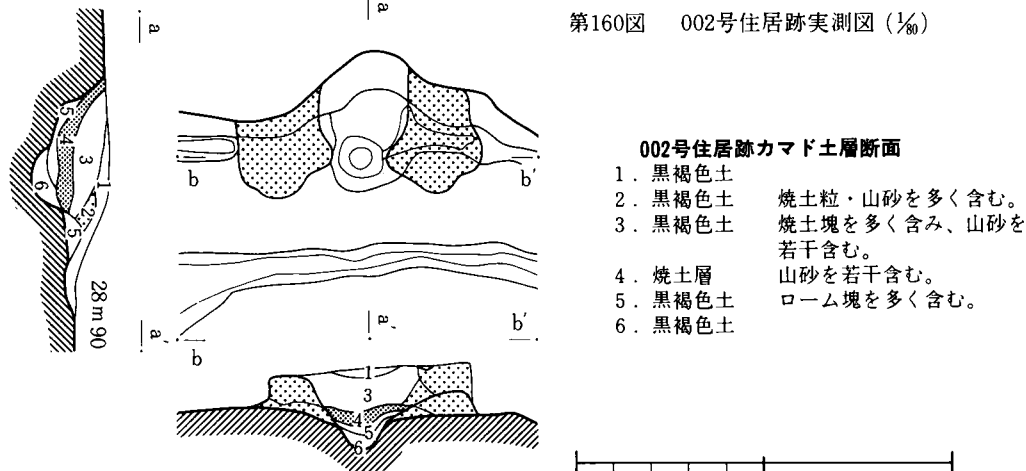
カマドは北辺中央に構築されている。袖部の幅の広い形状を呈する。壁より奥へ 30cm ほど掘り込まれている。火床部には 40 × 40cm の掘り込みが作られる。煙道は 30° とゆるやかな立ち上りを示す。天井部はすでに流出しており袖部のみを残しているにすぎない。なお掘り方においても旧住居のカマド位置は判明しなかった。

出土遺物 遺物は坏、甕が出土している。1～3は坏で、底部は回転糸切りである。内外面は回転ヨコナデである。4は高台付坏で底部は回転糸切りで、高台は貼り付けである。5は小形の甕で口縁部を欠く。底部は指頭押さえで、底部周縁はヨコヘラ削りを施す。

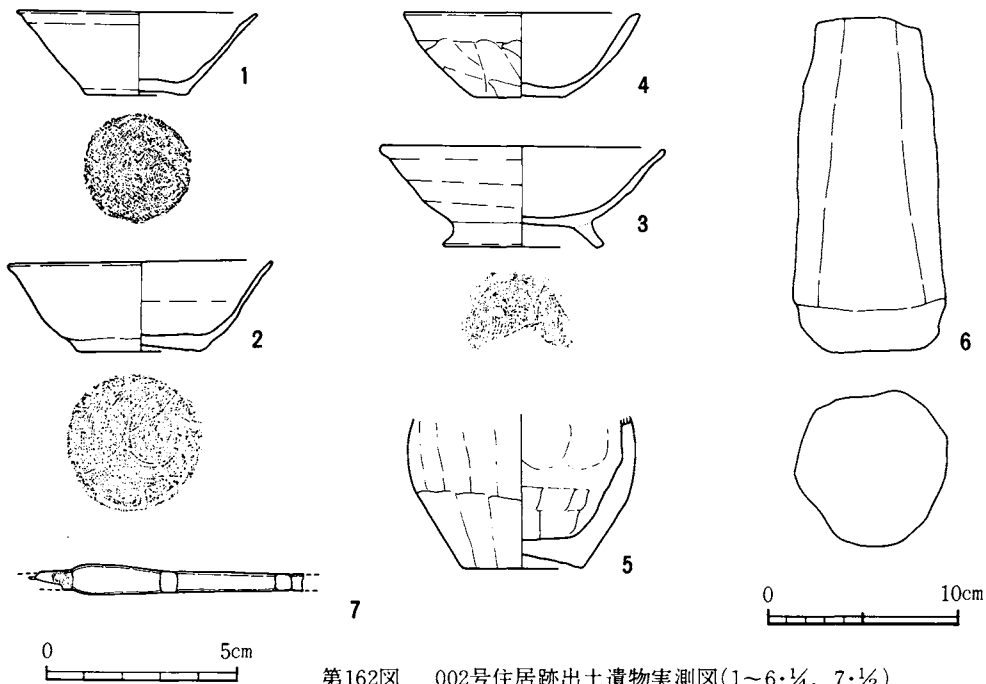
6は土製支脚である。断面は円形に近く、胎土中にスサを含むが全体としていねいな作りである。



第160図 002号住居跡実測図 (1/80)



第161図 002号住居跡カマド実測図 (1/40)

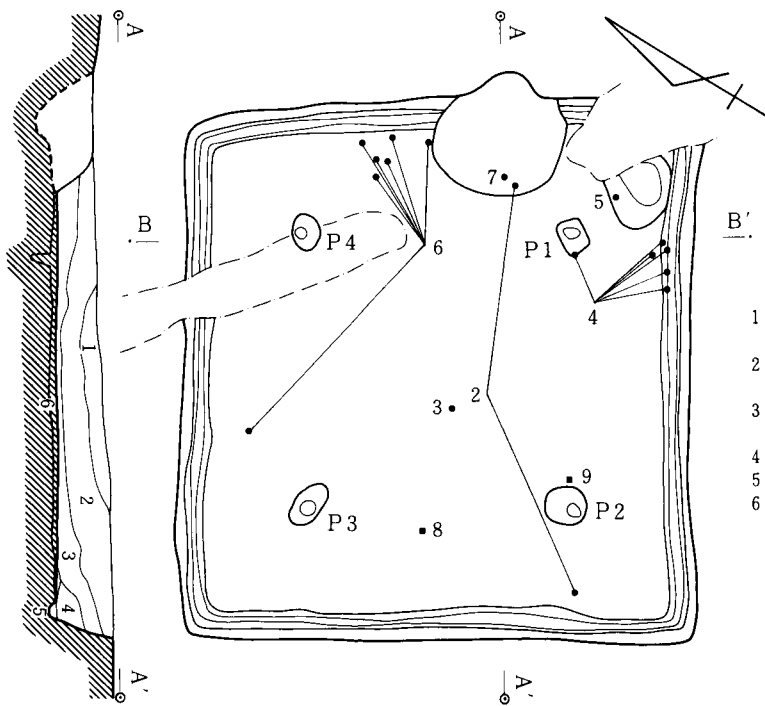


第162図 002号住居跡出土遺物実測図(1~6・¼, 7・½)

003号住居跡 (第163~165図)

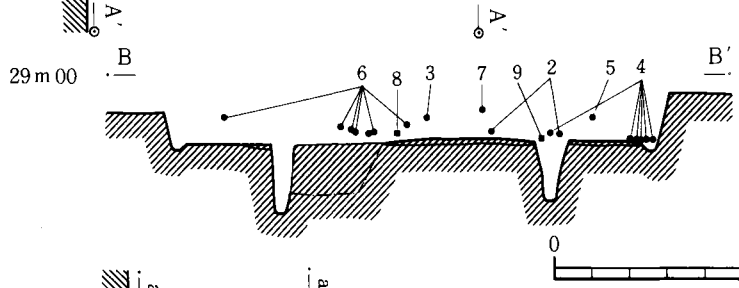
調査区の北側3B区で検出調査された。002号住居跡と共にほかの住居跡とは離れて所在している。一部に攪乱を受けているが全景を知ることが出来る。主軸方位はN-60°-Eである。平面形住居跡は一辺約5.5m×約6.4mのやや角ばる方形を呈する。掘り込みは遺構確認面より約40mを測る。壁溝はカマド下と除き全周する。幅は約30cm程である。柱穴は、4本が検出調査された。4本とも住居跡の対角線上に位置する。対角線の交点を中心とする円の上に4本の柱穴が位置しており、計画的な構築が認められる。カマドの右側には貯蔵穴があるが、北側の約半分が攪乱を受けていた。カマドは北壁中央のやや右に構築されていた。煙道は急な角度(70°)で立ち上がる。袖の部分は床を多少高く造作している。掘り込み幅約0.75壁へは30cm程の掘り込みがある。火床部分の下には浅い掘り込みをもうけたあと袖部分に合わせるように整形している。

遺物のうち土器は6点が図化できた。土師器杯、椀、及び、甕、手づくね土器、須恵器杯が出土した。1は土師器の杯で外面はヨコヘラ削り後ミガキを施す。内面はミガキを施している。2・3は須恵器杯である。外面は回転ヘラ削りによって整形している。3の胎土は長石粒を割に多く含む。すべてカマド脇から出土した。4は小型丸底の壺でほぼ完形である。外面はヨコヘラ削りを施し後ナデを加えてある。5は甕の破片で底部を欠く。6は手捏である。口縁外面に輪積み痕を残す。内面に凹凸が見られ、タタキ締めを施したと思われる。13は鎌、先端を一部欠くがかなり使い込まれている。14は刀子柄部、木質部の付着がみられる。10は石皿(?)である。覆土中からの出土であるが、本住居に伴うか不安が残る。12は使用痕があるが用途不明。

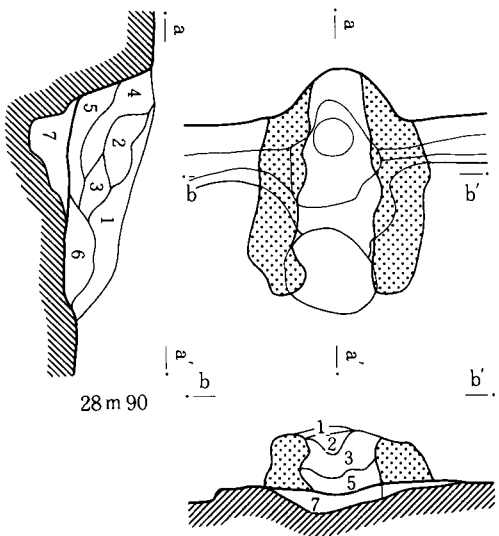


003号住居跡土層説明

- 1. 黒色土 ローム粒・炭化物粒を若干含む。
- 2. 黒色土 暗褐色土塊を多く含み、焼土粒をわずかに含む。
- 3. 茶褐色土 ローム粒を多く含み、ローム粒を粒を若干含む。
- 4. 暗茶褐色土 ローム粒を若干含む。
- 5. 暗褐色土 暗褐色土粒による。
- 6. 褐色土 ローム塊を多く含む。



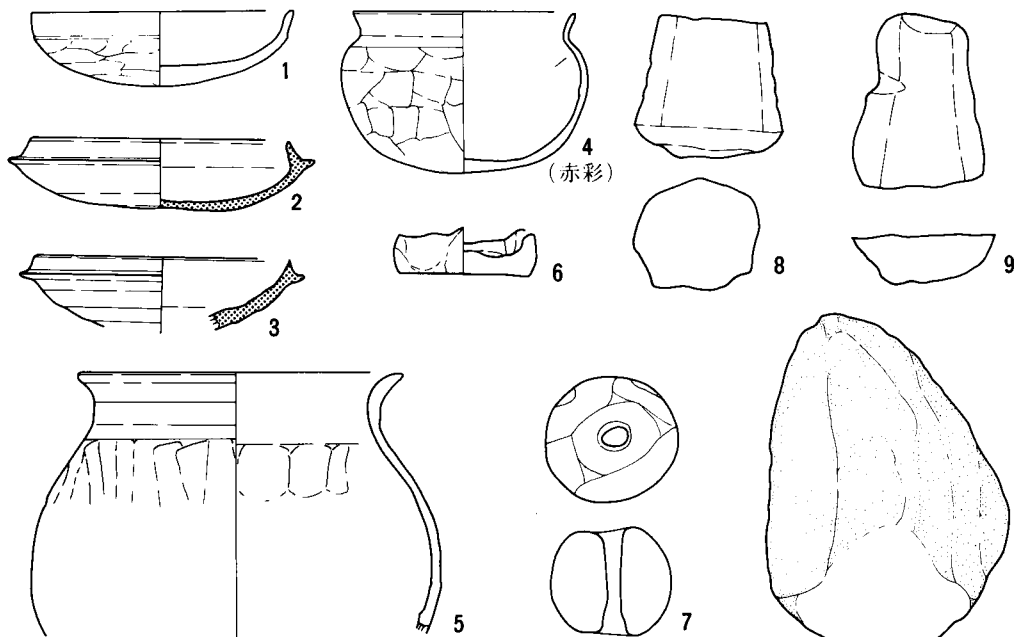
第163図 003号住居跡実測図 (1/50)



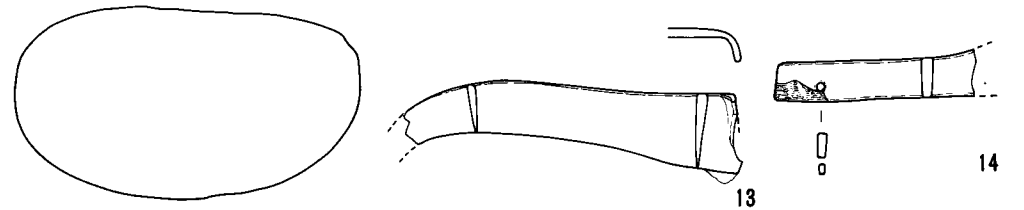
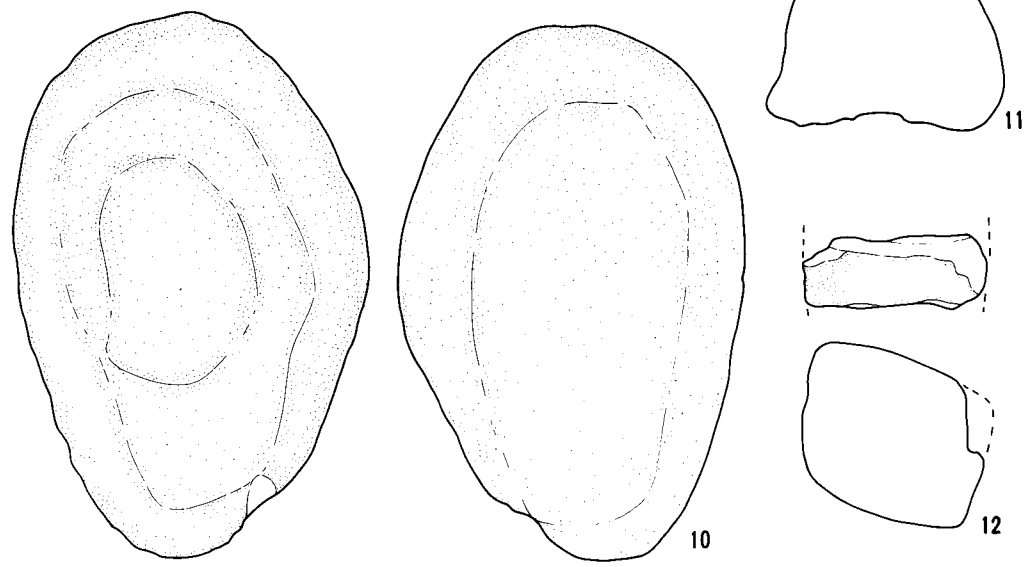
003号住居跡カマド土層断面

- 1. 暗褐色土 若干のローム塊を若干含む。ローム粒少し含む。
- 2. 暗褐色土 山砂・焼土は多く、ローム粒は少ない。
- 3. 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 4. 赤褐色土 山砂・焼土粒を非常に多く含む。
- 5. 暗褐色土 山砂・焼土粒を若干含む。
- 6. 赤褐色土 多量の焼土粒とローム粒を少し含む。
- 7. 暗黄褐色土 ローム塊(中・小)を含む。

第164図 003号住居跡カマド実測図 (1/40)



0 10cm



0 5cm

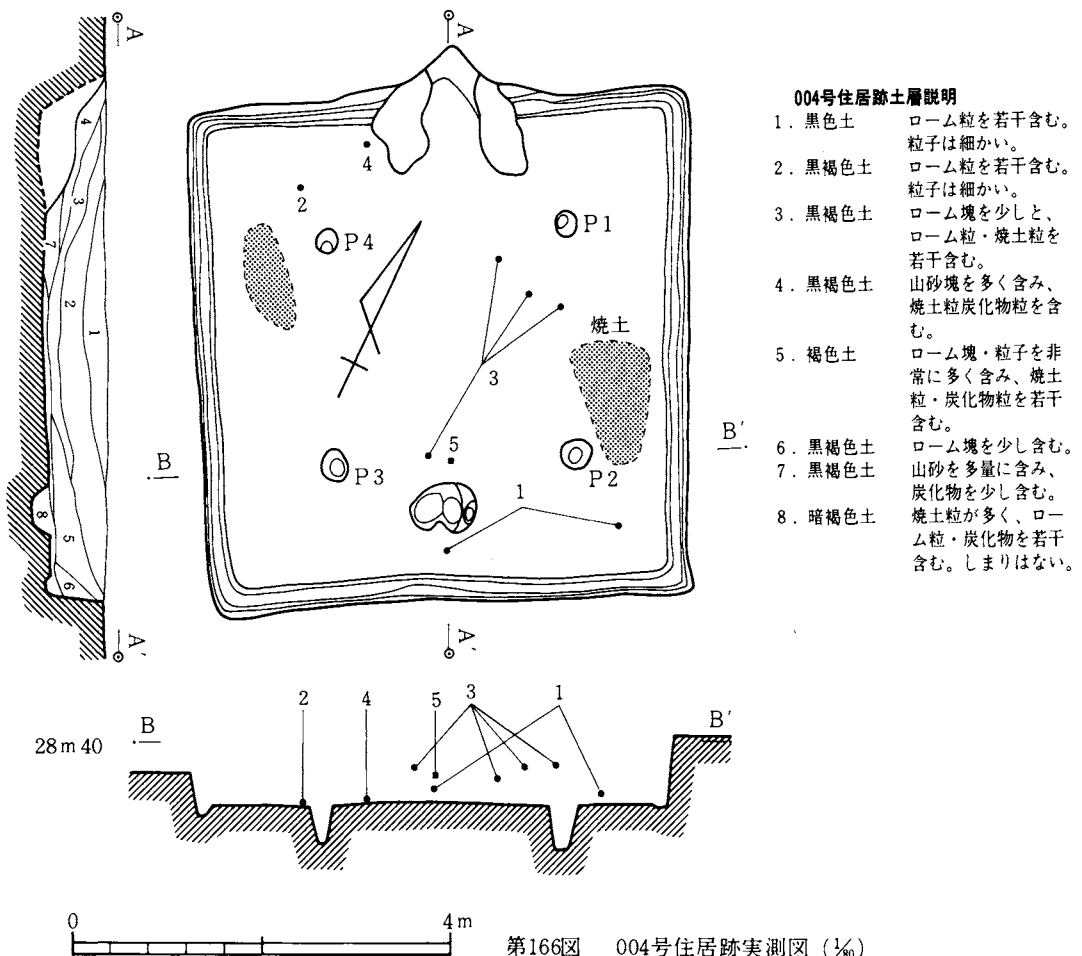
第165図 003号住居跡出土遺物実測図(1~9・¼, 7・10~14・½)

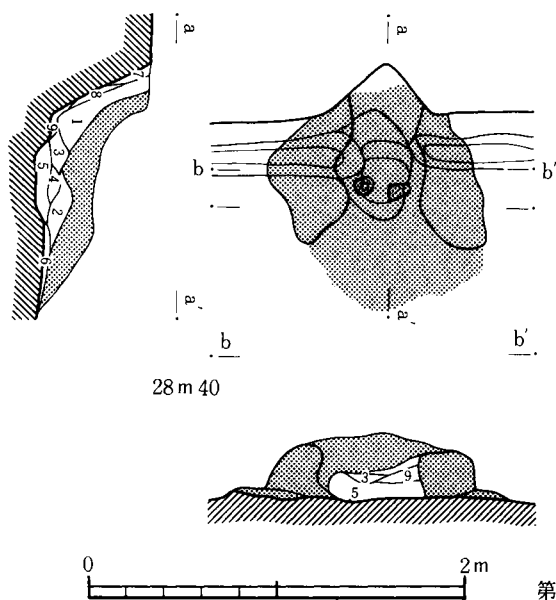
004号住居跡 (第166~168図)

検出位置 調査区のやや西寄りの5B・5C区にかけて検出調査された。005号・006号住居跡の西約5m調査区の中央部の遺構群の内ではいちばんはじにあたる。

主軸方位はN-29°-Wである。住居跡内の覆土は8層に分けられた。一辺が約5.2mのしっかりとした方形を示している。各辺は直線に近く、コーナーは90度に近い。壁溝はカマドの部分を除き全周する。幅は約20cmから30cm程である。柱穴は5本が検出された。主柱穴はP₁~P₄の4本で、1本は出入口に伴うものと思われる。柱穴は住居跡の対角線上に位置し、5本の柱穴すべてが対角線の交点を中心とする同心円上に位置している。

カマドは北壁の中央に構築されていた。壁への掘り込みは、三角形に近く、立ち上がりは約60°と緩やかである。壁からの掘り込みは25cm、カマドは前方へ崩れ落ちた状況を呈している。火床の下に浅い掘り込みをもうけている。カマド部分の床は全体に高く、住居構築の際に計画性があったことが考えられる。覆土中には焼土・炭化粒も多く、また床面には焼土ブロックもみられ焼失した可能性がある。

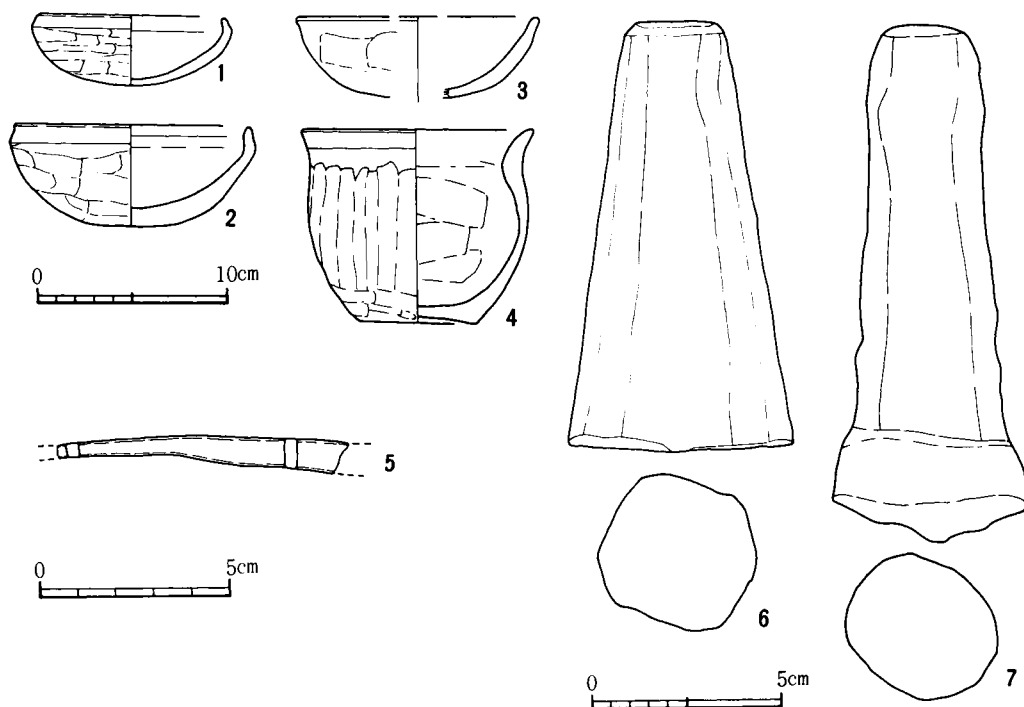




004号住居跡カマド土層断面

- | | |
|----------|-----------------------|
| 1. 灰褐色土 | 灰を少しと焼土・山砂を若干含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 山砂と焼土を若干含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 山砂・焼土を多く含む。ローム粒は若干含む。 |
| 4. 暗褐色土 | 山砂と焼土を若干含む。 |
| 5. 黒褐色土 | 焼土・山砂を含む。 |
| 6. 黒褐色土 | 焼土粒を多く含む。 |
| 7. 暗灰褐色土 | 山砂・焼土を含む。 |
| 8. 黒褐色土 | 焼土粒が多い。硬くしまっている。 |
| 9. 黄褐色土 | 山砂・焼土を多く含む。 |

第167図 004号住居跡カマド実測図(1/40)



第168図 004号住居跡出土遺物実測図(1~4・1/4, 5~7・1/2)

出土遺物 遺物は、4点が図化出来た。1~3は土師器の坏である。ほぼ完形で、外面はヨコヘラ削りを施した後内外面ともにミガキを施している。2は土師器のカメでほぼ完形である。底部は回転ヘラ削り、カマド内から出土した。土製支脚は2点みられる。6はかなり残がよい。5は刀子の柄かくぎであろうか。不明品である。

005号住居跡（第169～171図）

調査区のほぼ中央の5C区から検出調査された。南西側の約半分が調査区外となってしまうている。

また重複していたため005A号住居跡，005B号住居跡と呼ぶことにした。新旧関係としては005B号住居跡の方が新しいものと考えられる。

005A号住居跡（第169図）

検出状況 A号住居跡は，全体の約1/2、柱穴1本と貯蔵穴が調査された。主軸方位はN-6°-Wである。覆土中には焼土層が認められ，火災住居跡と思われる。一辺は約4.7m程の正方形を呈するものと思われる。壁溝は東・北壁に認められ，幅20cmから30cmを測る。A号住居跡に伴うと思われる柱穴は1本P₃が検出されている。直線40cm深さは50cmを測る。

貯蔵穴は，長径80cm×短径60cm深さ40cmの長円形を示す。なおカマドはB号住居跡により破壊されており，その位置は確認されなかった。

遺物は1点が図化出来た。1の土師器の坏である。胎土は緻密で焼成は良好である。外面はヘラ削りを施し後全面にミガキを加えている。

005B号住居跡（第169・170図）

全体のほぼ半分が調査範囲外にあり柱穴2本とカマドが検出調査された。主軸方位はN-19°-Wである。

一辺約4.7mの正方形を呈すものと思われる。壁溝は全周するものと思われる。幅20cmを測る。柱穴は2本が検出され，P₁は深さ48.1cm，P₂は深さ38.9cmである。覆土はローム粒や粘度を多く含んでおり短期に埋まった状況が感じられる。

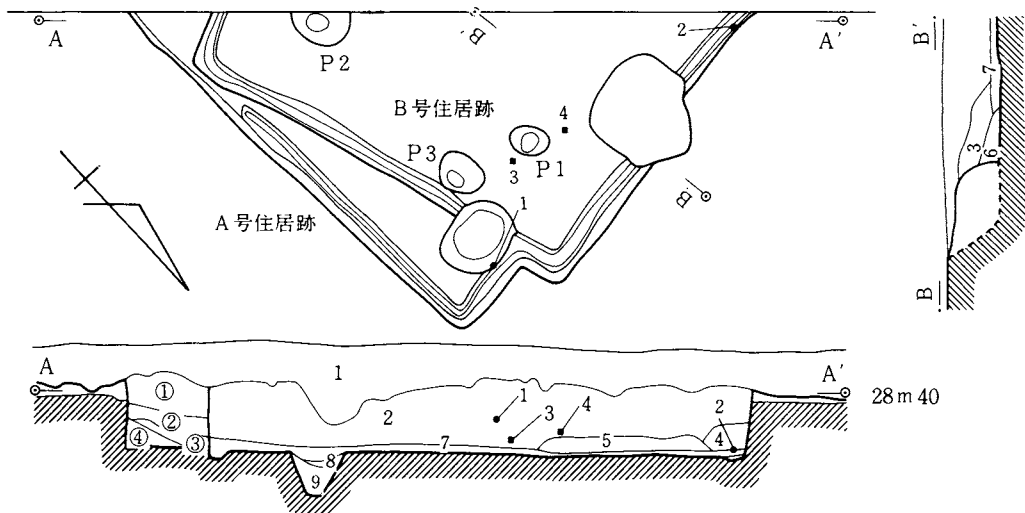
カマドは北壁の中央に構築されている。煙道は三角形に掘り込み，急に立ち上がる。掘り込み幅70cm，奥行き35cmを測る。袖部分の残存状況は良好である。

出土遺物は少なく，土器では，1点が図化できた。2は須恵器の小型壺でほぼ完形である。底部は回転ヘラ削りで，外面に自然釉が認められる。

4は土玉，3は鉄製品である。くぎ（？）であろうか。

006号住居跡（第172～175図）

調査区のほぼ中央の5C区から検出調査された。007号住居跡の北側に近接して所在する。調査に先立つトレンチ調査の段階ですでに確認されていた。主軸方位はN-18°-Wである。住居跡は一辺約4.2m×4mを計り，ほぼ正方形を呈している。壁溝はカマド下部分を除き全周する。床面までは遺構確認面から40cm程の掘り込みを測る。床面はほぼ平坦である。柱穴は，2本が検



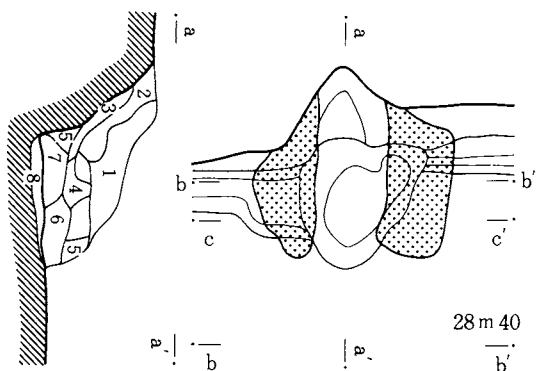
第169図 005 A・B号住居跡実測図 (1/80)

005B住居跡土層説明

- 1. 表土 耕作土
- 2. 黒褐色土 ローム塊と焼土粒・炭化物粒を若干含む。
- 3. 暗茶褐色 山砂塊・焼土粒を少し含む。
- 4. 暗褐色土 ローム塊・褐色土塊を少し含む。
- 5. 山砂 粘土塊を多く含み、ローム塊を少し含む。
- 6. 灰褐色土 山砂を多く含み、粘土が多い。

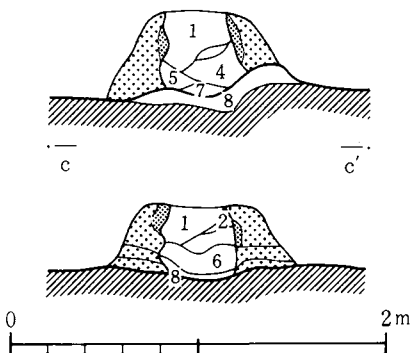
- 7. 暗褐色土 ローム塊を多く含む。
- 8. 黒色土 焼土粒・炭化物は含まない。
- 9. 褐色土 ローム塊を多く含む。

- ① 表土 耕作土
- ② 黒褐色土 ローム塊と焼土粒・炭化物粒を若干含む。
- ③ 黒褐色土 ローム塊・褐色土塊を少し含む。
- ④ 山砂 粘土塊を多く含み、ローム塊を少し含む。

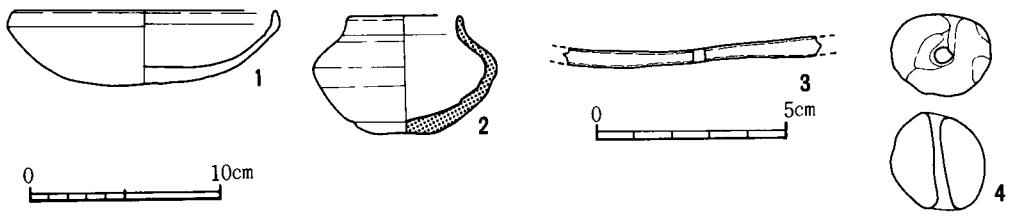


005B号住居跡カマド土層説明

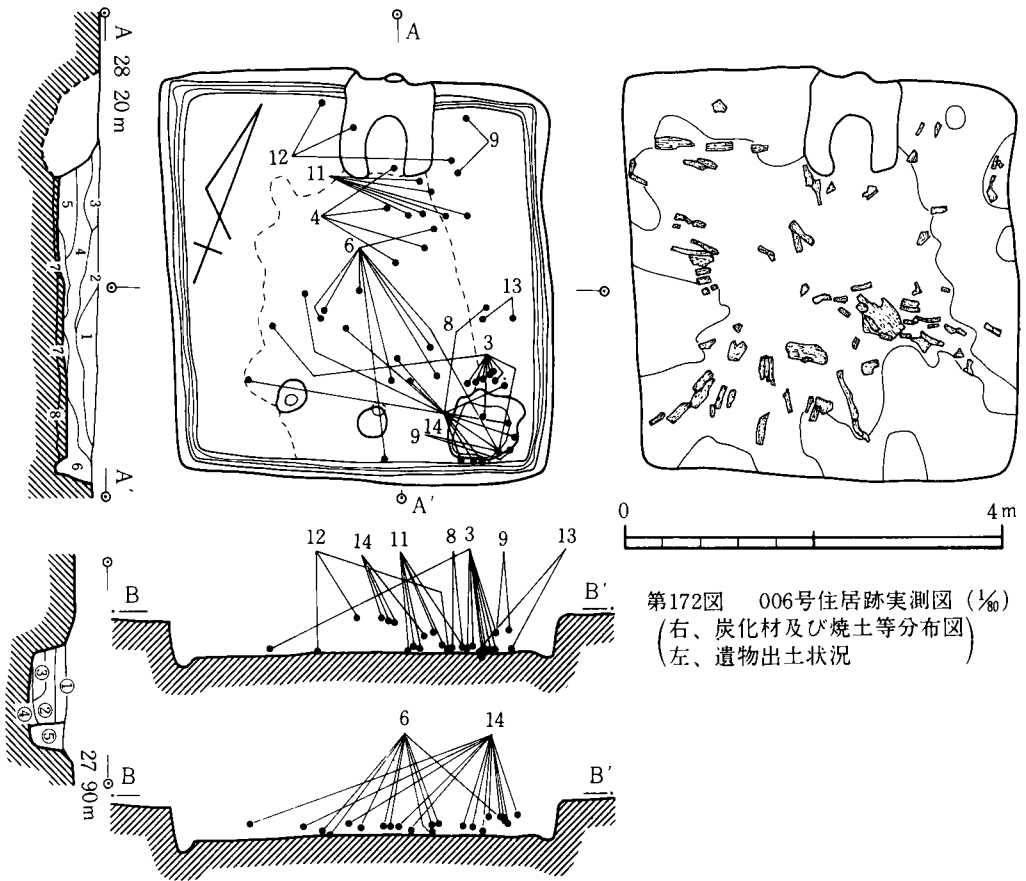
- 1. 暗褐色土 山砂と焼土を少し含む。
- 2. 山砂 熱を受け、赤く変色し、硬化している。
- 3. 山砂 暗褐色土粒・焼土を含む。
- 4. 灰褐色土 粘土粒・焼土粒を含む。
- 5. 暗灰褐色土 粘土粒を少し含む。
- 6. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物を含む。
- 7. 暗灰色土 粘土・焼土を多く含む。
- 8. 黒褐色土 ローム塊を少し含む。



第170図 005B号住居跡カマド実測図 (1/40)



第171図 005号住居跡出土遺物実測図(1~2・ $\frac{1}{4}$, 3・4・ $\frac{1}{2}$)



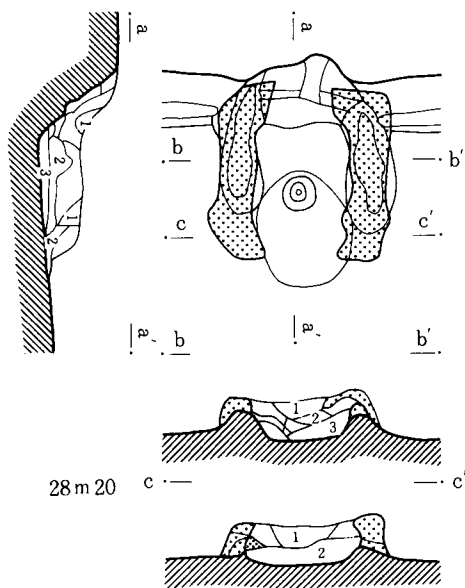
第172図 006号住居跡実測図 ($\frac{1}{50}$)
(右、炭化材及び焼土等分布図)
(左、遺物出土状況)

006号住居跡土層説明

- | | |
|----------|---------------------------|
| 1. 暗褐色土 | 径5mmのロームブロックを若干含む。炭化物はない。 |
| 2. 暗褐色土 | ロームブロック含まず、炭化物を含む。 |
| 3. 暗褐色急土 | 1層に近いが、若干の炭化物を含む。 |
| 4. 暗褐色土 | 外量のカマド流出材と炭化物・焼土粒を含む。 |
| 5. 黒褐色土 | 黒色土が多く、径2~3cmのロームブロックを含む。 |
| 6. 暗黒褐色土 | 炭化物を主とする層 |
| 7. 褐色土 | ローム塊を多量に含む。 |

006号住居跡貯蔵穴土層説明

- | | |
|---------|---------------------|
| ① 暗褐色土 | ローム粒・炭化物粒・焼土粒を多く含む。 |
| ② 暗褐色土 | 1層に近いが炭化物粒・焼土粒は少ない。 |
| ③ 暗黄褐色土 | 若干のローム粒を含む。 |
| ④ 暗黄褐色土 | しまりがあり、ローム塊を含む。 |
| ⑤ 暗褐色土 | 若干のローム粒を含む。しまりはない。 |



006号住居跡カマド土層説明

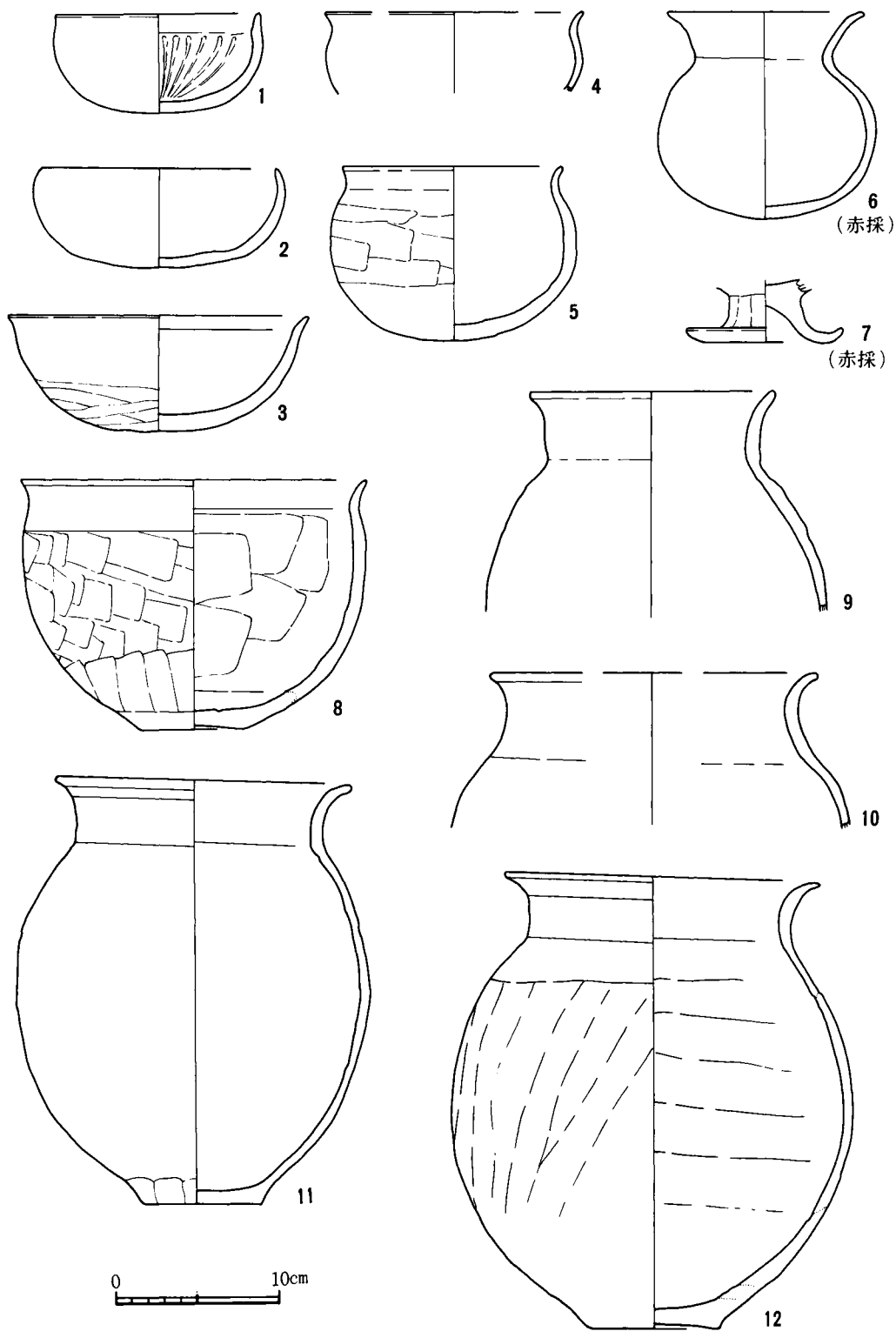
- | | |
|---------|-------------------|
| 1. 暗褐色土 | 褐色粒を多く含み、焼土粒は少ない。 |
| 2. 暗褐色土 | カーボンを多く含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 焼土砂・焼土ブロックを若干含む。 |



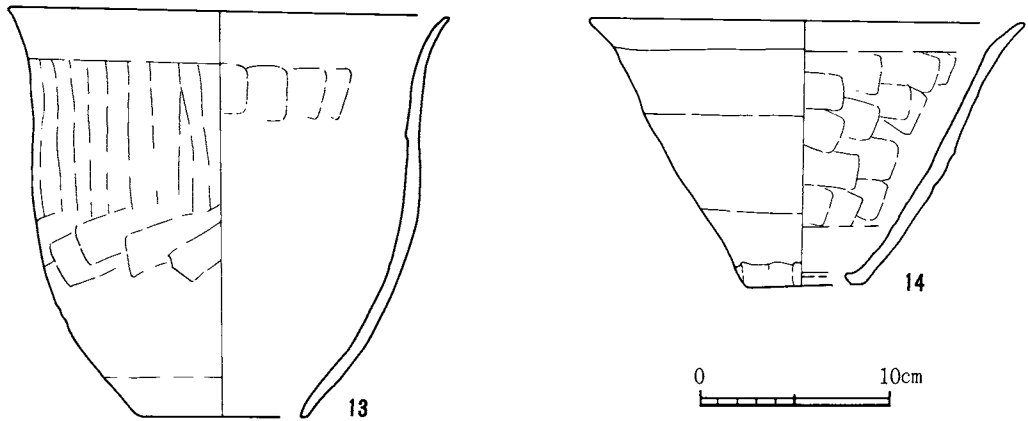
第173図 006号住居跡カマド実測図 (1/40)

出された。直径は共に約30cm, P₁は深さ51.8cm, P₂は47cmである。貯蔵穴は南壁のコーナー部分から検出された。

カマドは北壁の中央に構築されている。壁への掘り込みは浅い。掘り込み幅55cm, 奥行き12cmを測る。残存状態は良好である。袖の下は床面を高く掘り残しており計画的な構築である。覆土中には炭化物を多く含み床面上からは上屋の焼け落ちた状態で炭化材が検出された。遺物は全部で14点が図化出来た。すべて土師器である。1・2は坏形土器である。1は口縁が短く外はんする。口縁内面下に稜を有し、底部にかけて放射状の暗文が施されている。胎土は砂質だが良好である。2は口縁が内湾する。内外面ともに暗文が施されている。胎土は砂質だが良好である。内外面ともにナデを施している。カマド内から出土した。3は埴形土器で、口唇部が外はんする。外面の下半はヘラ削りを加えた後全面ナデを施す。4・5は埴形土器である。外面はヨコヘラ削りを施した後ナデを加えている。6は広口壺である。内外面ともに丁寧にナデを施されている。胎土は砂質で長石粒を多く含んでいる。外面・口縁内面に赤彩が施されている。7は高坏の脚部である。外面に赤彩を施している。8は鉢形土器で、ほぼ完形である。内外面ともにヨコヘラ削りを加えている。9～12は甕である。9・10は胴以下を欠く。11はほぼ完形で、外面はタテヘラ削りを加えた後ナデを施している。底部の周縁にはヘラ削りを加える。12は外面にヘラ削りを加えた後ナデを施し、軽くミガキを施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。上半分は明褐色を呈し、下半には煤が付着し黒色を呈する。13・14は甕である。13は完形で、外面にヘラ削りを施し、内面にはタテのミガキを施している。14は胴の一部を欠く。外面にはヘラ削りを加え後ナデを施す。磨滅が激しい。



第174図 006号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



第175図 006号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4)

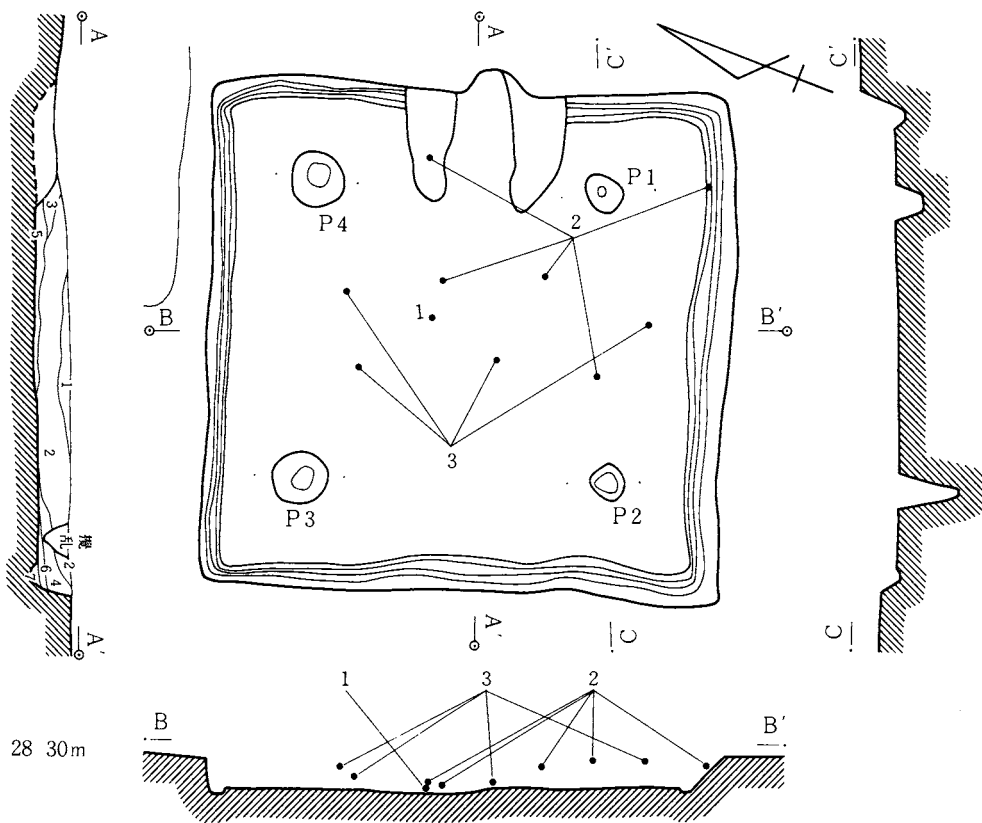
007号住居跡 (第176～178図)

検出位置 調査区のほぼ中央の5 C区から検出調査された。006号住居跡・008号住居跡の中間に位置している。住居跡の間隔は、のきが接するほどである。調査に先立つトレンチ調査の段階ですでに確認されていた。主軸方位はN-70°-Eである。

住居跡は一辺約5.6m×5.3mを測り、ほぼ正方形を呈している。壁溝はカマド下を除き全周する。幅は20cmから30cm、柱穴は4本が検出された。P₁は径40cm、深さ65cm、P₂は径30cm深さ33cm、P₃は径60cm深さ64cm、P₄は径60cm、深さ61cm、P₂は他の柱穴に比べ1/3に近い浅さである。

カマドは北壁の中央に構築されている。壁への掘り込み幅48cm、奥行き20cmを測る。カマド内堆積土は4層に分けられた。火床の下にピット状の掘り込みがみられる。全体としてはやや大形のカマドであろうか。

遺物は3点が図化できた。総て土師器で、住居跡とのほぼ中央から出土している。1は小型甕で、1/2が残存している。外面はヘラナデを加えている。内面はナデ、口縁はヨコナデを加える。胎土は砂質を呈し、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。2は高坏である。脚端が残存する。外面はタテヘラ削り、内面はヨコヘラ削りを加える。脚端はヨコナデを加えている。胎土・焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。3は壺形土器である。口縁部の約1/2が残存する。外面はナデ、口縁部はヨコナデを加える。胎土は良好、焼成は普通である。色調は暗褐色を呈する。

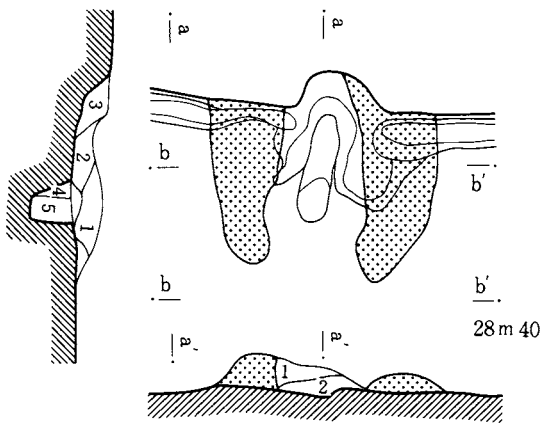
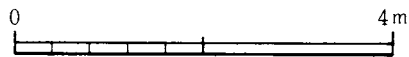


第176図 007号住居跡実測図 (1/80)

007号住居跡土層説明

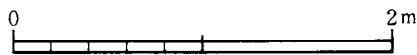
- | | |
|----------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒を若干含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 多量のローム粒と焼土粒・炭化物を若干含む。 |
| 3. 暗赤褐色土 | 少量の山砂と焼土粒を若干含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム塊・ローム粒を少し含む。 |

- | | |
|---------|----------------------------|
| 5. 暗褐色土 | 少量のローム塊と山砂を多く含む。堆積は密でやや硬い。 |
| 6. 暗褐色土 | ローム粒を多く、疎でサクサクする。 |
| 7. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |

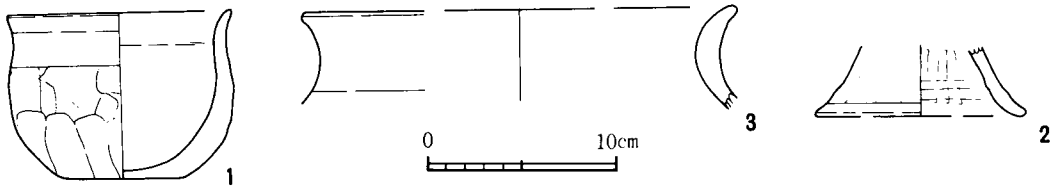


007号住居跡カマド土層説明

- | | |
|---------|-------------------|
| 1. 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒・山砂を少し含む。 |
| 2. 黒褐色土 | 焼土粒多い。山砂を若干含む。 |
| 3. 黒褐色土 | 焼土粒を若干含む。 |
| 4. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |



第177図 007号住居跡カマド実測図 (1/40)



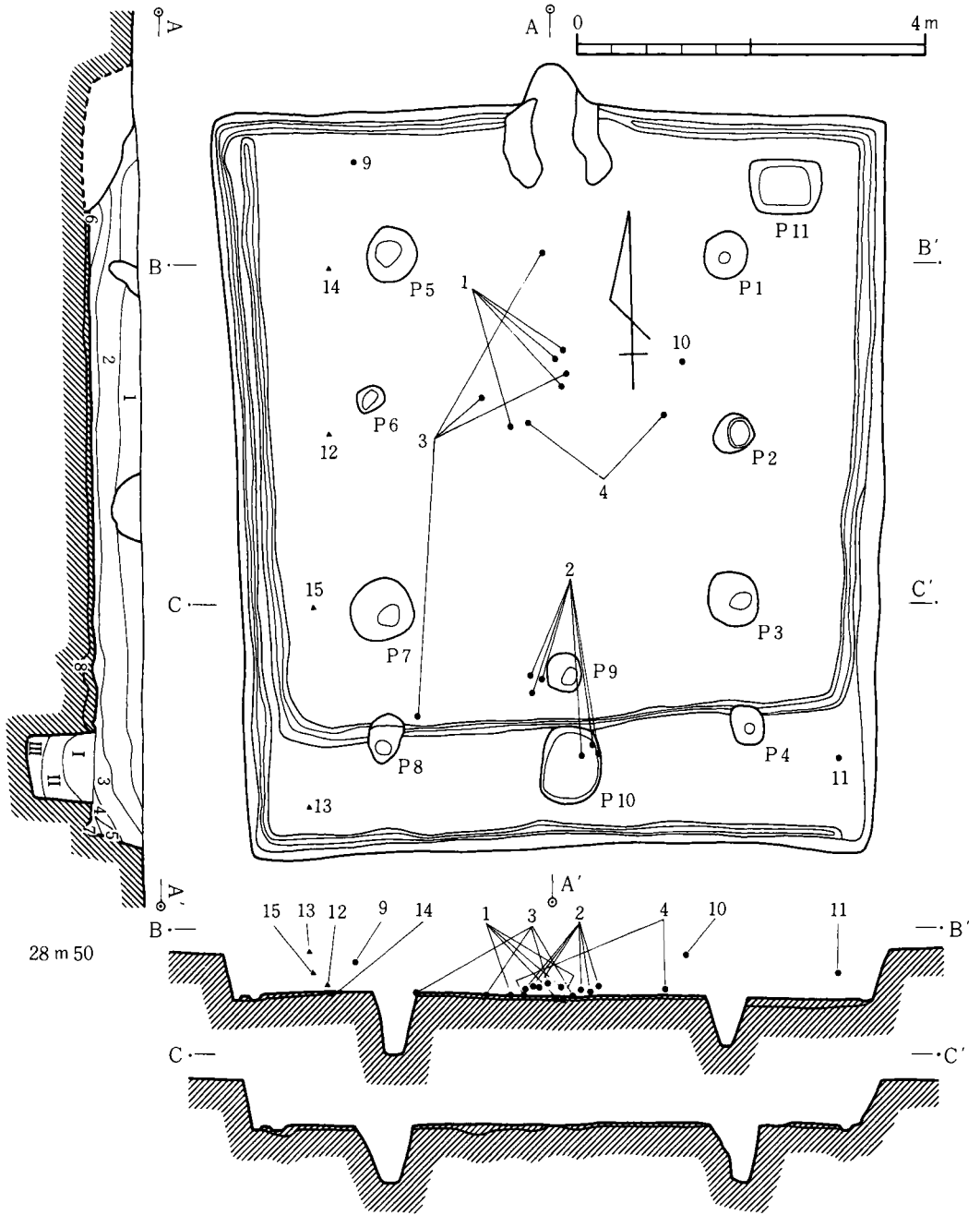
第178図 007号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

008号住居跡 (第179~183図)

検出位置 調査区のほぼ中央5B・6B区にかけて検出調査された。007号住居跡のすぐ南側に位置する。検出調査された住居跡の中では最も大形の住居跡である。本住居址の主軸方位はほぼ南北を向いている。建て増しをされたものと思われる。最大値で計測すると約8.5m×7.8mの長方形になる。建て増し前の大きさは壁溝で推定されるが7.5m×7.2mを測る。北壁（カマドのある面）は基本面であろうか、東西とともにそのまま利用されている。拡張面積は外形で計ると17.8㎡である。床面は新・旧ともに同じレベルで築かれている。確認面から約60cmほどの掘り込みであった。壁溝は当初の住居跡ではカマドの下を除き全周し、建て増し後の住居跡では南東の隅を除き全周する。幅は10cmから30cmを測る。柱穴は全部で10本が検出された。同時に使用されていた柱穴は、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_9$ である。建て増しによって、 $P_4 \cdot P_8 \cdot P_{10}$ が増えている。 $P_9 \cdot P_{10}$ は出入口部にあたる。 P_{11} は、貯蔵穴と考えられる。柱穴の深さは全て55~70cm程である。貯蔵穴は85×65cmを測る。

第180図は掘り方の実測図である。間じきりに用いられたと思われる掘り込みが検出されている。遺物は全て床面近くからの出土であるが収納状況等とは関係ある様な出土状況はみられない。

カマドは北壁の中央に構築されている。残存状態は良好である。カマドに掛けられた状態で甕形土器が出土している。掘り込み幅72cm、奥行き50cmを測る。煙道部の立ち上がり約80°と急である。遺物のうち土器は7点が図化できた。住居跡の中央床面からの出土である。1~3は坏形土器である。1は1/2が残存する。外面はヨコヘラ削り、底部はナデ、内面もナデを加えている。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。色調は暗褐色である。2は約3/4が残存する。外面はヨコヘラ削りを施し、後ミガキを加える。胎土は緻密で良好、焼成も良好である。色調は黒褐色を呈する。3は大形のもので3/4が残存する。内外面ともナデを施した後ミガキを施す。胎土は緻密で良好、焼成も良好である。色調は暗褐色を呈する。4は高坏の脚部である。約1/3が残存する。坏内部はミガキ、外面はタテミガキを加える。胎土、焼成ともに普通である。色調は黒褐色を呈する。5~7は甕である。5はほぼ完形である。外面はタテヘラ削りを加え、下半は



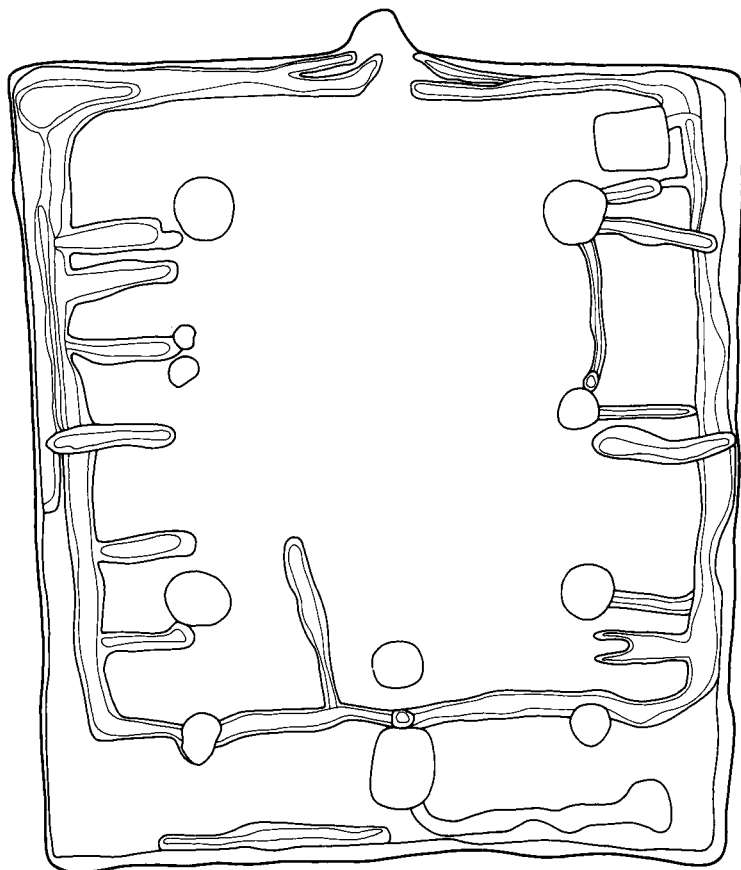
第179図 008号住居跡実測図(1/50)

008号住居跡土層説明

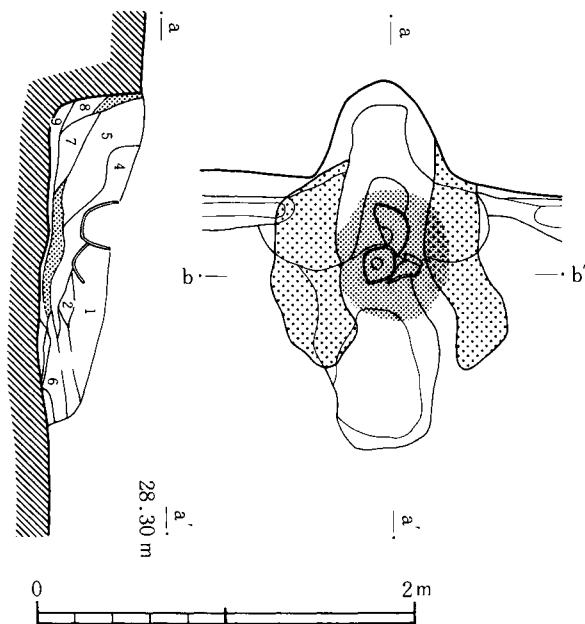
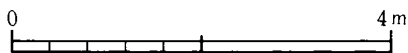
- | | |
|---------|-----------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒を少し、炭化物を若干含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒を多く含み、焼土粒を若干含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒を多く、焼土粒を若干含む。 |
| 4. 茶褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 5. 赤褐色土 | 焼土を非常に多く含み、ローム粒を若干含む。 |
| 6. 黒褐色土 | ローム塊・炭化物・砂を少し含む。 |
| 7. 暗褐色土 | ローム塊を多く含む。 |
| 8. 黒褐色土 | 山砂・ローム塊・焼土粒を含む。 |

008号住居跡柱穴土層説明(P10)

- | | |
|-----------|------------------------------|
| I. 黒色土 | 少量のローム粒と焼土粒・炭化物粒・山砂・粘土を若干含む。 |
| II. 暗褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| III. 黄褐色土 | ローム塊・ローム粒多く含む。 |



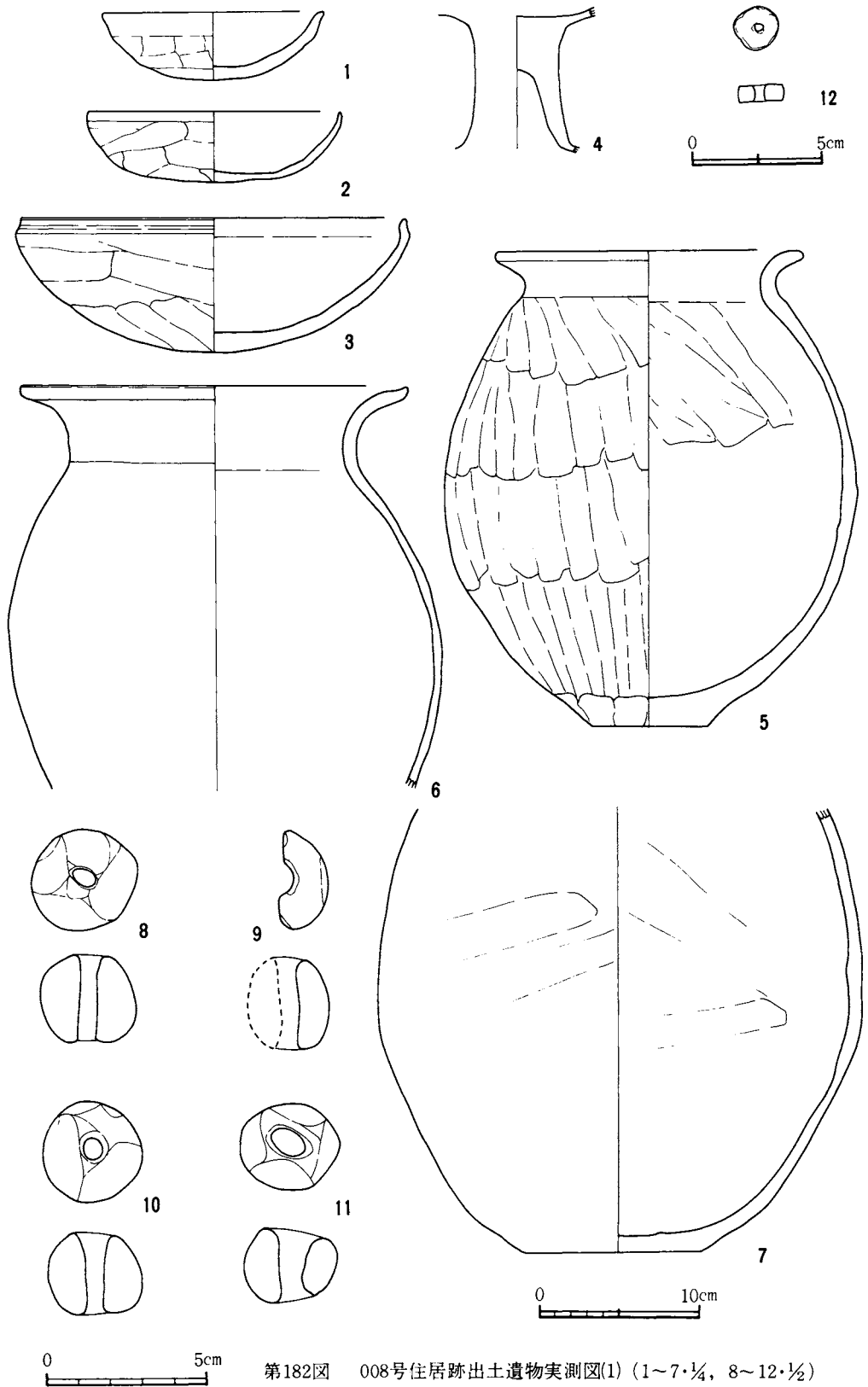
第180図 008号住居跡床面再精査時検出遺構実測図 (1/80)



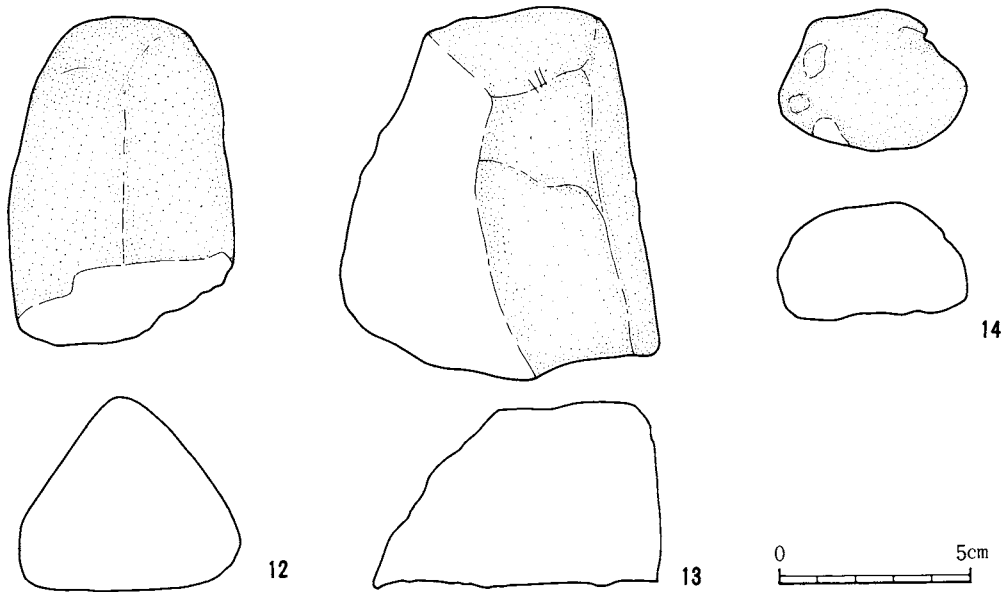
008号住居跡カマド土層説明

- | | |
|---------|-------------------------|
| 1. 赤褐色土 | 山砂・焼土粒を含む。 |
| 2. 灰褐色土 | 焼土を多く含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 灰白色の山砂塊を含む。焼土粒を若干含む。 |
| 4. 黒褐色土 | 黒色土多い。灰・焼土粒を多く含む。 |
| 5. 暗赤褐色 | 焼土粒を多く含む。 |
| 6. 黒色土 | 焼土粒・ローム粒を若干含む。硬くしまっている。 |
| 7. 灰褐色土 | 山砂・焼土粒を多く含む。 |
| 8. 青灰色土 | 灰を多く含む。炭化物粒・焼土粒は少し含む。 |
| 9. 黄褐色土 | 山砂を多く含む。 |

第181図 008号住居跡カマド実測図 (1/40)



第182图 008号住居跡出土遺物実測図(1) (1~7・¼, 8~12・½)



第183図 008号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

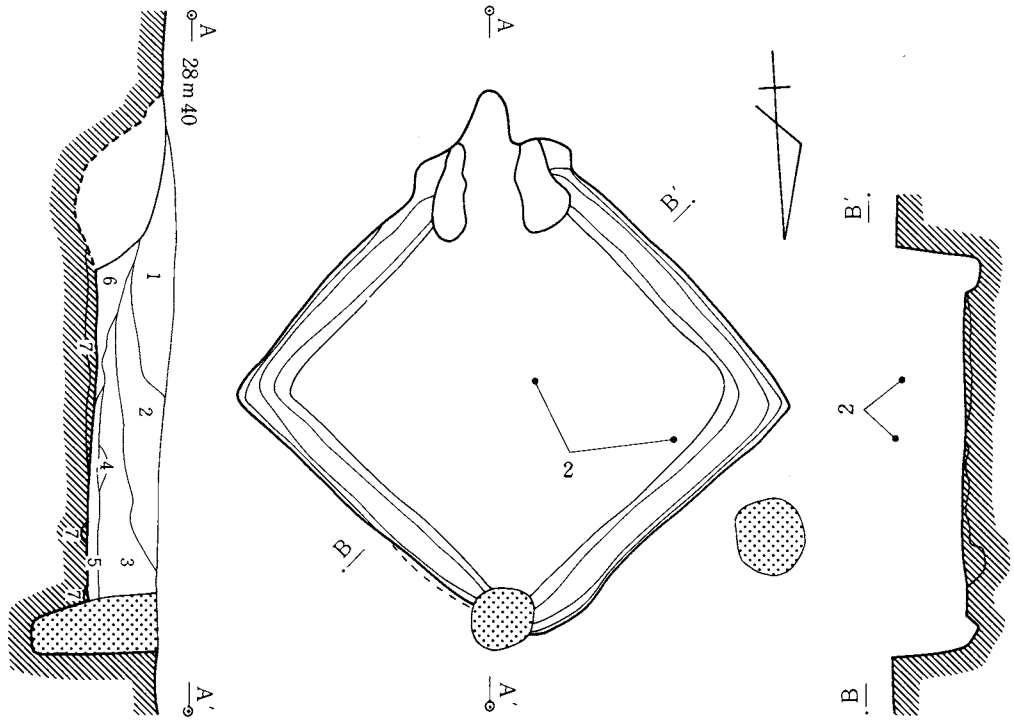
ナデを加える。内外面は磨滅している。胎土は砂質を呈するが良好である。焼成も良好。色調は暗赤褐色を呈する。二次焼成を受けている。6は底部を欠く。輪積痕が観察される。内外面はナデ、口縁部はヨコナデを施している。胎土は良好。焼成も良好。色調は暗黒灰褐色を呈する。カマド内から出土した。8は白玉である。未完成品で、孔は両方向からの穿孔である。土玉は荒い面取りがみられる。

009号住居跡 (第184~186図)

調査区の中央やや東よりの、6 B区から検出調査された。001号掘立柱建物跡と重複し、切られている。カマドを南側コーナーに持つ唯一の住居跡である。カマドはほぼ直南に向かっている。平面形は一辺約2.2m×2.1mを測る。確認面より約80cmの掘り込みである。壁溝はカマド下の部分を除き全周する。幅は平均して40cmに近く、住居の大きさに比べて幅広の感じがする。床は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦に近い。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。なお覆土中にはローム粒・焼土粒や炭化材・山砂などを多く含み、人為的な埋めもどしないしは事故にあった様子がうかがえる。

カマドは南側コーナーに構築されており、住居跡の隅を掘り広げ構築している。掘り込み幅84cm、奥行き48cmを測る。煙道の立ち上がりは緩やかである。

遺物は少なく2点が図化できたのみである。1は坏形土器で、完形品である。外面はヨコヘラ



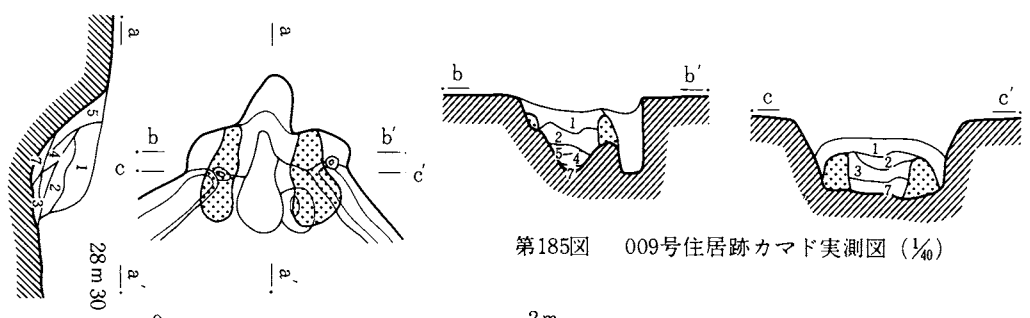
第184図 009号住居跡実測図 (1/40)

009号住居跡土層説明

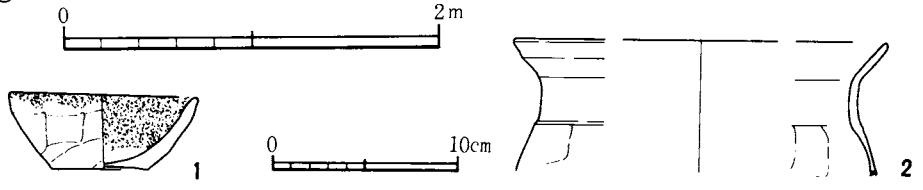
- 1. 黒褐色土 ローム粒・山砂を若干含む。
- 2. 黒褐色土 多量の山砂とローム粒を若干含む。
- 3. 暗褐色土 少量のローム粒と山砂を多く含む。
- 4. 黒褐色土 炭化物・焼土粒を多く含む。
- 5. 暗褐色土 ローム塊と焼土粒・炭化物を少し含む。
- 6. 暗褐色土 山砂を多く含む。
- 7. 暗褐色土 ローム塊を多量に含む。

009号住居跡カマド土層説明

- 1. 黒褐色土 焼土粒・炭化物を若干含む。
- 2. 黒褐色土 炭化物を含む。
- 3. 黒褐色土 山砂・焼土を含む。
- 4. 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 5. 暗褐色土 ローム塊、焼土塊を若干含む。
- 6. 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を若干含む。
- 7. 暗黄褐色土 焼土粒をわずかに含む。



第185図 009号住居跡カマド実測図 (1/40)



第186図 009号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

削りを施す。口縁部はヨコナデを加えている。底部はヘラ削りを加える。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。色調は黒褐色を呈し、内外面にはスス状の付着物がみられる。カマド内から出土した。2は甕形土器で、口縁部の約1/2が残存する。外面はヘラ削り、口縁部はヨコナデを施す。内面には押さえの痕跡が見られる。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。色調は暗黒褐色を呈する。内面と口縁部外面の一部にタール状の付着物が見られる。

010号住居跡（第187～190図）

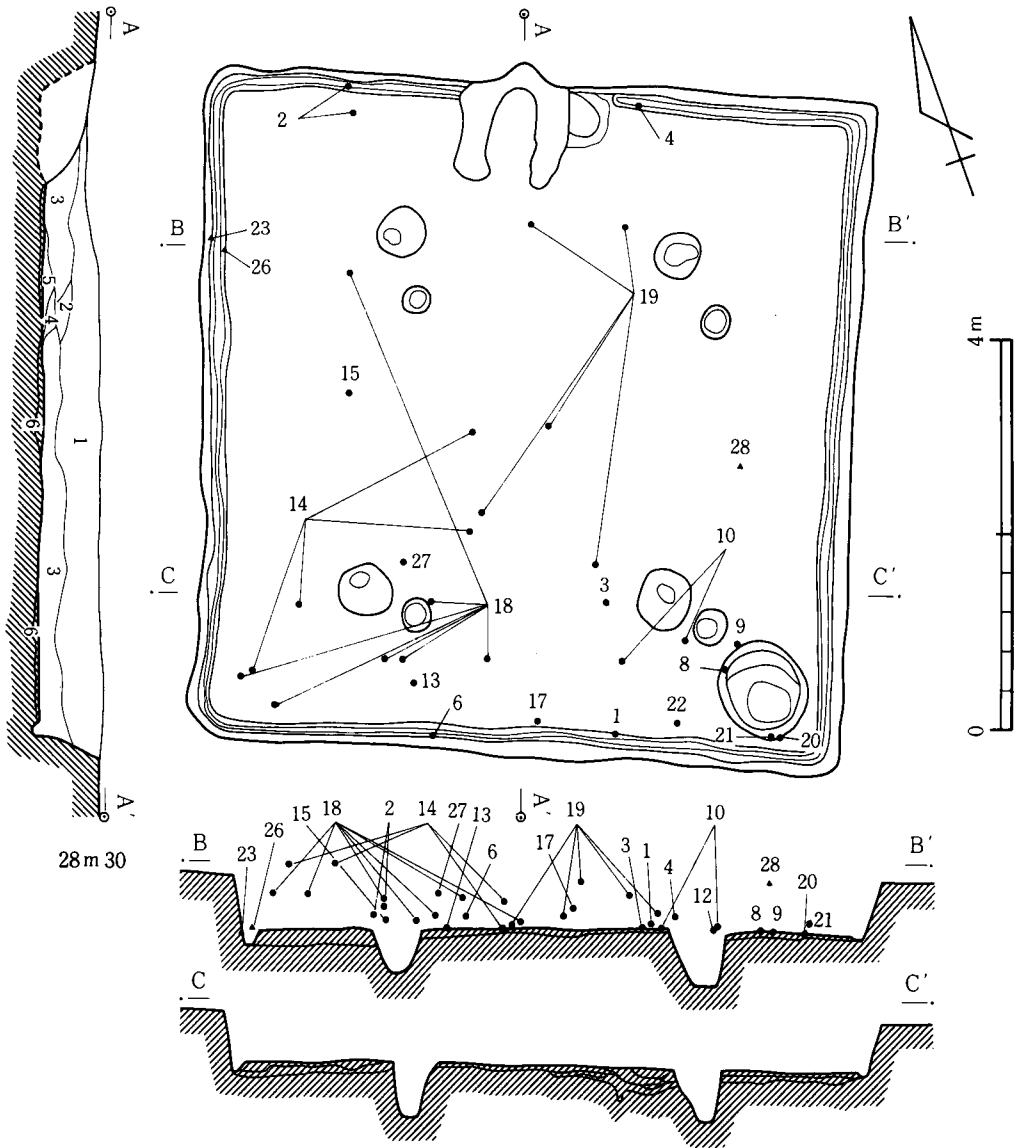
調査区の中央部より東よりの、7B区から検出調査された。001号掘立柱建物跡と011号住居跡の間に位置する。主軸方位はN-20°-Eである。

住居跡は一辺約7mのほぼ正方形を呈している。掘り込みは遺構確認面より約60cm程を測る。壁溝は全周している。幅は18cmから28cm、深さは4cmから10cmを測る。柱穴は8本が検出された。P₁は径50cm、深さ40cm、P₂は径は60cmに近く、深さ50cm、P₃は径50cm、深さ60cm、P₄は径50cm、深さ60cmである。

本住居跡の柱穴はP₁～P₄でP₅～P₈は掘り方の調査時に検出された本住居以前のものに併う柱穴と思われる。P₅～P₈は総てがP₁～P₄の東南約50～80cmの場所に位置している。直径もP₁～P₄よりも細く直径も30cm前後と共通している。掘方の調査によるとカマドの痕跡らしきものも確認でき、P₅～P₈を支柱穴とする住居跡の存在がみとめられる。貯蔵穴は東南の隅から検出された。深さは59cmで円形を呈する。

カマドは北壁の中央に構築されていた。煙道は緩やかに立ち上がる。火床の下に浅い掘り込みがみられる。この掘り込みをカマド火床基部としてカマドを構築している。掘り込み幅55cm、奥行き15cmを測り、壁への掘り込みは浅い。袖は長く、遺存状態は良好である。なお高坏を伏せて支脚として用いていた。

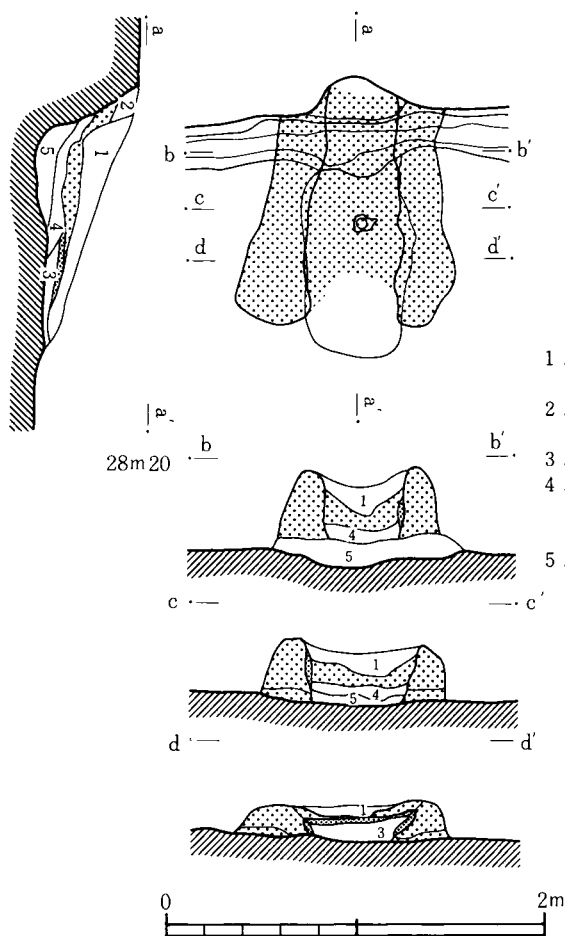
出土遺物としては、土師器の坏・鉢・壺・甑・石製品が出土した。1～7は坏形土器である。1～5は深さが浅く、口縁部の内湾は少ない。1は3/4が残存する。外面はヨコヘラ削り後ヨコヘラミガキを加えている。内面もミガキを丁寧に施す。外面底部を除き赤彩を施している。形は円板状の底部に体部を接合して成形している。色調は暗茶色を呈す。胎土は砂質で石英粒が目立つ。焼成は良好である。2は完形の坏である。内外面共にナデを加える。口縁部にヨコナデを加える。底部はヘラ削りを施している。内外面共に赤彩が施されている。色調は暗赤褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。3はほぼ完形の坏である。外面はヨコヘラ削りの後ナデを施す。口縁部にはヨコナデを加えている。色調は暗赤褐色、胎土は緻密で良好、焼成も良好である。4はほぼ完形の坏形土器である。内外面はヨコヘラ削り後ミガキを施す。外面底部を除き赤彩が認められる。色調は暗赤褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。5は口縁部の約1/2を欠く。外面はヘラ削り後ナデ、内面もナデを施す。色調は暗赤褐色を呈す。胎土



第187図 010号住居跡実測図 (1/60)

010号住居跡土層説明

- | | | |
|----|------|-------------------------|
| 1. | 黒褐色土 | 多量のローム粒と炭化物粒を若干含む。 |
| 2. | 暗褐色土 | 山砂・焼土粒を少しとローム粒を含む。 |
| 3. | 褐色土 | ローム塊を非常に多く含む。ローム粒も多く含む。 |
| 4. | 黒褐色 | 小砂塊を多く含む。 |
| 5. | 暗赤褐色 | 焼土層 |
| 6. | 黒色土 | 山砂・焼土粒を含む。若干粘性を呈す。 |

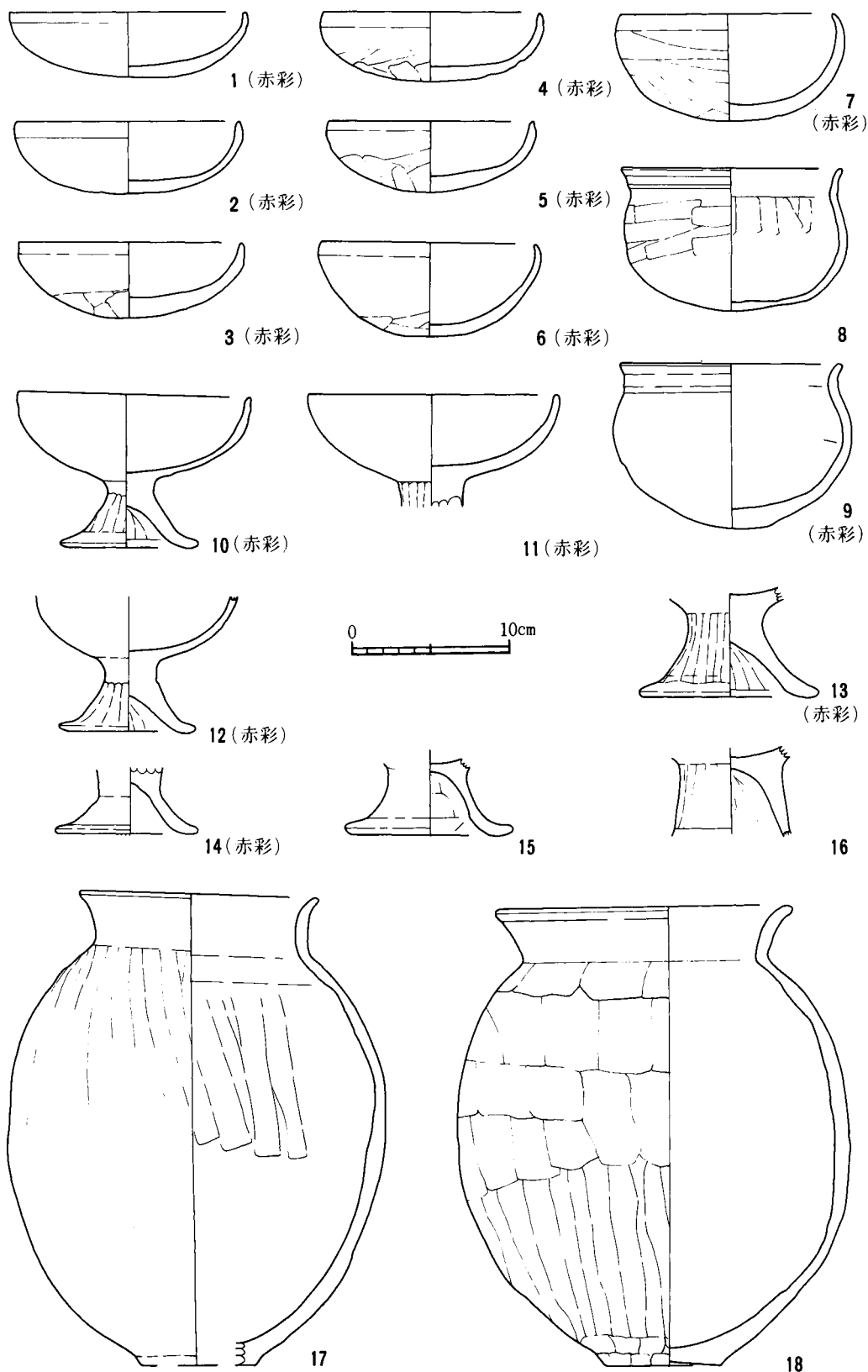


010号住居跡カマド土層説明

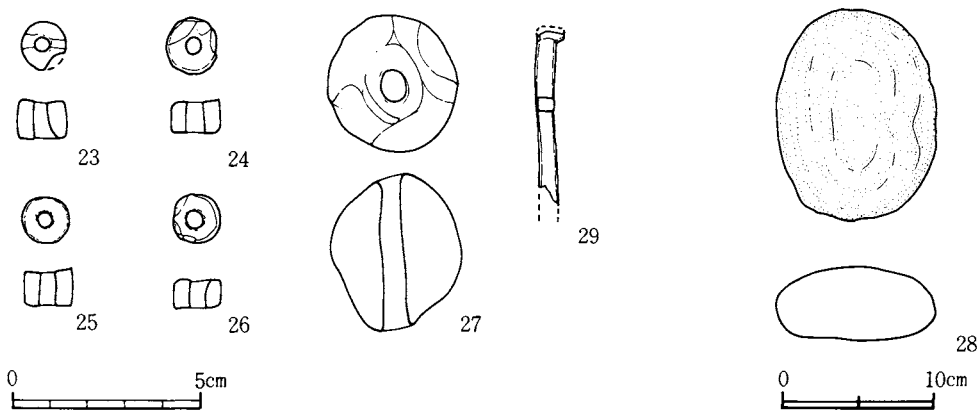
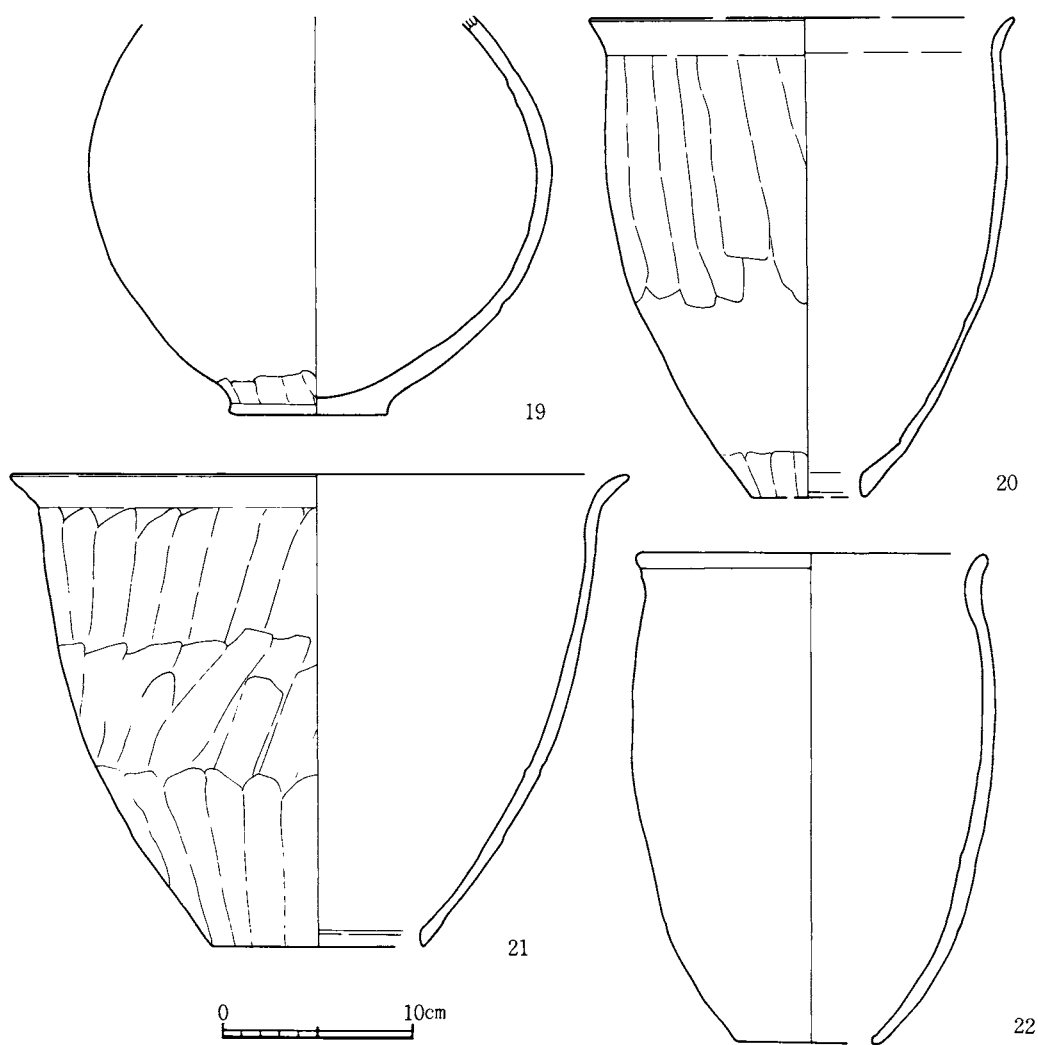
- | | |
|---------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒・焼土・山砂を若干含む。 |
| 2. 黒褐色土 | 山砂を多く含む。粘土は少ない。 |
| 3. 灰褐色土 | 山砂・粘土を含む。 |
| 4. 黒色土 | 焼土粒を多く含み、全体として赤味をおびている。灰も少し混じる。 |
| 5. 黒色土 | ローム粒を若干含む。 |

第188図 010号住居跡カマド実測図 (1/40)

は良好、焼成も良好である。カマド壁内から出土した。外面底部を除き赤彩を施している。6～7は深い形状を呈す。6はほぼ完形の坏形土器である。外面はヨコヘラ削り後ナデ、内面もナデを施す。口縁部にはヨコナデを施している。色調は暗赤褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。外面底部を除き赤彩を施している。7は完形の坏形土器である。外面はヘラ削り後ナデ、内面もナデを施す。口縁部にはヨコナデを施している。色調は暗褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。カマド内から出土した。8～9は小型鉢形土器で、やや偏平の胴部から短く外反する口縁部をもつ。8は口縁部・胴部の一部を欠く。外面はヨコヘラ削り、内面はへら状工具にナデ。口縁部はヨコナデを施す。色調は暗黒褐色を呈する。胎土は良好、焼成も良好である。9はほぼ完形である。外面はヘラ削りの後ミガキを施す。内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。全体に丁寧な作りである。底部は板状の粘土板に体部を接合している。色調は暗赤褐色を呈する。胎土は良好、焼成も良好である。内面の底部を除き赤彩が施されている。10～16は高坏土器である。10はほぼ完形である。外面はナデの後ミガキを施す。内面はへ



第189図 010号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



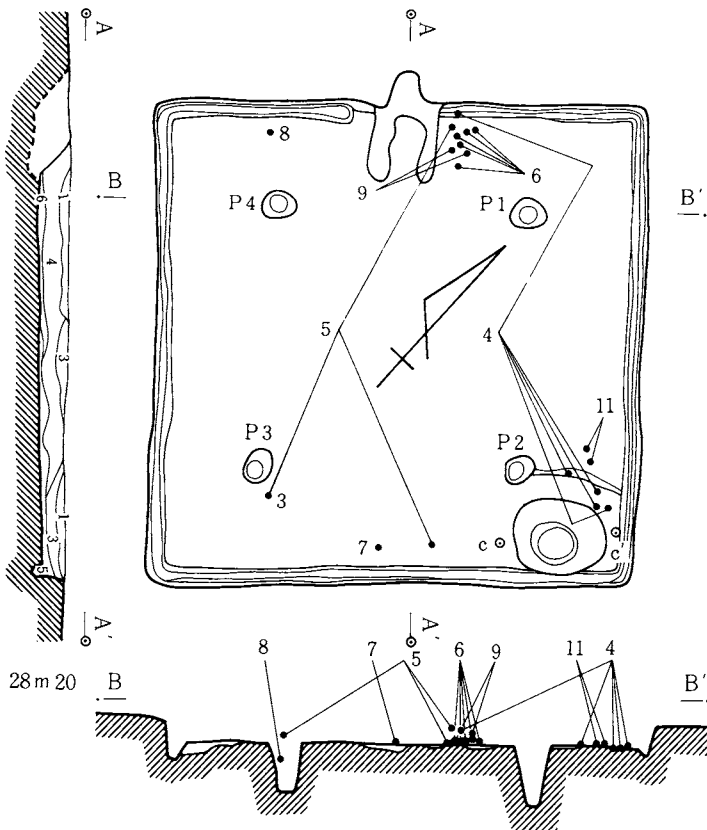
第190图 010号住居跡出土遺物実測図(2) (19~22・ $\frac{1}{4}$, 23~29・ $\frac{1}{2}$, 28・ $\frac{1}{5}$)

ラナデを施した後ミガキを加える。脚部はタテヘラ削り、脚部はヨコナデを施している。色調は暗褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。脚部内面を除き赤彩が施されている。11～12は一部を欠くが、10に類似する成形・調整である。13はやや大形の脚部片である。14は脚部が垂直に近い形状を呈し、脚端部へは直線的に移行する。15はやや大きめの脚部片である。16は坏部、脚端部を欠く。円筒状を呈する脚部である。17～19はやや長胴化の見られる壺形土器である。17はほぼ完形で、外面はヘラ削りの後ナデを施す。内面はヨコヘラ削りを施す。口縁部はヨコナデを施している。色調は黒茶褐色を呈す。胎土は砂質だが良好で、焼成も良好である。18は胴部の一部を欠く。外面はタテヘラ削りの後軽くナデを施す。内面はナデを施す。底部はヘラ削りである。口縁部はヨコナデを施す。色調は暗褐色を呈す。胎土は良好で、焼成も良好である。19は肩以上を欠く。輪積痕を残す。外面はヘラ削りの後全面ナデ。内面はナデを施している。底部周辺はヘラ削りを施す。色調は暗茶褐色を呈す。胎土は緻密で良好、焼成も良好である。カマド内から出土している。20～22は甑である。20は斜め上方へ内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部・底部の一部を欠く。外面はタテヘラ削り、底部周辺もへら削りを施す。内面は全面ナデを施している。色調は暗黒褐色を呈す。胎土は良好、焼成も良好である。21は斜め上方へ大きく開きながら立ち上がる形状を呈す。口縁部も大きく外反する。約1/2が残存する。内面に輪積痕が認められる。外面はタテヘラ削り、内面はナデを施す。口縁部はヨコナデである。色調は暗黄褐色で一部黒色を呈する。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。22はあまり胴の張らない形状を呈し、最大径は胴部上位にある。口縁部は肥厚し、短く外反する。内面に輪積痕が認められる。外面はタテヘラ削りの後全面丁寧なナデを施している。内面はナデを施し、口縁部はヨコナデを施している。色調は暗褐色を呈する。胎土は長石粒を含むが良好である。焼成も良好。23～26は滑石製の白玉である。壁ぎわの周溝上から出土した。

011号住居跡（第191～194図）

調査区の最も東南の8 B・C区から検出調査された。010号住居跡の東南約15mと多少離れた感がある。主軸方位はN-41°-Wである。本住居跡は一辺約5mのほぼ正方形を呈している。遺構検出面より床面までは約30cmほどの掘り込みである。壁溝はカマドの下を除き全周する。幅は16cm～24cm、深さは5cm～8cmを測る。柱穴は4本が検出された。4本の柱は住居跡の対角線上に位置し、その交点を中心とする円周上に位置し、構築に際して計画的な縄張りが伺える。柱穴の直径は共に約40cm前後、 P_1 は深さ63.2cm、 P_2 は46cm、 P_3 は57cm、 P_4 は54cmである。貯蔵穴は東南隅から検出された。平面形はくずれた方形で長径100cm×短径80cm、断面は逆台形を呈し、深さは約50cmを測る。覆土中にはローム粒・炭化物粒を含んでいる。

カマドは北壁の中央部に構築されていた。煙道は緩やかに立ち上がる。カマドの袖の下のロー

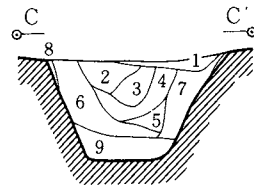


011号住居跡土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。
2. 黒褐色土 焼土粒を非常に多く含む。炭化物を若干含む。
3. 黒褐色土 ローム塊・炭化物を含む。
4. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。炭化物粒を若干含む。
5. 黒褐色土 焼土粒・炭化物を含む。ローム塊・ローム粒・焼土を含む。炭化物が非常に多く含まれる。
6. 暗褐色土 ローム粒を主に、炭化物・焼土粒を含む。
7. 黒褐色土 褐色土粒による。褐色土粒を多く含む。
8. 暗黄褐色土
9. 褐色土



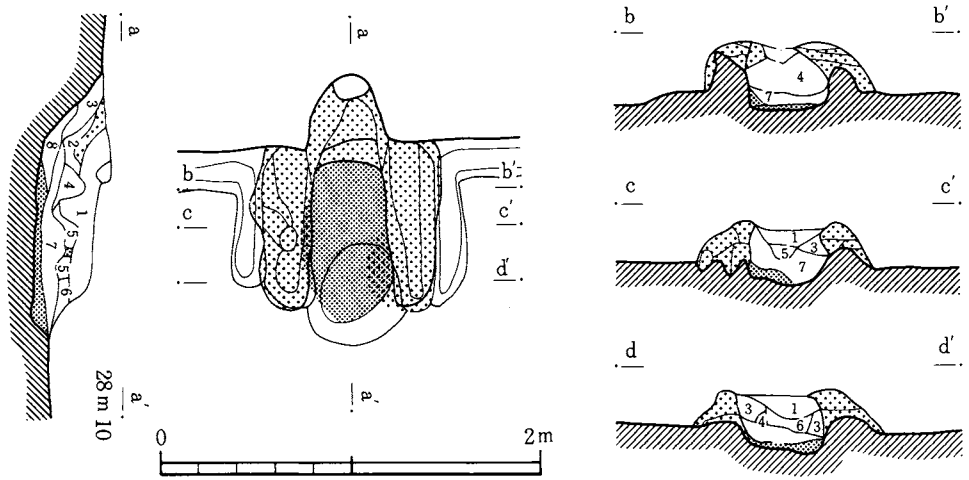
第191図 011号住居跡実測図
・炭化材出土状況 (1/60)



第192図 011号住居跡内
貯蔵穴断面実測図 (1/40)

011号住居跡貯蔵穴土層説明

1. 黒褐色土 ロームブロックを少量、炭化物を若干含む。しまりなし。
2. 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒を多く含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックは含むが、ローム粒は少ない。硬くしまつており、ブロック状に存在する。
4. 黒褐色土 微量の褐色土粒を含む。全体に粒子が密である。
5. 黒褐色土 少量の焼土粒を含む。
6. 黒褐色土 4層に類似し、炭化物を少量含む。
7. 暗黒褐色土 褐色土粒を若干含む。しまりなし。
8. 暗黄褐色 粘土・山砂による。
9. 暗褐色土 若干の粘性を呈す。土器片を含む。



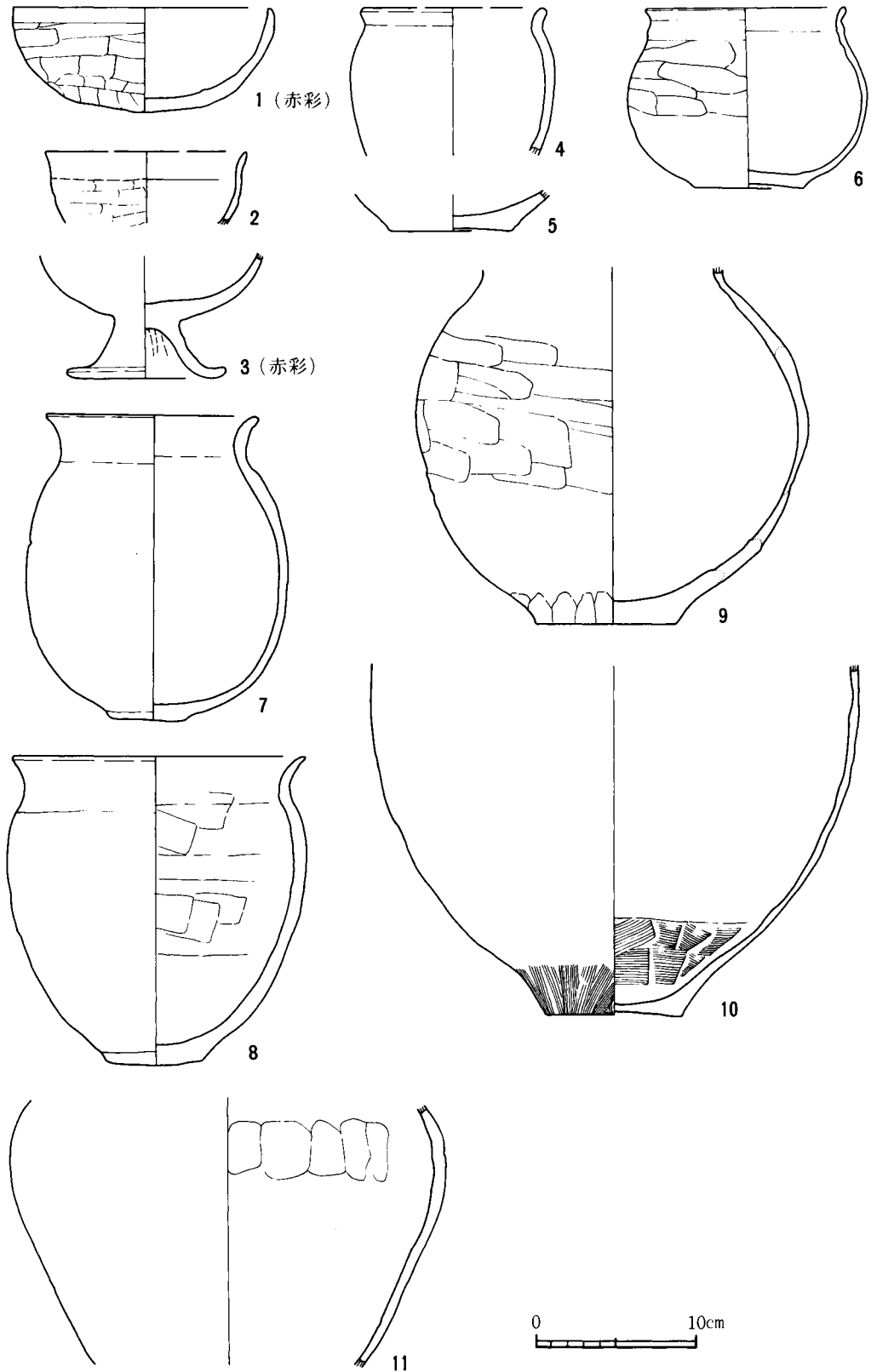
第193図 011号住居跡カマド実測図 (1/40)

011号住居跡カマド土層説明

- | | |
|--|--|
| <p>1. 暗褐色土 若干の砂と焼土粒・炭化物を含む。</p> <p>2. 暗褐色土 焼土を若干含む。褐色土粒・カーボンは少量。</p> <p>3. 暗赤褐色土 焼土ブロック・ロームブロックを多く含む。</p> <p>4. 暗赤褐色土 2層に近いが、焼土粒を多く含む。</p> | <p>5. 暗赤褐色土 焼土ブロックと焼土粒を多く含む。</p> <p>6. 暗赤褐色土 4層に近いが、焼土のブロック状を呈す。</p> <p>7. 暗褐色土 焼土粒を若干含む。</p> <p>8. 暗褐色土 カマド砂及びロームをまぜた土。</p> |
|--|--|

ムを掘り残して構築している。掘り込み幅43cm，奥行き35cmを測る。壁への掘り込みは深い。カマド袖部の遺存状態は良好である。本住居跡の覆土中からは多量の炭化物・焼土が検出され床面上からは上屋の構築材が炭化した状況で検出された。また床面中央部の支柱穴に囲まれた部分は焼けて堅くなっていた。

出土遺物は11点が図化できた。土師器の坏・高坏・壺・甕形土器である。1は大形の坏ではほぼ完形である。外面はヨコヘラ削りの後内外面共にナデを施す。色調は暗褐色を呈す。胎土は緻密で良好，焼成も良好である。カマド内から出土した。2は小型の坏である。底部と体部の1/2を欠く。外面はヨコヘラ削りを施す。内面はナデ，口縁部はヨコナデを施している。色調は暗黒褐色を呈す。胎土は砂質だが良好，焼成も良好。3は坏部の一部を欠く高坏である。内外面共にナデを施す。脚部内面は指頭ヨコナデを施している。脚部内面を除き赤彩が施されている。4は胴部以下を欠く広口甕である。内外面共にナデを施す。色調は暗褐色を呈する。胎土は良好，焼成も良好。カマド内から出土した。5は甕の底部片である。内外面共にナデを加える。色調は暗黒褐色を呈する。胎土は砂質を呈するが良好，焼成も良好である。6は胴部の一部を欠く広口甕である。内面に紐積痕を残す。外面はヨコヘラ削り，下半はナデを施す。内面はナデ，口縁部もヨコナデを施している。色調は暗灰褐色を呈する。胎土は良好，焼成も良好である。7は小型甕ではほぼ完形土器である。内面に紐積痕が見られる。外面はヘラ削り，胴下半は

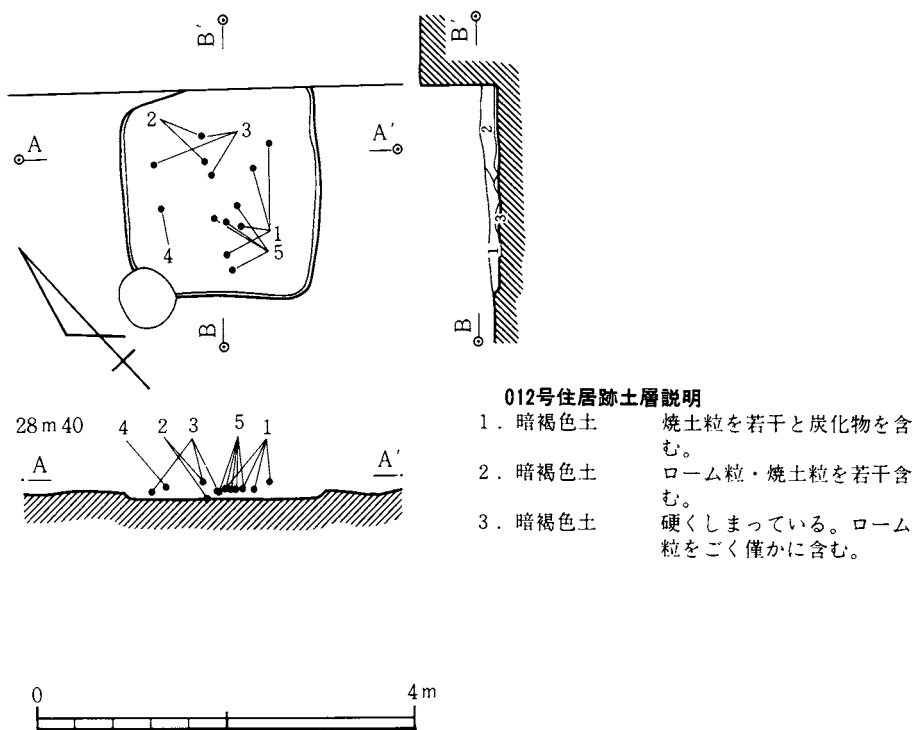


第194図 011号住居跡出土遺物実測図(1/4)

ナデを施す。内面はヨコヘラナデを加える。色調は明褐色を呈する。胎土は良好、焼成も良好である。8は4/5が残存する小型甕である。内面に紐積痕が認められる。内外面共にナデ。色調は暗茶褐色を呈する。胎土は石英粒を含むが良好、焼成も良好である。二次焼成を受けている。9は口縁部を欠く甕である。内面に紐積痕が見られる。胴部はヨコヘラ削り、底部、内面もナデを施している。色調は暗茶褐色で一部黒色が呈する。胎土は良好、焼成も良好である。二次焼成を受けている。10は胴以上を欠く甕である。内外面共にナデを施す。底部周辺はハケメを残す。底部に木葉痕がある。色調は明灰褐色を呈す。胎土は白色砂粒を多量に含む。焼成も良好である。カマド内から出土した。11は口縁・底部を欠く甕になろうか。内面に紐積痕が認められる。外面はへら削りの後ナデを施している。内面上部には押さえが見られる。色調は暗黒褐色を呈する。胎土は良好、焼成も良好である。カマド内から出土した。

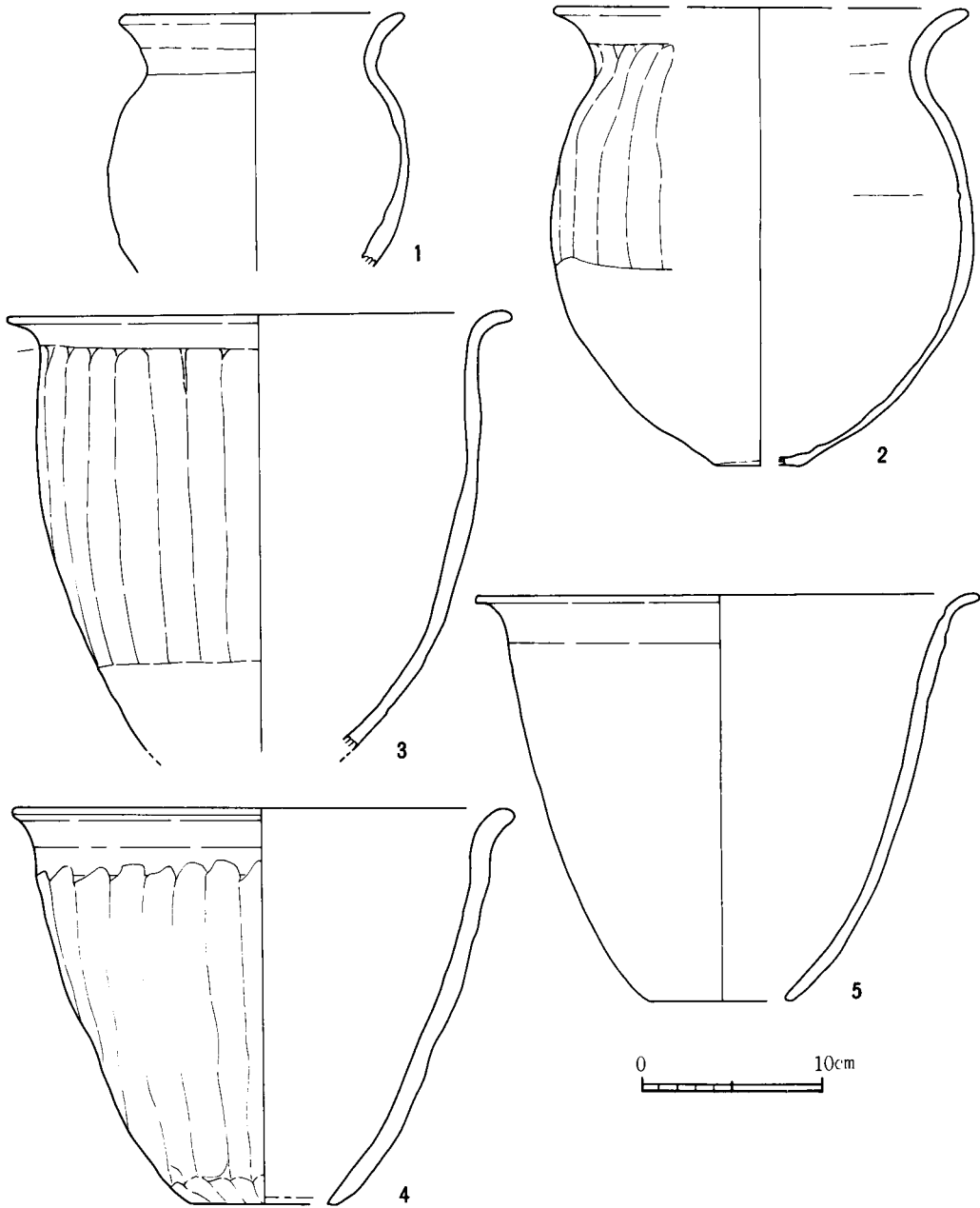
012号住居跡 (第195・196図)

調査区の中央部の6B区から検出調査された。002号掘立柱建物跡のすぐわきに位置し、北東の一部は調査区外にある。西側コーナーは002号掘立柱建物跡の柱穴によって切られている。主軸方位はN-45°-Eである。遺構検出面からの掘り込みは20cmほどと浅い。住居跡の一辺は約2mの方形を呈する。壁溝は検出されなかった。柱穴及びカマドないしは炉も検出されなかった。



第195図 012号住居跡実測図 (1/80)

遺物は5点が図化出来た。1は底部を欠く甕である。内外面共に摩滅が激しい。口縁部には紐積痕がみられ、ヨコナデを施している。色調は明赤褐色を呈する。胎土は良好、焼成も良好である。二次焼成を受けている。2は1/2が残存する甕である。内面に紐積痕が見られる。



第196図 012号住居跡出土遺物実測図(1/4)

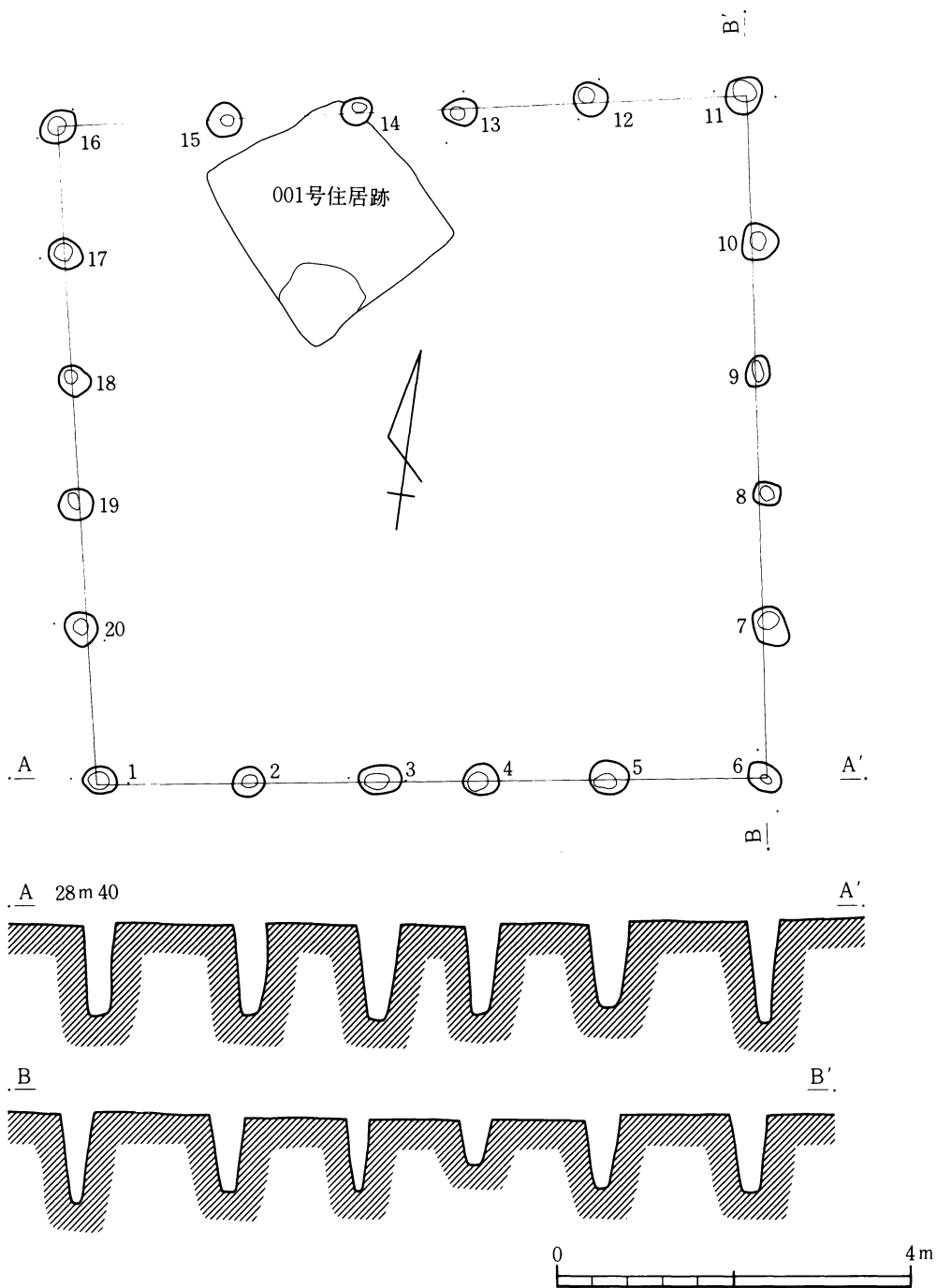
外面はヘラ削りの後ナデを施す。色調は暗茶褐色を呈す。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。3は底部を欠く瓶形土器である。紐積痕が見られる。外面はタテヘラ削り、口縁部・底部はヨコナデを施す。色調は暗褐色を呈する。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。4は胴部の一部を欠く甔形土器である。外面はタテヘラ削りを、内面はヨコナデを施している。色調は明茶褐色を呈す。胎土は緻密で良好、焼成も良好である。5は口縁部の一部を欠く甔形土器である。外面はタテヘラ削りの後ナデ、内面はタテヘラナデの後ミガキを施している。色調は暗茶褐色を呈す。胎土は砂質だが良好、焼成も良好である。 (相京・池田)

第2節 掘立柱建物跡と遺物

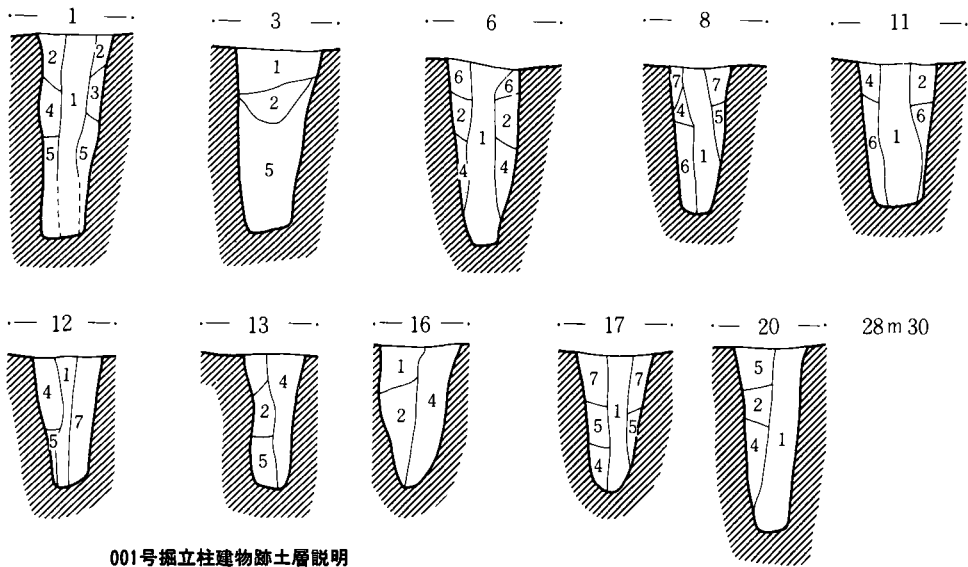
001号掘立柱建物跡 (第197・198図)

検出位置 調査区のほぼ中央部6B区から検出調査された。009号住居跡と重複している。瓦塔屋根の破片の分布範囲と重なり、遺構の検出は早い段階でされた。柱穴以外の遺構の検出はされなかった。柱穴の軸方位はN-80°-Eである。柱掘り形の覆土はP₃の様に抜き取った状態のものも見られるが、ほとんどの柱掘り形覆土から柱痕と思われる土層が検出された。柱掘り形の覆土は黒色土を主体として全体にローム粒を含んでいる。

平面形 一辺が5間×5間でほぼ方形を呈している。掘り方平面は円形を呈し、直径約40cm前後と一定していない。深さも0.7-1mと一定していない。隅の柱痕は深く逆に中央のものは浅い状況が見られる。009号住居跡によってP₁₄が切られており、本跡が廃棄された後に集落が営まれたことがわかる。一片が5間×5間の大きさであり、尚且つ中央部からの柱痕の検出がされないの、建物跡とするよう柵列状の建物跡と考えたほうがよいと思われる。遺物の出土はなかった。

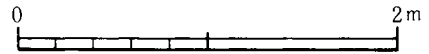


第197图 001号掘立柱建物跡实测图 (1/80)



001号掘立柱建物跡土層説明

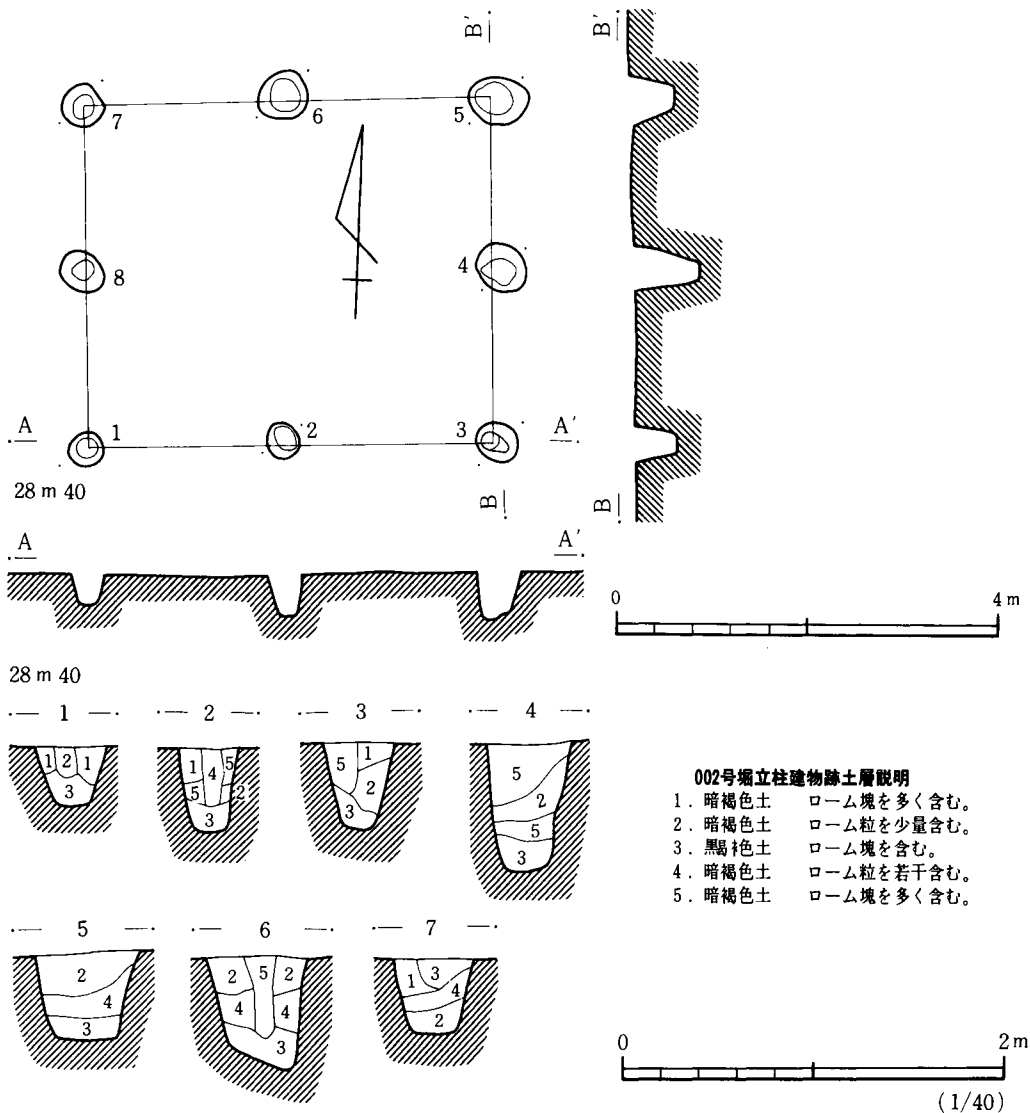
- | | |
|----------|----------------|
| 1. 黒色土 | ローム粒がやや多い。 |
| 2. 暗色土 | ローム粒を若干含む。 |
| 3. 暗黄褐色土 | ローム塊・ローム粒が多い。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒・黒色土粒を含む。 |
| 5. 黒褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 6. 黒色土 | 褐色土塊を多く含む。 |
| 7. 暗褐色土 | ローム塊・ローム粒多く含む。 |



第198図 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面図 (1/40)

002号掘立柱建物跡 (第199図)

調査区の中央部5 B・6 B区にかけて検出調査された。006・012号住居跡の間に位置している。001号掘立柱建物跡の北側に位置し、約10m離れている。主軸方位はN-86°-Eである。平行形一辺が2間×2間で、多少横に長い形状を呈する。柱掘り形は円形で、直径約30~40cmと一定していない。深さは30~60cmとばらつきが見られる。柱痕は認められるものもあるが、細くて浅い。001号掘立柱建物跡と同様に建物としてよりも、柵列状の建物跡として考えたほうがよいと思われる。遺物の出土はなかった。(相京・池田)



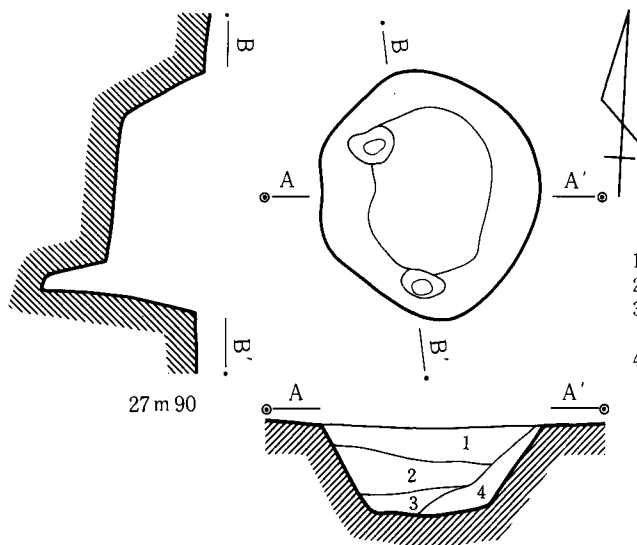
第199図 002号掘立柱建物跡実測図 (1/40)

第3節 その他の遺構と遺物

土壌

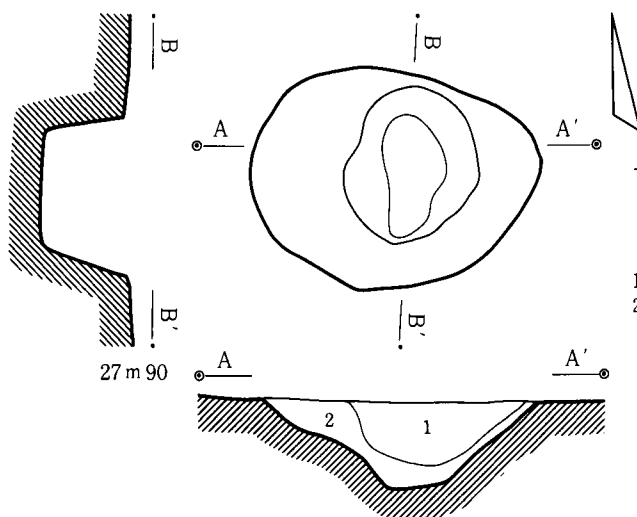
001号土壌

8 B区から検出調査された。平面形は1.15m×1.35mでほぼ円形を呈し、断面は逆台形を呈する。確認面より約45cmの掘り込みである。床面はほぼ平らで、壁は床面から直線的に立ち上がる。壁の立ち上がりぎわに、柱状のピットが2本検出された。覆土は、ローム粒を多く含んでいる。堆積状況は自然の流れ込みをしている。覆土からの遺物の出土はなかった。



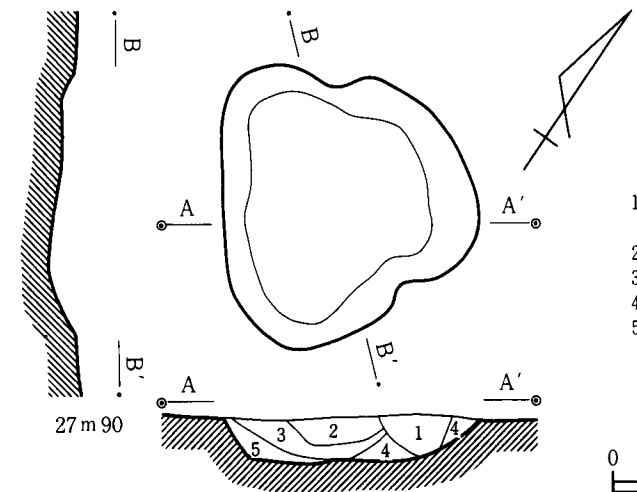
001号土壌土層説明

- | | |
|----------|------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒・褐色土塊を含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒・黒色土塊を含む。 |
| 3. 暗黄褐色土 | ローム粒・ローム塊(小)を含む。 |
| 4. 黄色土 | ローム粒・ローム塊のみ。 |



002号土壌土層説明

- | | |
|--------|---------------------|
| 1. 黒色土 | 褐色土塊を多く含む。 |
| 2. 黒色土 | ローム粒を若干含む。硬くしまっている。 |



003号土壌土層説明

- | | |
|---------|------------------|
| 1. 黒色土 | 暗褐色土粒を含み、しまりはない。 |
| 2. 黒色土 | ロームを少し含む。 |
| 3. 暗黄色土 | ロームを多く含む。 |
| 4. 暗褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 5. 暗褐色土 | ローム粒・黒色土塊を少し含む。 |



第200図 001・002・003号土壌実測図(1/40)

002号土壇

8 B区から検出調査された。平面形は1.5m×1.1mで卵形に近い形を呈する。床面までは約45cmを計る。短軸の断面は台形を呈し、長軸の断面は中央に向かって深くなる形状を呈す。土壇はほとんどが、褐色粒を多く含む黒色土である。覆土からの遺物の出土はなかった。

003号土壇

6 B区から検出調査された。平面形は1.35m×1.45mである。床面までは検出面より25cmを測る。土壇の覆土はローム粒を全体に含んでいる。床面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土からの遺物の出土はなかった。(相京)

第4節 先土器時代の遺物

出土石器

ここでは本遺跡より出土した先土器時代の石器を中心に出土したグリッドごとにまとめて報告する。以下に示す数字は順に最大長、最大幅、厚さを表し単位はミリメートルである、()は現存値を示す。

5 B, 7 B, グリッド出土石器 (第201図)

3は砂岩質の一部に原面を残す剥片である。

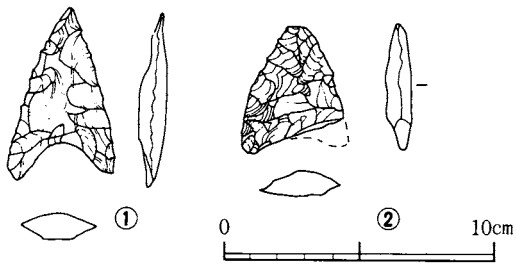
48.6, 43.5, 8.5を測り、ソフトローム層より出土。4はチャートの剥片で、44.3, 20.7, 36.6を測るソフトローム層に続く層より出土したが詳細は不明。8は安山岩の(60.95), 23.3, 9.8を測る両面調整尖頭器である。調整は中央に向って深く浅く加えられ鋭い刃部を作りだしている。基部が若干欠損している。以上は5 Bグリッドより出土した遺物である。

5は砂岩の尖頭器である。40.6, 23.5, 7.7を測る。尖端部を両面両縁に調整を加え、鋭くしているのが、その他の部分は片面調整のみである。出土層はソフトローム。6は砂岩の16.7, 24.9, 4.5を計る横形剥離片である。7は安山岩の(49.3), 15.6, 1.0を測る基部調整尖頭器である。8に比べ剥離も小さく浅いものが多く、片面のみの調整により刃部を作っている。尖端部がわずかに欠損している。以上3点は7 Bグリッドより出土している。

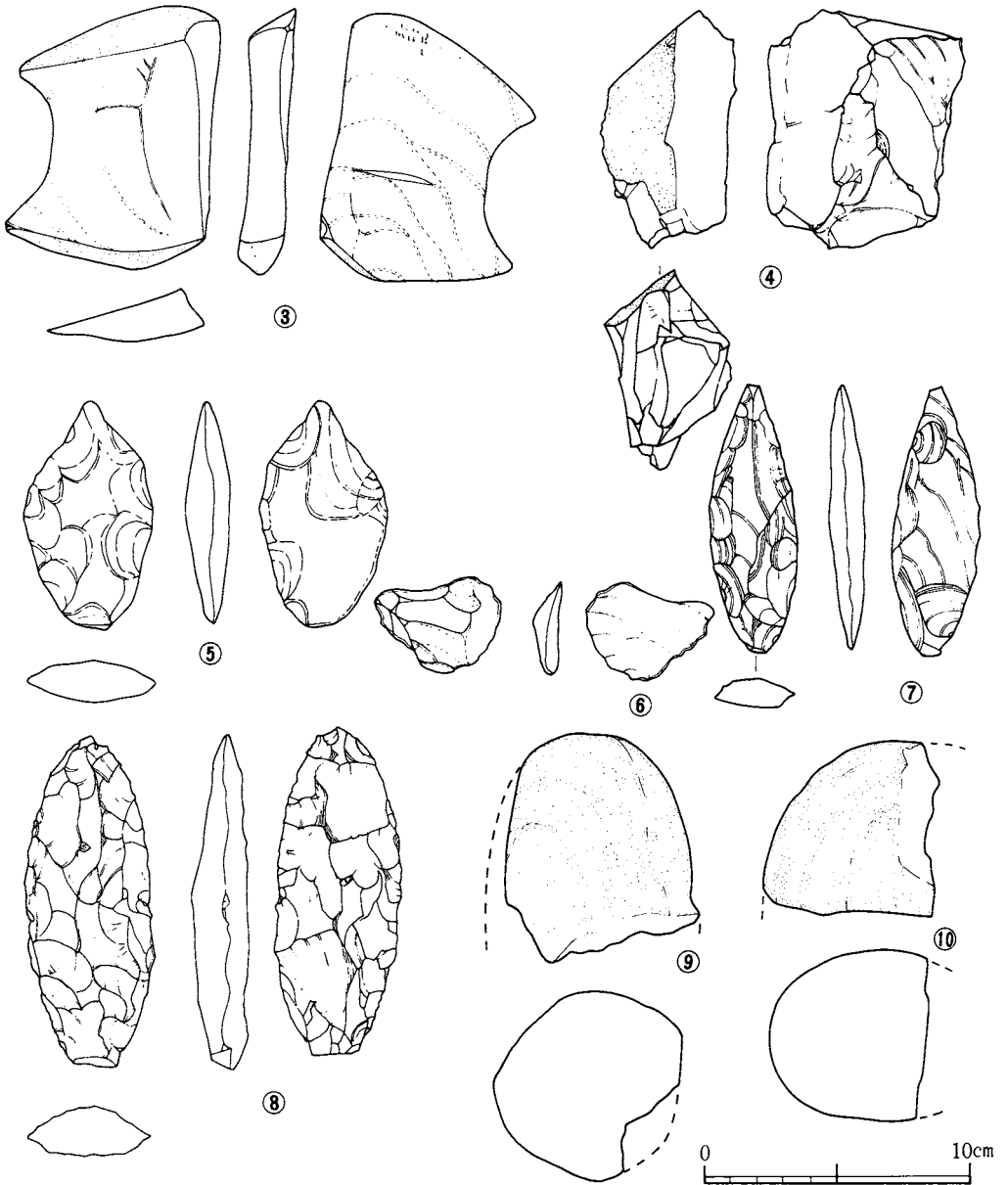
9・10回はいずれも礫片である。9は花崗岩の礫を利用した磨石の破片で、側面に使用痕が認められる。

9 Bグリッド出土石器 (第202図)

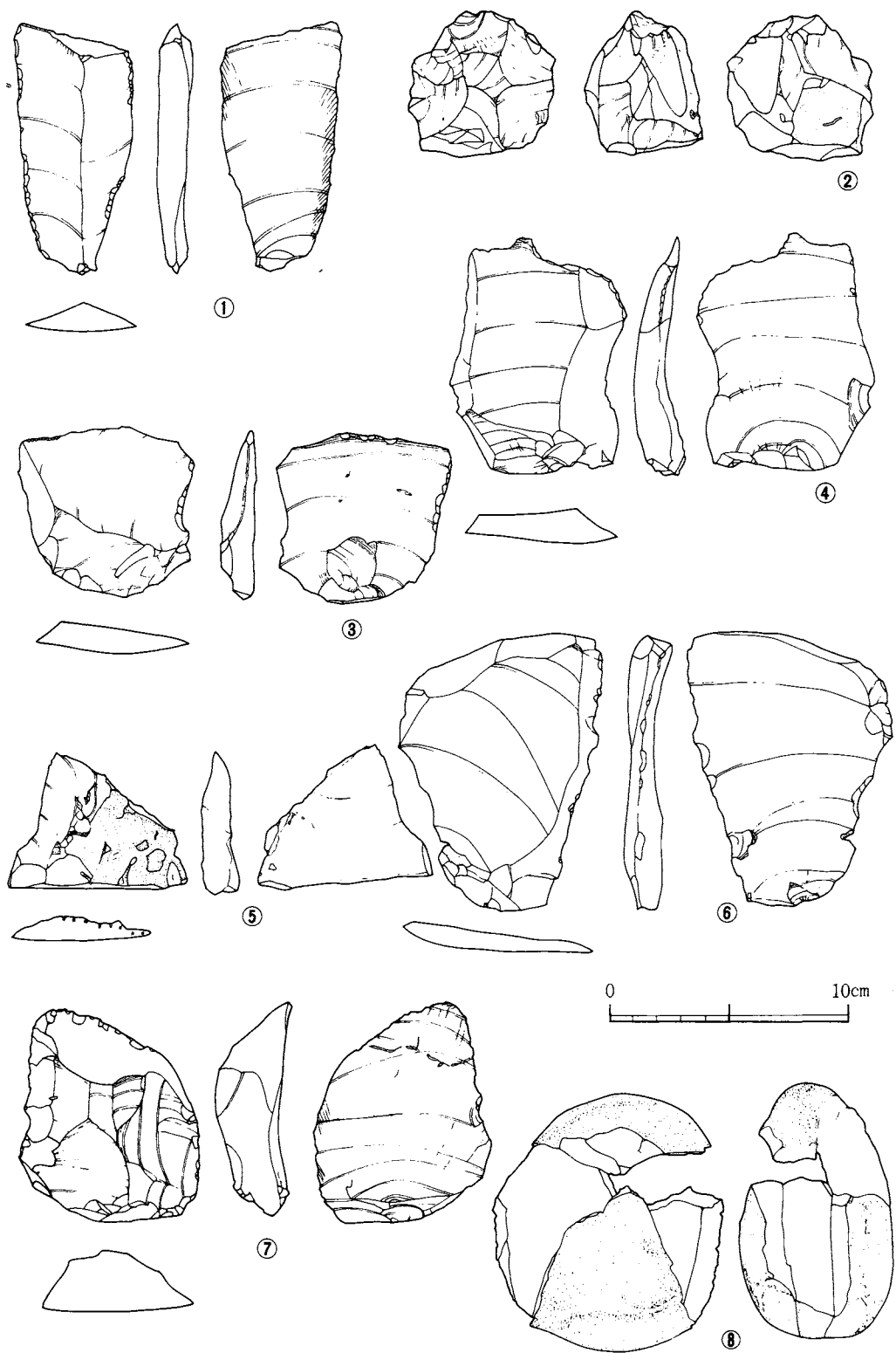
1は珪質頁岩の直刃削と考えられる。剥離打面は欠損している。52.7, 24.8, 6.6, の石刃状剥片を利用したもので、左側縁に調整が加えられている。出土層はソフトローム中。2は珪



表面採取石器



第201図 5B・7Bその他のグリッド出土石器実測図



第202図 9Bグリッド出土石器実測図

質頁岩の一部に原面を残す剥片（広義）である。30.8, 33.5, の球に近い形状を示すが、側縁に刃部を作るように鋭角に打撃を加えており一周はしないものの円形搔器ともかんがえられる。出土層はソフトローム中。3は珪質頁岩の剥片である。34.6, 40.4, 7.3を測る、一部に調整が加わっているが、はっきりと刃部を作っていない。4は珪質頁岩の43.9, 38.5, 10.2を計る剥片である。しかし右角より先にかけて調整が加えられ、刃部が作られており、搔器の製作途中のものであると考える。剝離面打面は平面打面である。5は珪質頁岩の剥片である。両端は欠損し、中央付近のみ出土した。27.6, 31.8, 7.7を測る。6は珪質頁岩の石刃状剥片である。右側縁の両面に鋸歯状の調整がみられるが、打撃には統一性がなく自然に剝離した可能性が十分に考えられる。57.5, 43.6, 7.3を測る。7は珪質頁岩の剥片を利用して表面左側縁に剝離軸に平行に刃部を持つ削器である。44.4, 37.8, 9.5を測る。剝離面打面は点状打面である。8はチャートの礫片で5片の接合資料である。石器として使用された痕跡は認められない。

以上9 Bグリッド出土の石器について報告したが、1と2は立川ローム（ソフトローム）層からの出土である。その他はソフトロームの上面に接する層（黒色）よりの出土である。本グリッドは調査区東端の台地斜面に位置している。立川ローム層を含めた土層は台地中央部のそれと異なり変化が大きい。また1から7までの石質をも考慮に入れて考えてみると、いずれも先土器の時代の所産と考えてもよいであろう。 (高橋)

その他の石器 (第201図)

1は安山岩の石鏃で31.7, 18.8, 4.7,を計る。2は黒曜石の石鏃で(23.7), (18.8), 4.6を測る。脚の一方が欠損している。いずれも表面採取によって得られたものであるが、縄文時代の所産と考えてよい。

用語解説

表面 剥片の主剝離面（裏面）の反対側の面である。（図では左端の示す面）

裏面 剥片の主剝離面である。その面には、ポジティブ、バルブをとどめる。

先端部 剥片の一端で、打撃点（打面）の他端を意味する。

基端部 剥片の一端で、打撃点（打面）を有する部位である。

縁部 剥片の表面と裏面とが交わる部位。

打面の分類

○原面打面 広い範囲に石材の表皮をとどめる打面。

○剝離面打面 1回の剝離で作られた、平坦な剝離面からなる打面。

○多面調整打面 3枚以上の剝離面からなる打面。

○点状打面 非常に小さな打面である。間接打撃法や押圧剝離法では、ふつう点状打面を持つ剥片が生じる。

剝片（広義） 打撃により得られたすべての破片。

剝片（狭義） 剝片の最大長が最大幅の長さの2倍をこえないもの。

計測値

○最大長 剝片，剝片石器では打撃点とその最遠端との直線距離である。

○最大幅 最大長と直交する最大長である。

○厚さ ポジティブ・バルブを除く部位で計測された，標本（剝片等）の主平面直交する最大長である。

住居跡出土の石製品（第159・165・183・190図）

001・003・008・010号住居跡から，8点の石製品が出土した。159図の6は001号住居跡から出土した。約1/4が残存し，磨石と思われる。表面は割れ口を除き摩滅している。165図の10～12は003号住居跡から出土した。10は両端を欠いており，全形は不明である。叩石の破片と思われる。11は磨石で，完形品である。やや偏平であるが，全面に使用痕が見られる。12は砥石である。表面は使用によって凹凸が激しい。183図の12～14は008号住居跡から出土した。12は砥石である。自然面を砥石面としている。鉄製品によると思われる擦痕が認められる。13は磨石である。割れ口を除き磨面となっている。14は浮石と思われる。完形品である。190図の28は010号住居跡から出土した磨石で，完形品である。叩石の可能性も考えられる。

表彩遺物（第203図）

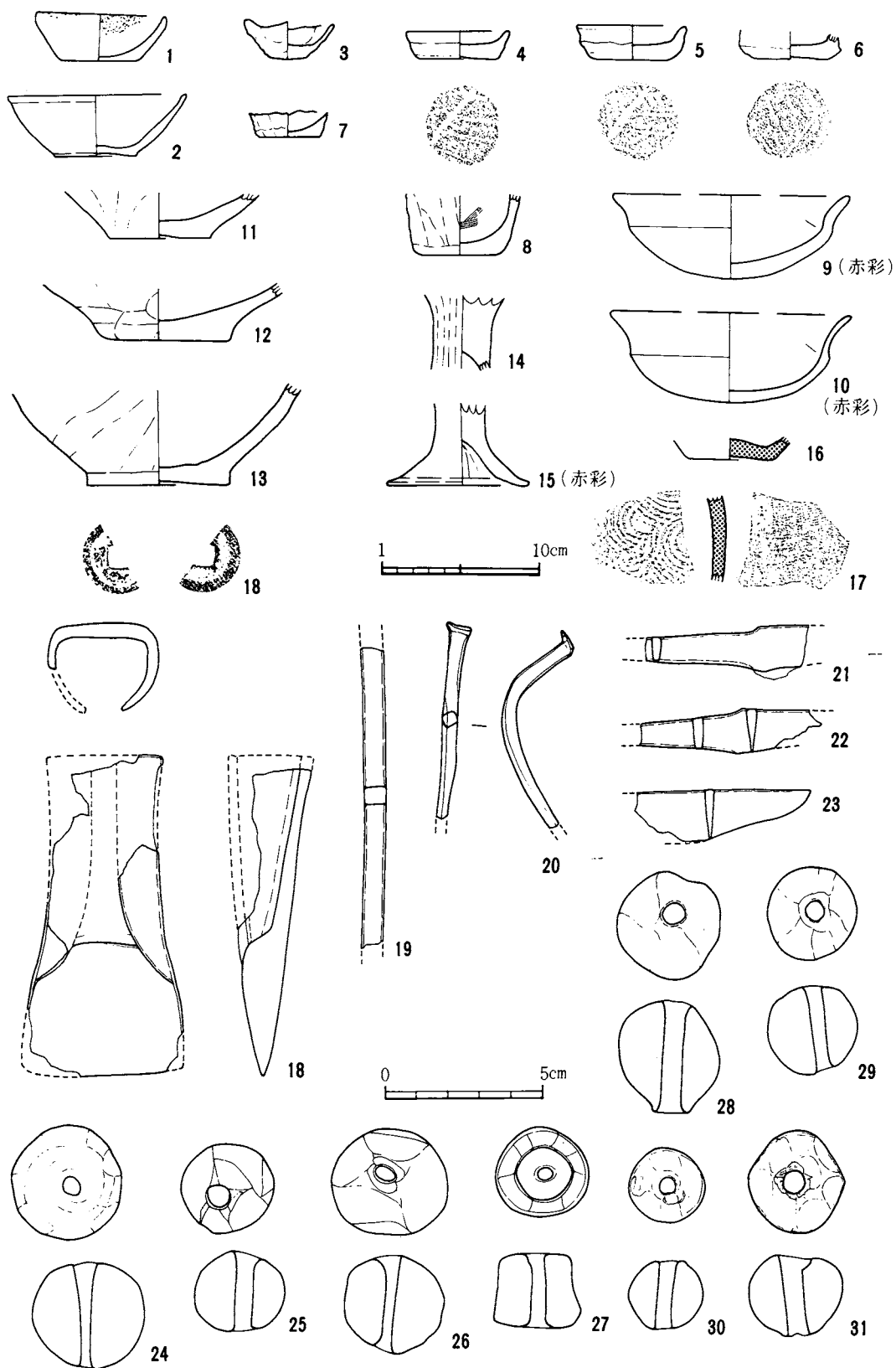
土師器（1～16）1・2は平底を呈し底部は回転糸切りされる。1は内面に煤が付着する。3～7は手づくね土器。4～6は底部に木葉痕を有し，器高のない土器である。9・10は口縁部を体部の間に稜を有し，それより大きく外反する様であり，内外面赤彩される。11～13は甕の底部。14・15は高坏の脚部で，15は外面と内面端とが赤彩される。16は小型の須恵器甕底部となろう。17は須恵器甕胴部片で内面は青海波文となる。

銅銭（18）1/2程が残存する。銘文等は不明である。

鉄製品（18～23）18は鉄製斧で全長9.7cm，刃幅5.0cmを測る。刃部より徐々に幅を狭め柄装着部は有袋となり，両側より折返され，内彎ぎみとなる。刃部は断面はV字型となり，刀身を厚くつくっている。19は鉄鏃の筥被部分となろうか。厚味があるため他の種類とも考えられる。20は鉄釘である。頭はL字状に折返される。21～23は鉄製刀子。23は刀部が研ぎ減りしている。

土製丸玉（24～31）不整の円形を呈し大きさは，3.5～2.5cm程を測る。外面はヘラ削りされるが，半円を二片組み合せ作製したものと考えられる。

（池田）



第203图 表採出土遺物実測図 (1~16・¼, 17~31・½)

第2章 小 結

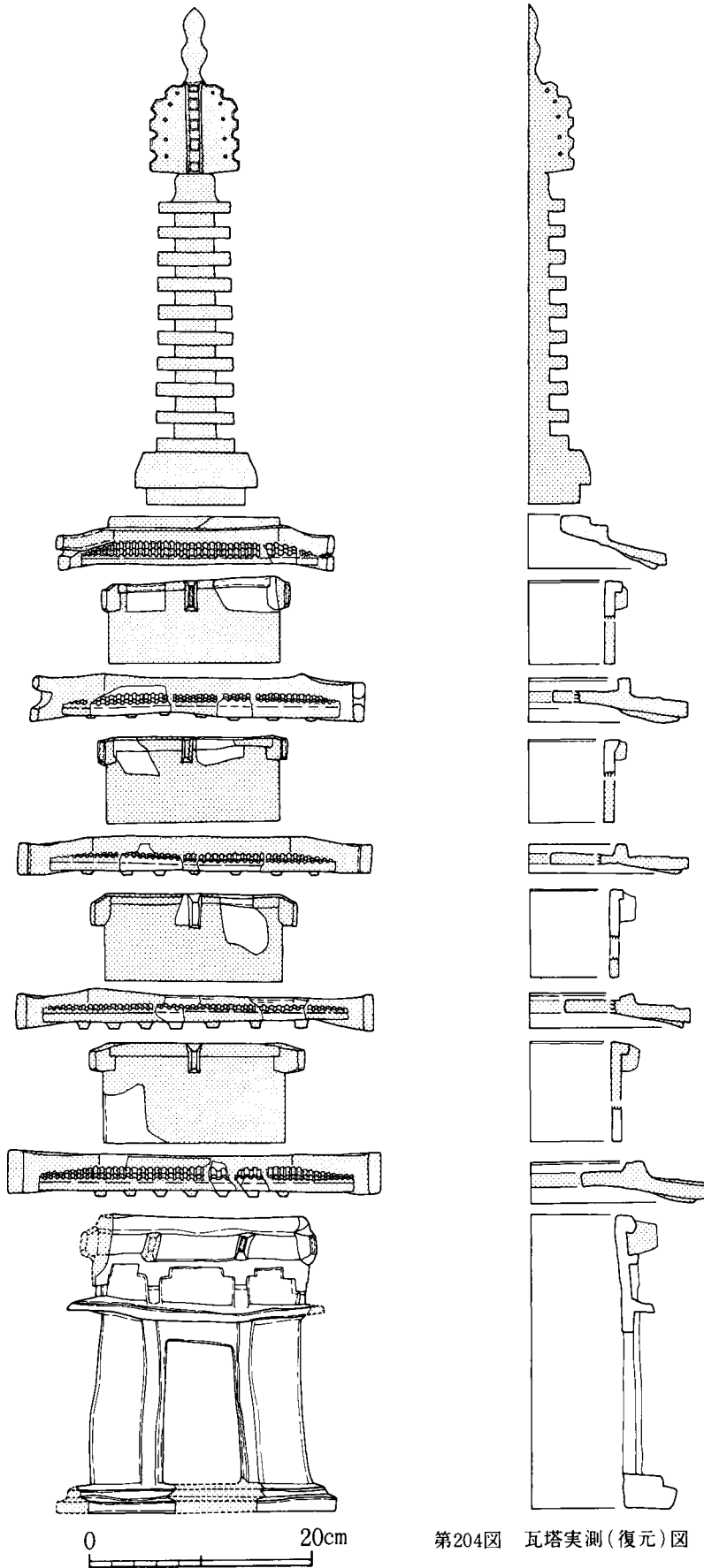
第1節 瓦塔

瓦塔 (第204～206図)

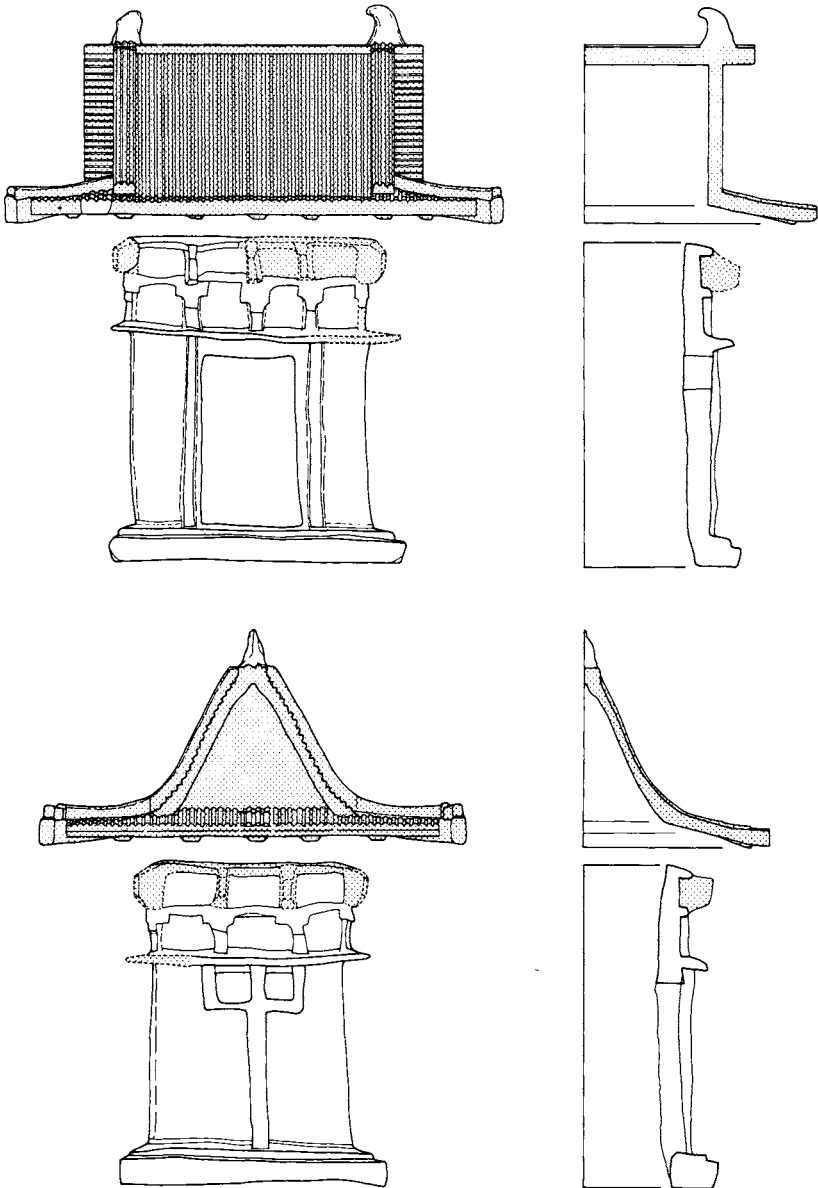
調査に先立つ試掘トレンチ調査の段階で、トレンチ内から瓦塔屋根の破片が出土した。特に6B・7B区のトレンチにその中心がみられ、調査区外の西側までも続いていた。出土状況は全てが散在しており、特別に集中しているようには見られなかった。始めに瓦塔片を確認した土層は、いわゆる表土層である耕作土であった。しかし、遺構検出面までの土層中からは、瓦塔の屋根の破片だけが出土した。この作業中に6B区の中央で001号住居跡の落ち込みを確認し、その覆土上面から、瓦塔基壇の一部と思われる破片が検出された。そして遺構検出面より30cmぐらいまでで床面上20cm程浮いた状態をみることができた。これは住居跡の覆土第6層中からの瓦塔基壇片が出土したことが判ったため、住居廃棄後、ほぼ埋まった時に瓦塔の廃棄があったものと考えることが出来る。

検出状況 瓦塔の平面的な出土状況は第206図のとおりであり、基壇部以外は集中している様子は見られない。後述するように瓦塔は「堂」と「塔」に復元できたが、両者に出土状況の上から区別できなかった。■は瓦塔の壁の破片部分の出土状況である。特に集中している様子は観察されない。▲は瓦塔屋根の稜の部分の出土状況である。稜の破片の出土状況は瓦塔破片の出土分布範囲の全体から出土していることがわかる。□は瓦塔屋根の床部分を持つ破片の出土状況である。出土状況図の中央部に特に集中してみられる。●は瓦塔の屋根の破片の出土状況である。出土状況図の全体から出土している。出土した部分の地形は平坦で、瓦塔片は全体に散在していた。出土層位も前述したとおり耕作土中であり、瓦塔の埋納したような遺構等は検出されなかった。

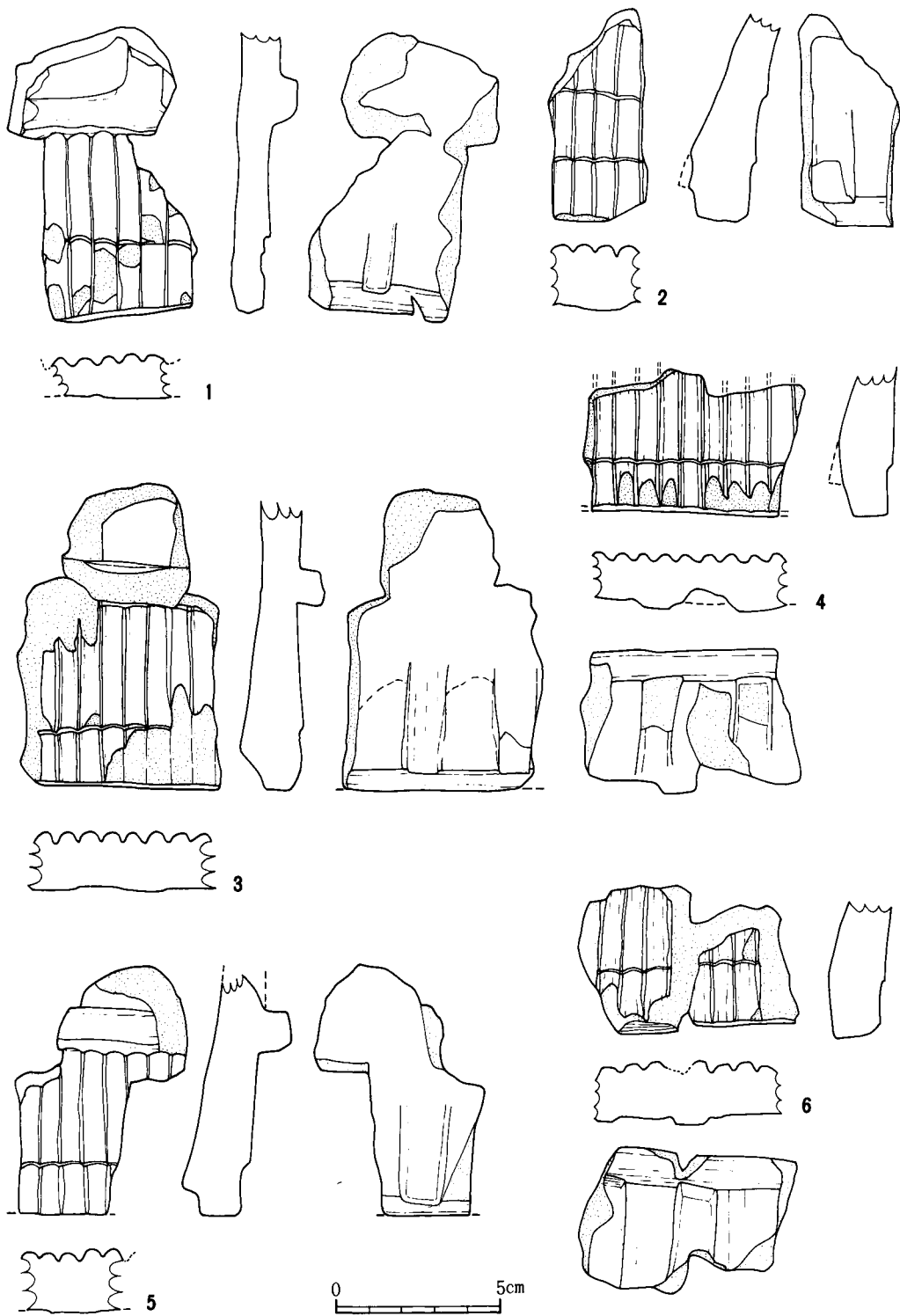
瓦塔1 (堂) 瓦塔基壇と思われるものが2個体出土し、両者の比較から「堂」と「塔」に復元された。「堂」の破片としては鴟尾の破片が2個出土している。しかし、屋根の部分についてはほとんど出土しなかった。「塔」の復元に際しては、基壇の大きさ、鴟尾の状況、施文の状況から復元した。基壇は上部の一部を欠損しているが、ほぼ完形にちかい状況である。底部は2段となっている。下段の幅は約23.5cm、上段は約21.8cmを測る。高さは約25cmである。前後面は第 図のように入り口が表現されている。下端の幅8cm、上端の幅7cmと幅に差がみられる。扉構えの小孔は認められない。入り口の上に頭貫が付けられている。断面が三角形に近く、全周している。頭貫の上には、大斗・肘木が表現されている。これらと桁との接合部が若干丸みをもっており、これが雲斗と思われる。桁の上には台送りが中央に3個、側面に2個、各隅に1個ずつ表現されている。側面は下段幅約21cm、上段幅約19.2cmである。中央に柱が表現され



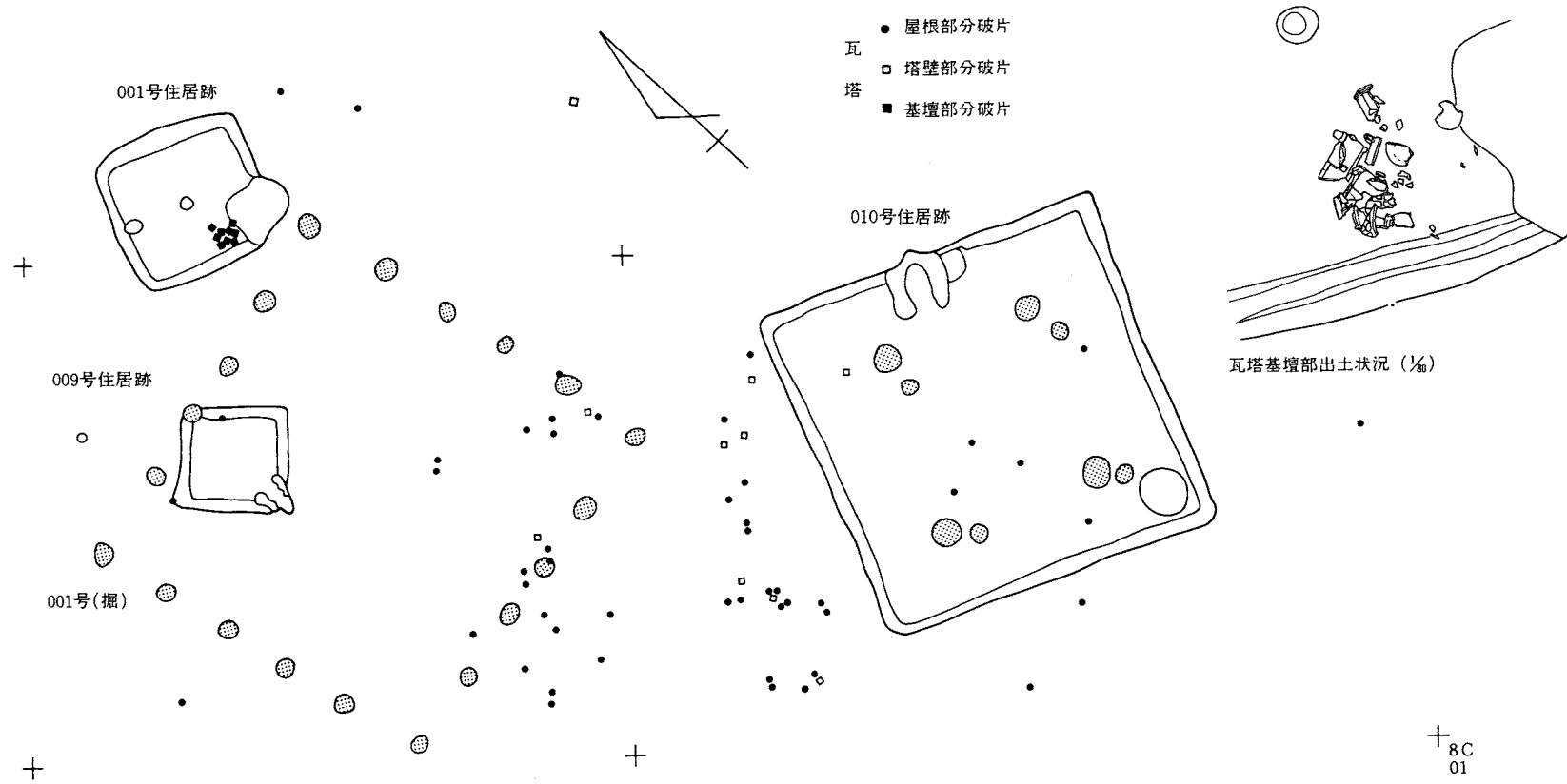
第204图 瓦塔实测(復元)图 塔(¼)



谷津遺跡出土瓦塔実測(復元)図 金堂(¼) (スクリントーン部分復元部)



第205図 出土瓦塔片（屋根部分）実測図（ $\frac{1}{2}$ ）



第206図 瓦塔出土状況図 (1/150)

ており、柱の上部には2つの窓状の透かしがある。頭貫から上は正面とおなじ構造を表現している。成形は輪積みを基本としており、外面と壁部分は丁寧にナデを加えている。底部にはへら削りを加え、後にナデている。内面は輪積痕を指頭によってナデている。底部はへら状工具によって面取りをくわえる。斗拱はすべて張り付け手法である。張り付ける位置は前以てへら状工具で割り付けがされている。

瓦塔2 初層の裳階とおもわれる基壇と屋根の破片が出土している。基壇は、一部を欠くがほぼ完形である。第206図は屋根の破片である。基壇の底部は2段になっている。下段の幅は約25cm、上段の幅は約23.5cmである。高さは26cmである。4面とも入り口が穿かれている。下端は6.8cm、上端は6cmで4面ともほぼ同じである。頭貫などの表現は「堂」と同じである。入り口の両脇にはたてに柱とおもわれる粘土の張り付けが表現されている。この柱の上に頭貫がある。断面は「堂」と同様に三角形を呈する。頭貫の上に斗供が表現されている。下から皿斗、大斗、肘斗がある。肘木が角張っており、「堂」に見られた雲斗は明確には表現されていない。「堂」にくらべて全体に丸みをもっている。台送りは各面に2個ずつと、各隅に1個ずつが見られる。このことから「塔」は3間を表現しているものと思われる。屋根の破片は色調や胎土、厚さなどによって分類すると、5つに分けられた。これは「五重塔」の屋根の数と一致している。また、屋根と屋根の間は弁状の形態をしている。これも整形技法や厚さ、色調によって4段に分けられた。実測図にある伏盤から上は他の類例からの復元である。屋根の最上段は、表面が黒色を呈すが、断面は暗茶褐色を呈している。裏面はへら状工具によって整形されている。外面は丁寧なナデを施し、竹管状工具によって丸瓦を模している。継ぎ目は1箇所であり、「堂」に見られた3段の継ぎ目は見られない。その他の屋根の破片もほぼ同様である。ただし、色調は暗褐色を呈している。瓦の表現も同様である。軸部の大きさは不明であるが、屋蓋部から大きさを復元した。それによると一辺が2間の大きさで、中央に尾垂木と思われる表現が認められる。尾垂木は各隅にも表現されている。垂木の表現の有無については明瞭ではないが、表現はされている。

(相京)

第2節 集落の展開

まず注意しなければならないのは谷津遺跡の集落の範囲であろう。瓜作遺跡などとは同一の台地上とは言っても今回調査した区域のすぐ北側で両方向から入る谷によりかなり狭くなり、また遺構配置図（付図）を見るかぎりでは住居跡の分布もかなり薄くなっていることなどから、この台地上の集落はいくつかのブロック（集団）に分割して性格を異にして存在している可能性も考えられよう。

今回の調査において検出された瓦塔の在り方は古代集落における仏教文化のあり方を考える上で貴重な資料ともなろう。遺構の確認面からの発見であったため当初住居跡内からと誤った

とらえかたもあったが、最終的には住居廃棄後の浅い掘り込みないしはくぼ地が有りその中にも投棄されたい状態で検出されている。

住居廃棄後、柵列が設けられ、可能性としては、この柵内に小堂が営まれ、瓦塔が安置されたのかも知れない。

特に千葉市調査区から検出された鑄銅工房跡、錫杖鑄型、そして平安時代古印の鑄型の検出などは当遺跡における有力層との関係—私印の鑄造をする必要のある階級との関係から遺跡の性格を追求することが必要であると同時に谷津遺跡（群）の性格をもある程度うかがわせるものがある。

1つは在地における仏教系技術者集団としてである。そして、この瓦塔が通俗的な言い方をするとすれば、集団内信仰の対象としてあったとも考えられよう。（もしかすると自己の持つ技術で鑄造された小仏像が塔内に安置されていたのかも知れない。）

どのような存在がこれらの技術を必要とし要求したのか。そして、本遺跡内で製作された可能性のある品々、特に錫杖は千葉県内から直接出土していない点からも流通の問題をも検討しなければならない。

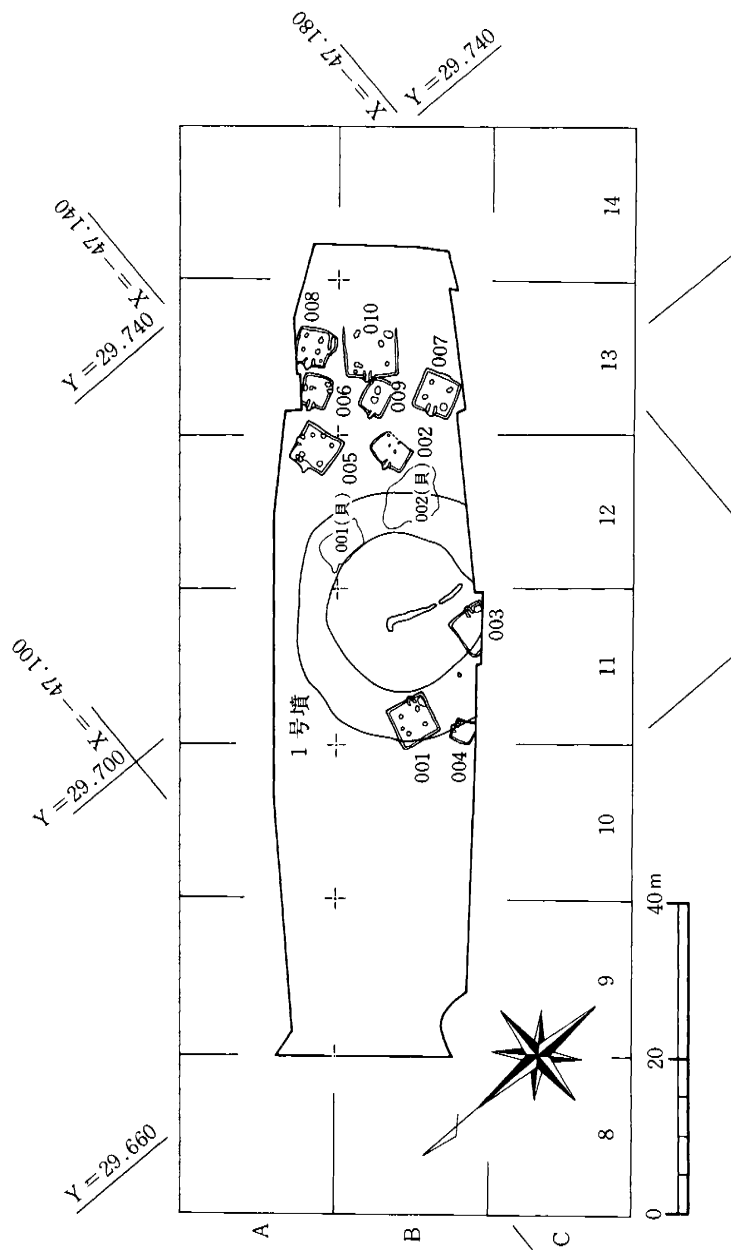
現在村田川上流地域の大規模開発事業の進展に伴いかなりの大集落が調査され上総、下総の国境周辺の状況が明らかになりつつある。その中で今までそれらの地域において未検出のこれらの遺構、遺物の持つ意味は重大なものがある。単に一番近い寺である、千葉寺のみにこだわらず周辺の未調査遺跡を含めた検討を、今後行ってゆかねばならない。問題点の提示のみであるが今後の検討をまちたい。

（池田）

参考文献

千葉市文化財調査報告書 第10集「谷津遺跡」1984 千葉市教育委員会

IV 池田古墳群の調査



第207図 池田古墳群遺構配置図 (1/1000)

第1章 検出された遺構と遺物

調査の対象となったのは古墳1基、住居跡10軒、焼土跡2ヶ所、貝ブロック2ヶ所である。検出された住居跡は、この古墳群形成期を挟み込むような時期に分かれている。(第207図)

貝ブロックは古墳築造後の形成であり、集落における日常的な生産活動と密接な関係をもっていることが確認された。

第1節 池田古墳群第1号墳(第208～211図)

本墳は、調査前は墳丘全体が雑木で覆われていたために、墳形・規模等がはっきりしない状態であった。伐木後全容があらわれると、ゆるい斜面に築かれた円墳であることが判明した。墳丘の南西側と西側に一部改変がみられるが、墳丘の保存状態はかなり良好であった。見かけの墳丘径20m、墳丘高1.5m程を測り、舌状に突出する台地の先端部に位置するための墳丘の流出を考えると、築造当時の規模との差はかなり大きなものと思われる。

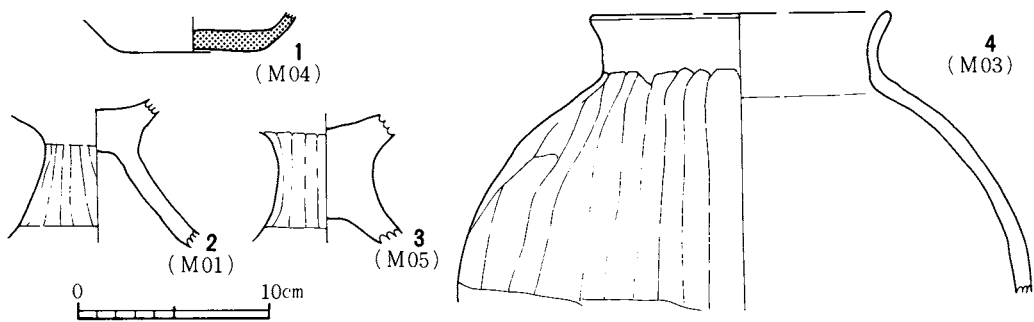
墳丘の盛土は、径21m、厚さ10cm程のほぼ水平に認められる、旧表土上から開始されている。旧表土面より現墳頂部までの高さは1.8mを測る。墳丘構築は、墳丘の規模の地割りとそれに伴う旧表土面の整形が施される。旧表土面と墳丘外整形面(ソフトローム層)との比高が0.2～0.3m程認められ、盛土確保のための地山削手が行われたことがわかる。封土は、土堤状の盛土を墳丘周縁部に廻らした後に、内部への充填を施す方法を基本的に採っているようである。土堤には、暗褐色土を用い、充填土にはローム土或いはロームブロックを主としている。ロームブロック等は、周溝掘削により得た土と考えられる。

周溝は、内径21m前後で全周するものと思われるが南東側については、一部不明瞭な箇所があり、幅3～4m前後、深さ0.6m前後を測る。周溝実掘後の状態を観察すると、掘り込み前の周到な計画に基いて掘られたと考えることはできず、墳丘の位置決めをしたと思われる。周溝の幅、深さ等からみても、計画的に掘削したとは認められない。主体部は、残念ながら確認することはできなかった。

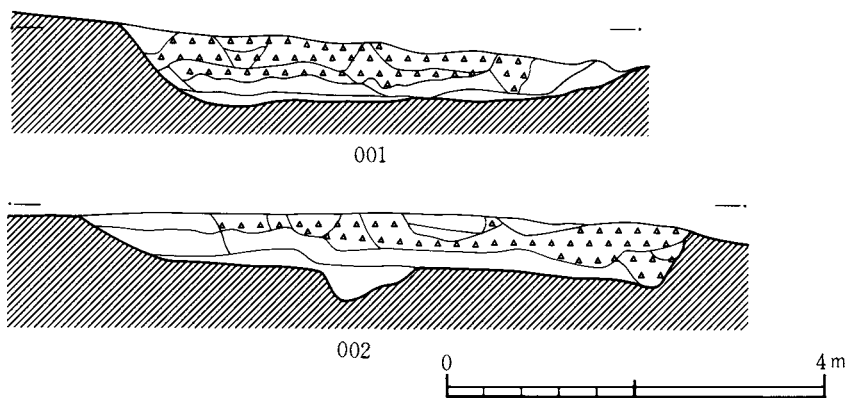
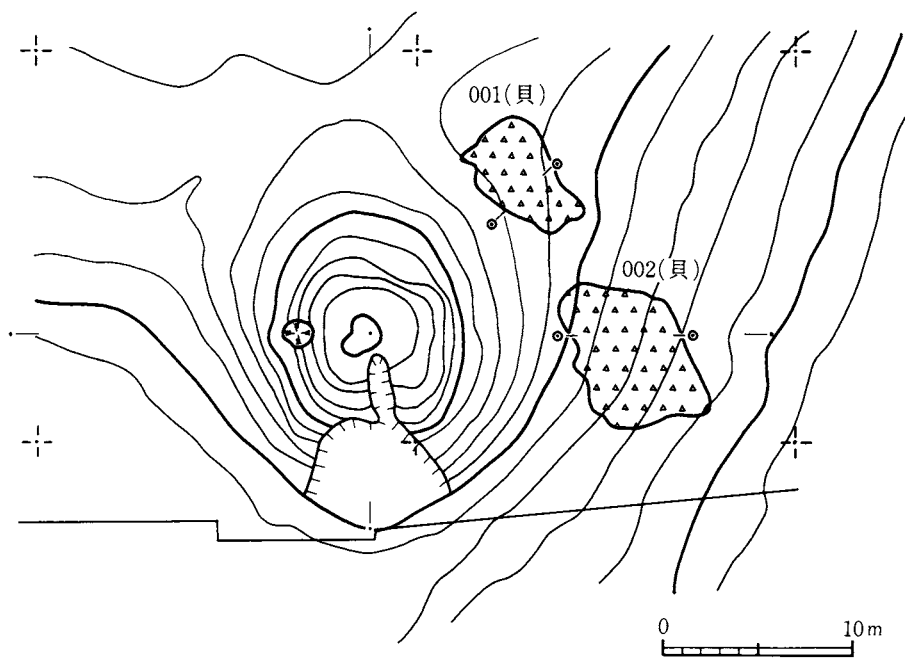
墳丘内出土遺物は、第208図に示すように非常に少ない。1は、須恵器坏である。底径6.5cmを測る。内外面ともヘラ削り後、ナデを施す。2・3は高坏の脚部である。4は、甕である。口径15.6cmを測る。口縁部はナデ、内面頸部直下にヘラ削りを施す。

この池田古墳群1号墳斜面に投棄された貝の種類は次の通りである。

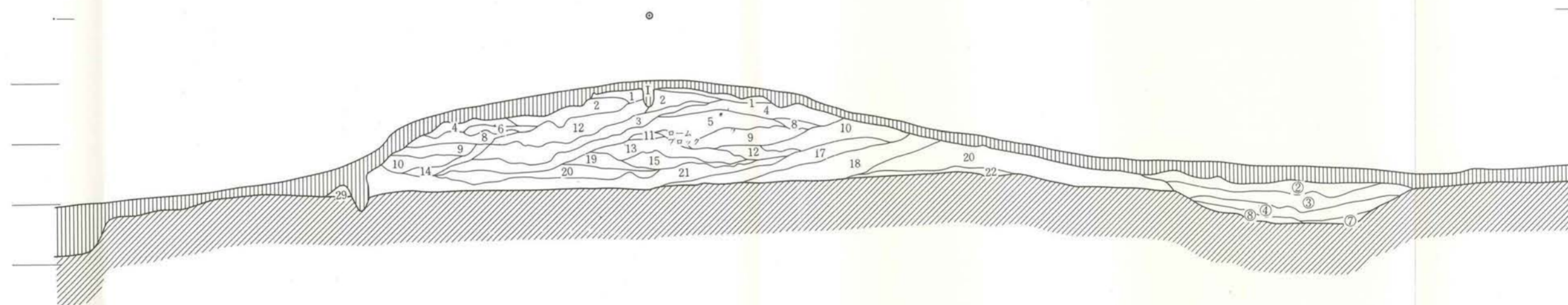
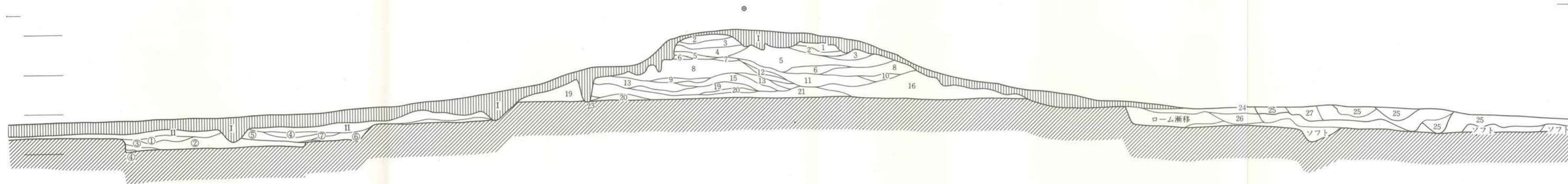
イボキサゴが全体の80%に上り、次いでアサリ、ハマグリで90%を越えている。やはりハマグリとアサリの率は1:2とアサリが量的には多くなっている。



第208図 周溝内出土遺物実測図 (1/4)



第209図 001・002号貝層範囲実測図 (1/400)・土層断面図 (1/80)



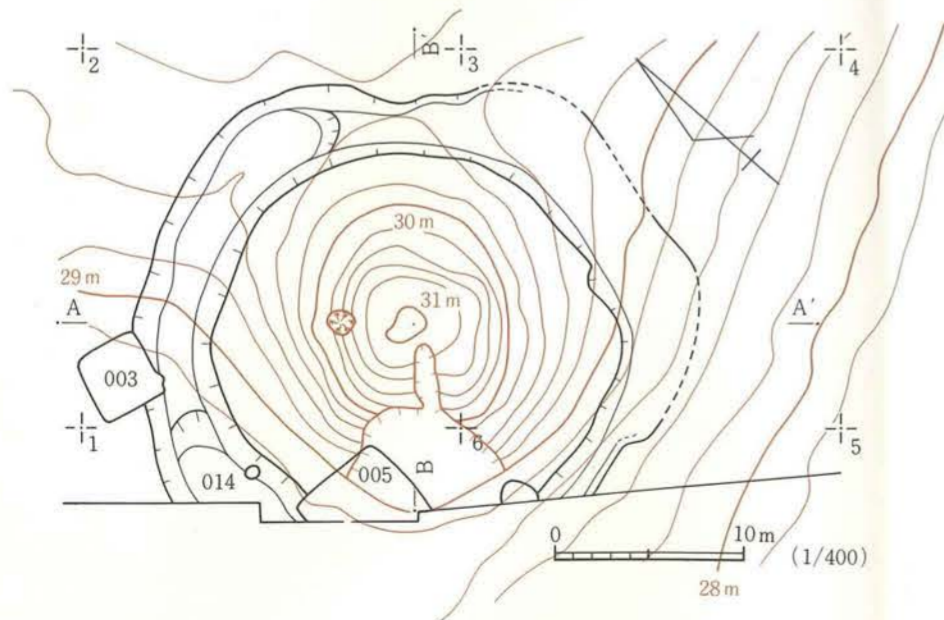
池田古墳群 1号墳土層説明

表土層土層説明

- I 暗褐色土 木の根を多く含み乾くとサラサラとした土になる
- II 暗褐色土 褐色土粒、ソフトローム粒、焼土粒等含まれる

周溝内土層説明

- ① 黒褐色土 黒色土を中心に褐色土粒も見られる
- ② 暗黒褐色土 黒色土を中心に褐色土を含む
- ③ 黒褐色土 暗黒褐色土を中心に焼土粒、褐色土を含む
- ④ 暗褐色土 暗褐色土を中心に焼土粒、炭化物などを含む
- ⑤ 褐色土 暗褐色土にロームブロックを含み明るい
- ⑥ 暗褐色土 ④に似るがローム粒を含む
- ⑦ 暗褐色土 ベースは暗褐色土、砂質
- ⑧ 褐色土 ロームブロックを主として暗褐色土が混ざる



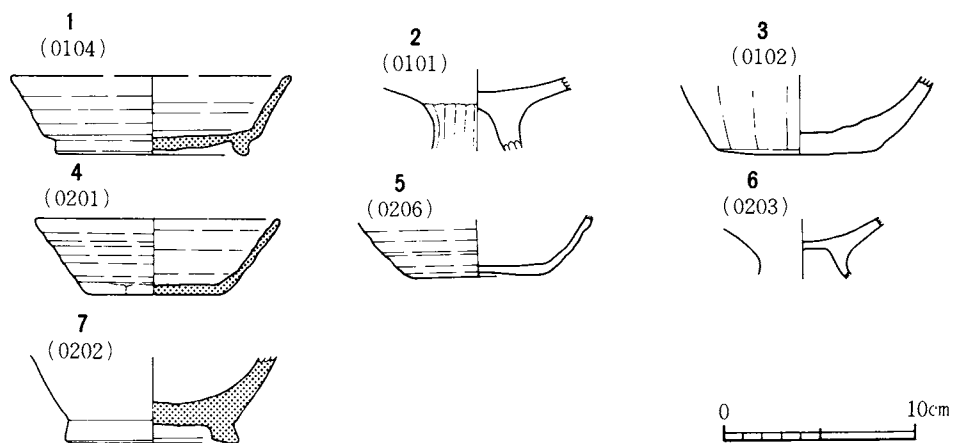
墳丘部土層説明

- 1 暗褐色土 ロームブロックを主として暗褐色土を含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを主とする。少量の暗褐色土を含む。
- 3 黒褐色土 暗褐色土を主として少量の黒褐色土を含む。
- 4 暗褐色土 径2センチ程のロームブロックを含む。
- 5 暗褐色土 4に近いがソフトロームを多く含む。
- 6 暗褐色土 4に近いがしまりない。
- 7 黒褐色土 黒色土をベースにロームブロックを若干含む。
- 8 暗褐色土 暗褐色土をベースに直径2-3センチのハードロームブロックを多量に含み、微量に黒色土を含む。
- 9 暗褐色土 8に近いが色調は黒味が強く黒褐色に近くハードロームブロックを含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを主として若干の黒色土を含む。
- 11 黒褐色土 黒褐色土をベースにして少量のロームブロック、暗褐色土が含まれる。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを主として暗褐色土、黒色土を含む。
- 13 暗褐色土 全体に粒子荒くローム粒を多く含む。

- 14 暗褐色土 13にロームブロックを多く含む。
- 15 黒色土 ローム粒、褐色土粒を少量含む。
- 16 黒褐色土 ローム粒、黒褐色土粒を含む。
- 17 暗褐色土 ロームブロックの量が多く明るい感じがする。
- 18 黒色土 砂質でローム粒を少量含む。
- 19 暗褐色土 若干の黒色土を含む。
- 20 暗褐色土 19に比べ、ローム粒を含む。ベースは黒褐色土。
- 21 黒褐色土 黒色土をベースに褐色土を含む。
- 22 黒褐色土 旧表土とおもわれる。堅くしまっており、焼土炭など見られる。
- 23 暗褐色土 暗褐色土にソフトロームが少量含まれる。
- 24 黒褐色土 微量の焼土粒、褐色土粒等含まれる。
- 25 黒色土 黒色土に貝を含む。
- 26 暗褐色土 暗褐色土にローム粒を多く含む。
- 27 黒色土 微量ながら貝片を含む。
- 28 暗褐色土 暗褐色に若干のロームブロックを含む。
- 29 暗黒褐色土 かなり黒色味強くソフトローム粒子が少量混入する。



第210図 池田古墳群 1号墳実測図及び土層断面図



第211図 001・002号貝層中出土遺物実測図 (1/4)

その他、量的には少ないが見られる貝の種類をあげておく。ツメタガイ、アラムシロ、マガキ、シオフキ、カワアイガイ、サルボウ、オオノガイ、アカニシ、オカチョウジガイ、ウミニナ、カワニナ、ハイガイ、フジツボなどが見られる。普通大量に見られるシジミは極めて少量であった。

(麻生)

第2節 竪穴住居跡と遺物

001号住居跡（第212～214図）

調査区の最も北側に位置し、池田古墳群第1号墳の周溝と切り合い関係にある。新・旧関係は、土層断面の関係から、本跡が周堀に切られている。主軸方向は、N-102°-Eを示す。重複する古墳の周堀により、覆土の上層が切られているが、遺構の遺存は良好である。

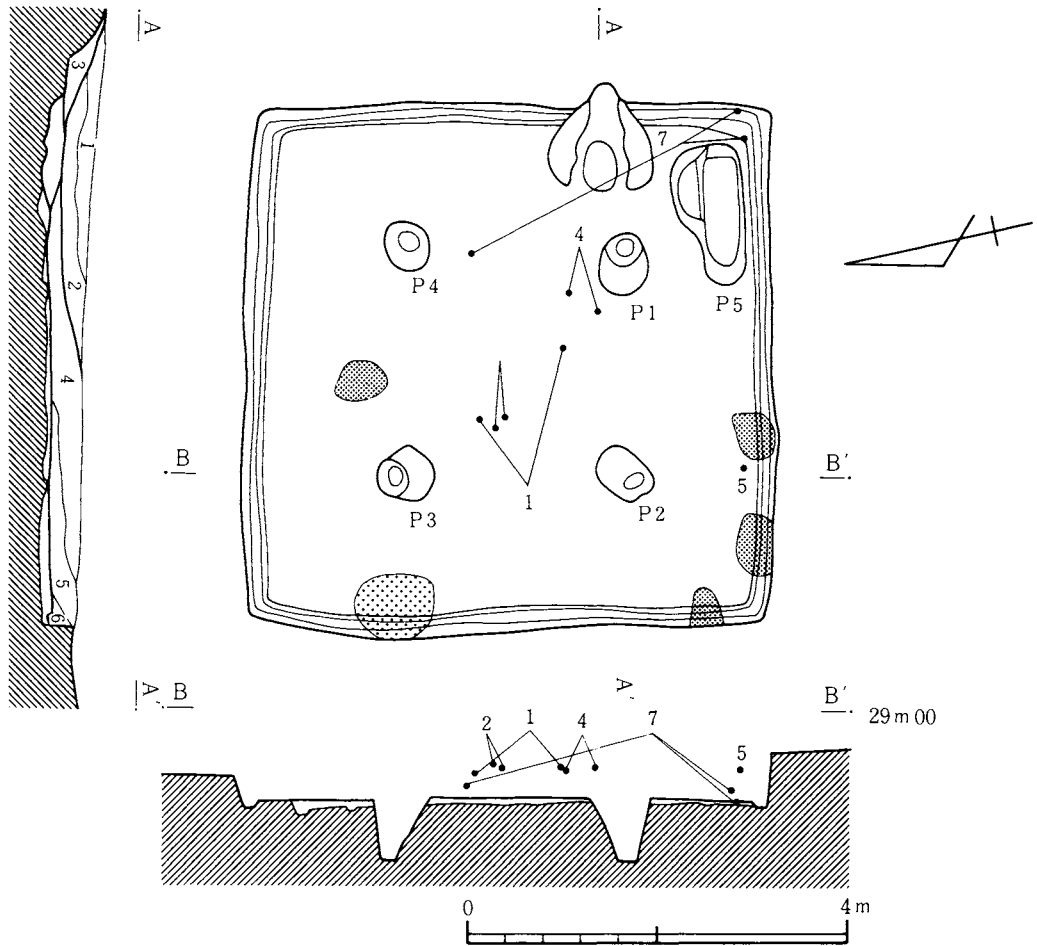
規模は、主軸方向に5.5mそれに直交する方向に5.5mである。ほぼ正方形を呈する。検出面から床面までは、約44cmの掘り込みを有し、壁は一部を除いて、真直に立ちあがる。壁下には、幅20～28cm、深さ8cm前後の壁溝が全周して、検出されている。この壁溝には、特にピットなどは認められない。床面は、荒掘りの上に6cm前後のハードロームによる埋め戻しを行い仕上げている。特別に床面の凹凸は認められず、平坦な様子に保たれている。西壁・北西コーナー付近には、粘土が集積されていた。南西コーナー付近と北壁中央付近には、焼土塊が廃棄されていた。炭化材等が検出されないため、火災住居とは考え難く、住居廃絶後に火を使用した二次的なものと考えられる。柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に4か所穿たれている。

P₁は径52cm×62cmで掘り込みの深さ74cmを測り、P₂は径60cm×42cmで深さ66cm、P₃は径60cm×58cm、深さ60cm、P₄は径52cm×46cm、深さ71cmを測る。柱穴間の間隔は、P₁～P₂間2.35m、P₂～P₃間2.34m、P₃～P₄間2.38m、P₄～P₁間2.32mである。P₅は貯蔵穴と考えられ、長径146cm×短径76cmで深さ46cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに構築され、両袖を残す。袖は「八」の字形に遺存し、天井部は崩落し、不明である。壁へは、30cmほど掘り込み、煙道部は73°で立ち上がる。火床部は50cm×34cmの楕円形に窪む。

出土遺物は、少ない。出土状況から考えると本跡に伴うと断定し難いが、凶化可能な遺物は7点である。床面から出土した遺物は、第212図7の甕である。第213図1は坏である。丸底で体部との境に設けられた弱い稜から、ほぼ垂直に立ちあがる。調整は、内・外面ともヘラミガキを施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈す。口径14.2cm、器高5.0cmを測る。2は、丸底の坏で、体部は内彎し、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は尖って終わる。胎土は緻密で、焼成は普通、色調は、暗赤褐色を呈す。口径は13.1cm、器高は4.5cmを測る。3は、坏で口縁部が3分の1遺存する。体部は、内傾して立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。調整は内外面とも、ヘラミガキを施す。胎土は緻密で、焼成は普通、色調は、暗赤褐色を呈す。口径は13.1cm、器高は4.5cmを測る。3は、坏で口縁部が3分の1遺存する。体部は、内傾して立ち上がり、口唇部で僅かに外反する。調整は内外面とも、ヘラミガキを施す。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は黒茶褐色を呈す。4は、高坏の脚部で短い脚部が「八」の字状に開く。調整は、外面はヘラミガキ、脚端部はヨコナデ、内面は横方向ヘラケズリを施す。外面には、赤彩を施している。5は碗で、底部が3分の1遺存する。調整は体部下端をヘラケ

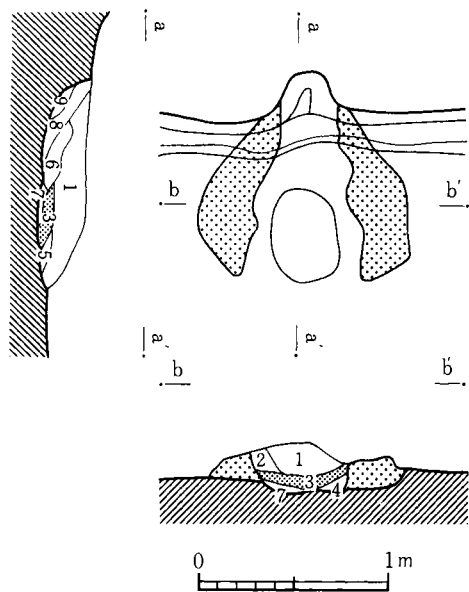
ズリし、内・外面ともヘラケズリ後ヨコナデを施す。内外には赤彩を施す。6は小型平底の鉢で、体部は僅かに内彎して立ち上がる。調整は体部下半部を横方向ヘラケズリし、内・外面ともナデを施す。胎土は、やや緻密で、焼成は良好、色調は黒茶褐色を呈す。口径は9.0cm、底部径4.6cm、器高は5.2cmを測る。7は甕で、住居跡の南東コーナー壁溝直上から出土している。3分の1ほど遺存しており、体部上半部に最大径をもち、口縁部は「く」の字状に弱く外反し、口唇部はさらに外反する。調整は、内・外面とも丁寧にナデを施す。



001号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|---------------------------|---------|-------------------|
| 1. 黒色土 | 黒色土主体。褐色土粒・炭化材粒・焼土粒を微量含む。 | 4. 暗褐色土 | 褐色土粒を含む。粘性有。 |
| 2. 暗褐色土 | 暗褐色土主体。炭化材粒を微量に含む。 | 5. 暗褐色土 | 4層よりロームブロックを多く含む。 |
| 3. 暗褐色土 | 暗褐色土主体。砂粒を含む。 | 6. 褐色土 | ローム粒主体。暗褐色土を含む。 |

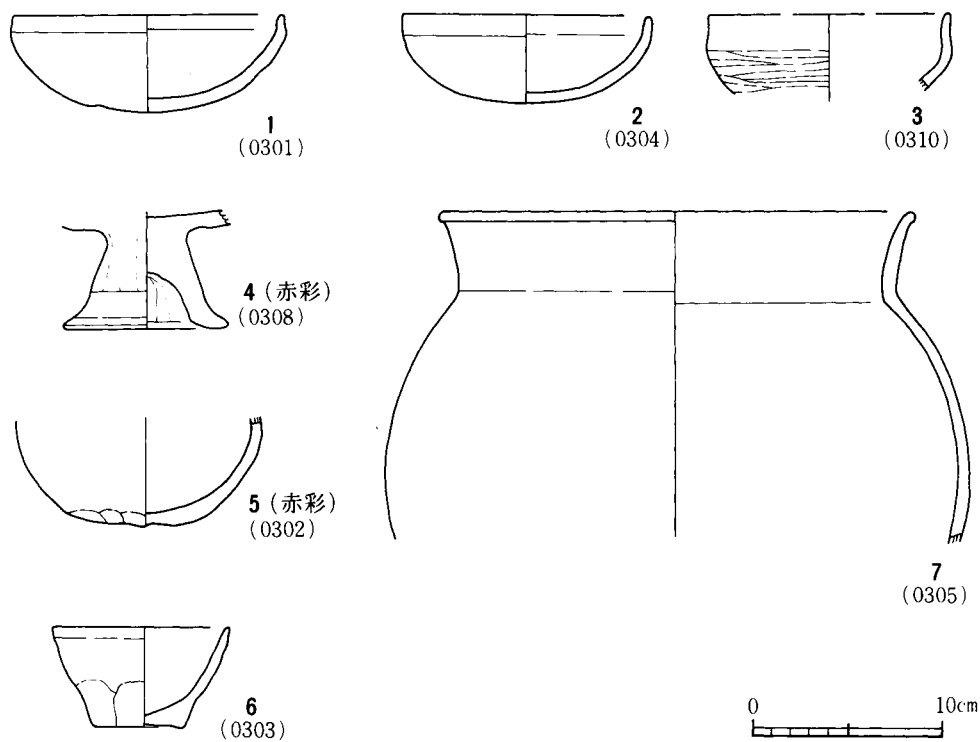
第212図 001号住居跡実測図 (1/80)



001号住居跡カマド土層説明

- 1. 暗褐色土 焼土粒・炭化材粒を微量含む。
- 2. 暗黒褐色土 山砂・焼土粒・炭化材粒を含む。
- 3. 暗赤褐色土 焼土・暗褐色土を微量含む。
- 4. 黒灰色土 山砂主体。焼土粒・炭化材粒を少量含む。
- 5. 暗赤褐色土 ローム粒主体。焼土粒を含む。
- 6. 暗褐色土 山砂主体。ローム粒を少量含む。
- 7. 暗赤褐色土 ローム粒主体。
- 8. 暗褐色土 山砂主体。焼土粒を微量含む。
- 9. 暗褐色土 10層にロームブロックを少量含む。

第213図 001号住居跡カマド実測図 (1/40)



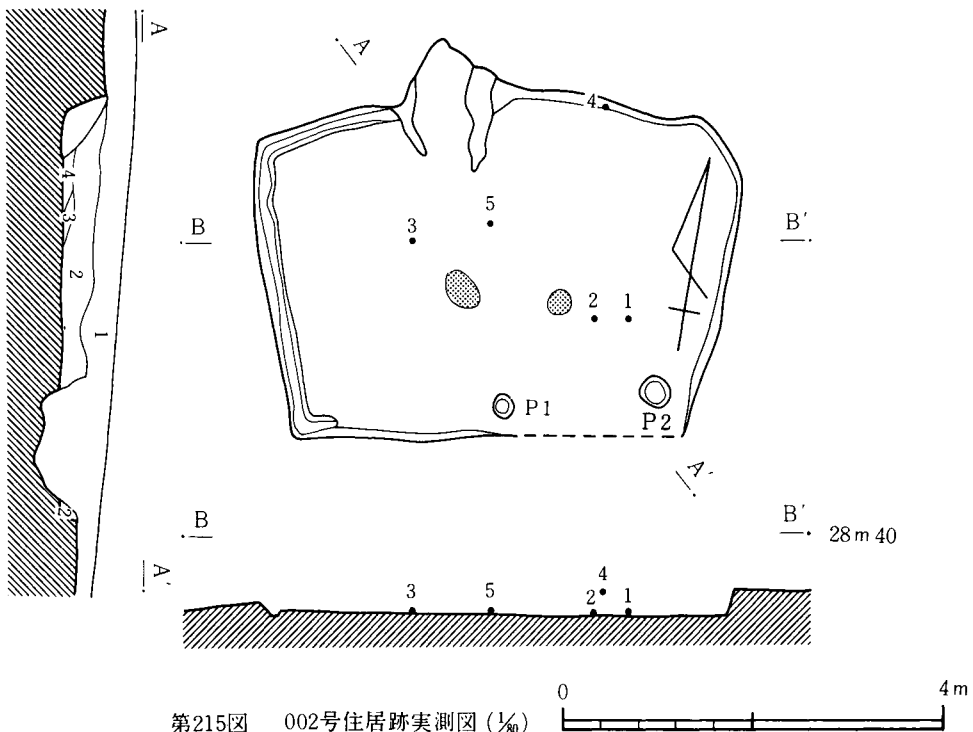
第214図 001号住居跡遺物出土遺物実測図 (1/4)

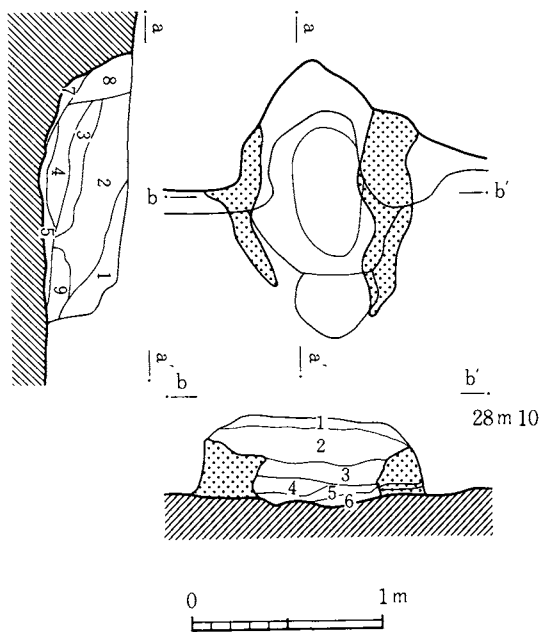
002号住居跡(第215~217図)

調査区の中ほどに位置する。主軸方向は、N-9°-Wを示す。一部攪乱によって、北東コーナー付近が不明瞭である。規模は北壁側は、5.1m、南壁側は、4.1m、それに直交する方向は、3.6mで台形を呈す。検出面から床面までは、約26cmの掘り込みを有し、壁は一部不明瞭な部分を除いて、ほぼ真直に立ち上がる。壁下には、西壁及び南西コーナー付近に壁溝が検出され、幅24cm前後、深さ6cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦に掘り込まれ、床面の埋め戻しなどの調整はされていない。確実な柱穴は、不明でピットが2本検出されている。P₁は径32cmで深さ30cm、P₂は径24cm、深さ40cmを測る。

カマドは、北壁の西よりに構築され、両袖を残す。天井部は、崩落して不明である。壁へは60cmほど掘り込み、煙道部は63°で立ち上がる。火床部は、84×50cmに楕円形に窪む。

出土遺物は、少ない。図化可能な遺物は、5点で第217図4を残して、床面から出土している。1は、坏底部で、回転糸切痕が遺存する。2は、高台付坏で、「八」の字状に開く高台を持ち、底径は7.1cm、高台高は1.4cmを測る。調整は、内面はミガキ、外面は横方向ナデを施す。3も、高台付坏で、「八」の字状に開く高台を持ち、底径は7.2cm、高台高は1.3cmを測る。4も、高台付坏で、やや外反する高台を持ち、底径は5.3cm、高台高は0.8cmを測る。5は、紡錘車で、滑石製である。径は4.0cm、厚さ1.6cm、孔径0.5cmを測る。色調は黒色を呈す。調整は丁寧で、一部に整形時の削痕が残る。





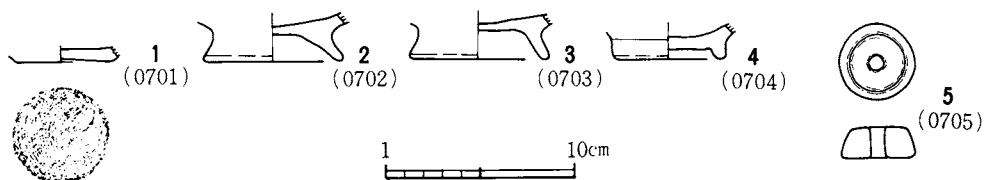
002号住居跡土層説明

- | | |
|----------|-----------------|
| 1. 黒色土 | 表土層。 |
| 2. 暗褐色土 | 暗褐色土主体。ローム粒を含む。 |
| 3. 暗灰褐色土 | 山砂主体。焼土粒を含む。 |
| 4. 暗灰褐色土 | 山砂主体。ローム粒を含む。 |

002号住居跡カマド土層説明

- | | |
|----------|-------------------------|
| 1. 暗褐色土 | ロームブロック・山砂を含む。硬くしまっている。 |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒を微量含む。 |
| 3. 暗灰褐色土 | 山砂を多く含む。 |
| 4. 暗褐色土 | 黒色土主体。山砂・焼土粒を含む。 |
| 5. 黒色土 | 山砂・ロームブロックを少量含む。 |
| 6. 黒赤褐色土 | 黒色土主体。焼土粒を多く含む。 |
| 7. 暗褐色土 | ロームブロック主体。ローム粒を多く含む。 |
| 8. 褐色土 | ロームブロック主体。 |
| 9. 暗灰褐色土 | 山砂主体。ローム粒を含む。 |

第216図 002号住居跡カマド実測図 (1/40)



第217図 002号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

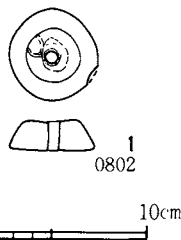
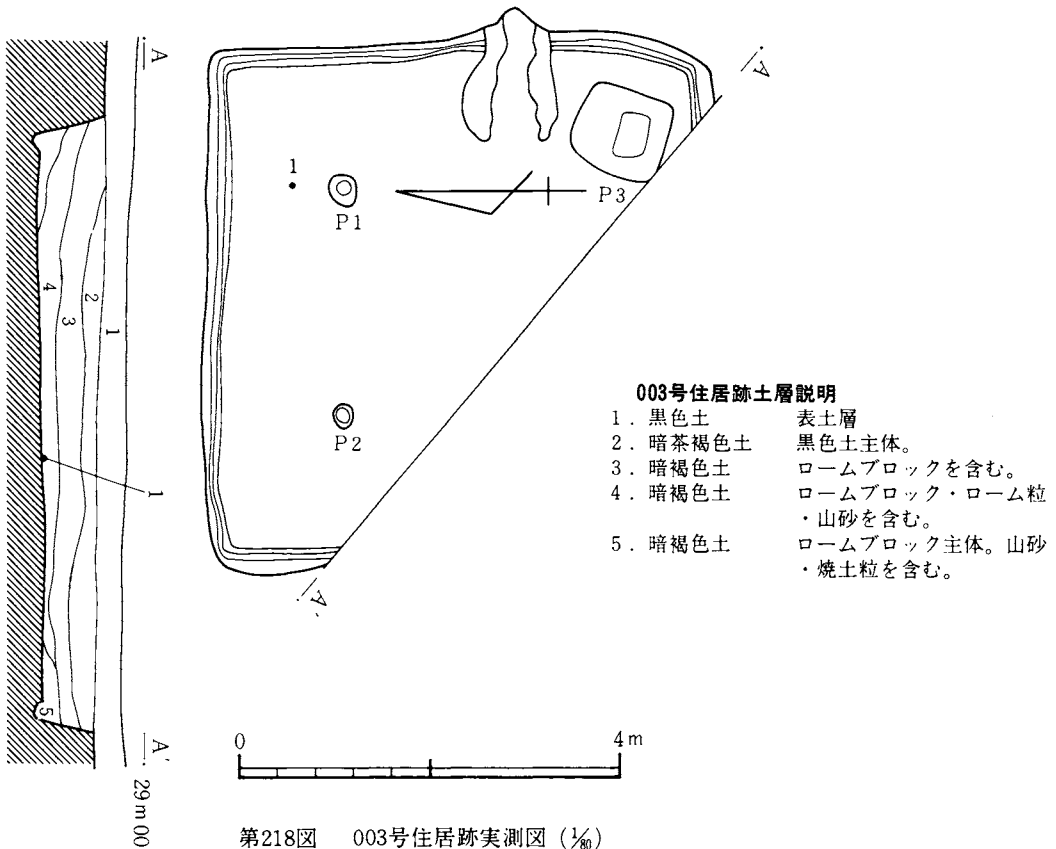
003号住居跡 (第218~220図)

調査区の中ほどにあり、調査区外に遺構の4分の1ほどが残されている。古墳の周堀と重複しており、明らかに本跡の方が周堀により切られているが、周堀が浅かったため、遺存は良好である。主軸方向は、N-90°-Eを示す。規模は、主軸方向は5.3m、主軸と直交する方向に5.2mである。ほぼ、正方形を呈するものと思われ、東壁がやや胴が張る。検出面から床面までは約68cmの掘り込みを有し、壁は、西壁北西コーナー付近を除いて、ほぼ真直に立ち上がる。壁下には、幅約20cm前後、深さ8cm前後を測る。壁溝が検出され全周するものと思われる。床面は、ほぼ平坦で、中央付近がやや高い。床面からは、焼土塊・炭化材などが検出され、火災

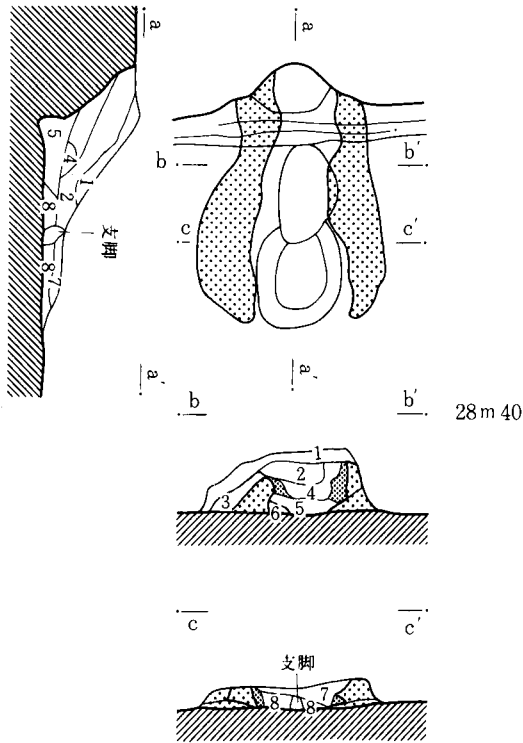
にあったものと思われる。柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に2本が検出された。P₁は径36cm×30cmで深さ84cm、P₂は径20cmで深さ90cmを測る。柱穴間は、P₁～P₂間が2.34mを測る。P₃は貯蔵穴と考えられ、100cm×88cmで、深さ46cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに構築され、両袖を残す。天井部は崩落して不明。壁へは、12cmほど掘り込み、煙道部は、52°で立ち上がる。火床部は28cm×22cm、深さ3cm前後を測る。

出土遺物は、土製紡錘車が完形で出土したほかは、図化可能なものはない。第218図1で、大きさは、径4.6cm、厚さ1.5cm、孔径0.6cmを測る。床面上より出土している。胎土は長石・石英粒を多く含む。上下面とも、ヘラケズリのあと、ナデで丁寧に仕上げている。



第219図 003号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



003号住居跡カマド土層説明

- 1. 暗褐色土
- 2. 暗灰褐色土 山砂主体。焼土粒・炭化材粒を多く含む。
- 3. 暗褐色土 山砂を含む。
- 4. 暗灰赤褐色土 山砂主体・焼土粒を多く含む。
- 5. 暗黒褐色土 炭化材粒を多く含む。
- 6. 暗黒褐色土 山砂・炭化材粒を多く含む。
- 7. 暗褐色土
- 8. 暗褐色土 黒色土主体。焼土を含む。

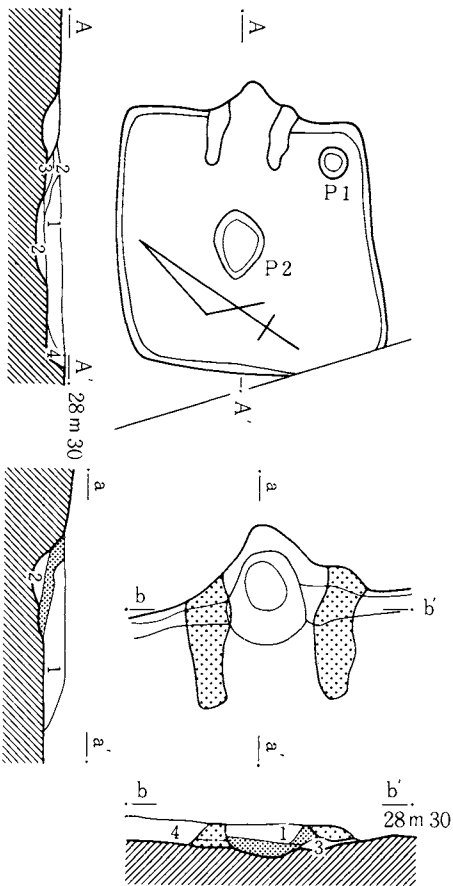
第220図 003号住居跡カマド実測図 (1/40)

004号住居跡 (第221~223図)

調査区の最も西側に位置し、南東側コーナーが発掘区外に出る。主軸方向は、N-55°-Eを示す。規模は、主軸方向に2.3mを測り、ややいびつな長方形を呈す。壁は四方ともやや胴が張る。検出面から床面までは、20cmの掘り込みを有し、壁は、約30°で立ち上がる。壁溝は検出されない。床面はほぼ平坦に保たれている。床下より、P₂が検出され荒掘りあとと考えられる。支柱穴は不明で、各コーナーを結ぶ対角線上に1本のみ、P₁が検出されたが、径28cm、深さ7cmで、支柱穴としては考え難い。

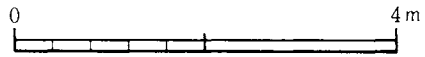
カマドは、東壁中央に構築され、両袖を残すが、天井部は崩落のため不明である。壁へは19cmほど掘り込み、煙道部は50°で立ち上がる。火床部は、24cm×20cmで楕円形に窪む。

出土遺物は、非常に少なく図化可能なものは1点のみであった。第223図1で、坏底部である。底径は4.2cmを測り、調整は、回転糸切り後、体部内外面ともナデを施す。



004号住居跡土層説明

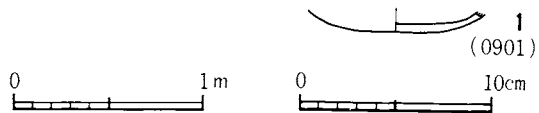
1. 暗黒褐色土 焼土粒を含む。粘性有り。
2. 暗黒褐色土 山砂・焼土粒を含む。
3. 黒褐色土 炭化材粒・山砂・焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を含む。
5. 暗褐色土 ロームブロックを含む。



第221図 004号住居跡実測図 (1/80)

004号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 黒色土主体。山砂・炭化材粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒主体。焼土粒・炭化材粒・山砂を含む。
3. 暗褐色土 山砂・炭化材粒を含む。
4. リフトローム



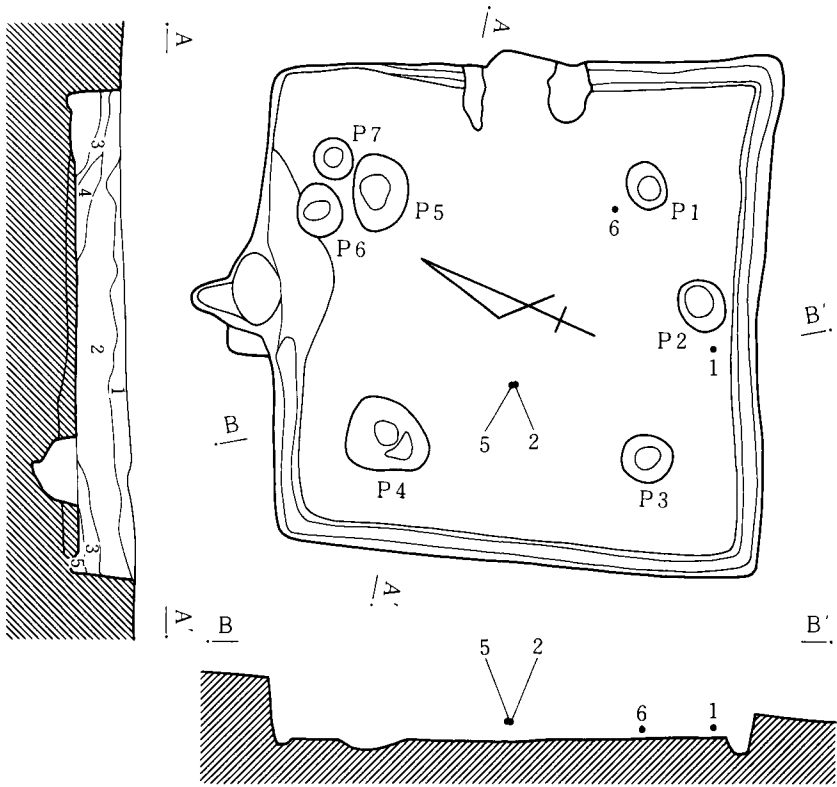
第222図 004号住居跡カマド実測図 (1/40)

第223図 004号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

005号住居跡 (第224~226図)

調査区の東側に位置する。主軸方向は、N-67°-Eを示す。規模は、主軸方向に5.16m、主軸に直交する方向に5.12mで、ほぼ正方形を呈する。南壁がやや内側に彎曲する。検出面から床面までは、約60cmの掘り込みを有し、壁は一部を除いて、真直に立ち上がる。壁下には、北東コーナー付近を除いて、幅24cm前後、深さ8cm程の壁溝が検出されている。この壁溝には、特にピット等は認められない。床面は、荒掘りの後、一部は10cmほどハードロームブロックを埋め戻して仕上げている。ほぼ、平坦に保たれている。

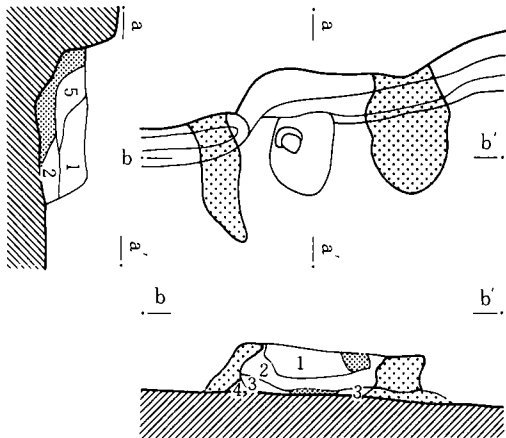
柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に4か所穿たれている。P₁は、径50cm×40cmで深さ56cm、P₂は径52cm、深さ50cm、P₃は径90cm×76cm、深さ57cm、P₄は径80cm×56cm、深さは48cmを測る。柱穴間の間隔は、P₁~P₂間は、2.80m、P₂~P₃間は、2.76m、P₃~P₄間は、2.52m、P₄~P₁間は2.90mである。P₅は入口に伴う階段施設のためのピットと考えられ、径56cm×48cm深さ24cm、P₇は径42cm深さ50cmを測る。



第224図 005号住居跡実測図 (1/80)

005号住居跡土層説明

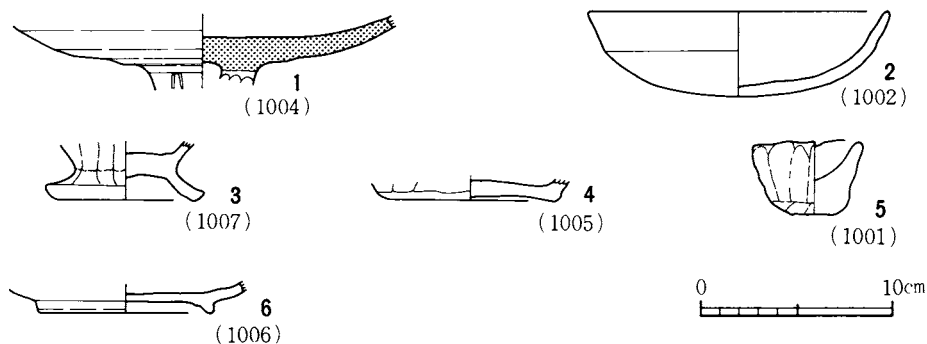
- 1. 黒褐色土 焼土粒・炭化材粒を含む。
- 2. 暗褐色土 山砂・ロームブロックを含む。
- 3. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 4. 暗褐色土 黒色土主体。山砂・焼土粒を含む。
- 5. 暗褐色土 ローム粒主体。



005号住居跡カマド土層説明

- 1. 暗褐色土 山砂・焼土ブロックを含む。
- 2. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 3. 暗黒灰色土 山砂・灰を含む。
- 4. 暗褐色土 山砂を含む。
- 5. 暗赤褐色土 焼土を多く含む。

第225図 005号住居跡カマド実測図 (1/40)



第226図 005号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

カマドは、東壁のほぼ中央に構築され、両袖を残す。天井部は崩落し不明。壁へは9cmほど掘り込み、煙道部は75°で立ち上がる。火床部は、21cm×16cmの楕円形に窪む。

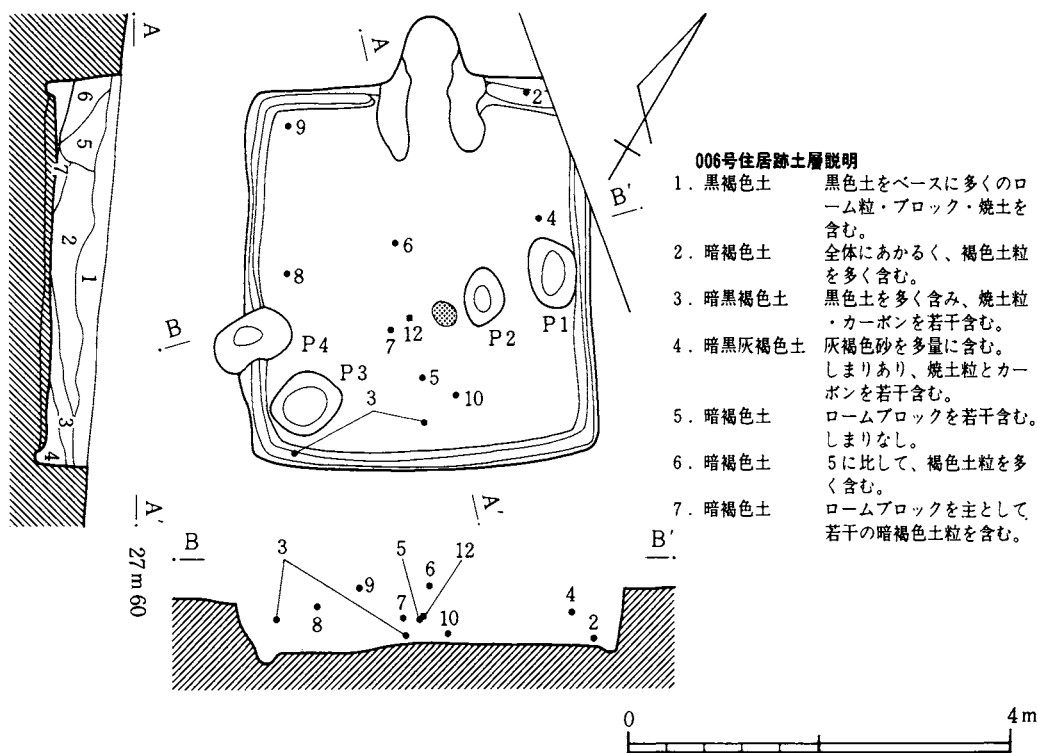
出土遺物は、たいへん少なく、本跡に伴うとは断定し難いが、図化可能な置物は6点である。第226図1は須恵器高坏である。胎土は、やや砂質で、雲母片を含む。焼成は、温度がやや低かったのか、いわゆる土師質須恵器と呼ばれているもので、堅緻には焼きあがっていない。脚部に長方形のスカシ窓が3か所付く。2は、丸底の坏、体部は内彎し、口縁部は体部との境に設けられた弱い稜から、逆「八」の字状に開く。調整は内外面ともナデを施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈す。口径15.5cm、器高4.5cmを測る。3は、高坏の脚部で、調整は、体部内面はナデ、脚部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデを施す。底径は、8.1cmを測る。4は、カメ底部で、底径8.8cmを測る。5は、手づくね土器で、口径5.4cm、底径2.5cm、器高3.9cmを測る。6は、本跡に伴うとは考え難いが、高台付坏である。底径8.6cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り後、高台を貼り付けている。

006号住居跡 (第227～229図)

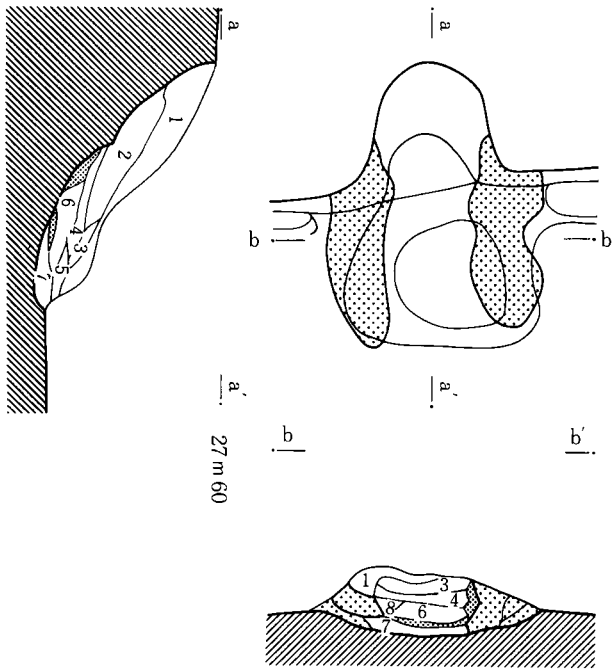
調査区の東側に位置する。主軸方向は、N-32°-Wを示す。規模は、主軸方向に4m、主軸と直交する方向に、3.6mを測り、長方形を呈す。検出面から床面までは、56cmの掘り込みを有し、壁はほぼ真直に立ち上がる。壁下には、幅20cm前後、深さ10cm前後の壁溝が調査区外の北東コーナー部も含めて、全周するものと考えられる。床面は、荒掘りの後、8cm前後埋め戻して仕上げている。ほぼ、平坦に保たれている。柱穴は、不明である。床面からは、ピットが3か所検出されているが、その配列から柱穴とは考え難い。P₁は、東壁直下にあり、径76cm×52cm深さ12cm、P₂は、径60cm×42cm、深さ9cmを測る。P₃は南西コーナー付近にあり、貯蔵穴と考えられる。径76cm×64cm深さ40cmで楕円形を呈す。カマドは北壁のほぼ中央に構築され、両袖を

残す。天井部は崩落し、不明。袖の内側は、火を受けて、赤変している。壁へは、32cmほど掘り込み、煙道部は48°で立ち上がる。火床部は、径27cmで円形に窪む。

出土遺物は、比較的多く、図化可能な遺物は、12点を数える。第229図1～8は、坏である。1は、体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部で逆「八」の字状に開く。調整は、体部下端、及び底部をヘラケズリする。体部内外面ともナデを施す。口径14.4cm、底径6.7cm、器高4.2cmを測る。胎土は、砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は、茶褐色を呈す。2は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。調整は、体部内外面ともミガキを施す。体部下端及び底部はヘラケズリを施す。胎土は緻密で、焼成は普通、色調は暗茶褐色を呈す。口径16.4cm、底径5.0cm、器高5.0cmを測る。3は、体部は、やや内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。調整は、体部内外面ともナデを施す。体部下端及び底部はヘラケズリを施す。胎土は緻密で焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈す。口径14.9cm、底径7.2cm、器高は4.3cmを測る。4は、体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや肥厚して外反する。器肉は、全体的に厚手な作りをしている。調整は、内外面ともナデを施し、体部下端をヘラケズリする。底部は、ヘラケズリを施すが回転糸切り痕を残す。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈す。口径13.4cm、底径6.5cm、器高4.7cmを測る。5は、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反し、

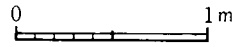


第227図 006号住居跡実測図 (1/60)

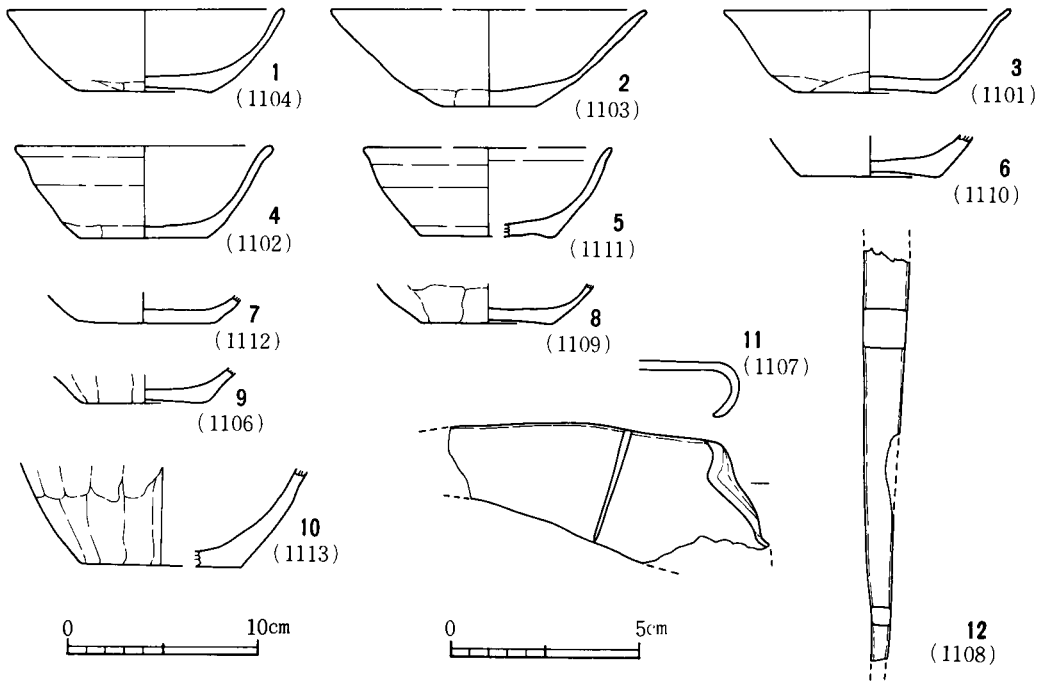


006号住居跡カマド土層説明

- | | |
|----------|---------------------|
| 1. 暗褐色土 | 山砂主体。焼土粒・ロームを含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 山砂主体。焼土粒・炭化材粒を含む。 |
| 3. 灰褐色土 | 山砂主体。天井部の崩落したものの。 |
| 4. 暗灰褐色土 | 焼土粒・ロームブロック・灰を含む。 |
| 5. 青黒灰色土 | 山砂・炭化材粒を多く含む。 |
| 6. 暗青灰色土 | 灰層 |
| 7. 暗黒褐色土 | ローム粒主体。焼土粒・炭化材粒を含む。 |
| 8. 暗褐色土 | 山砂主体。焼土粒・炭化材粒を含む。 |



第228図 006号住居跡カマド実測図(1/40)



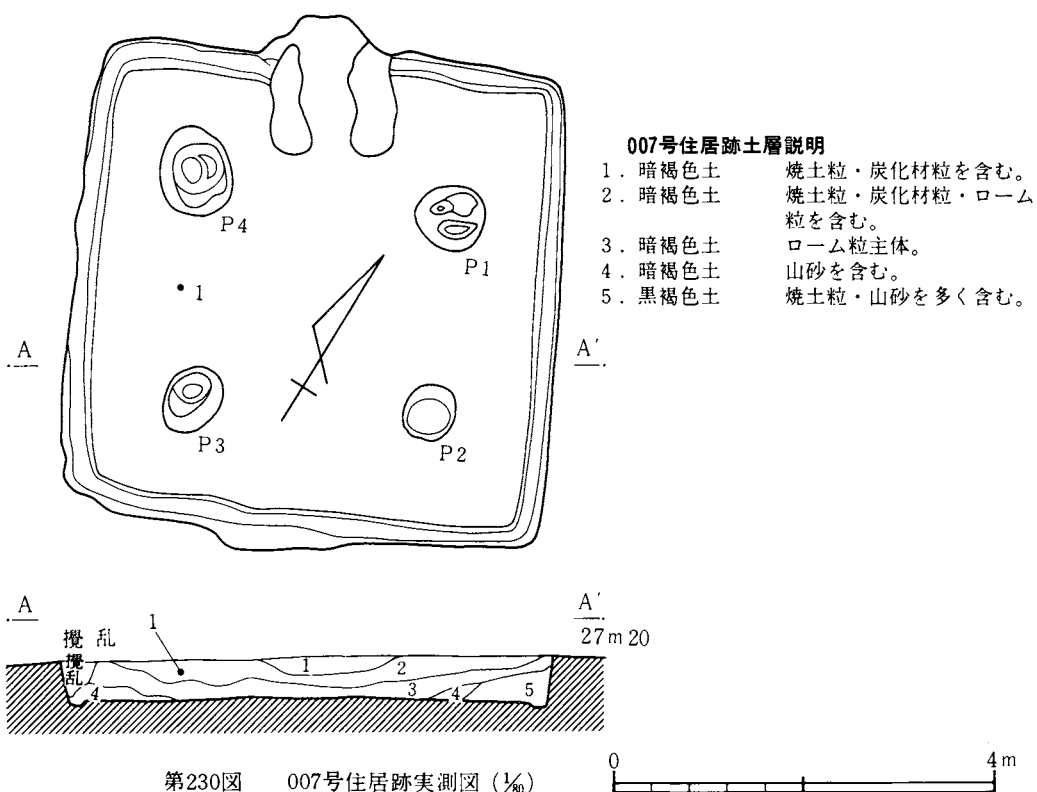
第229図 006号住居跡出土遺物実測図(1~10・1/4, 11・12・1/2)

尖り気味に開く。調整は、内外面ともナデを施し、底部は回転ヘラ切り痕を残す。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈す。口径13.0cm, 底径6.8cm, 器高4.5cmを測る。6は底部に回転糸切り痕を残す。7は底部にヘラケズリを施す。8は底部に回転糸切り痕を残す。9・10はカメ底部である。11は、鉄製鎌で、半分を欠く。12は鉄片で、断面は正方形を呈す角釘である。

007号住居跡 (第230~232図)

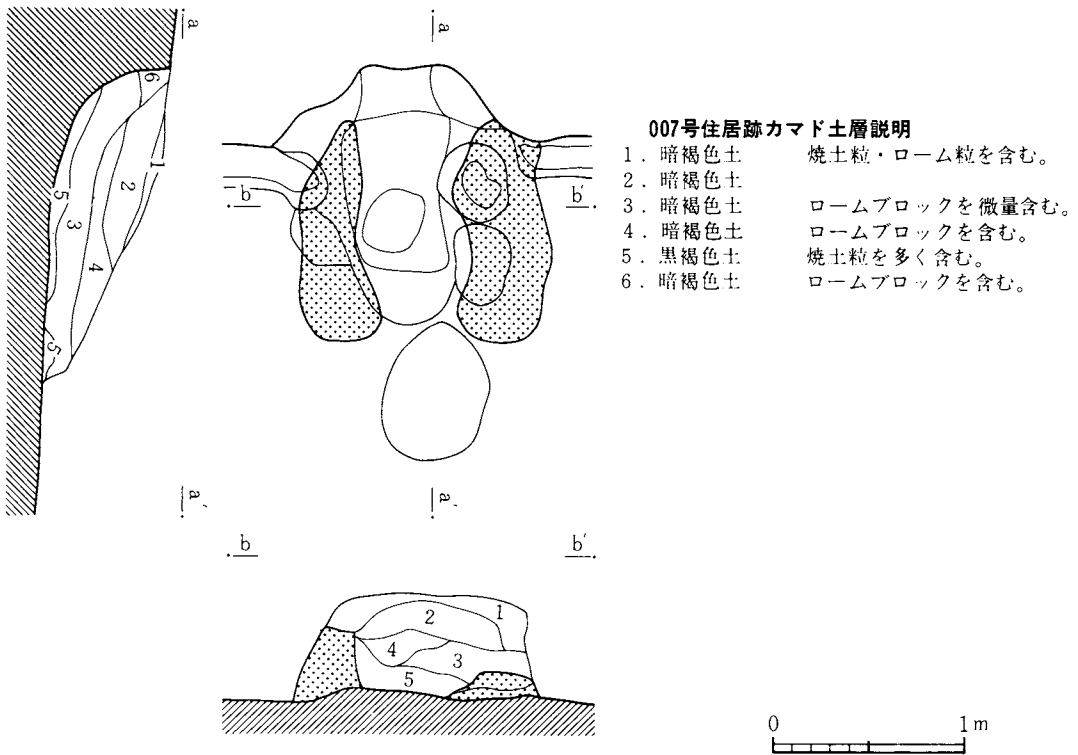
調査区の最も南に位置する。主軸方向は、N-32°-Wを示す。規模は、主軸方向に5.04m, 主軸と直交する方向に5.08mで、ほぼ正方形を呈す。検出面から床面までは、約44cmの掘り込みを有し、壁は、南壁中央部を除いて、真直に立ち上がる。壁下には、巾26cm前後、深さ6cm程の壁溝が、全周して検出されている。壁溝には、特にピットなどは認められない。床面は、荒掘り後ほぼ平坦に埋め戻して仕上げられている。柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に4か所穿たれている。P₁は径74cm×68cm, 深さ46cm, P₂は径60cm, 深さ41cm, P₃は径72cm×62cm, 深さ46cm, P₄は径92cm×26cm, 深さ74cmを測る。柱穴間の間隔は、P₁~P₂間は2.24m, P₂~P₃間は2.54m, P₃~P₄間は2.32m, P₄~P₁間は2.86mで、ややプランが台形にゆがむ。

カマドは、北壁のほぼ中央に構築され、両袖を残す。天井部は崩落し不明。壁へは、38cmほ

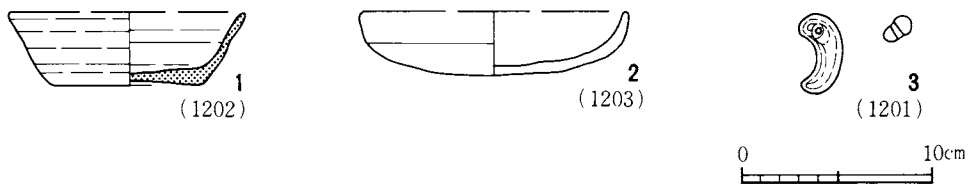


ど掘り込み、煙道部は、61°で立ち上がる。火床部は33cm×28cmで楕円形に窪む。

出土遺物は、少なく図化可能なものは3点である。本跡に伴うとは断定しがたいが、第232図1は、須恵器環である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反して終わる。調整は、内外面とも横ナデ、底部はヘラケズリを施す。胎土は砂粒を含む。焼成は普通で、色調は暗灰色を呈す。口径12.2cm、底径26cm、器高3.8cmを測る。2は坏で、体部は内彎して立ち上がり、口縁部でほぼ垂直に終わる。調整は内外面ともヘラケズリ後、ナデを施す。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は暗褐色を呈す。口径13.7cm、器高3.2cmを測る。3はめのう製の勾玉で、長さ3.9cm、孔径は0.2cmを測る。片側から穿孔している。



第231図 007号住居跡カマド実測図 (1/40)



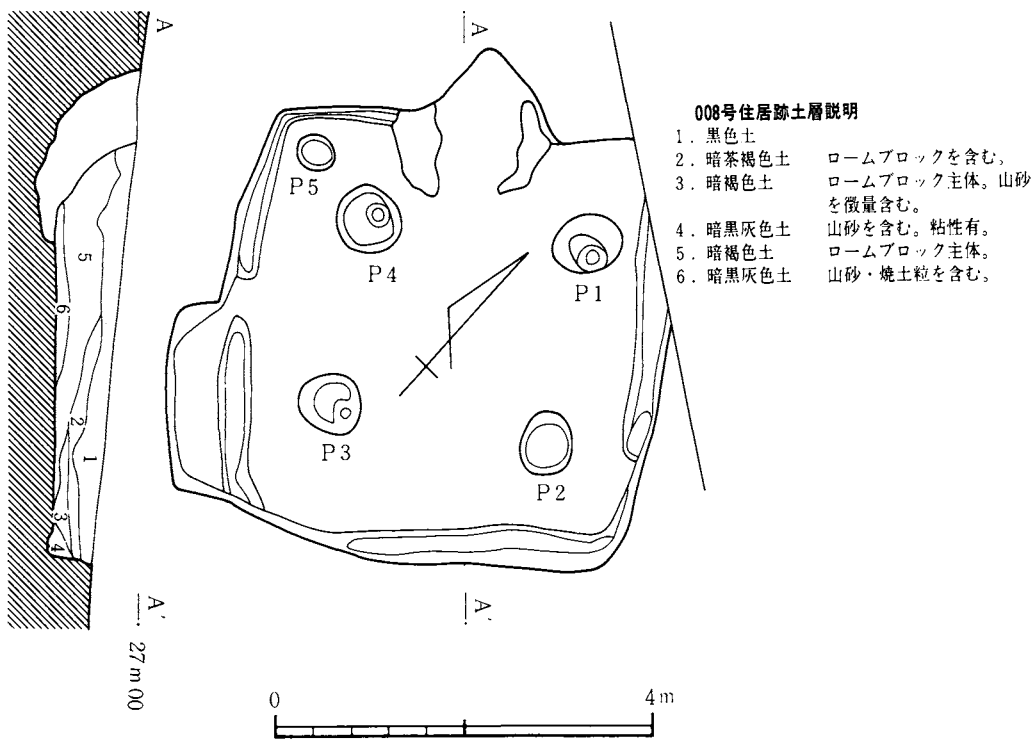
第232図 007号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

008号住居跡 (第233~237図)

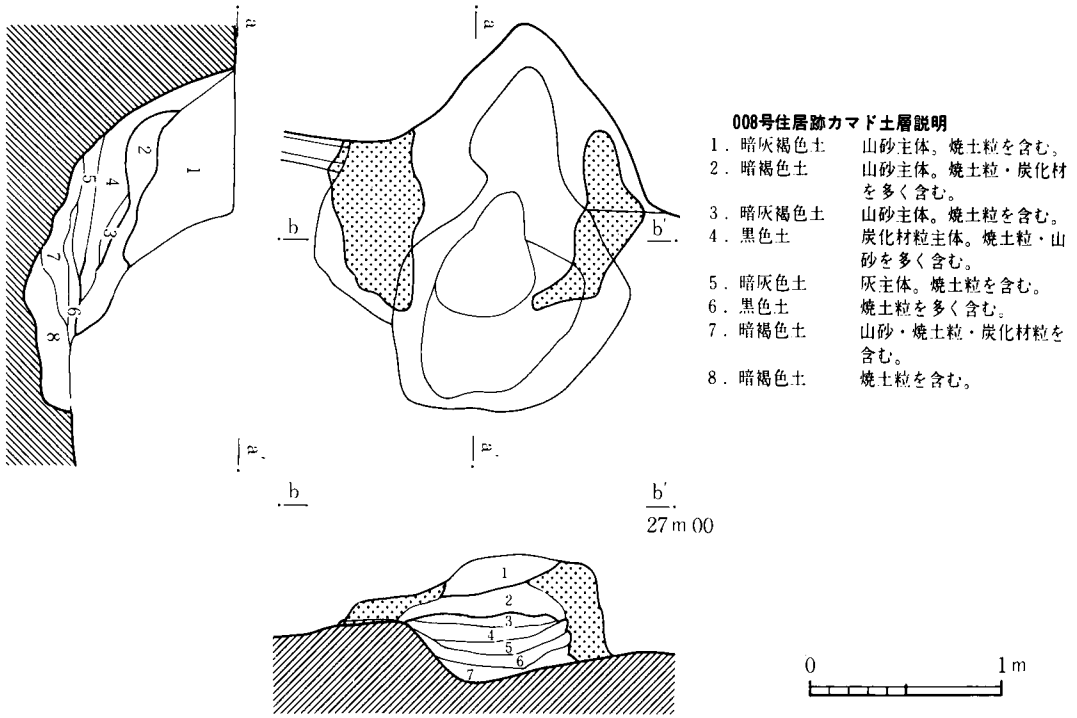
調査区の最も東に位置する。主軸方向は、N-43°-Wを示す。規模は、主軸方向に4.74m、主軸と直交する方向に4.68mで、ほぼ正方形を呈し、南側のコーナー付近に200cm×56cmの長方形のはり出し部を持つ。検出面から床面までは、約92cmの掘り込みを有し、壁はほぼ直垂に立ち上がる。壁下には、巾20cm前後、深さ8cm程の壁溝が部分的に検出されている。床面は、ほぼ平坦に保たれている。はり出し部との床面の高さは同じで、はり出し部との境には周溝が検出されている。柱穴は各コーナーを結ぶ対角線上に4か所穿たれている。P₁は径76cm×56cm、深さ56cm、P₂は径68cm×56cm、深さ60cm、P₃は径68cm×64cm、深さ45cm、P₄は径68cm、深さ68cmを測る。柱穴間の間隔は、P₁~P₂間は1.96m、P₂~P₃間は2.36m、P₃~P₄間は1.92m、P₄~P₁間は2.46mでややプランが台形にゆがむ。

カマドは、北壁のほぼ中央に構築され、両袖を残す。天井部は崩して不明。壁へは、39cm程掘り込み、煙道部は、60°で立ち上がる。火床部は、径72cm×55cmで楕円形に窪む。

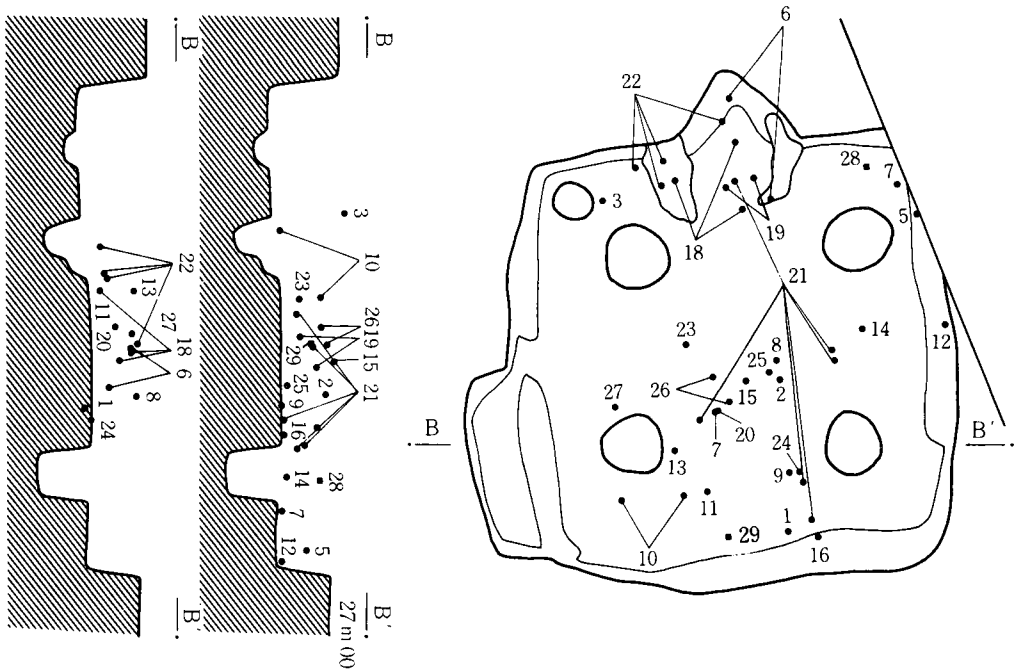
出土遺物は多く、図化可能な遺物は30点を数える。1~11は坏である。1は須恵器坏で、体部はほぼ直線的に立ち上がり、体部中央部より外反し、口唇部で肥厚して終わる。調整は、内外面ともナデを施す。底部及び体部下端はヘラケズリを施す。胎土は、緻密で焼成は普通、色調は暗灰褐色を呈す。口径15.6cm、底径5.4cm、器高4.5cmを測る。2は、体部はゆるく内彎し



第233図 008号住居跡実測図 (1/80)



第234図 008号住居跡カマド実測図 (1/40)



第235図 008号住居跡遺物出土状況図 (1/80)

て立ち上がり、口唇部で肥厚して終わる。調整は、内外面ともナデを施す。底部及び体部下端はヘラケズリを施す。色調は、暗灰褐色を呈す。口径12.4cm、底径5.8cm、器高4.3cmを測る。

3は、体部は内彎しながら立ち上がり、体部中央部付近より僅かに外反して終わる。調整は、内外面ともナデ、底部及び体部下端はヘラケズリを施す。胎土は、砂質で荒い。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈す。口径11.9cm、底径5.2cm、器高4.0cmを測る。

4は体部が直線的に立ち上がり、口縁部で外反して終わる。調整は、内外面ともナデ、底部及び体部下端はヘラケズリを施す。色調は、明黄茶褐色を呈す。口径12.6cm、底径6.5cm、器高4.1cmを測る。

5は、体部は直線的に立ち上がり、体部中央部付近より僅かに外反して終わる。調整は、内外面ともナデ、底部はヘラケズリを施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は暗黒褐色を呈す。口径14.5cm、底径7.0cm、器高4.0cmを測る。

6は、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で器肉が薄くなり、外反して終わる。調整は内外面ともナデ、底部はヘラケズリを施す。色調は暗褐色を呈す。カマド内より出土した。口径13.6cm、底径6.5cm、器高4.8cmを測る。

7は、体部が直線的に立ち上がり、底部はやや上げ底気味となる。調整は、内外面ともナデ、体部下端ヘラケズリを施す。底部は回転ヘラ切り痕が残る。色調は、暗茶褐色を呈す。口径15.6cm、底径7.3cm、器高5.3cmを測る。

8は、体部が僅かに内彎しながら立ち上がり、口唇部が僅かに外反して終わる。調整は、内外面ともナデ、底部及び体部下端にヘラケズリを施す。色調は、黒褐色を呈す。口径12.2cm、底径5.6cm、器高4.6cmを測る。

9は、体部は内彎しながら立ち上がり、口唇部で僅かに外反する。器肉が全体に厚い。調整は、内外面ともナデ、底部及び体部下端にヘラケズリを施す。胎土は、砂質で荒く、二次焼成により器面が荒れている。色調は、暗赤褐色を呈す。口径13.0cm、底径5.4cm、器高4.2cmを測る。

10は、体部が僅かに内彎して立ち上がる。調整は内外面ともナデ、底部は、回転ヘラ切り痕が残る、ヘラ記号の「×」が刻まれている。胎土は緻密で色調は、暗褐色を呈す。口径13.6cm、底径7.0cm、器高4.2cmを測る。

11は、底部で回転ヘラ切り痕が残る。口径8.6cmを測る。

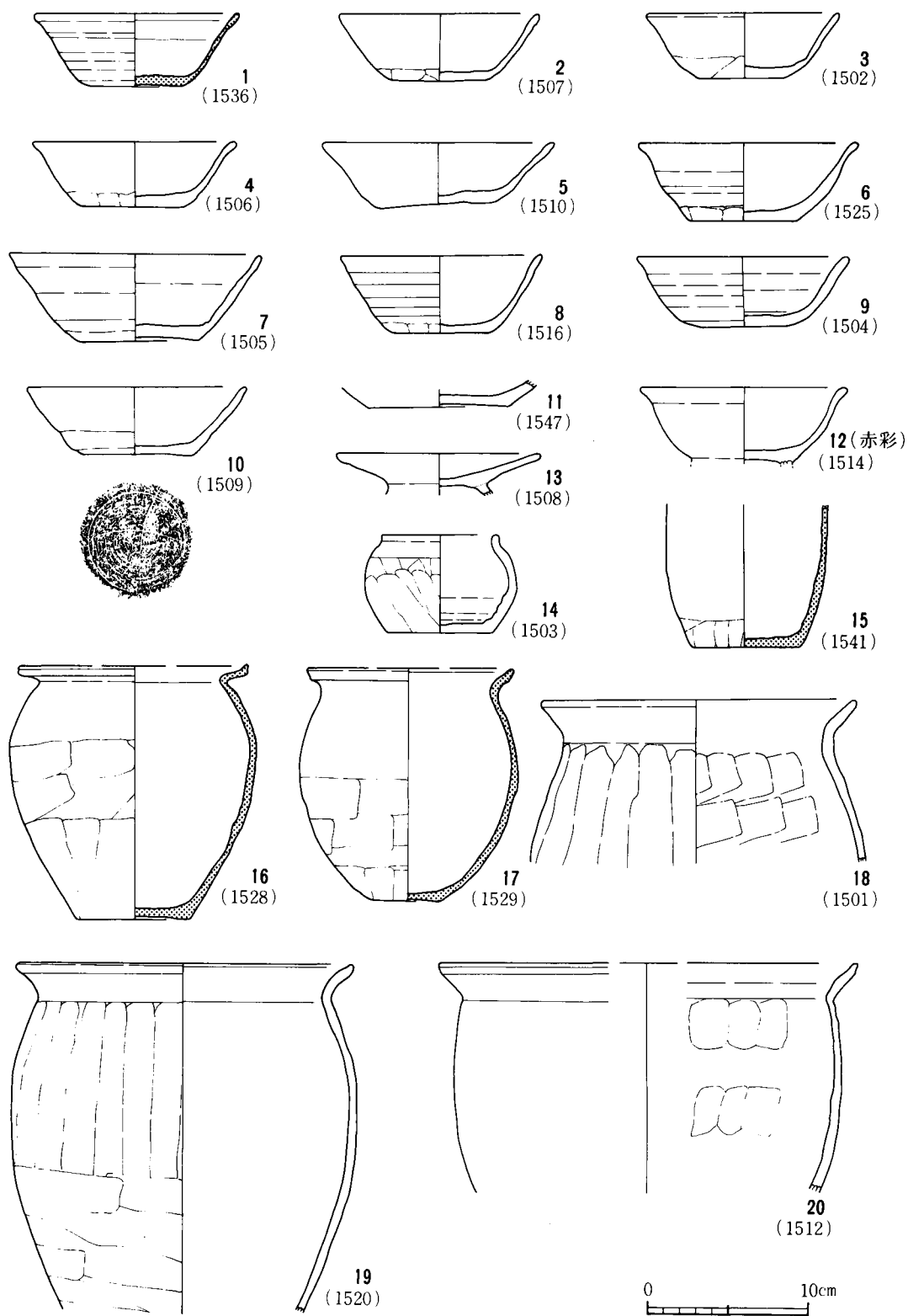
12は、高台付坏で、高台部分を欠く。調整は、内外面ともナデを施す。高台部は、体部とは別個に作って貼り付けている。内面には、赤彩を施す。胎土は緻密で焼成良好、色調は暗灰褐色を呈す。口径12.7cmを測る。

13は、高台付皿で、底部は回転糸切り後、高台部を貼り付けている。調整は内外面ともナデを施す。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は、暗茶褐色を呈す。口径12.6cmを測る。

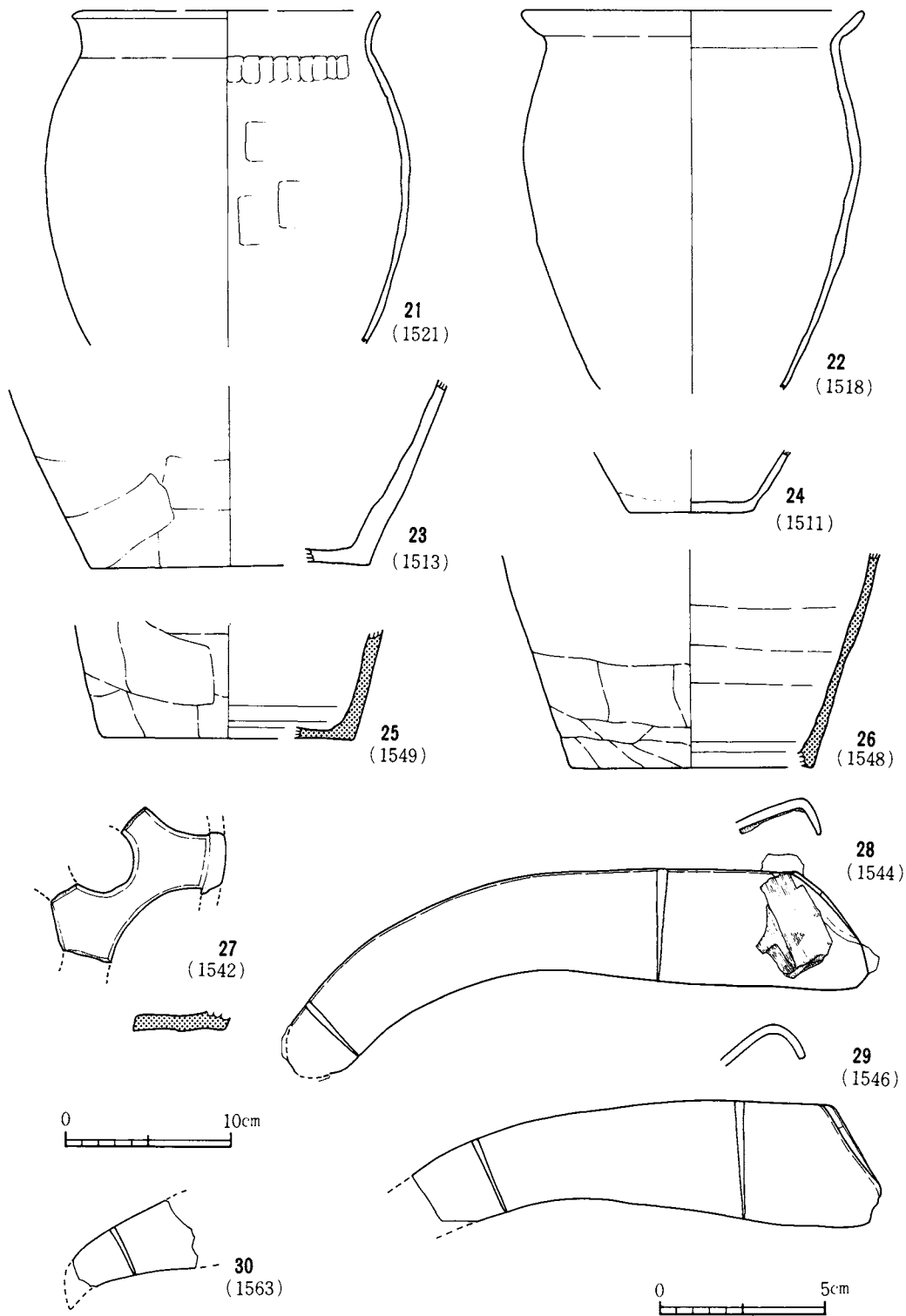
14は、鉢で、体部は内彎して立ち上がり、口縁部で内傾し、口唇部で直立して終わる。調整は、体部外面及び底部はヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は砂質で、色調は、黒褐色を呈す。口径7.4cm、底径6.5cm、胴部中央部最大径は9.6cm、器高5.9cmを測る。

15から24までは甕である。15は、須恵器甕で、胴部が直線的に立ち上がる。調整は、内外面ともナデ、体部下端にヘラケズリを施す。胎土は、砂質で、焼成は良好、色調は黒青灰色を呈す。底径は、6.8cmを測る。

16は、須恵器甕で、胴部上半に最大径



第236図 008号住居跡出土遺物実測図(1)($\frac{1}{4}$)



第237图 008号住居跡出土遺物実測図(2) (1/4) (28~30・1/2)

を持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部で直立して終わる。調整は、体部外面はヘラケズリ後、ナデ、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。色調は、外面は暗青灰色、内面は暗赤褐色を呈す。口径14.2cm、底径6.7cm、器高15.6cm、最大径15.2cmを測る。17は須恵器甕で、胴中央部に最大径を持つ。調整は、体部外面の口縁部から胴中央部までナデ、胴中央部から底部までヘラケズリを施す。内面はナデを施す。胎土は、砂粒を含む。色調は青灰色を呈す。口径12.8cm、底径4.0cm、器高19.3cm、最大径13.6cmを測る。18は甕で、胎土は砂質、色調は明黄褐色を呈す。調整は、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリを施す。口縁部はナデを施す。口径19.5cm、を測る。19は甕で、調整は胴部上半部は縦方向、胴部下半部は横方向のヘラケズリ、口縁部はナデを施す。色調は、茶褐色を呈す。口径20.9cm、最大径21.3cmを測る。20は、甕で胴部外面はヘラケズリ後ナデを施す。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は暗茶褐色を呈す。口径25.9cmを測る。21は甕で、調整は、胴部外面は丁寧なナデを施す。胴中央部内面は、横方向ヘラケズリを施す。胎土は砂粒を含む。色調は、暗茶褐色を呈す。口径18.3cm、最大径21.8cmを測る。22は、長胴の甕で、二次焼成を受け、胴部内外面とも、荒れていて調整は不明。色調は、暗茶褐色を呈す。口径20.5cmを測る。23は、甕底部で、胴下半部及び底部にヘラケズリを施す。胎土は砂質で、色調は、暗褐色を呈す。底径16.6cmを測る。24は、甕底部で、胎土は砂質、色調は、暗茶褐色を呈す。底径7.0cmを測る。25から27は須恵器甕である。25は、五孔の甕底部で、胴部外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は砂粒を含み、色調は、暗黒褐色を呈す。底径15.1cmを測る。26は、五孔の甕で、胴下半部にヘラケズリ、内面にナデを施す。内面には輪積み痕が残る。胎土は砂粒を含み、色調は、暗黒褐色を呈す。底径14.7cmを測る。27は、五孔の甕底部である。28から30は、鉄製鎌である。28は、完形で、着柄部に木質が残る。長さ18cm、刃部巾3.2cmから2.2cm、厚さ0.5cmを測る。29は、先端部を欠くが、残存長12.8cm、刃部巾3.8cmから2.2cm、厚さ0.4cmを測る。30は、先端部のみ遺存する。残存長刃部巾2.1cmから1.2cm、厚さ0.3cmを測る。

009号住居跡（第238～240図）

調査区の東側に位置する。主軸方向は、N-24°-Wを示す。規模は、主軸方向に、4.66m主軸と直交する方向に3.34mを測り、長方形を呈す。検出面から、床面までは、46cmの掘り込みを有し、壁は、ほぼ真直に立ち上がる。壁下には、巾20cm前後、深さ8cm程の壁溝が全周して検出されている。床面は、ほぼ平坦に保たれている。柱穴は不明。床面からは、ピットが検出されているが性格は不明。P₁は径80cm×70cmで深さ62cmを測る。

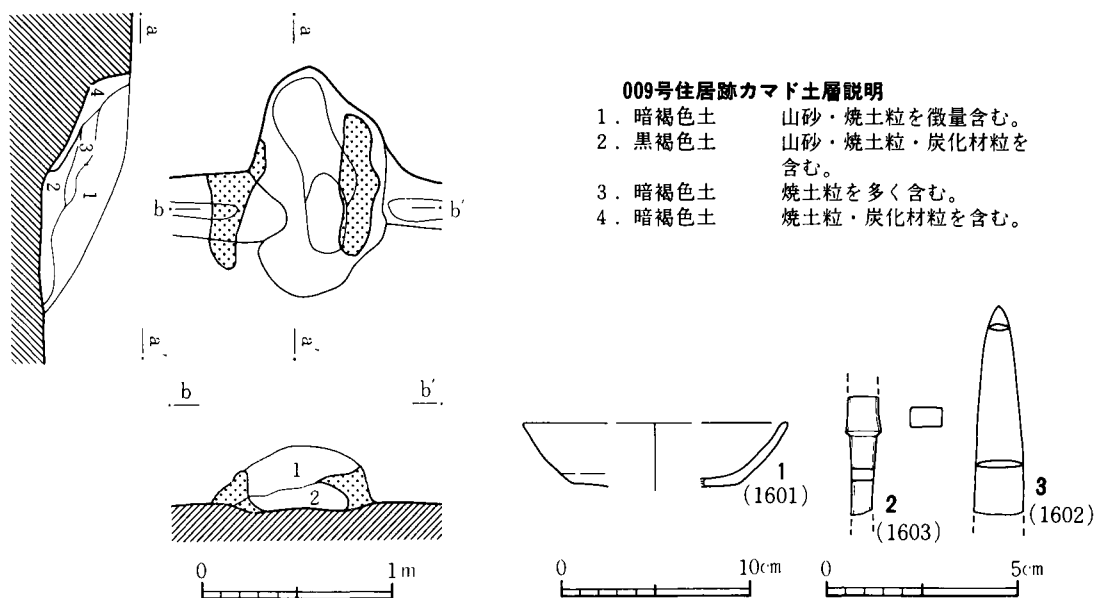
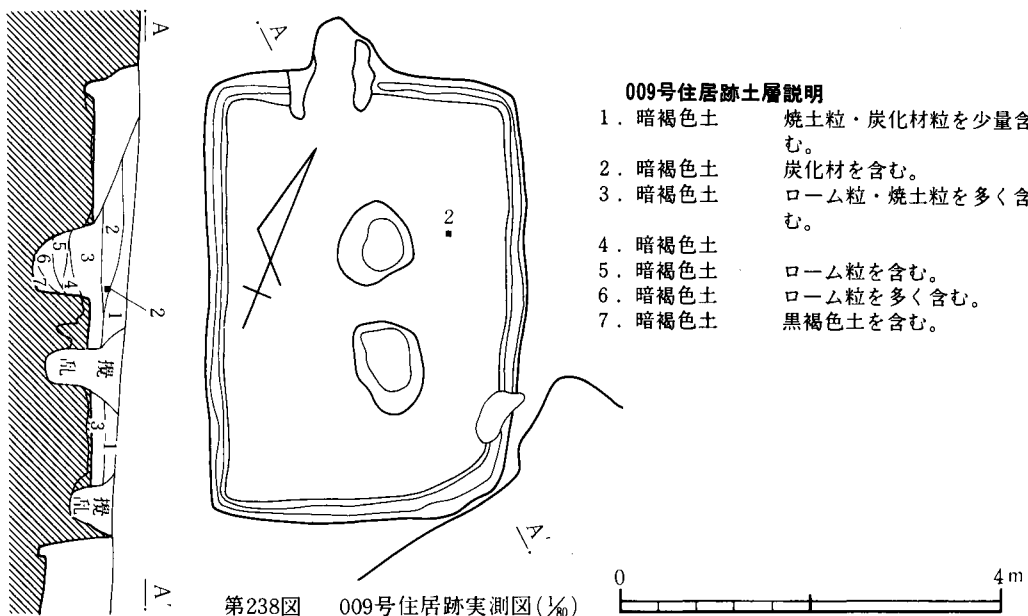
カマドは、北壁のやや西壁よりに構築され、両袖を残す。天井部は崩落し不明。壁へは、55cmほど掘り込み、煙道部は29°で立ち上がる。火床部は、径40cm×22cmで楕円形に窪む。

出土遺物は少なく、図化可能な遺物は3点である。1は坏で、体部は僅かに内彎して立ち上

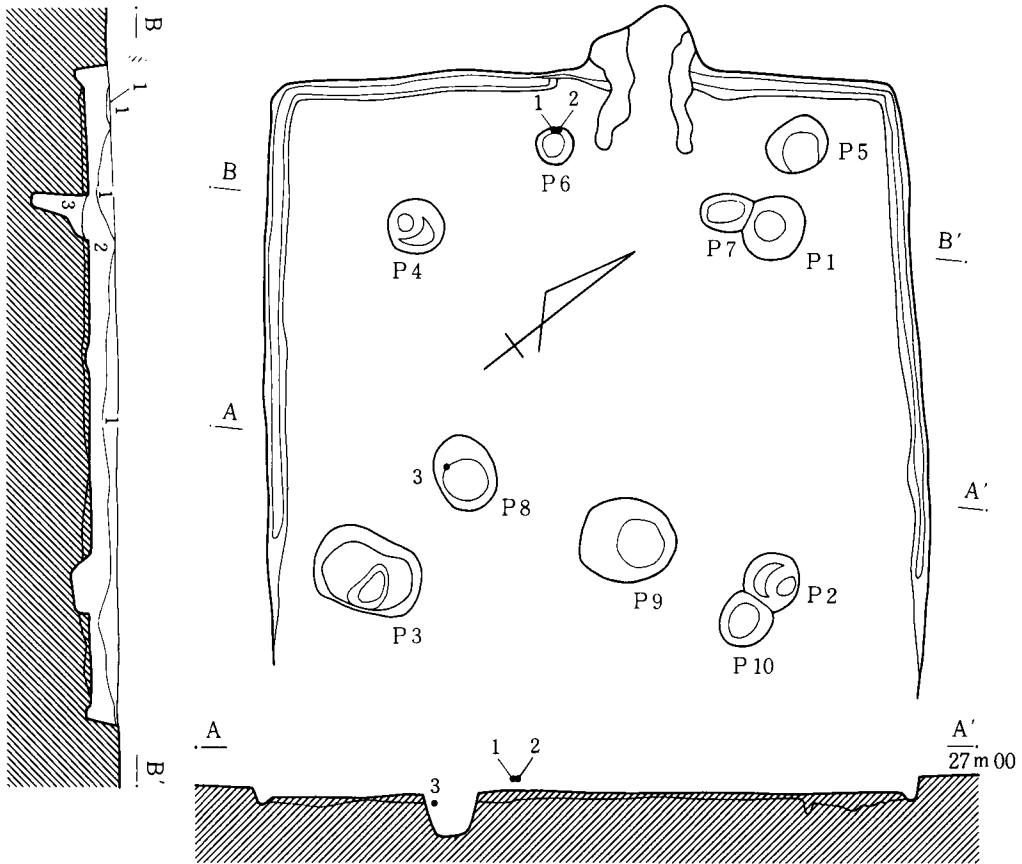
がる。口径13.9cmを測る。2は、鉄鏃で、関部が遺存する。3は鉄製品で、残存長5.5cm、厚さ0.1cmを測る。

010号住居跡 (第241・242図)

調査区の東側に位置する。主軸方向は、N-52°-Wを示す。規模は、主軸方向は不明、主軸と直交する方向に6.9mを測る。南東壁は斜面に作られているため、検出できなかった。北西壁側は、検出面より床面まで、36cmの掘り込みを有し、壁下には、周溝が南東壁側を除いて検出さ



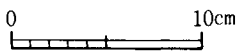
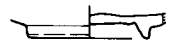
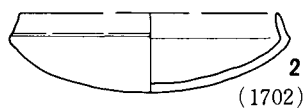
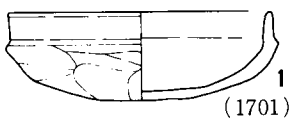
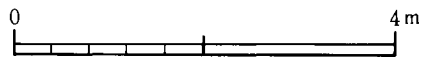
れた。壁は、南東壁を除いて、ほぼ真直に立ち上がる。床面は、荒掘りの後、8cmほど埋め戻して仕上げている。ほぼ平坦に保たれている。柱穴は、各コーナーを結ぶ対角線上に4か所穿たれている。支柱穴となるものが、P₁からP₄まで、P₅は貯蔵穴と考えられる。P₆からP₁₀は性格不明である。P₁は径70cm×62cm、深さ30cm、P₂は径58cm、深さ53cm、P₃は径136cm×80cm、深さ49cm、P₄は径30cm、深さ70cmを測る。各柱穴間は、P₁～P₂間が3.72m、P₂～P₃間が4.28m、P₃～P₄間が3.74m、P₄～P₁間が3.84mを測り、やや台形の平面プランとなる。P₅



010号住居跡土層説明

- 1. 暗褐色土 焼土粒・炭化材粒を含む。
- 2. 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。

第241図 010号住居跡実測図 (1/80)



第242図 010号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



は、径63cm×43cmで、深さ94cmを測る。

カマドは、北西壁のやや北よりに構築され、両袖を残す。壁へは、58cm程掘り込み、煙道部は、26°で立ち上がる。火床部は径74cm×60cm、深さ32cmで楕円形に窪む。

出土遺物は少なく、図化可能なものは、3点である。1は坏で、体部は内彎しながら立ち上がり、体部外面の稜より、口唇部がほぼ垂直に尖って終わる。調整は、外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は黒褐色を呈す。口径13.5cm、器高4.5cmを測る。2も坏で、体部は内彎しながら立ち上がり、体部外面の稜より口唇部は内傾し、尖って終わる。内外面ともナデを施す。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。口径13.3cm、器高4.1cmを測る。3は、高台付坏でP₀の覆土より出土し、底部外面に墨書が所在する。読みは不明。

第3節 その他の遺構と遺物

焼土跡（第243図）

池田古墳群第1号墳の墳丘下、旧表土層をはいだ段階で検出された。北側部分と、南側部分の2つに分かれる。北側部分は、長さ7m、幅0.9m、掘り込みの深さ10cmで、主軸方向はN-19°-Eを呈す。南側部分は、長さ3.86m、幅0.56m、掘り込みの深さ12cmで、主軸方向は、N-0°-Eを呈す。ソフトローム上面で検出され、覆土は上層に炭化材、焼土、暗褐色土があり、最下層（ソフトローム面）で災熱を受けて赤変している。遺物等が伴出していないので、時期等は不明であるが、古墳築造以前であることは明らかである。

土壇（第244・245図）

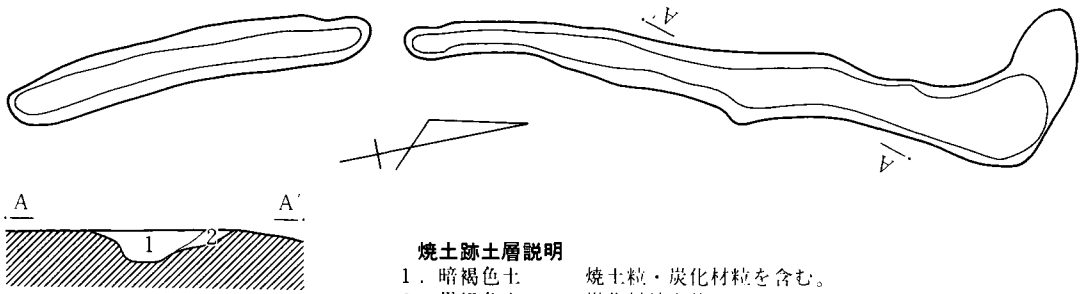
調査区の西側に、池田古墳群第1号墳の周溝中に位置する。東側の墳丘側より、西側の周溝側へ向かって、掘り込まれている。大きさは長径65cm×短径60cmで、楕円形を呈し、掘り込みの深さは60cmを測る。

遺物は、覆土上層より検出されている。1は須恵器坏である。口径10cm、器高4.8cmを測る。2も坏である。口径12.5cmを測る。調整は体部内外面ともナデを施す。3は、手捏ね土器で、口径9cm、底径5.9cm、器高4.5cmを測る。体部外面には、指頭圧痕が顕著に見られる。4は甕で胴下半部を欠く。口径21cmを測る。調整は、内外面とも丁寧なナデを施す。

表採及び一括遺物（第246～247図）

これらの遺物は12B区調査区境付近において集中して一括採取されたものの一部である。

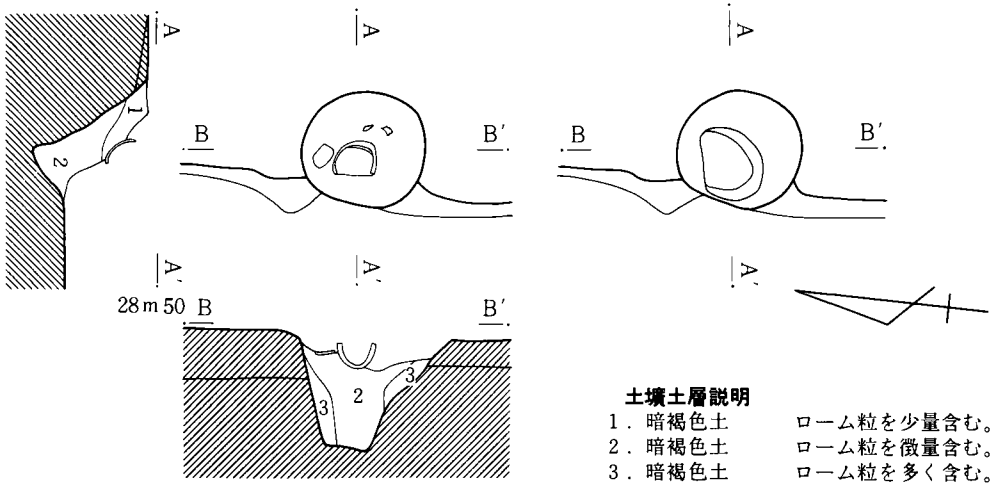
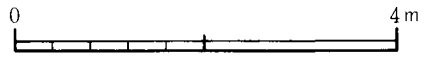
第246図1～4、第247図1は、遺構の検出されていない縄文中期初頭に位置される一群のものである。胎土中には金雲母を含み、焼成はまず良好である。文様は隆帯と瓜形及び半載竹管文による押し引き等がみられる。4は特に地文を縄文ではなく列点で施しており類例の極めて



焼土跡土層説明

- 1. 暗褐色土 焼土粒・炭化材粒を含む。
- 2. 黒褐色土 炭化材粒主体。

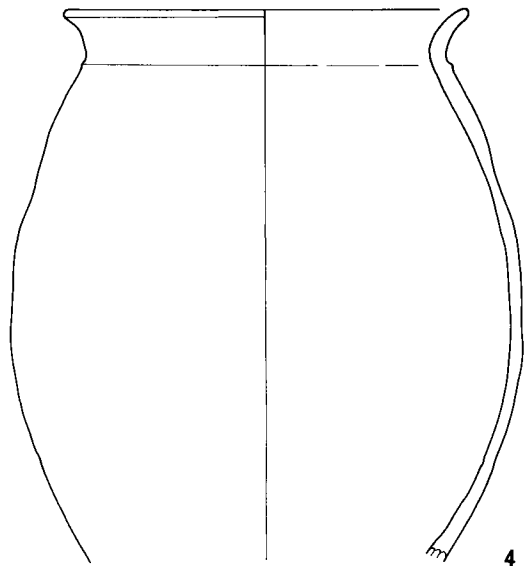
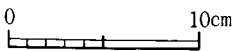
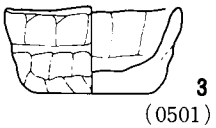
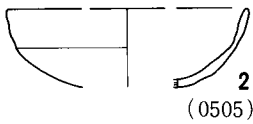
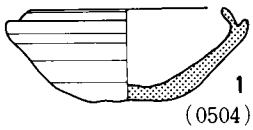
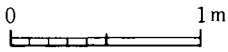
第243図 焼土跡実測図 (1/80)



土層土層説明

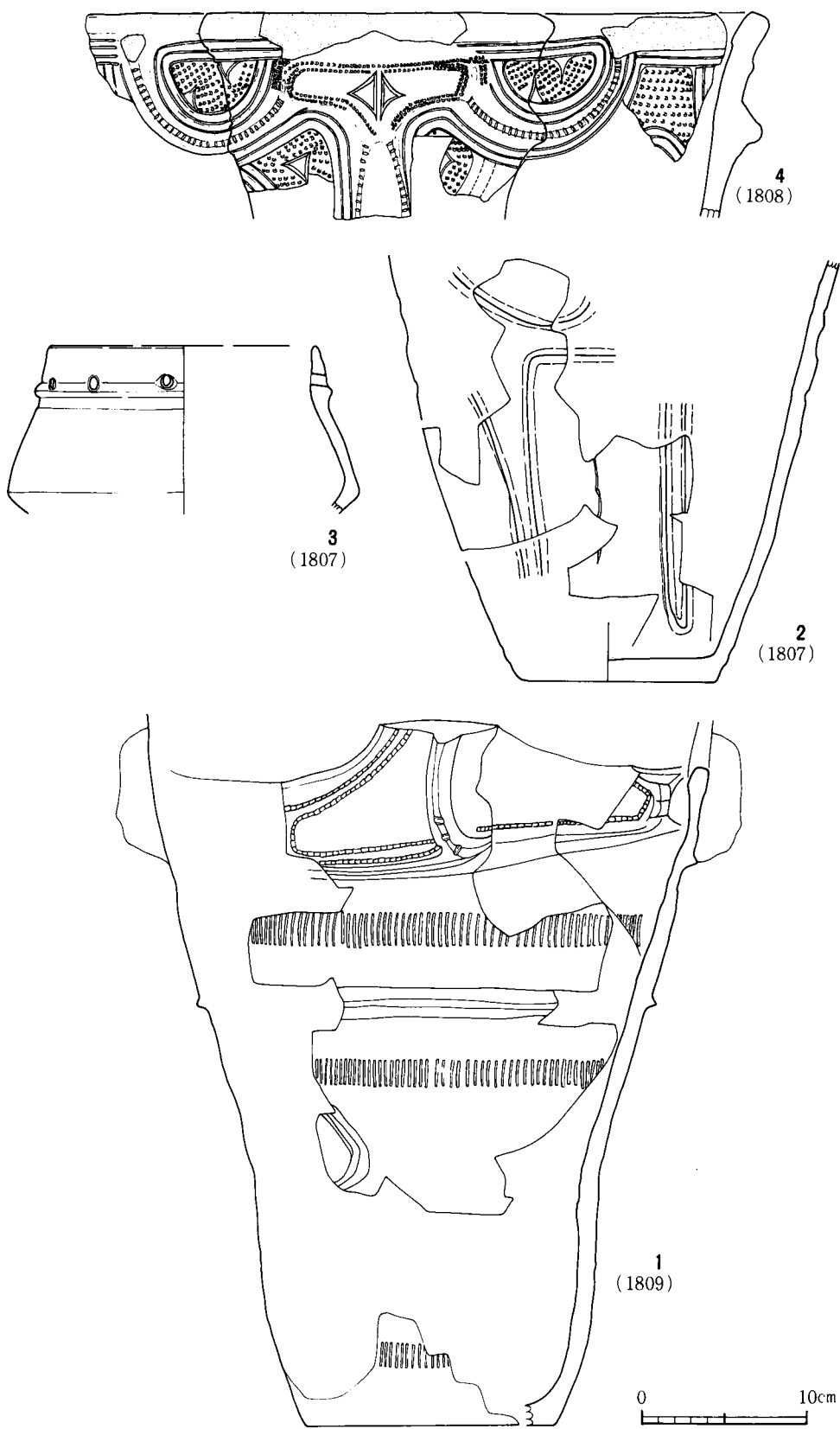
- 1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2. 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

第244図 土層実測図 (1/4) [左, 遺物出土状況・右, 完掘時]

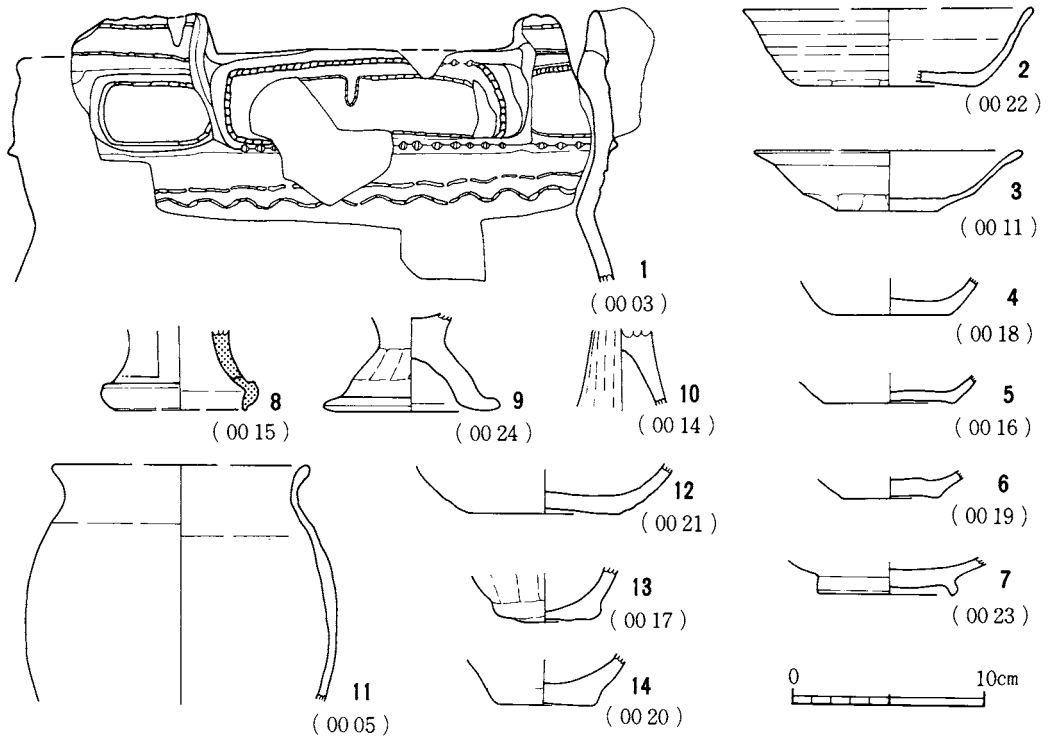


第245図 土層出土遺物実測図 (1/4)

(0502)



第246图 土器集中出土地点出土遺物実測図(1/4)



第247図 表採出土遺物実測図(¼)

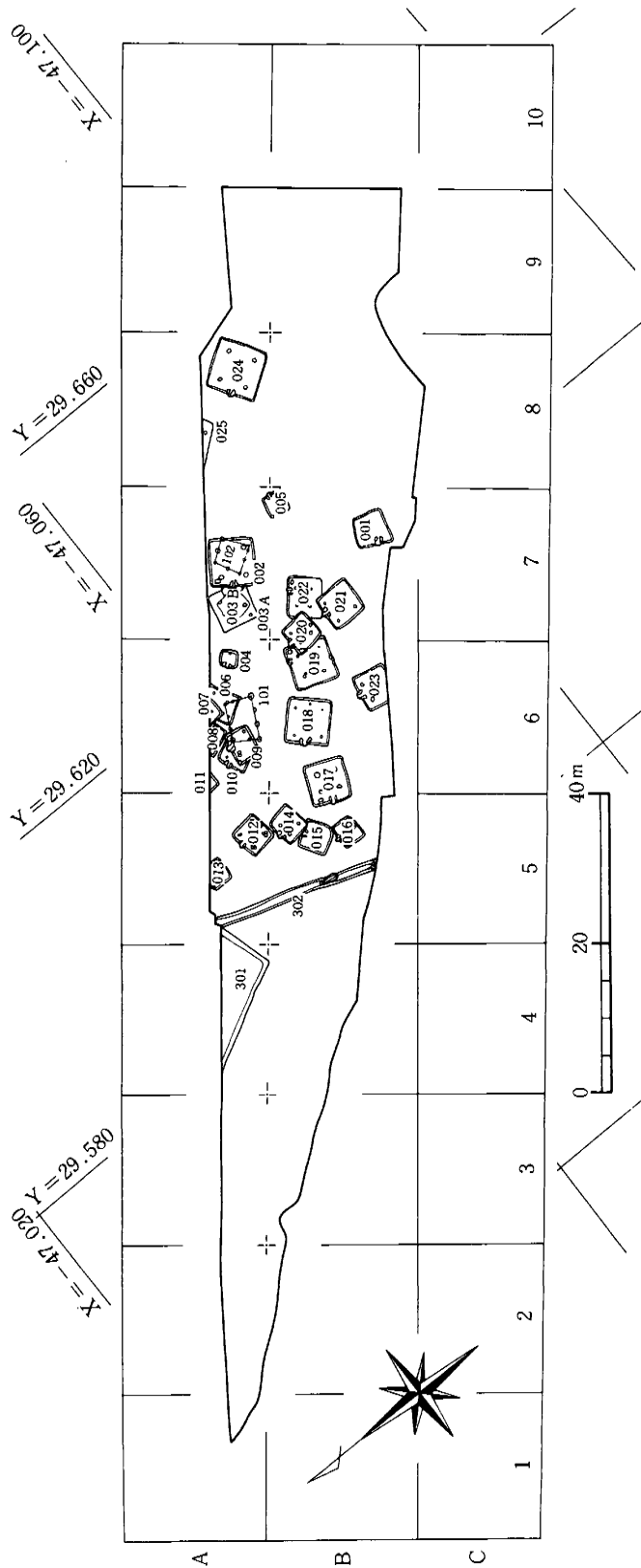
少ないタイプのものである。3は有孔ツバ付であろうか。赤褐色を呈し、胎土中に小砂粒等含む。

第247図2～14までは土師器及び須恵器の一括品のなかから実測可能なものを取り上げてみた。共に本遺跡の展開時期に伴うものであり、特に目立つものはない。

第4節 小 結

すでに再三述べたが谷津遺跡、瓜作遺跡、池田古墳群の3遺跡は大きく見て、同一の台地上に位置し、遺跡の性格、特徴、変遷などはまとめて見る必要があるが、すでに谷津遺跡・瓜作遺跡の項で多少のまとめを行なったのでここでは略したい。(麻生)

V 瓜作遺跡の調査



第248図 瓜作遺跡遺構配置図 (1/1000)

第1章 検出された遺構と遺物

この瓜作遺跡の置かれた状況は既に谷津遺跡において述べた通りである。谷津遺跡と同一の台地上に在る点、時期的にも近接している点からも、極めて近い関係の集落であったものと推測される。遺構としては住居跡が25軒、土壇1基、掘立柱建物跡2棟が調査された。(第248図)

第1節 竪穴住居跡と遺物

001号住居跡 (第249～251図)

調査区南部に位置し、001号住居跡と024号住居跡の2軒が住居群のいちばん南端にあたるものと思われる。主軸はN-62°-Wを示す。平面図でもわかる通り平面形はきわめていびつな形の方形である。かろうじて南壁及び東壁が方形らしさを示す。このまともな南壁と東壁で計ると、一辺は約4.5m×約4mである。ところがカマドの所在する西壁は、約4.5m、北壁は約4mであり、何やら当初の縄張り計画は、4.5m×4mを予定していたのであろうか。縄張りのまちがいか。(カマドの中央は正面左側から測ると2mのところにある。)

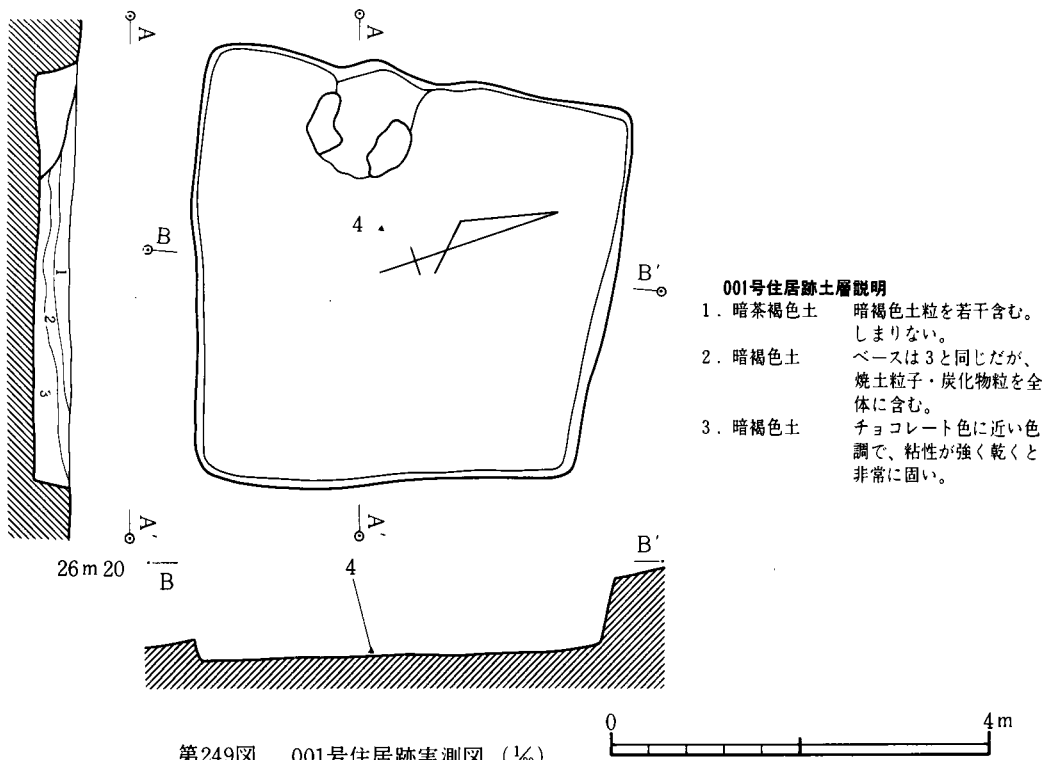
検出面より床面までは、北壁側で約80cm、南壁側で20cmでやや凹凸のある床面である。床面上には焼土、あるいは炭化物の堆積が多くみられる。柱穴は1本も確認されなかった。

カマドは軸部が残った以外は流失しており、一部には攪乱状態も入り、残りは良好ではなかった。

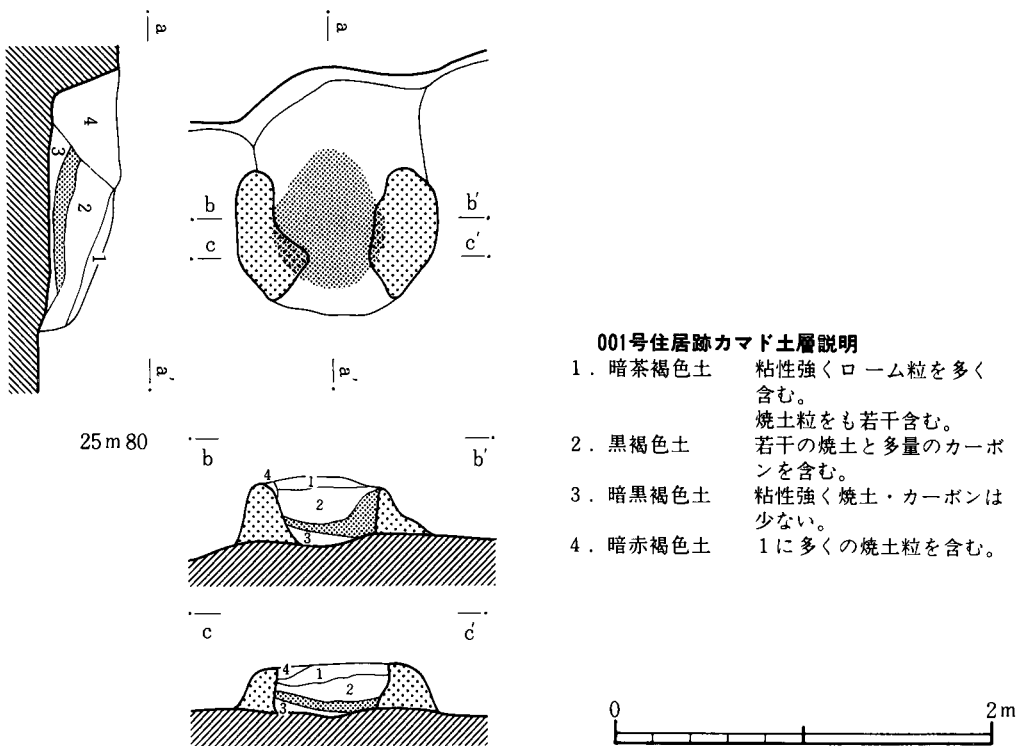
遺物は覆土中に含まれ、坏2点が床面近くから検出された以外は破片で、量も極めて少ないものである。図示した遺物もほとんど浮いたものが多かった。遺物は全体として少なく、土師器坏1の完形及び、須恵器坏2の各1点のほか、小型の甕3が1/3ほどの残りでも出土した。他は、凹石4がみられただけである。1の坏は約1/3ほどの残りでも、推定口径は約11.5cm、高さ4cm、底径は5.7cmと思われる。色調は暗褐色、胎土は砂っぽくあまり良いとは言えない。焼成は普通であらうか。底部切り離しは回転糸切りによる。

002号住居跡 (第252～256図)

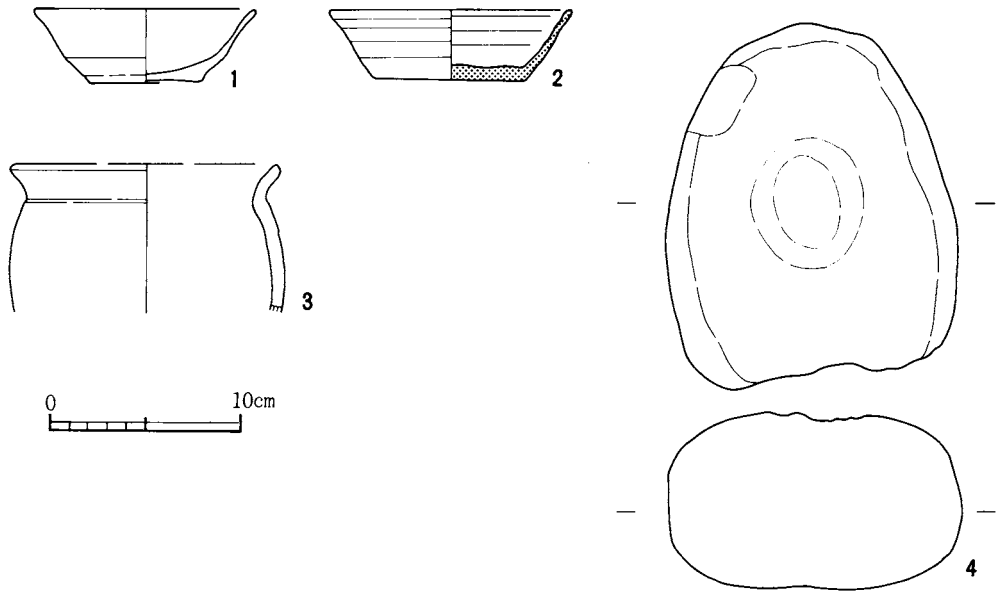
調査区の西側に位置し、003号住居跡を切り込む。また本住居跡埋没後には、002号掘立柱建物跡が築かれている。主軸方向はN-53°-Wを示す。平面形は一辺が約6mのほぼ正方形を示し、遺構確認面より床面までは、ほぼ50cmを測る。壁直下には壁溝がほぼ全周している。床は多少ゆるやかな凹凸がみられ、それほど平坦と言うほどでもない。柱穴は5本検出されている



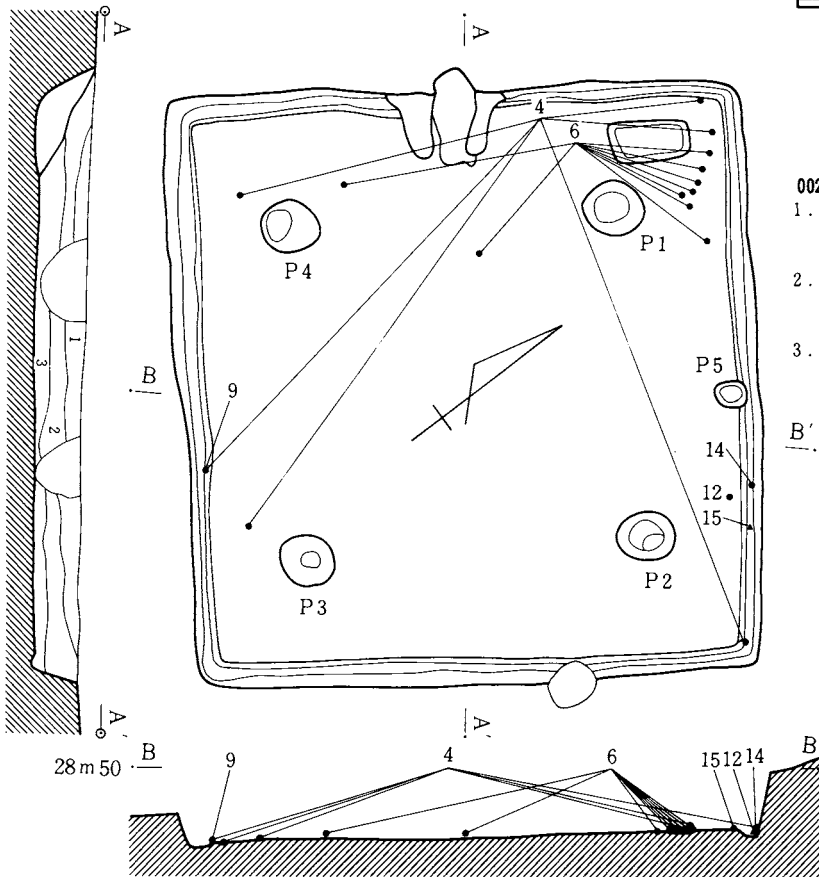
第249図 001号住居跡実測図 (1/80)



第250図 001号住居跡カマド実測図 (1/40)



第251図 001号住居跡出土遺物実測図 (1~3・¼, 4・½)



002号住居跡土層説明

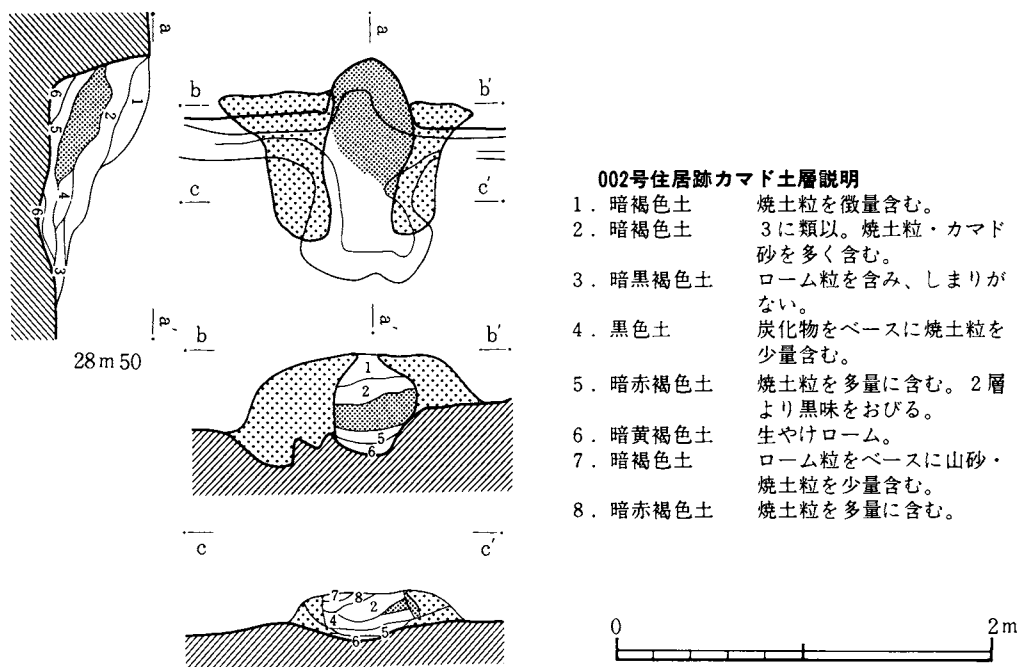
1. 暗黒褐色土 しまりなくかわくとサラサラする。微量の焼土粒を含む。
2. 暗茶褐色土 全体に暗褐色を呈すが、まだら状に黒褐色土を含む。
3. 暗褐色土 しまりなし。褐色土に多量の黒色土を含む。

第252図 002号住居跡実測図 (1/80)

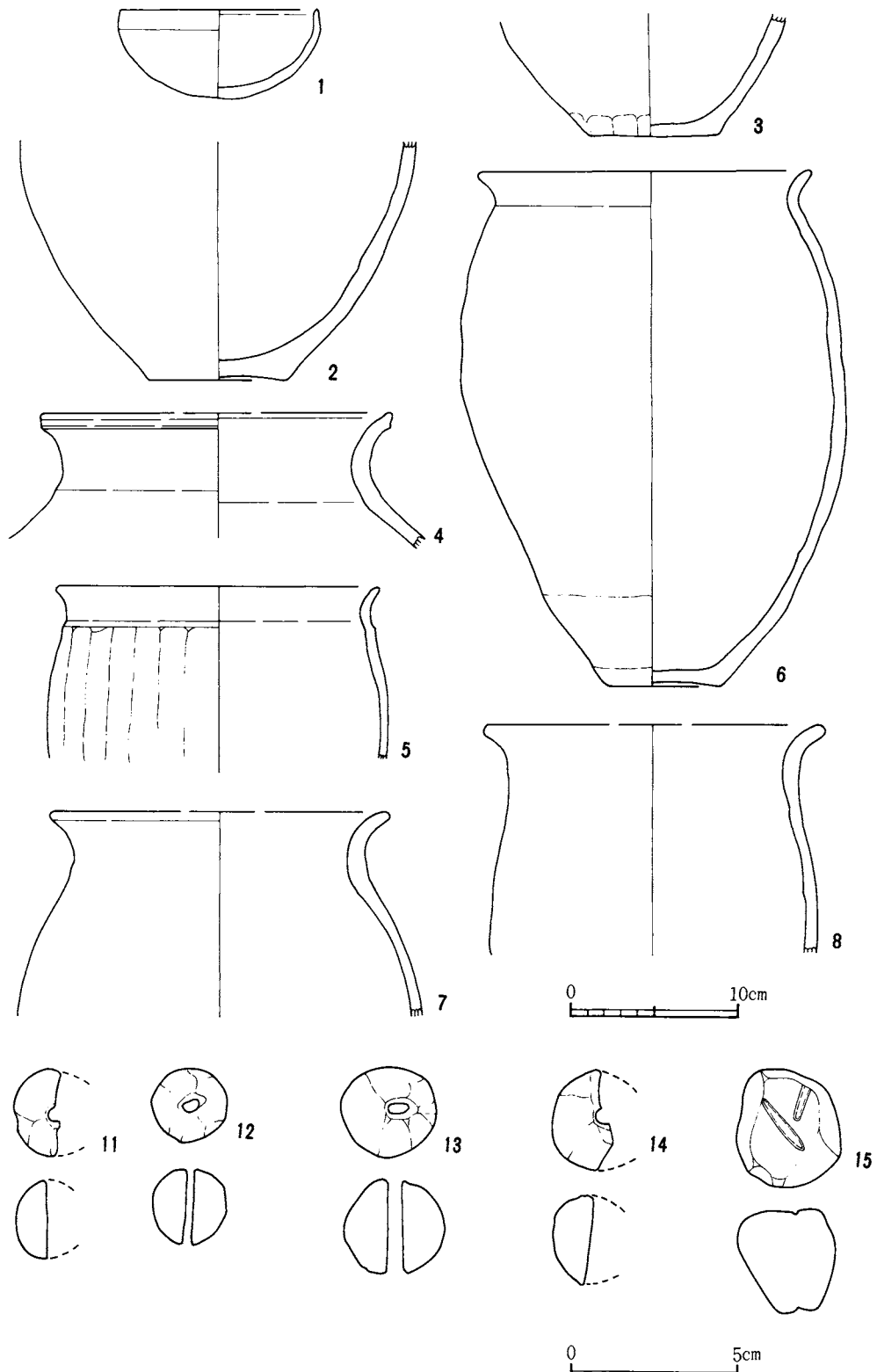
が、 $P_1 \sim P_4$ までは本住居跡における支柱穴と称せようが、 P_5 に関してはその位置からみて直接関係するものではないと思われる。床面からの掘り込みは、 $P_1 \cdot P_2$ が約40cm、 P_3 が71cm、 P_4 が66cm、 P_5 が45cmである。貯蔵穴はカマド右側より検出されている。長軸が1.8m、短軸が0.9mのほぼ長方形で、住居床面より貯蔵穴底面までは約1.1mを測る。貯蔵穴底面直上よりかなり多量の土器片が投げ込まれた感じで検出されたが、いま一つ形になるものはなく、余り物を片付けたのであろうか。

カマドは北東壁のほぼ中央に位置し、天井部が流出しているが袖部等、残りは良好である。特に火床部付近は床面より10~20cmほど掘り下げ火床面を形成している。また焼土層の堆積も厚くみられた。

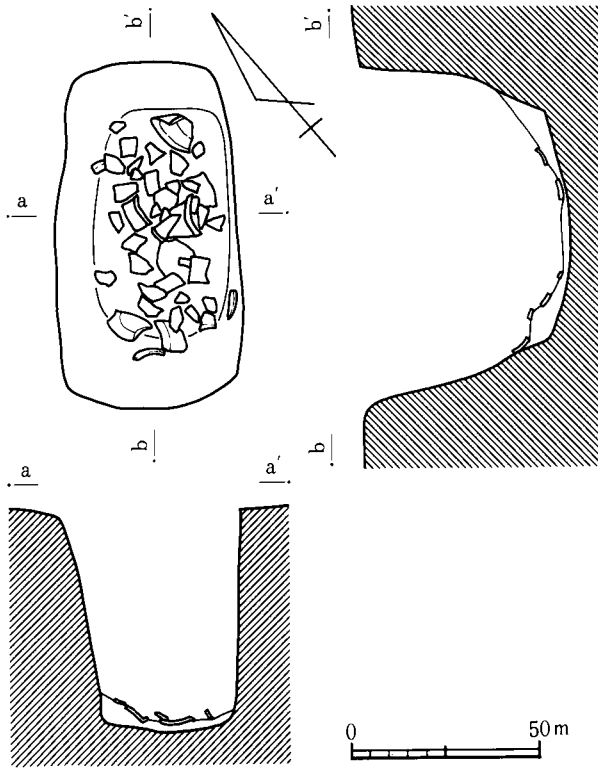
出土遺物はカマド右側に多少まとまってみられた他は、貯蔵穴内にまとまっていた。土玉類は床面及び覆土中に散乱したように感じられる。坏は1が1点のみ3/4ほどである。胎土はやや砂質で不良、色調は黒褐色、焼成は並み、内面はナデ仕上げ、外面はヘラケズリのとミガキを加えて仕上げている。2~8までは甕類である。2は黒褐色を示し、胎土中には砂粒を多く含むものの焼成は良好、内面はナデ、外面はヘラケズリのみ。3はやや黒っぽく感じられる。胎土は砂質で不良である。4は胎土・焼成ともに良好。色調は明るい黄褐色、内面はナデ仕上げ、外面はヘラケズリののちナデ仕上げ、口縁部周辺はヨコナデを施す。5は胎土中に小砂石等を多く含んでいる。色調は黒茶褐色、幾分焼けた感じである。6は胴部及び口縁の一部を欠



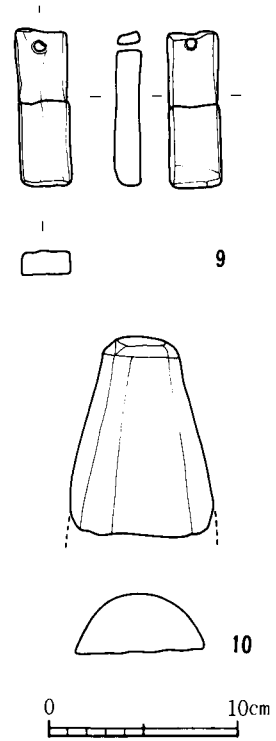
第253図 002号住居跡カマド実測図 (1/40)



第254图 002号住居跡出土遺物実測図(1) (1~8・¼, 11~15・½)



第256図 002号住居跡貯蔵穴実測図及び、出土状況図)($\frac{1}{50}$)

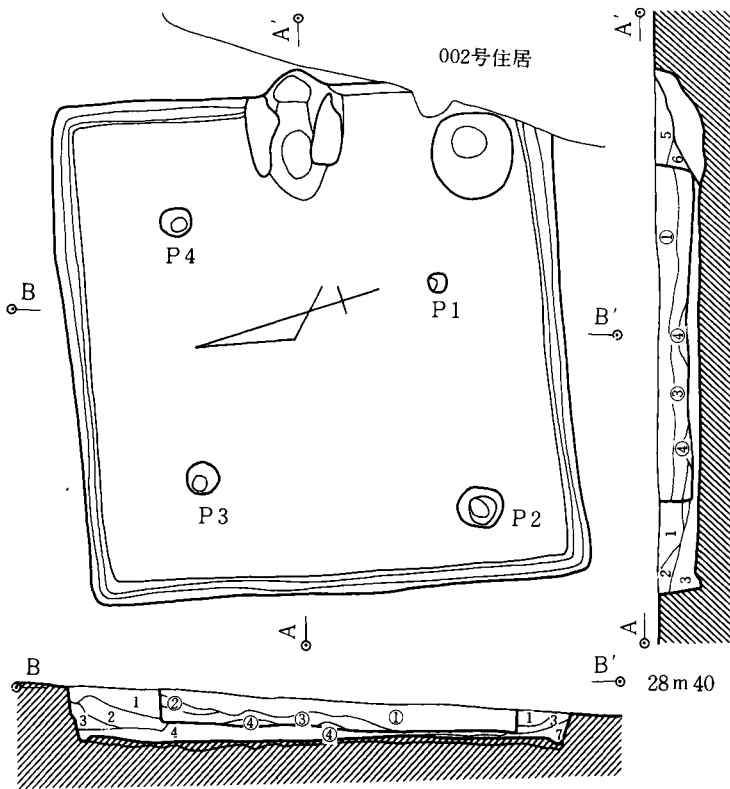


第255図 002号住居跡出土遺物
実測図(2) ($\frac{1}{4}$)

くがほぼ完形である。胎土中には小砂石が多く含まれるが焼成は良好である。外面は全面にわたりタテ方向のヘラケズリを施す。内面はヘラケズリ後ナデで仕上げている。口縁内外はナデで仕上げる。底部は多少上げ底気味である。7・8は共に胎土中にやはり砂粒を多く含み暗茶褐色、両者とも器面表面の荒れが目立つ。9は砥石である。上端部に孔があげられている。裏表共に使用痕が確認される。10の支脚は砂っぽい胎土で磨滅が多く、極めてもろいものである。一部のみで全体は不明。土玉(11~15)は底面及び覆土中からの検出で5個が発見されている。やや荒い面取りであるがナデ仕上げ、まづまづ丁寧な仕上げとなっている。土器類の胎土がいま一つ良好なものではなかった。

003A号住居跡(第257~262図)

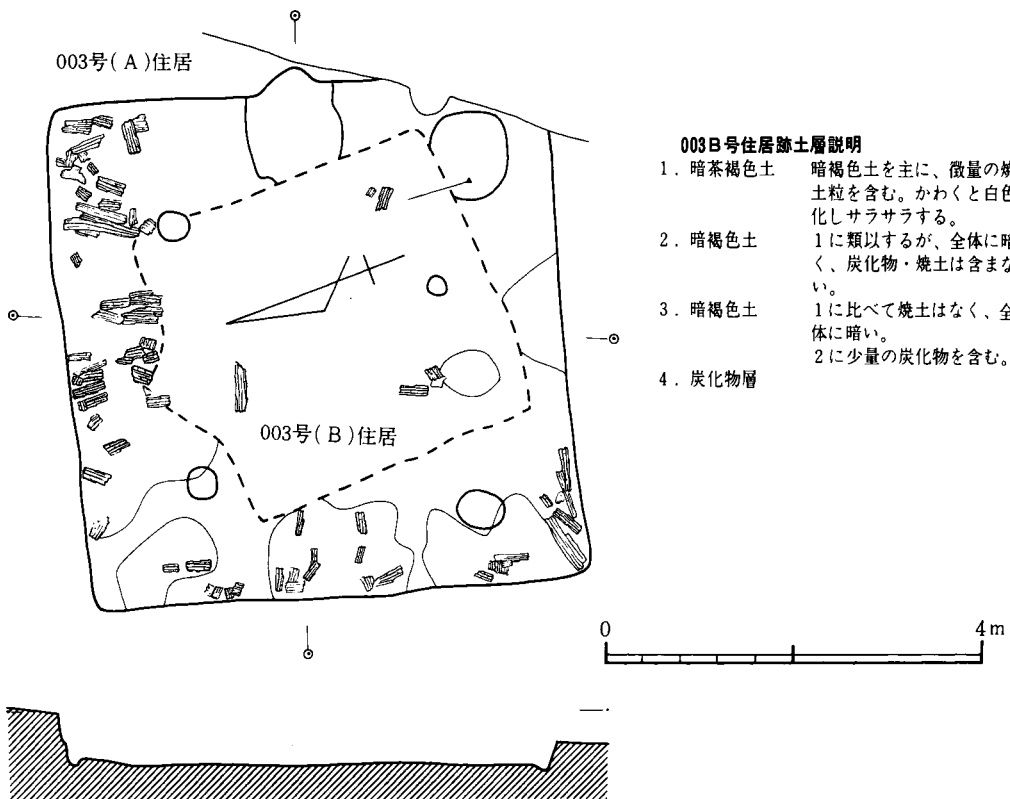
調査区北側、003号住居跡はA・Bの2軒が重なり合っている。003A号住居跡は西壁部分で002号住居跡と一部切り合っている。003A号住居跡は主軸方位E-15°-Sとほぼ東西方向を示す。一辺は約5.2mのほぼ正方形、南北方向がゆるやかな斜面のためセクションB-B'では、50cm-20cmと床面までの差が目立つが、カマド中軸ラインでほぼ40cmを測る。壁溝は002号住居跡によって失った部位で終るものと思われるが、他の3辺においては幅10cm~20cm、床面から10cm程の掘り込みできれいに壁直下をまわっている。柱穴は003A号住居跡床面上で5本ほどみら



003A号住居跡土層説明

1. 黒褐色土 暗褐色土に多くの黒色土と山砂を含む。焼土粒はわずかに見られる。
2. 黒褐色土 1に類似するが、焼土粒はない。
3. 炭化物層 炭化物・焼土を主とする。
4. 黒褐色土 炭化物・焼土を主とする。
5. 暗灰褐色土 1に多くの山砂を含む。
6. 暗灰褐色土 2層に多くの山砂を含む。
7. 暗赤褐色土 暗褐色土をベースに焼土粒を含む。

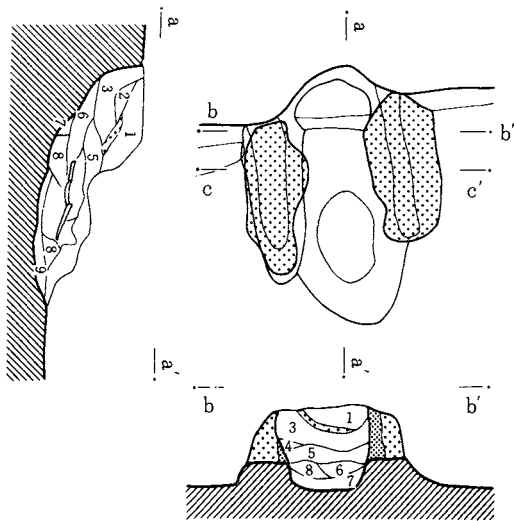
第257図 003号 A・B住居跡実測図 (1/60)



003B号住居跡土層説明

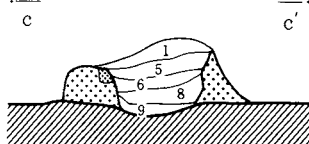
1. 暗茶褐色土 暗褐色土を主に、微量の焼土粒を含む。かわくと白色化しサラサラする。
2. 暗褐色土 1に類似するが、全体に暗く、炭化物・焼土は含まない。
3. 暗褐色土 1に比べて焼土はなく、全体に暗い。
4. 炭化物層 2に少量の炭化物を含む。

第258図 003号(A)住居跡炭化材出土状況図 (1/60)

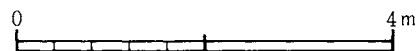
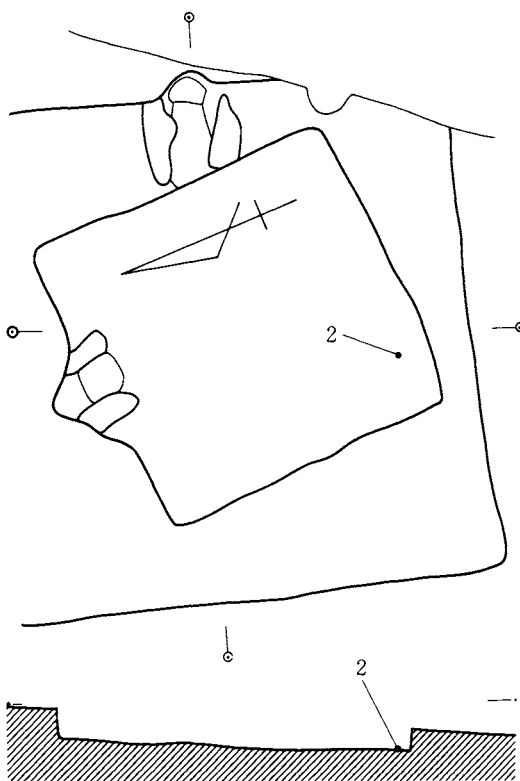
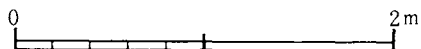


003A号住居跡カマド土層説明

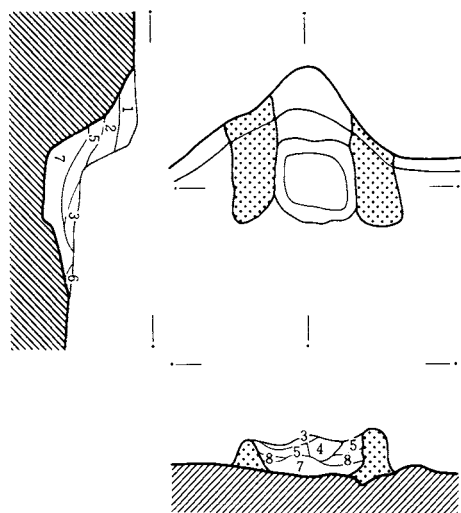
1. 暗黒褐色土 炭化物を少量含む。しまりなし。
2. 暗褐色土 ロームブロック、生やけロームを主とする。
3. 黒色土 炭化物粒を主とし、微量の褐色土粒を含む。
4. 暗赤褐色土 黒色土をベースに焼土粒を多く含む。
5. 暗褐色土 黒色土を少量含むが、焼土等は少ない。
6. 暗褐色土 5に類似するが、焼土ブロックを含む。
7. 暗褐色土 炭化物・山砂・焼土を含む。
8. 暗褐色土 少量の焼土粒・焼土ブロックを含む。
9. 暗黄褐色土 ローム生焼け。



第259図 003号(A)住居跡カマド実測図 (1/40)



第260図 003号(B)住居跡実測図 (1/80)



003B号住居跡カマド土層説明

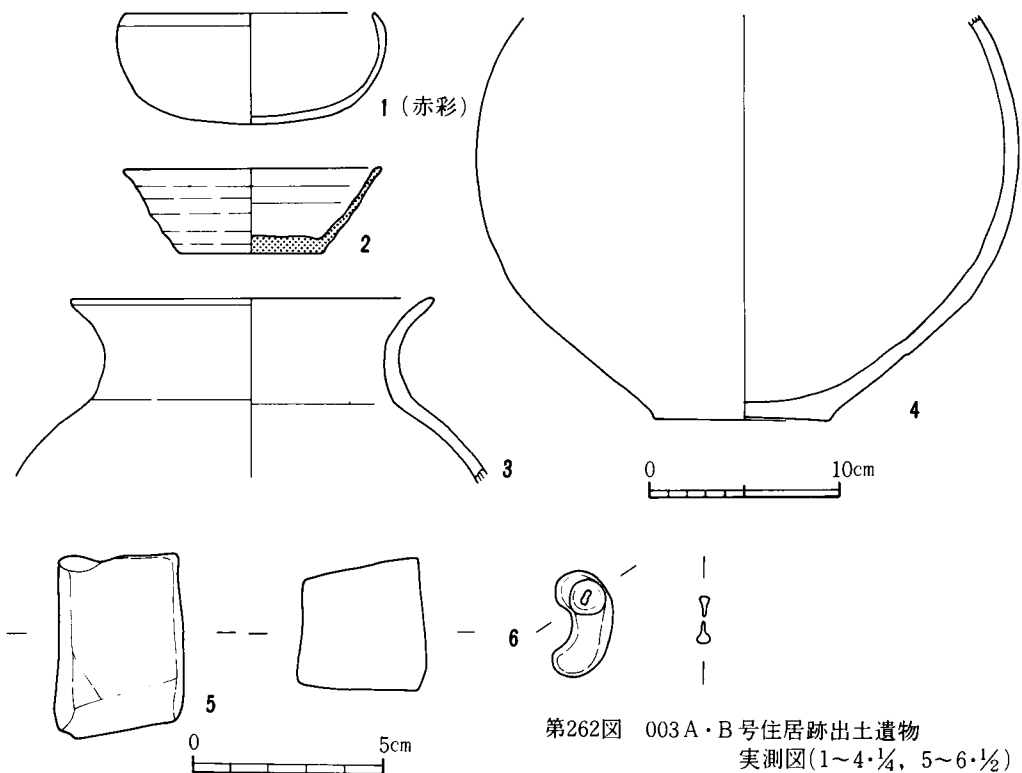
1. 暗褐色土 暗褐色土を主に多量の焼土ブロックを含む。
2. 暗灰褐色土 山砂を多く含む。
3. 暗赤褐色土 山砂の焼けたもの。
4. 黒色土 炭化物・山砂を多く含む。
5. 黒褐色土 山砂を主として、少量の黒色土を含む。
6. 黒色土 炭化物・山砂を主とする。
7. 黒褐色土 山砂・炭化物を多く含む。
8. 暗灰褐色土 炭化物を多く含む。



第261図 003号(B)住居跡カマド実測図 (1/40)

れるが、 $P_3 \sim P_4$ は位置的には問題ないが、 P_3 が床面から5cm、 P_4 は55cmと掘り込み方に差がある他、 $P_1 \sim P_2$ とは位置が多少ずれている。 P_1 は径20cm弱、掘り込みが約40cmと深く、他に比べ半分の大きさであるので、支柱穴(?)に関連するであろうか不安が残る。貯蔵穴はカマド右側から検出されている。径が約80cm程のほぼ円形を示し床面からは約65cm程の掘り込みをもつ。この貯蔵穴内にはカマド流出砂、あるいは炭化材などが流入した状態でみられる。この住居跡は焼失ないしは廃棄後、焼いたものと思われ床面からは大量の炭化材が発見されている。このことは貯蔵穴内にも炭化材、カマド流出材が流入していることから言えるだろう。そのためか住居跡内から遺物はほとんど検出されておらず、出土量もごく少ない。

火災ないしは廃棄後、焼失したものと思われ遺物量は少ない。第262図1・3～6が003A号に伴ったものの全てである。1は赤彩された碗である。3/4が遺存する。胎土は密で焼成も良好である。外面はよくミガキが加えられ、また内面もよくナデ仕上げされている。3は口縁部のみの遺存、胎土焼成等は良好、やや黄色が強い。遺存部において、内面のナデ、外面のミガキがみられる。なお口唇部外面はやや尖り気味に外返している。4はツボである。胴下半のみの遺存、胎土・焼成は良好である。色調は黒褐色を示している。外面にはヘラナデ—ヘラミガキを行っている。5の砥石は覆土上面からの検出であり、本住居跡に必ずしも伴うものではない。破片であるが4面に使用痕がみられる。6は灰緑色のあまり良質でない石材を利用した勾玉である。作りは雑である。



003B号住居跡（第257・260・261図）

003A号住居跡内にスッポリと収まる形で存在した。当初は覆土の異いなしは、火災住居の埋め込みかとも考えられたが、断面上及びカマドの存在から住居の存在が確認された。軸方向はほぼ南北に添う。一辺は約3.2mのほぼ方形を示す。床面までの掘り込みは、確認面より約30cmを測る。床面は多少の凹凸がみられる。壁溝は確認することが出来なかった。柱穴は003A号住居跡の床面上からも確認出来ず、作られなかったと考えてもよいかも知れない。貯蔵穴も確認出来ない。

カマドは割りとしっきりとした掘り込みをもち袖部基部は良く残されており、その規模は良くわかる。遺物はほとんど残されておらず、床面上から坏が一点出土したのみである。

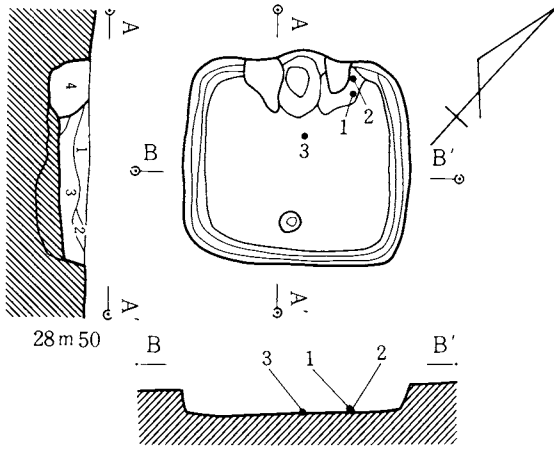
出土遺物は第262図2の須恵器坏が一点のみである。遺存度はほぼ完形に近い。胎土は多少砂質っぽいがまず良好、焼成は並み、色調は暗灰色である。ロクロびき。底部は回転ヘラキリによる切り離し痕がみられる。

004号住居跡（第263～265図）

003号住居跡の北西側、006号住居跡あるいは1号堀立柱建物跡等の集中する中間に位置する。004号住居跡は今回の調査区内では最も小型のもので、一辺は約2.2mの隅丸の方形である。主軸方向はN-41°-Wを示す。床面までの掘り込みは、遺構確認面より約20cm強を測る。なお掘り方は確認面より最大50cm、床面より20cm程掘り込んであり、埋め戻しながら平坦面を作り直している。壁溝はカマドの両端で切れるものの壁直下を幅20～25cm平均で廻っている。床面からは掘り込みはやや浅く平面図上でははっきりしているものの、数cm～5cm程なので断面図等では、いささかはっきりしなかった。柱穴は床面をかなり確認したが北東壁側にみられる直径20cm床面からは約60cm弱の掘り込みをもつものを検出ただけである。小型とも言える大きさのためか、貯蔵穴などは検出されていない。

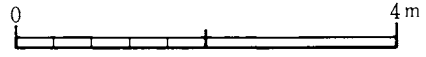
カマドは北西側に設けられていた。壁を約10cm程掘り込み、壁直下には皿状に浅い掘り込みを設け、袖部最大幅1.1m程の小じんまりとしたカマドであり、それほど大きく壊れずにみる事が出来た。遺物はさほど多くみられない。大半が破片であり散漫な分布である。

遺物出土量自体少なく、実測可能なものは図示した3点のみでありほぼ床直上、カマド右側及び直前あたりから発見されたものである。1は土師器の坏である。完形、胎土、焼成共に良好である。色調はやや暗い褐色を示す。外面はやや荒い感じのヘラケズリのあとナデを施し、内面は丁寧なナデ及びミガキを施してある。2は須恵器の高台付の坏である。ほぼ完形、胎土は良好、焼成は並みでやや暗い灰色である。高台は貼付高台で坏部底面には回転ヘラ切りの痕がみられる。3は土師器の小型の甕である。口縁の一部を欠く。胎土、焼成ともに良好である。色調はやや明るい感じのする黄茶褐色、胎土が緻密なせいであろうか。口縁部内外はヨコナデ。体部は縦方向のやや荒いヘラケズリのあとナデで仕上げている。

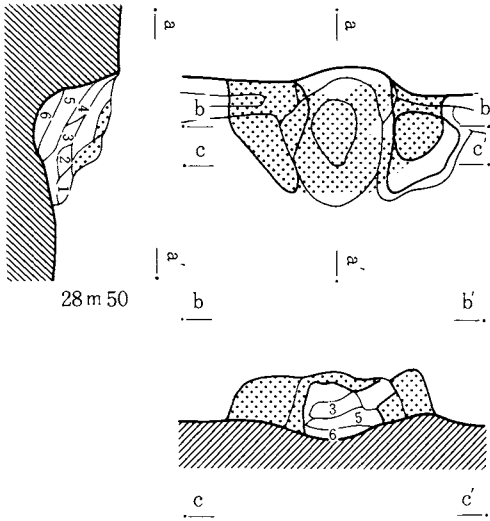


004号住居跡土層説明

1. 暗黒褐色土 黒色土をベースに多量の褐色土を含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを若干含む。
3. 暗茶褐色土 暗褐色土粒を主として若干の黒色土を含む。
4. 暗褐色土 2に多くの山砂・焼土を含む。

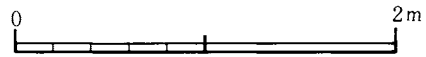


第263図 004号住居跡実測図 (1/80)

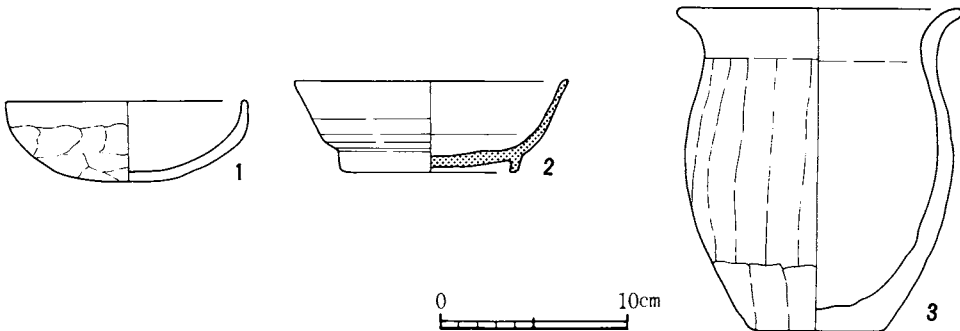


004号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
2. 暗黒褐色土 焼土・炭化物を多く含む。
3. 青黒色土 黒褐色土をベースに灰がかなり混入。焼土・山砂を若干含む。
4. 黒色土 3よりも焼土ブロックを含む。
5. 暗青白色土 灰を主体とした層で非常にしまりのない土。
6. 黒色土 炭化物を主とした層。しまりのない層。
7. 暗褐色土 炭化物を含み、黒味をおびる。



第264図 004号住居跡カマド実測図 (1/40)

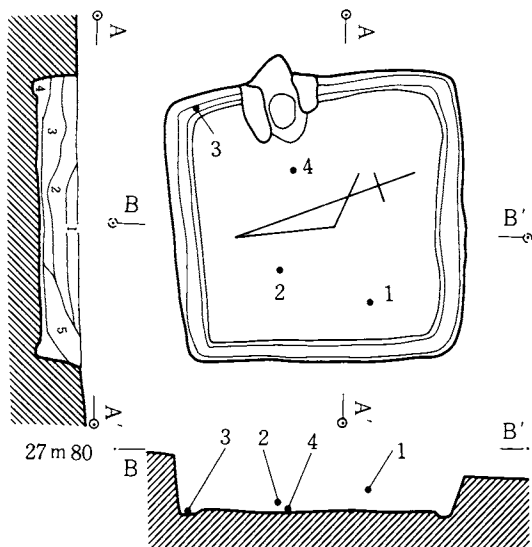


第265図 住居跡出土遺物実測図 (1/4)

005号住居跡 (第266~268図)

002号住居跡の南側024号との間に位置する。北壁及び西壁は一辺が約2.8m, 南壁と東壁は3mといささか歪さの目立つ住居である。主軸方向はE-14°-Sで、東西に主軸を向ける。床面までは遺構検出面より約40cmを測る。南北方向は斜面となるため、床面までは最大60cm, 最少40cmと傾斜が目立つ。床面はほぼ平坦で壁溝は20~30cmで全周する。貯蔵穴及び柱穴はその存在が確認されなかった。

カマドは東壁面に20cm程掘り込んで設けられている。袖は壁より最大70cm作り出されている。袖基部が残るのみで、カマド自体の遺存状況は良好なものではなかった。遺物量は全体的に少なく、小破片が多くみられた。

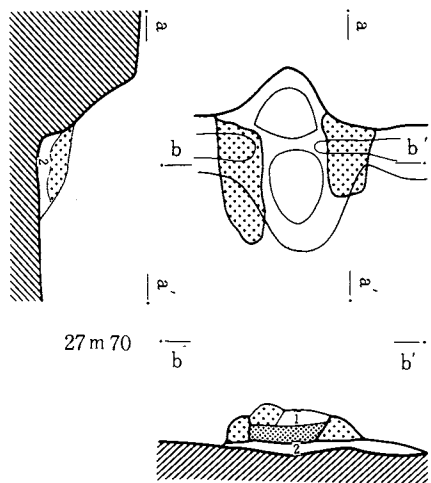


005号住居跡土層説明

- 1. 暗黒褐色土 褐色粒を微量含む。しまりなくかわくとサラサラする。
- 2. 暗黒褐色土 1に焼土ブロックを多少含む。
- 3. 暗褐色土 やや粘性を呈す。2層に類似するが、粒子はこまかい。
- 4. 暗褐色土 黒褐色土に多くの褐色土粒を含む。
- 5. 暗褐色土 4に山砂粒を多く含む。

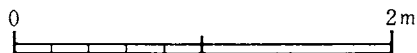


第266図 005号住居跡実測図 (1/80)

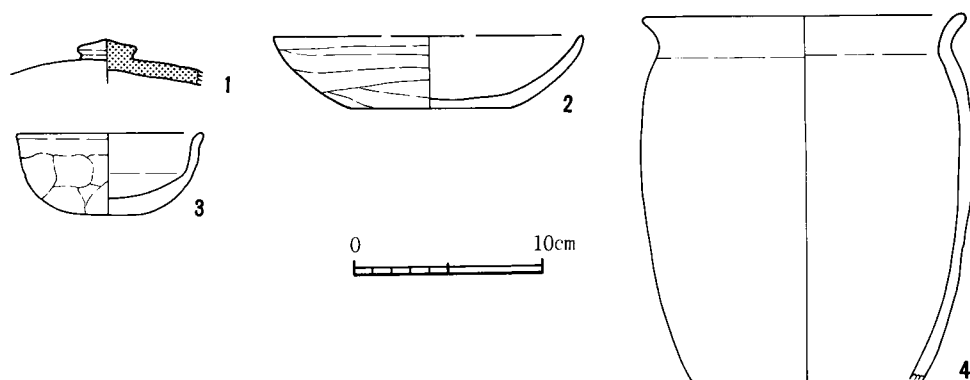


005号住居カマド土層説明

- 1. 暗白褐色土 焼土・山砂を多量に含む。
- 2. 暗黒褐色土 焼土粒子を若干含む。カマド構築のベース。



第267図 005号住居跡カマド実測図 (1/40)

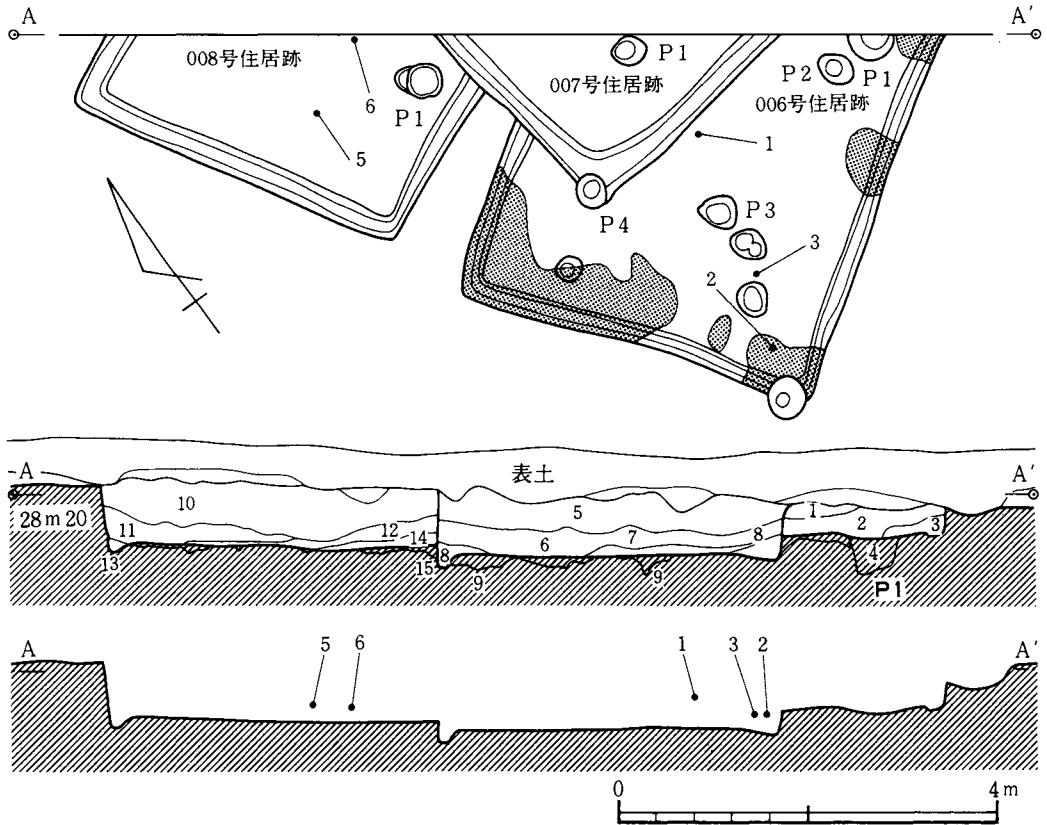


第268図 005号住居跡出土遺物実測図(1/4)

遺物量も少なく床面ないしは直上のものを図示した。1は須恵器蓋である。天井部ツマミ部分のみである。胎土・焼成ともに良好、色調は暗い感じのする青灰色である。内外面ともナデが施される。2・3は土師器坏である。2は約1/4の遺存、胎土は緻密で良好、焼成も良好である。色調は暗茶褐色。外面は横方向のヘラケズリ、口縁内外はナデが加えられる。内面はナデ磨きを加える。4は甕である。カマド正面・床上から発見された。胴下半及び底部を欠く。胎土中には砂粒を多く含むが良好、焼成も同様に良好である。色調は全体として暗い褐色を示す。外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はヘラケズリののちナデ仕上げを施す。口縁部内外はヨコナデを施してある。

006・007・008号住居跡(第269・270図)

調査区外側ラインに沿って発見された。006号住居跡には一部1号掘立柱建物跡がかかっている。006号及び008号を切って007号がある。006号と008号の主軸方向はほぼ同一でN-56°-Eで平行に近い形であるが、新旧関係は006↔008→007号住居跡となるものと考えられる。規模は006号が一辺約4m、008号は一辺が約3.7mの方形になるものと考えられる。007号住居跡は4辺の一辺の一部のみの検出のため、その全体を知ることが出来ない。遺構確認面から床面までは006号住居跡は約45cm、007号住居跡は約80cm、008号住居跡は約65cmである。床面は3軒ともに平坦である。壁溝は多少巾広気味でコーナー部分で太くなるようである。3軒ともにその全体を検出していないため、発見されたものの計測値をあげると、006号住居跡の支柱穴と思われるものは、P₂-P₃-P₄の3本があげられる。P₂は径30cm、床面からの深さは約68cm、P₃は径30cm、深さ52cm、P₄は径30cm、深さ60cmである。残りの1本は007号側P₁の付近調査区外にあるものと考えられる。006号住居跡コーナー部及びP₃に近接するピットは1号掘立柱建物に関連する柱穴である。007号住居跡のものはP₁のみである。径は約30cm、床面からは約47cmの掘り込みであった。008号住居もP₁1本のみ発見されている。径30cm強、深さ54cmを測る。



006号住居土層説明

1. 暗褐色土 かわくとサラサラする。焼土粒・炭化物を含む。
2. 暗褐色土 1に類似するが炭化物の大きなものを含む。
3. 暗赤褐色土 焼土粒を主として多くの炭化物粒を含む。
4. 墨色土 黒色土を主として、焼土粒を含む。柱穴の覆土。

007号住居土層説明

5. 黒褐色土 暗褐色土に多くの黒色土と微量の焼土粒を含む。
6. 黒褐色土 若干の焼土とロームブロックを含む。
7. 暗褐色土 2にロームブロックと炭化物を若干含み、山砂を微量含む。
8. 黒褐色土 黒色土をベースに少量の褐色土粒を含む。
9. 黒色土 黒色土を主としてロームブロックを含む。(床整形か)

008号住居土層説明

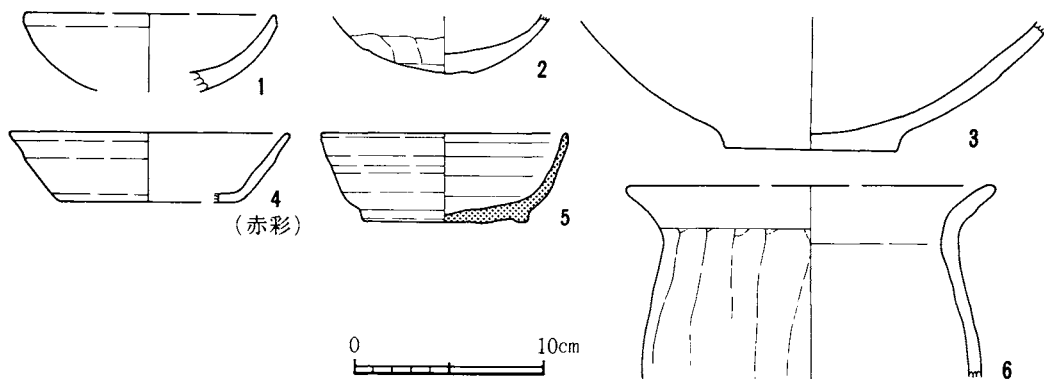
10. 暗褐色土 ロームブロックをまだら状に含む。
11. 暗褐色土 1に比較してローム粒を多く含む。
12. 暗赤褐色土 ローム粒・黒茶色土粒を多く含む。しまりある。
13. 褐色土 褐色土粒を主に黒色土を含む。
14. 黒褐色土 暗褐色土に多くの黒色土粒を含む。
15. 暗褐色土 暗褐色土に少量のロームブロックを含む。

第269図 006・007・008号住居跡実測図 (1/50)

カマド及び貯蔵穴は調査区域外に存在するものと考えられるが、住居の規模から考えて006号住居跡及び008号住居跡のカマドは、007号住居跡によってすでに破壊されている可能性が高いだろう。

遺物の出土量は3軒共に極めて少なく図示し得たのは006号住居跡が3点、007号住居跡が7点、008号住居跡が2点のみである。なお、006号住居跡は床面上に炭化物及び、ローム粒子が多くみられることから、火災住居の可能性がある。

006号住居跡からは1及び2の坏と、3の甕胴下半の、計3点が実測可能であった。1は土師



第270図 006・007・008号住居跡出土遺物実測図 (1/4)
 (1～3 - 006号, 4 - 007号, 5・6 - 008号)

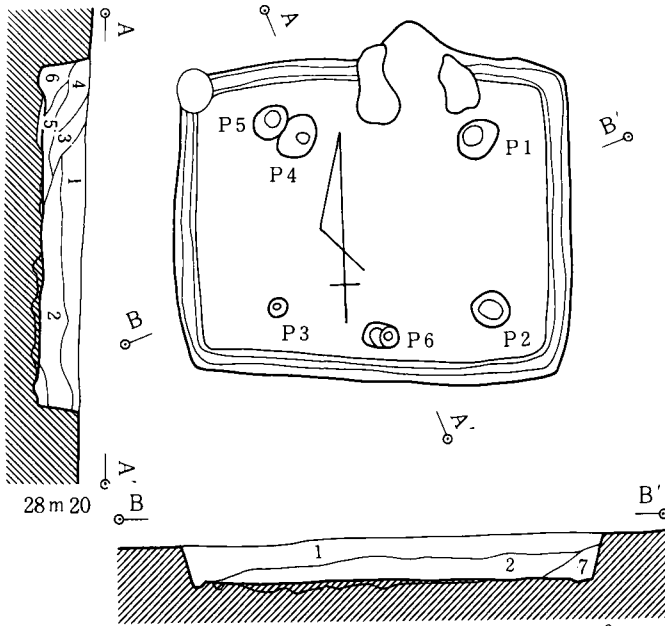
器の坏で1/3程残る。胎土・焼成ともに良好、色調は暗茶褐色である。外面はヘラケズリ後ミガキを加える。内面とともに外面もよく磨かれている。肉厚な感じのする土器である。2は底部のみが残されており、坏あるいは碗になるか不明である。色調はかなり暗い感じの褐色である。胎土中に砂粒を多く含みあまり良好な胎土ではないが焼成が良好のため仕上がりは良い。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なミガキを加えたものである。3は甕、胴下半のみ残される。胎土は砂粒を多く含み、色調は明るい感じの褐色である。焼成はまず普通であろうか。

007号住居跡出土のものは、4が1点のみである。土師器坏、遺存度は約1/4、胎土は緻密で焼成も良好である。色調は暗い茶褐色、内外面ともに赤彩が施されている。

008号住居跡からは5の坏と、6の甕各1点が発見されている。坏は須恵器で全体の約1/3が残る。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は暗灰色を示す。底面には回転ヘラ切り痕が残る。2はやや長胴気味の甕であろうか。1/3程が残る。胎土・焼成共に良好、色調は暗茶褐色を示す。口縁部内外はヨコナデ、胴部は縦方向のヘラケズリである。

009号住居跡 (第271～273図)

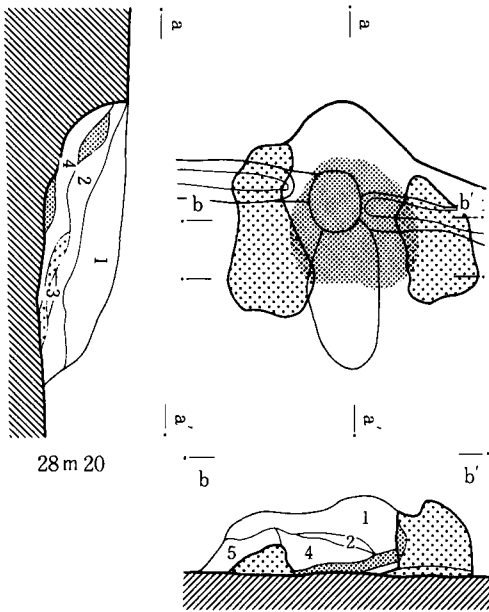
調査区北側ラインの近く、006～008号住居跡とは極めて近接しており、1号掘立柱建物が本遺構上に構築された。主軸はほぼ南北を示す。南北側壁は一辺が約4m、東西側壁は一辺が約3.2mと横長の方形になっている。床面までは遺構の検出面より測って、約40cm程である。床面はもう10cm程荒掘り時に掘り込まれたものを、ハードロームブロックを用いてほぼ平坦な面を作り出している。柱穴はP₁～P₆まで検出されているが本住居跡に伴う支柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄であろう。P₆はいわゆる出入口部に伴う小柱穴と考えられる。P₁は径40cm、床面からの深さは約50cm、P₂は径40cm、深さは約40cm、P₃は径20cmと小さく、深さは約40cmと他と比べて



009号住居跡土層説明

1. 暗黒褐色土 径5mmほどのローム粒を含む。全体に黒色土を含む。
2. 暗褐色土 1に類似するがロームブロックは含まずローム粒を含む。
3. 暗褐色土 硬質でローム粒・ロームブロックを多く含む。
4. 茶褐色土 しまりなし、ローム粒を全体に含む。
5. 暗褐色土 4に類似するが山砂・焼土粒を含む。
6. 明茶褐色土 ローム粒を若干含み山砂を少量含む。
7. 明褐色土 ローム粒に多くの黒色土を含む。

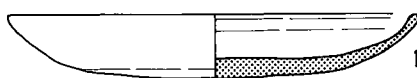
第271図 009号住居跡実測図 (1/60)



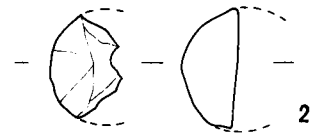
009号住居跡カマド土層説明

1. 暗灰褐色土 多量の山砂と焼土粒を微量含む。
2. 黒褐色土 黒色土を主として、炭化物焼土粒を含む。
3. 黒褐色土 炭化物を主として、焼土粒を微量含む。
4. 黒色土 炭化物を主としてロームブロックを少し含む。
5. 暗褐色土 山砂を微量含む。

第272図 009号住居跡カマド実測図 (1/40)



0 10m



0 5cm

第273図 009号住居跡出土遺物実測図 (1・1/4, 2・1/2)

もほとんど同じである。P₄は径が約40cm、深さは約30cmといちばん浅くなっている。P₆は径が30cm、深さは20cm程と浅いものである。周溝は約20cmの幅で全周しており床面からは5cm内外とやや浅めである。

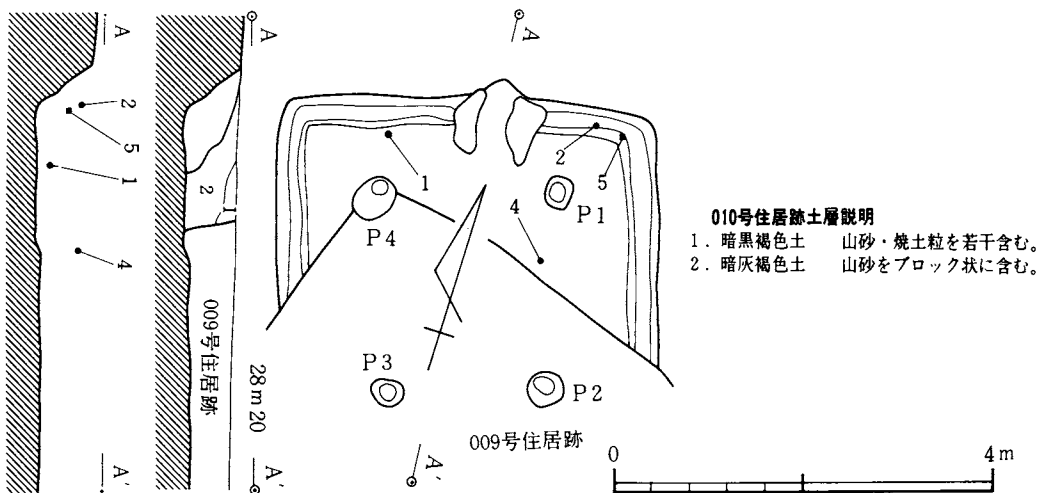
カマドは北側壁の中央よりやや東よりに設けられており、袖部の基部の残りは良好であったが、その大半が流失していた。火烧部床面は全体に焼けており、スクリーントーンで示した通りであるが層となっている。火床中央部ぐらいであろうか。

遺物の出土量は全体的に少なく、図示し得たのは2点のみである。1は須恵器の皿になろうか、ほぼ完形、坏にするには極めて浅い。胎土はやや砂っぽく、色調は暗い感じの灰色、焼成はまずまずといったところである。2は土玉、1/3程の遺存である。黒褐色で胎土・焼成ともに良好、整形時の面取りはやや荒く、指頭による整形痕が残っている。

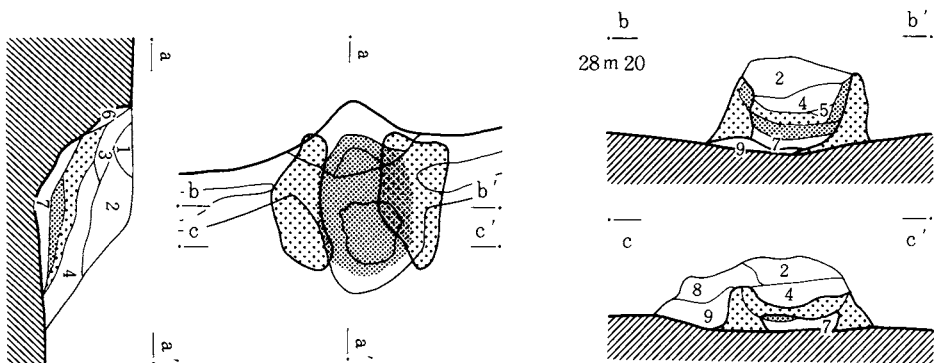
010号住居跡 (第274~276図)

009号住居跡に切り込まれている。全体の1/3程の遺存を示す。主軸方位はN-12°-W。カマドの設置される北側壁のみが唯一、一辺の全体を知ることが出来る。現況で一辺約4mを計ることができ、コーナー等から見ると、かなりしっかりとした方形を示すものと思われる。柱穴はP₁・P₄が直接床面から確認されたが、P₂・P₃は009号住居跡と切り合い、ほぼ床面も同レベルとなるためピット位置から推定したものである。掘り込みは確認面より約60cmで床面となる。床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦を保つ。柱穴はほぼ径30~40cm、床面からの深さはP₁ 47cm、P₂ 15cm、P₃ 35cm、P₄ 56cmであった。貯蔵穴等は検出されていない。

カマドは住居北壁に設けられている。現況としては袖部が一部流出しているものの、天井部がくずれた感じがよく残っている。袖は壁面より80cm程残る。遺物は009号住居跡に2/3程度掘



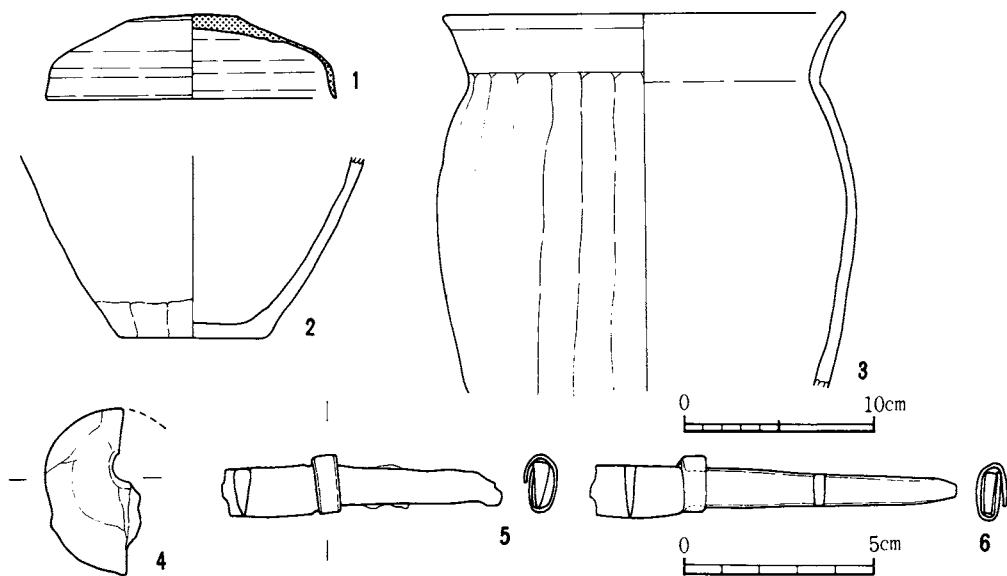
第274図 010号住居跡実測図 (1/80)



010号住居跡カマド土層説明

- | | | | |
|-----------|---------------------------|----------|---------------------|
| 1. 暗赤褐色土 | 多量の焼土粒と山砂を少量含む。 | 6. 暗黄褐色土 | ロームと暗褐色土を半々含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 多量の山砂のブロックと少量のロームブロックを含む。 | 7. 黒色土 | 炭化物を主として、若干の焼土を含む。 |
| 3. 暗黒赤褐色土 | 焼土粒・山砂を多く含む。 | 8. 暗褐色土 | 2に類似。多くのロームブロックを含む。 |
| 4. 暗褐色土 | 径5mmほどのローム粒・砂・焼土を含む。 | 9. 暗褐色土 | 住居跡覆土で焼土・山砂を少量含む。 |
| 5. 暗灰色土 | 炭化物・山砂による層。 | | |

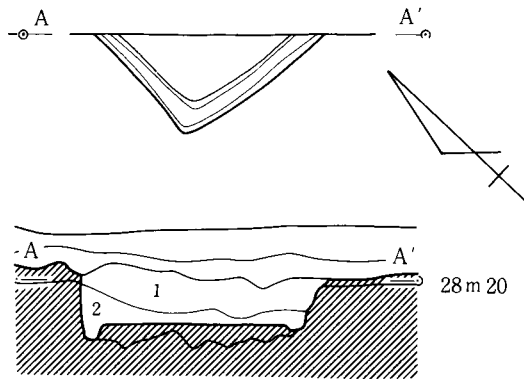
第275図 010号住居跡カマド実測図 (1/40)



第276図 010号住居跡出土遺物実測図 (1~3・1/4, 4~6・1/2)

り込まれているため遺存量も少なく、また図示し得たものもやや床面から浮いた状態のものが多くみられる。

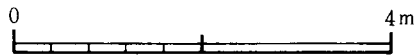
出土遺物は全体として量は少ない。1は須恵器坏，蓋部である。約3/4の遺存，胎土は緻密で



011号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 暗褐色土をベースにロームブロックを多く含む。
2. 暗茶褐色土 暗褐色土を主として焼土粒・炭化物を含む。

第277図 011号住居跡実測図 (1/80)



良好、焼成はまず並で色調は暗い感じの灰色である。2は甕である。胴下半から底部にかけてのみ残る。胎土は石英粒を少量含み、やや砂っぽく、まず並みか。焼成は良好。色調は暗褐色である。外面は縦方向のヘラケズリ、底部直上は横方向のヘラケズリを施す。外面は胎土が砂っぽいためか、荒れ気味で磨滅が目立つ。3は土師器甕、口縁から胴部にかけて、約1/3ほどが残る。胎土中には石英粒等のほか金雲母片も微量ながら混入している。焼成は並み、色調は黒褐色を示す。口縁部内外は横方向のナデを施し、胴部はやや荒めのヘラケズリが縦方向に施されている。4は土玉で1/2程残る。胎土・焼成ともに良好、色調は暗褐色である。表面はナデ仕上げであるが、胎土が砂質っぽいため、ザラついた感じがする。5・6は刃子である。5はやや錆も多く遺存度は良いとは言えない。6は柄部は残るものの刃身部は失われている。

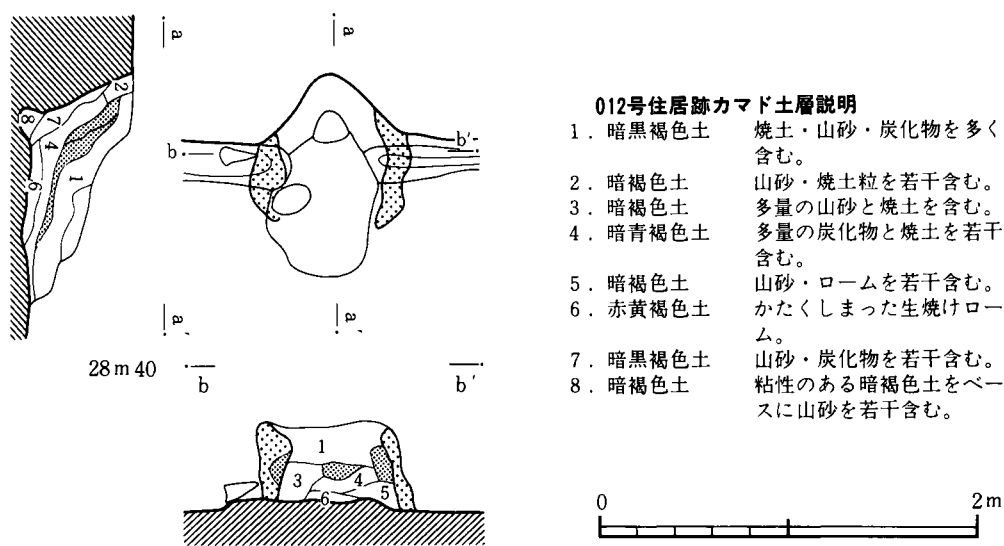
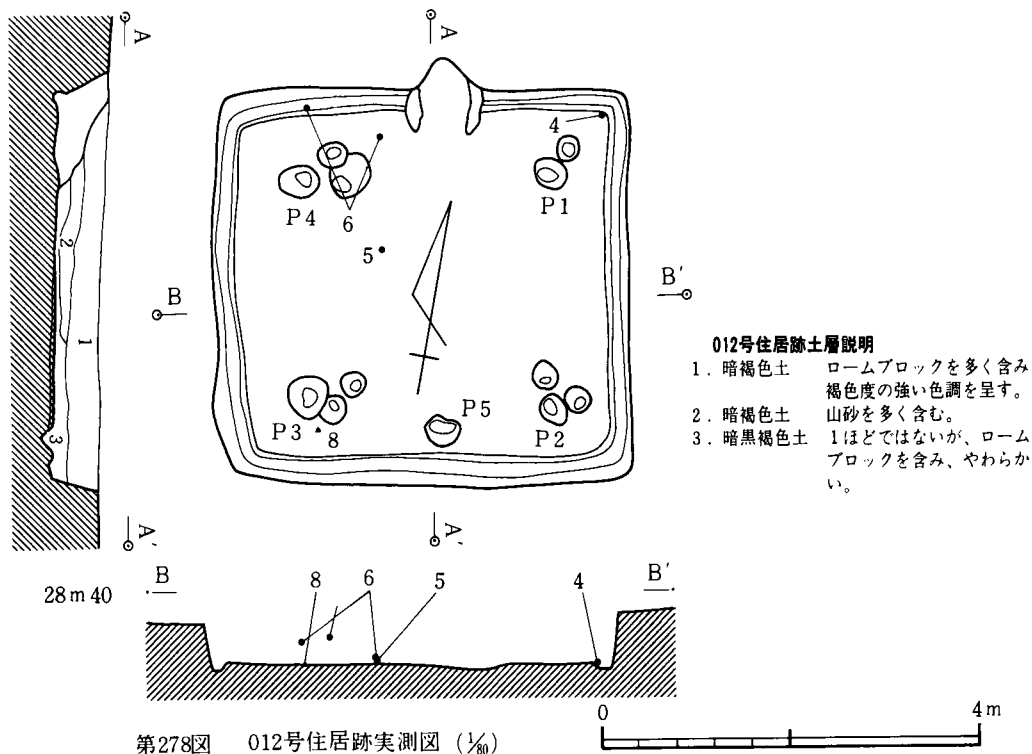
011号住居跡 (第277図)

コーナーの一辺のみの調査であり、その全体を知ることが出来なかった。遺物は時期を決定するようなものは何一つ確認されていない。確認面より床面までは約40cm、壁溝は幅20～30cmで廻っていた。本住居も荒掘り後、ロームブロックを再度埋め込むようにして床面を作っている。

012号住居跡 (第278～280図)

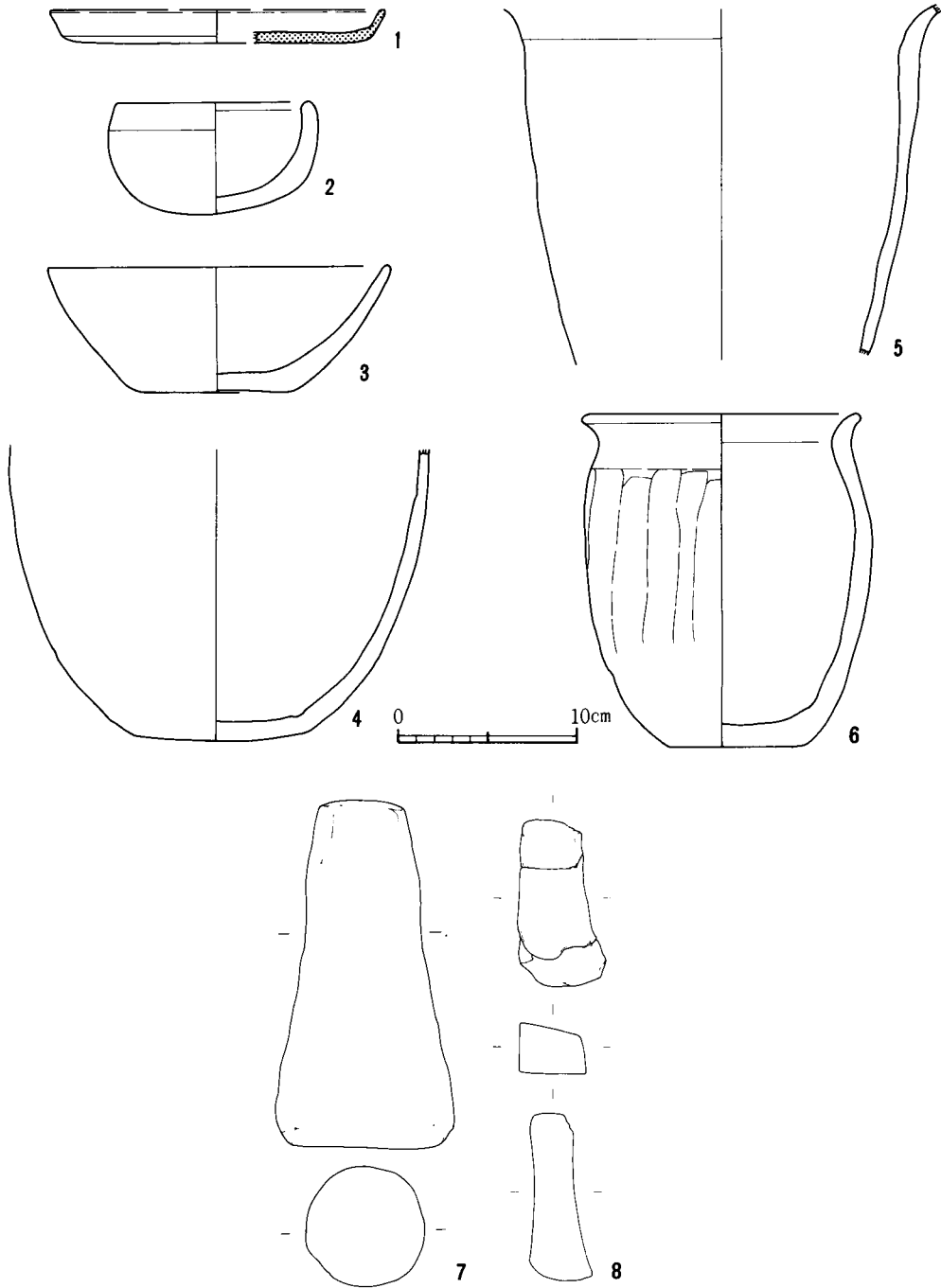
遺構群の北東端に位置し、014号住居跡とは極めて近接しており、012-014号住居跡の2軒は主軸方向もほぼ同じか、それに極めて近くなっている。主軸方位はN-9°-W。北及び南壁は一辺約4.3m、東西壁は一辺が4mのやや横長気味の方形となっている。掘り込みは遺構確認面より床面まで約50cmを測る。壁溝は幅約20cm、床面からは約10cm程のはっきりとした掘り込みをみせており、カマド部分を残してほぼ全周している。床は荒掘り時に床面よりやや深く掘り込み、ハードロームブロックをつめ込むことにより、ほぼ平坦な面を作っている。柱穴はP₁～P₅。

までが本住居に伴う主な柱と思われる。P₁は35cm, P₂は30cm, P₃は40cm, P₄ 35cm, P₅ 40cmと35~40cm前後の直径を測る。床面よりの深さはP₁ 49cm, P₂ 38cm, P₃ 48cm, P₄ 43cm, P₅ 24cmとP₁~P₄までは約40~50cm程の掘り込みを持っている。P₅はいわゆる出入口関連の柱穴であり、通常あまり深く掘り込まれない。その他の柱穴状のものは床面下の精査時に確認され



たものであり、掘り込みも浅く、本住居跡の上屋構造物とはあまり関連するものではない様である。

カマドは北側壁に構造されている。袖基部が残るものの構造材の流出も多く、それほど良好なものとは言えない状況であった。断面上は焼土層もあるものの赤くなった土という程度であ



第280図 012号住居跡出土遺物実測図(1/4)

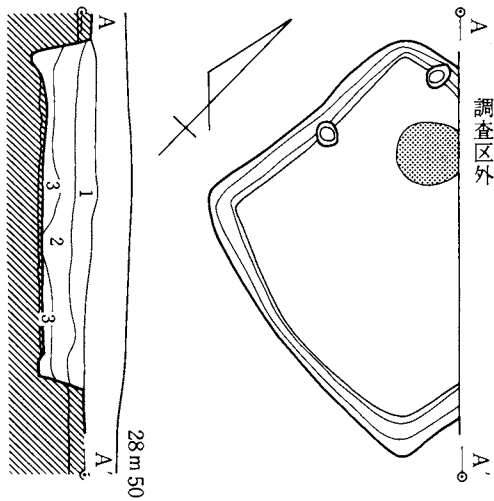
り、平面的に押えきれほどの火床面は確認されなかった。残存部で袖は壁面より約50cm、全幅は180cmを測る。煙道の立ち上りは約80°の立ち上りを示している。遺物の出土状況は大半が覆土中の散漫な一括遺物が中心であり、図示した一群のみが、床面ないしはそれに近く出土したものである。

床面上から発見されたものは、8の砥石及び4・5・6の甕破片のみで、あとは浮いた状態のものである。1は須恵器盤である。約1/3程の遺存。胎土は雲母片を微量含むが良質なもので、焼成は並、色調はややくすんだ感じの灰色である。内面よく磨かれている。2は土師器のやや深めの坏である。胎土は砂質であまり良好とは言えず、焼成も並で色調は暗黄褐色、外面はヘラケズリの後ナデを施す。器面が荒れており現況ではあまりはつきりしない。口縁部は肥厚気味にやや内傾している。3も完形の土師器の坏である。内外面とも磨滅が多く整形はいま一つはつきりしないが、ヘラケズリ後かなり丁寧にナデを施しているものと思われる。胎土・焼成ともに普通の仕上がりであり、暗茶褐色を示す。4は甕胴下半のみである。胎土中には砂粒も多く、焼成もやや甘くかなり外面は磨滅している。外面には斜方向→横方向のヘラケズリの痕がみられる。かなりずんぐりとした器形になるだろう。6はほぼ完形の小型の甕である。高さ18.2cm、口縁は15.3cm、胎土は砂質で焼成は普通、やや黒っぽい褐色を示す。口縁は口唇部でやや肥厚しながら外反する。胴部にはほぼ全面に縦方向のヘラケズリが施され、下半部には二次焼成によるものと思われるヒビわれ等がみられる。5は甗、口縁部が欠けるが胴部の1/2ぐらいの遺存である。胎土・焼成は良好、外面はヘラケズリのあとナデを施す。内面はナデを施す。内外面とも磨滅がはげしくいたみがはげしい。7は土製支脚、カマド内からの出土である。全長は18.5cm、径は上端で4.5cm、下端は10cm、荒い面取りの施されただけである。普通、二次焼成をうけてポロポロになるものが多い内で、わりと良好な遺存状態を示す。8は砥石である。P₃のすぐそばの床面上から発見された。灰白色。四面すべてに使用痕がみられる。

013号住居跡（第281図）

調査区北側境界にかけて検出し、全体の2/3程度の調査しか実施し得なかった。主軸方向はN-5°-Eとほぼ南北に対応する。プランはややふくらみ気味の方形を示し、一辺は南北壁で3m、東西壁で3m、東西壁3.5mと、やや東西方向に長くなっている。床面までの掘り込みは確認面より約40cmと、かなりしっかりとしたものである。床は荒掘り後、壁溝を残すようにして、ロームブロックをつめ込み、埋め戻して構築されている。壁溝は幅が20～30cm、床面から10cm前後で全周するものと考えられる。柱穴は北東コーナー付近に浅いものがみられるが、上屋に関係あるものとは考えられず、またこれらの柱穴以外にも確認されないため、どのような形で代用されたか不明である。

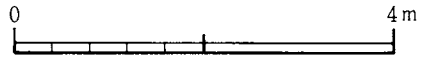
調査された内では、カマド及び貯蔵穴なども確認されなかった。ただ北東コーナー部には径



013号住居跡土層説明

- 1. 暗黒褐色土 3に比較してロームブロックは含まない。
- 2. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、しまりの悪い土。褐色をおびる。
- 3. 暗黒褐色土 ロームブロックが若干混入する。

第281図 013号住居跡実測図 (1/80)

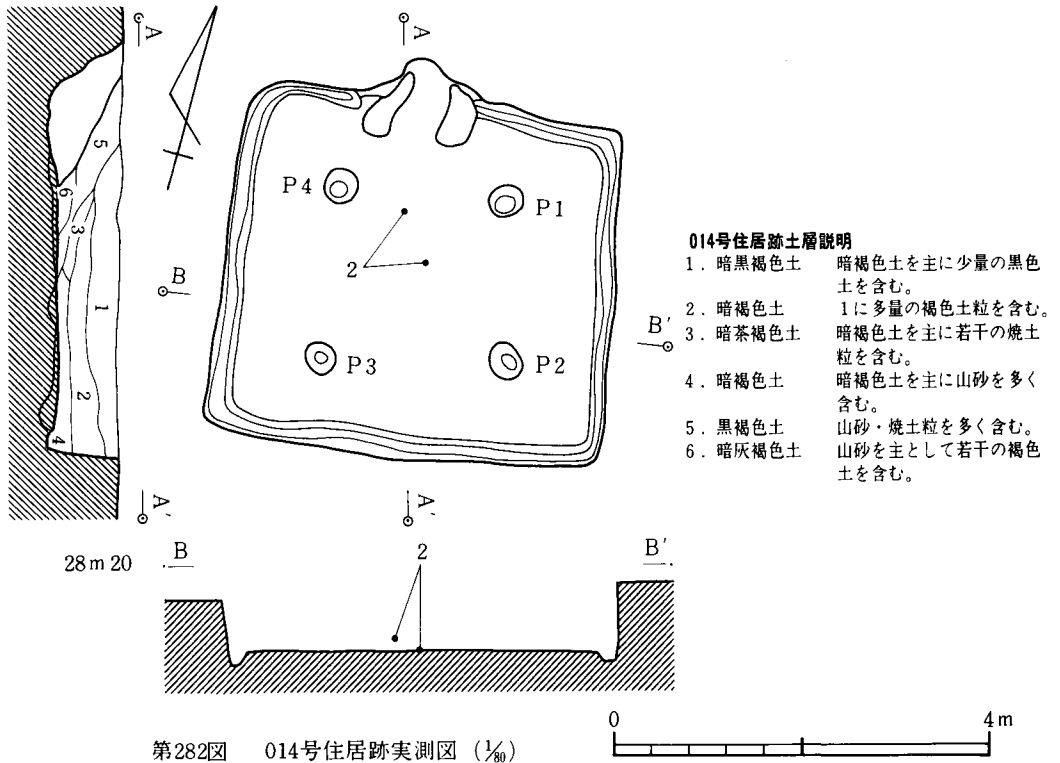


約60cm程の焼土の広がりが見てとることができた。遺物の出土状況としては覆土上層から混入遺物と思われる土器の小破片以外発見されていないため、本住居跡の構築時期が、カマドを有する時期のものか、あるいは地床炉としてこの焼土が用いられたものか等は、不明とせざるを得ない。

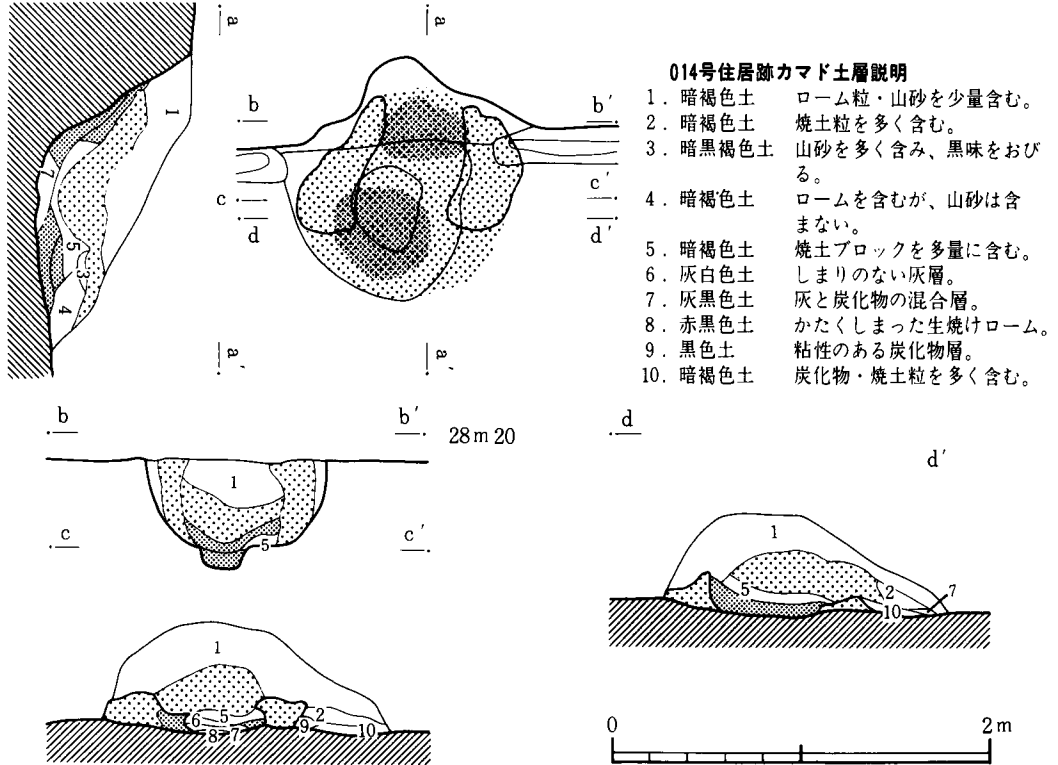
014号住居跡 (第282～284図)

012号及び014号～016号まで一連の住居群の内にあり、集落の北東限界に位置するものの一つである。どちらかと言えばややいびつな感のある住居であるが、各辺の差異はそれほど大きなものではない。西壁は3.8m、東壁は3.5m、北壁は4m、南壁4.2mとなる。東壁の2コーナーがかなりしっかりとした方形を計画されたのに対し、両壁がかなり丸みをおびており、特に北西コーナーなどは隅丸状になってしまっていることなどは、かなりつじつま合せ的なコーナーとなったのではないかと考えられよう。床面までは遺構の確認面からは約60cmとかなり深いものとなっている。床面は荒掘り後、ロームブロックによる再構等を行っている。この荒掘りは、カマド火床部とほぼ同レベルをもって当初行われたものであろうか。壁溝も約25cmの幅で全周するが、床面構築時のロームはり込み時に施されたものと考えられる。柱穴は4本が確認されており、共に本住居跡の主柱穴である。各柱穴ともに直径が35～40cm、床面からの深さは、P₁20cm、P₂35cm、P₃20cm代とかなり浅めの掘り込みとなっている。

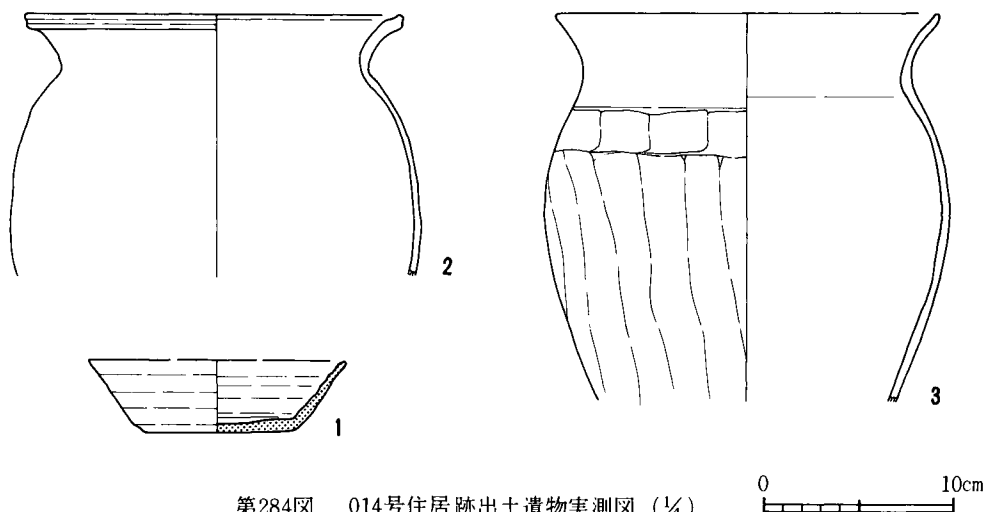
カマドは北壁に築かれており、カマドの北壁に対する掘り込みの中央部は丁度、北壁の1/2、中央にあたっているが、袖の張り出しなどをみると多少、いびつな方向へカマドが向いている



第282図 014号住居跡実測図 (1/60)



第283図 014号住居跡カマド実測図 (1/60)



第284図 014号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

ようである。袖は壁面より約60cm, 最大幅は1mを測ることが出来る。火床部はよく焼けており焼土層の形成もかなり厚いものである。b-b'のセクションでわかる通り煙道部は壁面に掘り込み, 粘土で煙道を築いており, かなり丁寧な作りのカマドであったものと思われる。

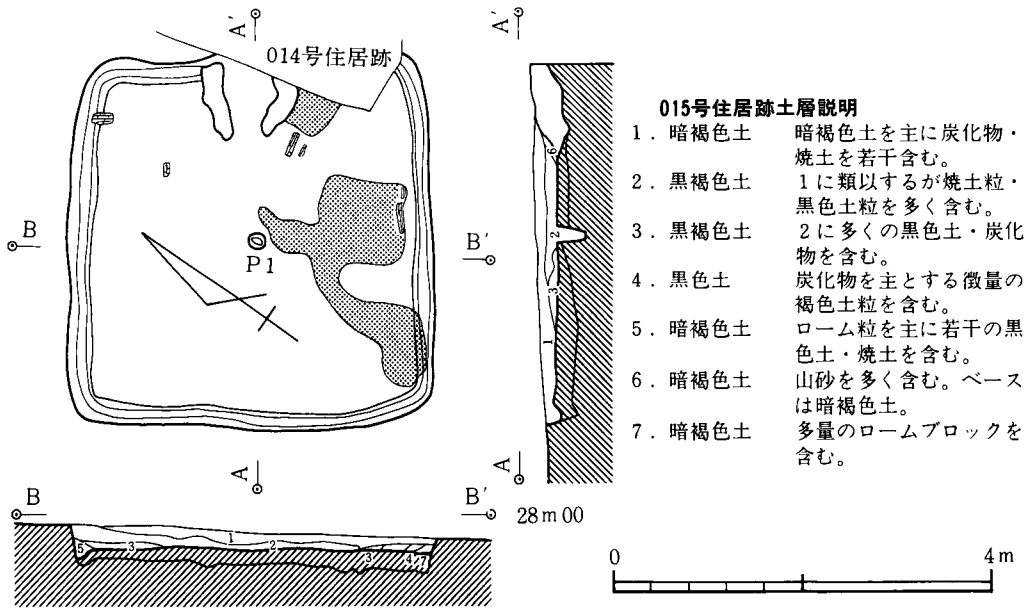
出土遺物は今回の調査区内から出土したうちでは, 新しい方に属すものと思われる。1の坏は約1/2の遺存, 回転ヘラ切りで切り離した後, 底部周辺はヨコ方向のヘラケズリを行っている。胎土・焼成ともに良好であるが, 色調はかなり黒っぽい感じのする青灰色を示す。2・3の甕は共に砂粒の多く含まれる粘土を用いられており, 外面はヘラケズリで整形を加えられている。2はかなり外面が磨滅している。

015号住居跡 (第285~287図)

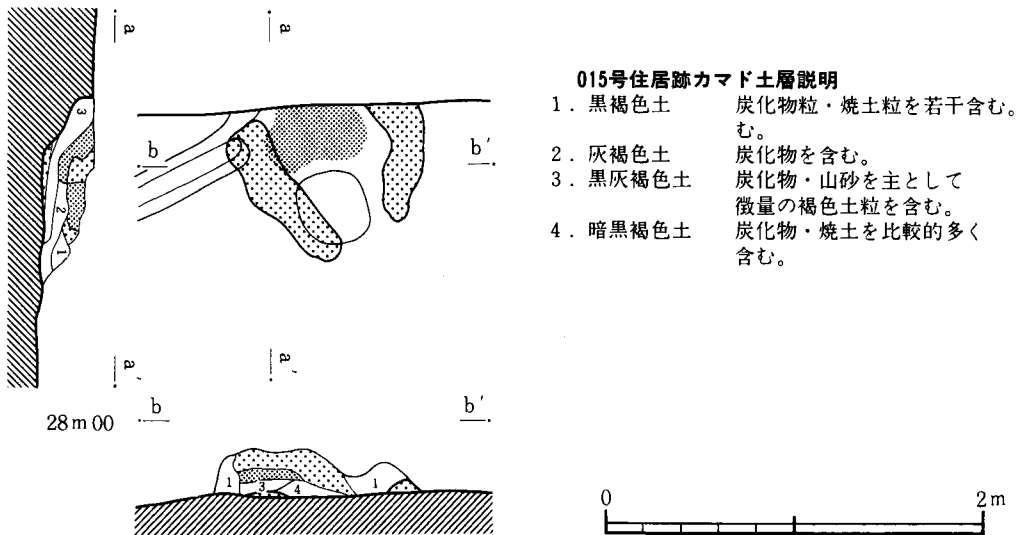
014号住居に北東壁—カマド部分付近を一部掘り込まれており, 床面上からは焼土及び炭化材等が確認されている。カマド及びその対面の壁は一辺約3.5m, その他は一辺約4mと長方形気味である。コーナーはやや隅丸気味である。主軸方向はN-56°-E。床面までは遺構確認面より約20cm程でやや浅い感がある。床面は荒掘り後, 再び掘り出したロームブロックを再利用してか, 10~20cm程つめ込み, 床面及び壁溝等を設けている。柱穴は通常の柱位置からは検出されず実測図上P₁が唯一床面上から確認された柱穴(状)のものである。直径20cm, 深さは床面から30cmを測ることができる。

カマドは北東壁にあり1/3程度は014号住居跡との切り合いにより失なわれている。全体として遺存状態はあまり良好とは言えないが, 袖は壁より80cm, 両袖の最大幅は1m強を測ることが出来る。火床部に焼土をみることが出来るが, あまり多量に焼土は形成されていない。

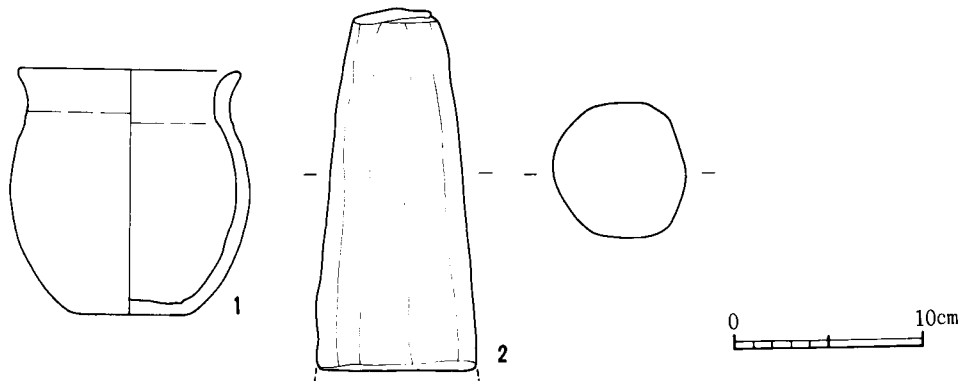
遺物はほとんど出土しておらず, 第287図に示した2点のみである。小型甕は約3/4程の遺存



第285図 015号住居跡実測図 (1/60)



第286図 015号住居跡カマド実測図 (1/40)



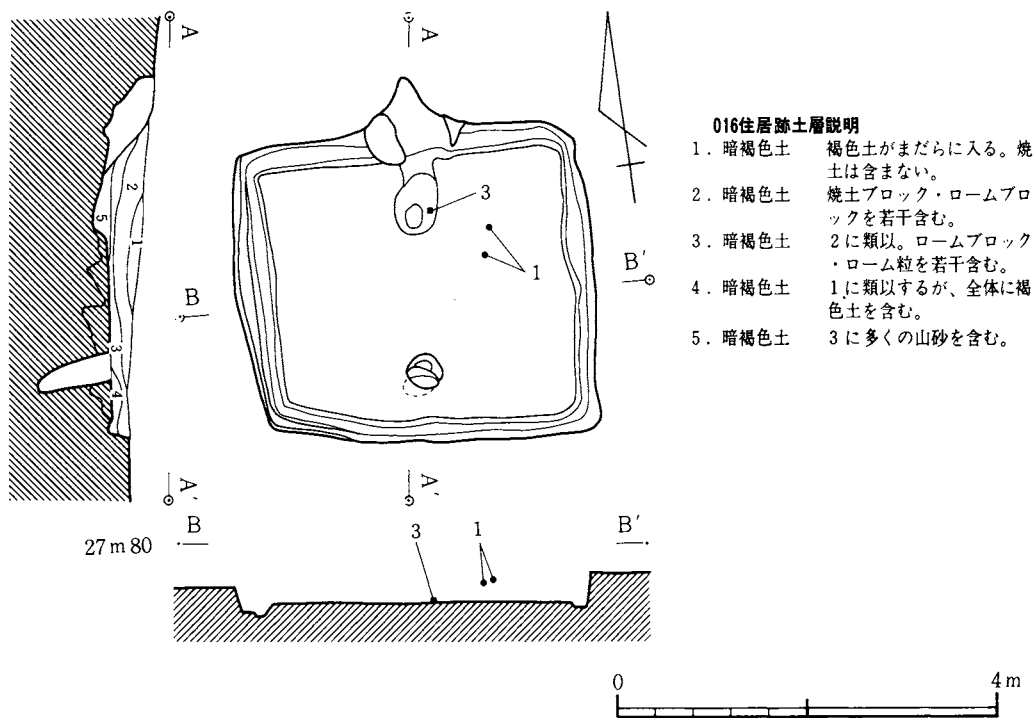
第287図 015住居跡出土遺物実測図 (1/4)

である。口径11.5cm、高さ13cm、胎土・焼成ともに良好ではあるが、内外面ともに器面の荒れが目立つ。底部は丸底気味。2の支脚はほぼ完形。長さ19cm、径は4.6~8.5cmを測る。全体に砂っぽい。

016号住居跡 (第288~290図)

主軸方位はほぼ南北を示している。平面形は東西方向に長いややいびつな方形をしている。東西方向で約4.5m、南北方向で約3.2mと図より実測値の方がその異なりを示している。遺構確認面より床面までは約30cmとやや浅めである。壁溝は幅20~30cm、床からは10cm程の掘り込みで全周している。西壁部分では壁が外側へふくらんでおり、壁溝が多少ふくらんだ様にも見える。床面は荒掘り時、かなり雑に掘り込んだ様子が断面図の床下セクションからみることが出来るが、ロームブロックを埋め戻しながら平坦な床面と壁溝を作り出している。柱穴は住居南壁に面した位置から1本検出されたのみである。径は約30cm、床面からやや斜めに約80cm程掘り込まれたものである。通常出入口施設を持つものにしては全体の掘り込みもやや浅めであるし、また柱自体の掘り込み角度も異なるため、この柱(穴)の機能については、上屋構造にかかわるものか不明とせざるを得ない。

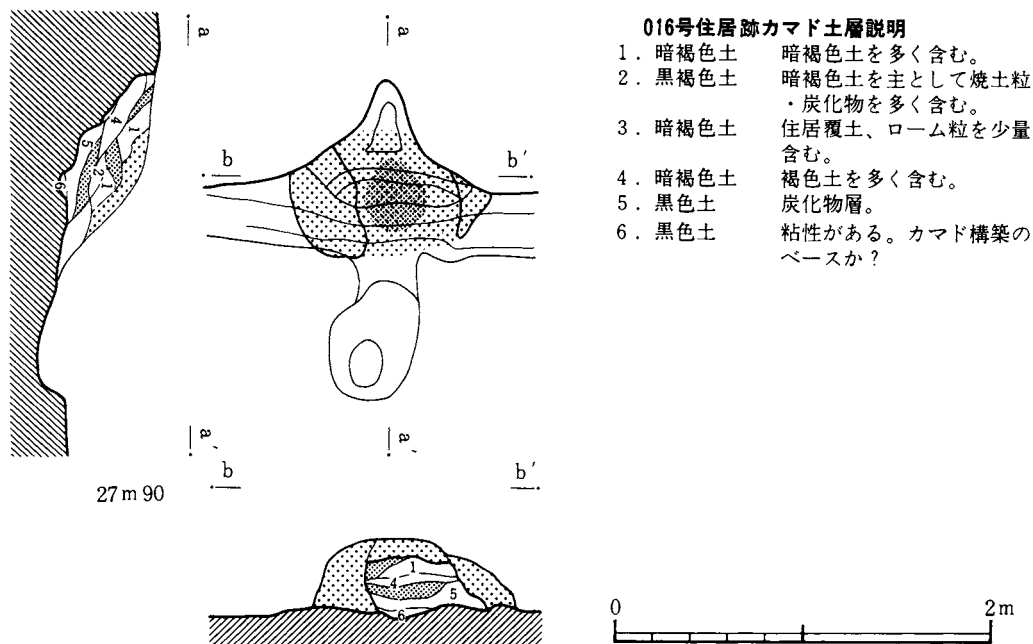
カマドは住居北壁に設けられている。壁面より約60cmほど奥まった位置まで煙道が作られて



第288図 016号住居跡実測図 (1/80)

おり、このような煙道の深いものは本集落内においてはその数も少ない。袖最大幅は約1m、カマド火口の前には径約40cm、深さ10cm程の皿状の掘り込みがみられた。

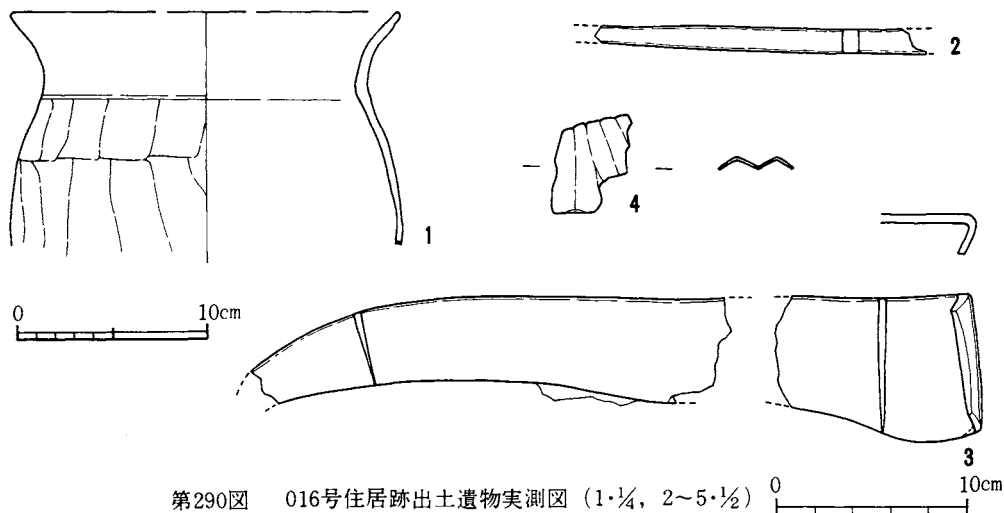
遺物は全体的に少なく実測し得る土器は1の甕1点のみであり、その遺存状況は1/6と極めて小さなものである。また覆土内においてもやや上位の位置からの出土であり必ずしも本住居跡に伴うものか確証はない。推定口径20.5cmである。肩部は横方向・胴部は縦方向のヘラケズリが施される。口縁の外返は口唇部において多少直立している。2は釘あるいは鋸の一部であろうか。3は鎌である。一部破損するが残りは良い。かなり作り込まれている。4は何の金具であろうか。不明品である。



016号住居跡カマド土層説明

- 1. 暗褐色土 暗褐色土を多く含む。
- 2. 黒褐色土 暗褐色土を主として焼土粒・炭化物を多く含む。
- 3. 暗褐色土 住居覆土、ローム粒を少量含む。
- 4. 暗褐色土 褐色土を多く含む。
- 5. 黒色土 炭化物層。
- 6. 黒色土 粘性がある。カマド構築のベースか？

第289図 016号住居跡カマド実測図 (1/40)



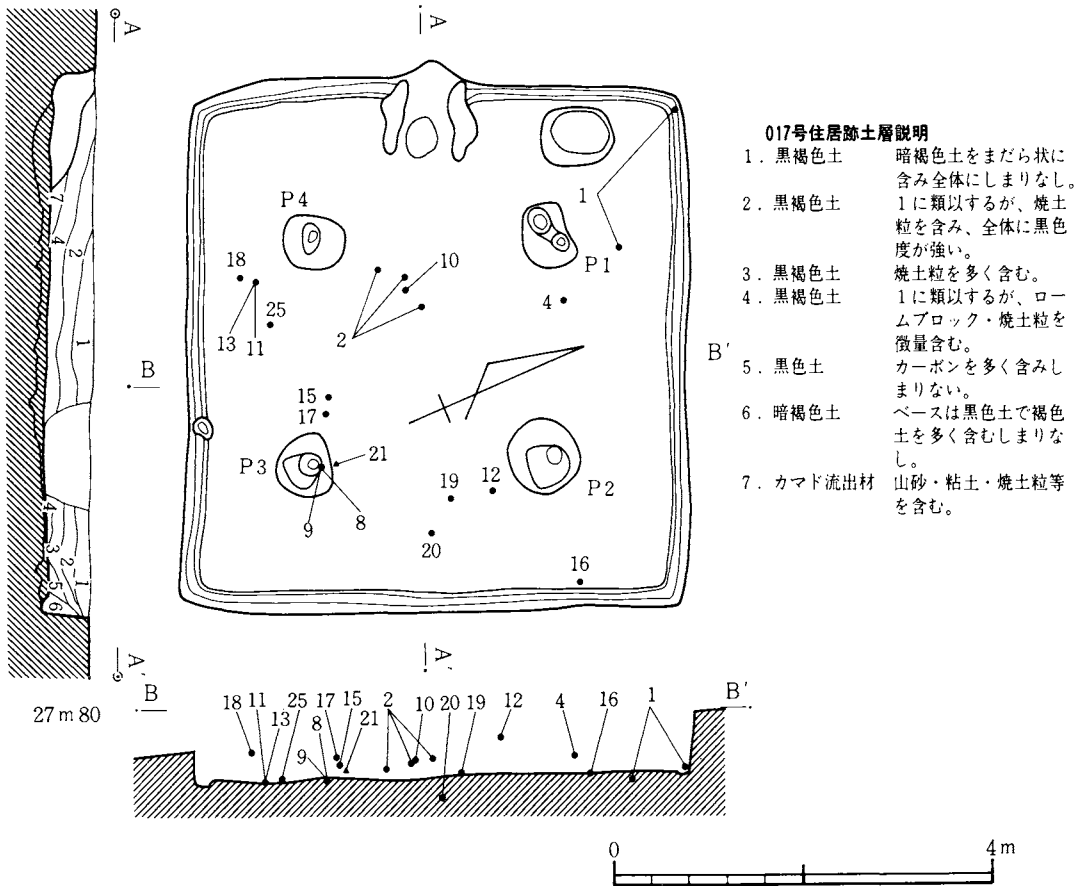
第290図 016号住居跡出土遺物実測図 (1・1/4, 2~5・1/2)

017号住居跡 (第291~294図)

本遺跡検出の住居跡中N-66°-Wと西カマドを示すものであり017-018号跡と約2mと極めて近く検出されている。5.5m×5.2mのほぼ方形を示し、確認面より床面までは約50cm、床面はやや凹凸のみられる面であり、床面下10cm程まで掘り方(乱雑な)を、ハードロームブロックで埋め込んでいる。支柱は4本。共に直径は約50cm、深さはP₁-49cm, P₂-50cm, P₃-50cm, P₄-55cmを測る。P₅は壁溝内から検出されたが、径が20cmで、深さは18cmと浅く壁あるいは構造材とは関係ないであろう。

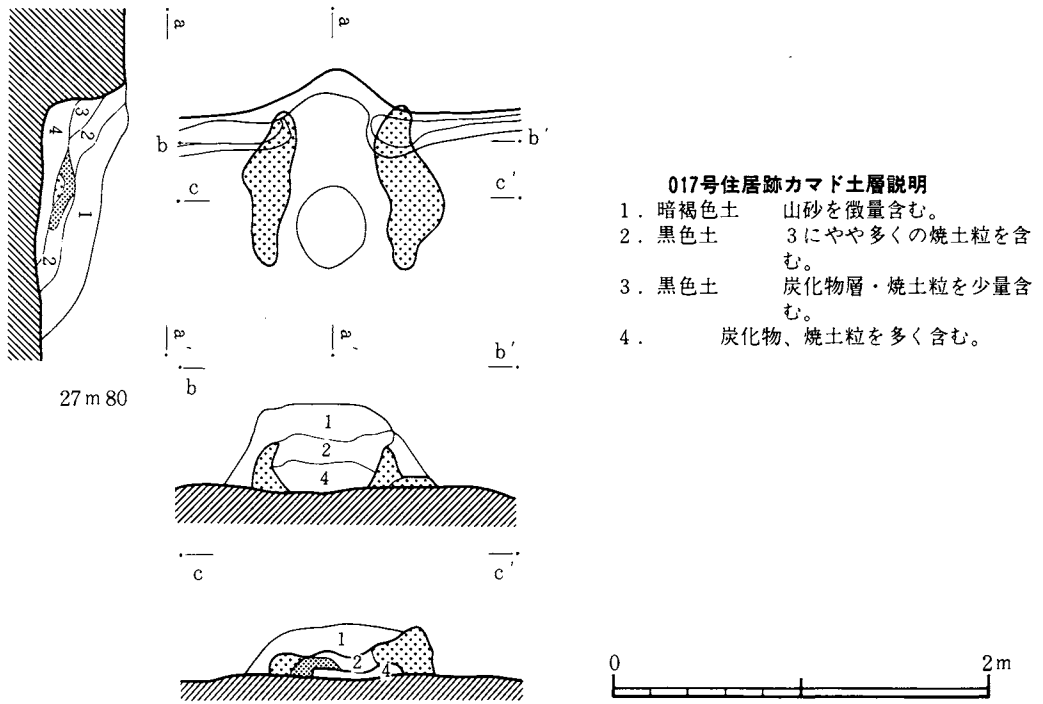
カマド右側から貯蔵穴が検出されている。長径80cm, 短径50cmで平面形はくずれて長円形に近いものとなっている。

カマドは西壁に構築されており、遺存状態はあまり良好な状態ではなく袖基部と一部天井材が残るのみであり、また火床部においては焼土等の形成もあまりみられなかった。出土遺物は個体数としてはあまり多くなく、かつ床面に近く検出されたものが多い。また本住居跡の特色としては、土玉の出土量が目立つことがあげられよう。ほぼ住居内床面全体から13点が発見されている。

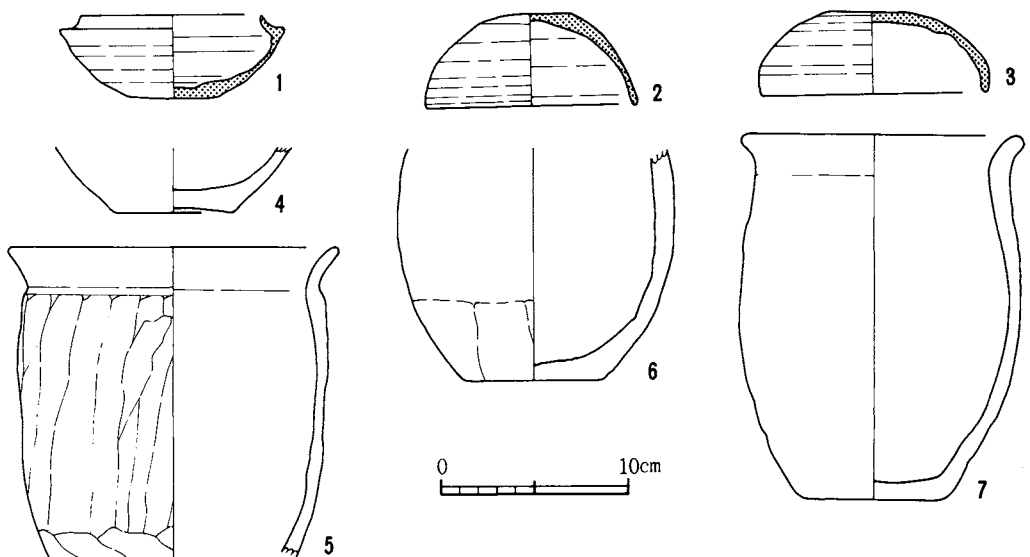


第291図 017号住居跡実測図 (1/80)

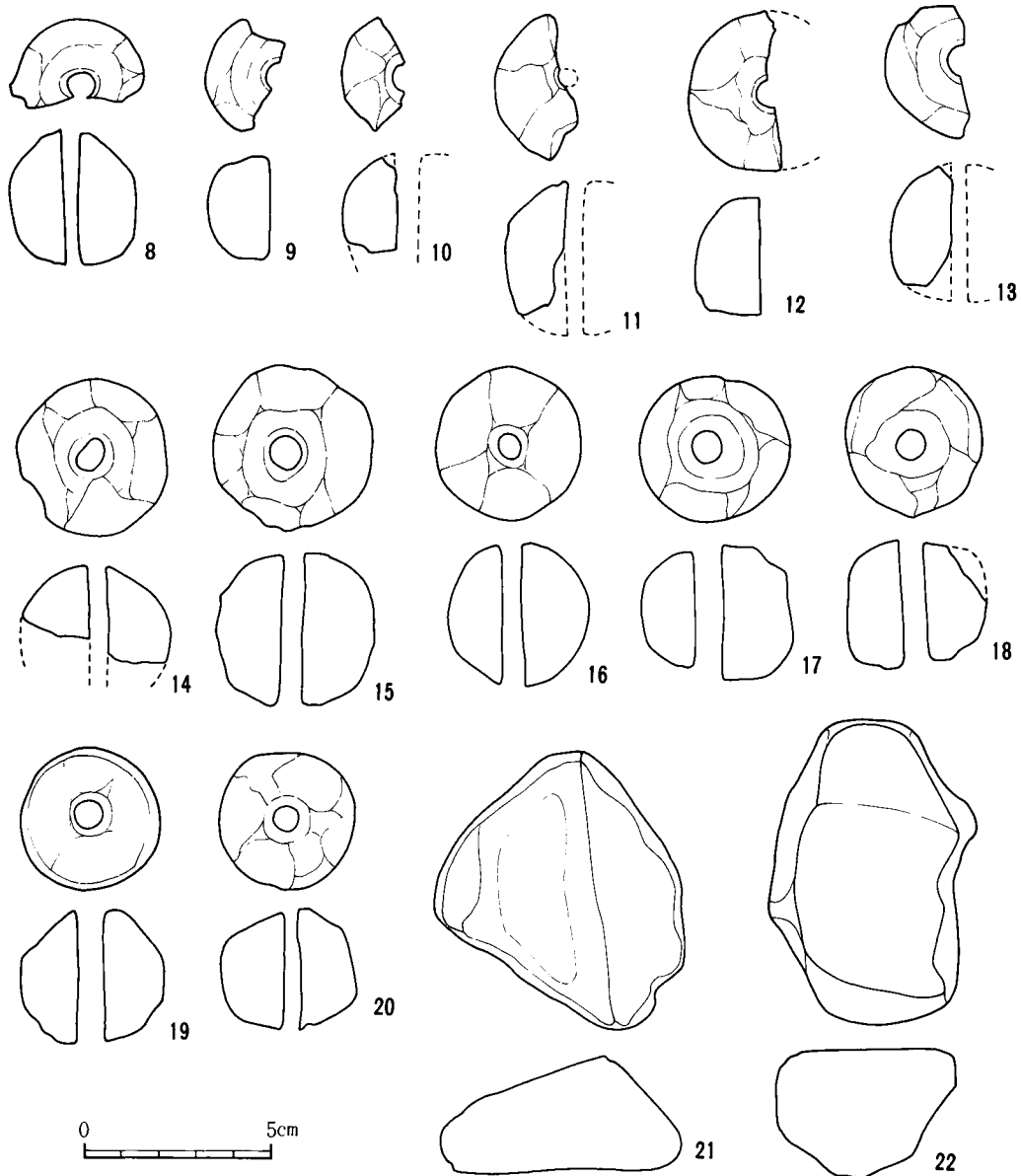
出土遺物中、坏（身）1点、蓋2点、甕4点、土玉13点が発見されている。1は須恵器の坏（身）でほぼ完形、全面に丁寧なナデが施されている。色調は黒っぽさの目立つ灰色、胎土、焼成共に良好である。受部はかなりきつく、「く」の字に入る。2・3は共に須恵器坏蓋である。



第292図 017号住居跡カマド実測図 (1/40)



第293図 017号住居跡出土遺物実測図(1) (1/4)



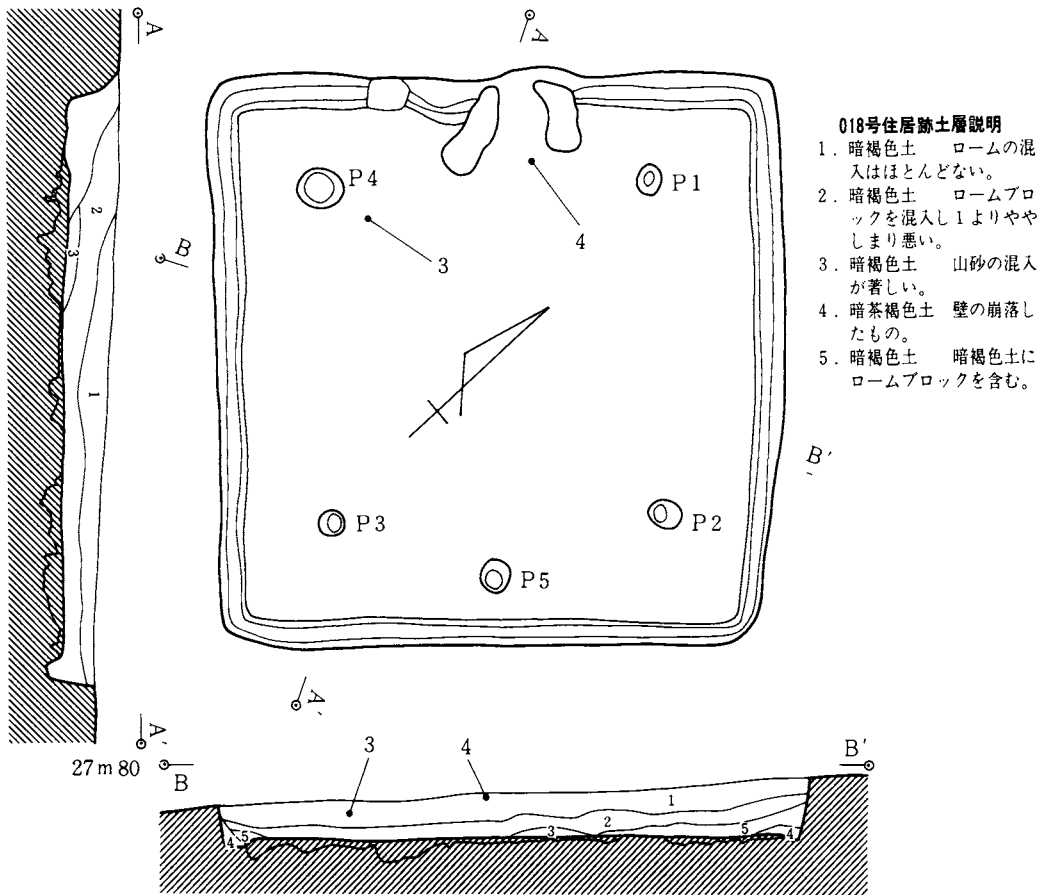
第294図 017号住居跡出土遺物実測図(2) (1/2)

共にほぼ完形，天井部は回転ヘラケズリ，内外面ともによくナデが加えられている。5は底部を欠くが甕である。色調は暗い感じの赤褐色で二次焼成により器面の荒れが感じられる。口縁部はナデ，胴部はタテ方向のヘラケズリが加えられている。6は胴一底部にかけて約1/2程が残る。色調は暗い茶褐色胎土は砂っぽい。器面はやや荒れており，わずかにヘラケズリ及び，底部のヘラ整形みられる。小型のためか器肉は厚い感がある。7はほぼ完形に近く遺存する小型の甕である。内外面ともに磨滅多く，胎土中には砂粒を多く含む。焼成はそれほど良好なものではないと思われる。色調は暗黒褐色，ヘラケズリ後全体にナデを施したか，磨滅が加わり，

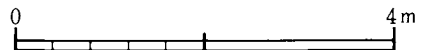
いささか整形痕ははっきりとしない。土玉は一見大きさにバラツキがある様に感じられるが、ほとんどが直径4cmが中心的な大きさである。かなり荒い面取りで雑な感じがある。24, 25は砥石の残片である。色調は黄茶褐色、表裏共にかかなり使い込まれた感じがする。

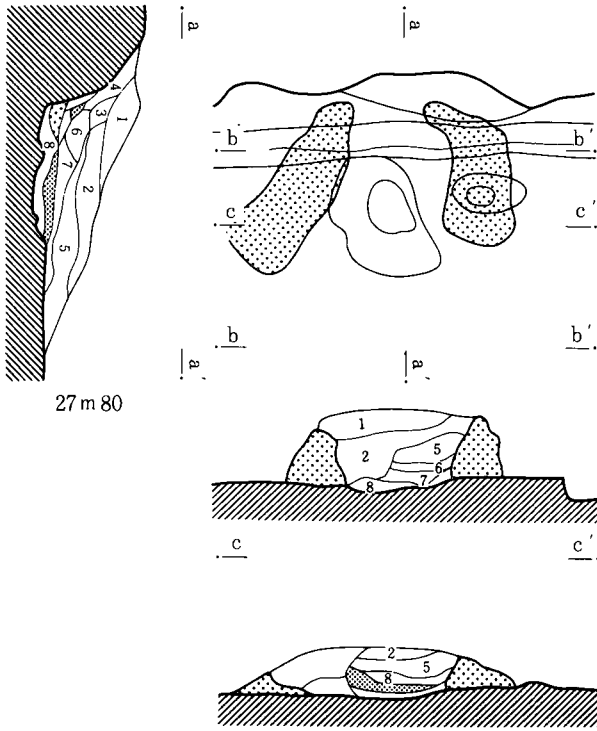
018号住居跡 (第295~297図)

017号住居跡より約2m程東に位置し、一辺が約6mのほぼ正方形を示す。主軸はN-48°-Wである。床面までは遺構検出面から約60cmほどである。支柱穴4本及びカマド対面から柱穴が検出されている。本住居跡における柱穴は他に比べ、いささか細身であろうか。直線はP₁・P₂・P₃・P₅が約30cm, P₄が40cmである。床面からは47cm-48cm-35cm-37cm-18cmを測る。壁溝は住居内を約20~30cm, 床面から10~20cmの深さで全周しており、カマド下も途切れることなく続いていた。床石は荒掘り後ハードロームブロックをつめ込みほぼ平坦な面を保っている。



第295図 018号住居跡実測図 (1/80)

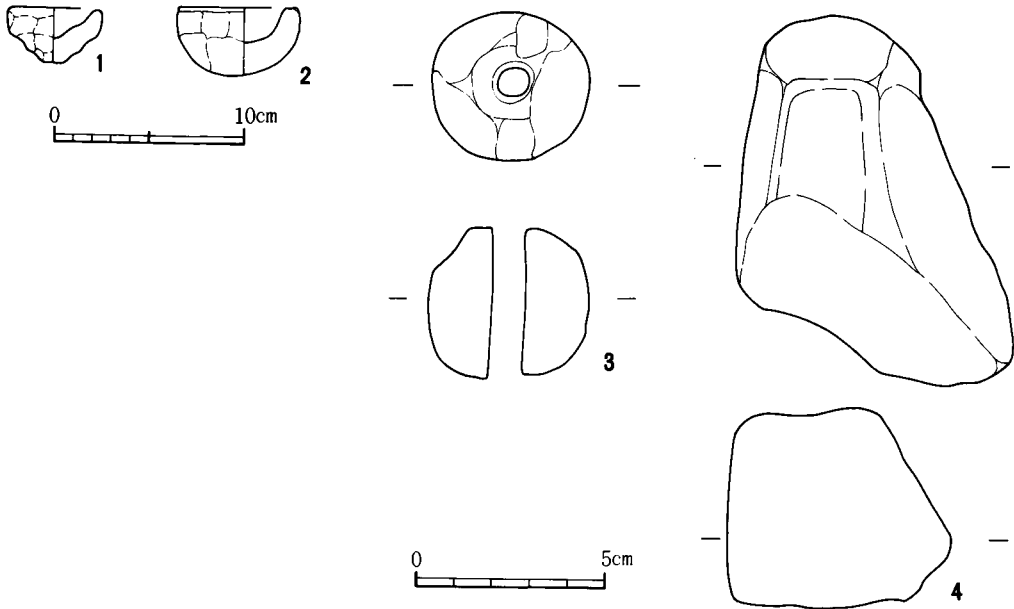




018号住居跡カマド土層説明

- 1. 暗褐色土 山砂を若干含む。
- 2. 黒褐色土 黒色土に多くの山砂を含む。
- 3. 暗褐色土 焼土粒は少なく、ややしまりがある。
- 4. 暗褐色土 褐色土粒による焼土粒を微量含む。
- 5. 黒灰色土 黒色土に多量の山砂を含む。
- 6. 暗褐色土 山砂・焼土粒・カーボンを多く含む。
- 7. 暗青褐色土 黒色土に多量の炭化物・灰を含む。
- 8. 黒色土 炭化物層。

第296図 018号住居跡カマド実測図 (1/40)



第297図 018号住居跡出土遺物実測図 (1~2・1/4, 3~4・1/2)

カマドはくずれ込み天井材などが流出しており、ややだらしなない感じが残る。煙道部は壁より約10cmほど煙道部を設けているが、位置を決めかねたように、はっきりとしない掘り込みである。袖部左側先端近くは大半が流出しており、壁直下のみがいくらか残るのみであった。火床部等は壁溝上を埋め込み整形したあたりに位置しているものか。遺物は細片が多く図示し得なかった。第295図に示したものは覆土中でもかなり浮いた状態であり、混入物に近いものであろう。時期を決定し得るものは特にみられないが主軸方向及び位置的な関係から017号跡と極めて近い時期の所産であると思われる。

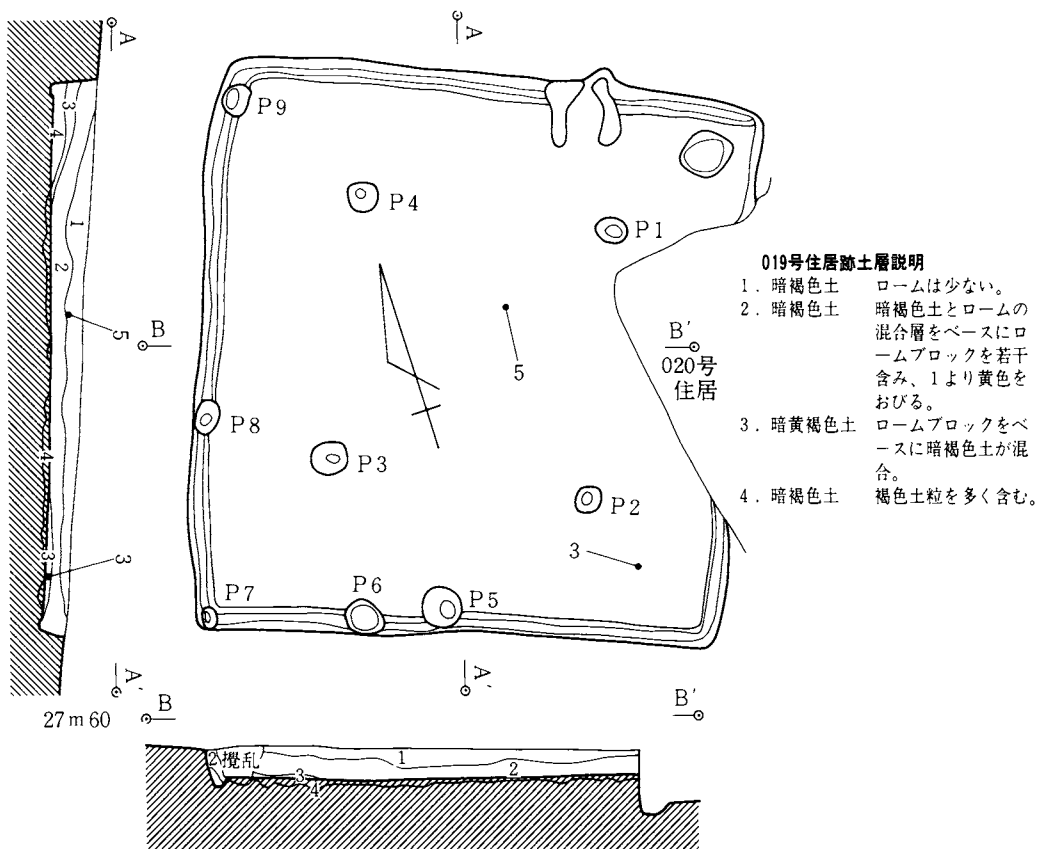
1・2は手づくねの小型の土器である。1は3/4, 2は1/2ほどの遺存である。共に内外面とも指頭による粗な整形である。3の土玉は完形、直径は約4cm強、荒いヘラケズリ後ナデを施している。4は磨石である。縄文土器などは本遺跡においてほとんどみられないため集落形成時期のものであろうか。各面ともに使用痕あり。

019号住居跡（第298～300図）

019号住居跡は住居群のほぼ中央部付近より検出されており、020号住居跡に東側壁部を一部掘り込まれている。主軸方位はほぼ南北に近くN-22°-Eである。平面形はほぼ方形、ただしいささかいびつである。一辺は約6m、確認面より床面までは約30cmを測る。壁溝はカマド下を含め約20cmの幅で全周する。柱穴は支柱穴と考えられるものがP₁～P₃である。直径は30～40cm、床面からは約50cmほど掘り込む。P₃は出入口に相当する位置にある。直径は40cm、深さ25cmである。P₆～P₉は壁柱穴であろうか。直径は20cm、深さは床面から10～20cmと西側壁下に並ぶものの東側壁下にはみられなかった。貯蔵穴はカマド正面右側に位置し60×40cmの丸みをおびた方形である。床面からは約50cm程で床面にいたる。

カマドは住居北側壁に設けられている。この北側壁は約5.7mを測るがカマド中心は東壁のコーナーから約1.8mの位置にあり、かなり片寄りが目立つ。遺存状態はあまりよくなく袖の基部が残る程度である。壁より袖先端間では最大70cm、袖最大幅で約80cmとどちらかと言えばこぼりな作りである。遺物の出土は全体として少なく3を除いて、やや床面より浮いた状態であった。

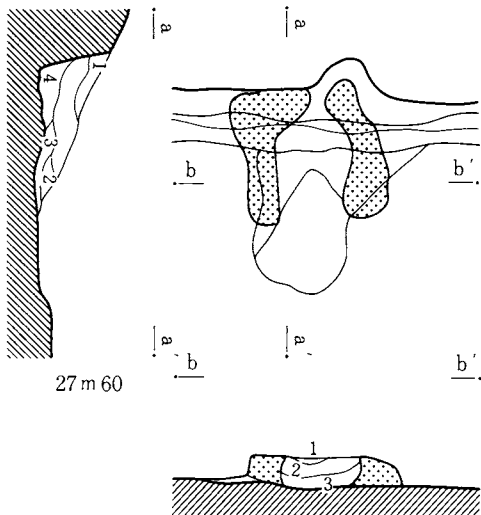
019号住居跡から出土した遺物の中で実測可能なものは図示した5点のみである。内訳は坏2点、埴1点、甕2点である。1は約2/3の遺存、色調は暗茶褐色、調整は外面は横方向のヘラケズリのあとミガキを加える。内面は丁寧なミガキが加えられている。また内外面ともに赤彩が施されている。胎土、焼成ともに良好。2は約1/3程の遺存である。黒褐色、胎土は砂質っぽくあまり良質とはいえない。上半は丁寧なナデ、下半はヘラケズリ、内面は丁寧なナデが施される。また赤彩も内外面ともに施されている。3は埴になるか、ほぼ完形。外面は横のヘラケズリのあとミガキを加えている。内面はヘラによるケズリのあと丁寧にミガキを加えてある。内



019号住居跡土層説明

1. 暗褐色土 ロームは少ない。
2. 暗褐色土 暗褐色土とロームの混合層をベースにロームブロックを若干含み、1より黄色をおびる。
3. 暗黄褐色土 ロームブロックをベースに暗褐色土が混合。
4. 暗褐色土 褐色土粒を多く含む。

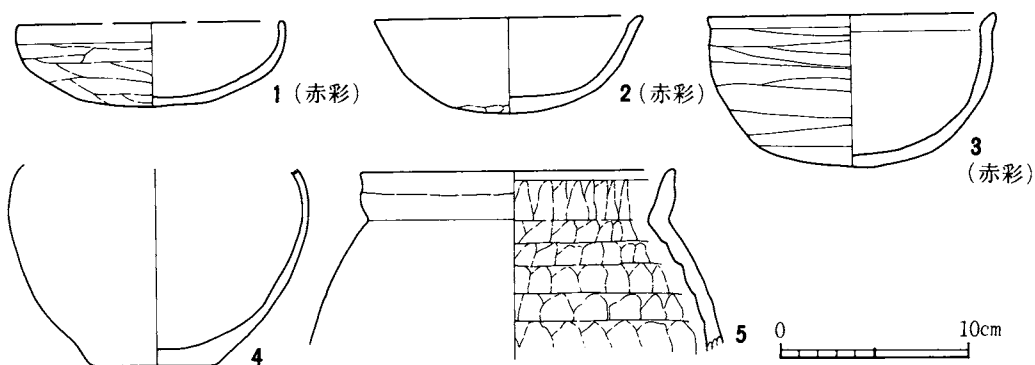
第298図 019号住居跡実測図 (1/80)



019号住居跡カマド土層説明

1. 暗褐色土 多くの灰・山砂を含む。
2. 暗灰褐色土 山砂を主とする。
3. 黒褐色土 炭化物を主として、焼土・山砂を含む。
4. 暗黒褐色土 焼土・炭化物を若干含む。

第299図 019号住居跡カマド実測図 (1/40)



第300図 019号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

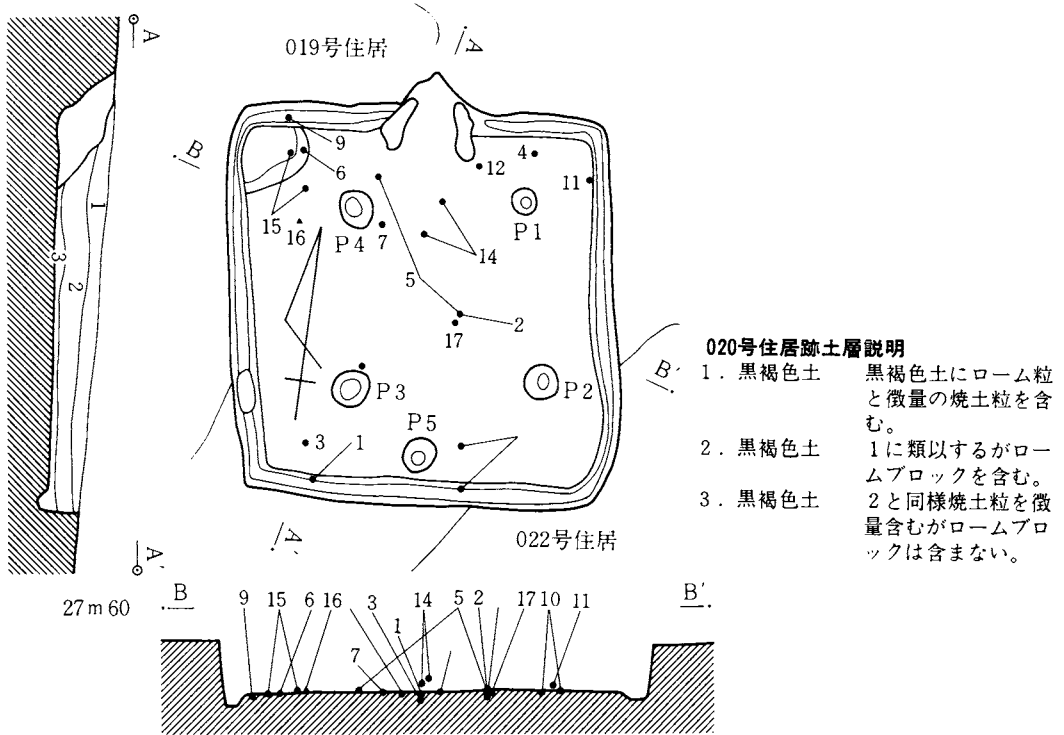
外面とも赤彩されている。胎土、焼成ともに良好である。4は甕になるのだろうか。胴下半のみ残る。外面はヘラケズリのあとナデが加えられる。内面も同様にナデが施される。色調は暗茶褐色、胎土は砂っぽい感じがする。5は甕の胴上半である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は粘土紐接合のための指頭圧痕がのこる。外面に比べ雑な感じである。

020号住居跡 (第301～303図)

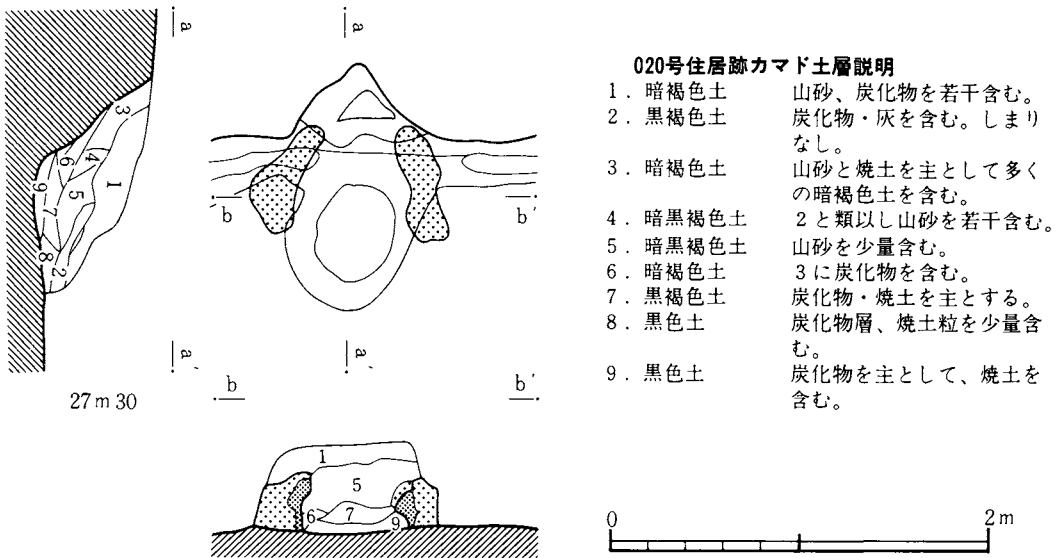
本住居跡は019号住居跡および022号住居跡を切りこんで設けられている。主軸方位はほぼ南北に近くN-9°-Wである。平面形に近いが東壁にややいびつが見える。一辺約4m、床面までは確認面より約50cmである。柱穴は5本確認されている。P₁～P₄までは上屋に伴うものと考えられるが、P₅はいわゆる出入りに伴うものであろうか。P₁は直径約30cm、床面より約30cm程掘り込まれている。P₂～P₄までは直径は約40cm前後と大きさはほとんど同じである。床面よりの深さは50-58-47cmと掘り込みも極めて近い数字が見られる。P₅も直径はほぼ40cm、掘り込みは36cmとやはり同じような数値である。カマド左側のコーナー部にある浅い掘り込みが見られたが貯蔵穴などではないようである。ただこのあたりから紡錘車や土錘などが見られるため、物を収納する位置であったかとも考えられよう。

遺物は床面上に多く残されており、第301図に示されているように、ほとんどが床直上のものである。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。遺存状態はさほど良好なものではないが、旧況をよくみることは出来る。煙道は壁より幅60cm、奥行き40cmを測ることが出来る。煙道部の立ち上がりはやや急な感じのするものとなっている。袖は壁面より約50cm程、また袖部最大幅は100cmを測ることが出来る。袖の取り付け部は煙道の掘り込み部内から取り付けられている。この袖は内面が良く焼けており、かなり使用された様子がうかがえる。壁溝はカマド部分を除き



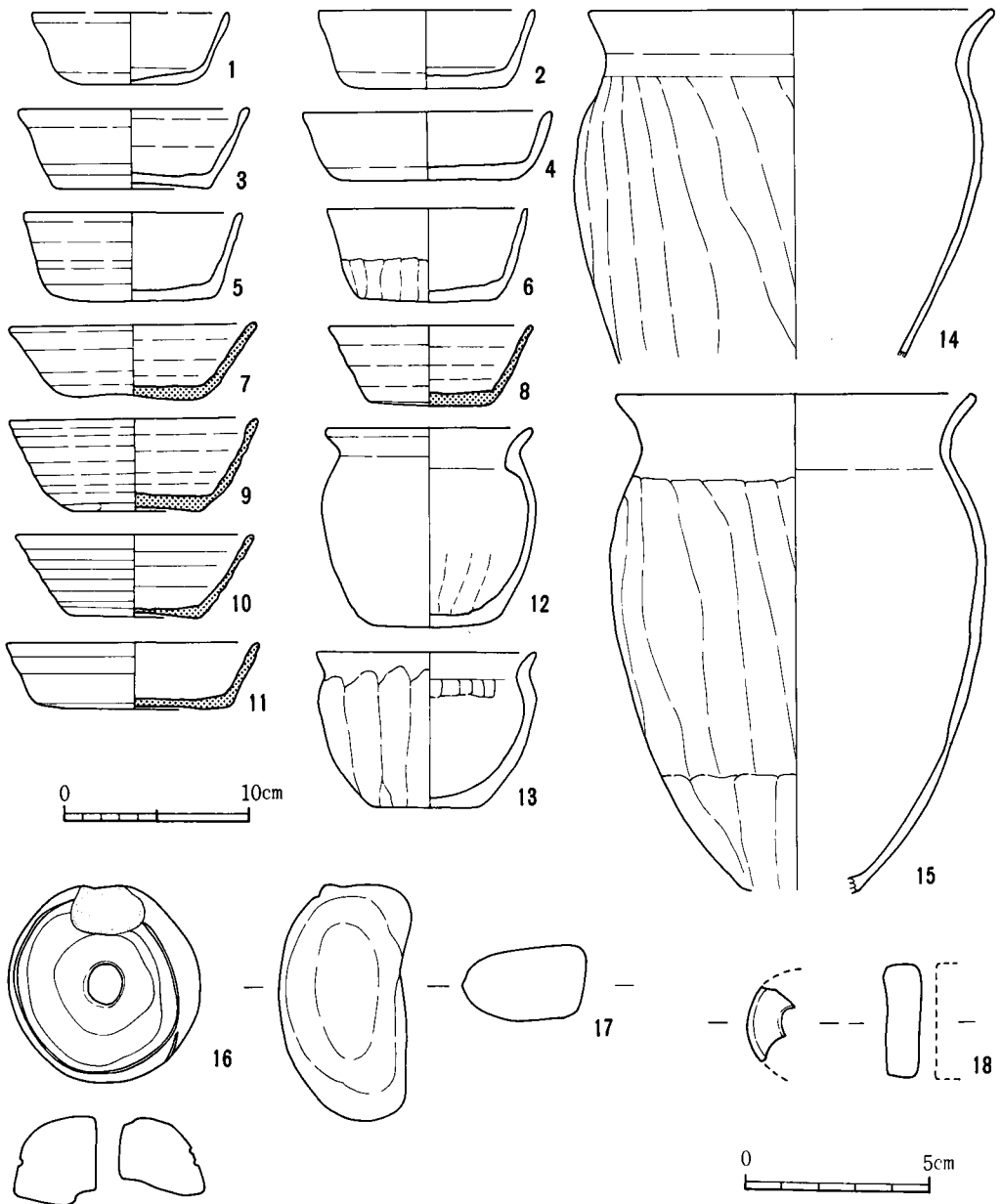
第301図 020号住居跡実測図 (1/60)



第302図 020号住居跡カマド実測図 (1/40)

平均幅20cm、床面より10cmの掘り込みでほぼ全周している。

この住居跡からは遺物の出土量も多く、また床面上からのものが多い。坏が11点。甕は全部で4点見られ、そのうち小型のものが2点である。土器以外の物としては紡錘車(16)、土錘(18)、磨石(17)、などがみられる。坏のなかでも土師器は1～6までの6点である。1は1/3程の残りである。内外面とも二次焼成によるものか剝離が目立つ。胎土・焼成共に基本的には良好なようである。2は3/4の遺存、やや黒い。底部周囲はヘラ整形を加える。3はほぼ完形。これもやや黒い。底部周囲は回転ヘラケズリ、底面は静止糸切り、焼成・胎土は良好。4は底のわりに浅



第303図 020号住居跡出土遺物実測図 (1~15・¼, 16~18・½)

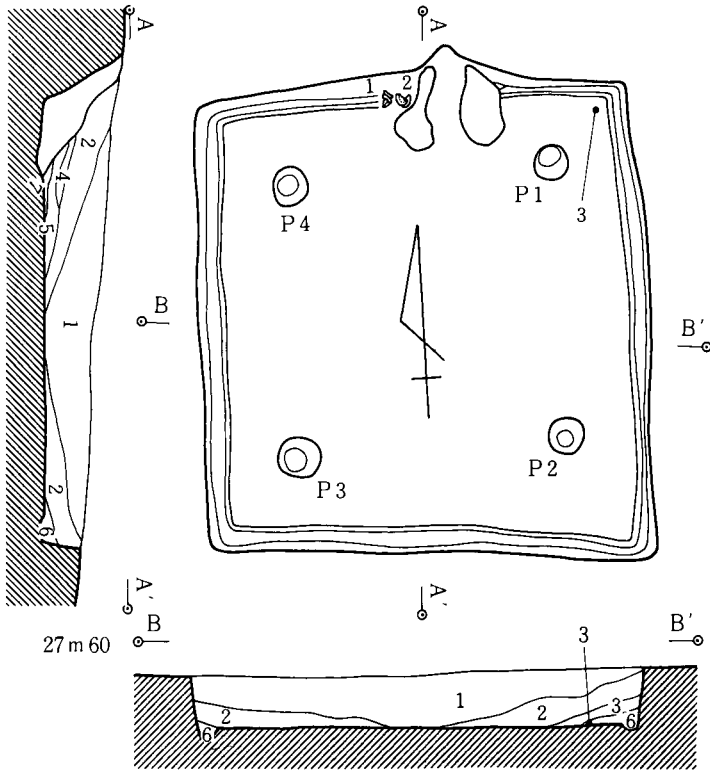
く皿に近いが、ほぼ完形。いくらか灰色気味の褐色。底部はヘラ整形。5はそれに比べ深い感じがする物である。ほぼ完形。底部はヘラ整形、底部周囲は横方向のヘラケズリを加えている。6も完形。やはり黒褐色、胎土は緻密で焼成も良好。内外面ともに横のナデ、外面下半は横方向のヘラケズリを施す。底部は回転ヘラケズリの後、ヘラ整形をくわえる。7～11までは坏でも須恵器の物である。7はほぼ完形、胎土中には雲母片を微量に含んでいる。底部周囲は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラキリである。8はいくらかいびつな感じのするものである。完形、胎土中には砂粒を多く含む。底部周囲はヘラケズリにより整形される。9もほぼ完形、8と同様胎土中に砂粒を含む。底部周辺はヘラ整形を施してある。10は底部周囲は回転ヘラケズリ、底部はヘラによる整形、また胎土中には雲母片を含む。11は底面のわりに浅く蓋に近い物と言えよう。完形、底部は回転ヘラケズリがみられる。胎土は緻密で良好である。12～13は小型の甕である。12はほぼ完形である。胎土は砂っぽくどちらかと言えば不良の部類と言えよう。内面はヘラによる整形の後ナデを加えたものか、荒れが目立つためはつきりしない。Bも完形、やはり砂粒を含む。内面はヘラケズリの後ナデを加える。外面は縦方向のやや荒いヘラケズリが残る。胎土内には砂粒も多く含まれているものの焼成はまず良好なものであろう。15は底部を欠く。内面はナデ、外面はヘラケズリである。胎土、焼成共に良好である。16は防錘車である。ほぼ完形、明るい緑がかかった石材である。外面は磨きは加えてある。また中段には沈線による一条の線が加えられている。17は磨き石であろうか。床面上からの出土でもあり手持ちの道具としての使用が考えられる。用途としてはあと砥石的なものであろうか。18は土錘の破片になろうか。焼成も良好で外面には丁寧なミガキが加えられている。

021号住居跡（第304～306図）

調査区のほぼ中央付近022号住居跡を一部掘り込んで作られている。主軸はほぼ南北に一致している。平面は方形、北壁が（カマド面）4.5m、南壁（カマド対面）が4.8m、東壁は5m、西壁は4.5mとややいびつな感じがする。床面までは確認面より約50cm程であるが、丁度斜面に主軸が合うためカマド側がいささか高くなっている。床はほぼ平坦に保たれている。壁周はカマド両端で途切れるものの、その外では幅、平均20cm、床面よりの掘り込み10cm前後で回っている。柱穴は四本（ $P_1 \sim P_4$ ）が検出されている。直径は約40cm内外で床面からの掘り込みは、60-60-55-55cmを測る。

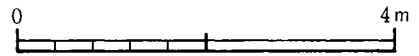
カマドは北壁に設けられており壁面より袖先端までは約80cm、最大幅で約1mを測る。遺存状態はまず良好な方で天井部がそのまま崩れ込んだ様子が見られる。遺物は少なくカマド周辺から何点か見られる程度である。

少量の土器の細片以外では図示した3点のみが検出された。1～2はカマド正面左側から、3は右側北東コーナー近くからである。1は完形、明るい黄褐色、胎土は緻密で良好。内面は

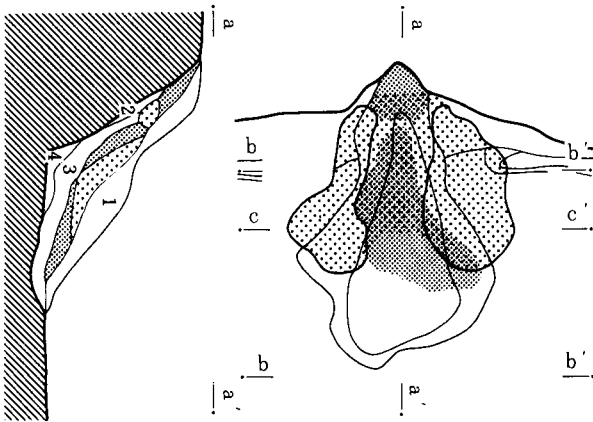


021号住居跡土層説明

1. 暗黒褐色土 若干の焼土粒とローム粒を微量含む。粘性あり。
2. 暗黒褐色土 ローム粒を含まず、焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 2に多くの褐色土粒を含む。
4. 暗茶褐色土 山砂・焼土ブロックを多く含む。
5. 茶褐色土 粘性が強く、褐色粒を多く含む。
6. 暗褐色土 粘性が強く3層よりもチョコレート色が強い。
7. 褐色土 山砂・焼土を多く含む。



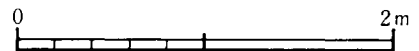
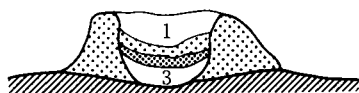
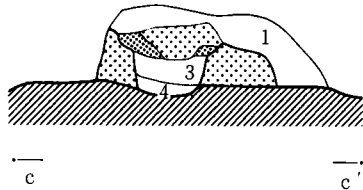
第304図 021号住居跡実測図(1/60)



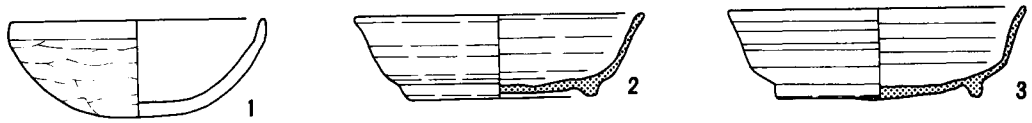
021号住居跡カマド土層説明

1. 黒褐色土 山砂を多量に含む。
2. 暗褐色土 ローム粒と暗褐色土の混合層。粘性強い。焼土・山砂は含まない。
3. 暗赤褐色土 カマド内焼土層
4. 黒色土 炭化物を主として焼土粒を少量含む。

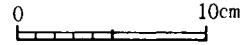
27m 50



第305図 021号住居跡カマド実測図(1/40)



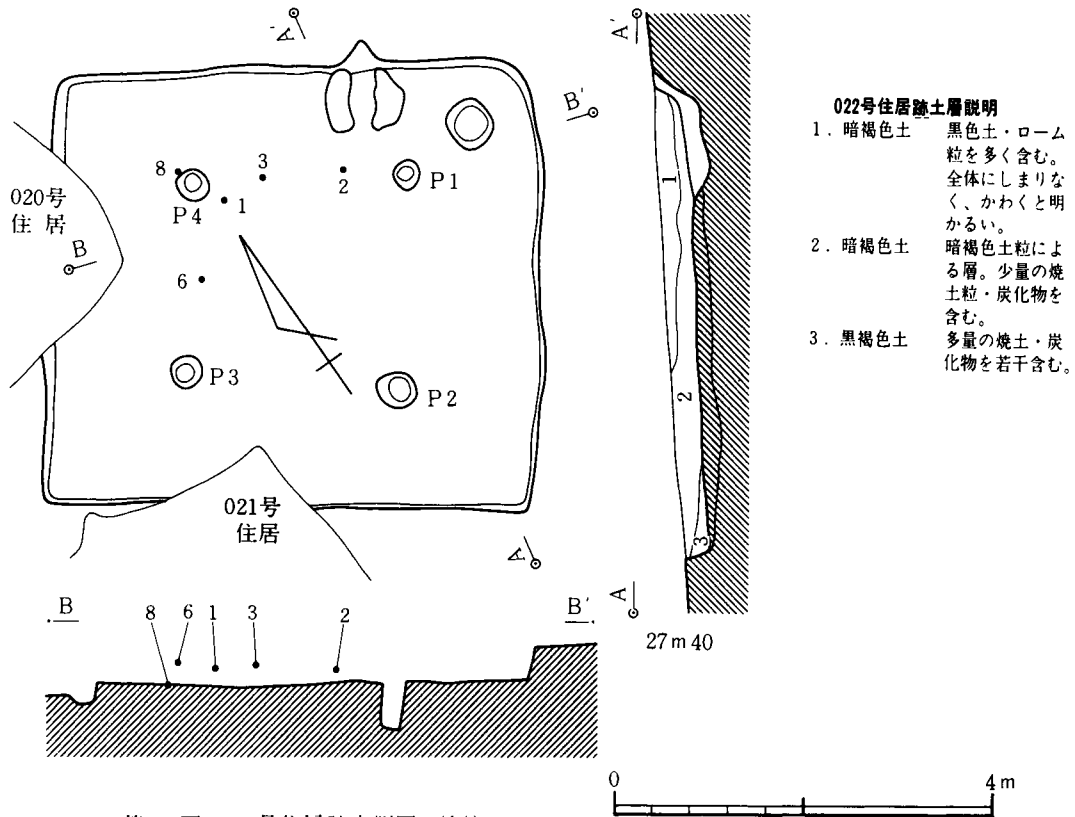
第306図 021号住居跡出土遺物実測図 (1/40)



丁寧なミガキが加えられている。外面はヘラケズリの後やはりミガキを施している。2・3も完形である。胎土は緻密で良好。内外面ともにナデ仕上げが施される。

022号住居跡 (第307~309図)

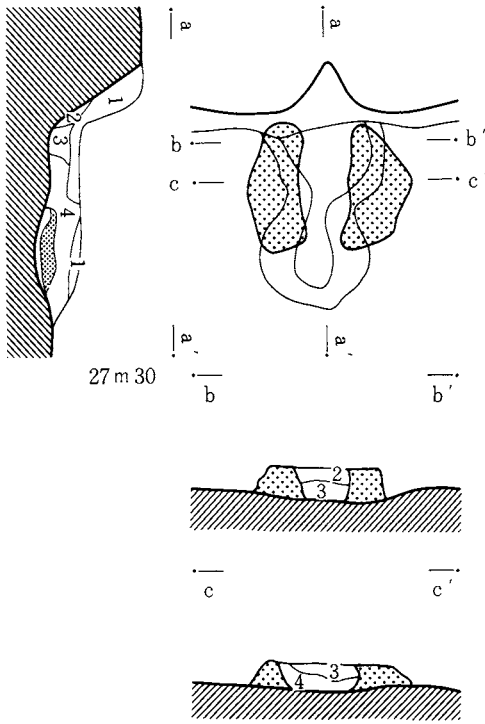
020号住居跡と021号住居跡とに切られて存在する。主軸方向はN-36°-Eを示す。カマドのある面を正面とすると横方向に長い感じのする住居跡である。縦4.5m、横5.2mとそれほどでもないが、カマドがP₁によっているため余計かたよりが目立つのであろうか。柱穴は4本検出されているが、すべて各コーナーの対角線上にある。床面までの掘り込みは確認面より約30cm強



第307図 022号住居跡実測図 (1/80)

である。柱穴は直径が30～40cm、床面からの掘り込みは、50-60-60-57cmである。なおカマド右側より貯蔵穴と考えられる円形に近い掘り込みが確認されている。40cm×50cm、深さは約50cmである。

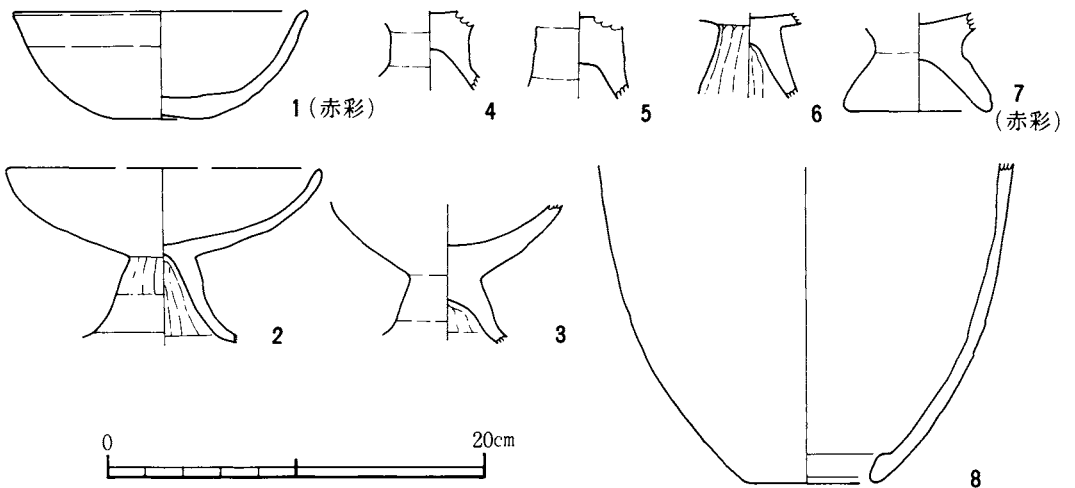
カマドは袖基部のみ残る。袖はカマド取り付け面より先端まで1.4mを測れる。最大幅は1.5m、内面で50cmである。壁溝は確認されていない。荒掘りは床面より平均20cm程下まで行われ



022号住居カマド土層説明

1. 暗黒褐色土 ローム粒を主として焼土・山砂を含む。
2. 黄褐色土 ローム粒と暗褐色土の混合層で粘性が強い。
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含むが、焼土は少ない。
4. 暗黒褐色土 1に焼土ブロックを多く含む。

第308図 022号住居跡カマド実測図 (1/40)



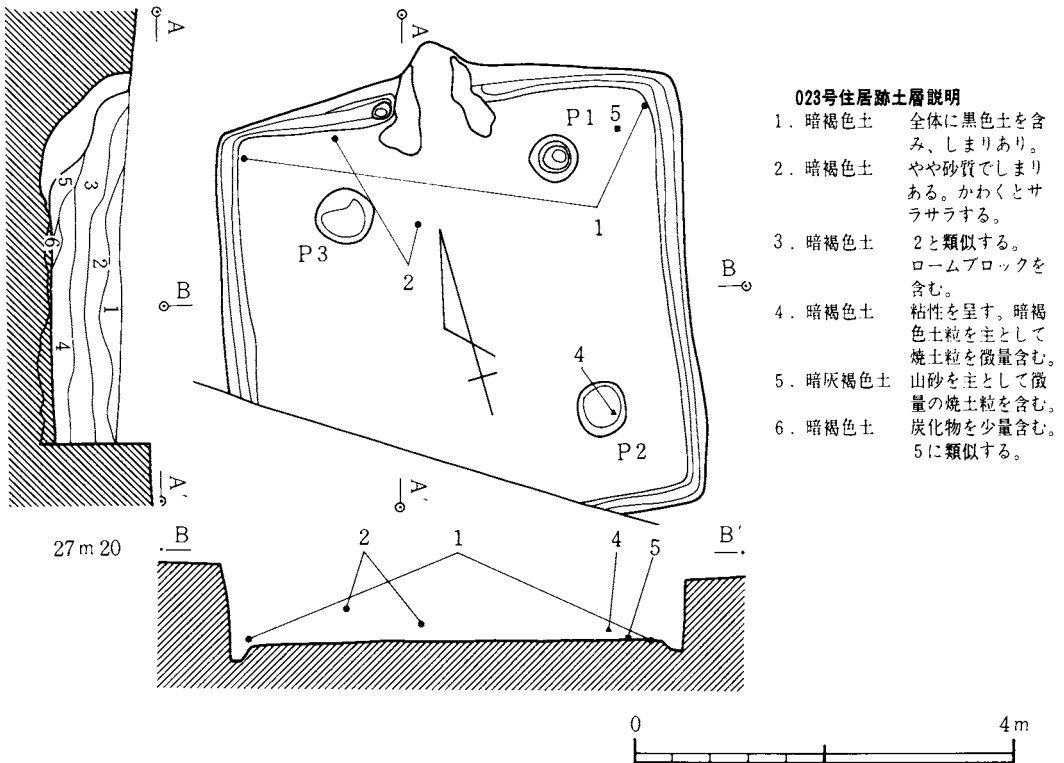
第309図 022号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

ている。カマド位置、柱位置を確定後、ハードロームブロックで埋め戻しながら床面を形成したものと考えられる。遺物は極めて少なく位置も床面から多少浮いている。

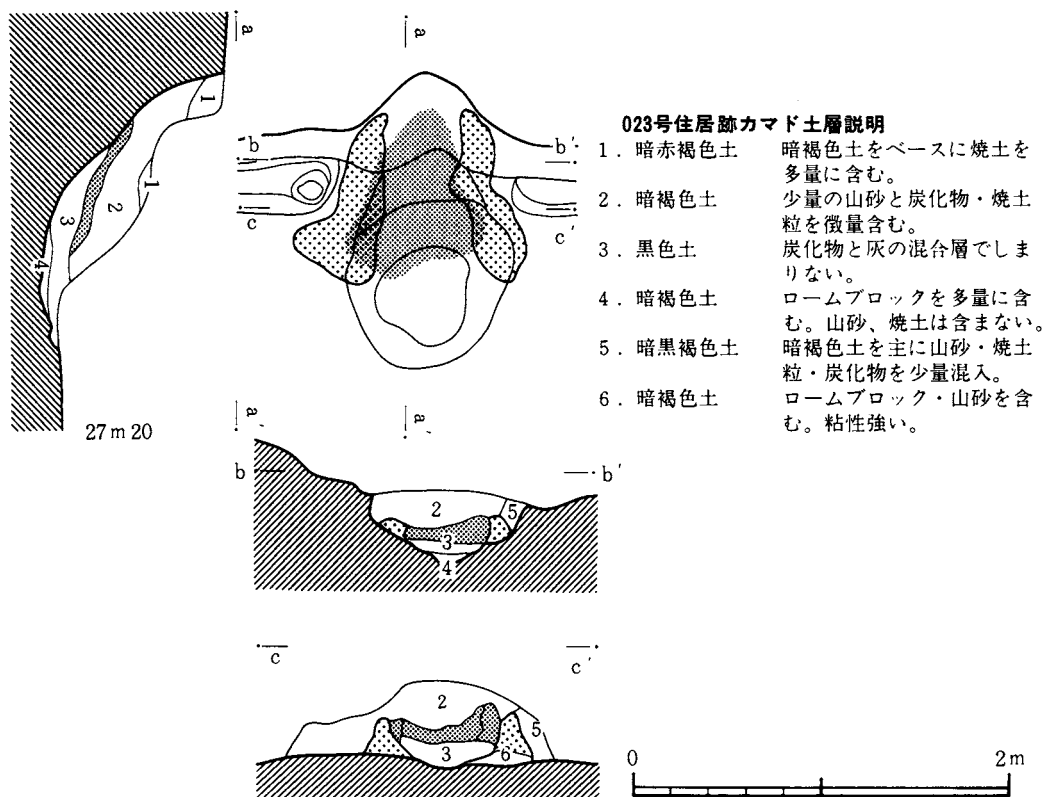
数量的にも少なく細かいものまで含めて、実測可能なものはこの8点である。1は坏, 約1/2程の残りである。内外面共に丁寧なミガキが加えられている。また内外面には赤彩が施される。胎土、焼成共に良好である。2は高坏, 3/4の遺存である。坏部は内外面共にナデが施される。脚部は縦のヘラケズリである。3は坏部と脚部の一部が残る。全体に磨滅が目立つ。4～7までは高坏の脚部のみのものである。7には赤彩が施される。8は甑の胴下半である。外面はヘラケズリのあとナデが施されている。

023号住居跡 (第310～312図)

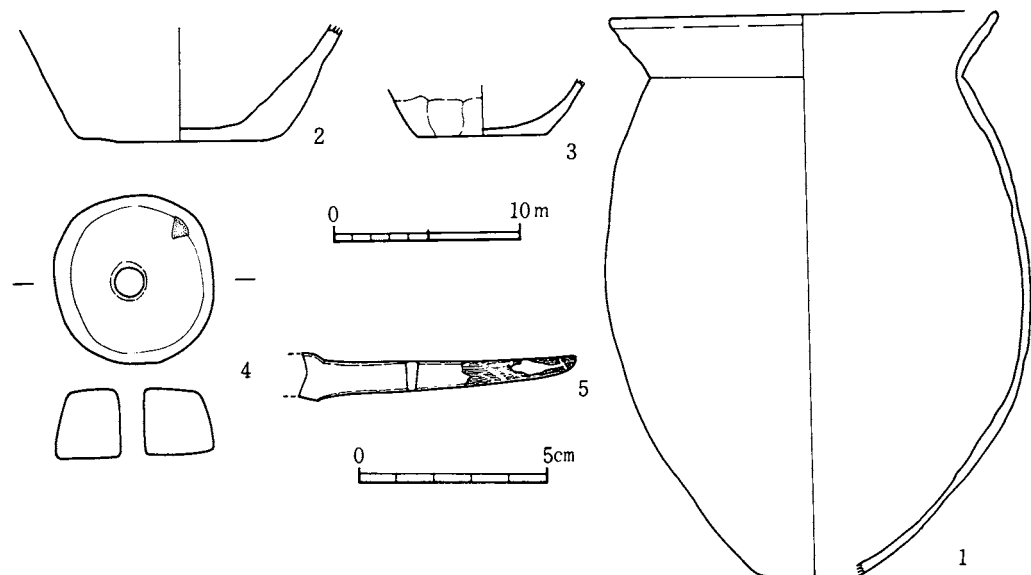
調査区の南側, 全体の1/5程度は調査区外に出る。主軸方位はほぼ南北に一致している。プランは方形, 一辺は南北4.5m, 東西5mである。いくらか斜面気味のところに建てられているため床面までの深さは一定せず, 平均50cmというところか。南側に緩やかに下っている。柱穴は4本確認されている。共に直径50cm前後, 床面からの掘り込みは66-37-50-(不明)である。壁周はカマド部分を除き幅15~20cm, 床より10~15cmの掘り込みで回るものと思われる。カマドは北壁中央に設けられており煙道は幅70cm, 奥行き40cm, 最大幅80cmをはかれる。作りはか



第310図 023号住居跡実測図 (1/80)



第311図 023号住居跡カマド実測図 (1/40)



第312図 023号住居跡出土遺物実測図 (1~3・1/4, 4~5・1/2)

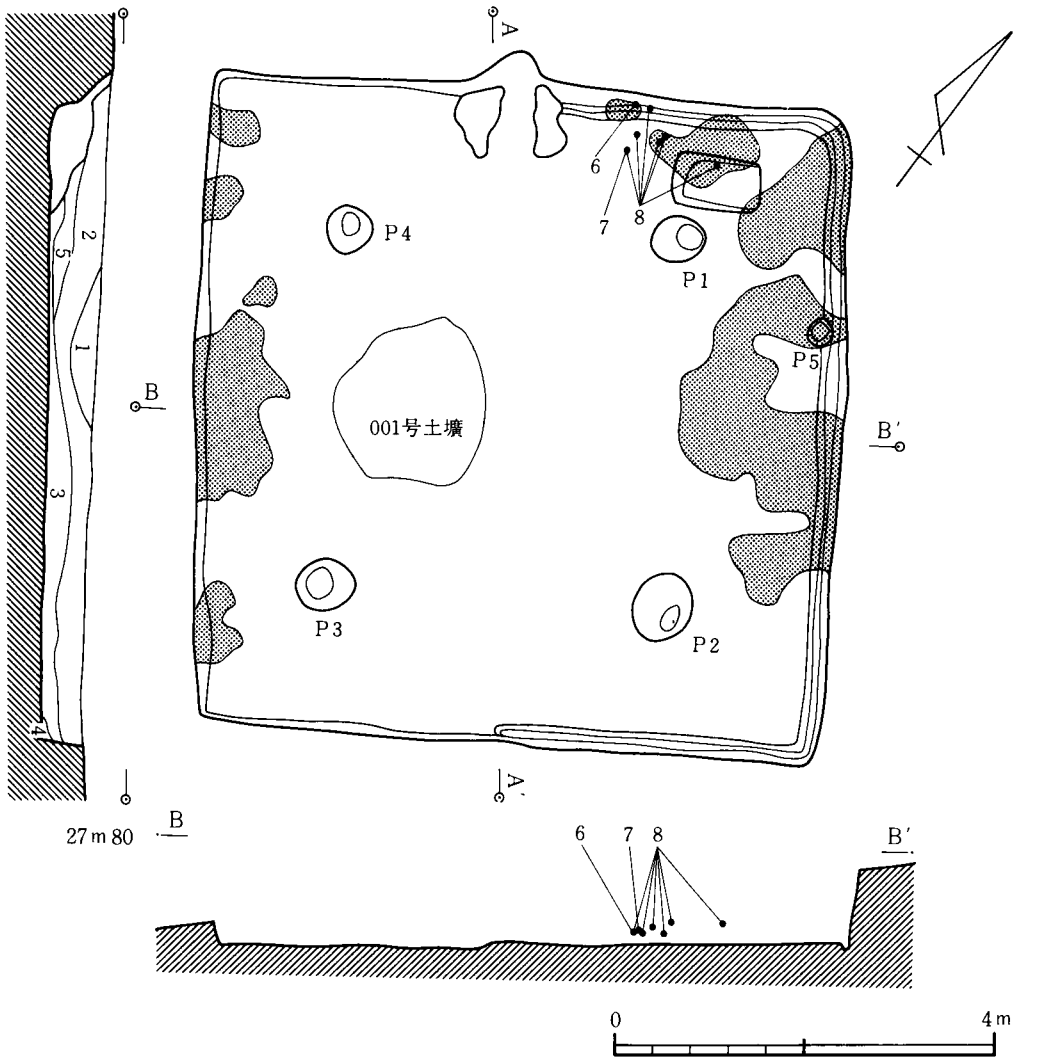
なり丁寧で床面形成以前から位置と構造を決めている感じである。

遺物の出土はやはり少なく、床面ないしはやや浮いた状態での検出である。

全体を知ることの出来るものは1のみである。1は底部を欠く。内外面共に磨滅が目立つ。外面には立て方向のヘラケズリ、口縁および内面にはナデが見られる。胎土は砂質でやや脆そうな感じがする。2・3は甕の底部のみである。やはり器面の磨滅がひどい。4は紡錘車、全面に丁寧なミガキが施されている。5は刀子の茎部である。一部木質部のこる。

024号住居跡 (第313~315図)

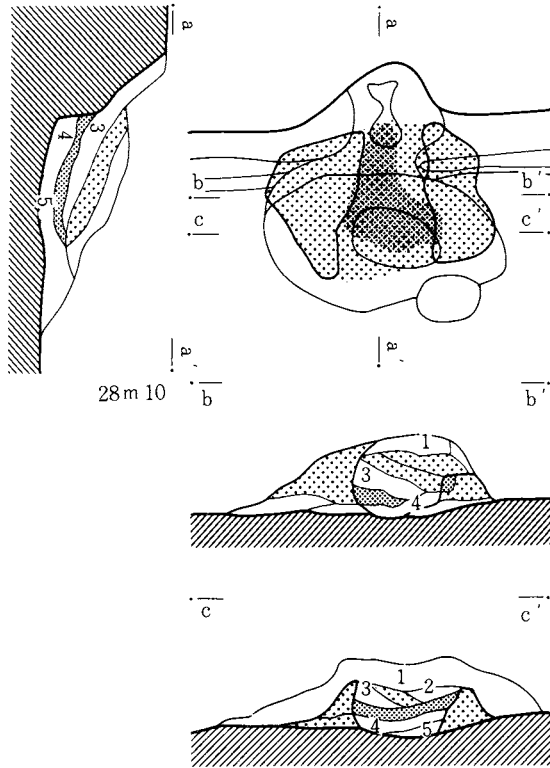
調査区の最東端に位置し土壌(001号)が覆土上面より掘り込まれていた。またこの住居跡は



024号住居跡土層説明

- | | | | |
|---------|-------------------|----------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 | 褐色土がまだら状に入る。 | 3. 暗茶褐色土 | 炭化物を多量に含む。焼土粒を若干含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 暗褐色土を主に褐色土粒を少量含む。 | 4. 黒色土 | 3.に類似する。焼土粒を多量に含む。 |
| | | 5. 暗赤褐色土 | 多量の焼土と若干の炭化物を含む及び粘土粒を含む。 |

第313図 024号住居跡実測図 (1/60)



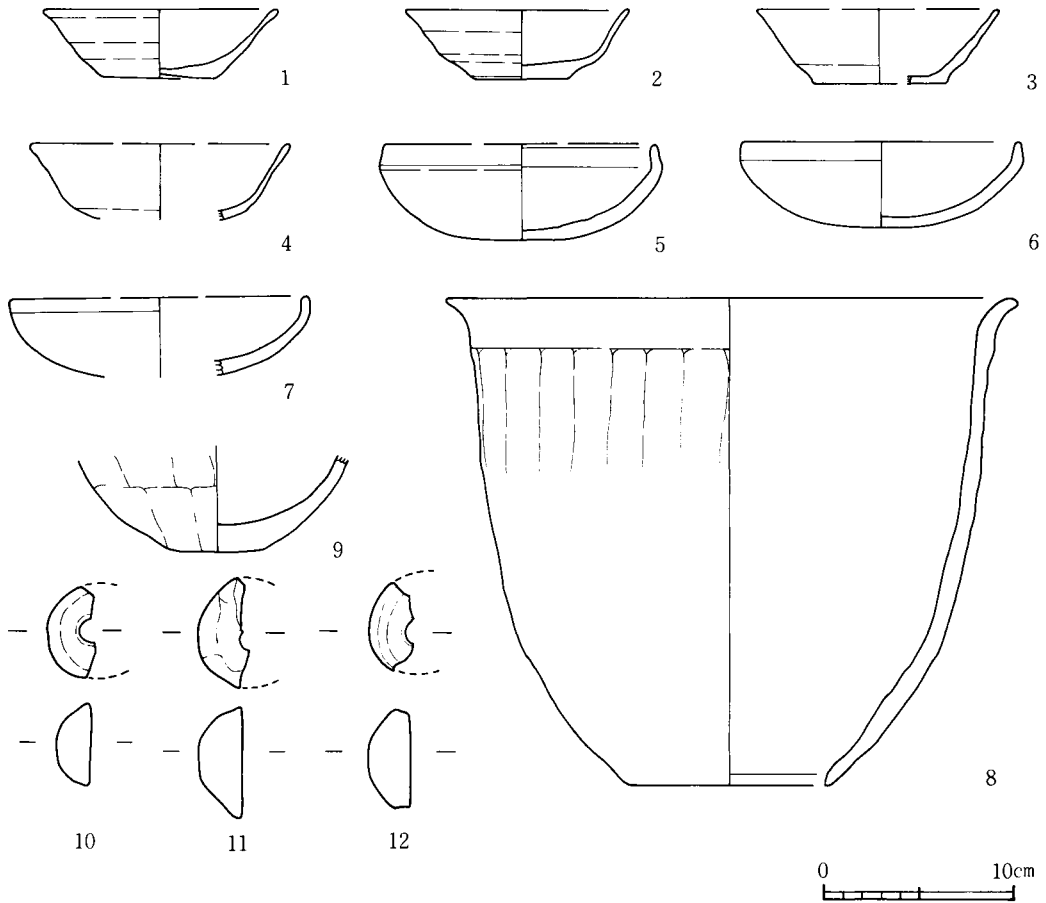
024号住居跡カマド土層説明

- | | |
|----------|-------------------|
| 1. 暗灰褐色土 | 山砂を主として焼土・炭化物を含む。 |
| 2. 暗灰褐色土 | 山砂を多量に含む。焼土は含まない。 |
| 3. 暗黒褐色土 | 多量の炭化物と山砂を少量含む。 |
| 4. 黒色土 | 炭化物と灰層。 |
| 5. 赤灰色土 | 焼けた山砂。 |

第314図 024号住居跡カマド実測図 (1/40)

火災にあったものと思われ床面上及び、覆土内より焼土・炭化材などが検出された。主軸方向はN-33°-W。平面形はほぼ正方形に近くカマド方向が6.7m、横方向で6.8~6.9mを測ることが出来る。確認面からの掘り込みは約50cmである。横方向で6.8~6.9mを計ることができる。確認面からの掘り込みは約50cmである。横方向は傾斜面となっているためエレベーションにおいて見るような壁は、床面より20cm程度しか残されていない。壁周はカマド右側より住居を半周して終わる。幅20cm程度、床面より10cm程の浅いものである。傾斜にあわせた知恵なのであろうか。支柱穴は4本、カマド右には100cm×50cmの長方形の貯蔵穴が設けられている。床面から貯蔵穴底面までは約15cmと浅いものである。柱穴の直径はP₁から約60-60-60-50cmと殆ど同じくらいであった。床面からの掘り込みは75-72-61-63cmであった。その外に壁周内に直径25cm床面からの掘り込み10cmの小型のピットが見られた。カマドは北西方向から崩れ込む感じで天井部が押し潰された状況がよく見られる。焼土の形成も炊口から煙道部付近まで見られよく使われていたものようである。

遺物の検出は全体的に少なく6・7・8が床面近くからやや浮いた状態で検出されている。あとは流れ込み状態に近い検出状況である。



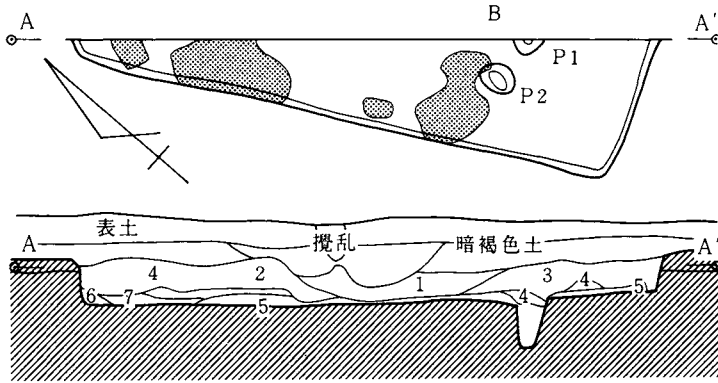
第315図 024号住居跡出土遺物実測図(1/4)

1～7までは坏である。1～2はほぼ完形，暗茶褐色，底部は回転糸切り，3は1/2ほど残る。底部静止糸切り，手持ちヘラケズリを底部周囲に施す。4は1/3ほどの残り，黒褐色，内外面の剝離目立つ。5は3/4残る。胎土，焼成は良好，6は完形，胎土，焼成共に良好，内面黒色処理施す。7は1/3の残り胎土中に砂粒含みあまり程度は良くない。8は甑，3/4ほどの残り，胎土焼成ともに良好，外面ヘラケズリ，内面はナデを施す。9は底部のみである。胎土中に砂粒を多く含み，内外面荒れ気味。10～12は土玉である。12以外は雑な作りで指頭圧痕がみられる。12はていねいな作り，外面ナデで仕上げています。

火災と言うよりは住居の廃棄に伴い火をつけたものの可能性が高いようである。

025号住居跡 (第316図)

024号住居跡のすぐ北西2mの位置にあり，その大半は調査区の外にある。調査されたのは一辺を含む約1/5程であろうか。一辺は約6m，確認面よりの掘り込みは約40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁周は確認されなかった。床面及び直上の覆土内には多量の焼土も見られ



025号住居跡土層説明

- | | | |
|----|-------|--------------------------------|
| 1. | 暗褐色土 | 黒味をおびロームブロックは少ない。 |
| 2. | 暗褐色土 | ロームブロックを多く含みやや黄色をおびる。 |
| 3. | 暗褐色土 | 2と類似するがロームブロックが少ない。 |
| 4. | 暗黄褐色土 | 暗褐色土を主にロームブロックを多く含み、しまりない。 |
| 5. | 黄褐色土 | ローム粒・ブロックを主とした層。 |
| 6. | 暗赤褐色土 | 焼土を多量に含み、細かいロームブロックも多く含む。 |
| 7. | 暗黄褐色土 | 5に類似するがローム粒が細かくやわらかい。焼土粒も微量含む。 |



第316図 025号住居跡実測図 (1/50)

火災ないし焼却の跡とも考えられる。柱穴は2本発見されている。P₁は直径30cm, 床面からの掘り込み50cmを計ることが出来る。P₂は同じく直径30cm, 床面からの掘り込み50cmを測ることが出来る。時期その他を知るような遺物などは発見されていない。

第2節 掘立柱建物跡・その他の遺構

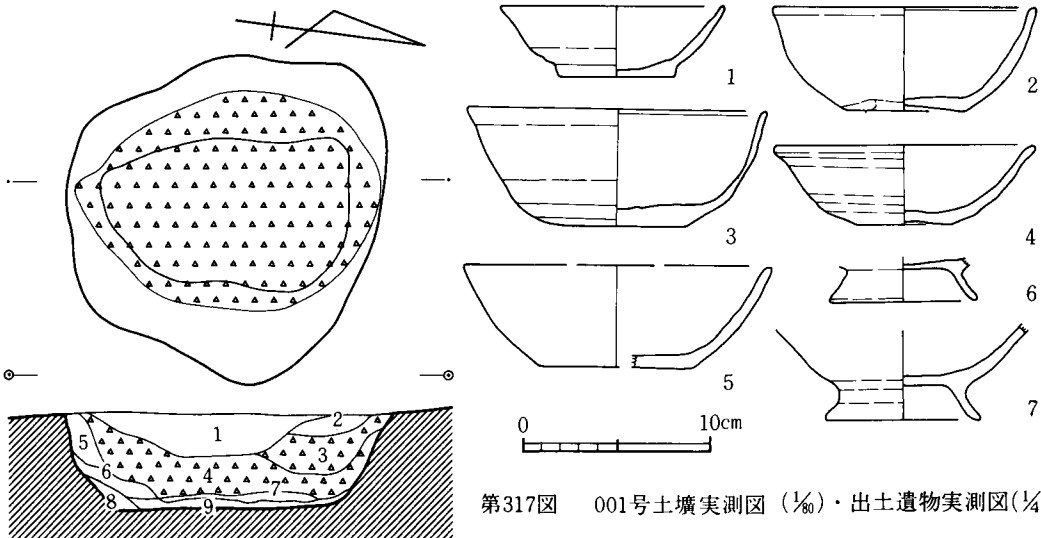
001号土壌 (第317図)

024号住居跡の確認面から掘り込まれており、その覆土内には蛤およびキサゴを主とした貝が投棄されていた。プランは方形気味の不整形で南北方向で約170cm、東西方向で約150cmを測ることが出来る。掘り込みは検出面より50cm弱である。底面では130cm-70cmのやはり不整形である。壁の立ち上がりは緩やかなものである。覆土を見てみると最下層に灰、焼土などが見られる。貝は下層にキサゴ・ハマグリ、上層にハマグリ・アカガイが多く見られる。遺物は全て覆土内上面からの出土である。

出土遺物 (第317図)

すべて坏類が出土している。1は完形、胎土、焼成ともに良好、底部は静止糸切り、色調は暗茶褐色である。2・3はやや深めの物である。2は口縁部の1/2程欠く。底部は静止糸切り、底部周辺は手持ちによるヘラケズリが施される。胎土、焼成は良好である。色調は黒褐色。3は底部は回転ヘラ切りの後ヘラ整形を施す。内面は黒色処理を施してある。

4は 3/4程の遺存である。底部は回転ヘラ切り。5は1/4程の残り。底部は静止糸切り、内面黒色処理。胎土、焼成共に良好である。6は高台付坏の底部である。胎土中に微細な雲母片を含む。7も底部のみである。胎土は砂質気味だが焼成共に良好。

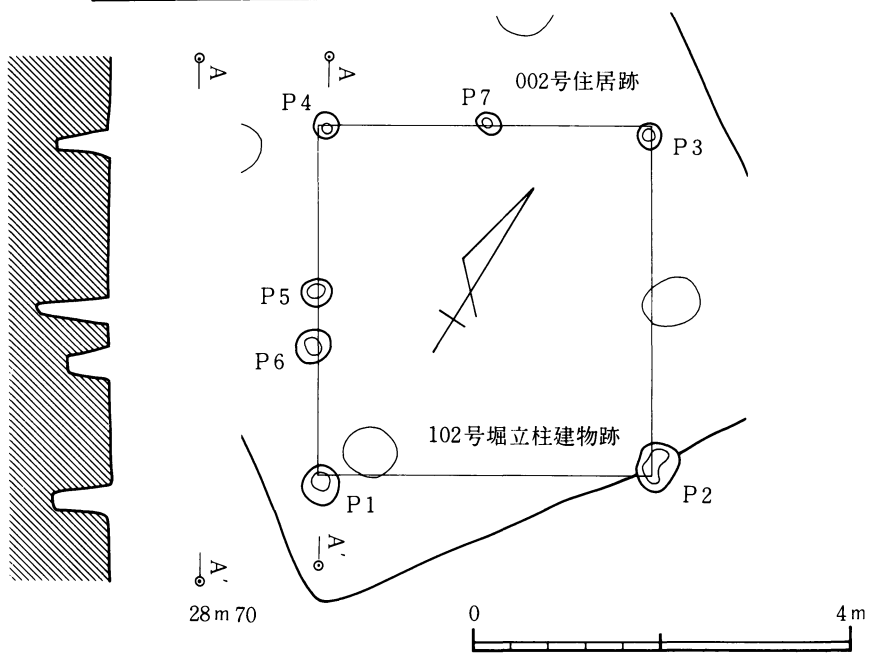
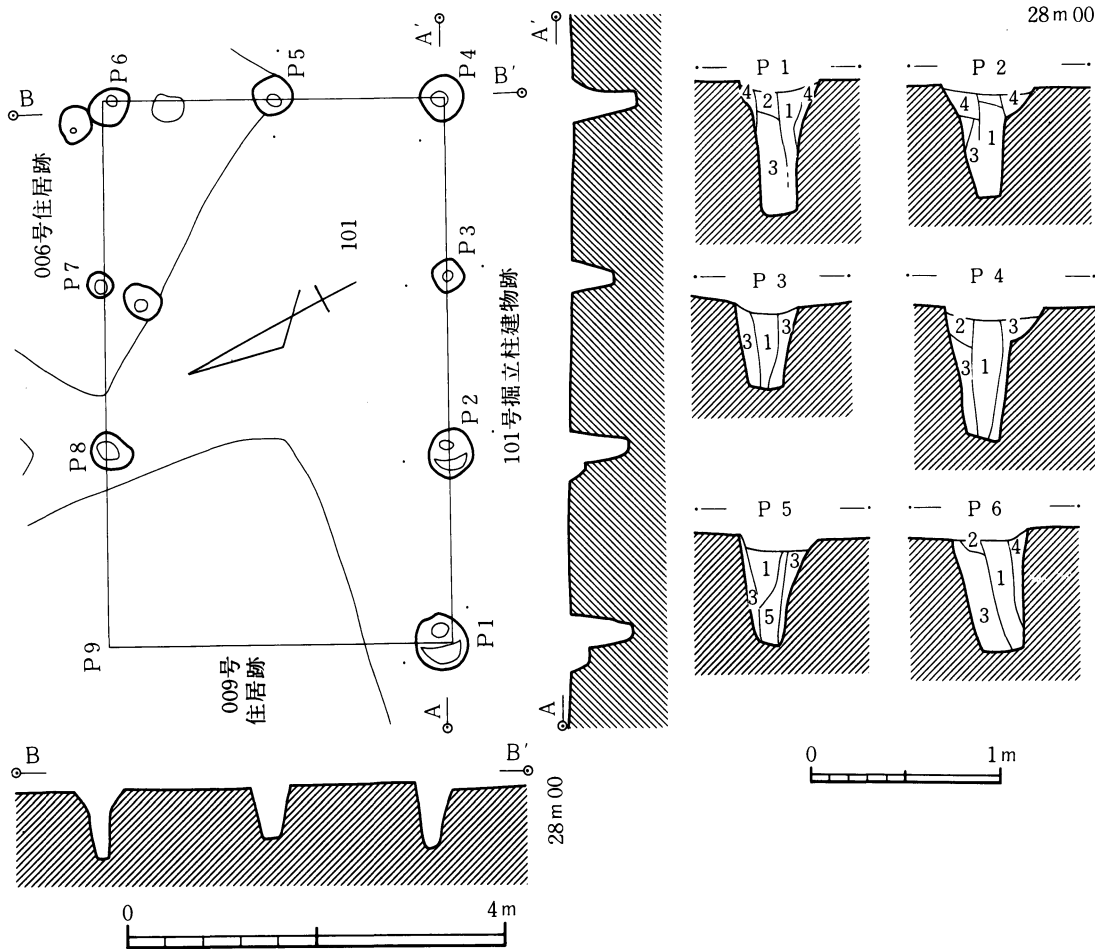


第317図 001号土壌実測図 (1/50)・出土遺物実測図 (1/4)

001号土壌土層説明

- | | | | |
|---------|------------------|----------|-------------------|
| 1. 暗褐色土 | 焼土粒・貝粉を少量含む。 | 5. 灰褐色土 | 灰を主として焼土を少量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒・貝粉を多く含む。 | 6. 暗灰褐色土 | 焼土・灰を主とする。 |
| 3. 黒褐色土 | ハマグリ・アカガイを主体とする。 | 7. 黒褐色土 | 黒色土を主として、貝粉を若干含む。 |
| 4. 黒褐色土 | キサゴを主としてハマグリを含む。 | 8. 黒灰色土 | 焼土粒を含む。 |
| | | 9. 黒色土 | 灰を主とする。 |

28m 00



第318图 101·102号掘立柱建物跡实测图 (1/80)

101号掘立柱建物跡（第318図）

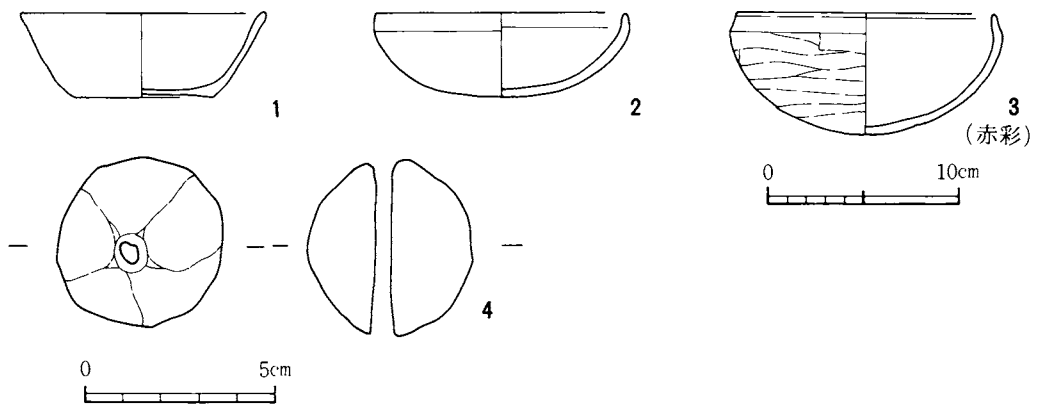
006号～010号住居跡の建て込んだ一角に位置して発見された。建物の規模は3間×2間である。P₉は009号住居跡内にあり、存在を確認することが出来なかった。柱穴は30～40cmで、遺構検出面よりの掘り込みは、浅いもので50cm、平均で70cmを測る。残念ながら本遺物の出土は確認されていない。

102号掘立柱建物跡（第318図）

101号掘立柱建物跡から約12m程東より、002号住居跡と重複して確認された。主軸方向はお互いに多少ずれている。規模は2間×2間である。柱穴はP₁～P₇まで確認されている。P₁～P₂およびP₂～P₃間においてはありうべき位置から柱穴は検出されなかった。柱穴の直径はP₁～P₂が50cm、その他のもので30cm前後、確認面からの掘り込みは約60～80cmを測る。本遺構からも確実に伴うと考えられる遺物の出土は見られなかった。P₆は本建物跡に併うものかどうか不明である。

瓜作遺跡表採遺物（第319図）

ともに8世紀前半に位置する時期の物である。1～3まで坏である。1は底部から胴にかけて残る。底部は回転糸切りによる。胎土は砂質でありあまり良くない。内外面ともに磨滅がはなはだしい。2は一部を欠くものの、ほぼ完形である。やはり砂質な胎土である。内外面ともに磨滅が著しい。3は完形である。内面はよく磨きをかけてある。胎土はやはり砂質がかかるが丁寧な磨きによるためか良好な状態である。赤彩が内外面に施される。4は土玉である。表面は指頭による整形が施される。（池田）



第319図 表採遺物実測図（1～3・¼, 4・½）

第3節 小 結

瓜作遺跡、池田古墳群の本来同一の台地上に位置し、遺跡名称の違いは単に字名の違いからなづけられたと言う経過もあり、あまり意味のあることではない。池田古墳群は古墳と言う存在から古くから知られており別名、瓜作古墳群とも記載されており、昭和43年千葉市加曾利博物館による「千葉市東南部丘陵地帯遺跡分布調査報告」では台地縁辺に沿って円墳が5基確認されている。ここでは改めて池田古墳群と考えておきたい。この台地上における時代的な流れを見てみると調査された範囲の中で古手の住居跡は確認されていない。6世紀末～7世紀初頭に築かれたものが見られる。7世紀もそれ程たたないうちに古墳の築造が開始されたのであろうか。墳丘下の池田古墳群001号住居跡はこれだけの物で在りながら遺物の出土が見当たらない。古墳築造以降幾分この台地の利用状況はとだえる。それが7世紀の中葉以降になると谷津遺跡に近いほうから、再び台地が集落構成の場所として利用される様になりはじめる。7世紀も後半になると1号墳の東側の狭い縁辺部にも住居跡が形成される。7世紀から8世紀に入る頃になると谷津遺跡よりの平坦面に沿って住居跡がかなりの密度で形成されてくる。古墳西側からはいくらかの空白部分を残しているが、東側部分では周溝のすぐ外側まで住居を作っている。集落としては8世紀に入った頃が最盛期となろうか。9世紀前後になると古墳に対する規制がそうとう薄れるのだろうか。墳丘東斜面には食用にしたものか貝が投棄されている。池田古墳群第211図に示された土器が貝層内より発見されている。この頃には集落の中心は谷津跡あるいは台地北側に移って行くのだろうか。調査範囲内からは集落の形勢はうかがえない。(池田)



第320図 谷津遺跡群集落の展開（1）－7世紀ごろ

0 100m



第321図 谷津遺跡群集落の展開(2) - 8世紀前半ごろ

0 100m



第322図 谷津遺跡群集落の展開（3）－8世紀後半ごろ

0 100m



第323図 谷津遺跡群集落の展開(4) - 9世紀前半ごろ

0 100m



第324図 谷津遺跡群集落の展開(5) - 9世紀後半ごろ

0 100m

VI 結 語

遺跡の歴史的位置——大北遺跡を中心として——

今回調査された地域は上総・下総の国境である村田川を下総側に渡ってすぐ、大北遺跡までは国境の村田川から直線距離にして約5キロの位置にあり、特に大北遺跡の周辺には千葉寺や寒川神社、蘇我比咩神社と言った延喜式に記された古社が台地上の遺跡群と対する様に、当時の海岸線脇とも言える浜堤線上に位置している。特に調査の対象となった遺跡群の成立、発展期においては当地域は千葉郡池田郷として知られ、また海岸砂提上との間に上総、下総を結ぶ古代東海道が通っていたものと考えられる。

千葉郡は「倭名類聚抄」によれば「千葉 山家 池田 三枝 糟花 山梨 物部」の七つの郷からなっている。今回の調査の対象となった遺跡群はその内の「千葉郡池田郷」に含まれるものである。

この池田郷の範囲については古くから意見が分かれるところである。古くは「地名辞書」によれば今の市場町、寒川町周辺、「地理志料」によればその外に生実町、浜野町を含めている。「千葉市誌」によれば都川以南、南は村田川まで、千葉寺町を中心に寒川、蘇我、大森町一帯を想定している。また現在地名に残されたものとしては千葉大学病院に登る切通しに「池田坂」と呼ばれる通りがあり、千葉寺町内には小字名に「池田」が残される事などから現在の千葉寺のある一帯を中心に「郷」が形成されていたと考えていだろう。

どちらかと言えば「郷」の中心になる豪族がその勢力の中心地周辺に千葉寺を築いたと言うことであろう。この千葉寺の創建は和銅二年僧行基によるものと寺の縁起は伝えている。寺の調査は昭和5年以来数次にわたり行なわれ鑑瓦には蓮華文が、宇瓦には重弧文が施されていた。昭和25、27年の発掘調査によれば創建期の寺域は120メートル四方に及ぶ規模であったと報告されている。

瓦から見るとすれば千葉寺の創建は最大古く考えて8世紀の前半、すなわち奈良時代の前半であろうか。(その後、この寺は永暦元年(1160)焼失し再建は建久3年、以降数回の火災にあい、現在では当時を伺い知るものは何もない。)

千葉寺についてはやはり千葉氏との関係から中世文書に記載が多く見られるが、その中でも地名について直接しるされているものは、いささか時期が離れるが千葉寺境内からの出土品で国指定重要文化財の「梅竹透釣灯籠」に「下総國千葉庄池田之郷千葉寺、愛染堂之灯籠、太旦主牛尾兵部小輔、天文十九年庚戌七月二十八日」と銘文がしるされている。そのほかに「千学集」にも「下総千葉庄池田郷千葉寺」の記載があり中世以降は千葉氏の根拠地として猪鼻の城を中心として「千葉庄」の「池田郷」として地域的な発展をしていったものと思われる。

ちょうど9世紀以降千葉氏が歴史の表に出る鎌倉時代を除き、その間ほとんど記録らしいも

のは見当たらない。そのなかでこの池田郷を知ることの出来るもっとも古い記録として「更級日記」があげられる。上総介菅原孝標の一行が帰国したのは1020年のことである。既にこの頃は平 忠常がこのあたり一帯を勢力圏とした時代である。

関係する部分を少し書き写しておこう。

門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕などひきたり。南ははるかに野の方見やらる。ひむがし西は海近くて、いとおもしろし。ゆふぎり立ち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝などもせず、かたがたみつゝ、こゝをたちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、しもつさの国のいかたといふ所に泊まりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくてもねられず、野中に岡だちたる所に、たゞ木ぞ三つたてる。そのひは雨にぬれたる物ども乾し、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮らしつ。十七日のつとめて、立つ。昔、しもつさの国、まののてうといふ人住みけり。ひきぬのを千むら、萬むらおらせ、漂させけるが家のあととて、深き河を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、河のなかに四つたり、人々歌よむを聞きて、心のうちに、朽ちもせぬこの河柱のこらずは昔のあとをいかで知らましその夜はくろとの浜といふ所に泊まる。

——（更級日記岩波文庫西下経一校注より）——

ここに出てくる「しもつさの国のいかた」が池田郷にあたるものと思われている。

位置にして上総国の国府（旅前の仮屋からの旅立ちである。ここも不明。）から行程1日、雨が降る中の旅立ちである。この「いかた」について後の方で出てくる「まののてう」との関係から「浜野」近く、あるいは「寒川」周辺を充てる説が唱えられたものと思うが、当時の環境を考慮に入れるなら台地下と砂堤間に公的施設を設けることはどうであろうか。低湿地であり小河川が現在も随所に見ることができ、近年の河川改修と排水設備の普及で多少の雨でも水が出ることは少なくなったが、深田であり、すぐに水につかったことは周辺の人達もよく知っている。数日来の雨に加えて「庵などもうきぬばかりに雨降りなど」する状況である。池田郷内には低地に集落が無いとは言わないまでも、かなり環境の悪いものであると思わざるを得ない。大北遺跡においては9世紀までは確実に集落の変遷を見ることが出来ているが、10世紀以降については今一つ明らかにしえないため不明である。またこれらの記述に対応する遺跡の内容を検討しえないが中世集落の展開する間立地等には大きな変化は無かったものと思わざるを得ないだろう。（埋め立ての進むつい最近まで周辺の集落は遺跡のある台地直下の谷津に沿った微高地に展開していた。）

現状においても、そのような状態である。旧道が台地下の砂堤周辺を利用し直線的、かつ平坦に近い道を確保していたとしても、雨天時、荒天時に対応して補完的役わりをする道、そして、この当時、旅などは通常考えもしない大行事であるが、公的な移動、使節等の利用する施

設ないしは地元有力層の居住施設については旧来からの立地をふまえつつ、自然状況からの安全は出来る限り計っていたであろう。

道は台地下を通過していたとしても郡に属する施設で台地上に位置しているものも多いだろう。「野中に岡だちたる所にたゞ木ぞ三つたてる。」である。「木ぞ三つたてる」で古墳が云々と言う人もいるが、この「日記」は作者が都に帰り昔をしのお思いをまとめたのが物語の骨格であり、はたしてどこまで基本となる記憶ないしは記録がたよれるか不明であるが「野中に」とあるところは少なくとも低地において泊ったわけではないだろう。ただここで少し不思議なことは「仏」にすぎり都で「物語」をよむことにあこがれる人であるにもかかわらず「いかた」において「寺」の記述がないことである。調査によれば千葉寺は70間四方、重孤文系の字瓦も出土する瓦ぶきのかなり大きな建物である。作者の思い出になっていないとすると、この時期、千葉国造系の子孫の支配から千葉氏支配への切り替る時期、永暦元年以前にすでに寺は荒れはてており、孝標のむすめが泊ったあとに千葉氏により再建が計られたのかも知れない。

この様ななかで「池田郷」に付随するものとしてどの様な施設が想定されるだろうか。

現在まで郷（里）の実体については不明な点が多く、また遺跡として捉えられるところはほとんど知られていない。その中で多少は郷の施設、ありかたを考える手がかりとなる資料に「上野国交替実録帳」がある。

その内に「郷」の施設として「郡庁、正倉、館、厨家、門、垣」などがあげられている。この「館」が各郡ごとに3～4ヶ所あるとされる。そのほか関連施設として名前の上げられているものとして「宿屋、向家、副家」などが見受けられる。この「館」ないしは「宿屋」は「郡司」の官舎であると言う説と宿泊所説とがありはっきりとはしていない。

この池田郷を通る街道はかつては、かなり交通量の多い道であった様で、神護景雲2年(768年)東海道巡察使紀朝臣廣名は下総国井上、浮嶋、河曲の3駅を「使命繁多」により官吏送迎用の駅馬を5匹から10匹にすることを求めている。しかし宝龜2年(771年)街道の編成が変更され、上総、下総間の東海道が支道となったころから交通量が減り始め「延喜式」には再び「浮嶋、河曲」の駅馬について5匹とのせている。駅家については大北遺跡小結の部分ですでに述べている通り、位置的に異っておりその可能性は低い。ただ寒川周辺も式内社との関係を考えつつ「河曲の駅」について位置的に検討する必要はあるものと考えられる。「深き河を舟にて渡る」これが「河曲の駅」近くの様子ではなかろうか。

大北遺跡も広くみて、この「池田郷」「河曲の駅」に近接ないしはそのものであると考えるならば、大北遺跡における掘立柱建物の増減はいくらかこの変化に対応しているともよいのではなかろうか。(第155図)

だが、大北遺跡は部分的な調査であり、遺跡の概要的な様子をとらえたにすぎず、断言するわけにはゆかぬ。

しかしながら先の項でも述べてある通り、大量の畿内系土器の大量出土等をかさね合せば、ある程度、公的な施設の存在を想定することも可能であろう。

調査区間において検出された遺構からは、それらを立証することは極めて困難な作業である。すでに郡衙そのものである可能性が少ないこともすでに述べてある通りである。

すると、ある程度、公的な社会状況に対応する変化が求められ、利用される施設である。この地は千葉国造の末流たる一族により支配されてきたとすると彼らの館ないしは郡司あるいは有力者としての必要な施設が設けられていた可能性が高いものと考えられよう。

残念ながら、ここではこれ以上、その存在について述べる資料を持ち合せておらず、可能性を指的するにとどめるが、改めてより多くの視点からの検討を求めてゆきたいと思う。

「朽ちもせぬ この河柱のこらずは 昔のあとをいかで知らまし」

孝標の女は河に残る朽ちはてた柱をみて「まののてう」に思いをはせた。

今、我々は千葉郡池田郷を知る可能性を得られたわけである。ここは千葉国造に連なる一族の支配の地であったろうし、また千葉氏はその勢力を発展させるのに重要な役を負った地ではないかと考えられよう。千葉の原点である大北遺跡が今後、十分調査を加えることなく、もし破壊されるならばまさに「昔のあとをいかで知らまし」である。

大北遺跡のみとなってしまうが谷津遺跡群については各々の小結でまとめただけであり第320図以下図上で集落の展開をまとめてみた。不十分ではあると思うが今回まとめきれなかった責は編集者にある。

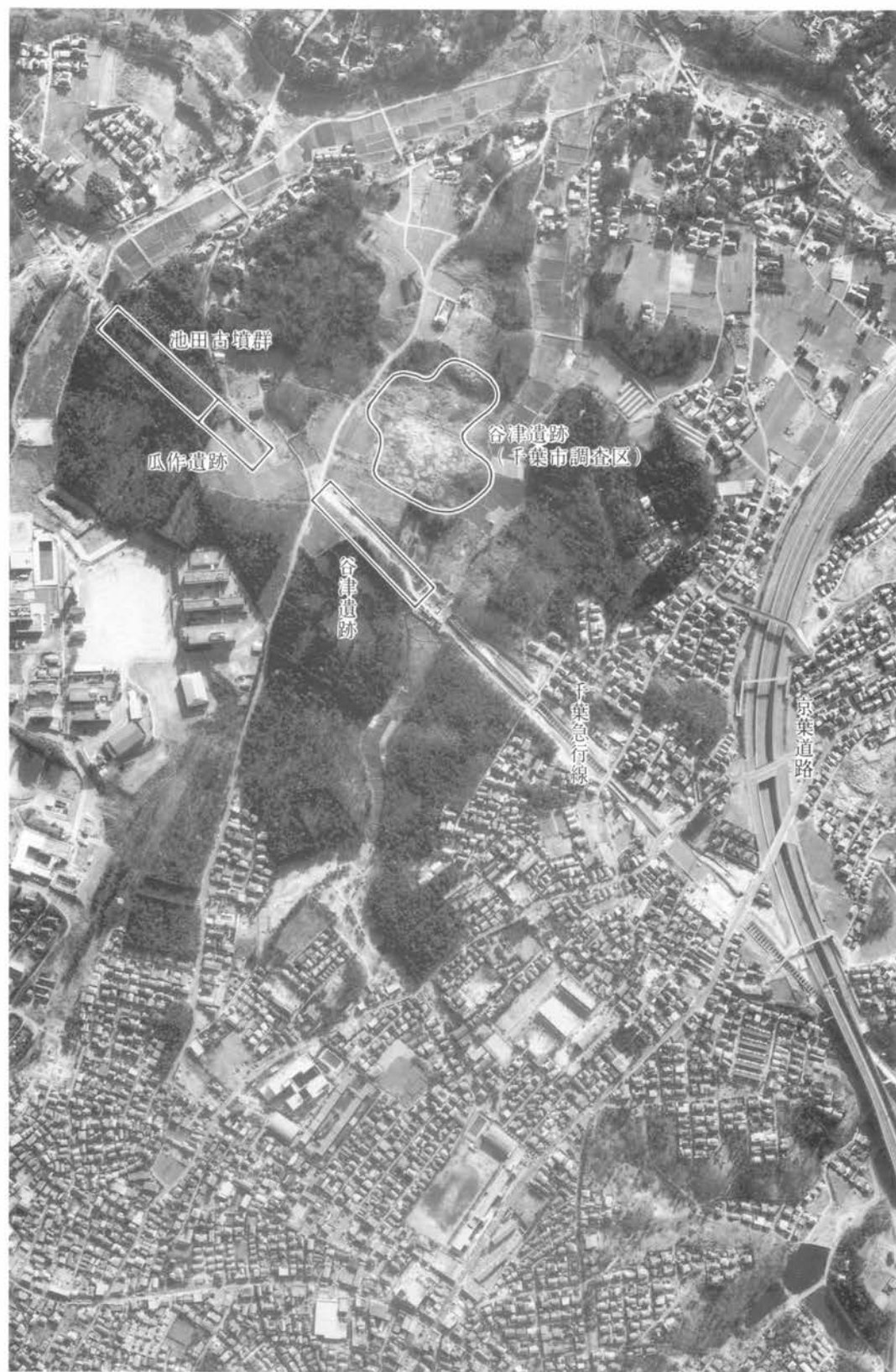
今後の調査と研究を各々の担当者と共に約して、改めておわびしたい。

(池田)

写真図版



大北遺跡周辺航空写真



谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群周辺航空写真

1. 遺構検出状況



2. 遺構検出状況



3. 001号住居跡





1. 002号住居跡



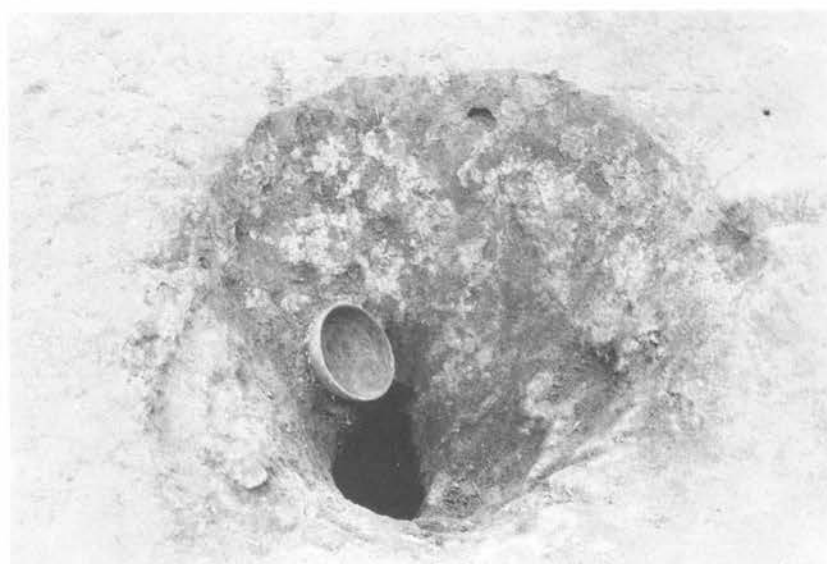
2. 002号住居跡
遺物出土状況



3. 003号住居跡



1. 004号住居跡



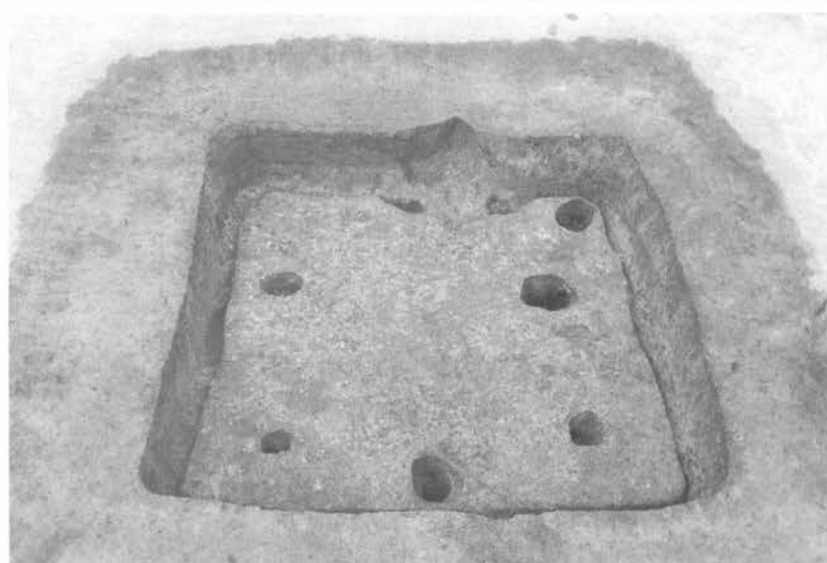
2. 004号住居跡
遺物出土状況



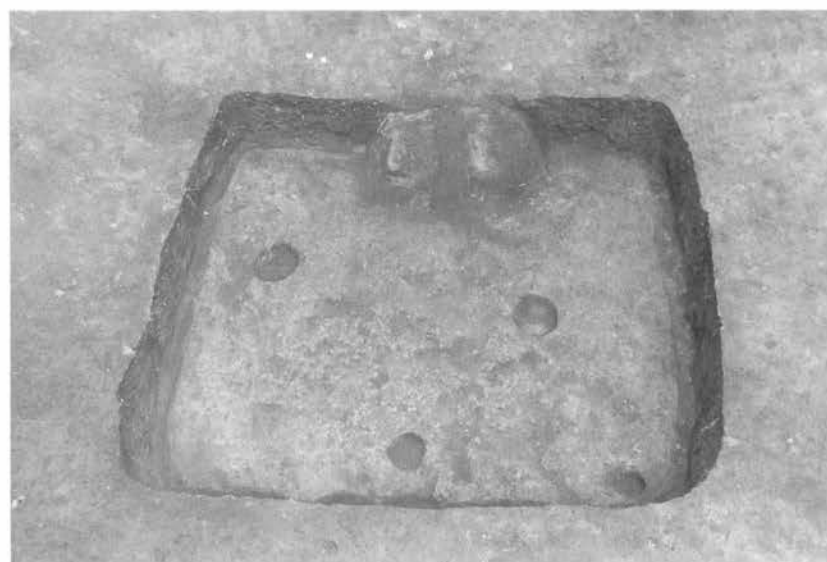
3. 005号住居跡



1. 005号住居跡



2. 006号住居跡



3. 007号住居跡



1. 008号住居跡



2. 009号住居跡



3. 010号住居跡



1. 011号住居跡



2. 012・013号住居跡

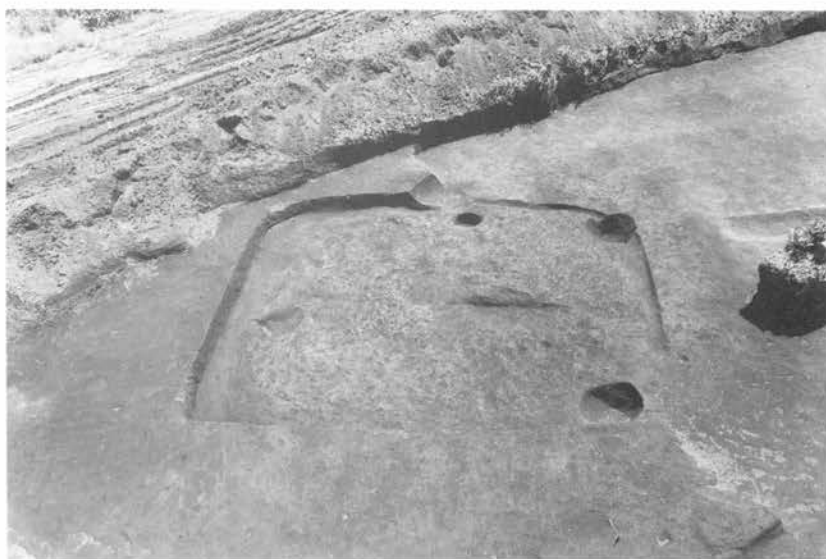


3. 012号住居跡
カマド及び周辺
遺物出土状況





1. 012・013号住居跡



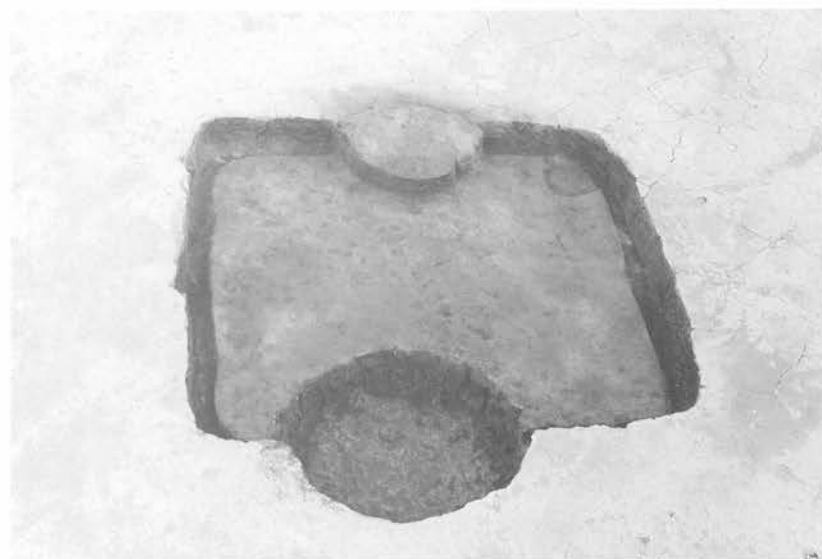
2. 014号住居跡



3. 015号住居跡



1. 016号住居跡



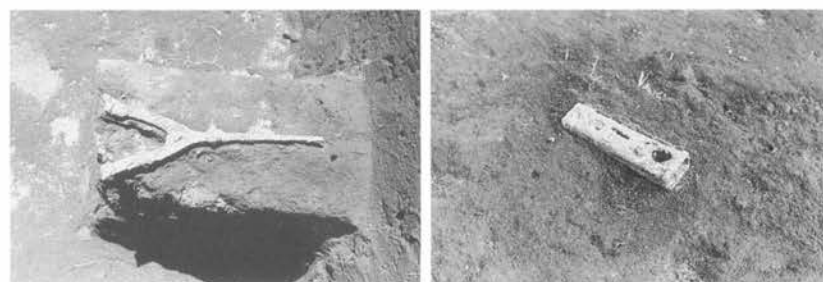
2. 017号住居跡



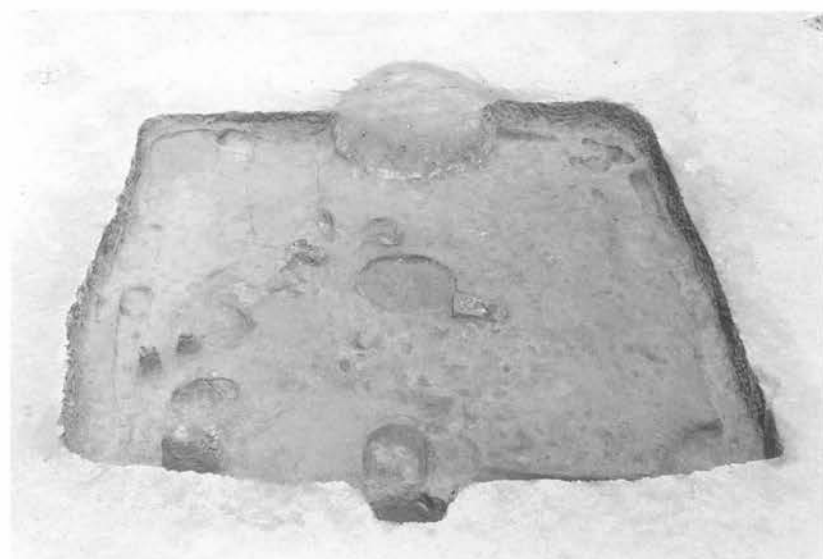
3. 017号
貝層検出状況



1. 018号住居跡



2. 018号住居跡
遺物出土状況



3. 020号住居跡





1. 021号住居跡



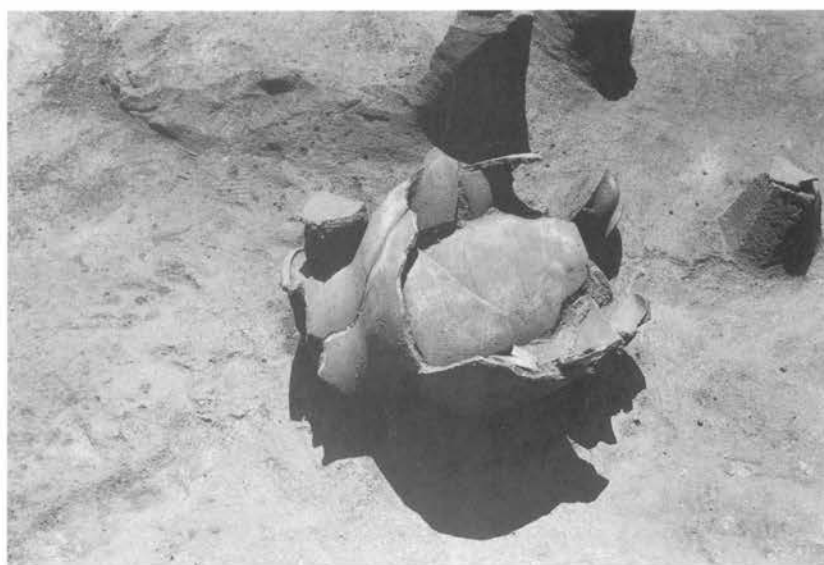
2. 022号住居跡



3. 023号住居跡



1. 024号住居跡



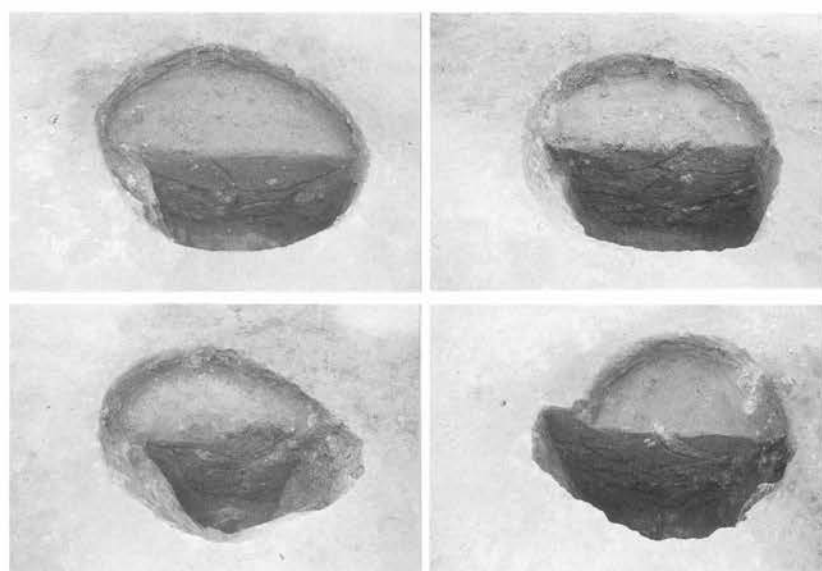
2. 024号住居跡
遺物出土状況



3. 025号住居跡



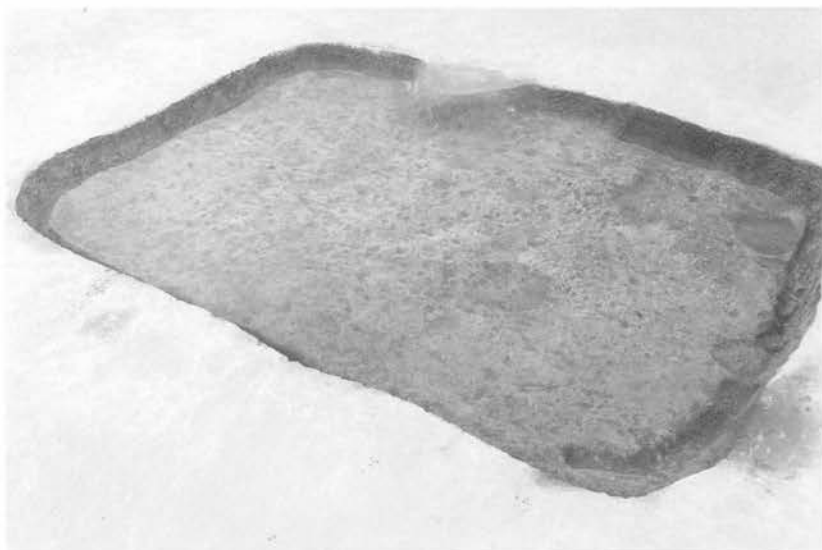
1. 026号住居跡



2. 026号
柱穴土層断面



3. 027号住居跡



1. 028号住居跡



2. 029号住居跡



3. 030号住居跡



1. 031号住居跡



2. 032号住居跡



3. 032号
住居跡壁柱穴



1. 033号住居跡



2. 034号住居跡



3. 035号住居跡



1. 036号住居跡



2. 037号住居跡



3. 038号住居跡

1. 001号
掘立柱建物跡



2. 002号
掘立柱建物跡
(確認状況)



3. 002号
掘立柱建物跡





1. 003号
掘立柱建物跡



2. 004号
掘立柱建物跡

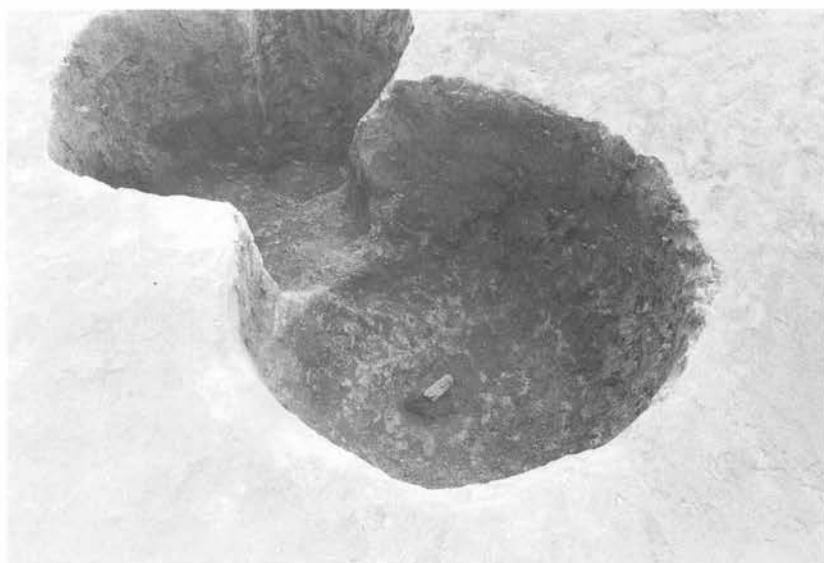


3. 005号
掘立柱建物跡

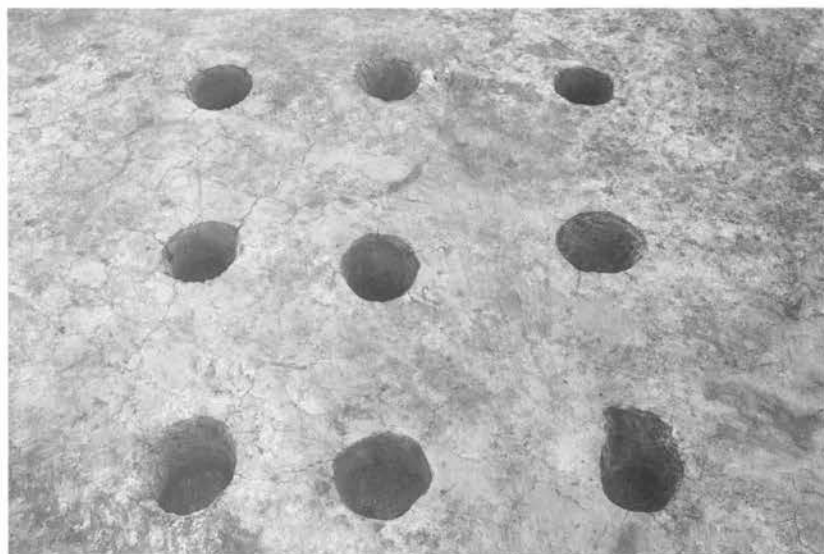
1. 006・007・008号
掘立柱建物跡



2. 007号
掘立柱建物跡
遺物出土状況



3. 009号
掘立柱建物跡





1. 010・011号掘立柱
建物跡

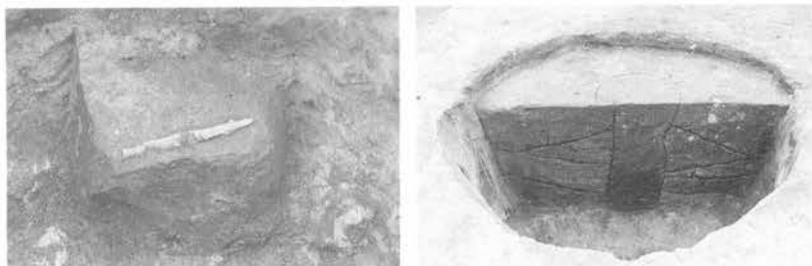


2. 012号
掘立柱建物跡

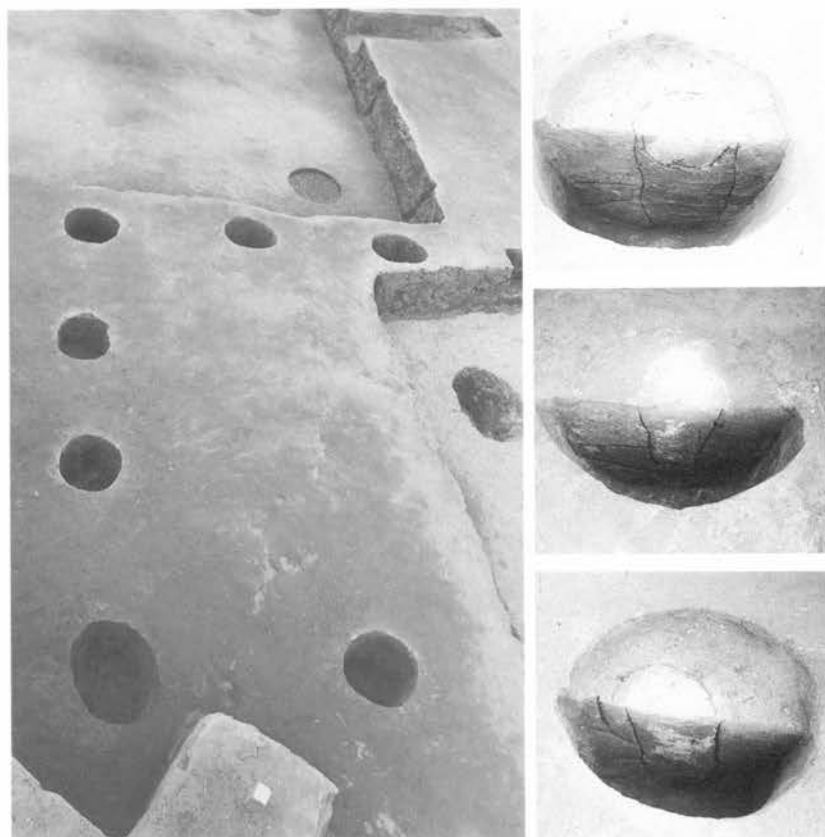


3. 016号
掘立柱建物跡

1. 016号
掘立柱建物跡
遺物出土狀況



2. 017号
掘立柱建物跡
(左)
柱穴土層断面
(右)

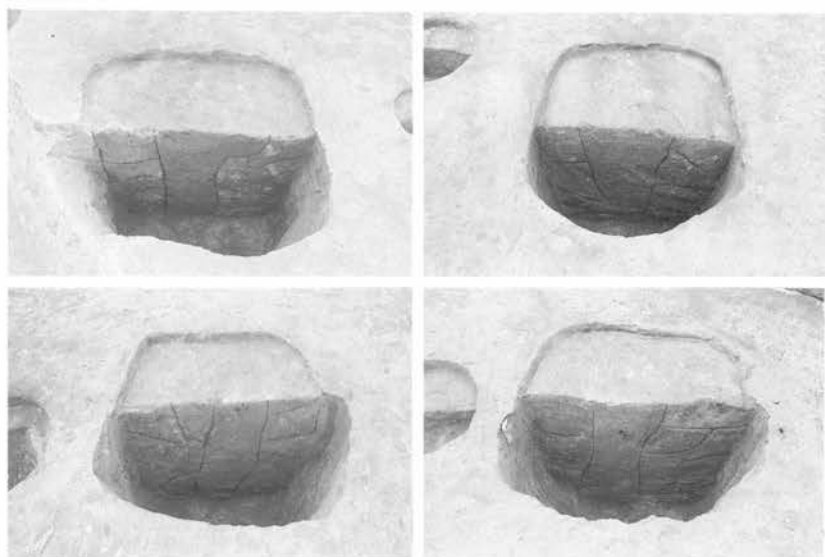


3. 018号
掘立柱建物跡





1. 019号
掘立柱建物跡

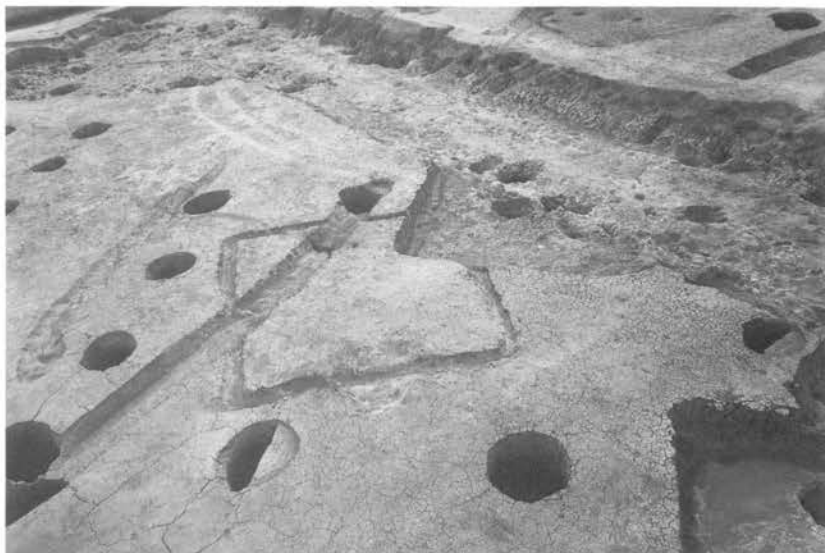


2. 019号跡柱穴断面
g-g' · h-h'
j-j' · n-n'



3. 020号
掘立柱建物跡

1. 021号
掘立柱建物跡



2. 021号跡柱穴断面



3. 022・023号掘立柱
建物跡





1. 024・025号掘立柱建物跡



2. 027号掘立柱建物跡



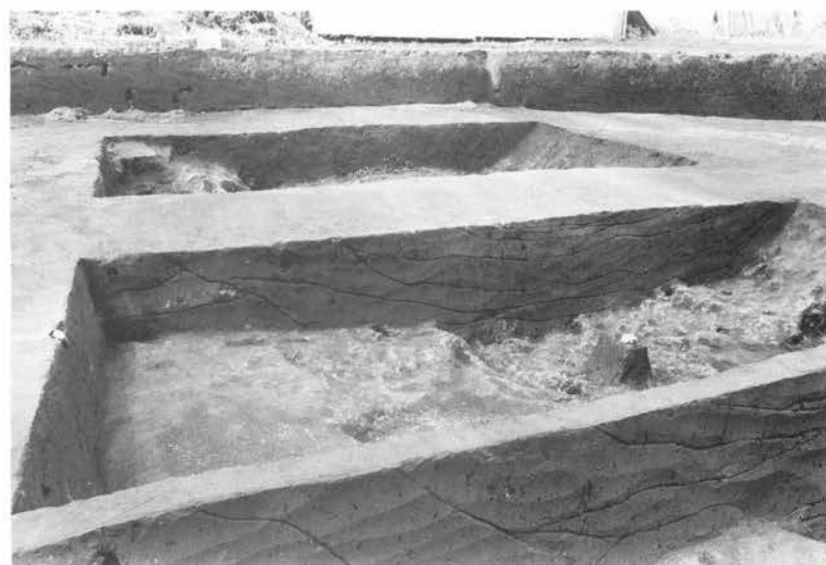
3. 028号掘立柱建物跡



1. 大溝遺構



2. 大溝土層断面
C' - C



3. 大溝土層断面
E' - E



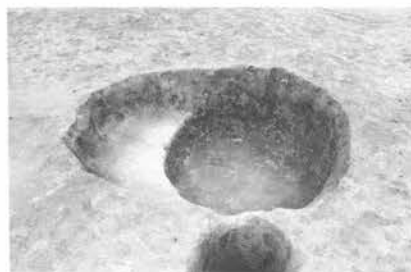
1. 周溝状遺構



2. 周溝土層断面
B-B'



3. 周溝土層断面
C-C'



5・6号土壙



7号土壙



8号土壙



9号土壙



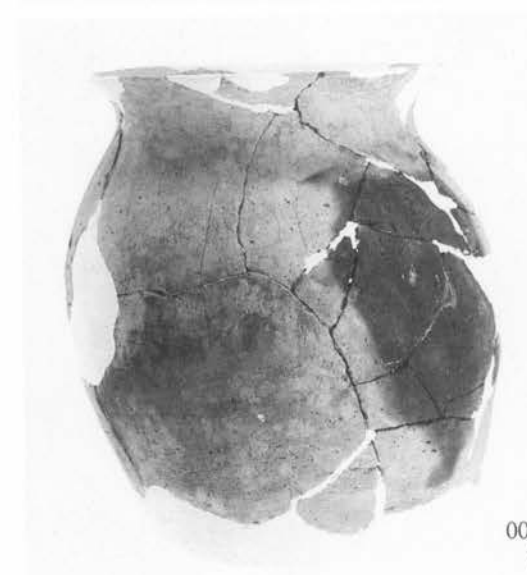
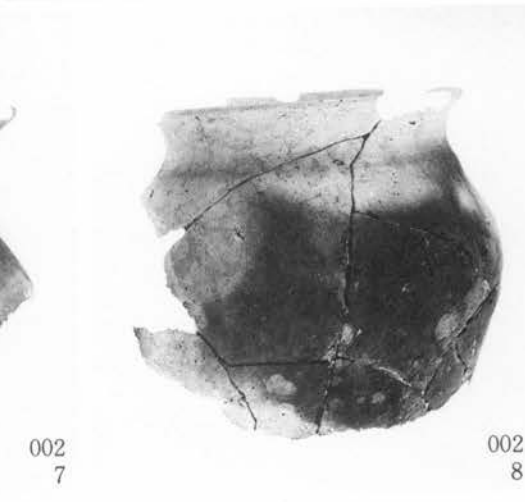
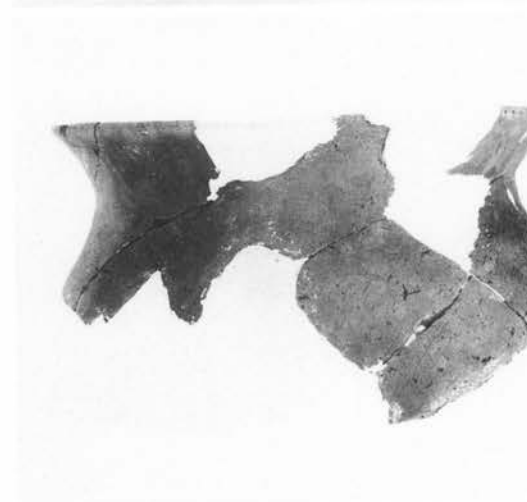
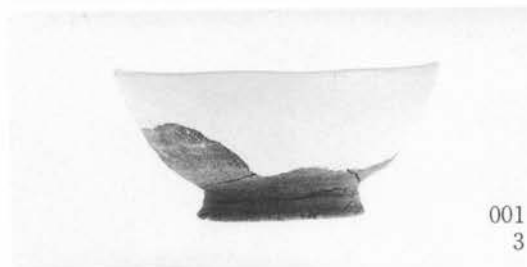
10号土壙



11号土壙



先土器時代試掘グリッド



001・002号住居跡出土遺物



003
2



003
3



004
1



004
2



004
3



004
4



005
1

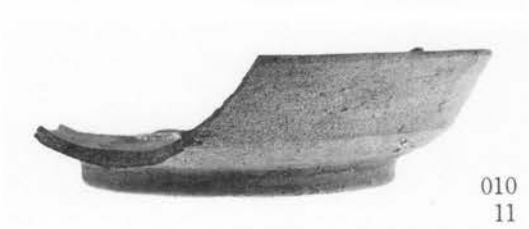
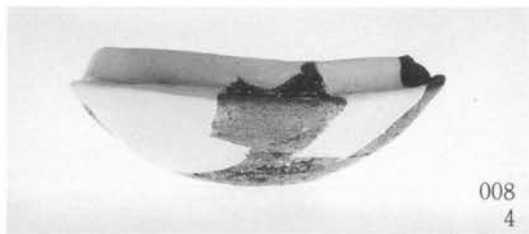


005
2

003・004・005号住居跡出土遺物



005・006・007・008号住居跡出土遺物



008・009・010号住居跡出土遺物



011
1



011
2



011
3



011
4



011
5



011
6



012
1



012
5



012
6

011・012号住居跡出土遺物



012
8



012
9



012
10



012
11



014
1



015
1



015
2



015
3

012・014・015号住居跡出土遺物



015
4



015
5



016
1



016
2



016
3



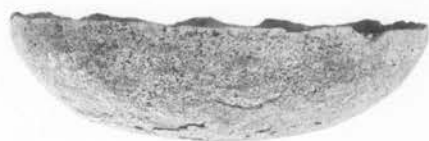
016
5



018
23



018
25

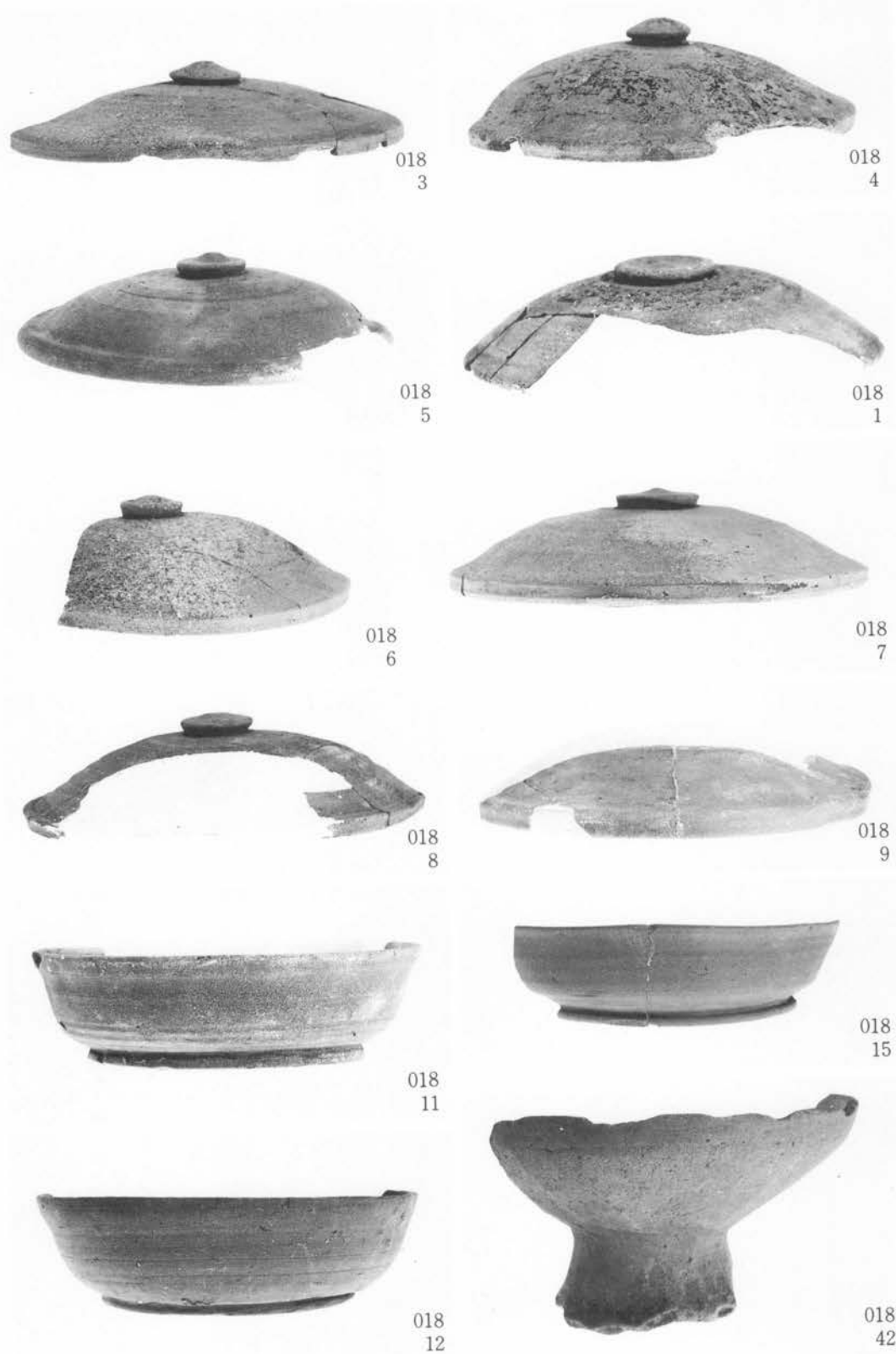


018
24



018
2

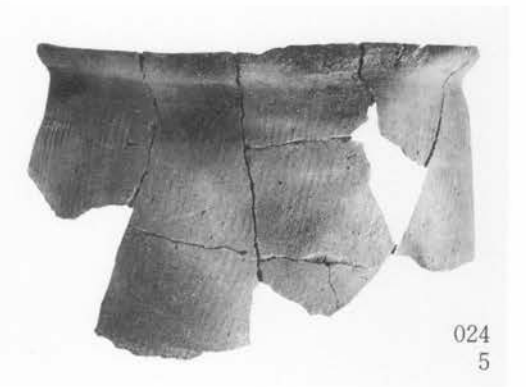
015・016・018号住居跡出土遺物



018号住居跡出土遺物



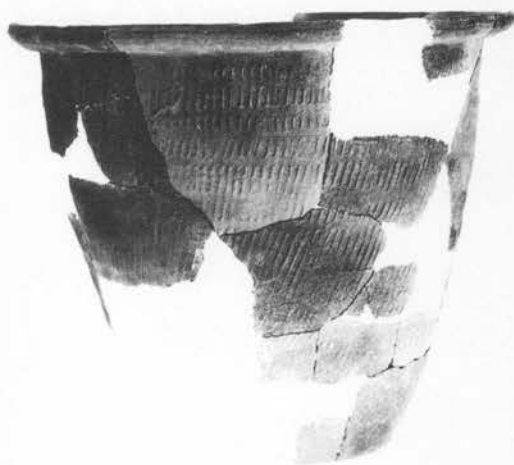
020・021号住居跡出土遺物



022・023・024号住居跡出土遺物



024
4



024
7



025
1



025
5



025
2



025
6



025
4

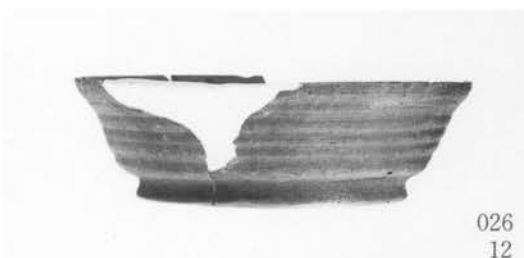


026
1



026
7

024・025・026号住居跡出土遺物



026号住居跡出土遺物



027・028・029・030号住居跡出土遺物



030
8



030
13



030
11



030
17



030
18



030
21



030
24



030
25



030
28



031
1



032・033・034号住居跡出土遺物



034
4



034
5



034
7



034
6



035
1



037
4



037
2



037
3



038
1



038
2



038
3



038
5



038
4



土壙
1



C2G
7



C2G
10

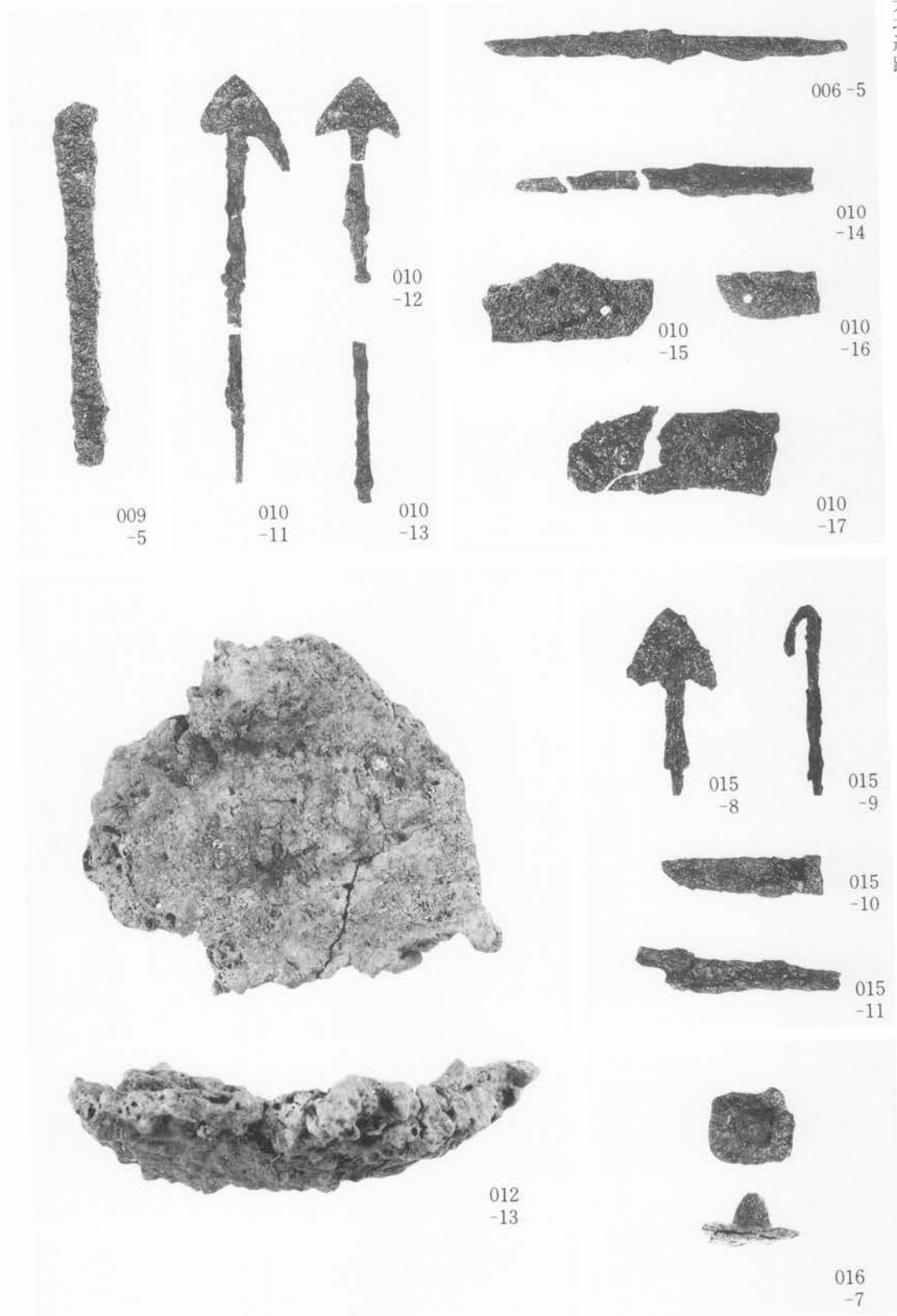


C2G
8

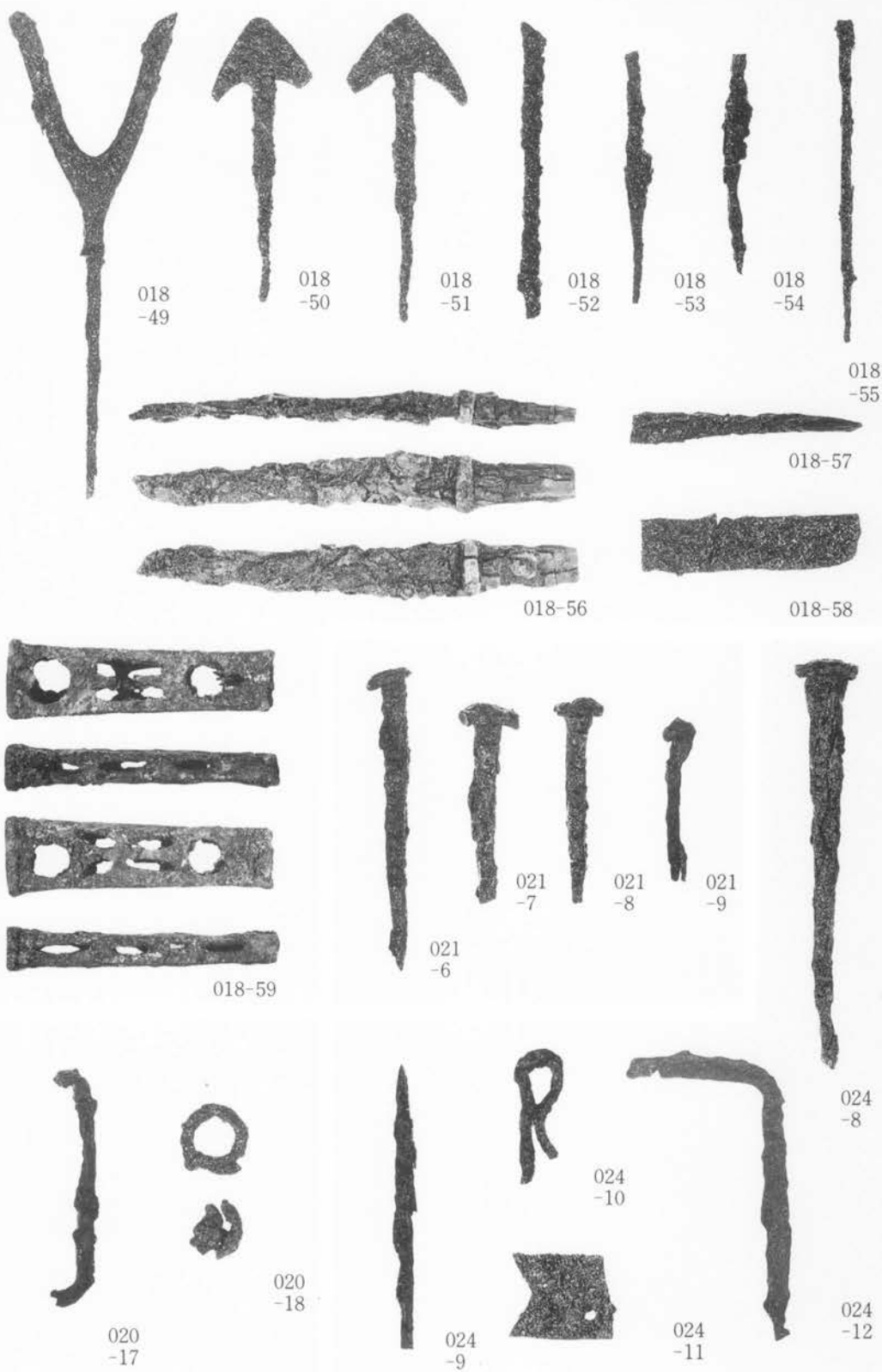


F3G
15

038号住，土壙及び遺構外出土土器



大北遺跡出土金属製品（1）



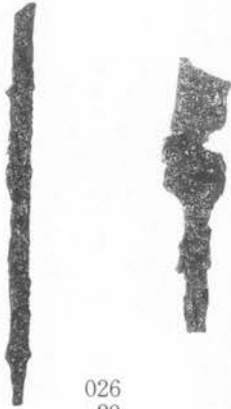
大北遺跡出土金属製品 (2)



025-8



026-31



026-29

026-30



026-32



026-33



027-10



027-11



030-30



032-16



032-17



032-18



032-19



033-6



034-9



034-10



034-11

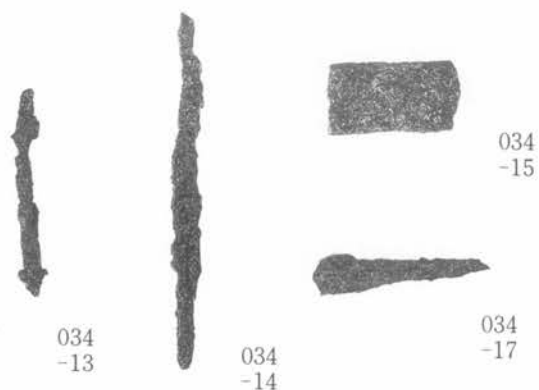


034-12

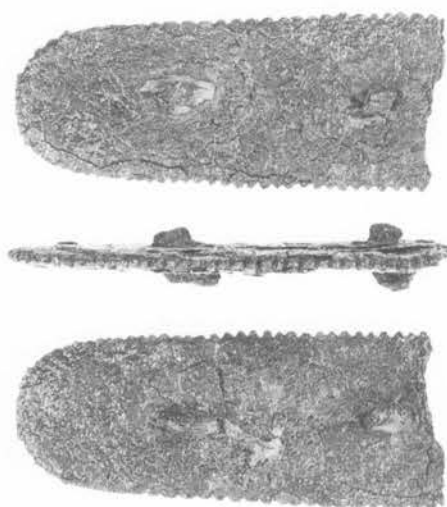


033-7

大北遺跡出土金属製品 (3)



034-18



掘立-16



掘立-17



掘立-19



掘立-18



大溝土壙-23



1. 航空写真

1. 遺跡遠景



2. 遺跡近景



3. 遺構検出状況



1. 001号
掘立柱建物跡

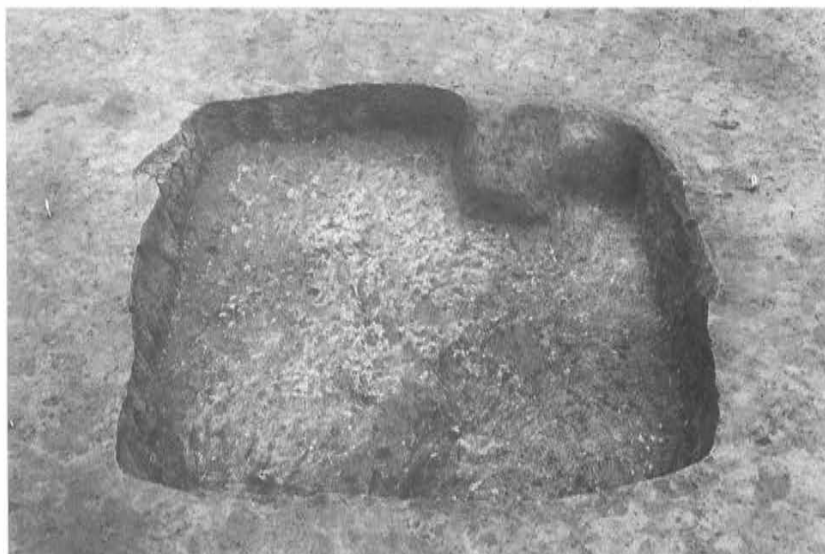


2. 002号
掘立柱建物跡

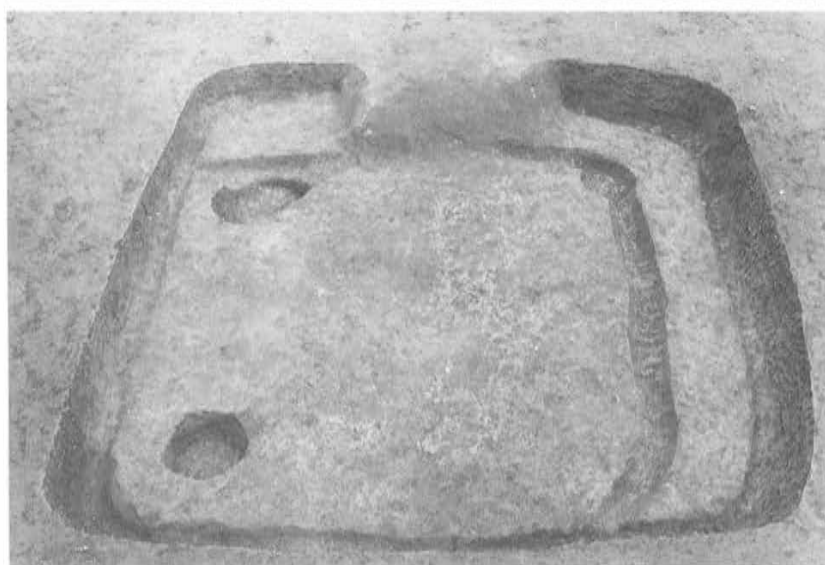


3. 瓦塔出土状況





1. 001号住居跡



2. 002号住居跡



3. 003号住居跡



1. 004号住居跡



2. 005号住居跡



3. 006号住居跡



1. 007号住居跡



2. 008号住居跡



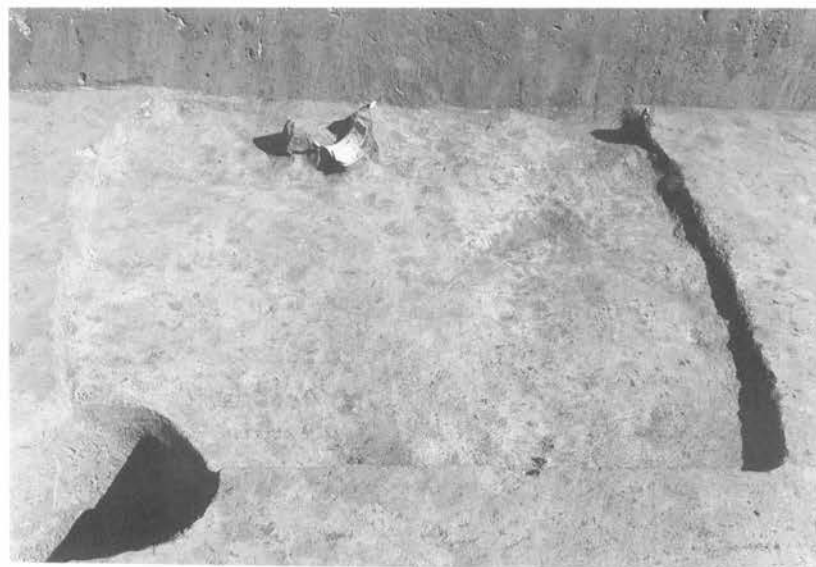
3. 009号住居跡



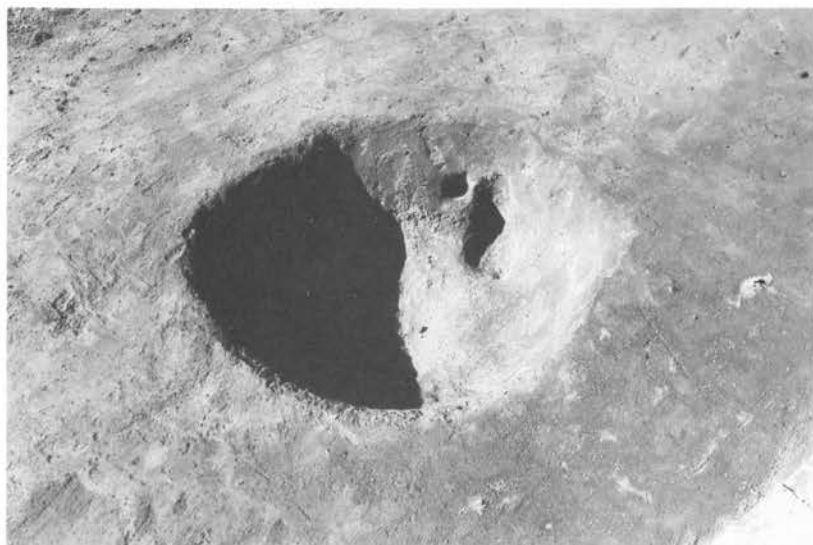
1. 010号住居跡



2. 011号住居跡



3. 012号住居跡



1. 001号土坑



2. 002号土坑



3. 003号土坑



1
001



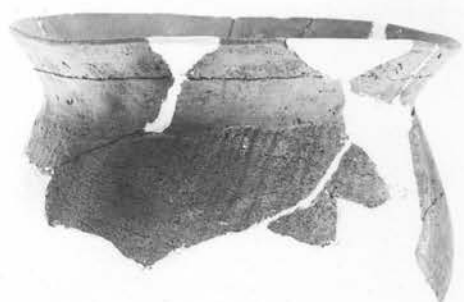
4
001



2
001



3
001



5
001



2
002



1
002



4
002



5
002



3
002

001・002号住居跡出土遺物



1
003



2
003



6
003



3
004



1
004



2
004



4
003



5
003



4
004

003・004号住居跡出土遺物



1
005



2
005



1
006



4
006



2
006



5
006



3
006



8
006

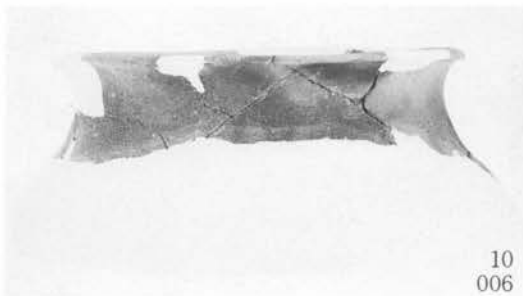


6
006

005・006号住居跡出土遺物



11
006



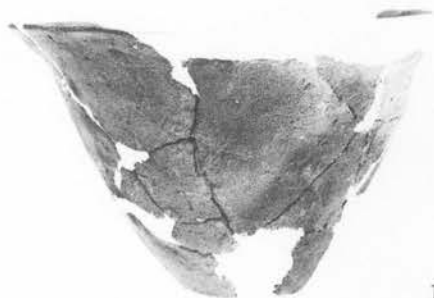
10
006



12
006



13
006



14
006



1
007



3
007

006・007号住居跡出土遺物



1
008



2
008



3
008



6
008



1
009



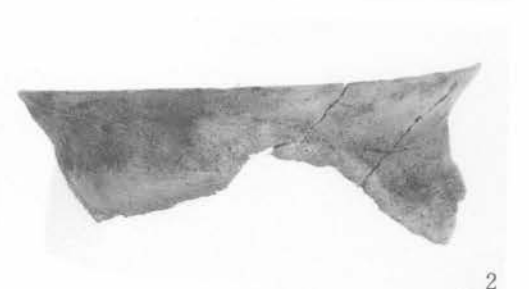
2
007



5
008

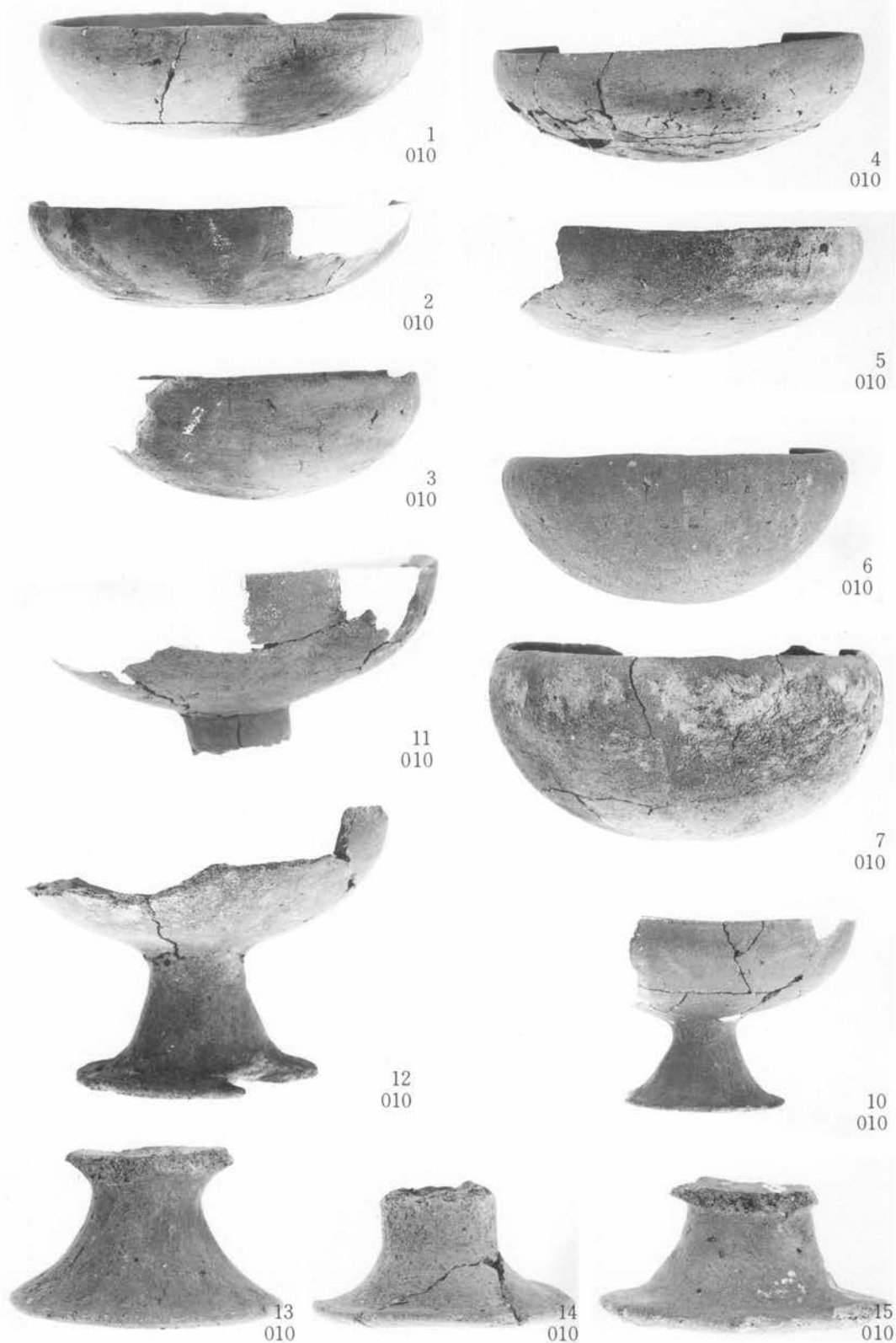


7
008



2
009

007・008・009号住居跡出土遺物



010号住居跡出土遺物(1)



9
010



8
010



19
010



18
010



22
010



17
010



1
011



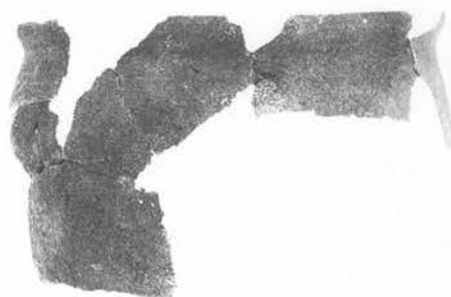
6
011



5
011



3
011



4
011



7
011



9
011

011号住居跡出土遺物



10
011



8
011



1
012



2
012



3
012



5
012

011・012号住居跡出土遺物



4
012



10
表採



1
表採



5
表採



2
表採



4
表採



8
表採



7
表採



6
表採



9
表採



3
表採

012号住居跡・グリッド出土遺物

遺跡遠景



遺跡近景



古墳全景





貝層断面



001号住居跡全景



003号住居跡全景



004号住居跡全景



005号住居跡全景



007号住居跡全景



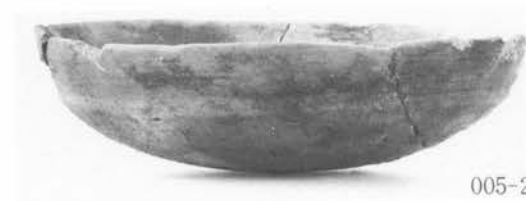
008号住居跡全景



009号住居跡
010号住居跡 手前
全景



遺物集中点出土縄文土器



001・005・006・008号住居跡出土遺物



008-1



008-19



008-16



土壙-3



008-17



010-3



土壙-1

008・010号住居跡・土壙出土遺物



001号住居跡全景



002号住居跡全景



左. 002号住居跡
貯蔵穴検出状況



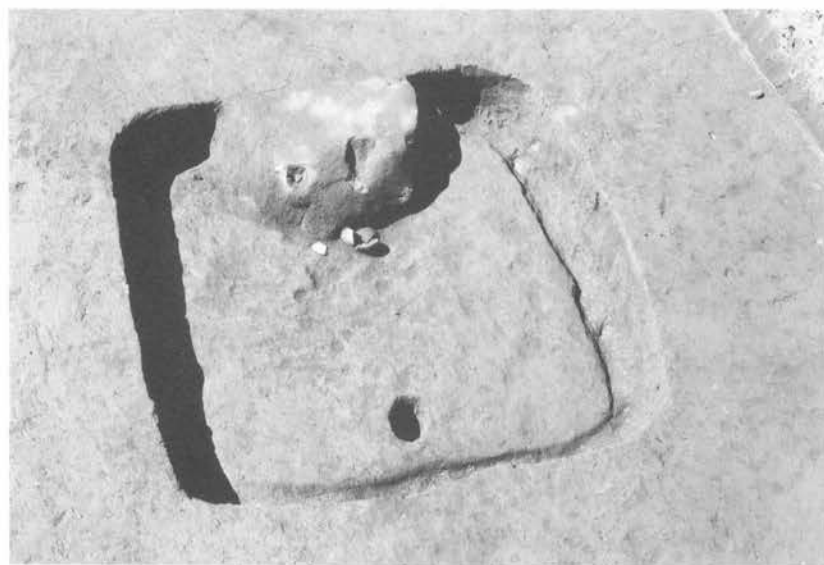
右. 貯蔵穴
遺物出土状況



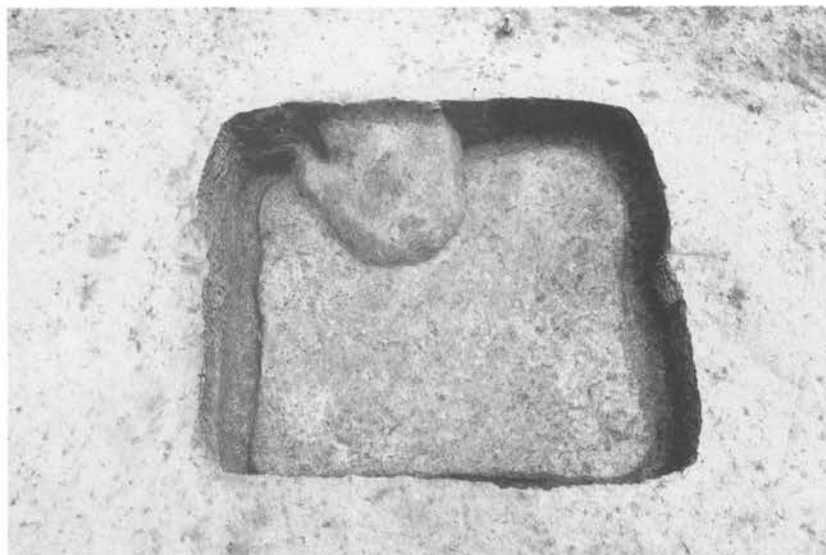
003 A 号住居跡全景



003 A 号住居跡炭化材
検出状況



004号住居跡全景



005号住居跡全景



006号

007号

008号

006~008号
住居跡全景



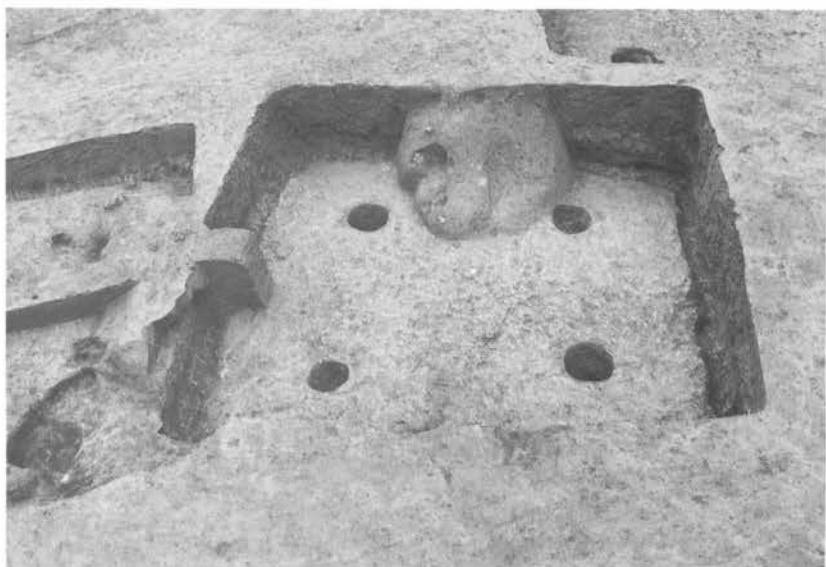
009・010号
住居跡全景



012号住居跡全景



013号住居跡全景



014号住居跡全景



015号住居跡全景



016号住居跡全景



017号住居跡全景



018号住居跡全景



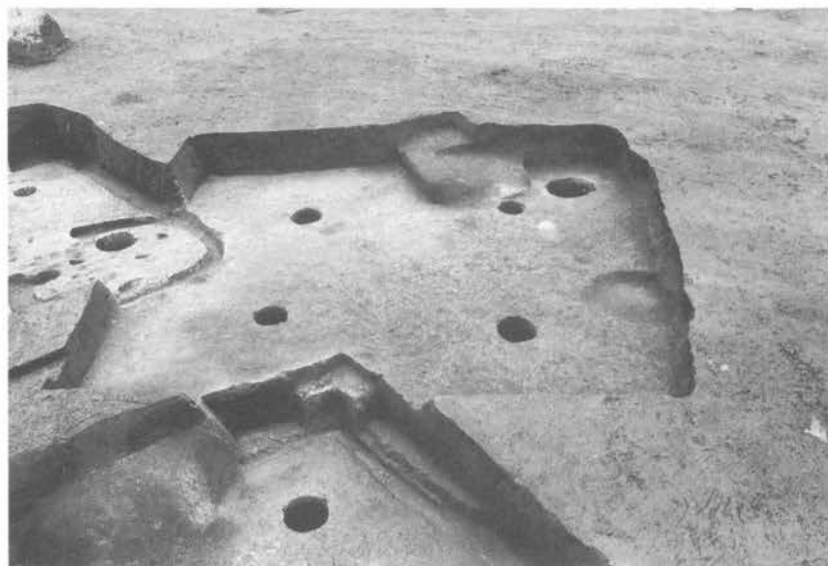
019号住居跡全景



020号住居跡全景



021号住居跡全景



022号住居跡全景



023号住居跡全景



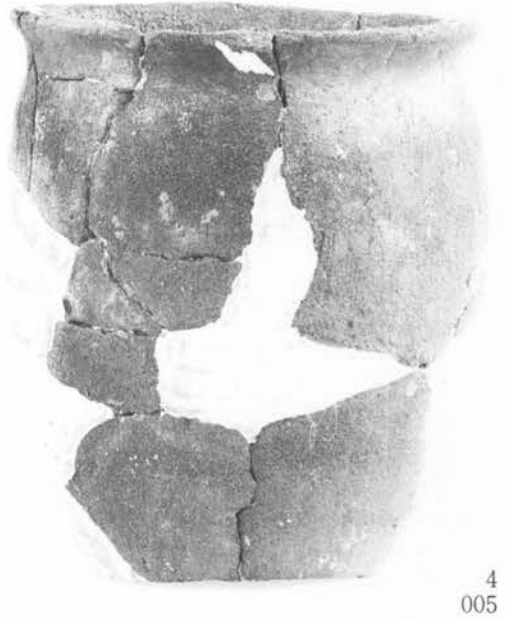
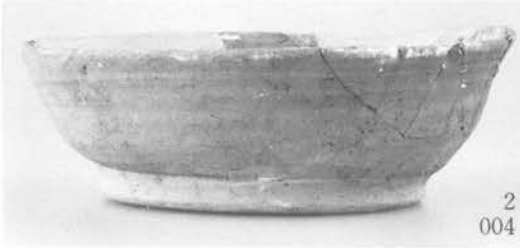
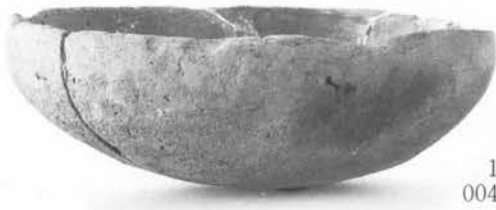
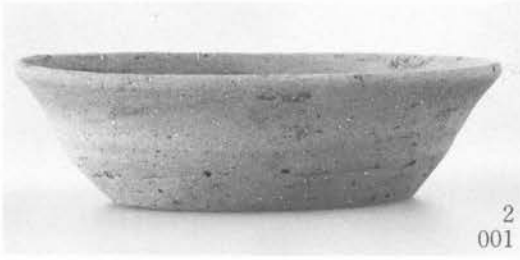
024号住居跡全景



掘立柱(001号)全景



調査区全景



001・003 B・004・005・009号住居跡出土遺物



012・014・015号住居跡出土遺物，作業風景



作業風景



017・019号住居跡出土遺物



020号住居跡出土遺物



020・021・022・023号住居跡出土遺物



4
024



2
024



1
024



3
表採



3
001号土壇



8
024



2
表採

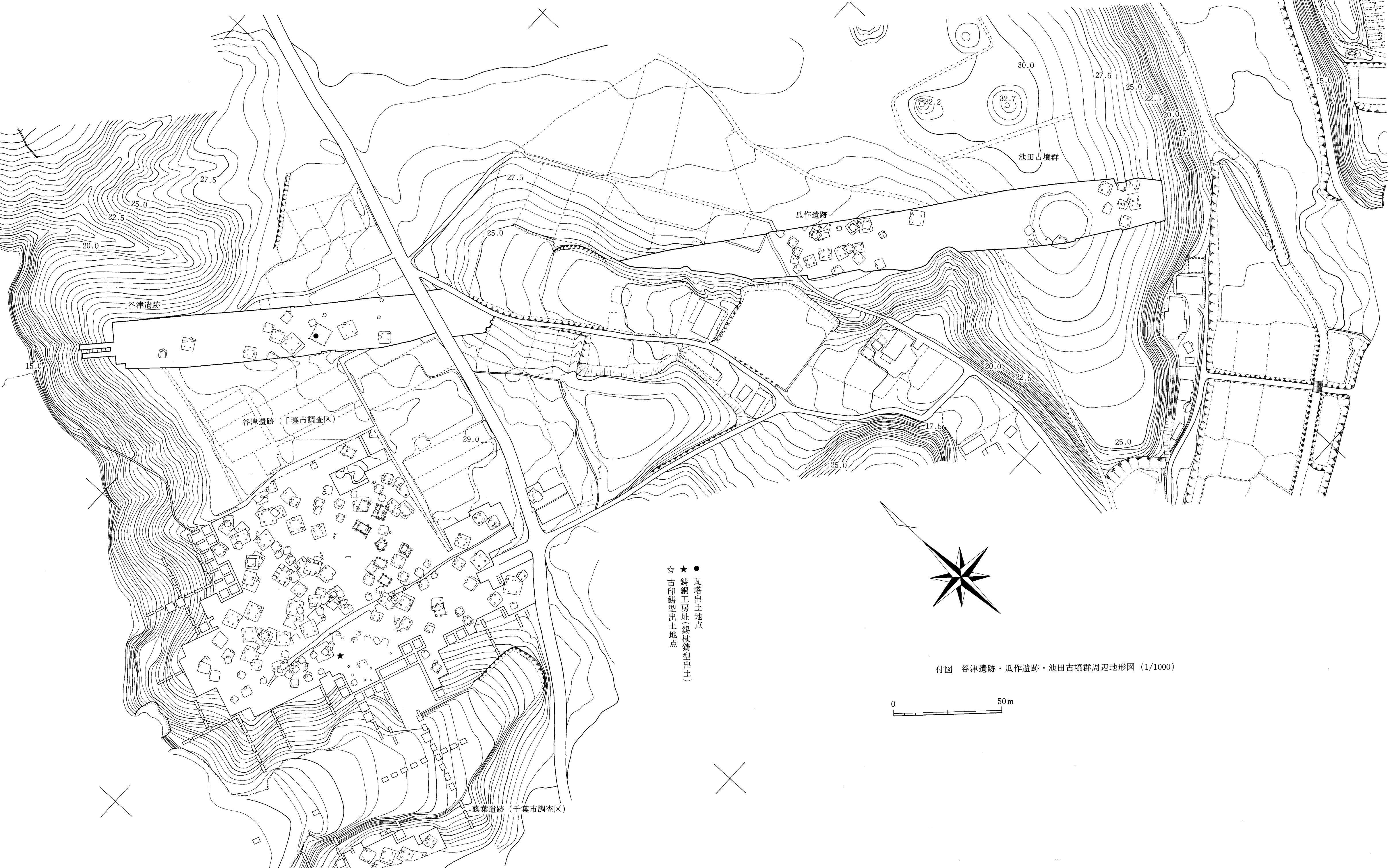


遺物出土状況

024号住居跡・グリッド出土遺物



卷末折込 - 大北遺跡周辺地形図 (1/2500)



- 瓦塔出土地点
- ★ 銅工房址(錫杖鑄型出土)
- ☆ 古印鑄型出土地点

付図 谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群周辺地形図 (1/1000)

0 50m

藤葉遺跡 (千葉市調査区)

谷津遺跡 (千葉市調査区)

瓜作遺跡

池田古墳群

谷津遺跡

千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月31日

発行 千葉急行電鉄株式会社

東京都台東区柳橋2-6-2

編集 財団法人千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478(代)

印刷 有限会社 正文社

千葉市都町2-5-5 (0472)33-2235(代)

千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 正誤表

ページ	行	誤	正
図版目次 19-3		003号掘立柱建物跡	002号掘立柱建物跡
図版目次 73		001号・003号・007号・ 008号住居跡出土遺物	001号・005号・006号・ 008号住居跡出土遺物
158	10	(7) 掘立柱建物消滅以後	(7) 掘立柱建物消滅以降
167	17	周構	周溝
171	5	カマド下と除き	カマド下を除き
181	12	住居跡との	住居跡の
183	3	本住居址の	本住居跡の
200	2	欠く瓶形土器	欠く甕形土器
200	12	柱穴の軸方位は	柱穴の主軸方位は
211	27	第 図は	第204図は
235	3	置物は	遺物は
264	1	(第257・260・261図)	(第257・260～262図)
264	14	1号掘立柱建物跡等	1号掘立柱建物跡等
265	第265図	住居跡出土遺物	004号住居出土遺物
277	17	に対する掘り込み	に対する掘り込み
281	13	柱自体の掘り込み	柱自体の掘り込み
288	14	一部掘り込まれている	一部掘り込まれている
318	7	必要な施説	必要な施設
図版46		038号住，土壙及び	038号住居跡，土壙及び
図版70		貝層断面	貝層断面(001号)